

奇譚クラス



2 特大号

奇譚クラス

2

定價 百四拾円



女体縛り悦虐姿態集

川端多奈子嬢

ベテラン多奈子嬢の
定評あるフォト

第一集、第二集

各(手札型七枚一組)三百円

村田那美子嬢

純情型の清新なしぼり

手札型五枚一組 二百円

伊吹真佐子嬢

豊満な肉体に強烈なしぼり

手札型五枚一組 二百円

急襲

手札型十五枚
一組五百円

モデル (杉 美英嬢)

連続十五枚続きで女が縛られる
迄の過程を描いた最優秀作

台上の殉教者

キヤビネ判二枚一組二百円
モデル (杉、村田、坂口嬢)

吊り3態特選集

モデル (川端多奈子嬢)

キヤビネ判各三枚一組五百円

第一集、第三集

第二集、第四集

二女連縛集

(中富綾子、並川トミ嬢)

手札型六枚一組 三百円

椅子責め五態

モデル (伊吹真佐子嬢)

キヤビネ判 五枚一組五百円

磔

(キヤビネ判)

第一組 二枚一組 二百円
第二組 一枚一組 一百円

モデル (村田那美子嬢)

半吊り二態

モデル (村田、坂田嬢)
キヤビネ判二枚一組二百円

女体各種趣向縛り写真

各組一組 (キヤビネ判) ……三枚 一組 三百円

※三人得意のポーズ

モデル (村田、坂口、杉嬢)

※水辺水責め三態

モデル (萩千恵子嬢)

※悦虐遊戯三態

モデル (坂口、杉二嬢)

※後手高小手二二百体

モデル (伊吹真佐子嬢)

※レイコンコート三態

モデル (萩千恵子嬢)

※溪流の飛魚

モデル (村田那美子嬢)

※高小手三態

モデル (木田雅子嬢)

※制服の女学生

モデル (雲井久子嬢)

※野外全裸の縛り

モデル (村田那美子嬢)

※猪吊り三態

モデル (萩千恵子嬢)

※猿ぐつわ三態

モデル (浅野末乃嬢)

※縋帯縛り三態

モデル (萩千恵子嬢)

※蠟燭責め三態

モデル (坂口、村田、二嬢)

※腰巻縛り三態

モデル (萩千恵子嬢)

※梯子責め三態

モデル (伊吹真佐子嬢)

※ナイロン女体縛り

モデル (杉 美英嬢)

※鞭打ち三態

モデル (杉 美英嬢)

※三嬢連縛棒吊り

モデル (杉、村田、坂口、三嬢)

※基盤責め三態

モデル (雲井久子嬢)

※灸責め三態

モデル (杉 美英嬢)

※女が女を責める

モデル (坂口、杉、二嬢)

※縋帯縛りの特選

モデル (伊吹真佐子嬢)

… (第二集) …… [縛られた女ばかりの豪華アルバム] …… (第一集) …

マニアの方は必ず一本をコレクション下さい。

頒価 一部 五百円 (送料五十円)

美術コロタイプ印刷 各葉解説入

(詳細の説明紹介はKK通信第十三号に)

全部未発表特写の女体緊縛写真

猿ぐつわ 紅と口 蠟燭責
雁字搦目 観 念 芋 虫
犠牲台 床の置物 鞭 打
目の綾 滑車吊 高小手
荒 縄 ぐさり エビ責

美しき縛りしめ

第一集
第二集
第三集

九人の緊縛モデルを駆使して完全し
た緊縛フォトの圧巻 未発表の秘作集

代表的な縛りポーズ三十二態

(詳細な説明はKK通信第十七号に)

◆責め写真はほしいが、印刷紙に焼付
けたものは高く困ると、おっしゃる
方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアル
バムをお求め下さい。

◆三十二枚の変わったフォトがぎっしり
と並んできつと皆さまの胸をわくわく
させることでしょう。全く素晴らしいです。

美術コロタイプ印刷、アルバム装釘

頒価 一部 五百円 (送料三十円)

晴雨『美人乱舞』

伊藤晴雨先生著並面菊版和装
美本 定價 四〇〇円 二四

図版目次 ▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人燈 ▲
島田福のこわれる迄 ▲丸鬘のこわれる迄 ▲美
女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女
▲火葬場裏側 ▲佛々に抱かれた美女 ▲死神に
つかれた女 ▲特別附録、娘風俗年中行事十二
月、外特別読物として先人未発表の貴重な春画
文庫五章十九項に互って詳説す。晴雨ファン
に薦む。

浣腸フォト三態

第一集 第三集
キヤビネ判 各三枚一組 三百円

浣腸責め三態

第一集 第三集
キヤビネ判 各三枚一組 三百円

浣腸と縛りを併用したフォト、手又は足の
自由を奪って身動き出来ない姿態のま、無理
に浣腸されようとする被施術者に、施術者の
持つ浣腸器は情容なく迫ってゆく。浣腸責
めのかもし出す甘美な雰囲気は、皆さんを妖
しい感激のルッポへ誘ってゆく。

華麗な責めの色刷画帖

横トジ豪華美本、各葉説明文句入
三条春彦 画 一部 三百円 (送料)

時代物責絵巻

内容 一、山法師と静御前 五、八百屋お七の最期
二、女スリと岡引き 六、新撰組と芸妓
三、淀君と千姫 七、十郎左エ門と腰元
四、大公方と侍女 八、小紫と悪旗本

○御申込みは迅速と確実を誇る曙
書房代理部へ

○御申込次第早速厳重荷造の上急
送申上げます

○代金引替は送料が高くつきま
すので、必ず前金でお願いします

曙書房代理部

奇譚クラブ臨時増刊号

アリスの人生学校

一冊 百円 (送料共)
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く
堂々五百枚に垂んとする傑作口絵、挿絵
カット多数挿入

モデル嬢 股間縛り競艶

各組 (キヤビネ判)

三枚一組 三百円

問題の股間縛り、各嬢競艶、縛りマニアの絶体に見逃すことの出来ない珍品

中富綾子嬢 三態

純情可憐、芳紀正に十七才の乙女、無垢の肌に喰い込んだ痛々しい縄目

杉 美 美嬢 三態

昨年十二月号の口絵に掲載して大好評を得た作品

萩 千恵子嬢 三態

乳房を出すのさえ恥しがる萩嬢を観念させた股しぼり

伊吹真佐子嬢 三態

豊満な肉体をタテに喰い込ませる股間しぼりの縄目 縄

坂口利子嬢 五態

キヤビネ判 五枚一組 五百円

十数態の中から最も強烈な股間縛りの代表作を選ぶ、股間縛りを流行させた問題の作品も含んだ特別品揃い

女性切腹擬態写真

○ 女性切腹姿態写真 ○

各 (手札型六枚一組) 三百円

初めて試みた女性切腹の好評作

第一集 (三人のモデルによる各態)
第二集 (裸体着衣共代表的各態)

○ 真刀を用いた女性切腹写真

手札型六枚一組 三百円

真刀が白い腹部の肌へグサリと刺さる思わずゾクリとする真迫した切腹フォト

○ 血紅使用の女性切腹写真

各 (手札型六枚一組) 三百円

血紅によって女性切腹の様相の経過を示した珍しい文獻的なフォト

第一集 第二集

○ 女性切腹シリーズ写真

連続八枚続き (順を追うたもの)

キヤビネ判 八枚一組 六百元

○ 女性切腹「立腹」写真

手札型 三枚一組 二百円

傑作・マゾ・フォト

春日ルミ嬢構成

各組 キヤビネ判 三枚一組 三百円

足舐三態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口の中へ足を入れている
B、クローズ・アップ、C、男が足を持つて舐めようとしている

足蹴三態

A、ハイヒールで頭を蹴る、B、蹴り倒される男、C、後手に縛られた男が、思うまま、に頭を蹴られている

凌辱三態

男性をケダモノのように足下に踏みこむにじって喜ぶルミ嬢の得意のポーズの中で特にマニアの好む凌辱の姿態

人間椅子三態

A、胸の上へ灰皿を置いて女王様の休息の椅子となっている
B、人間ソファ、C、女王様の膝下に屈伏するドレイ

犬の折檻三態

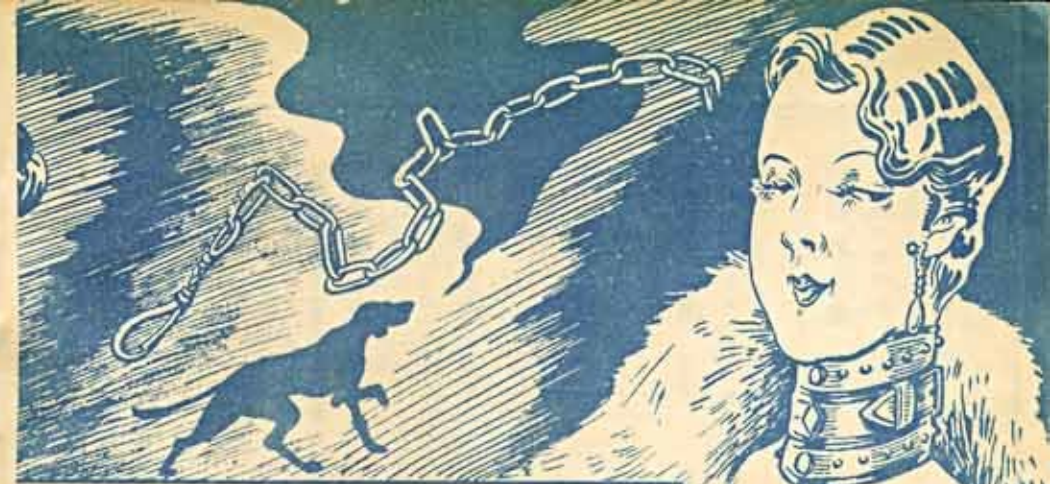
A、芸を仕込まれるワン公、B、女主人を背にするワン公、C、首環とクサリで仕込まれる

人間馬三態

A、乗馬ズボンに乗馬靴の女に股がられる
B、鞭の苛責、C、乗馬の訓練

マゾ・フォトのベッド・シーン
キヤビネ判 4枚1組 400円

一、馬乗り 二、首締め
三、押え込み 四、足台



奇譚クラブ 二月特別増大号 目次

〔扉〕朝鮮苦刑の囚 刑事博物館蔵より

倒錯趣味は果して背徳か 成瀬 亮

さみの『姑娘来了』 シリーズ 滝 麗子・画

炎虐 雑記 長谷川 清

読者通信に現れたる博愛愛好家の傾向 山口 幸一

令嬢おふみの死 川合 伊都子

草雙紙合巻にあらわれた女腹切 探 書

血染の毛綱(三) 伊藤 晴雨

お灸通信 岩瀬 祥一

絵物語 村崎明・作

百合子の冒険 畔亨数久・画

猥らな虫 辻村 隆

栗原 伸・画

残虐なる女性達

浣腸の往復文書 森本愛造・訳

北埔事変—台湾植民秘史— 花村恵美子さん提供

鉦山の少年思春期録 二木良雄

妖奇実録 裸にされた美人通訳 山本 馨

非小説 性液 伊藤 晴雨

レスボスとソドミアへの福音 羽村 京助

幽囚十ヶ月 春田 一郎

坪内 篠・画

少年の体臭 (私の少年時代の告白) 森 太

倒錯の英雄 織田信長 笠置俊郎・作

「編集者への公開状」 吉次 一平

大津事件とその後日譚(一) 須藤 律夫

懸賞入選作品 (第三席)

小竹紀夫

蹴られもの

「ローカル・レポート」 少年の割腹自殺 津島比呂史

あるマゾヒストの手帖から 沼 正

嫉妬する少年たち (被虐少年期) 三根 耕二

「自分で自分を後手に縛る方法」 伏屋 春江

A感覚の秘密 羽村 京子

「映画・雑誌」通信

映画に於けるサシスナックなシーンに就て 柳 一

最近の映画から 白 石

無毛狂崇 末 森

弱者、劣者にサシズムを感じる女性からの通信 白木 近

夜光島 (五)

私のイメージ「花村恵美子さんへ捧げる」 狩井 麗

「写真」 お臍と乳房 土岐 成之

ボクの責め方 宝塚 一二夫

映画に現れた切腹シーン 井上 一雄

二月号特集

強盗に入られた時のこと 中野 妙子

鼻責めについての実験 古田 吉郎

「乳棒と月経帯」 花村恵美子

告白、腹部被虐の人妻 大沢 通子

特異マゾの告白 長岡 俊一郎

続・露出願望の少女の告白 柴崎 黎子

私の見た三人の腰巻女 東 明広

灼爛豪華なあぶの一まる・ふおと・せくしよん

目次裏 川柳マニア十態 山村孤風・句

縛られた花嫁御寮 都築 幸子・画

買の見世物百理「足芸の女」 伊藤 晴雨・画

四馬孝徳作集「悦虐の部屋」二態 野 幸久・画

戯画 (雪国たより) 都築 幸子・画

腰巻の女二態「床の間」「胴吊り」 伊藤 晴雨・画

新草双紙 血染の毛綱 風変りな拘束具、外二葉 春日ルミ・演出

外国文献紹介 まどひすちく・ふおと・せくしよん

奴隷の誓いと浴室での奉仕 磯 弄

海老責(鞭打のポーズの一つとして) 通 麗子・画

敗戦日本の悲劇 日本娘を弄ぶ農夫

「処刑される日本娘」 日本娘を弄ぶ農夫

「雨中に放棄された日本娘」 依田 耕二・画

新人賞絵集「鉄路」「拷問」 四馬 孝・画

絵物語「「嫉妬」」 杉原 虹児・画

奇抜責、アイデア選

「物干台」 洗濯

外国雑誌にみるフェティシズム

ストッキングを穿いた足を愛撫する。

ハイヒールと半長靴・外

伊吹真砂子嬢緊縛写真「鼻つまみ」外二態

緊縛フォトのアルバム、観念(中富綾子嬢)

海老しばり(萩千恵子嬢)クリップ責め (川辺砂登子嬢)

萩千恵子嬢緊縛表情集

女体の荷造り、足枷

春日名コンビ写真 (本誌写真部特写)



川柳マニア十態

山村孤風作
瀧れい子画



見ちや
えはろ
見ろ
あいずなり



切腹は奥一文字と
手をそえる

脛を出し



ハイヒール踏れたいよな



美人
なるに
猿
こうすれば



テクニック



虫臭臭の
つながり

浣腸器

これも



縛るのはノーマルなものと
くどかれる



湯上りの
奴隷は

くちづけし
足に



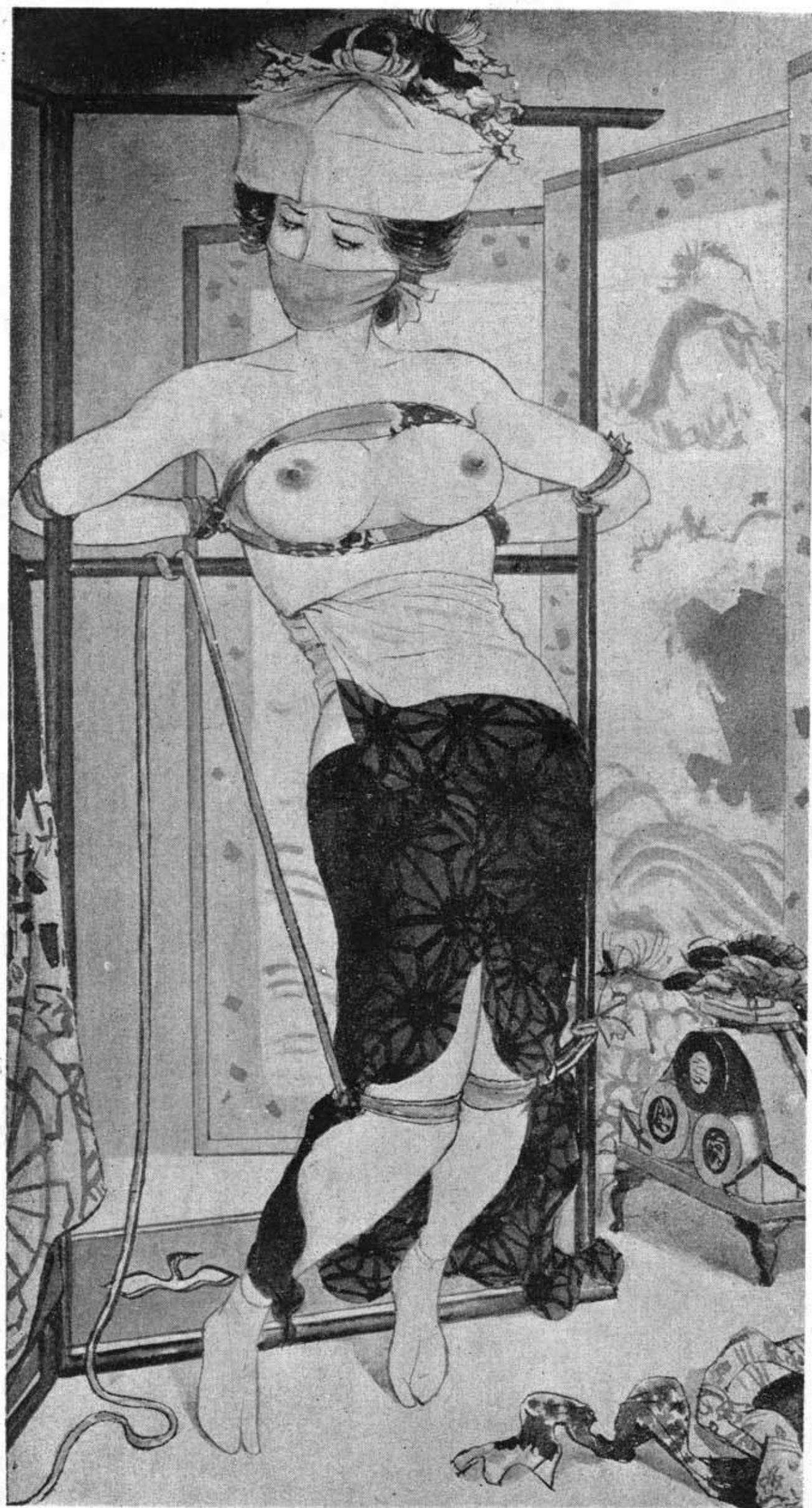
足は
伸び



ズロースになりたい
等と

縛られた花嫁御寮

都築峯子・画

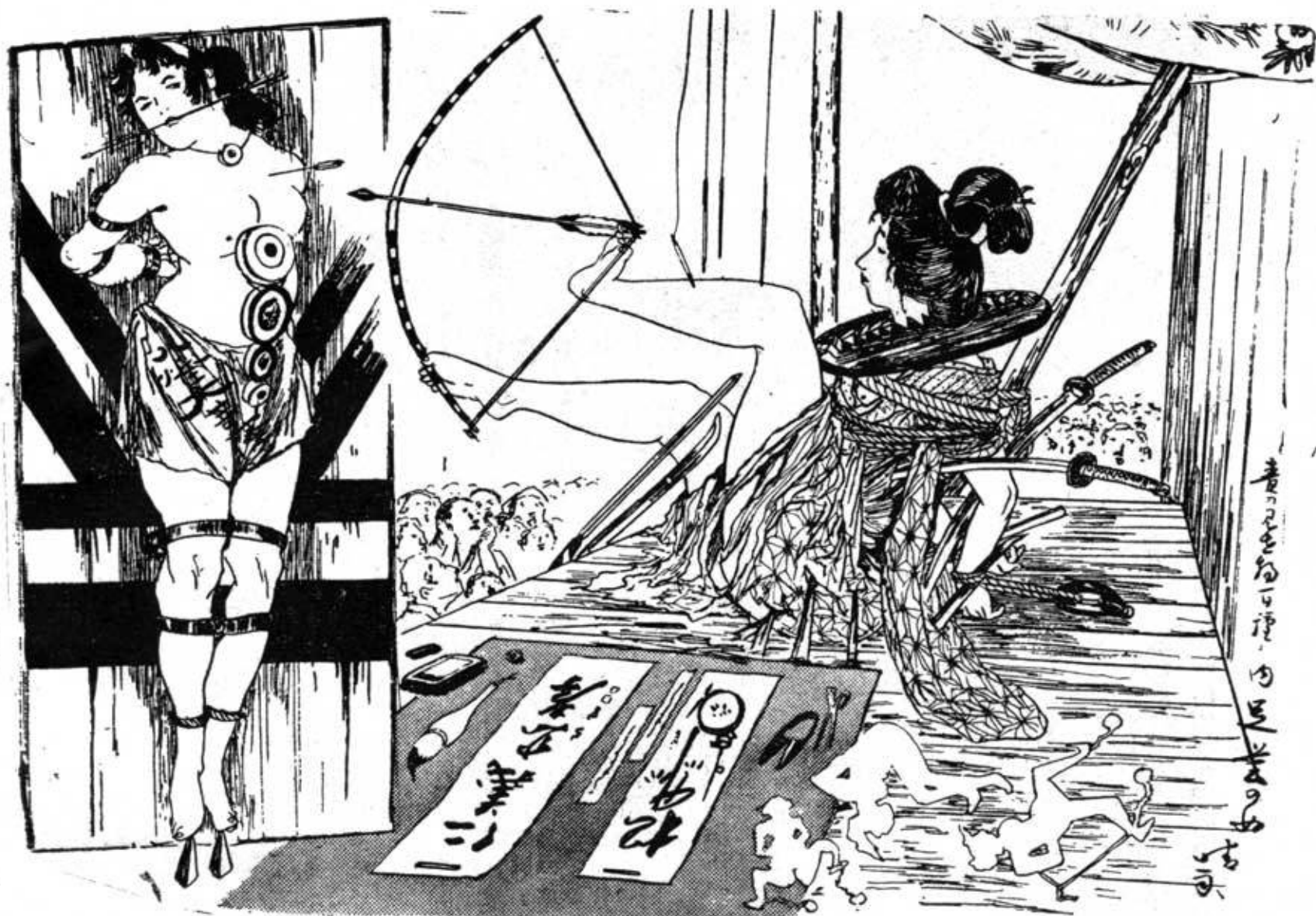


責の見世物百種

足芸の女

伊藤 晴雨

両手の無い美しい娘が髪を結綿に結つて花簪にお染形の朱塗りの櫛簪のビラビラがアセチリンの灯に照つて友禅の振り袖を着て赤い蹴出しをチラリチラリと見せて足で鉄を使つて切り紙細工をする。ザラ紙の半紙大のものを折つて「沖の大船漁師船、漁師船には網が下り網にはお魚が下つております」と地の底から響いてくる様な哀れな声をだして折紙細工をしたり、足へ筆をはさんで字をかいいたりして居る見世物。俗に因果物といふ香具師仲間では(チンプツ)といつて居るが、チンプツとは珍らしいという意味であらう。小猿の毛を捲り取つて血塊だといつて見たら、人工で作つた三本足の鶏やら細工物の両頭の蛇だの、総ては人を喰つた捨らえものゝインチキの見世物の中に、これ斗りは両手のない美しい哀れな娘、大正の初め私は近所の千駄木の大観音の掛小屋で見て此女が好きになつて一日に何回も木戸を潜つた。此手の無い女を縛つて弓を引いている姿はどんなに美しいだろうと思つて……女の名前をお清ちやんという事迄覚えてしまひ。其見世物の跡を追かけて巢鴨のトゲ抜き地藏や深川の八幡様迄見て歩いて「旦那、木戸銭は入りませんかお這入りなさい」なんていう様に木戸番に馴染が深くなつて顔を赤くした覚えがある。今なら卒直に「写真を撮つさして呉れ」といえるが責というもののまだ今日程一般に知られて居ない頃であつたので、とうとう言ひだし難くつて止めてしまつたが、若し女を縛つてこうした芸をさせる見世物であつたとしたら……不図こんな事を思ひだして書いて見た。足を上げて的をねらえば鋭い針が真白い足を刺す。足を下せば下より鋭利な鎗が肉体を刺す、という苦しさの惨虐性を持つ此見世物がもし有つたとしたら……不図私はそんな事を考えて見た。的にするものは肉体の豊かな美少年である事が必要であらう。こんな見世物が若し有つたら満員は受け合いである。さしづめ泉鏡花などの材料になるであらう。



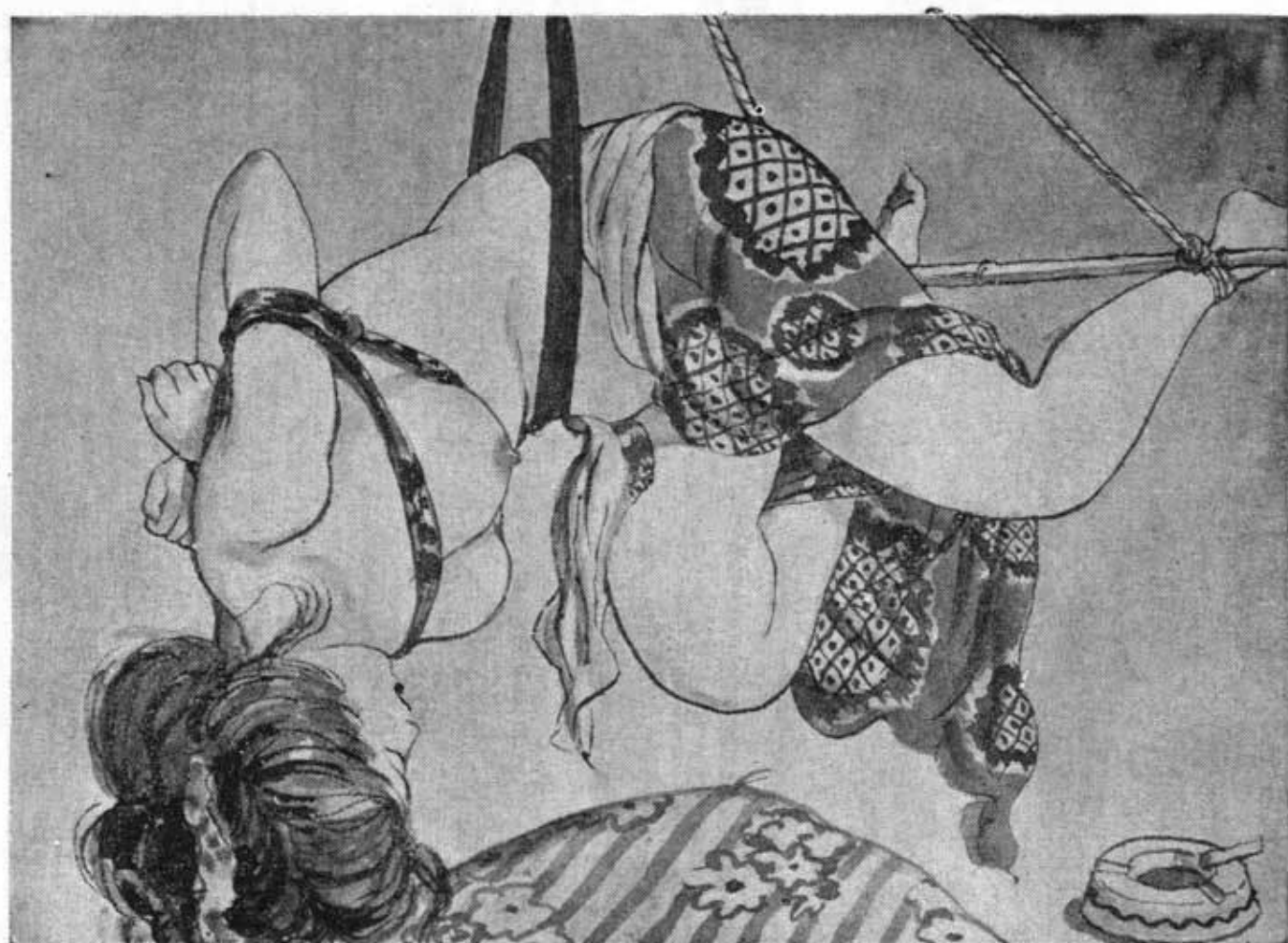
腰巻の女 (二題)

都築峯子・画

床の間



胴吊り



傑作集

屋 二 態]

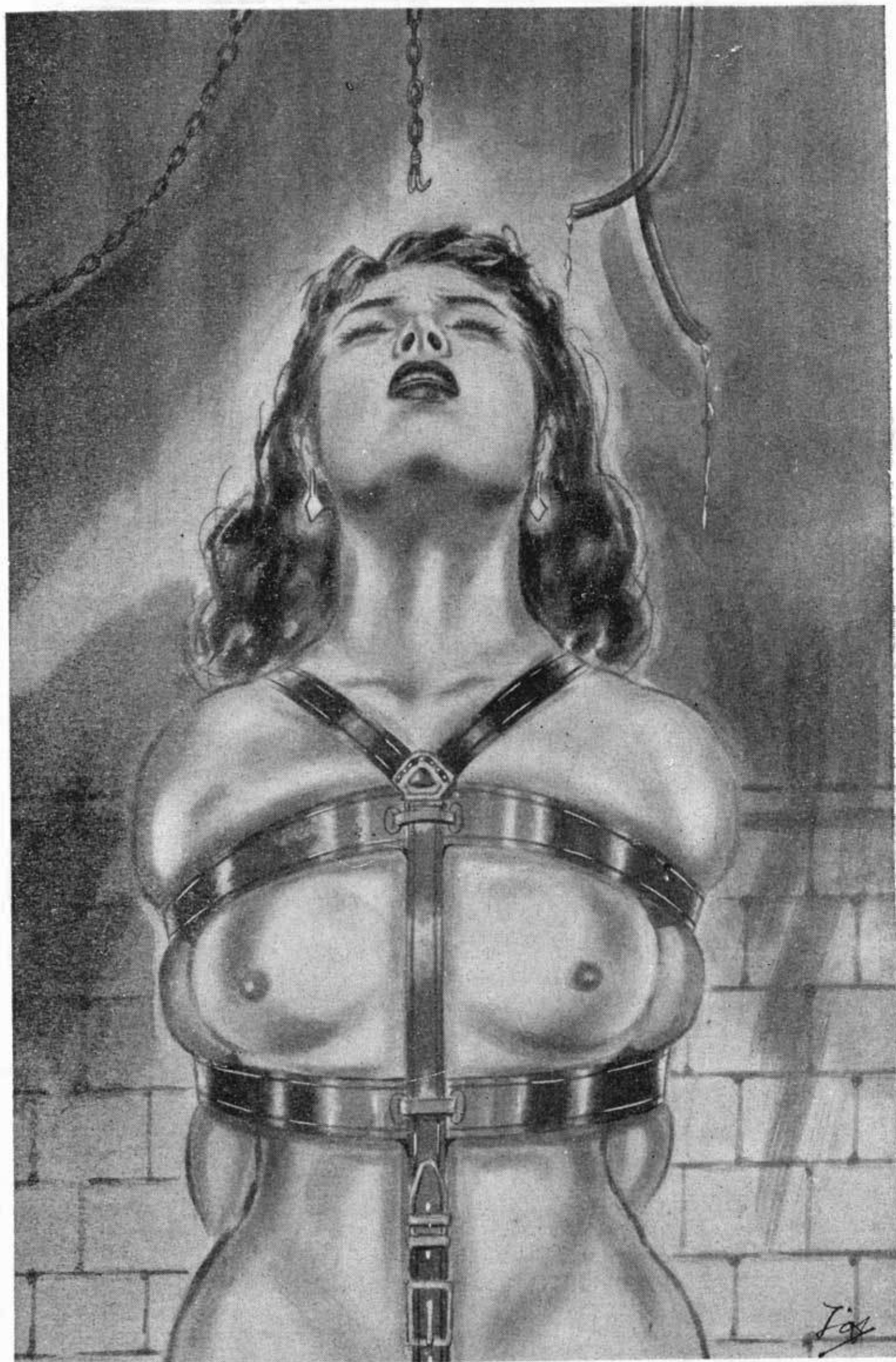
股のツケ根迄達する、皮製の仕置衣、髪の毛を紐で吊り上げると顔を動かすことも出来ない。日本趣味に外国のメカニクを加味した独創的な雰囲気サジストの夢であり、マゾヒスチンの憧れでもあろう。

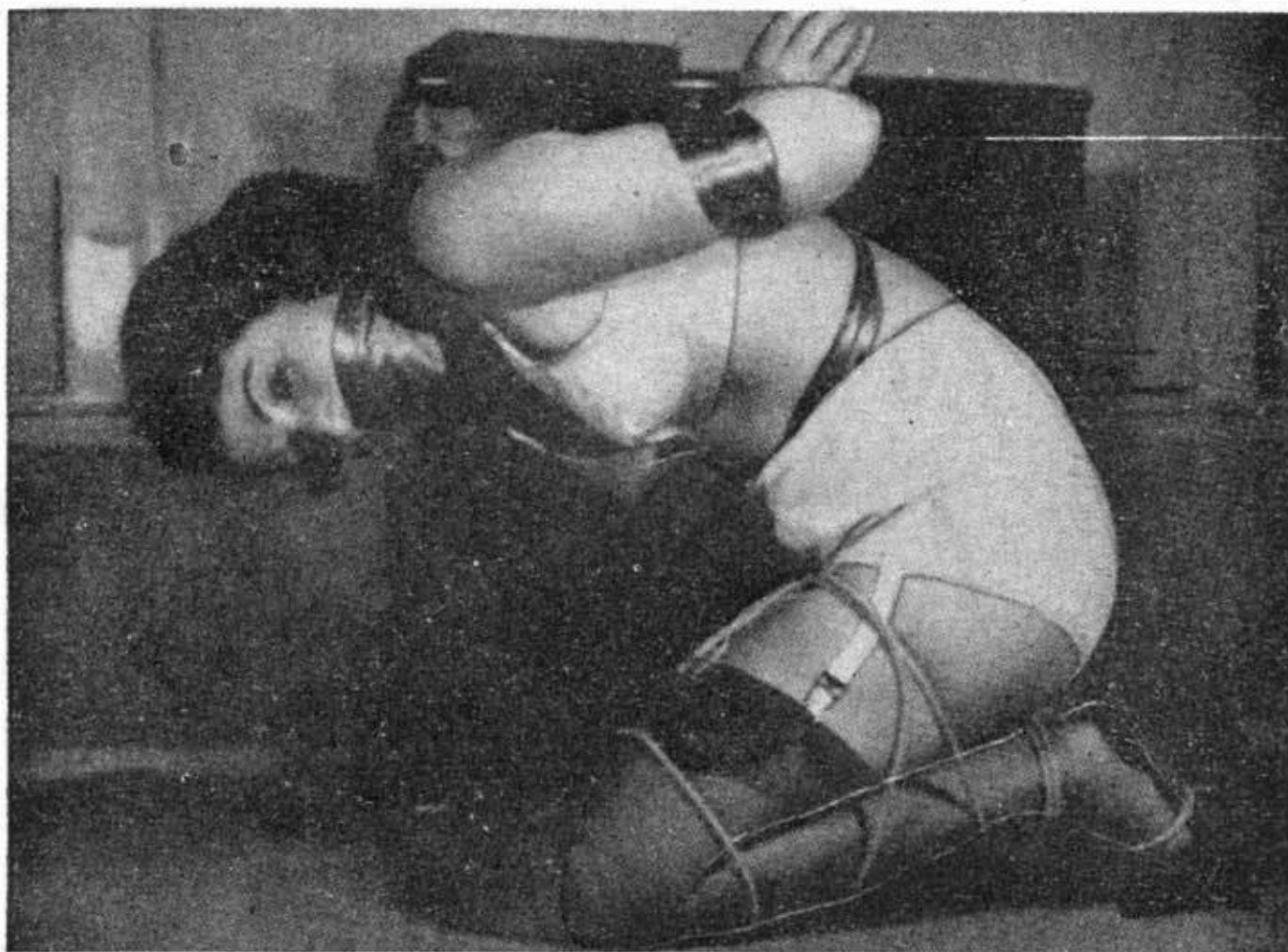


チエンプロツクから、水の出るホースまで揃えた悦虐の部屋、
この素晴らしい緊縛具はどうですか。ベルトと尾錠を巧みに配合
して女体の要所を無駄なく、思うように固定出来る仕掛けの巧
功妙さ。

四馬孝

〔悦虐の部〕





日本式の後手、猿ぐつわに似た縛り方、二の腕にベルトのようなものが掛っているだけで手首の方はよくわからない。ストッキングを穿かせているのは彼等の常套的な好みか？。



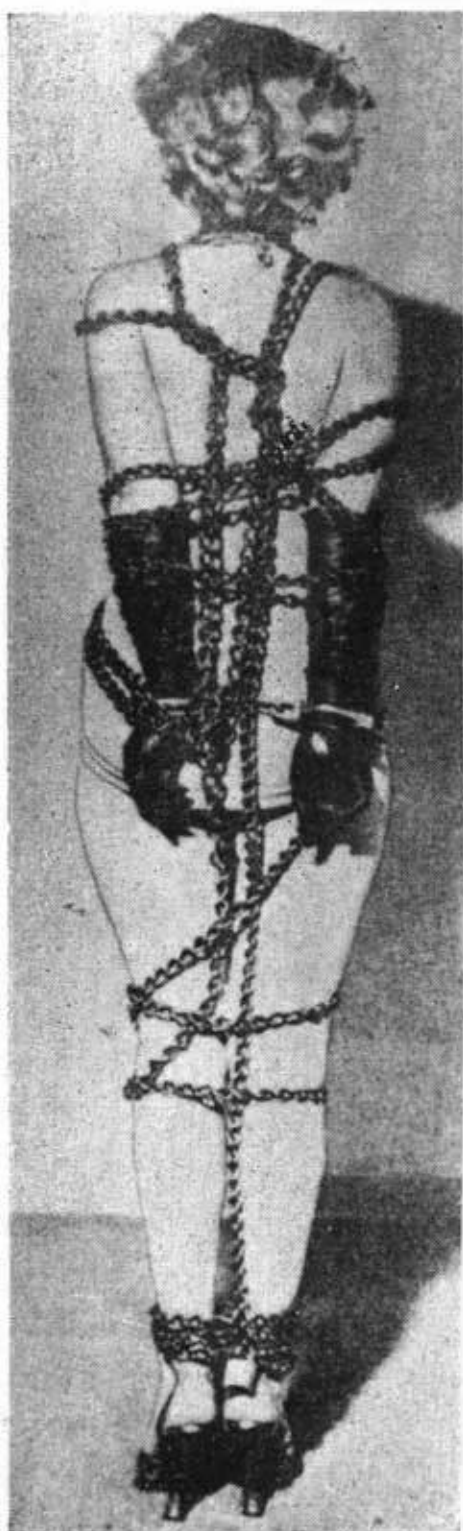
皮の長靴、皮の手袋、胴体にびつたり喰いついたコルセット手にムチを持って仰向けになつた女は、果して見る人にどんな感じを与えるでしょうか。

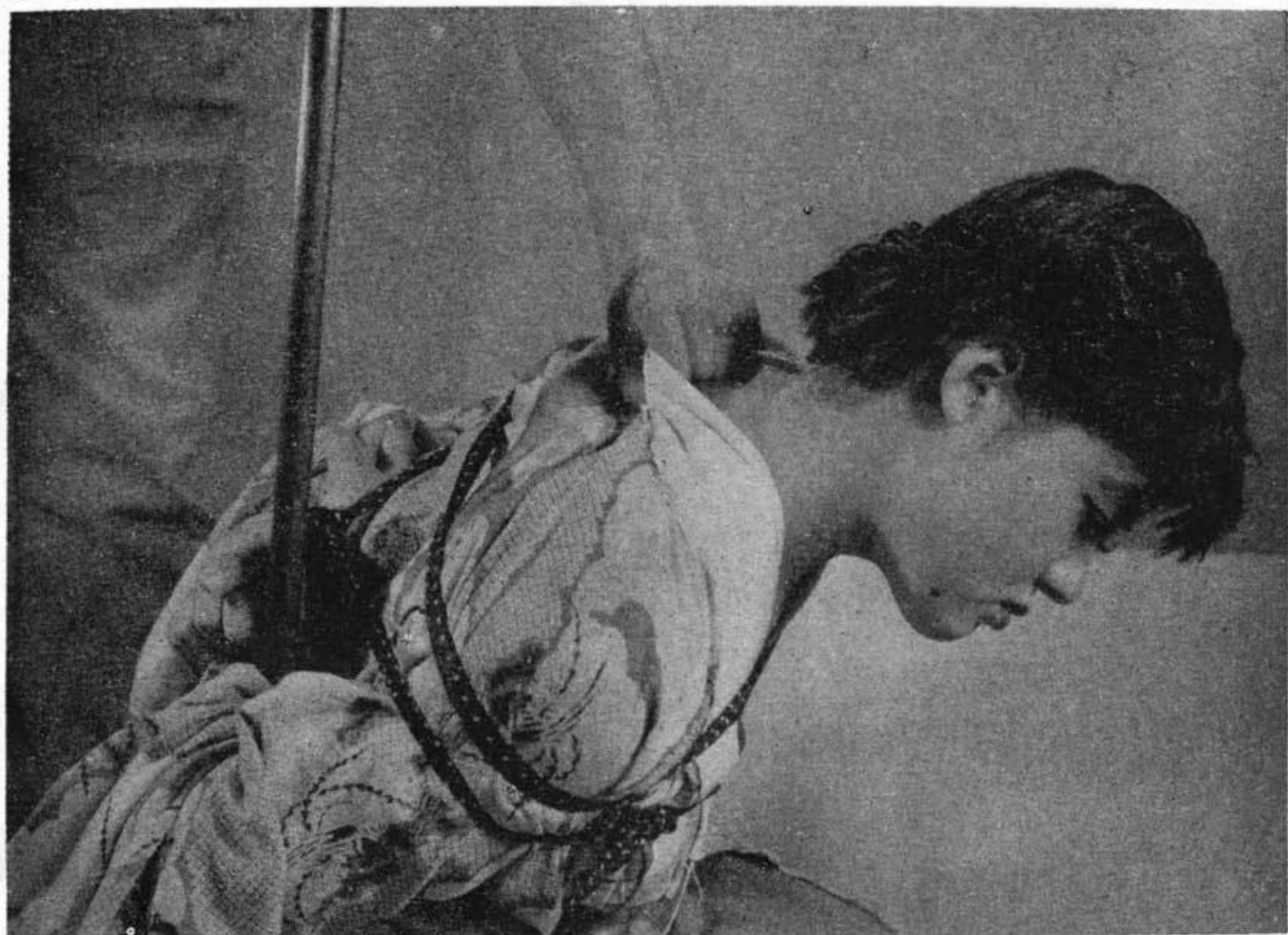


外国の緊縛フォトを見ると、むやみやたらに大げさな道具を用いて、身動きならぬようにしているのが多い。くさを沢山使つて雁字搦目にしているのや棒を利用して猿ぐつわと後手を連結しているのや、只単に珍しいというだけで美しさというものを感じとれないのは、やはり風習の違いであろうか。

(BIZARRE誌より)

【風変りな拘束具】





鼻つまみ

珍らしく伊吹嬢に長じゆばんを着て貰った。後手高手小
手のまゝ、鼻責めから始まつて、木刀による責め、もう
勘忍してと悲鳴を挙げるまで一時間有余に亘つて三十数
枚、休みなしで撮影した中の三枚である。

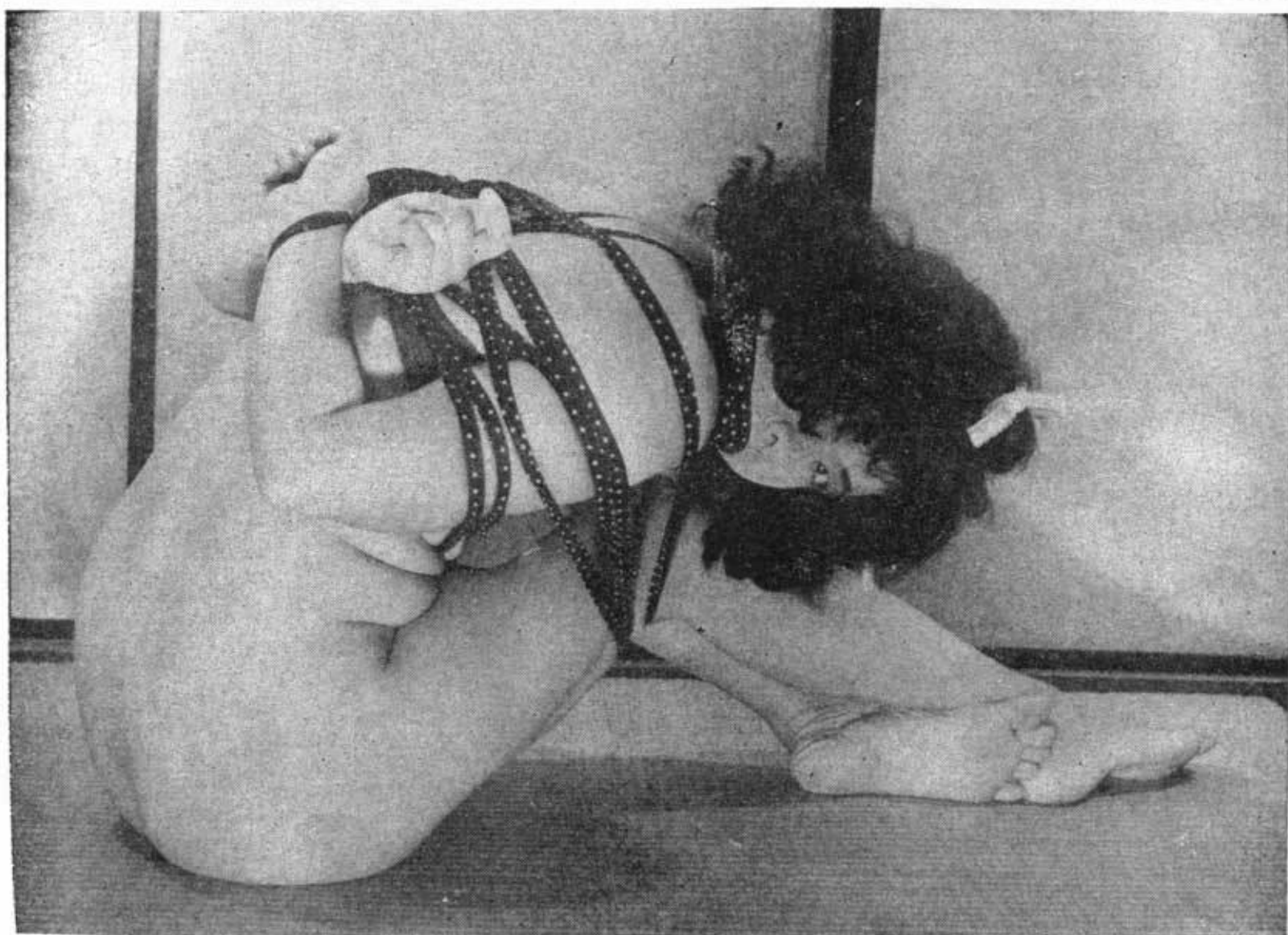




観 念

(中 富 綾 子 嬢)

この、のんびりした顔付を見ていると、もつとひどくいじめてやりたく
思うのだが、本人は案外これでどうしようもないと観念しているらしい
のである。

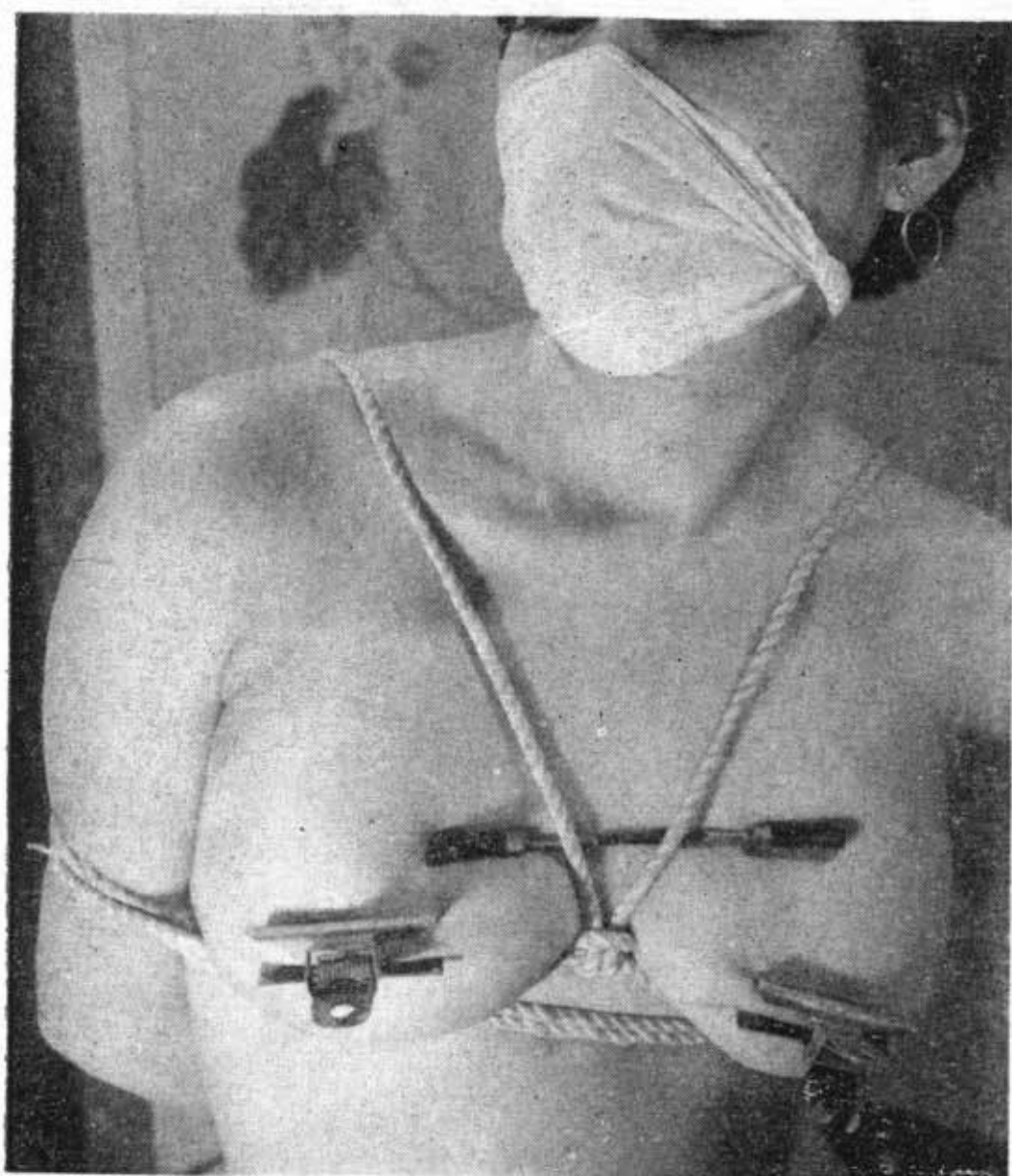


海老しぼり

(萩千恵子嬢)

クリップ責め

(川邊砂登子嬢)



雪國だより

畔亭 数久

田舎の叔母さんの所へ行つた麻理から
「先生、大変な雪で吃驚してしまいました
た。二米はありましようか。まだまだ降
るそうです。早速従弟のカンちゃんと雪
合戦。散々負けました。」「雪だるまの
コンクールで一等になつたけれど、女の
子のくせに、これは何ですと叔母さんに



叱られましたわ。叔母さんは芸術を解しないから
だめよ。」「晴れた暖い日、タオル一枚素裸で山
の温泉へ従姉のおきんちゃんとスキーハイク、素
適でしたわ。」「こゝでは晩に裸で寝ますのよ」
という雪の便りが参りました。
おきんちゃんは村の女相撲のチャンピオン、来
月は麻理とおきんちゃんの取組を御覧に入れま
しょう。



(一) 奥多摩峡谷に鳩の巣という部落があつて江戸の松平紀伊守の別館がある。館の主は発狂した奥方で医師の勧める儘

に茲に出養生をして居るといふ始末。飯綱婆アは此奥方の心に喰い入つた。此館に見目美しい女中が青梅の町から奉公に



上つた。美しい女中を見ると発狂する館の主は良人の紀伊守が変に女中に手を出すという。嫉妬から起つた発狂で、此奥方は至つて醜婦で家康に於ける築山御前の如き人物であつた。

(二) 或時、些の事から奥方の怒りに触れた腰元の美しい女、其名を楓と呼んで居たが、半ば発狂した奥方は此腰元を縛つて散々に責めた揚句、村での名人と呼ばれる鋳物師に命じて縛つた手に鉄の輪をはめて、之に錠前を掛けた上に其錠前の穴を塞いで仕舞つた。邸内に不思議な榎の木があつた。樹幹から絶えず水が



血染の毛綱

伊藤晴雨

へと無意識に歩いて行つた(四)所謂附近か　の前で禁火に暖まつて居たが、縛られた美し
らの脱走兵が強盗に早替りしたのであらう。　い女がうつろな眼を見張つてトボトボと歩い
数人の大男がトツブリと暮れてしまつた洞穴　て来るのを見て一同は立上つた。(以下次号)



滴り落ちるので、乳の出ない女は此木に願を掛けると
乳が出るといつて伝手を求めて参詣する者が多いので
土地の人は樹の様相から之をオ△△△榎と呼んで居た
此木の下で惨憺極まる責めが行われた。

髪の毛をむしり取られて、血が浸んだ毛を一本宛或
は一固まり宛釘抜きで引抜かれる苦痛は死ぬより苦し
い。楓は必死となつてもがき苦しんで居るのを発狂し
た奥方は面白そうに眺めて居た。

(三)後の手に縛られてまだ其上に手錠の穴をふさが
れて屋敷の門前に投げ出された楓は折柄暮れかゝる秋
の夕日を浴びて紅葉色づく奥多摩の峡谷か鞍馬橋の方



奴隷の誓いと浴室での奉仕

激しい鞭打のあと、女王様の膝下に屈伏したドレイは、女王様に対して、如何なる御命令にも心服するため奴隷の誓いを立てさせられている。ルミ女王様はお尻の下へ敷いたドレイの存在をも忘れたように、他のことを考えていた。



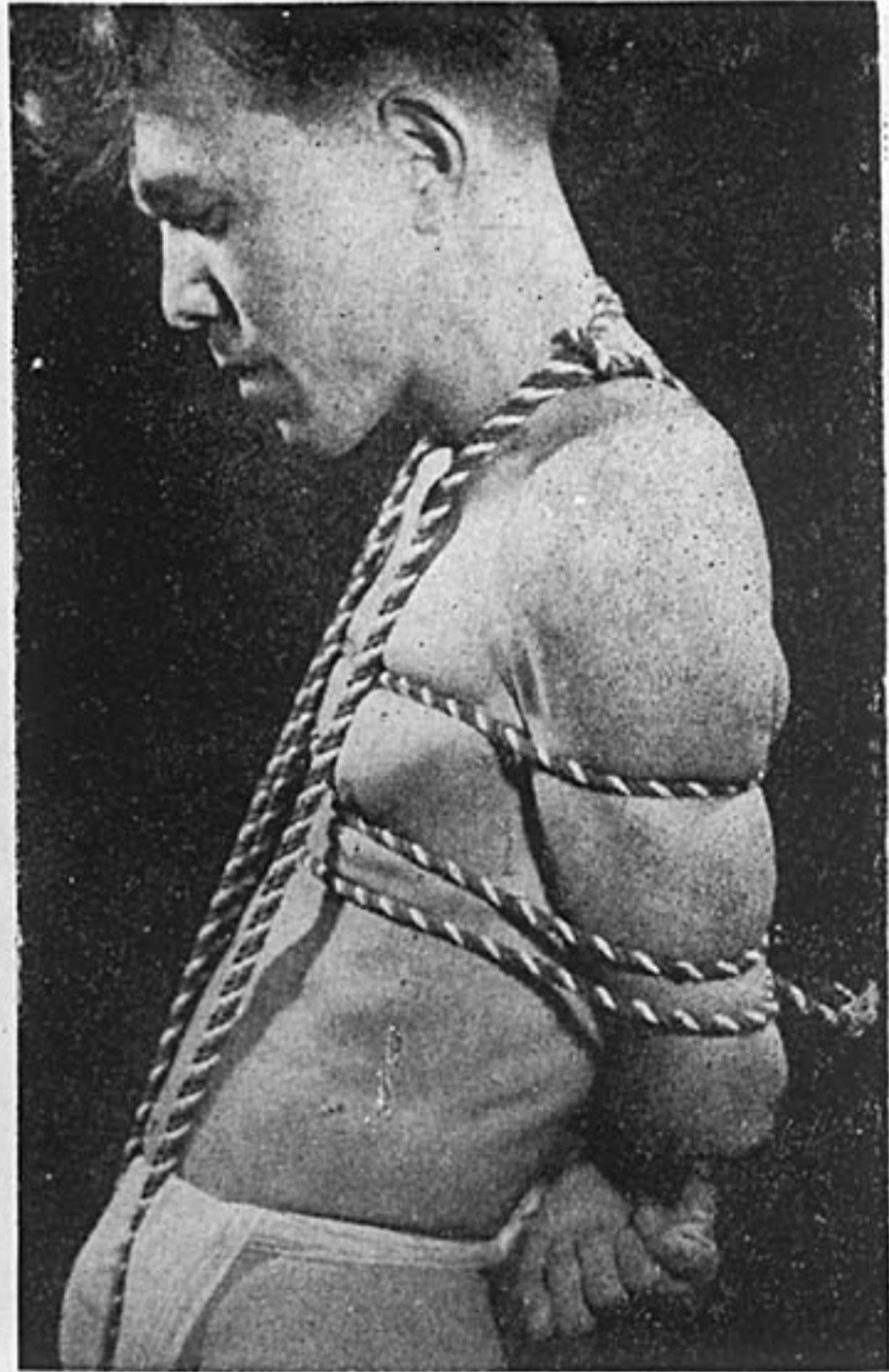
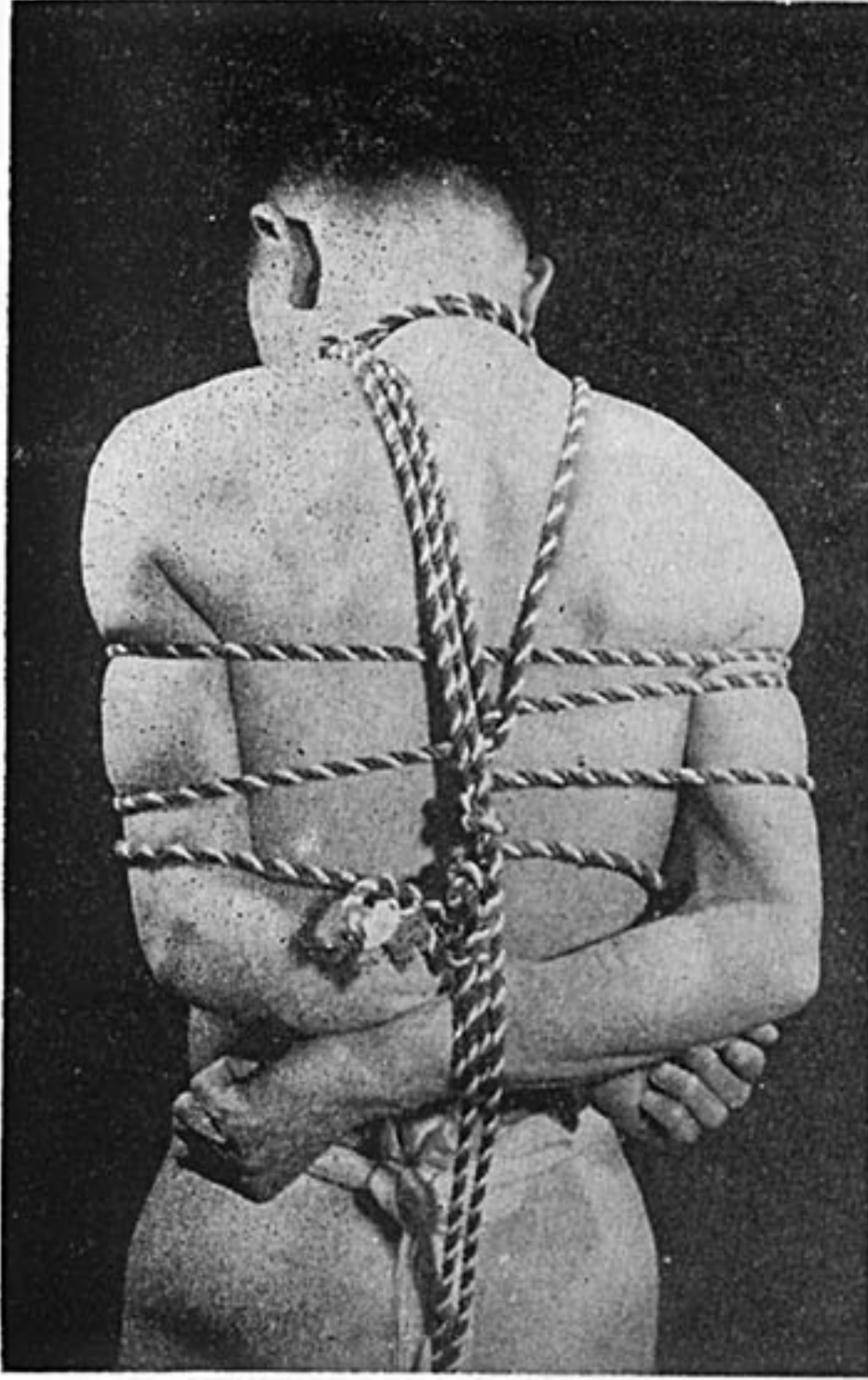
女王様……春日ルミ嬢

三助……小沼正三
奴隷……湖田平雄



〔三助にアンマをさせる女王様〕





翻弄

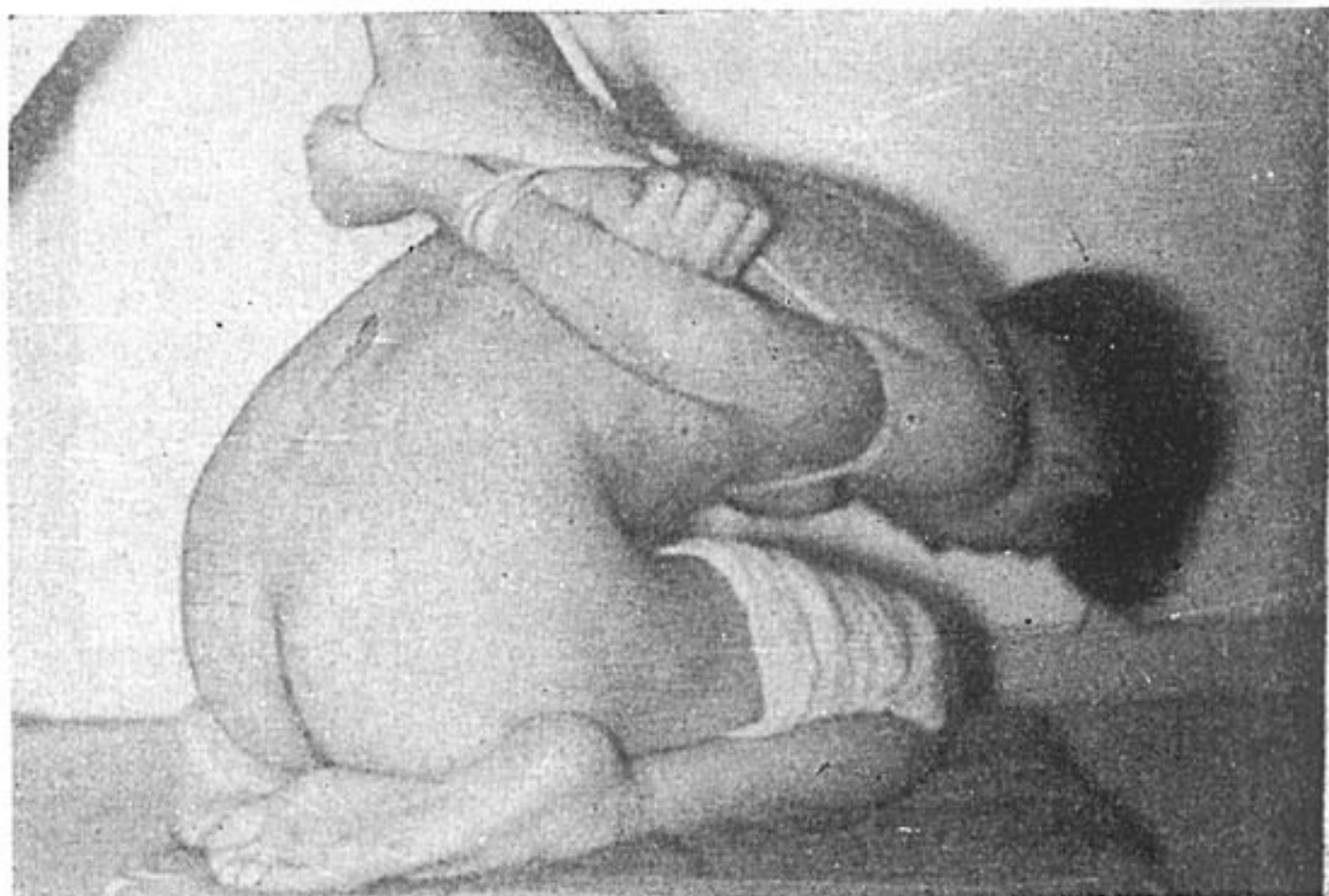
蛙を潰したように、押しひしやげられているワン公。



モデル 湖田平雄

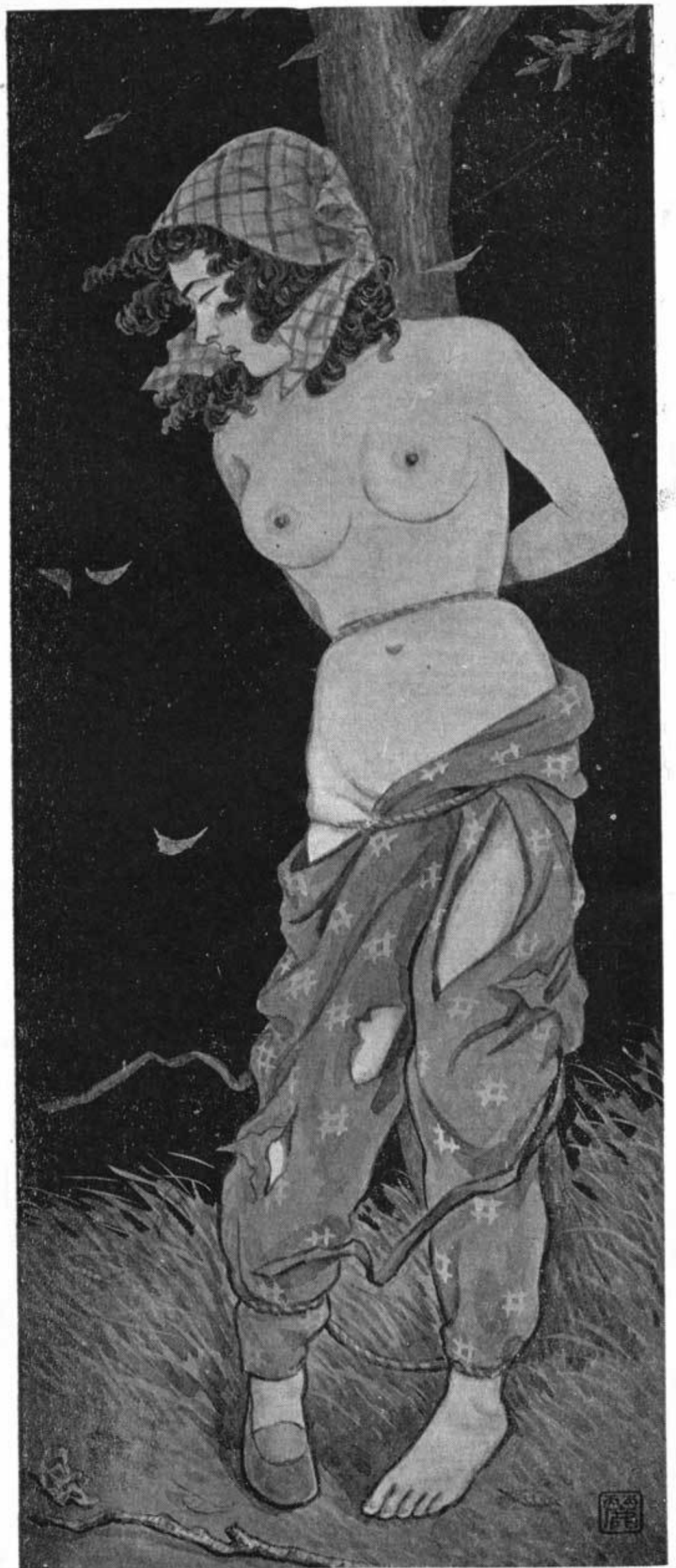
海老責 (鞭打のポーズの一つとして)

本日のワン公は特別の御慈悲を以て、荒縄で縛ることだけは許して頂いたかわり、女王様が飽きられるまで、海老責の姿勢で女王様の全体重を保持しなければいけないことを命ぜられた。
(女王様の手にするのは、セパード訓練用のムチ)



春日ルミ嬢が出張して読者某氏を
縛りたる時の写真。

— ルミ嬢提供 —



処刑される日本娘——戦争はいつの時代でも、か弱き女性をその犠牲者の筆頭に祭り上げてしまう。——

国民の血税によつて飽衣暖食に明け暮し、軍人でなければ人でないように威張りちらしていた職業軍人たちは、一たび形勢非と知るや、無辜の民を満州の曠野に放棄して、自分等は我先にと退却してしまつた。暴徒と化しは満州土着民の中で、日本人婦女子は如何に血涙の凌辱を受けたことか、引揚者の涙と共に

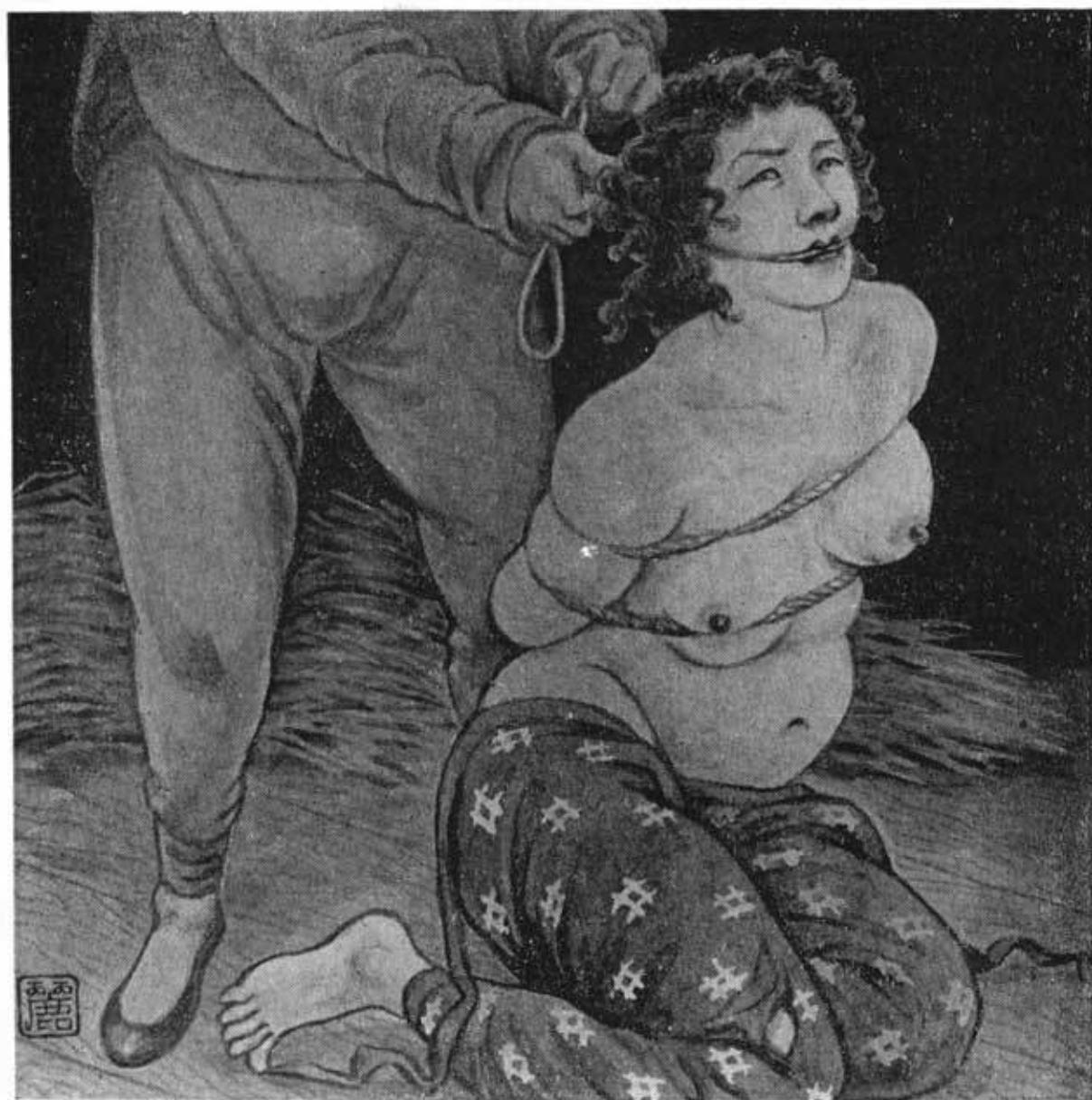
に語る告白は、私達に戦争の罪惡をいやといふ程知らせてくれる。戦争はいつの時代でもか弱き婦女子を犠牲者の筆頭に祭り上げて恥じるところがない。何の罪もなき清純な日本娘がむくつけき農夫達の衆人環視の中で上半身裸のまゝ立樹に縛りつけられ、日本人指導者たちの満州暴政に対する復讐として、今

まさに処刑されようとしている。罰せられるに罪なく異国の土地で惨殺されていつた日本娘の心境や、果して如何ばかりであつたらうか、日本を戦争に駆りたてた軍閥共は、罪を謝して悉く自決してもいゝ筈なのに、今頃になつて再び大きな顔をして、のさばり反つてゐるのは油断がならない。

敗戦日本の悲劇

滝 麗子・画

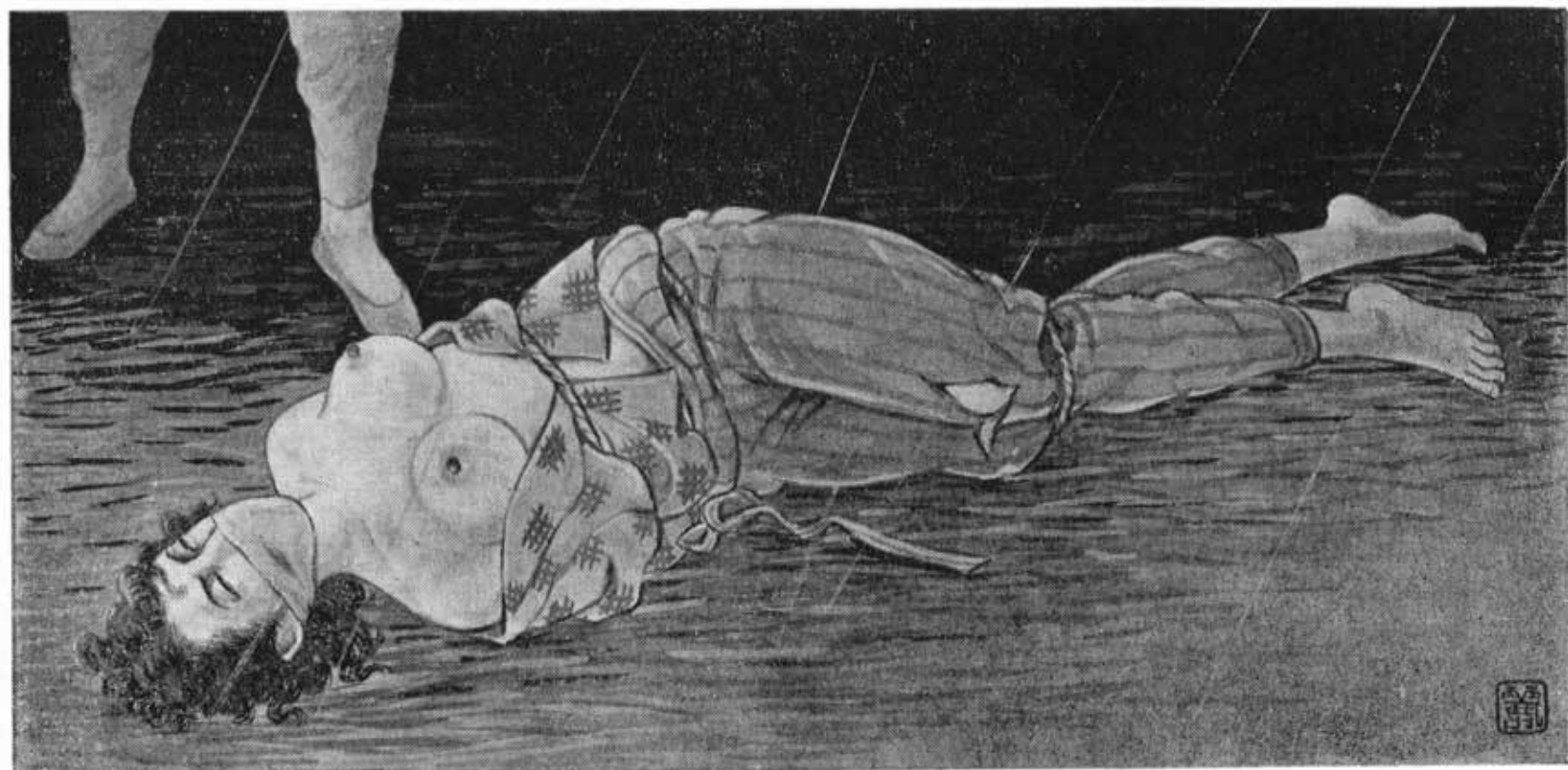
(引揚者の告白に見るに満州敗戦時の秘話)



日本娘を弄ぶ農夫

戦争を行う者に呪いあれ、戦争こそ人類の敵である。

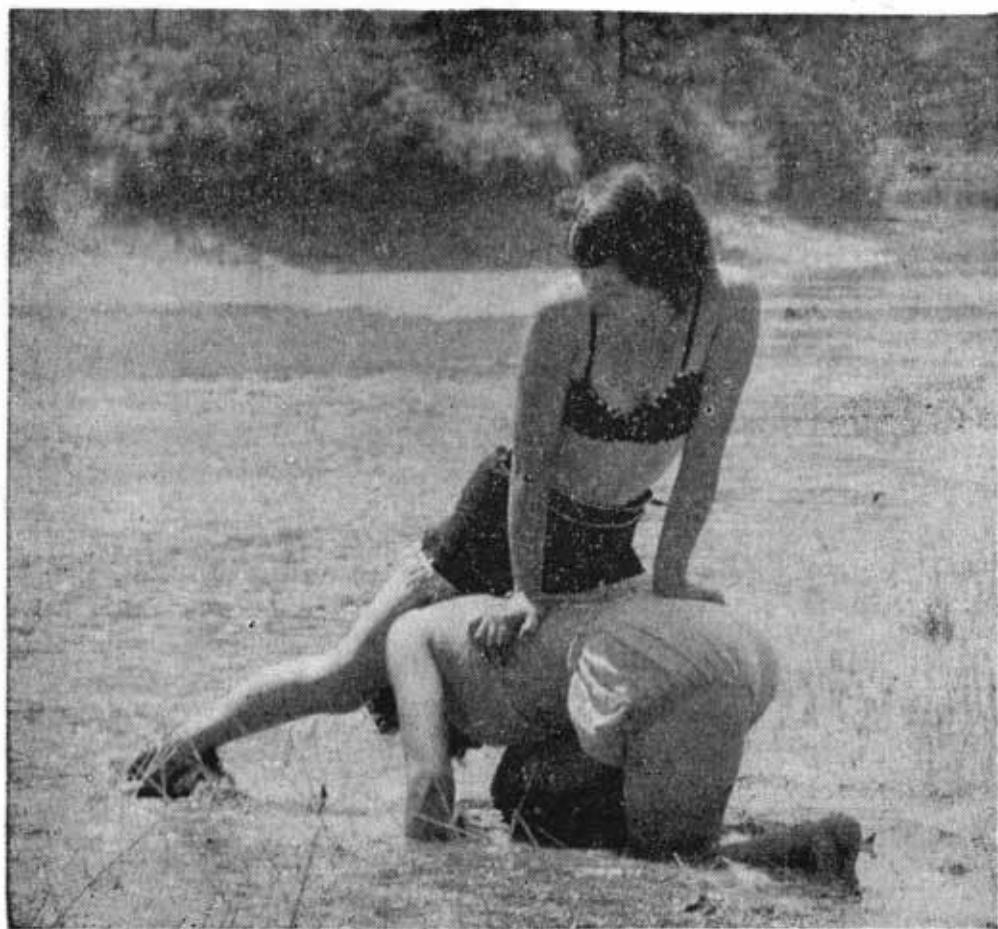
雨中に放棄された日本娘



春日 伊吹 二嬢名コンピ写真

(本誌写真部特写)

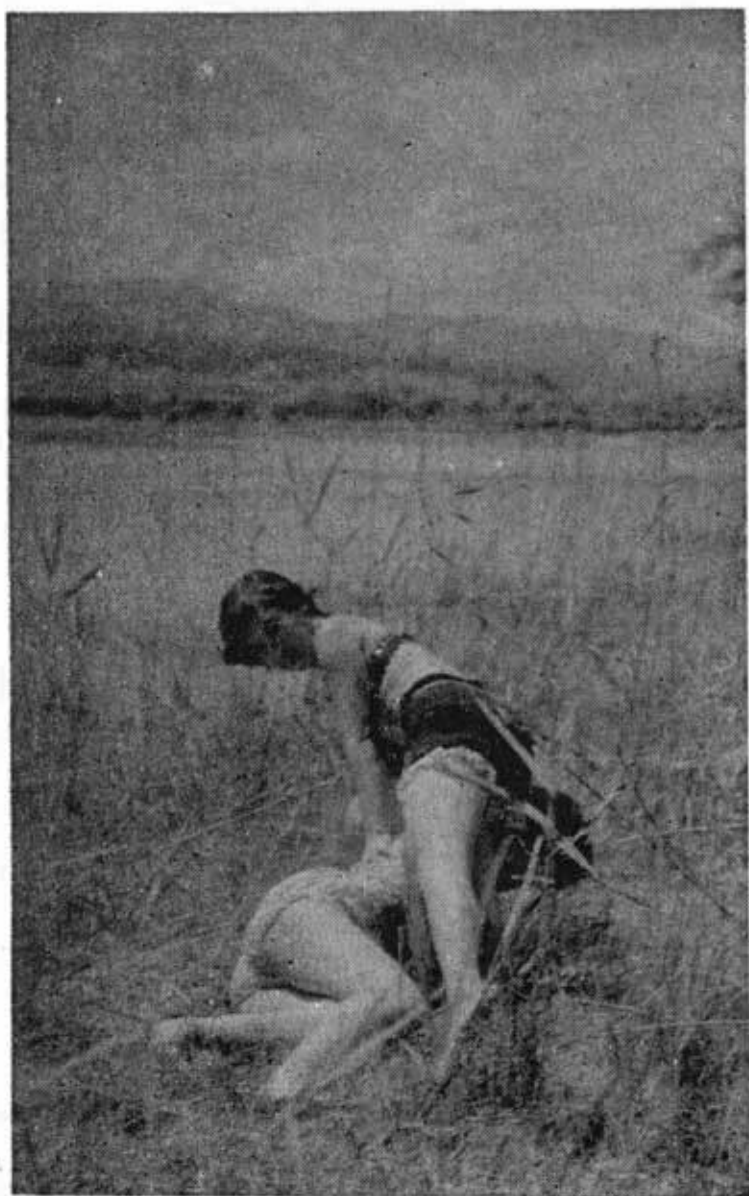
晴天続きで水の少くなつた沼、青空には白い雲がばかりと浮かんでいる。沼畔の葦もすでに干れて、水の中へ入るのは、もう肌寒い。嫌という伊吹嬢をルミ嬢は無理に泥の中へ浸して、自分はその背中へ股がつて、得意の表情、カメラは岸から連続の速写砲を放つ。



(3) 起き上ろうとするのを、押え込む。



(1) 左手を逆にとつて、ねじ上げる。



(4) 頸にまたがつて馬のりになる。

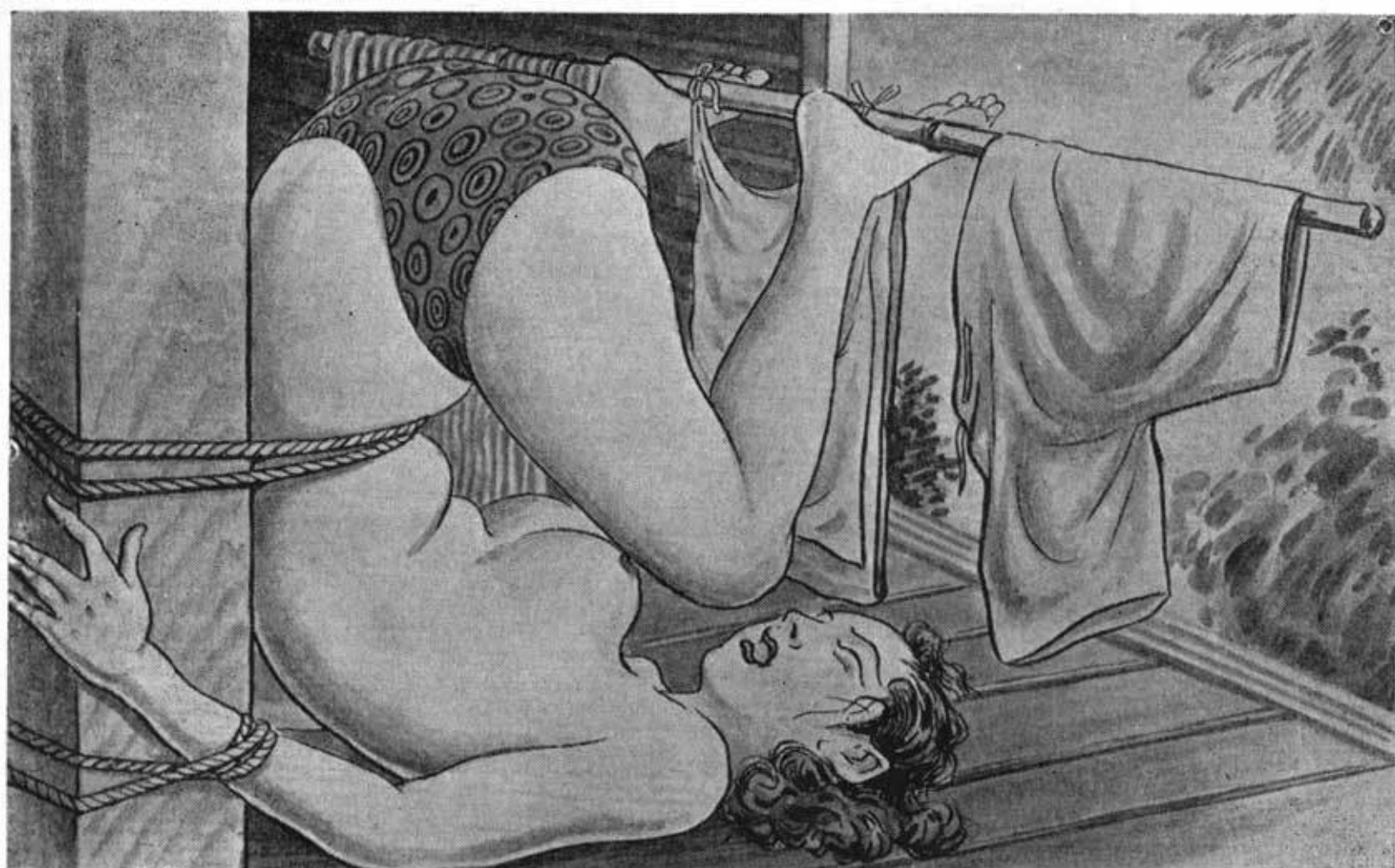


(2) 身体をもたせて、二人共倒れる。

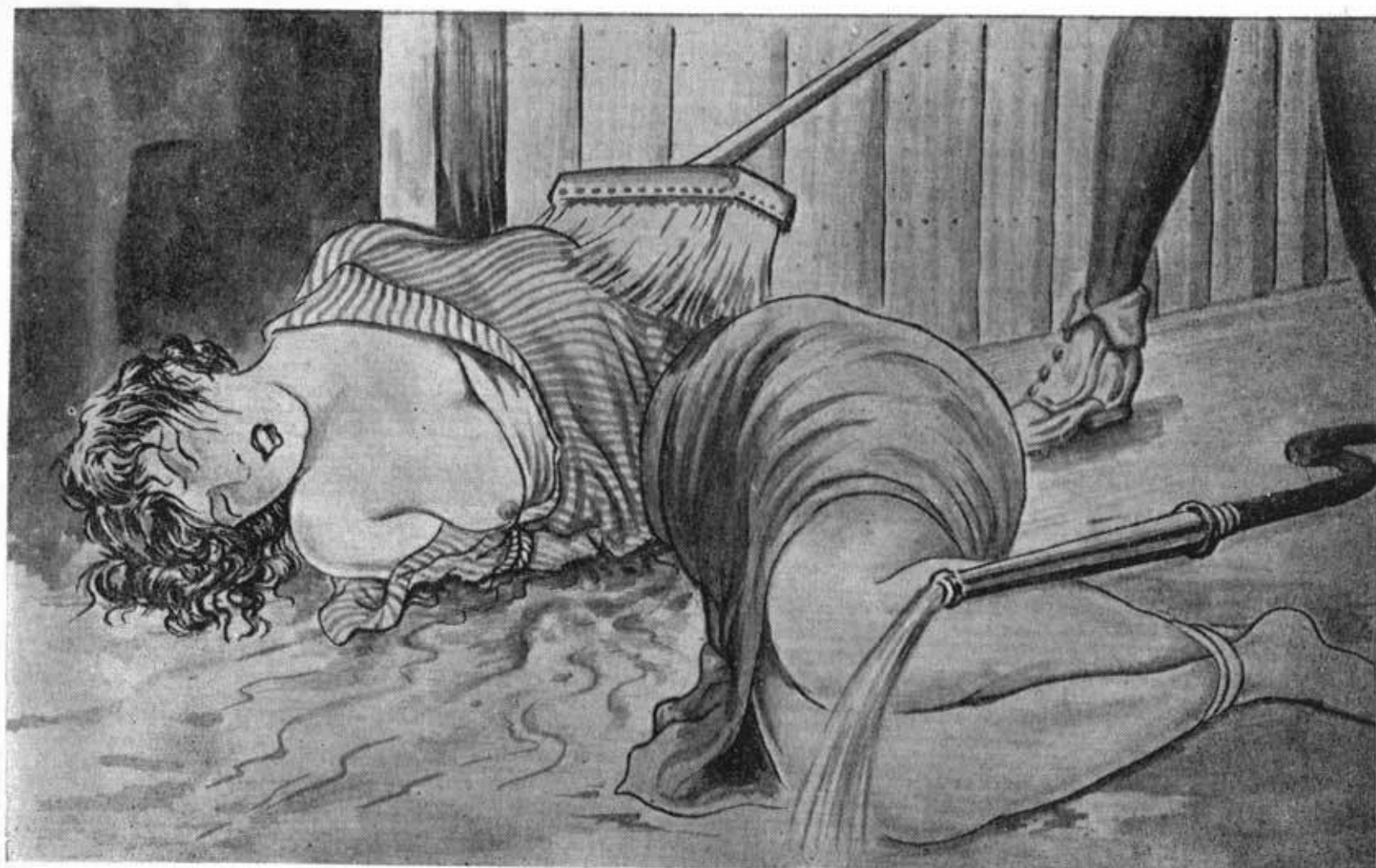
奇 抜 責

アイデア選

杉 原 虹 児・画



物 干 台 「干物が完全に乾くまで落したら承知しないヨ」

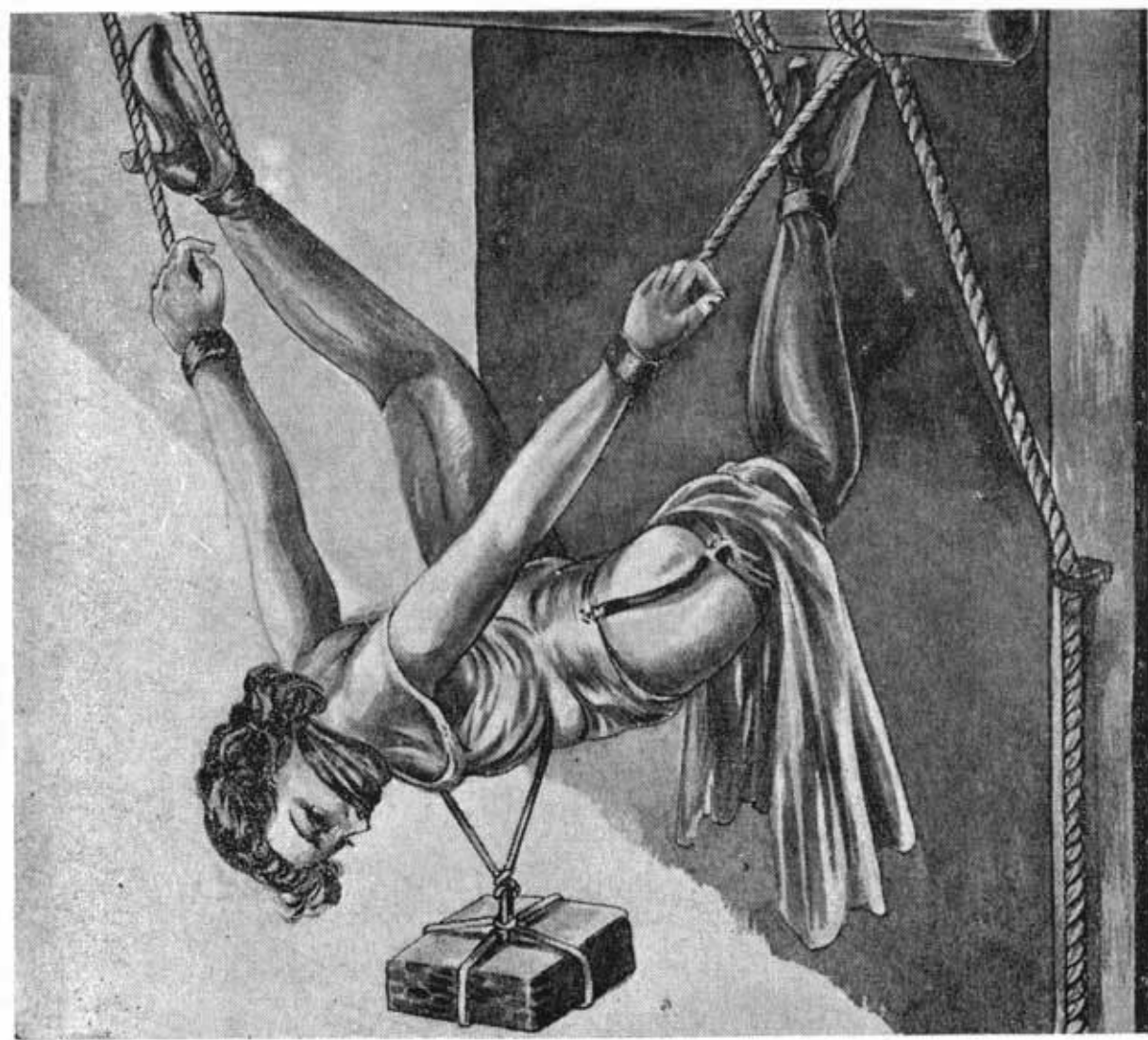


洗 濯 「着たまゝで奇麗に洗つてあげるから、おとなしくするんだヨ」



・ 鉄 路 ・

インディアンに捕えられた白人の娘は、今、鉄道線路に針金と細紐とで縛りつけられた。開拓地へ急ぐ列車のひびきが、次第に身近かに迫ってくる。『インディアンの復讐のいけにえとなつた少女の運命やいかに……』



新人責絵集

依 田 精 二・画

・ 拷問・ 逆四ッ手に吊り下げられた乙女の胴体には、重しの鉄板が……。その時、入口を開けて入ってきた男は誰か？彼女にはそちらを見る気力さえなかったが、

外国雑誌にみるフェティシズム

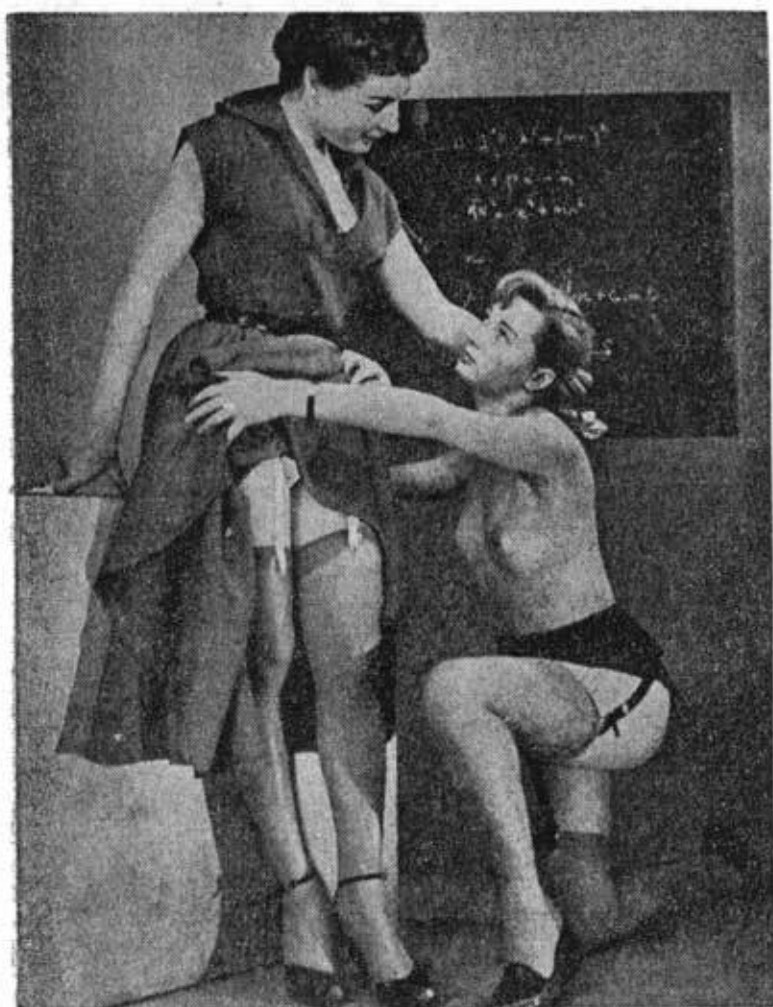
ストッキングをはいた足を愛撫する



外国雑誌のフェティシズムの傾向は、日本と違って脚線美の大胆な表現と、それにハイヒール、ブーツである。左に掲げた半長靴は上半分白皮に飾り房付といった優美なものである。ストリッブという言葉で一時流行した、衣裳を一枚一枚脱いでゆく、或は他人に脱がされてゆく、といった連続写真も相変らず相当の誌面を占めているのは、そういう趣向が強いのであろう。



ハイヒールと半長靴



(2) 裾をまくって脱いで頂く。



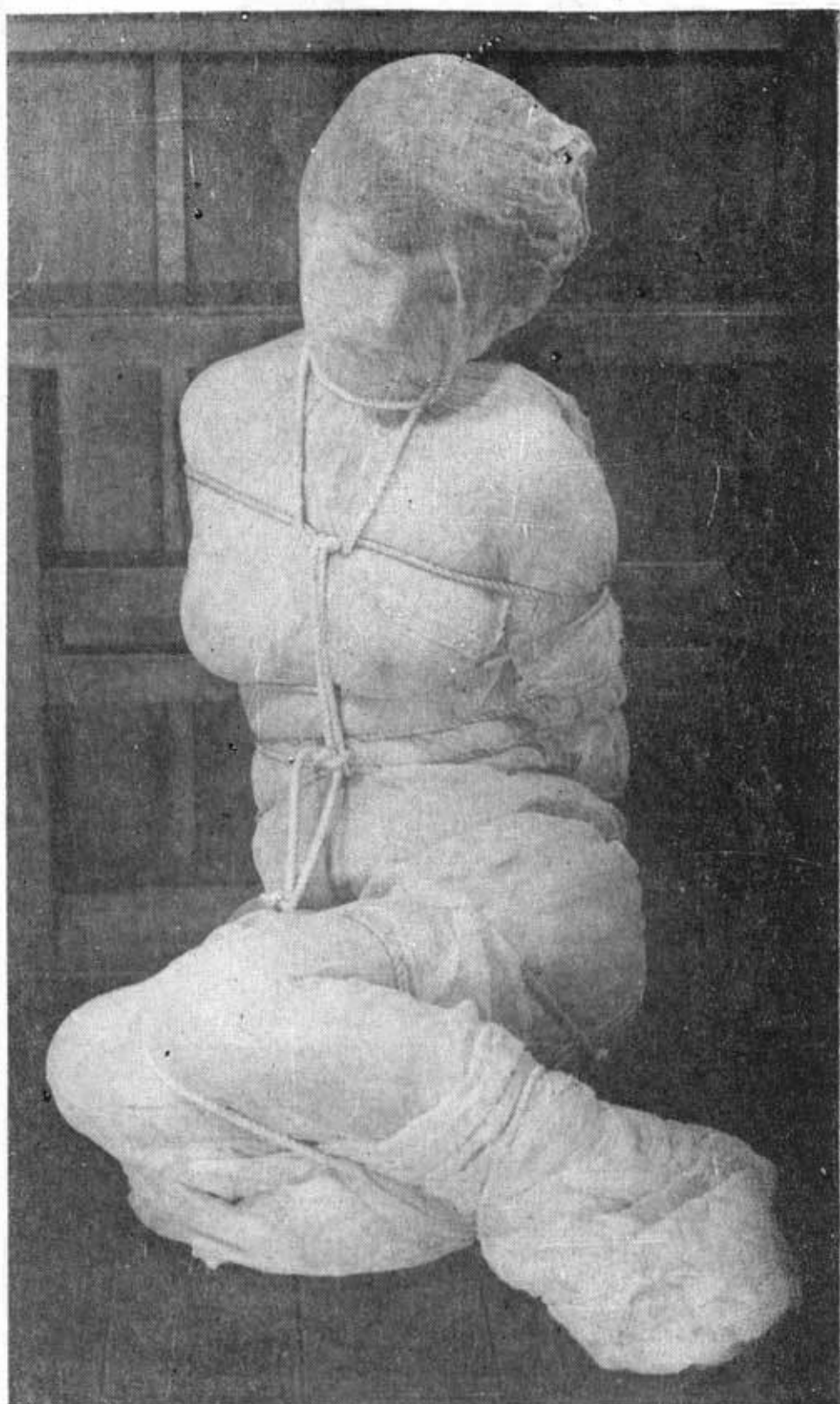
(1) どんな下着をつけている？



(4) ブリーフを脱がされる。



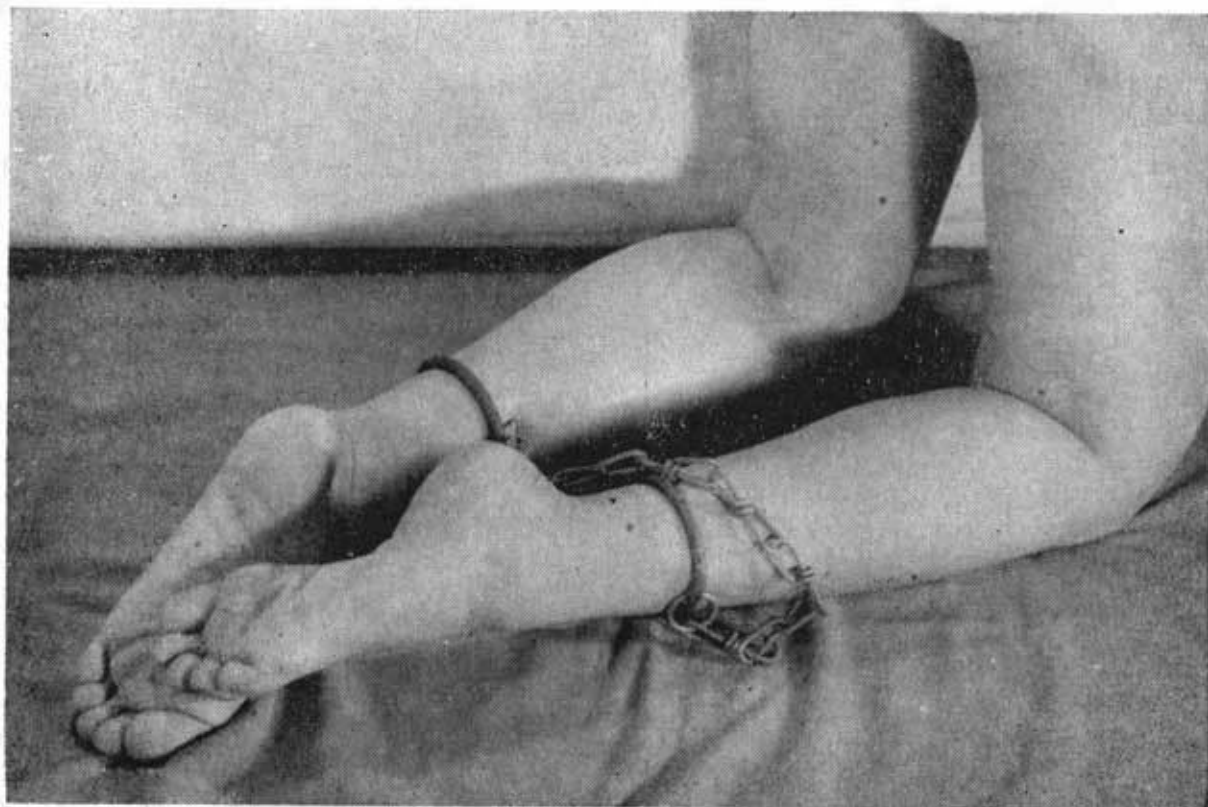
(3) ブラジャーをはずされる。



女体の荷造り

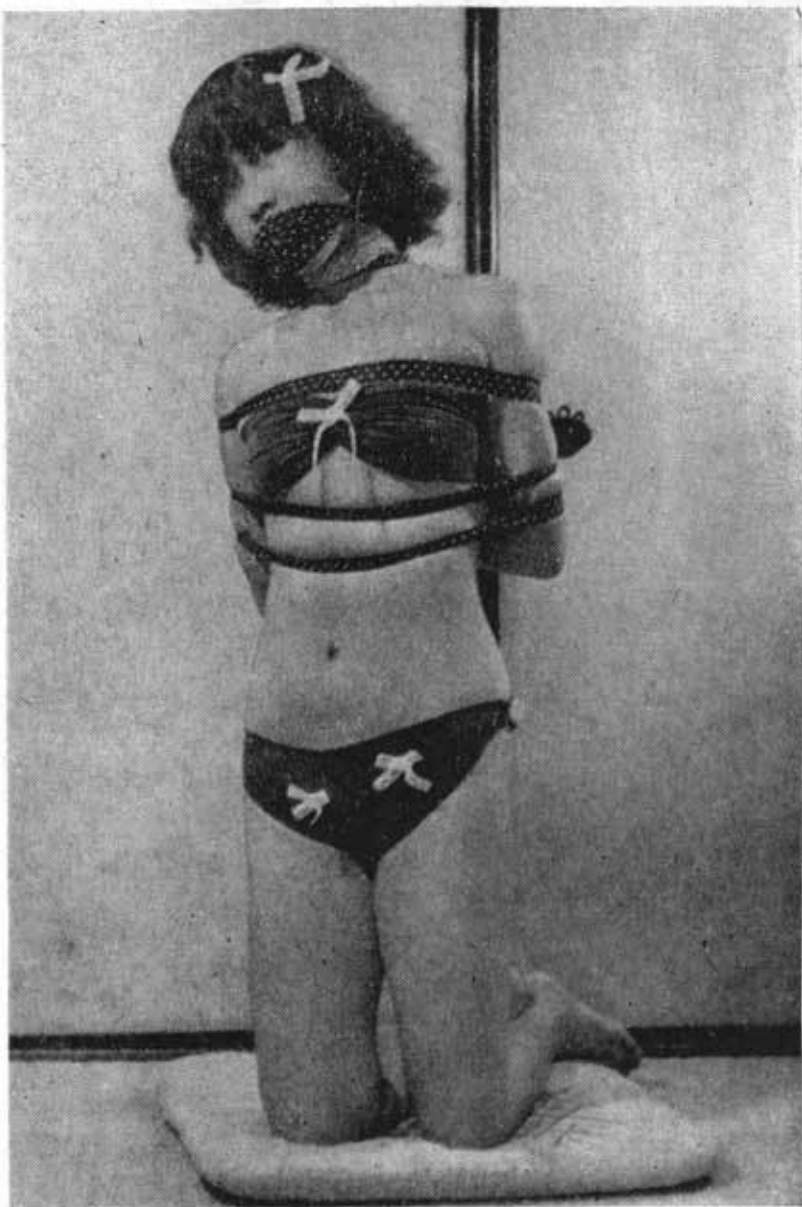
(サディストの夢を実現した！)

肌の透いて見える豪華なドレスのように見えますが、実は夏も終つて仕舞おうとした麻の白蚊帳です。首と胸、胴、お腹、膝頭、足首と綿のロープが厳重にかゝつています。後手も縛つてありますから、自分で解くことは出来ません。どうです。こんな見事な荷造りされた女体を皆さまにプレゼントしたら？……。快く頂いてくれますか。



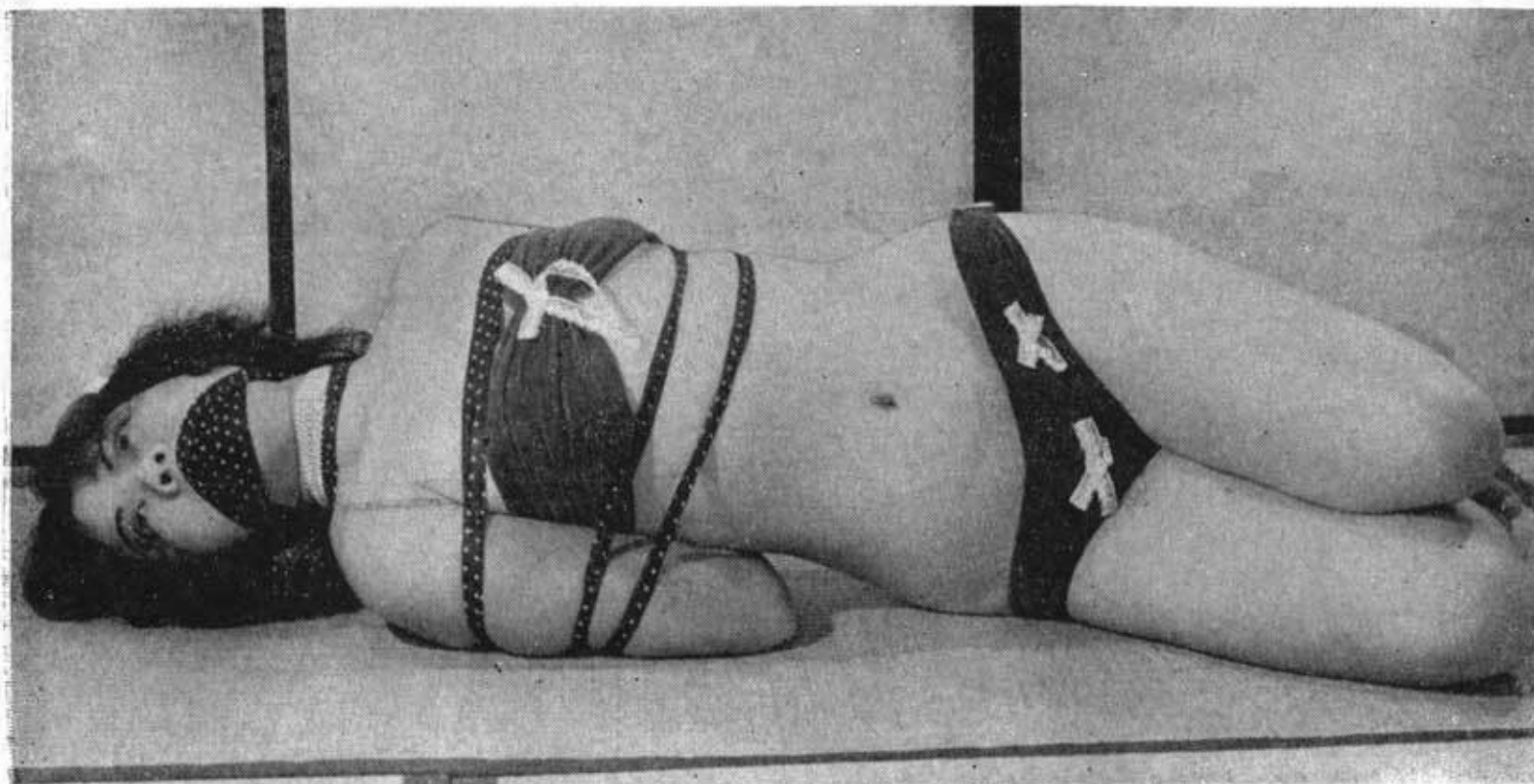
足輪

両足首にはめ込まれた鉄の輪、それをつなぐ鉄のくさり、中世紀の奴隷を思わせますが、これは写真部特製の足輪を一寸モデル嬢に試して貰ったものです。



〔萩 千恵子嬢〕・緊縛表情集・

強烈なアクロバットの姿態を縄を用いて実演して貰うため、そのウォーミング・アップとして撮った写真です。あどけない表情でのんびりしていますが、このあとでは、痛い痛い、と泣きべそをかくシーンが展開されたのです。



全く、偶然というもの程、不思議なものはない。若し彼がふとした機会から妻の秘密を見なかつたならば、これから語ろうとする妻と一言交り、さよなら、ミスター・スミスとい

い。然し、今の曾根にとつては、自分の最愛の妻である筈のマリが、自分以外の愛人を持つていたという事実が、もう、どう打ち消すことの出来ない現実となつて、大きく掩いかぶさつてきたのである。

ていた曾根は、先方
の都合で二日程早い
に帰京した。その
連れだつて上京し
、彼のかねてからの
顧客である小原の案
かたがた銀座へ誘
つたのである。はか
らずも立ち寄つた或
るホールで、曾根は

見てはいけないものを見てしまった。妻のマリが見も知らぬ若い男と、楽しげに踊っているのではないか。

曾根は予定通りの日に家に歸つた。事業欲のかたまりのような曾根も心なし元気がなかつた。だがマリはいつものように美しい笑顔で彼を迎えた。初め、何げなく問い訊そうと考えていた曾根も、そろそろしい笑顔を見て無性に腹が立つた。何か得体の知れないものが身体中を駆けめぐつた。書齋へ入つた彼は矢庭にマリの左手へポケットのハンカチをからませていた。「あらッ、貴方、何をするんですの！」マリは冗談とも思えぬ曾根の真剣な顔付に、思わず恐怖の悲鳴を上げ



た。旅行用に携行していた大型のハンカチは、マリの手首を縛り上げるのに丁度よかつた。理由のわからないまま、後手に縛られた彼女は、きよとんと、曾根の顔を見上げた。然し、曾根が彼女の手文庫の中から一つの封書の束を持ち出して眼の前に突きつけた瞬間、彼女の頬はさつと蒼ざめた。その顔色の変化は、曾根の頭の血を逆上させるのに十分だつた。「マリ、この浜崎浩一というのは誰なんだッ」普段のたしなみを忘れた彼は、思わず荒々しくマリを蹴り倒した。「貴方そんな乱暴しなくても……」「うるさいッ、マリ、一体これはどうしたんだ、何んとか言つて見ろ、弁解出来んのか」一カ月の中、半分以上は出張しなければならぬ彼の職業である。抑えようとしても抑えること



の出来ない疑惑の雲は、妻のふてくされた態度によつて益々油を注がれる恰好になつた。「浜崎さんて、只のお友達じゃありませんか、貴方も案外ヤキモチ焼きね」「なにッ、この俺をからかうのか」と言いながらも、曾根はす早く、その封書に眼を通した。だが、それは至極平凡なありきたりの文面であつた。然し、そんなことは此の際何の気休めにもならない。人妻であるマリに馬鹿でない限り綿々とした手紙を送る者はないからだ。彼は押入れから行李を荷造りしてあつた麻縄を持ち出した。「只の友達であるか、そうでないかは、お前の身体にきいてやろう」平常の曾根に似合わない言葉も、嫉妬の怒りがさせる業であろう。ハンカチは解かれたが、グレイのスーツは手荒くはぎとられ、忽ち、麻縄で後



日本手拭でマリの口を固く括つた曾根は、仰向けに転つてゐるマリを抱き起した。乳房の上下をきつく縛り上げてある麻縄はぐつと締め、子供を生んだことのない自慢の乳房がその間から、むつくりと盛り上るように飛び出してきた。シュミーズの下から投げだされた二本の足も、嘗てダンスで鍛えただけあつて無駄のないむつちりとした肉づきであつた。縛り上げられて猿ぐつわをされたマリは今迄見馴れていた曾根の眼にも、初めて見る新鮮な美しさであつた。その美しさの前に、今迄の興奮状態も次第に潮の退くように平静に戻つた。そして、妻の見事なポーズを改めて見直すのであつた。

(おわり)

手に縛り上げられてしまつた。呆然と夫のなすがまゝになつていたマルも、初めて自分の置かれてゐる立場を自覚すると、大声を挙げて人を呼ぼうとしたが、その時早く鼻をつまゝれて、思わず開けた口の中へ、さつきのハンカチが押し込まれた。夫婦二人きりの生活とはいへ野中の一軒家ではないから、変に叫声など出されたら大恥をかゝなければならない。

マリはまさかと思つてゐた浜崎のことを夫に詰問されて、一時は只、呆然としていたが裸で縛り上げられてみると、夫の常規を逸した行動に対して無言の反抗を試みるように、じつと睨みつけるのであつた。





朝鮮答刑の図
〔刑事博物図鑑より〕

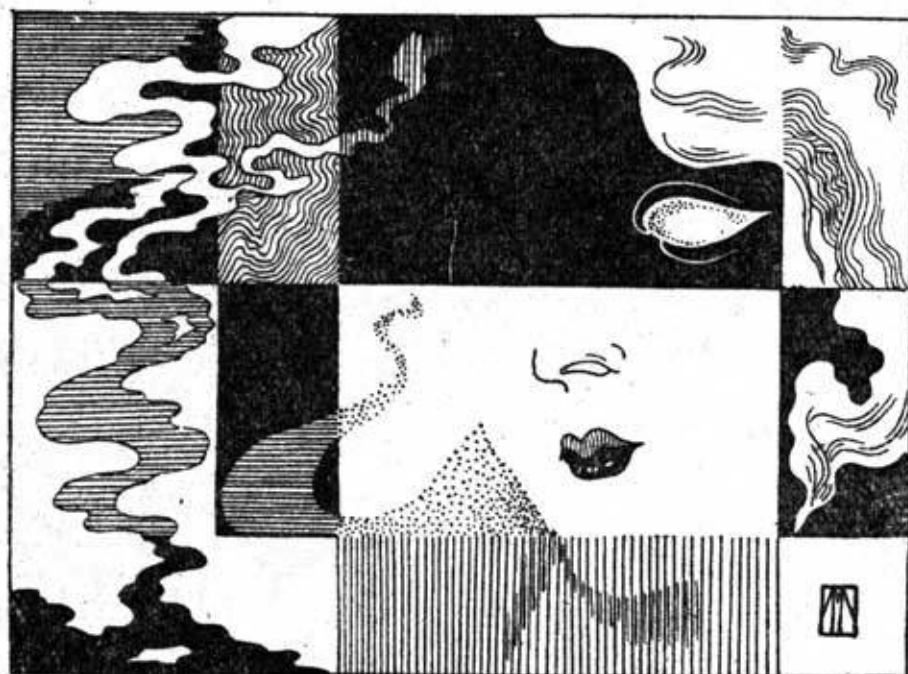
——特別増大号——

文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1955年 2月号

(第九巻 第二号 通刊第七十七号)



倒錯趣味は

果して背徳か

——誤れる倫理派に与う——

成瀬 亮

I

「ローマの休日」で突如、エクランにデビューした新星オードリー・ヘップバーンは第二作「麗しのサブリナ」でピッチリ脚線を描き出す闘牛士ズボンの魅力をふんだんに見せてくれました。：私は、肉体派女優マリリン・モンロー達にかわって「世界の

恋人」の椅子を占めようとするこの若い女優の、「ローマの休日」におけるヘヤースタイル、さらに次作の闘牛士ズボンに、ある微笑を感じられてならなかったのです。「現代は、美少年愛好趣味が世界中に拡がっているらしい」ということを。

典型的八頭身のヘップバーンは、実際の所身長も五尺六寸たっぷりあるらしいし、若い女性としては胸の隆起が貧弱であります。また眼の大きな、一文字の太い濃い眉も、「美少年」を感じこそすれ、嬋妍たる美女の感じとは程遠いものであります。(本当の美女とはエリザベス・テーラーやリタ・ヘイワースの容貌と姿体であります。)ヘップバーンが全世界の新しい昂奮を呼び起した本当の意味は、美少年愛好趣味——ソ

ドミイそのものではないのでしょうか。

清純、知的、軽快等々、ヘップバーンを礼讃する声の多くは、そのまゝ美少年に捧げる言葉ではないか、と思います。(こんなことをいうと、またぞろ、誰かに「この様な見解は、独断と、偏見と、誤りが内在している」とお叱りを受けそうですが、元来倒錯趣味そのものは、官能と感覚による耽美であつて、著しい個人差を生じるのはやむを得ません)

三島由紀夫の「禁色」をお読みにになりましたか、などとの質問は今さら失礼に当るかも知れません。倒錯趣味を、風紀を乱すもの、倫理道徳に背くもの、とばかり攻撃なさりたい、いわゆる「フロックコートとシルクハットの好きな紳士達」や、青少年に芳しくない影響をあたえるもの、と柳眉を逆立てられる淑女達だって、オードリイ・ヘップバーンの新しい魅力の根源が、従来の官能派・肉体派の女優達の放散した脂臭いエロチシズムとは全く別種のものであることは御承認下さるでしょう。…決して不潔でもなく不自然でもなくむしろ快く受け入れられる、ということ、それがソドミ

イの本質だからなのです。

旧約聖書の中には、たしか「汝、女を犯すごとく男を犯すなかれ、順をして逆の用をなさしむるなかれ」という意味の戒律が書かれているように聞いております。皮肉にも、二十世紀の映画は、ヘップバーンという女優をして、「順を逆の用」たらしめて新しい魅力を生み出しました。しかも、それが、いわゆる「女の女らしい魅力」をも駆逐しつつある現実はどう解釈なさるでしょうか。私の話はここから始まります。

II

ところで、倒錯趣味そのものが、直接的な性衝動を避けた微笑ましい愛の遊戯であり、社会的に別に非難攻撃を受けるべき筋合でないにもかゝらず、そうした倒錯心理や倒錯行為について、絶えざる抑制機能や、羞恥、屈辱、敗北などの感情に悩まされやすい、という理由はどこから起るのでありましょうか。私はそれを、われわれ自体が保っている古い倫理観念、道徳観念との痛ましい相剋であると見ております。本誌十一月号「集団心理に現われた倒錯の

考察」冒頭に述べたように、「現代の倒錯者及び倒錯愛好者のほとんどは、知能的、性的、生活的、どの方面から検討しても、変質・瘋癲・白痴などのように、著しく反社会的であつたり、秩序や風紀を紊乱せしめるような劣弱者ではない。」さらに「いや、むしろ、社会的、家庭的には、善良で謹厳な敬愛すべき紳士淑女が多いのだし、自己のひそかな倒錯傾向に対しても絶えざる自制と反省を試み、歓喜に伴なう羞恥と屈辱の苦汁をしたたかに味わっているのである。」ということはまず誤った見方ではあるまいと思っております。逆説的な云い方かも知れませんが、こうした劣等意識は現代知識階級の共通性であり、これあるが故に、倒錯趣味の反社会的逸脱を防ぐブレーキの役目を果たしていると見てよいのではないのでしょうか。

III

さて、一体倫理観とか道徳律などというものは、それこそ「万世一系、神聖不可侵」というような權威を持つものでしょうか。決してそうではないのであります。倫

理道徳ぐらいその時代によつて変遷果しないものはありません。「男女七才にして席を同じくせず」という封建道徳から云えば、現代の男女共学制度など言語道断の悪業でしょうし、「不義はお家の御法度」論から云えば、職場結婚や職場恋愛など、もつての他でしょう。「三年にして子なきは去る」倫理から云えば、財産分与を要求する離婚訴訟などまさに氣違い沙汰と見えましよう。逆にそうした古い倫理道徳を、現代のわれわれは、人間の自由と尊厳を冒瀆し、男女同権の民主主義を破壊する最も危険な反動思想として強く反対いたします。一体いずれが正しいのか、これは貸すに時間を持つてする他ありませんが、一たん死滅した倫理道徳が息を吹き返す可能性はほとんどないのが歴史の必然であります。

としますと、倒錯趣味を非難攻撃する派の人々、あるいはひそかな屈辱・敗北・羞恥を自覚せしめているわれわれ自体の倫理観なるものも、やがては急激な転換を示す日が来るのではなからうか、ということも当然考えられてくるわけにあります。それは必ずしも人心の救いなき腐敗墮落した世

紀末現象とのみは云い切れないはずと思われます。

IV

奇譚クラブの発行されている堺という都市は昔から変った人物を生んでおります。古くは千利休、隆達、明治に入って村上浪六、それから、銘記すべき日本のジョルジュ・サンド、すなわち女流詩人、与謝野晶子女史であります。この早熟な才色兼備の女性が、青春の血潮そのまゝを詠い出した処女歌集「恋衣」一巻の絢爛たる恋愛讃歌は、永遠に記憶さるべきであります。中でも、

「柔肌の熱き血潮を知りもせで道を説く君さびしからずや」

という一首は、明治三十年代の封建的倫理道徳に対する徹底的な抗議と揶揄を含んでおりますし、明治三十七年、日露戦争の旅順攻防戦たけなわの最中、彼女が朗々と詠い出した一篇の詩「君死にたもうことなかれ」が、明星に掲載された時、その凄まじい人間生命の尊重、戦争否定の崇高さに対して、世人はごうごうたる非難攻撃を浴

びせたのであります。大町桂月の如きは、彼女を目して、「極刑に処すべき売国奴」と迫っておりますし、憲兵隊や警察の弾圧もいかに激しかったかも容易に想像できるのであります。が、今日、誰一人も、彼女の「君死にたもうことなかれ」の詩を礼讃しこそすれ、非難するものはないし、海外にも翻訳されて不滅の名詩とされております。私は、倒錯趣味を晶子の詩同様の高さにまで礼讃するものではありませんが、時代の倫理観の変化がもたらす影響の大きさを期待したのであります。

V

話を進めましょう。倒錯趣味を文学上の主義主張から見て行くと、どうやら、ボードレール、ランボー、ヴェルレーヌ、ワイルド、ボウ、日本においては谷崎潤一郎を代表とするデカダンス派の好んで描いた世界と一致するようであります。デカダンスというのは、官能が知性に比してより圧倒的に強烈であり、それ自身の軌跡を無拘束に描く状態でありますが、文学的には異常に鋭い官能、感覚、感受性の為、どうして

も、当面する社会の現実からは遊離した精神が、欲するまゝに欲する方向へ流れて行き、内容よりも形式や技巧が重んじられ、反社会的なイデオロギイと見られやすい病的、あるいは不健康な印象を与えるのであります。けれども、その一見不健康な背徳性のようでありながら、実は、「化石した社会常識」固定した倫理道德」に対する知的諷刺の鋭さを多分に含んでおります。いわゆる歌劇のピエロが観衆に嘲笑されつゝ、実はその数倍の嘲笑を観衆に投げ返しているのと同じように……。こうしたデカダンス傾向の生れるのは、要するに現実社会に自己のレーゾンデートルを発見できぬ精神が、孤独で内向的な自己自身の価値と秩序を創造してゆくことに他なりません。一言で云えば「官能による美の造型志向」とでもなりましょうか。これがいわゆる唯美（耽美）主義であり、デカダンスはその典型的なものと称してよろしいのであります。

どうやら、デカダンス派文学の特徴は、倒錯趣味の本質とピッタリ一致するようでありまして、サジズム、マゾヒズム、ソドミー、フェチズムなど、デカダンス派が

好んで作品の内容化したそれを、倒錯趣味の場合はナマのまゝ実践しているようでありまして、要は芸術化されているか、いなかの差異にすぎないようであります。

VI

谷崎文学には、官能があつて思想がない、というのが従来の定説のようになっております。なるほど、初期の「少年」「痴人の愛」から、現在までの谷崎文学、殊に「春琴抄」「武州公秘話」などには、同性愛、生首愛撫などがふんだんに出てまいります。そう云えば、われわれ日本民族の遺伝的な性格の中には、上田秋成の雨月物語さては河竹黙阿弥の劇作物などにある怪奇で夢幻的な倒錯趣味を愛好する気風が多分にあるようでありまして、知的、理性的な合理主義よりも、官能と感覚を尚ぶ不合理主義の方に惹かれがちであります。これは一概に民度の低さと軽蔑できないなにかの特殊な素因があるはずであり、倒錯趣味愛好が連綿として伝つてきたことを深く探求してゆくと、案外面白い民族性の研究になるかも知れません。非常に愉快な例は、

たとえばほとんど同時代に出版された曲亭馬琴の「里見八犬伝」と、十返舎一九の「東海道膝栗毛」であります。記録によりますと、この両作品は当時の民衆に爆発的喝采を博し、いずれも延々と続刊しておりますが、勧善懲悪を骨子として、健康そのものの倫理的説物のはずの里見八犬伝を、民衆が支持したのは、実は、その固苦しいお説教の中に挟まれた人獣結婚や、残忍な殺人や、美女の折檻というような倒錯趣味のためだったのであります。（むろん、西部劇そのものの八勇士の面々の活躍が面白いことも否定できませんが。）これに対して、弥次喜多という滑稽な主従（ドンキホーテとサンチョパンザを彷彿させます）の失敗だらけの旅行記が、きわめて卑俗でエロチックなことを書き綴りながら、当時の庶民生活の表裏、風俗を活写して、却って健康である、というのは非常に面白い対照であります。尤も、この弥次喜多という主従も、実は弥次郎兵衛という裕福な町人が、花水垂四郎という若衆歌舞伎の役者に惚れこみ、身代を食い潰した挙句、花水垂四郎（すなわち喜多八）と手に手をとって逃げ

出す、ほとぼりの冷めるまで長の草鞋をはくというのが「東海道膝栗毛」の発端でありまして、当時の蔭間（男色）愛好をハッキリ物語っており、やはり倒錯趣味とは切っても切れません。

VII

口を吸いたい敦盛の首（武玉川）

この句（十四字詩）の掲載されている俳諧武玉川というのは、慶紀逸という人の編集にかかるもので、家内喜多留（柳樽）がいわゆる川柳による選集、（略して今日「川柳」と呼びますが）であるのと同様、徳川幕府時代の風俗人情を知るのに必読の書であります。敦盛とはいう迄もなく須磨の浦で熊谷直実に討たれる平家の公達、若冠十六才の美少年であります。「口を吸いたい」とは「接吻したい」という意味。そうしますと、この句の作者は、遠い源平時代に思いを馳せ、敦盛という美少年の生首を掻き抱いて接吻したい、と述べているのであります。実の所、私はこの句をはじめて読んだとき、ドキッとしたのであります。

本誌十二月号「女の首狂崇」（加佐和天恩

氏）に見られる型の女首フェチシズムは相当共鳴者が多いと信じますが、この句のような、ソドミイとフェチシズム混合型は耽美趣味でもまず稀有ではないかと思われまゝす。（戦前、車次久一という同性愛者が相手の首を切断し、壺に収めて持ち歩いていた猟奇事件がありました。）敦盛の首を詠んだ句は、この他、熊谷はまだ実の入りぬ首を取り（家内喜多留）がありますが、

この方は未成年を「まだ実の入りぬ」とおどけて表現したのが山で、単なる詠史句にすぎません。ところが「敦盛の首」の一句には、倒錯趣味の本領とでもいうべき耽美性が実に濃厚であり、この作者は衆道（男子同性愛）の妖しい機微をつぶさに体験していたのではなからうかと想像されます。

予言者ヨカナンの鮮血滴たる生首に狂恋の接吻を行なう妖姫サロメの物語は有名ですが、美少年の生首に接吻したいと憧憬する句が今から二百数十年前の武玉川に発表されている事実は、倒錯趣味というものが、古今東西、人種の差別を越えて行われてきたことを立証する氷山の一角でありましょう。この句の背景にあるのは妖艶な美

少年を選りすぐった若衆歌舞伎であり、芳町に存在した蔭間茶屋であったことは申すまでもありません。ということは、衆道が今日ほど背徳視されず不潔視されなかった当時の倫理観の在り方を同時に物語っております。倫理道德の基準と称するものがかに時代に從って動揺するたよりないものか、思い半ばにすぎるとはいえないでしょうか。

VIII

耽美精神は前述のように、官能と感覚によつて、冷徹かつ低俗な現実面から、別の空想の世界へ飛躍するのであります。いわばロマンの遊戯といえましょう。ところがその官能なり感覚というものは個人差が非常にひどいのでありまして、最大公約数的な水準とか規格とかの設定は至難の業であります。主知的な合理精神では倒錯趣味の本質を把握できない理由もここにあります。たとえば前述「女の首」耽美を例にとりまして、（吉川英治著「新平家物語」ちげくさの巻）遠藤盛遠が、愛人袈裟の生首を掻き切つて小脇に抱えて放浪の後、夜

明けの山頂で、その生ける面影を求める条を読みますと、見る影もなく崩れ果てた一個の腐肉の惨めさに「わが恋せしは所詮このものに過ぎなかったか」と、涙も出ずに長嘆息を洩らすし、やがて出家遁世を志すことになるのであります。見果てぬ甘美な夢に悩むのも、また、人間愛慾の儚さに嘆くのも、共にいつわりのない人間そのものゝ宿命なのかも知れません。しかし、官能や感覚にはもう一つの型があります。少し私自身の経験を述べまして御参考に供してみましよう。私の以前の住居は国鉄路線に程近く、しかもどうしたのか、自殺や情死の多い個所だったので、若い青年男女の轢死体をしばしば目撃したのであります。轢死体というものはほとんど全身バラバラになり、肉挽器にかけた肉片のような惨状を呈しますが、自殺や情死のあとに雨が降りますと、血潮や脂肪がすっかり流し洗され、若い女の首などは、マネキン人形の首を転がしたように実にきれいなものになります。尤も大概は（たとえ覚悟の自殺や情死とはいえ）首を轢断された断末魔の苦痛のため、カッと半眼を見開き、歯を嚙

みしめた怖しい形相のため、慄然とするのであります。が、パーマネントをかけ、口紅を塗ったあとが生々しく、しかもイヤリングをつけたまゝレールや枕木に転がっていたりすると、なにかゾクッとするような一種奇妙な衝動や魅惑を感じさせられます。もちろんこういう変死体は警察の検屍がすむまで現場から動かすことは出来ませんが早朝でまだ誰も発見していないような場合、棒切れや下駄で、転がしてみたり蹴つてみたりしたことがあります。あるときには、髪の毛をつかんで提げてみたこともありますが、肩から切断された一個の生首というものは、実に驚くべき重量でありますし、またその石とも氷ともつかない冷たさというものは、ゾッと背筋に冷たさが走るような感じがいたします。こうした現実の女の生首というものは人間の一部分というよりも全く非情の物体そのもので、決して愉しく妖しい倒錯耽美の対象にはならないものであります。

官能や感覚の個人差は実際問題として、こんなふうな開きを見せてまいります。生首愛撫の夢とか、人生の無常観をたとえ僅かは持っていて、現実の生首の重量や冷感がそうした夢を吹き飛ばしてしまう、というところ、現実の前に夢がもろく崩れ去る事実は、私の官能や感覚が冷たい理性判断に負けてしまうからでしょう。尤も、それが自分と縁もゆかりもなく、どこの誰か名前も知らぬ女の生首だからそうなるので、もしも、自分の恋人とか親しい女友達の首だったらどうなるか、は別の問題となります。が、しかし亦、女の生首を非情の一物体に過ぎぬ、とする私の冷酷さに対して、「死者に対する礼を欠くものだ」という別の方面からの背徳を責められるかも知れないのであります。

Ⅳ

人間が「愛する」ことは人為の法律や、宗教や、倫理道徳などで律し切れないことでありましよう。いかなる権威でも「愛せよ」とか「愛するなかれ」と命ずることは不可能であります。「何を」「いかに」愛するかは、全く、われわれ個人の選択の自由であるべきであります。倒錯耽美の精神の根源も、「何を」「いかに」愛するか、

に尽きております。Aが異性を愛し、Bが同性を愛する。これも選択の自由でありま
すし、また、Cが接吻と舞踊の方法で愛
し、Dが打撃と緊縛の方法で愛する、とい
うことも個人の嗜好と趣味によるものであ
ります。AとCが正常であり、BとDが病
的である、とは一概には云えないでありま
しょう。要は愛する「対象」と「手段」の
差異にすぎません。況んや、AとCはきわ
めて倫理的行為であり、BとDはきわめて
危険な背徳的行為である、などというのは
滑稽至極な見方でありまして、倒錯趣味を
強く否定し排斥する派の人々の口吻には、
前述の与謝野晶子女史のヒューマニスチッ
クな香り高い反戦詩、「君死にたまうなか
れ」に対して、「極刑に処すべき売国奴」
などと、さわぎ立てた大町桂月輩の低俗さ
が、しばしば、こもっているようでありま
す。ただし、そうは云っても、われ
われは互いに社会生活を営んでいる以上、
たとえ、倒錯趣味が背徳的でも、風紀紊乱
的でもないと確信していても、あまりに強
烈な、刺戟的な、興味的な面で倒錯趣味礼

讃をやることは、やはり無用の摩擦や不測
の衝突を招きやすい、ということだけはく
れぐれも自戒していたいものであります。
こうした特殊の倒錯趣味に対して、深く暖
かい理解と支持を獲るためには、なるべく
穏健で粘り強い啓蒙の努力が必要なのであ
りますから。

X

「倒錯趣味は果して背徳か」という問題
は、こゝにおいてははっきり「否」という明
確な解答が出て来るのであります。

が、さて、倒錯趣味について、もう一つ
のかなり手きびしい質問が待ち受けており
ます。すなわち、「倒錯趣味は社会心理か
ら云えば逃避に該当するのではないか」と
いう問題であります。倫理性の問題が主と
して、守旧的教育者、宗教家、婦人団体な
どから発言されるに對して、この方は主と
して進歩的な思想団体、労働組合方面から
発せられる声であります。

今日の資本主義社会の矛盾と圧迫の許に
おいては、きびしい環境の圧力に押され

て、現実面から遊離した別の世界に満足や
慰安を求めようする態度が一般にあり、空
想や娯楽や抽象観念などへの心理的逃避が
かなり拡がっているのであります。これ
は、労働階級、無産階級などの前進と建設
に向う気力と思惟を著しく阻害いたします
し、最もきびしく戒めなければならぬプチ
ブル的脱落の態度だ、とされるのでありま
す。無産労働階級のとるべき方法は、そう
した矛盾や圧迫から逃避することではなく
むしろそうした環境の変更（社会組織の
改革）をめざして、積極的な攻撃を開始す
べきだ、ということであります。

この鋭い質問の矢面に立つて、「倒錯趣
味」をいかに説明し、「逃避にあらず、脱
落にあらず」と立証するかが、倫理性云々
の問題よりはるかに重大なことではなかる
うか、と私は思うのであります。これにつ
いてはいずれ稿を改めます。

【註】 本稿に対して御意見をお持ちの方は
お寄せ下さい。

（編集部）



鼻責めについての實驗

古 田 吉 郎

一

七月号の北谷さんの「鼻責め」を興味を以て読みました。更にこれに付け加えて実験した例を挙げて、この「鼻責め」愛好者に送りたいと思います。誰でも初めはクリップ等にて鼻つまみの責めをやります。それから「鼻つまめ」これも種々ありますが、皆様既に各種の責めを考案して居られること、と思います。最後に到達するのは「牛の鼻環通し」であろうと思います。此の鼻環を通して自由を奪われると、大の牛でさえも柔順に従うことです。此れを利用してあらゆる責めを強制出来ますし、又、その苦痛も倍加して、その

変化、奇を求めることが出来ます。これは充分にサジとマゾの両者を満足させることが出来ます。尚、此の「鼻環通し」の穴は決して他人より普通にては見られませんから、その点安心です。もともと、北谷さんの鼻翼の上から環を通すことについては、常に奇を求めて居られる方に良いと思われます。この場合はオリシピックの五輪責めというのが面白いと思います。

二

先ず「鼻環通し」の準備です。硬目の太い銅線（稍柔軟性のあるもの）を十五纏—二十纏位の長さに切つて両端をよくヤスリにて研

磨し、尖端をとがらせて環の型に丸める。この環を初め稍拡げて鼻の障子の一番薄くなつて居る所に両穴より入れて障子に当て、徐々に強く締めてゆく。最後に、更に環を強く締めると、障子を突き通して両側に環の先端が出て、牛の鼻環が出来る（第一図）

次に、よく通つたならば、より長く通つた側に強く廻して行くと第二図のようになり、鼻環通しが完成する。これに紐を通して引張るのである。この「鼻環通し」はさして苦痛ではなく、簡単で一回で完成するからおすゝめします。さて、一度通しておくことからは容易に同一の個所にて通るようになり、常々

通して強く引張って居ると、次第に通した穴が大きくなり、又、障子も強くなつて来る。間もなく牛につける本物の真鍮製の太い環が通るようになる。この鼻環の両端が互いにネジになって居るのが取り外しが簡単で、取れなくなる心配もないから良い。

三

牛の鼻環を通して責める方法として種々あると思いますが、二、三の實際例を示すこととし、皆様にて大いに研究してこの責めを活用して下さい。

(1)、「牛責め」四つ這いにさせて牛にし、重いものを背に乗せるか引かせるか、或いは成るべく前進を困難にしておいて、鞭にて追いながら無理矢理に鼻環の紐を引き廻す。

(2)、「海老責め」にも利用出来る。鼻環の細紐を充分に引き締めると、完全に頭が足部に密着して海老責めの効果を大ならしめる。更に強く締めて行けば鼻柱も伸びて、その苦痛は更に耐え難いものとなる。男性の場合、更に面白くすれば Testicles

を紐にて丸く緊縛し、鼻環を通して締め上げると顔面、特に口が接近して、その効果は更に大きい。

(3)、「鼻吊り責め」梁に鼻環の細紐をかけて、足を爪先一杯になる程度にて吊り上げておく、この際、両手を背中にて縛っておく、十分もたぬ中に足のふくらはぎが痛くなつて、遂には足の感覚がなくなり、重心位置がとれなくなつて鼻に全体重がかゝつて来る。

その苦痛のために汗を流して苦悶する。

(4)、「鼻の石吊り下げ責め」初めは鼻翼、障子の強度に依じて次第に鍛練して行くのであるが、間もなく二、三貫目程度の重量物を鼻だけで楽々と下げて歩くようになるものである。最初は空のバケツを下げて、段々に水を入れて行けば重量の変化が出来て良い。このようにして重量物を下げさせると、その苦痛のため目から止め度なく涙がしたゝり落ち

鼻腔から涙と粘液が牛のヨダレのように出て来る。次第に重量物を増して行くと、遂には両側の鼻筋が目の下から下方に明瞭に浮き出て（俗に云う鼻筋が通つて来る）顔は真赤になり、大粒の汗がほとばしり出る。

(5)、「吊り責め」に利用して、更に苦痛を増大させる。背後にて縛した両手首の細紐を充分に吊り上げて、全く梁に吊すか（所謂吊り責め）爪先立ち程度にて止めて、鼻環に適宜の重量物を（実験には二貫目の石を下げさせた。）下げさせるのである。此の責めは吊り責め自体が苛烈



なものである。間もなく苦悶を始め失心してしまふ。此の際、吊り下げた石等を振子にして左右に振ると、苦痛は直ちに増大する。尚、男性の場合には更に苛烈なる責めを付加出来る。即ち、右の責めに加えて Testicles を紐にて丸く緊縛して、その紐の端末に更に重い石（実験にては五貫目）等を括りつけて下げさせる。そして、これを前後に振子にして石を振り動かす。此の際、両足を拡げて足首のところで棒を渡して縛り固定する。見る間に重さのため面白いように、その位置は伸びて下って来る。そして初めは赤紫色に、次いで暗黒色に、遂には鉛白色になる。鼻柱も重さのため伸びて下唇の下方に迄下って来る。

扱、Testicles 責めについては幾多の責め

の実験例を持って居るので、適当な機会に又発表することとするが、此の場合、相当に痛めつけても、例えばこの伸びきったところを鞭或は棒にて叩き上げても、又鉛白色にして比較的長時間放置しても、縛めを解けば元に復すもので心配は無用である。この責めは圧巻中の圧巻で、如何なる剛の者の「マゾ」でも到底耐えきれぬものではない。

四

「鼻棒通し」の責めについて述べると。

(1)、此の責めも又面白い。箸等を通して第五図のように垂直にひねってゆく。これも相当に苦痛である。垂直より更に約二十度位はひねる。鼻の穴は横向となり完全にあぐらをかいてしまふ。二本通して互いにX印にひねってもよい。この鼻棒通しも鍛錬次第で随分太い棒が通せるようになる。南洋のパプア族の女等は良く太い棒を通して、殆んど口にて呼吸している様を風俗写真にて見るがあれである。

(2)、ネジを切つてある金属の太い棒を通して座金を入れ、鼻翼を押えてナットを締めて行くと、鼻腔が狭くなり次第に呼吸が困難になって来る。そして呼吸量を増大させるために過激なる運動をさせるように、紐にて引き廻すと効果は大きい（第六図）

(3)、二頭、三頭引きの牛車（今迄の説明は皆実験例であるが、これは空想である）。一本の太い長い鼻棒を二人又は三人を四つ這にさせて鼻に通すと、鼻面が揃えられる。各牛の背から両脇下、胸と下腹部、それから首にも革のバンドを締める。頸部より背筋を通つて尻より太いバンドを（男牛の場合は Testicles を両側より挟むように二本のバンドを）廻して腹部に、そして胸部のバンドに取りつ

ける。そして、それ等の革を強く締め上げると、すばらしい曲線美が出来上る。後部の牛車の箱枠へ鼻棒に取りつけた革バンドを接続する。そして両腰角よりも革バンドを取り接ぐ、鼻には棒の外に更に鼻環を通して左右に長い紐をつける。御者は御者台に乗って鞭を振る、鼻環の紐をさばきながら背、臀部を鞭撻をする。勿論、牛達は一米もまとわれない裸体にする。又、男牛は全部去勢してある故に、此の際 Testicles は去勢と称して堅く緊縛し、その紐を充分に前方に引張り、首の革バンドあたりに括りつける。或は重量物等を吊り下げて苦しめるようにすれば、去勢の意義が出て面白い。かくして異性の客人を乗せて引かせるのである。以上、二、三の実験例と空想した責めを記しました。皆様の体験の結果も発表して下さい。誌上に掲載の時は削除部分も多いと思いますが、実際に責めた例です。十月号の目次のカットの左側の図、鼻環を通して後手に縛された女、それから飛田良二氏のアイデア中、三輪車は素晴らしいものです。特にイヤリングと組合せたのはとてもよい、イヤリング責めも面白いです。

【編集部註】本文は古田氏の実験例として掲げましたが同好者の御意見を頂けば幸甚です

『姑くう娘にやん來らい了ら』

白

金

紅

次

滝

麗

子

画

了 来 娘 姑

『ねエ、それからどうしたんのよ』

『どうしたって？ 大方苦力か馬車挽きかの嫁さんになったろうよ、きつと』

『だって、随分惨酷な話ね、本当か知ら』

『本当らしいね、ちゃんと、これ、ほら大公報記事翻訳抄よりーって書いてあるんだ。支那語は珍ぶん漢ぶんだけどさ、面白いだらう』

『ちつとも面白くないわ、だけど、どうして連れて来るのか知ら、そんなに大勢？』

『そこが商売さ、網を張って、それからそれへと仲間があつたりしてさ、簡単らしいね、

すぐ騙されて、君みたいにさ』

『冗談云わないで、あたしは大丈夫、片っ端から手脚にかみついてやるわよ、けど、あなたでもやる？ お金になるって云ったら……』
『さあね、きれいな娘さんだったら判らないね』

『あら嫌よ、嫌よ、そんな眼付きして、男って嫌やな気性ね、みんな。お紅茶冷えちやつたわ、熱いの、いゝでしよう？』

十月と云えば、東京の街はそろそろ寒くなる。菊人形だの紅葉見物だのと都人士が浮かれ出るのをよそに、油臭い工場から、ひけて

帰る途中の喫茶店すらん亭は、紅葉に優る私のオアシスの一つでもあった。三人いる女給のピカ三位と申せば美醜を通り越して肉体系か御愛嬌か何かの取り得がなければならぬ、御多聞に洩れずあいそがよくて肉体美しい赤い帯揚げに白エプロン姿が重量感で押して来る処が、私の気を引いたポイントでもあった。今晚は主人が買出ししか何かで留守、あとはマントを着た学生がおとなしくレコードを聴いている閑散さ、週の始めの静けさという店内、だから「かおる」嬢と寸刻が楽しめる。と云う寸法である。

『ビールの樽って小さいんでしよう、コロコロしないか知ら…』

『小さくたって入れようと思えば入るさ、女は其処がいゝとこだよ…』

『だってお婆さん死んだ時、ポキポキ折ってたわよ』

『おいおい、生きてるんだぞ、こっちはさ』

『ずっとそのまゝか知ら？』

『そんなことはないよ、船へ積み込めばあとは自由だろうよ、じゃないんだ、えゝと、』
出ろノ あまッ』と一人宛身体検査をして用便に行く奴に仲間がついて暗い船倉の片隅にあるオマルを指さし、あこで会図、つてとやっぱり縄付きなんだネ、美衣ってあるんだからみんな長襦袢一枚らしい』

『嫌やあね、おゝ怖い、それで何日目位に着いたんでしよう』

『舟山列島を経て、と、広東港は—五十日—途中で塩や米をどうかするといふから、そうなるんだらう。だけどこれは冬らしいね、甲板で船員の一人が滑って雪だらけになったと書いてある。ビール樽を岡上げする時にさ』

『ねエ、それから先き、マダムが邪魔したん

だからあんたの話を聞きそこなったのよ、面白いから聞かせて—』

『おいおい冗談云うなよ、さっきはおゝ嫌だと云ったじゃないか』

『怖いけど聞きたいの、そこが女同志』

『今日はよそう、ねエ、それはまたの事にして本式の支那料理食べたいと思わないか、いつか食べたいって云ったらう。ハマで安い店を知っているんだ』

暦の上で双十節も妙な巡り合せだが工場は休み、女房はお産で信州帰り、おまけにかおる嬢は店の大掃除の翌日とあってまたこれお休みと来たので、ハマで安く食わせる店知ってるんだと見得を切った手前、品川から先きは正直な処初めての外出行と相成った次第で、仲秋ならぬ汗をかいたのは満艦飾の彼女のせいかも知れない。—遠出じやないのだから羽織をやめたわよ、でも海岸通り走っていると寒いわネ、着て来てよかったわ—と厚っぱい襟のあたりを直すかおるは今日のアプレ女性と違って、やっぱり大和撫子の部類に入るのだらう。

桜木町か何んでも電車が止まってドヤドヤ人が出るのにつれられて駅を出ると潮くさい匂いがプーンと鼻を突いたが、幾つかの町角

をぐるぐる廻って少々街なみが変わっている横町から露地を入って—一寸お尋ねしますがあの—で四つ目の電柱を右に折れると、上の電灯が故障で『子飯店』と読める料理屋が、陳さんの勤める店だそうさ。

『よく判りましたネ、こゝの町は仲々判りません、初めてだと…サア、お上んなさい、いや、綺麗な姑娘さんも一緒に…サア、遠慮は要りません、二階にしましょうか』

陳さんのでつぷり太った身体付から勢一杯の愛嬌がこぼれるのも、家全体が脂でかたまつて見るもの触れるものがエキゾチック風なのは当然としても、家の内外が馬鹿に騒々しいのは今日が双十節を祝う日だそうさ。

『今日はゆっくり遊んで帰って下さいよ、支那のお祝いの日ですよ、処で何御馳走しましたよ、支那そば、ラーメン、チャアハンより上等な、まあお任せ下さいよ、ハッハッハッハッ』

『陳さんのお店も仲々繁昌ですね、お国の人が多いんでしよう』

『いや、日本の方、それも景気のいゝ船員さん、多いですね、まあ色々な国の人來ますよ。今日は特別賑やかです、夜までいらつしやい、爆竹や龍の踊りで一晩中賑やかです』

一テーブル幾らの料理であるまいが、半分先方持ちで御馳走する支那料理は物珍しく箸の動きもどかしい―のはかおる先生ばかりでなく第一食べ方を知らない私にとっても頗る苦手である。

『処で、陳さん、この間お国の新聞ですが、これは珍らしい、いや奇妙な商売って、今でもあるのですか』
『何です、あゝこれですか、いやこれはあるかも知れませんよ。私の出身地ですよ、広東



る。

『ねえ、紅さん、さっきのお話、いつかのあれでしょう、怖いけど、こんな処に連れて来るんでしょ、支那でもさ』
『さあね、いゝから陳さんに聞いて御覧』

は。だからこの料理、本当の支那料理北京料理と違うでしょ。判らない？
教えましょか、これ漢文ですね、ははこれ、怖ろしい話ですね、綺麗な日本娘さんともいゝからね、そうです、五百元って日本の、サア何円になるか……』
と商売が商売だけにすぐ金勘定になるのはいゝが、根が海賊でないだけに至極他人行儀で笑っている。『飲めるでしょ』で進められた支那酒は少々きついと見えて『初めました』が『陳さん』と仰言るの、とてもおいしくって腹一杯戴きましたわ、え、とても結構、それに東京と違って面白いわ』
と帯のあたりを撫で、口をふくかおるの顔は耳かくしのあたりまで赤く色付いて、天井から長くぶらさがった灯に次第にほぐれてこの調子で行けば、さくら音頭でも踊りかねない風情である。

『嫌やあね』

『何んです？』

とテーブルの間を縫って忙しく指図をしながら顔を出した陳さんが例の調子で話を受取ったが

『あゝあの話、昔の話ですよ、今無い、あんたみたいな美しい人、あぶないですよ、ハッハッハッ』

『でね、陳さん、この人、仲々芸人ですよ、ほら、セリ市ね、あれ、面白ろがっているんですよ』

『紅さん違うわよ、あたしの云ったのは』

『云ったのは、お嫁さんになるつかと云うんだろう、でね、ビール樽に詰められるのかと聞くんですよ…』

『ハハッハハッ船に積むのね、そうらしいです、ね、一つビール樽見せましようか…』

料亭の薄暗い階段をとんとんと降りて、人がやっと通れるか通れないかの狭い廊下を用心して湿っぽいドアを開けると、其処は料亭の倉庫兼事務室になっていて心持ち温くスイッチをつけるとあかあかと電燈が点いて悪く批評するならば何か密談か賭博でもする部屋とも思われた。

陳さんの指さすあたりに成程ビール樽が積

んである。

『中は奇麗です、洗ってありますから、あの話しのビール樽と違いますか』

と陳さんはニヤリとする。

『割方大きいものですね、どうだい、かおるちゃん、一つやってみるか…』

酒を飲んだ勢もあったが、店と隔離され、しかも存外道具が揃っているのは勿怪の幸いとはかりーアルコールはどうやら男女の性を麻痺させるものらしい。

『あたしやってみるワ』

こうなつちや俄然様相は一変するのが当然で、方幾尺の何某しの坪が忽ち演劇ならぬ一大秘密境と進展して来たから、ハマ行は飛んだお土産付で事が運んだのである。

『じゃ、かおるちゃん誘拐されて来たんだよ、いゝかい、そこから始めるから』

『いゝわ』

『それじゃーと…』

と私は咄嗟にそこらあたりを探し、縄だのロープ、テーブル、台と万事が急拵えの間にあわせ物。

『処で陳さん、あなた今忙しい？ あの話を地でやろうって云うんですよ、えらくどうも散らかしてしまつて』

『わたし、あとで、また来ます。部屋、かまいませんとも、ドア、しっかり閉めときましょか、ハッハッハッハッ、支那人、必らず要る、よろしまた来ます』

と陳さんは愉快そうに笑って部屋から店の方へ出て行った。

『あたし、すっかり酔っちゃった、ふらふらしてゝもいゝ？ 帯だつて窮屈だわ、じゃ、どうするの？ このまゝでビール樽の中へ入っちゃうか』

『おい、よせよ、まだ早い、誘拐されて来た娘さんはこうしてね、こういう具合に…』

『痛いわよ、着物のまんまで、両手を？ 嫌やあねエー紅さんたら』

『こうしなけや感じが出ないだろう』

とかおるの錦紗の袷の上から細いロープで胸から帯の上にかけて二巻かける。そして縄尻をピンと張って

『サア、密輸船の波止場の倉庫に運ばれて来た、と思うんだよ、いゝかい、芝居は下手だね…』

若しこの場に素晴らしい演出者が居たら雰囲気満点で恐らく好事家垂涎のシーンが予期以上の成果を以て展開したに違いない。

『ヤイヤイ静かにしろ、お前たちはなあ、泣

いたって、喚めいたって、どうにもならネエんだぞ、おとなしく俺等の云う事を聞くんだ」

『嫌やです、帰して下さい』

『帰えせ？ 冗談も休み休み云って貰おう、高い金で買って来たんだッ、しばらくそのまんまで辛抱しろよ、その内、楽にしてやる』
『親方、どうやら船からお迎えがめいりやした』

『そうか、じゃすぐ仕度しな』

で後手に嚴重に縛られて土間に泣き崩れている娘を一人宛曳き出して来る。

『サア一寸の辛抱だッ、着物のまんまじや暑苦しくってしようがネエ、脱ぎな、え、おい帯を解くんだッ、恥しい？ 今となって恥しいも糞もあるまい。サッサと脱いだ脱いだ』

かおるは縛られて縄目のあとのついた両の手をさすりさすり、西陣まがいの名古屋帯を赤の帯揚げ、矢模様の帯締

めと共に一まとめにして錦紗の袷をしぶしぶ脱いだ。パアと目も覚めるような朱の地に白く萩を浮き出した単衣の長襦袢は、

『借り物かい？』と云えば

『うゝん、あたしのよ、どう？ 驚いた？』

と、この期に及んで頗る茶目氣だ。

『ようし、次、行くぞ』

『この野郎、来る早々から世話をやかせやがって、サアおとなしく両の手を後に廻すん

だ、何にっ？ 幾らに売れるっかて』

『親方乱暴しちやこわれますぜ、向うへ着かないうちに、五百元のもとが割れますっぜ』

『心配するな、細工はりゅうりゅう仕上をごろうじだ。金のかゝった玉は、鉄ッ、細い縄ねエか、それっ、それ借せ、姐さん、泣くんじやネエ、綺麗なおべゝが汚れネエように、おっと、そうもがくんじやネエ』

と女の両手首を合せて縛り、二の腕から乳房にかけてギューと締め上げると、芝居とは云っても力が入り過ぎたらしく、

『本当に縛るなんて、紅さん、その位にして』をかまわず『あまつ子喋らネエようにこれでも嵌めてろ』

とハンカチを丸めて口に押し込み、布きんみtainな布切れで口一杯狼轡を噛ます。

『鉄ッ、お宝は重いぜっ、手を借して呉れ、どっこいしよと、樽だ、樽、早く詰めんと危ネエぞ』

一人二役でずっしりしたかおるの身体を両手で抱き上



げ、邪魔になる長襦袢の袂を前にはたいて足袋はだしのまゝを樽の中へ入れようとするが、お棺と違ってそうは易々入らない。後手に縛られた痛さを眼に訴えるかおるの哀れな顔付はあせればあせる程裾が割れてピンクの蹴出しがポロリとこぼれ、その下から真赤なメリンスのお腰までがチラチラし始める恥かしさに、次第に紅潮して来た。ふっくらとした両膝がお腹にぴったりにしつゝいて背中の中の伊達巻を掴んでぐつと下に滑らせるとスポンとさしも

の肥っちょの女の身体は待望の樽の中に収まった。が

『もう用はネエ、このまゝじゃ、ちょっと可

哀いそうだからのう、あとは、蓋をする許りだ』

『猿轡を脱ずすと

『折れそうよ、あゝ痛い、随分惨酷ね、びっくりしちやつた』



『どうだい、苦しいだろう…』

『ううん、だってこうやって船へ積まれたん

でしよう』

とマゾが同性への同情となって白い長襦袢

の襟にあごを埋めたかおるは潤むまなこに満

腔の媚を含めて私の顔を睨めつける。―

『サアあまッ、こゝは板子一枚下は地獄の海

のど真ん中だ、小便したかったら遠慮なく云

いな、親切なあんちゃんがおしっこの世話だ

けはしてやる、いゝか、判ったか、判ったら

樽から出してやるッ』

んが顔をのぞかせ、ニンマリと笑い乍ら入って来た。

『どうしました？ これ、入

った、はいはい広東の町、セ

リ市、ハハッハハッ、なかな

か熱心ですね、お手伝い？

飛んでもない、わたし、見ます

見ます、見せて貰います、い

けない？ 困りましたね、こ

れ台本？ では海賊になった

つもりで娘さん、支那語判ら

ない、日本語でセリ市、せる

処やりましょう』

『陳さん、ではわたしも支那

人あるよ』と場面が場面だけにそれに閉めき

った部屋がムッとする位い暑くなって来た

ので上衣を脱いで腕まくり、

『サアかおるちゃん、観念おし、いよいよ広

東の町でせり市にかゝったんだよ。この野郎

逃げようたって』とかおるの髪の毛を掴んで

お尻のあたりを一打ちたゝいて、豊満な身体

を台の上に立たせた。

『駄目々々、女逃げる、柱にくゝりつける、

それ、そこへ台持って行きましたよ』

陳さんのめくばせで籠だの秤だの掛ってい

る柱のそばに女を連れて行って、運んだ台の上にとっこいしよ、とかおるを乗せる。

『可哀そうだが、もう一ぺん、辛抱するんだ』

『女の人、眼かくし、眼かくし』

長襦袢の伊達巻が緩んで、ダラリと前があき、両手で柱を抱くよう

に後手に縛り上げられ、その上から小汚ない布で眼かくしをされたかおるは一寸見ても可哀そうである。

『サア、見物の皆さん、遠路はるばる日本姑娘来たよ、これ上等あるよ、まだ娘あるよ。買うか、サア云い値幾ら、幾ら、百元？ 飛んでもない百五十元、まだ、まだ、どうだ品上等、安くまけるよ、二百元？ 嫁さんならない、まだまだ、買わぬか……』

と陳さん元の商売は若しや？ と疑い度くなる

熱演さは兎も角として

『啓大人！ 日本姑娘、くわしいある、この人、姑娘いゝとこ話す、わたし替る、替る、この人、話すある』とうまい処でバトンを私に渡してしまったのには驚いた、陳さんもなかなか隅におけぬくせ者である。

俄か啓大人に扮した私は、如何に物好きでもバナナ売り見たいには口がもとらない。

『では、やるよ、日本姑娘、とても綺麗あるよ、これ日本着物、支那綴子より品上等、この着物めくる、桃色の布これめくる、真紅の布出る、これ日本婦人皆しめてるよ、これめ



くる、無い、身体白い、身体付きとても上等
おっぱいあるよ、子供出来る、よろし、お腹
お尻みな上等……』と支那様の柄でかおるの
要所々々を突いて見る。

『陳さん、それから？』と額から流れ出る汗
を手の掌で拭い乍ら聞く……。

『よろしよろし、大変うまいその通りです、
あと買う人出てくる五百元？　そこで手を打
つ、話まとまる、サア買う人、どうする？』

判りませんね、ですけど、支那人よく品物見
る、もう一度よく見る、やって見ましょか……』

私は台の上上って、柱に縛りつけられた
かおるの両手を解いて眼かくしを取り台から
降ろすと

『駄目々々、まだ女逃げる、もう一っぺん、
手をくくりなさい。そうそう、そこで……』

と陳さん、まるで自分が姑娘をさも買い求
めたかのように身振りうまく動かし乍ら

『耳あるか、鼻よろし、お乳上等ね、指、ひ
とふうみ、五本ある、胸、お腹、肉付いてる
よ、こゝ一番大切あるね』とかおるの長襦袢
の上から下腹部を……

『嫌やだーくすぐったい』

『ハハハッ……きものめくる、買う人、真剣
あるよ、笑っちゃ駄目、おかしくない、本当

にこゝ一番大切。ワハッワハッワハッ』

陳さんの脂切った太い指は真紅に燃えるお
腰の布端を掴んで、鼻面をうごめかして呵々
大笑した。

心尽しのシューマイのお土産を片手に爆竹
と嬌騒する街をぬけ出して帰途についた頃は
日もとっぷり暮れて心なし吹く夜風に裾を気
にするかおるはもう楚々たる大和撫子にかえ
っていた。こゝで蛇足ではあるが新聞記事――

――密航――樽詰――人身売買を愚にもつかぬ
穴蔵で身を以って罽毼氣を味った感想を要約
するならば、それは次のような潜在心理によ
って過程が説明出来るだろうことを付記し
て、ハマ行きのファイナーレとしたい。

『随分ね、断りなしに誘拐なんかしたりして
さ、女の人縛るって卑怯よ、奥さんだって、
減多に帯解かないものよ、失礼しちゃうわ、
いくらお酒飲んだからたって、そうね、あの
時あたし見境いなく酔っていたのかしら、御
免なさい、そうだとしたら……だけど紅さ
ん、あたしの長襦袢姿どう？　綺麗と思う？
なまめかしいか知ら……馬鹿ね、すぐ男の人っ
たらそこに行くのね、蹴出し、女のお腰見て
迷わぬ神はないってホホッ……あたり前よ、お
腹やお尻の出てるのは昔しからよ、ふっくら

して、嫌ね、また、そこへ行くわ、話を元に
戻して頂戴。ねエ紅さん、女って露出症か知
ら、ホホ……こんな言葉云ったりして、でも
面と向っちゃ恥しいわ、ううん、違う、だけ
ど女って男の人から裸にされるの本当は待っ
てるのね、あんたとこの間観た活動（映画）
そうじゃない？　あの腰元みたいにさ……』

好調子ならこの会話はさしずめ帰りの電車
が品川に着く迄続けなければなるまい。

『だけどさ、あたしも一っぺん、あゝやって
売られて見ようか知ら』

『いゝだろう、何んなら売ってやろうか……』
『馬鹿ね、すぐ相槌打ったりして……だから
あたしみたいな女がひっかゝっちゃうのよ、
でも支那人の人って怖いわ、あのまんまお嫁さ
んになっちゃうのか知らネ？』

『うんと可愛いがって貰うんだね、そうなっ
たら』

『だから紅さんは案外薄情だと云うの、女の
氣持も知らないで……』

『まあいゝさ、もうじき品川だ、シューマイ
でも食べて、またその着物脱いで、後手に縛
られて御覧よ、僕がかおるちゃんを買っ
ちまうぜ、序でにお腰の上から接吻したりして
さ、アハッアハッアハッ』

『お馬鹿さんね、紅さんは……ホホ……』

読者通信に現れたる

禪美愛好家の傾向

山口 幸 一

筆者が奇譚クラブに『美少年の秘密』『少年の禪美に就いて』を発表致してから、多くの読者の方から各自の考え方や御意見の手紙を頂戴した。それ等の方々の傾向を一応分類してまとめ上げて発表する事も、筆者に課せられた義務の一つであると考えたので、筆を執る次第である。

禪美については女性と男性の二つに分けられると思うが、土俵四股平氏やI・K氏の考えられている女性の禪美の方には私は関係がないのであって、此処に取扱う事にせず、本文は専ら男性の禪美について申し述べる事にする。

「少年の禪美」にて述べたように、禪にはサド、マゾ、ソドミー、アーヌ愛好等、広範囲に関連性を持っている着衣である事は、今更申す迄もない。多くの読者の傾向を分析してみると、一応、

- 一、受動的に禪をさせられる事を好む。
- 二、能動的に他人に禪を締めてやる事を好む。
- 三、禪姿の美少年の絵、写真、実物を見る事を好む。
- 四、常時、禪を着用する事を好む。
- 五、禪を解かれる事を好む。
- 六、禪を解いてやる事を好む。
- 七、禪をコレクションする事を好む。
- 八、サド及マゾの場の着衣として、特に禪

姿のものを好む。

以上に大別されると思う。この中五、六、七は稀であり、一の傾向が最も多く次に三、四、二となる様である。而してその対象として美少年が多い事は、各人が性に目覚めた少年時代に対する強い追憶の為である。

次に禪の種類であるが、六尺禪を好む人が最も多くて、色は赤及び白であり、特に赤を好むH・S氏及びS・O氏。白を好むI・Y氏、K・Y氏等があり、又H・S氏は黒い禪は却って嫌悪されるという珍しい傾向もある。其他の人は禪の色については格別制約されていない様である。又、相撲の禪について深い関心を持たれているT・Y氏やH・S氏は何れも受動的に他人から締めて貰う事や、美少年の相撲の禪姿に深い関心を持って居られる。

この事については十二月号にK・Y氏が責め絵アイデアとして「美少年による禪の締め方連続写真又は絵」を強く希望されて居られるが、他の三氏もK・Y氏と全く同じ傾向に思われ、禪美そのものがソドミックな要因が強い事であることから想到して、この傾向が最も多いものであらうと思う。同じくK・Y氏のアイデアである六尺禪を締めた美少年の緊縛、又は責めの絵等はS・W氏等も以前に一寸申し述べられている事であり、KK通信のS・Y氏及び切腹党のI・Y氏にも共通し

た傾向があると思う。

相撲禪について強く要望されているH・S氏の禪の色は白を好んで居り、黒は嫌悪している。K・W氏は相撲禪の色と少年の肌の色との対照美に重点を置き、即ち、色白の少年の股間には黒色の締込みが似合い、色の小麦色の少年には白色が似合うとしている事は、土俵四股平氏の意見と同じく、色彩的観点からの説である。

而して相撲用締込の生地は白ズック又は帯芯の入った黒縹子の厚いもので、十六才位迄の少年用としては巾一尺五寸、長さ十六尺位のものを四つ折にして、巾四寸乃至三寸五分位にして四重に廻し腹部が充分締る様に、又股間から尻に廻した禪が充分太く見える様な品が最良であるとしている。締める場合は直接か、又は下ばきとして晒の越中禪を尻の方を細くしてはかせるか、水泳用のメルマン禪を下にはかせても良いが、猿股又はパンツは絶対禁物である。而して締め方は職業相撲の禪と同様に正式に締めなければならぬ。(奇ク二十九年八月号の略図の如くする)

K・M君は外出時には水泳用の紐付の禪を常用し、自宅に帰ってから六尺禪に締め替える習慣である云うが、同君は未だ年少者であるので、常時六尺禪をしているとズボンの後から分るので、友人に対する羞恥心から外出の時には用いないと云っている。又、H・

S氏は越中禪に對しては、却ってマイナスの感じを持つと云うが、他にはそういう傾向の人は無く、禪であれば陸上競技用のサッポーターに至る迄プラスの感じを持つという人が多い。

稲垣足穂氏はその小説集「山風蟲」の中で神戸の山の手のある家の事を述べて、そこに集る少年達の為に緋縮緬の六尺禪を用意して居る若い主人の事を書いて

いている。同氏は又キヤルマタ即ちパンツの極めて短いもので、昭和の初頃一時少年の間に流行した事があったが、その辺迄をプラスの限界と感じて居られる様である。(昭和八年犯罪科学「少年読本」稲垣足穂)

筆者の感じ方は相撲禪、六尺禪を頂点とし



て越中禪、サッポーター、水泳用禪迄がプラスで、キヤルマタは極めて弱いプラスの感じで、パンツになると中性となり、猿股はマイナスとなる。

次に背景について述べる事とする。これは極めて重要な事で、背景の如何によってその

場景の美点効果が増倍されるし、半減されるものである。例えて云えば、赤いテールクロスの上に置いた林檎と、白いクロスの上に置いた感じとでは、人の眼に与える美的感覚は非常に違う。これは心理学的に云えば図と地の問題であるが、禪美の場合は更に観者の想像が加わるから重要な事である。この場については禪美愛好者ばかりでなく、裸体愛好者、女装緊縛愛好者にも同じ様な背景の条件が要求されるのであって、例えば野外の場とか、山中の場とか、河原の葦原の場とかいう客観条件が伴って、初めてその美的感度が高揚されるのである。

裸体愛好者でも浴場で裸体になる事については大した快感を伴わず、野外、山中という特別の背景が絶対条件として必要な事は、既に本誌にも屢々発表されている通りである。禪美愛好者も当然この背景を選択するものである。Who, Where,



Who, 誰が、何処で、どうしての三要素は、この場合にも必要なのである。T・T氏が少年時代に雨の降る中を衣服の尻はしよりをして、禪を露わに出して歩いた記憶を強調されている。T・M氏は少年が寝床の上で寝巻を着る、又脱ぐ時に着物の間より見える六尺禪について述べている。C・M君は本誌十月号

の八八頁にある少年の禪美の勇雄の禪姿の挿絵について関心を持ち、あの様な禪の締め方について質問を寄せられたので、筆者はお答えして置いたが、勇雄の禪姿が、C・M君にとって、どうして魅力的であるかという事を考えてみよう。

勇雄はあの場合、何の用意もなく無邪気にすぐ制服を脱いで、そのまま禪体になったのである。即ち、勇雄は服を脱ぐ前に既にあの腹巻付の六尺禪を身に付けていたのである。云いかえれば朝起床した時に締めていたのである。恐らく前の晩、入浴後に取りかえて就寝中ずっと締めていた事が想像される。この事実が大事であって、常時用いているという事が、あの場合の勇雄の禪姿に強い魅力を添えているのである。読者の想像力はその程度迄及ぶのであるから、だから背景がどの様に重要な要素であるかという事が想像されよう。T・M氏は「美少年

の秘密」(二十九年七月号)の雪夫が布団に寝ている絵について、同氏が少年時代の記憶にはつきり残っているといわれたが、あの場合も室内という場が背景としての効果を上げているのである。

本誌十二月号で初めて「禪をした少年」なる写真が掲載された事について、編集部の方針と、常に新領域を開拓せんと努力されている積極的發展性に満腔の敬意を表したい。この事実だけでも奇譚クラブが他の類誌と異り、益々将来、固定読者を増加せしむると共に、科学的文獻的価値を高めて行くであろう。

その意味に於てあの写真は成功であるが、背景という点を検討すれば、極めて自然の背景であり、魅力に乏しいものと考ええる。あの写真の背景が家庭の部屋、浴室、銭湯、或は学校の身体検査場という様なものであったなら、又、写真屋のスタジオの様に無地の背景なら、T・M氏の意見の如く、より数倍も効果が大きかったであろう。写真も勿論結構であるが、顔が現われないので画龍点睛を欠くくらいがあり、その点、十二月号のK・Y氏の説の如く「美少年による禪の締め方連続絵」の方が興味深いものと思う。

T・K氏は和服と禪の関係を申し述べているが、即ち禪を締めた場合の少年の衣服は、和服、特に単衣とか浴衣が好ましいとある。

T・K氏も全裸体の禪姿よりも、着物の間から隠見する禪の方が刺激的だと云っている。その場合禪の種類について云えば、十月号の英雄の禪の如く、腹巻の付いた六尺禪で前垂れの付いた方が良く(英雄のには前垂れがない)、常時締める為の禪である事を明示することが必要である。そうでなければ、水泳用等に一時的に使用するものと混同する恐れがある。常に六尺禪については常用という事に注意すべきであろう。相撲禪の場合は勿論、相撲がすんだら用いない。又、和服と云えば滝麗子氏画の新妻遊戯の如き、透視的画法で表現するのも面白いと思う。

禪を締めてやる事。禪を締められる事に就いての物理的感触と精神的刺激は、禪美の一つの基礎になるものであるから、その点をよく考えれば、『支度の図』も興味深いものである。例えば相撲支度、マラソン出場の支度、体格検査の支度、風呂上りの支度等は、非常に魅力的なものである。その場合、肉親の姉とか母親がその場に居合せれば効果は更に大きくなる。例えば母親に禪を締めて貰っている少年、相撲の賞品を姉に手渡している少年、マラソンが終ってパンツを脱ぎ、サッポーター一つになって母に汗を拭いて貰う少年。又、家庭の浴場にて母が新しい越中禪をかけかえさせる場面、という様な情景が好ましいのであるが、これは筆者の主観である。

から、参考迄に申し述べて置く事にとめる。次にサディスティックな面での読者の御意見の中で、禪姿の少年の緊縛及び責めについては、屢々KK通信にも発表され、又十二月号のK・Y氏も言及されて居る。これは単なる責めと異なり、禪を締めさせる事による責めとの自乗になるのであるから、当然その効果は大きいものと思つて良い。

又、刺青による責め(勿論、六尺禪は必要である)についてH・S氏は言及しているが、これはS・K氏の小説「鱧の皮」でも、祭礼の時に十五六才の少年が無理に刺青を腰のあたりにさせられようとする場面を取り上げている。又モデルにする責めについてG・I氏の小説中に、小三郎なる少年が鎌倉の水泳場で会った画家と称する中年の富豪の頼みに応じて、毎日禪一本の裸体となつてアトリエモデルを勤める事が叙述してある。尚、切腹と禪との関係については、筆者はあまり詳しくはないが、これも密接な要因に依つて結びついているものであると思う。

少年美、少年の禪美というものは、一種の封建的圧制美であり、武家政治或は軍国主義等と云うものに關係が深いものと考ええる。戦時中行われた学童相撲教練などもこの種の圧制美を表現している。

アメリカの様に自由主義国家では、伸び伸びとした生活環境により、子供の成長速度が

早く、子供から直接大人になってしまつて、少年時代、ひいては少年美をもつ時代が極めて短い様に思われる。T・I氏の言によれば「酒とならざる麦の穂の青き豪奢」と云う言葉で表現されている少年美の期間が短い。

以上、禪美愛好者の種々の傾向を申し述べて来たので、結論を出すことに致したいが、一応、『禪姿の美少年の絵』と云うものが、

最大公約数になるのではなからうか。勿論、前述せる如く、これには背景の要素が強く加わると云う事は忘れてはならない。又、その課程を明記に動的に印象づける為には、K・Y氏の「美少年による各種禪の連続締め方絵又は写真」という事になろう。

禪美愛好者にはソドミーの傾向の人が多いのであるが、ソドミーの前戯として禪美を追

求する人と、ソドミーよりも禪美の方に強い魅力を感じている人があると思う。これらの人の中には、全くソドミーと離れて禪美だけに執着する人も居り、今後、その様な点を研究した上で、ソドミヤとは別に一分派として、禪美愛好を独立させるべきであらうと思う。

(おわり)

草雙紙合巻にあらわれた

女腹切

探書生

文化十年、安達原氷之姿見、老女棧橋、

豊国画

文化十一年、濡燕子宿傘、北岩倉の雷婆、

豊国画

の三点に過ぎず、その弟京山のものでは、

文化十年、早便梅川物語、正直正太夫娘袖

萩 重信画

文政八年、月娥眉尾花振袖、刀屋女房おさ

や 英泉画

馬琴のものでは、

文化九年、行平鍋須磨酒宴、松風女房爪琴

春扇画

天保三年、千代椿良著聞集壹輯、松永久秀

妻白藤 国安画

の各二点、其他三馬、一九、雪磨等には全

く見当らず、東西庵南北に、

文化十三年、紅染女達磨、鬼菱源内娘若菜

重信画

の悲壮なものが一点あるだけで、天保末期迄の合巻全盛期は了ります。尤も種彦のものはありますが、これは後で別に述べます。天保末、水野の改革があってからは、所謂長編物の流行で有名無名の戯作者が随分書き散らして居りますが、この中でもそれほど数はない様です。

これも列挙して見ますと、半俗退士(英泉か)の、

弘化二年、柏掌奇談品玉画、浦島妻亀篠、

英泉画

徳川末期に氾濫した草雙紙合巻の内から凄惨なものをえらび出すことは洵にいと易いことだが、さてそれを女腹切だけに限定してみると、これほど思う程数が少く、殊にその内でも文章も絵柄も傑出したものは殆んど十指に足りぬ程度でしょう。所蔵のものの中からこれを作者別に挙げてみると、大御所山東京伝のものでは、

文化七年、親敵うとふの俤、滝夜叉姫、

豊国画

白雲堂主人の、

弘化三年、桜風呂剣復讐、二見七五三進妻

夕映

貞秀画

二世春水の、

弘化三年仮名読八犬伝三編、伏姫、国芳画

文久二年、薄倖幻日記、木辻の遊女綾琴、

二世国貞画

この内、前者は其後紛争があつて、馬琴の孫琴童の名で書かれ（実際は馬琴の嫁路霜の執筆ですが）後の雛衣の切腹は十八編（嘉永六年）にあります、春水の手をはなれて居ります。

但し絵の方は国芳が相変らず画いて居ります。又これと対抗して出して居た仙果の「犬の草紙」は伏姫の切腹が四編（嘉永二年）に、雛衣のそれは廿四編（嘉永五年）に書かれて居ります。作者（と云つてよいかどうかかわりません。抄録ですから）は変りありませんが、絵は初の三世豊国が二世国貞に変わって居ります。仙果にはこの外二世種彦の名で文久四年に「室町源氏小蝶巻」中乳母若菜の割腹を書いたものがありますが、これも画は二世国貞です。馬琴原作の抄録物ではこの外、柳下享種貞の「嶋巡浪間朝日奈」（嘉永五年）に巴御前が切腹して其子朝日奈に血を吞ませるところがありますが、国輝の画が粗拙なのでどうもお座に出せません。同じ作者のもので「白縫譚二編」（嘉永三年）の三世豊国画の

鳥山乳母秋篠のそれの方が遙かに良いと思います。

其他では雀亭秀賀の、

文久二年、金花七変化八編、猫間後室鳥羽

王 種清の、 二世国貞画

元治二年、不思議塚小説桜六編、星岡女房

松枝 芳幾画

の二点だけです。これは孰れも乏しい所蔵の内から見ただけで二千種に近い草雙紙の内にはまだまだ遺漏もあることでしょうが、兎に角、男のそれに比べて十に一もないのは確かです。ところが、これをしらべて居る内、洵に奇妙なことを発見しました。それはあの温和な種彦のものに女腹切が非常に多いのです。次にそれを年代順に挙げて見ましょう。

一、文化八年、鱸庖丁青砥切味、老女高根 北嵩画

二、文化十年、錦帯准無間、鳴滝判官内室 岩手の方 重信画

三、文化十一年、堀川歌女猿まわし、伝兵衛 衛継母蜘蛛手 同画

四、文化十四年、高野山万年艸紙、畑六母 継橋 同画

五、文政三年、合三国小女郎狐、天地金の 小三実 小女郎狐 同画

六、同年、絵操二面鏡、小まん元傾城染川 国貞画

七、文政四年、傾城盛衰記、梶原屋女房お 延 国直画

八、同年、新彫翻案道中雙六、女房梓 国貞画

九、文政七年、燈籠踊秋の花園、銀二郎母 お評 同画

十、同年、唐人留今国性爺、妓女吾妻 同画

十一、天保二年、修紫田舎源氏五編、舞師 匠凌長 同画

十二、天保十二年、邯鄲諸国物語八編、播磨の巻、浅香逸之進妻おさめ元傾城奴 三笠 同画

尚この外に読本で、文化九年の逢州執着譚に御所五郎蔵の妻杜鵑花が夫の代りに腹を切つて胡弓をひきながら落ち入るところを書いて居りますので計十三種、種彦の七十種足らずの著作の内では非常に比率の高いのが私には不思議でなりません。あの謹直なと思われる彼にこうした著作があるのは、彼の心の奥底に矢張り嗜虐の趣味を秘めて居たのでしょうか。これ等に対する反抗が「まづ第一に敵役。異人妖術怪談。狐狼ひきがへる。家の系図や宝物。紛失すべき物もない。親子兄弟名のりあふ。印籠かんざし割髪擦。神や仏の夢じらせ。腹切身替ぬき刀。血を見ることがすこしもない」と、誇称する「浮世形六枚屏風」を書かせたのでしょうか。（了）

鉾山の少年思春期録

夏休み日記篇

二 ふた 木 き 良 よし 雄 を

えった。

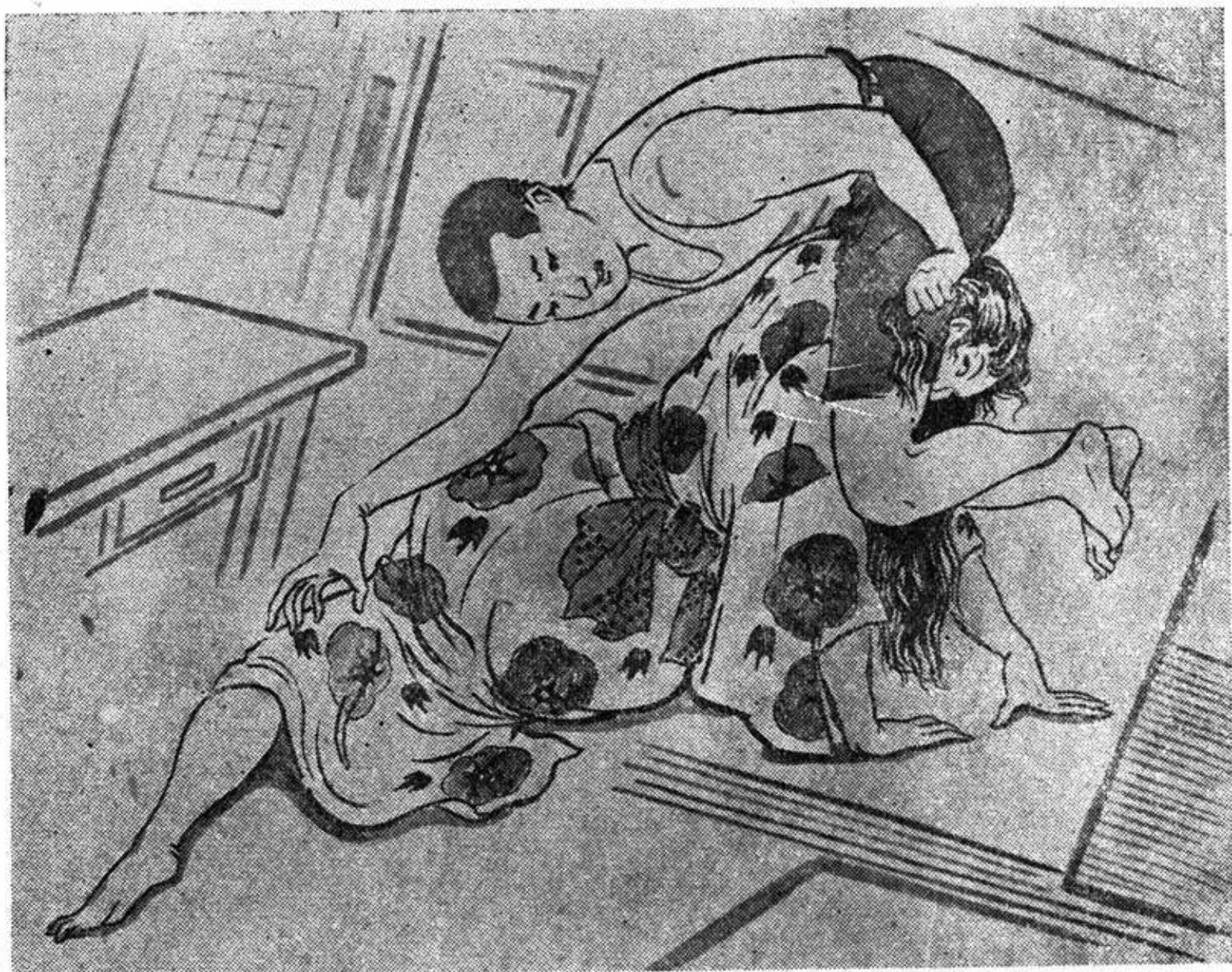
「もう出とるか、早いいう、そりや喰わにやイケン」

八月の空は明るく澄み、蛇王山の緑は益々濃い。此の頃の雄吉は何をみても愉快になる。宿敵近松をほうむり、豪雄徳田文吉を破って勢益々破竹だ。その勢威は全校を掩い、並び居る群雄は寂として声もない。雄吉は思う、今の俺の心境は近頃歴史で教った「望月のかけたることもなしと思えば」の藤原道長の心境と同じだぞ、いや平清盛がこんな気持で居たのかも知れんと、雄吉は満足だった。「雄ちゃん、山にや、もう、くちなわ（蛇）が出とるそうじや、くちなわ汁を喰いに行かんか」

家の背戸から蛇王山を仰ぎながら一種の子供らしい感懐にふけていた雄吉は、何時来たのか、鈴木進太郎の声に、ハッと我にか

雄吉は唾をのみこんだ、蛇を煮込んだくちなわ汁は鉾山の子供達の大好物だった。此のためにも子供達は夏を待ちこがれる。勿論学校からは、はっきりとくちなわ汁の名をあげて禁止されてはいたが「皆を呼んでくるぞ」「おう、醤油を忘れんと持って来いや」「よっしゃ」丸くなって駆け出る進太郎を見送って雄吉はゴソゴソと台所を探して大きな鉄の古ナベを見付け出した。蓋はないが、穴もない。去年のとき使った奴だ。山は強い日光の照りかえしで目が痛い位だが、木々の緑がよくそれを中和してくれる。

子供達は、まだ数少い冬眠より醒めたばかりの蛇をさがして走った。急坂胸をつく蛇王山も雄吉達にとっては我家の庭同然だった。



雄吉は去年一番はじめに蛇を見付けた大日如来の後にある灌木林に三千男と政一と一緒に走り込んだ、今年も其処にちゃんと蛇がいると思ったからだ。「おッ、居った」雄吉は立上って微笑した。いた、だが去年と違う、去年のはひどい灌木の枝から、たれ下っていたが、今度は石の上にチャンとトグロをまき、真直に頭を上げて雄吉を睨んでいる、しかも小さい奴だ。其処へ走り込んだ千々松の政一が息を切らして「何処じゃ、居ったか」と蛇をみて「やあ、こりやハミ（まむし）じやい」と叫んだ。気がついて「おう」雄吉達は一瞬緊張した。胎生蛇は毒を持っているのだ。政一の父親は体が弱い、それで激しい採炭夫の仕事を続けるため生きたハミを入れたむし焼酎を飲む、政一はそれでハミをよく知っているのだった。

「俺にくれや、お父が喜ぶけに」政一は真剣な目付で雄吉をみた。「万屋よろずやに持って行ったら五十銭くれるぞ」馳けつけた進太郎が云い三千男も同調したが、雄吉は政一をみて「お前にやるけに、咬まれるなや」と断を下した。

雄吉は父親が鉾夫達を可愛がっていることをよく知っている。「誰か前から見ちゃってくれい」政一は頼んでハミの後に廻った。ハミは人間の目と合っているときは動かない、そのかわり一寸でも人が目を離すとその瞬間、姿を消すか、咬みついてくる。捕えるのは一人が前から牽制して、他の一人が後から首根っこを押えるのだが、この阿あ云うんの呼吸は仲々むずかしい。しかし、鉾山の子供達は先天的にこれを体得している。難なく捕えたハミを持って政一が、先に帰ったあと、今日の獲物が雄吉のもとに集められて、山では大饗宴がひらかれた。頭、胴、尾などをいくつにもぶっ切って雑草とともに古ナベに投げ込んで、まだびくびく動いているのを雄吉達は固

唾をのんで見守った。

二

久しぶりに珍味を満喫した子供達は、思い思いの方に遊びに出掛け、雄吉も進太郎と竜王宮の跡に行った。眼下は掻き落した様な崖で、三十米位の処から、なだらかな草原のスロープになっていて、両側のくぬぎ林の中で谷間に消えている、此処は雄吉の好きな場所の一つだった。

「進ちゃんありや何んじやろう」雄吉は、ふとその草原に白いものをみて指さした。進太郎は頭をのぞかせると「何んじやろうか、犬じやなかろか」「馬鹿言え、犬がこんな所へ来るか」その白茶けた汚らしい色をした生き物らしいものを、遠目によく分らないままに言いあった。「ありやお狐さまだ」進太郎が叫んだ。「なにッ」二人は顔を見合せた。この蛇王山の主は醬油樽ほどもある大蛇だと言われているが、それとは別に神通力を持つ年古りて全身の毛がぬけた小牛ほどの老狐が住んでいてよく人が化かされると聞いている。現に大石の松造が、三年前の冬に化かされて、その話を松造から直接雄吉達は聞いた事がある。

ゾーとしたものが二人の背すじを走った。「帰ろうか」進太郎が心細い声を出した。外の子供達の声はもう聞えない。木の葉がさやさやと風に鳴るだけの深閑とした山の中、雄吉は始めて恐怖を感じた。もし一人だったら走り帰ったかも知れなかった。だが今の雄吉にはそれは出来なかった。進太郎が見ているからだ。また、その進太郎のいる事が心丈夫でもあった。「捕えようか」雄吉は虚勢を張った。「馬鹿言うなや、俺りや、いやだ」進太郎が顔色をかえるの

をみると「弱虫め」と嘲笑った。

行き掛り上、崖を降りる姿勢をとらなければならなかった。「やめい、やめい」進太郎は青くなって雄吉の服を引く、幸いに降りるための足がかりがなかったので「降りられん、業腹じやのう」と雄吉はズボンの前を開けると「シヨンベンを引っかけてやる」弧をえがいて、途中で霧となって見えなくなるのを目で追って「あゝエー気持じや」と威張ってみせた。必死の思いでふみ耐えていたらしい進太郎は「俺りや知らんど」と言って頭をひくゝした。お狐様にみられまいとしたものらしかった。

その日の午後、政一の姉の光枝がやって来て「雄ちゃん、ハミをくれたんってね、おゝけに」と礼を言って、雄二が少し顔を赤くするのを見て大人みたいな顔をして笑い出した。前はよく光枝と遊んだが、此頃はどうも雄二にはつき合い難い、学校を出てからの光枝がもう大人のような気がするからだ。それ迄、角力すもうを取っても負けた事はなかったが、今では自信が持てなかった。女の子の生理的な変化を雄吉が知る筈はなかった、近頃、光枝がみるみる太って来たのを驚歎の目で眺めて来たのだった。

雄吉は思う、俺は光ちゃんに勝てるじやろうか、胸や腰などとても大きくなりおった、さぞ力があるじやろう。その光枝の体をみているうち、「角力を取ってみようか」思わずもらした、独り言だった。言った雄吉自身が驚いてひどく赤くなってしまった。「角力？面白いわ、雄ちゃんとは長いこと角力せんじやったね、よっしゃ、ひとつ、こかしちやろう」光枝は無邪気に挑んできた。「いやだ、女おんなごとは角力とはらんぞ」雄吉はずかしくなって奥の部屋に逃げ込んだ。「何故よ、雄ちゃんが先に言うたんじやないか」鉾山

に育てば少女でも気が強い。光枝は雄吉の後を追ってきて、いきなりうしろから組付いて「コリヤ、やめい」と叫ぶ雄吉を押し倒し折重ってきた。雄吉の怒号と光枝のかん高い笑聲がカクテルされて、畳の埃が立迷う。こうなったら、もういけない、意志に反して雄吉の血と肉は活然と躍り「コリヤ、こな女ごめ」全身の力を手と足に込めた。しかし光枝の体が重くて、はねかえせない、蛸のように吸いつく。此奴強いぞ、雄吉の顔は紅潮する。

いぼじり巻きがとけて光枝の重い髪の毛が雄吉の顔の上に落ちかゝる。この髪を握って——戦いに有利な態勢をとるばかりでなく、別の意味でも雄吉の心をそゝのかす。チラリと井上の千代の髪の毛の感覚が脳裏をかすめる。途端に湧いた力は光枝をうつぶせにねじ伏せていた。襟首を両腿の間に挟み、おしりで背中を圧えつけて「どうじゃ」雄吉はやっと、面目を保ち得たが、それも束の間、額を畳にすりつけられていた光枝は、大きく息を吐きつけて、「エーかね、エーかね」掛声のように力を入れて、一たんちぢめた手足を突っぱり、頭で雄吉の体をグイグイ宇宙に持ち上げて「どうかね、これでもかねッ」、解けて流れた黒髪を畳に引き乍ら、光枝は居座りはじめた。「こな糞ッ」雄吉は両脚をしめつけ、力んで押え込もうとしたが、そのとき全身に起る不思議な感覚が戦慄となって五体を駆けめぐり愕然とした。一瞬の間に戦意を喪失して、雄吉は最早、取返しのつかぬ敗北を意識せざるを得なかった。「俺りや、女ごに負けた」この痛悔は翌年の正月、光枝に雪辱するまで雄吉の心から長く消えなかった。

三

今日は久しぶりの登校日だった。仲間も先生も毎日のように顔を見合せてはいるが、こうして学校で合わせる顔は亦格別だ。皆騒いでいる。海の話、町の話、喧嘩の話、それぞれの自慢話はつきない。その時、雄吉は三浦の三千男と窓ぎわで話していたが、三千男が窓の外に唾を吐いて一寸覗き、急に顔色を変えて黙り込んでしまったので、雄吉は何気なく下を覗いてみた。六年一組の教室は二階にある。すぐ下の花壇には菊やコスモスなどいろいろの花が名札をつけて整然と植えてあったが、その手入をしていたのだろう、一群の女子達が右往左往していて、一せいに雄吉の窓を見上げている。雄吉の目は、激しい怒りに顔を真赤にしている六年三組男女組の女の先生の目とぴたりと合ってしまった。雄吉は先生のそばで肩についた唾を拭いている女の子をみて瞬間、事態を察した、三千男の吐いた唾が丁度下にいたこの女の子にかゝったのだ。窓から唾を吐く事は禁止されているのだ。うらめしげに見上げた女の子は意外にも千代だった。

「馬鹿じゃな、下を見んと吐く奴があるか」三千男を叱ったが、毎度の事で別にも気にせず、また話の続きに夢中になった。

「俵、一寸こい」先生のきつい声がして。見ると何時来たのか、三組の女の先生が雄吉達の組の先生の手を引いて雄吉を指さし「先生あの子です、あの子が唾を吐きました」と焦れったそうに叫んで憎々しげな目で睨んだ。余程腹をたてたらしい。

「俵、お前か、何故唾を吐いたか言うてみい」雄吉は反射的に三千男をみた。三千男は自分の席に座って、首をたれて机の上に意味のない事を指先で書いている。その姿は哀れでしよんぼりしていた。雄吉は口迄出かゝっていた言葉を飲みこんで、無言のまゝ二人の先

生の前に立った。「お前がやったのか」「はい」「馬鹿たれッ」言葉と共に雄吉の頬に激しい音がした。先生の往復ビンタがとぶたびに雄吉はよろめき、何度目か床に倒れた。子供達のざわめきの中から雄吉の耳に「この子は、そんな事をする子じゃありませんかね、何かの間違いではありませんか」前の担任の先生の涼しそうな声が聞えた。

学校の井戸端で頬を冷していると井上の千代が来て、「これ使ったらええ」小さなハンカチをくれた。それで頬を冷やせと言うのだ。「私は何も言わんのに、山本の美代ちゃんが先生に言うたんよ、あの人、おしやべりだから」千代も唾を吐いた犯人は雄吉だと信じているらしかった。山本の美代子と聞いて雄吉は急にしやっきりとした。U市の中学校にいる、かつての宿敵山本達夫の妹だ、そして役員組も役員組、労務課長の子だ。納屋頭である雄吉の父親とは犬猿の仲だった。親達が酒のみ話に話すのを聞いて、雄吉は、憎しみをこの山本という課長にいだいている。

それと同じ事は山本の美代にもあるとみえて、今迄にもよく美代のしっこい策謀によって不快にされることがよくあった。女ごだからと捨てゝおいたが、今日は腹にすえかねた。告口する位なら誰が唾を吐いたか位知っている筈だ。雄吉は激流する感情を持て余した。「毒婦は斬るべし」と誰かが言うたぞ。場合によっては男児の勇をふるわねばならぬと考えた。全校の男子を、しう伏せしめればかりに久しく喧嘩がなく、髀肉の歎をかこっていた雄吉は、急に晴々とした顔をした。相手が女こという事が少し心許なかったが。

その機会は早くきた。その日から三日目の夕暮。黒崎神社の境内で実に偶然に出逢ったのだった。先に気がついた美代が池のそばで

如何にも用ありげに雄吉をみている。大柄の花模様の浴衣を着て、黄色の絹の帯をしめている。その美代の髪が金色に光り、雄吉は綺麗だなと思い、ふと踏みこむ快感を思いうかべた。夕日はすでに蛇王山に沈みかゝり、すべて金色に輝いて、老杉のかげは長く尾をひいている。場所も良かった。時も良かった。雄吉はぶるツと武者振いした。

「お前い、この前に言いつけたな」ずかずかと近づくと精一ぱいの目をして睨んだ。「唾を吐いた事？ 私、あんたが唾を吐いたとは言わなかったわ」きれいな東京言葉で美代は応じた。東京言葉は、山田の家の習慣らしいが、何かしらにやけて聞え、雄吉はたまらなく嫌だった。これを聞くと臍の当りがくすぐられる様な気がする。「俺は知っちよるど、お前が言うたのじや」美代は急に赤い顔をすると、「私、知っているわ、唾を吐いたの三浦さんよ、俵さんは先生にぶたれても、それを言わなかったのね」と言って、息をあえがせて、「私あとでその事を先生に言ったのよ、そして俵さんは偉いわねと言ったわ。先生はびっくりしていたわ、あんたの先生、何んにも言わなかった？」途切れ途切れの聲が次第に昂って、美代の目は薄闇の中に輝いていた。

雄吉はたじろいだ。思いがけない展開であった。美代子もこれだけ言うために雄吉を探していたのかも知れない。三千男が先生に殴ぐられるかも知れない。その事が雄吉の脳裏にひらめいた。三千男の泣顔がうかんだ。「唾を吐いたのは俺じや、こいつ、殴っちゃる」美代の肩をつかんで引き寄せて、その頬に平手をとばした。美代は顔をおさえて声もなくしやがむ。「起きい」雄吉は叫んだが、生憎相手は男ではなかったし動かない。俵上の鯉だ。雄吉は当惑し

て美代のまわりをぐるぐる廻って、後からお尻を突きとばした。

「アー」美代は芝生に顔をつけて転がった。女ごじや、これ位にしておけ、もう生意気をせんじやろう、と雄吉は思った。だが雄吉の目に、美代の頭の髪の毛が焼ついた――。踏もうか、男の子の場合には何んの躊躇もなく出来たことが、この場合、何かやましく思われて、雄吉はためらった。口の中が渴く思いがした。その一瞬「こうしちやる」と叫ぶと、胸をおどらせ、夢中で美代の頭を踏んでいた。生暖い感触が脳天までジンとひびく、美しい髪の毛に下駄を当てるにしのびない気がして、素足で幾度も幾度も踏みつけついに顔に及んだ。無抵抗の女の子に暴力を加えている自分に、雄吉は激しい自己嫌悪を覚え、その良心は痛んだが、足の裏にかゝる美代の暖い息はもう一度だけ、もう一回と雄吉を誘惑する。やがて足許からもれる、かすかな鳴咽をきくと、雄吉はたまらず夢中になって逃げ出し、「馬鹿たれッ」「女ごくされッ」「長州男児の恥さらしッ」とおのれを罵り、頭を叩き、涙をこぼしながら雄吉は何処迄も走った。

四

この炭坑の前を終点とする乗合馬車にのって蛇王山の麓をめぐり一時間ばかり行くとO町に着く。市役所があり、郵便局もあり、駅もある。大きな店屋が並んで、美しい着物を着た人達が大ぜい歩いている。A小学校の子供達も時々用足しに行ってくるが、子供達は馬車には乗らない、近道があるからだ。蛇王山を先端にし、三角形の岬となって周防灘に突っ込んでいるこのO市の扇形に広がった、その扇の日の丸にあたる処がO町だ。近道というのは、蛇王山を北

廻りする馬車道とは反対側の山腹を斜めに横切って半周して降りると、K部落の波除けに造られた八丁土手に出る。K部落からはO町迄立派な道があって、これを五間道路といっている。歩いて此の方が馬車より早い位だが、蛇王山の中腹の小道が歩き難いので乗合馬車は大繁昌している。此頃、鉾山の少年達の口によくこのK部落のことがのぼるようになった。最近、この部落の子供達と頻々としてトラブルが起りはじめたからだ。

漁民であるK部落の人達は、昔、朝鮮征伐の時神功皇后のお供をした水軍の末裔だと自賛し、自分達こそ真の日本人であり、純粹な大和魂の持主だと自負している。したがって、当然、此処のK小学校の子供も偉張ったものだった。子供乍ら素ッ裸の赤フンドシで二間にも足らぬ小舟をあやつり、エーヤ、エーヤと、周防灘狭しと押し廻っているのを見て、雄吉達鉾山の少年は畏敬と羨望の念にたえなかったものだ。ことの起りはよく分らないが、最近彼等が蛇王山に目をつけて領土侵犯に出たのと、勢力伯仲の両校の日頃の確執が夏休みになって表面に出たものだろう。

此頃はA小学校の子供がO町に出るたび、例外なく通行税をとられて帰ってくるようになった。雄吉達は無念やる方もなく一剣をみがいて機会を狙っているが、敵の大將大垣は偉い奴だとみえて、事件が起りはじめて以来、輩下のものを雄吉の領土に近づかせなかった。かくて一触の危機をはらみつゝ、今日八月十二日、K小学校の者がひそかに蛇王山に登っていると雄吉が注進を受けたのは暑い盛りの昼だった。

「十人位おったぞい、五年と六年らしい奴等じや」

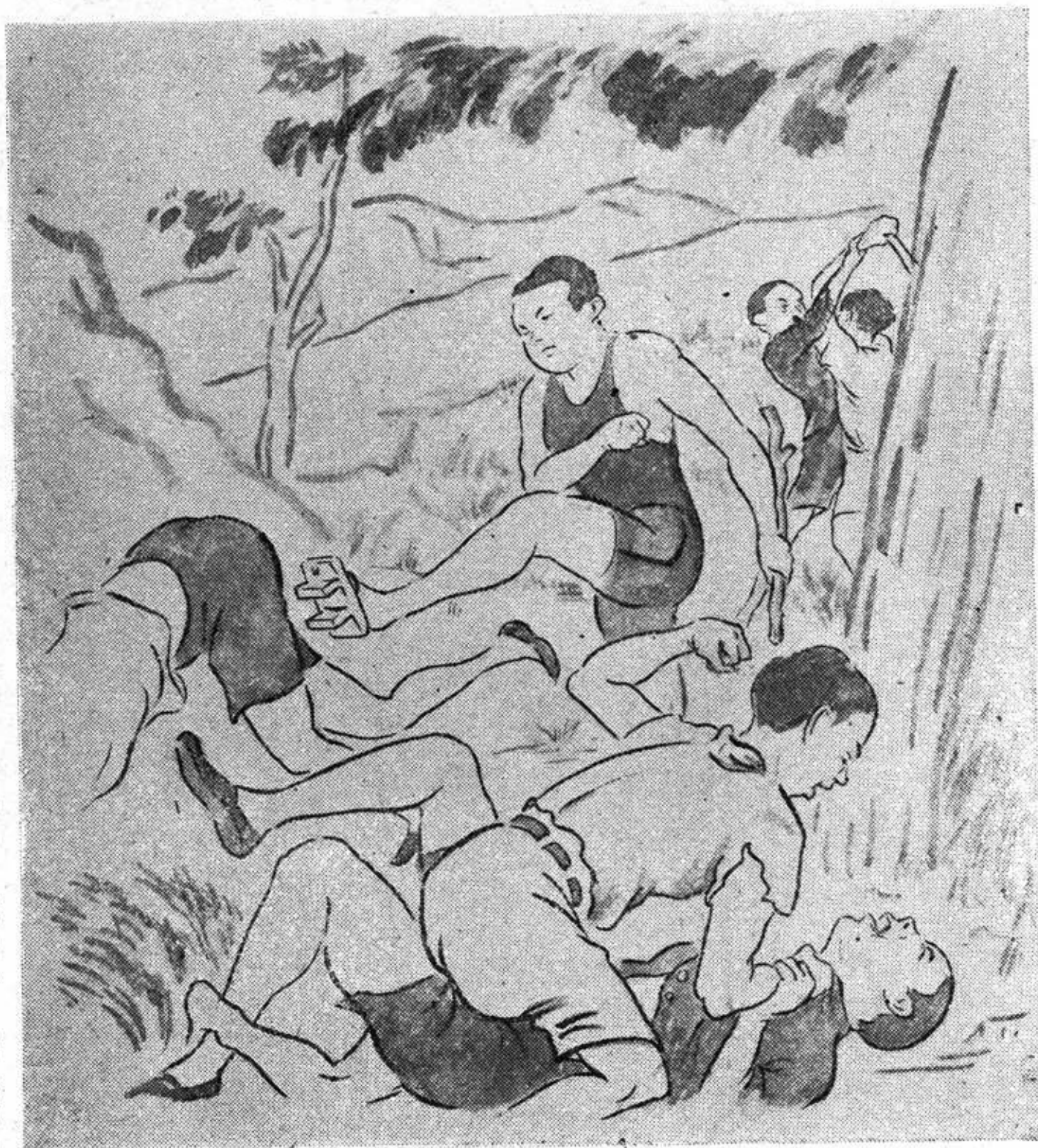
「元山口から登ったらしいぞ、俺りや、お花畠でみた」注進にきた

千々松の政一と新町の謙ちゃんが口をとがらせて交々に報告する、この子達も瘤や股くゞりの通行税を払った仲間だ。好機至ると雄吉は雀躍りした。

「お前い達、徳田と三浦を呼んですぐ宮の口へ行けい、俺は鈴木とすぐ行くけに、おう、六人でエーぞ、早うせ、早うせ」「おう」「よっしゃ」突きとばし合うようにして、からみ合って二人が飛出したあと、雄吉は大急ぎで進太郎の家に行った。家の中を一寸覗いて目で探し、「お婆さん、進ちゃんは？」焦れて叫んだ。「進は便所ですがな、行ってみなはい」お婆さんは笑っている。進太郎の長便所は雄吉も知っていたが、一刻を争うこの場合臭いなどとは言うてはいられない。裏にまわると、

「東山三十六峰、静かに眠るう——突如おこるケンゲキのひびきーい、チャカチャカ、チャンチャン」進太郎の声がする。「進ちゃん早う出んかッ」「おう、雄ちゃんかい、何か用かや」便所の中からのんびりとこたえる。

「Kの奴等が山に来とるぞい」「なにい、そりや大事じゃ、待て」進太郎はあわてゝとび出してきて、「誰と誰とをつれて行くかや、早う行かんとにげるぞ」以心伝心、こんなときは余計なことは言わない。雄吉も気が急



いて「今徳田が千々松や新町をつれて宮の口に行っちよる。お前も早う来いよ」「待てい、今ズボンをはくから」進太郎のあわてた声

を後に駆け出した。

おくれで駆けつけた進太郎は「やあ三浦も来とるのかや」と意外そうな顔をした。「お花畠から大日如来の間の道にいるな、よしッ大日如来まで上ってそこから降りてみよう」雄吉が言うと、一同は息をきらして駆け登った。「やあ十一人おるぞう」進太郎が叫んだ。ピシッピシッと音がして、政一が木の枝を二三本折りとって皆の中に投げ出した。得物にするのだ。雄吉はリンリンと叫ぶ「やれーい」こんなときが雄吉の一番幸福なときであり、その真骨頂でもあった。「一番手ーッ」叫んで進太郎が飛び出す。「二番手ッ」と政一が駆け出し「三番手ッ」「四番手ッ」と次々に走り出した。最後に雄吉と徳田が貫祿をみせてそれにつづく。

敵は最初、茫然とし、続いて混乱した。「殴れい」誰かが叫び、拳がとび、木の枝がとぶ「無茶するなや」「何をするかッ」殴られよろめきながら敵が叫ぶ。怒号、悲鳴、号泣、平和な山はたちまち修羅場と化した。一人の少年の腕をねじ上げて雄吉はあたりをみ廻した。木の枝を持って追い廻している進太郎。それぞれ相手をみつけて一騎打をしている政一と謙ちゃん、二人の敵を相手にして得意の柔道の立技をみせている徳田文吉。三千男も似たり、よったりの青白い奴と組合っている。雄吉の口許に微笑がうかぶ。一たんひるんだ敵も名にしおう神功皇后の家来の末裔。やられてばかりはいない。勇戦を物語る破れ襦袢の少年が「突貫ッ」と叫んで雄吉に突進してきた。小柄ながら強そうな奴だ。「よッ」と受けて力まかせにねじ伏せて顔の上に馬乗りになって「此奴、こうじゃ」雄吉はおしりで踏みもんだ。「ちッ糞う」敵は雄吉のおしりの下でもがいていたが、いきなり噛みついてきたので「あッッ」おしりに火がつい

たように感じて雄吉はあわてゝ立ち上った。キリキリ皮肉に喰い込む痛みに、雄吉はポロポロ涙をこぼした。余りの痛さに雄吉はすっかり腹を立てて、其奴の口の中に泥をつめ込み、その上からギリギリと踏みにじった。「噛んでみい、さあ噛めい」下駄で顔を、血綿のような鼻血が出る迄踏みにじった。そのすさまじさに敵も味方も気をのまれて戦いは中断された。

やがて敵方の方からすゝり泣きが聞えはじめた。降伏のしるしだった。後味の悪い勝方をしたと思ひ、雄吉は余り楽しまず、捕虜達を八丁土手の方に追い、「帰ったら、チャンと大垣に言え、文句があるなら何時でも来いちゆうたと」雄吉は申し渡して、名残りに皆で拳固を一つずつくれて解放してやった。

その晩、窓で雄吉は一人ハーモニカを吹いていた。空には無数の星がちかちかしながら銀河となつて東から南の空へ流れている。静かな綺麗な夜だった。ツイーととんだホタルを目で追って何気なく庭をみた。すると其処の無花果の木の下に白く人影がみえた。何時来たのか山本の美代だった。あふれるような黒髪を解いて肩に散らしている。ハーモニカがはたと止んで、雄吉が気がついたと知ると、美代にニッと微笑んだ。雄吉は理由もなく狼狽して、不覚にも顔が真赤になった。あわてゝ窓を閉めて、どきんどきんする胸の鼓動を押えようと必死につとめたが、雄吉には理解のつかない感情が胸の中を流れて、何か心優しいものがほのぼのと感じられるのだった。

五

今日から鉾山の盆休みだ。炭坑街の休み日は酔ばらいの濁声と喧

嘩から明ける。今日は亦特別に騒々しい、雄吉の家でも昨夜から夜明しで飲んでいる。料理屋で飲んできて亦、家ではじめたのだ、雄吉など相手にされず淋しくて、こんな時、とても父親が嫌いになる



のだった。

家をとび出して、進太郎と事務所前の広場に行つてみた。踊りの櫓はもう出来ていて、四囲に着けられた笹に提灯さえ吊つてある。

大太鼓がある。雄吉達が夢中になって太鼓を叩いていると「やあ、自動車だ、綺麗だぞ」誰かが叫んだ。その頃は未だ自動車は珍しかったので、子供達はその方に駆け集った。自動車は事務所の玄関に着いたが誰も降りない、中には二三人乗っているようだった。誰か事務所から乗る人を待っているのだろう。役員組の一人がにやにやして「誰か触ってみい」と言うと、鉾夫の子が二三人恐る／＼手を触れてみる。「きやあ」とはね上って、青い顔をして尻込みする。「どねえした、どねえしたか」子供達がガヤガヤ騒いだ。「電気じや、ビリビリしたぞ」役員組はどっと笑い出して、運転手も笑っている。雄吉もつられて苦笑した。

そのとき「俵さん」と呼ぶ声がして、雄吉は、ぎよっとした。聞き覚えのある声だ。この声を聞くと何故か雄吉はぎよっとするのだ。自動車の扉が開いて女の子がとび出した。山本の美代だ。白い上下続きの洋服を着て、雄吉などみた事のない女靴をはいている。長い髪を二ツに分けて編んで背にたらし、顔には薄化粧をしている。雄吉はたじたとって人の後にかくれようとした。

「俵さん、私達、九州に帰ってくるのよ、お手紙上げ

るわね」

「うん」雄吉は急には声も出ない。完全に圧倒されてしまった形だった。「お土産を持ってくるわね、だから、そう、いじめないでね」美代の眼は涼しく笑っている。その時、自動車の中から、「美代さん、お父様です。もう出掛けますよ」母親らしい声がして「はい」とこたえて美代は雄吉に「返事、きっと下さいね」と例の東京言葉でさくやくと、白い鳥のように、ひらりと自動車の中にのった。自動車が去ってしまった後、進太郎が「雄ちゃん、ありや、山本じやろう、金持じやのう」と感謝の声を上げた。



雄吉は心臓を失くしたような淋しさを感じて、それを、ふり払うように「彼奴、生意気な奴じや、今度、殴っちやらんじや」と言い進太郎が「何故よ」と問い掛けるのに返事もせず、そくさと家に帰った。寝ころんで真夏の日に今日は少し寒いなと思ひ汗が出ないのを不思議に思い、そして美代の事を考えるともなく思ひ浮べた。何処か体の一部が脱落したような気憂を覚えてぼんやりしている

と、その時、表の方で子供達の足音があわただしくなって「雄ちゃん雄ちゃん」と呼びたてる進太郎の声。続いて他の子供の声で「明日の晩ど、鳩ヶ浜じや」と叫ぶのが聞える。何か重大な事が起ったらしい。「何んじやい」雄吉は首だけでもたげて聞いた。進太郎が窓から頭をつゝ込んで真剣な顔をして「今、広場にK小学校の奴が来て、俵にこれを渡せというた。大垣からじや、早う読んでみい」くしやくしやになった紙切れを差出して、心配そうに雄吉の目をみつめる。大垣ときいて雄吉は、はね起きた。

(明十五日、晩九時、舟で鳩ヶ浜に行くから出て来い。一人一人だ)簡潔な文字が躍っている、大垣の署名が強く目を射た。此の辺の子供は今でも果し状をつける習慣がある。そのかわり敗者は今後、勝者に絶対服従しなければならぬ。だからめったな事では出せないし、亦貰ったら必らず行かねばならぬ。彼大垣も部下を手痛く可愛がられて、痛憤止み難く此の挙に出たものだろう。雄吉は躍り上って「きた、きた、生意気に鳩ヶ浜まで来るとぬかしとるぞ」今の今迄の憂うつも何処かへわすれて皆をつれて外へとび出した。

六

翌朝、目がさめるといつもより寒いと思ったが、先ず今晚の大垣との勝負のことが頭にうかんだ、すると闘志が満々と湧いて、十三年の生涯が今日のためにあるかのような気がして、雄吉は勇躍はね起きた。その時だった。左の胸にキリツと激痛が起り、驚いて「あッ」ところがった。つづいて背すじから始って全身に冷たい水を流したような悪感(悪感)がし始め、軀がふるえ、呼吸が苦しくなると、手足が

みるみる氷のように冷えるのが分った。雄吉はうめいた、突然の急変だった。たった今、起きる迄は何んにもなかつたのに、これは一体どうした事だ。

頭がガンガン鳴って雄吉は混迷した。鈴木のおばさんだろう、台所の方で皿、小鉢を洗う音がして、外では鉾夫に何かいっている父親の大声が聞えるのに、これは夢かしら——、雄吉はこの状態から脱却するために必死で身体を動してみた。這いずって蚊帳をくぐりキリキリ痛む左胸を押えてソロソロと立上つた。よろめく——足に力が入らないのだ。壁にすがつて、早く父親の処へ行こうと思い一二歩ふみ出してどうツと転び、始めて泣声を出した。「お父うちや——ん」、齒の根も合わず、ガタガタふるえて台所に這い出し「オバサン、寒い、寒い」と訴えた。驚いて走りよって来た鈴木母親の胸にしがみついたのだった。「まあ、大熱、大事じゃ」と鈴木母親は仰天して、「親方さん親方さん大事じゃ、坊っちゃんが大熱ですぞ」外に向って叫んで、オロオロして「何時からじゃ、何時からじゃ」と言い乍ら雄吉を抱きしめ、その額に唇を当てた。

組長である雄吉の父親の家では人手に不足はない。たちまち氷がはこばれ、附近の医者が呼ばれた。名医だと言われるO町の医院にも特別仕立の二人引きの人力車がむかえにとんだ。父親と医者の間どんな話が交わされたか、雄吉は知らなかったが、今迄の風邪引きの時と違って大病人あつかいだった。恐らく急性肺炎だったのだらう。

雄吉はウトウトと眠って夢をみていた。いつか龍王宮の跡で小便を掛けたお狐様が大入道になって雄吉の周りをぐるぐる廻るのだ。雄吉は驚いて逃げようとするが体の自由が利かず、動くことが出来

ないのだった。お狐様はにたにた笑い乍ら廻る、廻るにつれて雄吉の息はだんだんつまってくる。おかしい程無力なのだ。——苦しい苦しい、雄吉はもがいて軀に力を入れようと思ひ、うめいた。そのとたん目がさめて、なんじや夢か——と、ほっとして胸をさする。涙が出ていた。雄吉はその時、思い当って愕然とした。お狐様だ、こりや罰を喰ったんじや——雄吉は目を天井にうろろさせ、頭が呆としてきた。何も食えなかった。何を喰べても鉄でもなめたような感じで一口も入らない、ただ水飴だけを喰べた。午頃、進太郎と三千男がやってきた。

「俺りやびっくりしたど、雄ちゃん病氣したちゅうから」進太郎は目を丸くして言つた。彼には尊敬する強い雄吉が病氣などするとは考えられなかつたらしい。三千男は顔を赤くしてじつと雄吉の顔ばかりみていた。もう踊りの稽古がはじまるのか太鼓の音がする。雄吉は顔を、くしやくしやにすると「俺りやお狐様にやられたらしい」と言い「口惜しいのう、今晚、大垣のやつ殴っちやるのに」胸にたまつたものを吐き出して涙をぼろぼろこぼした。「俺が行っちやるから」進太郎が言つたが、雄吉は心許なかった。徳田文吉ならと思つたが、徳田はつい昨日、故郷で盆をすましたためC県に帰つたばかりだった。誰よりも自分が行きたかつた。K小学校一といわれる大垣と雌雄を決してみたかつた。

「畜生」とうなると胸が亦痛む——、長蛇を逸するか——、大垣達の凱歌が脳裏をうずまく。行かねば笑われ、行けば負ける。雄吉の心緒は乱れて血の涙を流さんばかりである。「進ちゃん、お稲荷さんに行つて油揚げを上げてきてくれい」雄吉はついに音を上げた。お狐様はお稲荷さんの使い姫だから、それで怒りがしずまると思つ

たのだった。

七

次に目がさめたとき、もう日が暮れていた。雄吉はぎよっとして柱時計をみた。五燭の赤い電灯の光りにかすかに読める、八時すぎだった。雄吉はなんの躊躇もせず起き上り、カッカッとする胸をさすり、当然のように服を着る。誰もいない。炭坑の顔役である父親は雄吉の事を気にし乍ら、何処かの集いで祭り酒を飲んでいるだろう。鈴木のおばさんも、よく眠っている雄吉に安心して一寸の間盆踊りを見に行っているのかも知れない。万事は好都合だった。事務所前の広場の方から太鼓の音が強くひびいて、音頭が聞える。雄吉はそれで一口薬を飲んで、裏口から顔をふせて出た。ふらふらして体が宙にういているようだ。寒さと痛みでつい肩をすぼめ腰を曲げる。早う行かんと大垣の奴、帰るかも知れんぞ、このまゝ大垣に帰られたら大変な事になる——。

やがて松原が見え、海が見えてきた。雄吉は立止り息をととのえようとしたが、益々苦しくなるのをどうする事も出来なかった。鳩ヶ浜の松原。千本松のはずれの一本にもたれて月にくだける金波、銀波を眺めている少年一人、大垣だ。雄吉は痛む左胸に手をあて、切ない息を吐きつゝしばらく大垣をみていた。——強敵だ、勝てるか知らん——一步踏み出すと頭ががんにんして眼の前にチカチカと白片が舞う——勝たんければならん——鼻の奥がツーンと、きな臭くなつて臉が熱くなる。雄吉は齒をかみしめて、曲げた腰をのぼし息をつめて激しく全身をふるわせた。体のふるえを止めるための逆作用のつもりだった。

それが利いたか、ふるえが少し止ったので、「大垣」とひくく呼びかけた。「おう、きたかや」大垣は躍り出でて「俵ッ、よう来な今日は始末をつけるからそう思え、下駄を持っても、ええぞ」当然のように云った。お前は弱いから得物を持てと言うのだ。——チエッ、生意気な奴、此処迄のり込んできて、しかも俺の言いたい事を先に言いおった。雄吉も何か言おうと思ったが、もうその気力もなかった。眼がくらめき、ふらつく足に腹を立て——、真正面から組付いてきた大垣を受けて「ヨッ」腰車に掛けようとして、ふみ出す足がもつれ、雄吉は力つき倒れかけて大垣にしがみついた。鼻翼がビクビクして呼吸が出来ない、のどをぜいぜい鳴らして、くずおれる雄吉の体重に引かれてしりもちをつき乍ら大垣は、ようやく雄吉の異状に気がついた。その熱に驚き、

「こりや、俵ッ、どねえしたんじや、お前い病氣かッ」「何を言うか、勝負勝負」言葉とは逆に雄吉は長々と横たわり、砂の冷さを心地よく感じ、心残りのない安堵に似たものを感じた。「おい、お前の家に連れて行っちゃる、何処じや」と大垣が抱きかけるのを、うるさく思い、このまゝ眠りたいと思った。大垣は雄吉を背負って、「お前、何故、来おった。死ぬぞ」「お前と一度やつてみたかったんじや」雄吉は呟いた。「俺もじや」大垣は言つて雄吉をゆすり上げて歩き乍ら、しばらくしてポツンと「俵、舟に乗りたくねえかや」と言つて「乗りたいぞ」と言う雄吉の苦しそうな息づかいをきゝ乍ら「海は面白いぞい、乗せてやるけんに、Kの者を殴るなや」としみにみいった。

雄吉は黙つて大垣の肩ごしに海をみていた。汗と潮の臭いがぶんとする。忘れていた太鼓の音がどんと聞えて、前後の連絡もなく雄吉は九州に帰っている山本の美代のことを思い出していた。

灸^{きゆう}
虐^{ぎやく}
雑^{ざつ}
記^き

長 谷 川 清

灸点と云うものは病氣治療のためという形式にはなっているが、私から考えると合理的にサドとマゾを満足させているので、痛い目に会いたいか会わせたいとか云った、その心が本音のような気がしてならぬ。癪が高いと云っては泣きわめく子供をおさえては灸を据え、いたずらが過ぎる、行儀が悪いといつては、むごたらしい仕置に泣きわめかすのである。

私の見た灸の一番大きなのは、直径二寸位なので、お尻を横にズレた処に据えていた。私は人の灸あとを味わうために、なるべく人の集る灸点師に出かけ、自分も灸を据えられながら、他の人達の灸あとを存分に見入るのだ。一番驚いたのはちりけからお尻の上まで二十ヶ処位に一寸あまりの大灸を据えている

婦人を見た。然も私の親しい人で、偶然お湯に入り合せて驚いたことであつた。

またこんなこともあつた。ある山の中の温泉にいったとき、心ゆくばかりに湯にシタリ一人山気を吸っていた。そこへ三十五六の婦人が入って来た。野風呂に近い小屋がけの温泉でせいぜい三人位より入れない。つましやかに着物を脱いで「失礼します」と後向きに入ってきた。その後向きの背には、いともなまなましく赤ただれた大灸の痕がある。私の鼻の先にもちかけるように迫ってきたので、上気して湯から出られない状態になつて弱ってしまったことがあつた。これもテーマの一つにもっている。

無量寺の灸点で見た女だが、片腕に総ぼかしの入墨をした美しい女が灸を据えていた。

この女からも小説的な連想が浮んだ、正直に書くと五十に近い位の年輩で入墨はだいぶしなびていた。

無量寺という尼寺は上六の前と生魂神社の前と二ヶ処あつて、上六の方をモト無量寺と云っている。戦災に焼かれてお寺らしい感じがなくなつて全くの「やいと寺」になつてしまつているが、昔は、と老人くさいことを云うようだが、大きなお仏壇の前の本堂で灸を下し、助手も殆んど尼さんだったが、此頃は主の尼の外は殆どパーマをかけた婦人がよれよれの洋服で助手を勤めているのは詩情をぶっこわす。経済的には豊かなようであるから主の尼は、真白い僧衣に被布のようなものを着けて気高い感じがしてなかなかいい。

我々の子供の時分と違って、郊外電車が四通八達しているので据えに来る人の品も落ちた。灸虐を味おうとする人には痰灸などと違って辛抱できぬほどの熱さでもない。初歩的なものだから、おすゝめしても大丈夫、それで物足らぬ人は痰灸に行くところらしい。一人で行くのがきまりが悪いと云われるなら連れて行つてあげてもいいですよ。

さすがに博労町の痰灸の方は、すっかりさびれ、門前市をなしていないようです。京都の東山線の護国神社前に一つ灸と云つて痰灸を下す灸点師がいる。主に毒下しで、遊女やそれに関係のある色町の人が多く据えに行く

が、此処では両尻の山の中央部に昔の一銭銅貨、今の十円より一と廻り位大きな灸を据えるのだ。希望の方は行って御覧なさい、尤も此処では痰灸の他に普通の少い灸も据えている。停留所へんでお聞きになれば、直ぐ知れる。

東京の弘法さんは今でも非常に繁昌している。吾妻橋を本所の方向に渡って電車の交差点のそばの大きな寺で直ぐ知れる。痰灸よりは小いだけに仕いゝが、それでもちよつと遊



療するようになる

「貴女の胃は、根切を一つ据えんと治りません、ほんの十を数える位がツラいだけで小さい灸より反って楽です」

と云っている頃には、もう大きな灸が二ヶ所に付いていて「フウフウ」はいずり廻される。如何にも病気を治すと云うよりは痛がらせ、苦しめる、サド的なところが眼目のようであった。名はわざと記さないが教えてほしい方にはお手紙を差し上げます。

歸的には行きにくい、ちよつと腹締めてかゝらんと火がつけられたら最後だ。

針頭灸の家元は、東京麻布へんに住んでいる××先生で、戦災後如何されたか消息を知らぬ。灸点の大家でさきに小説的に記述した悦虐の未亡人（女灸点師）はその針頭灸の助手をしていた。この夫人は後に灸点をアルバイトにして、方々の家庭を廻っていた。初めは小さな米粒位の灸で将心させ、心やすく治

私は東京に再び出たころは小母さんとの交際の深刻化を逃れて、他に下宿を移した。それでも治療をしてあげようと、時々出て来たが、他に人目もあり夫人と二人きりで戸締りをして縛り上げ、と云うようなわけには行かなかった。それで我々は助けられたのである。それでも冬の寒いときなど、帝国ホテルへ泊り込みでひどいめにあわされた。

三十才になった時だったかに突然喘息の発作に悩まされ、以来、それが持病となった。夫人はそれをお医者様では根治できぬ、灸でなければと云う信念のもとに私の家をセッセと訪れた。会社に出るようになってからも電話で打合せては下宿へよく来てくれた。

こうして私の身体にも人前に出られないほど灸跡がふえた。随分裸体にならぬよう注意しているが、それでも人に見られ、いぶかられたことは度々である。その時は、これで僕の喘息が治ったのだよと、誠しやかに説明をした。夫人の先生である××先生の処へも連れて行かれた、夫人の大灸を人に据えたがる癖はこの××先生によって遺伝されたのではないか。そういうシーンに度々接した。

針頭灸を据える人は〇〇先生一家の人々でその後の消息は絶えて聞かぬ。

幽 囚 十 ケ 月

これは冷徹な自己批判の眼を持つて、極めてリアルに描かれた受刑者の記録である。誇張もなく歪曲もなく坦々として述べてゆく行文は、高く評価される何物かを保持しているに違いない

春 田 一 郎

坪 内 篠・画

「トンスケ」病

刑務所には設備の整った医務課があり、大抵の手術も出来るのであるが、一寸した負傷とか風邪位は医務室に連れて来る迄もなく、医務課から定期的に回診して処置をするのである。これを受刑者は「工場回診」とか呼んでいるのである。工場回診は隔日に行われるのであるが、その日の朝、衛生夫が房毎に受診の希望を聞いて廻り、受診希望者の氏名や主訴を「工場回診簿」に記入する。やがて、医務課から保健助手である部長が看病夫を二名連れて、受診希望者を順次に診て、其場で処置出来るものは処置し、医者 の 診 察 を 必 要

とするものは、その旨を「工場回診簿」に記入して、後刻、医務室へ呼び出すのである。看病夫の一人は回診箱という箱を下げて廻るこの箱の中には、応急処置に必要なものは一通り入れているのであつて、その主なものはアスピリン、健胃散、タールパスタ、亜鉛化軟膏、硼酸軟膏、冬はこれに凍傷膏、グリテール軟膏、マキユクロローム、沃度丁幾、オキシフル、リバノール水、皓礬水、ザリ精、イヒチオール、ルゴール、サロメチール、亜鉛華絆創膏、ピック膏、ガーゼ、脱脂綿、油紙、繃帯等である。

「七房、診察」と叫んで、用務者が房の扉を開けると、受診希望者は扉の所へ集る。保健

助手である部長は一人ずつ容態をきいて、「お前は何処が悪い？ え？ 頭がいたい？ 熱はどうだ。よし、アスピリン二包」と云うと看病夫は回診箱からアスピリンを二包取り出してその受刑者に渡す。

「さあ次、何？ インキンか。出して見よ。よし、看病夫、ザリ精を塗ってやれ」

「次は？ 下痢か、一日何回程だ、そうか、看病夫、整腸散一包」

「え？ お前はとうした。息が苦しい？ 熱があるようだな。これは診察だ」この場合は看病夫が回診簿に記して置いて、午後、呼び出し係の看守が患者を集めて、医務室へ連れて来るのである。

「何？ 夜眠れないからアスピリンを呉れて？ 馬鹿、アスピリンは眠り薬じゃない。余計なことを考えないで居れば眠れる」と云う風に回診は次々と廻って行く。

刑務所で病気になる程心細いものはない。成程、整った病舎はあるがこれに入るのは仲々大変なのである。大抵の病状は工場回診で処置される。工場回診で医者の診察が必要であると認められて始めて医務室で医者の診察を受けることが出来るのである。医務室へ行っても大抵は診察をして貰って、二、三日分の薬を貰うのが精々である。少し症状が重いと「舎房預け」と云って、一時的の病人を収容する房へ入れられて二日間を一区切として静養が許される。長期間服薬を必要とする者であって、而もその症状が作業を休む必要のない者は「非休養」と称して、作業に従事したまま服薬が許される。作業に従事することが不可能であり、而も、相当長期の療養が必要な場合に始めて「休養」、即ち、丑

い病衣を着て病舎で療養することが許されるのである。受刑者の病気には「トンスケ」即ち偽の病気が多いのである。作業を怠けてプ

ラブラしていたい為に「トンスケ」を用いても右の様に関門が多いと、「トンスケ」では仲々「休養」まで漕ぎ付けることは容易でな

新入
ボク
で
ミ
ン
グ
ー
と
ス
ホ
ン



を
け
つ
て
床
に
し
よ

ん
ぼ
り
と
坐
っ
て

お
た



五

いのである。

工場回診で受診することはよい退屈しのぎであり、医務室まで行くことは一層の退屈しのぎであり、あわよくば「休養」或は少くとも「舎房預け」にして貰えれば、こんな楽なことではない。初犯で仮釈放を唯一の目的としている受刑者には比較的少ないが、前科何犯にもなり、どうせ満期まで服役せねばならぬ連中には、あくせく工場で働くよりも、どうかして「休養」にして貰って、ぶらぶらと満期迄過そうと云う魂胆の者が相当多いのである。これが刑務所に於ては「トンスケ」病の多い原因なのである。

新入

新しく入房して来た者がある場合も単調さが救われるのである。他の房から転房して来る場合、訓練を終つて配置に付くまで、暫く「二舎預け」となつて入房して来る場合、工場の一部縮小などで二舎へ暫く預けられる場合など色々あるが、これ等の場合は新しい顔が増えたと云う点では賑やかになるが、同じ様に刑務所にずっと居る連中だから別段新しい話の持ち合せもない。受刑者が最も歓迎するのは新しく、特に社会から直接に刑務所に

入つて来た連中である。

私が入所して十日余りして新入が一人入つて来た。チンピラ風の男であつたが、ニコニコした人好きのする青年であつた。私は彼が入つて来たお蔭で食器洗いと掃除から解放された。この青年の名前は門田と云つたが、彼は一ヶ月後に起つた七房の煙草事件の火元となつたのであつた。

その次に新入の入つて来たのはそれから一週間程後であつた。その日は偶々日曜日で、それ迄天候の都合で延々になつていた春季運動会が開催された日であつた。中食のため運動場から房へ歸つて来ると、三十余りのひげの濃い上品なやせ型の男が、ボロボロのジャンパーとズボンを付けて床にしょんぼりと坐つていた。私達がドヤドヤと入つて来るのを見てその男は―彼の自己紹介で大林と云う名前が分つたのだが―きちんと坐り手をつかえて

「どうぞよろしくお願いいたします」と丁寧に挨拶をした。

この大林君の語る所によると、同君は広島に本社を持つ或る商事会社の社長さんで、取引上の手違いから、仕入代金の支払が不可能になり、それが詐欺罪に問われたのだそうで

ある。全く現在の商事会社は全部とは云わないが、詐欺横領と正当な取引との紙一重の所を危い綱渡りをしてゐることが多いのであつて、大林君はこの危い綱を渡り損ねた訳なのである。

徳川時代は牢屋には牢名主、すみの隠居、其他の役付の囚人があつて、新入りがあると牢名主の前に呼び出し、

「これ、新入り、耳の穴かっぽじつてよく聞け。此処はな、地獄の一丁目とあつて、二丁目とない所だ……」など云うおどし文句で新入の度胆をまず抜いたそうであるが、これから見ると現在の刑務所は誠に民主的で且つ紳士的である。

「今度入つて来た誰それです。どうぞよろしくお願いします」と新入が挨拶すれば、「こちらこそ、どうぞよろしく」と挨拶を返す。これで済むのである。

実際に見聞した訳ではないが、或る刑務所では新入の挨拶が仲々むづかしい所もあるそうである。新入が入所すると、便所の揚板の上にきちんと坐つて

「御牢内三尺の板を拝借いたしましたして御挨拶申し上げます。お兄さん方とは初の対面です。私、名前は〇〇、年は〇〇才、生国は〇〇県

〇〇郡〇〇村です。娑婆の渡世は〇〇です。罪名はタ、キ、刑期は本刑が五年、二刑が一年、併せて六年です。ムシへ入るのは今度が二度目です。万事、新入の不束者、お兄さん方のお目に余る所が多いでしょうが、本日唯今より御厄介です。どうぞ何分よろしく御引廻しをお願い致します。」と云うような、やくざの仁義もどきの挨拶をせねばならないと云うことであるが、本当かどうか疑わしい。

「新入いじめ」と云うことも耳にするが、これも亦真偽の程は分らない。極めて一部の者がいたずらにやることはあるかも知れないが、私の経験によると、受刑者相互の人情は厚いものがあり

新入はむしろいたわられ、歓迎されるのである。『犯罪者』『囚人』と云う言葉から普通の人達は猙獰な人相の悪の象徴のような人間

る。中老人であつたが、窃盗の前科八犯で、半生の殆どを刑務所で送って居り、その時が九犯



を連想し、刑務所と云えば、これ等の形相凄まじい悪人共を檻へ入れてある人外境と想像し勝ちであらうが、併し、実際は決してそんな人間でもなく、そんな場所でもないのである。勿論、大勢の受刑者の中には見るから凶悪な人相をした人間も居れば、異常性格者もある。又、懲罰房でうしろ手錠をはめられ、大小便は垂れ流しで、飯は腹這になつて、口でじかに食べている光景などは確かにこの世乍らの生地獄である。然しながら、これ等は極めて少数の例外である。

私が警察署の留置場で数日一緒に暮した8という男は、四十才を超えた

目の犯罪であった。一般の人々はSがどんな兇悪な男かと思うであろう、然し彼は実はおとなしい、気の弱い男なのであった。第八犯目の犯罪と今度の犯罪との間には約二年の間隔があり、その間にすっかり足を洗って、人の世話で細君を貰って子供も儲け、S君は人夫をやって真面目に働いていたのであったが、同君の致命的な欠点は酒好きと云うことであつた。毎朝働きに出る前に一、二合、ひる飯の時に三合、帰ってから晩酌に五合の焼酎を飲まねば、気分がはつきりしないというアルコール中毒患者であつた。しがたない人夫の収入で、一日一升に及ぶ焼酎が賄える筈はない。従つて、同君の家計は無理を重ね、どうにもあがきが付かなくなつた時、同君の心の中に不図甦つたのが盗心であつた。意志の弱いS君は酒のためには妻も子も過去の苦汁も忘れ、腕に覚の窃盗を再び犯したのであつた。元来が意志の弱い男である。一旦自製の堰が切れると、あとは毒食わば皿までと云う自棄が加わつて、窃盗で酒代を稼いでいて遂に逮捕せられたのであつた。彼の犯罪そのものには別に同情する余地はない。然し彼は決して悪人ではなく、だらしない意志の弱い人間に過ぎないのである。留置場に於ける彼

は温順そのものであつた。彼の一番の心配は子供であつた。その次には前科を知らないで結婚した妻が彼の正体を知つて彼から離れて行きはしないかと云うことであつた。彼の煩悶は傍で見ていられない程だつた。すると彼が入つてから一週間程して、細君が子供を連れて面会にやつて来て、彼の従前のことはすっかり水に流し留守中は子供を養ひ、彼の出所をいつ迄も待っていると彼に約束したのであつた。彼はこの面会によつて、喜びの頂点に達した。欣喜雀躍と云うのは正にこのことだと思える程彼はすべての希望を取戻し、自分の犯した罪を真心から反省出来る様になつた。誠に人間の本性は善である。その翌日、彼は寧ろいそいそと、自分の罪を清算して、明るい身心で妻の許へ一日も早く帰れる様努力すべく刑務所へ送られて行つたのであつた。

七房で二ヶ月足らず一緒に暮した高嶺君はまだ二十一、二才の青年であつた。彼は強盗罪で五年の刑に服しているものであつた。然し高嶺君から受ける感じは、凡そ「強盗犯人」と云う言葉が与える連想から、かけはなれたものであつた。背のすらりと高い、丸顔の子供らしさの失せぬ表情、清く澄んだ眸、そこ

からは悪のかけは微塵もうかがえなかつた。その上、高嶺君は敬虔なクリスチャンであつた。こんな純情な、清らかな感じのする青年がどうして強盗などにと、彼に会う人はすべて不思議に思うのであつた。高嶺君の家庭は中流の上の生活をして居り、生活費に困るとは思われない。その上、一家揃つてクリスチャンなのであつた。然も彼が強盗を犯すに至つたのは全く悪友の誘惑だつたのである。事実、彼が強盗に行つた時は、強盗に行くのだとは知らずに行つたさうである。私が彼が五年も刑に服さねばならぬのを見るのは痛々しくてならなかつた。彼は閑さえあればバイブルをひもといていた。

更に、私が刑務所に在所中に一番親しくなつた人に内山君がある。彼は或る銀行の小さな田舎の支店をピストルを持つて襲つた所謂「銀行ギヤング」である。彼は目下六年の刑に服役しているのであるが、私は二舎時代に彼と相識り、其後は、二工場、医務室と、全く同じコースを踏み親しくなつたのである。彼こそは「強盗」「銀行ギヤング」などと言ふどぎつい言葉とは凡そかけ離れた印象を与える人である。入所以来、精神的煩悶からめつきり白いものが増えたと云う胡麻塩頭、長

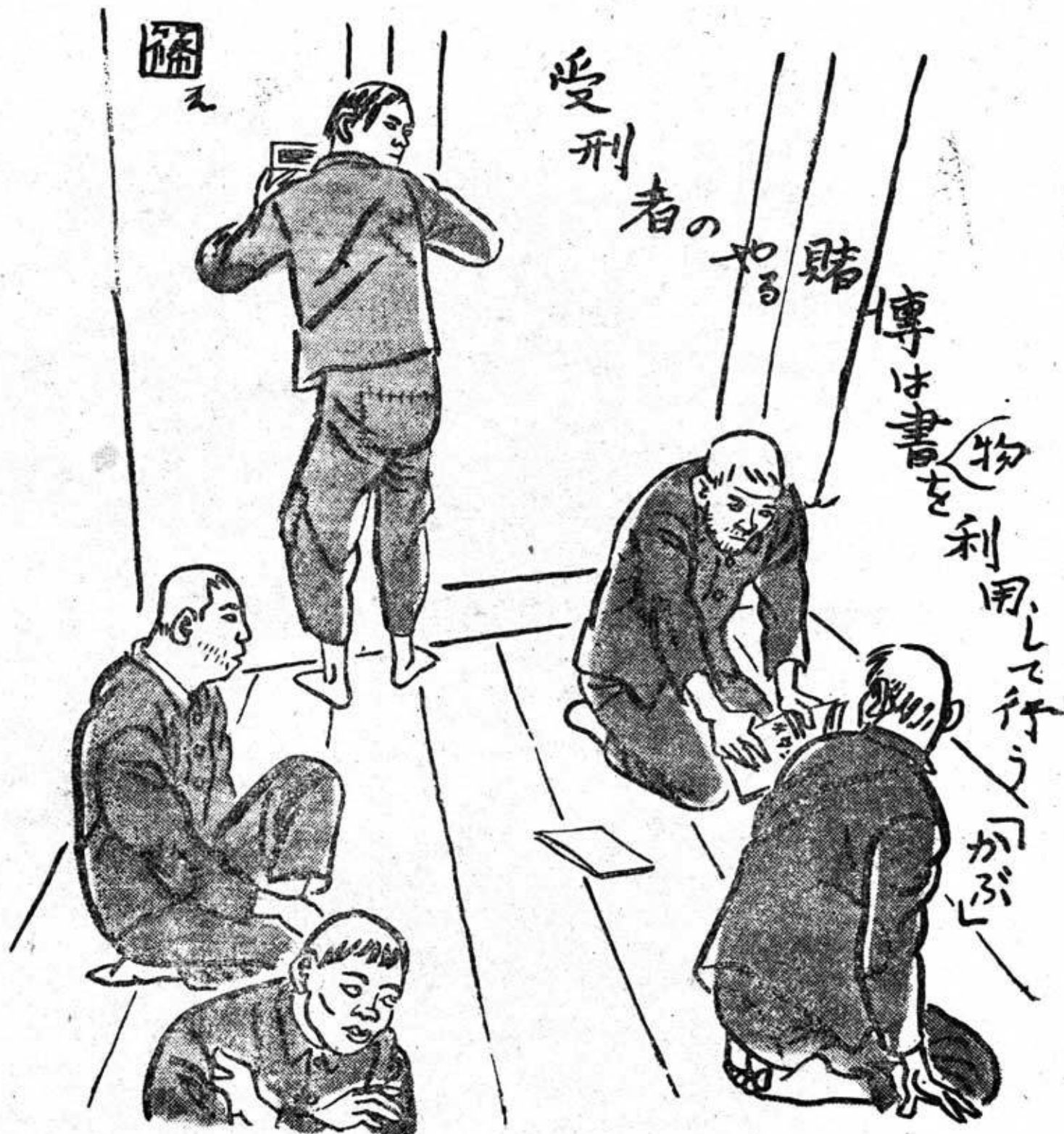
身で好人物がありありと表れている風貌、私をして云わしむれば、彼は「強盗」と云う觀念にびつたりとあてはまらない人柄であると云うに止まらず、彼は「紳士」でさえもあるのである。彼の人の柔和さは彼が居る所をすべて和やかにした。而も彼が自己の身を持つることの厳格さ、そしてその職務に対する忠実さは単に受刑者の中にあつて模範たるに止らない。普通世間にあつても極めて高く評価さるべき秀れた資質なのである。私が彼を「強盗囚」であるにも拘らず、「紳士」であると云つた所以である。然らば、この様に秀れた資質を持つ彼が何故「銀行ギャング」の如き兇悪犯罪を犯すに至つたのであろうか。私は彼の犯罪を詳しく聞いて、人間の心の隙と云ふことの恐ろしさに、慄然とせざるを得なかつた。彼は戦争中は職業軍人で衛生大尉であつた。終戦後、彼は畳の製造業を始めた。この仕事は彼の人の好きや、軍人らしい単純さから折々人に欺かれることはあつたものの、概ね順調に行つていたのである。然し彼を苦しめたものは、税金であつた。彼は生粋の商人ではない。商人としての図太さは持つていない。彼は真正面から税金と取組んでその金策に身を削る苦勞をした。或日、彼

は予て戦時中から所持していたピストルを付近の町で売却するために、これを持参して外出した。ピストルの如き兇器を所持していることとそれ自体が既に犯罪を構成していることを彼とても決して知らなかつた訳ではないが、戦地に活躍した軍人であつた彼にとってピストルを所持することを常人程は仰々しく考へなかつたのであつた。然し乍ら、この日、ピストルを持って家を出たと云ふことが、彼の生涯にとって致命的な転換をもたらした、その日をして彼にとって運命の日たらしめてしまつたのであつた。

人の心の奥底は知る由もないが、彼の人の柄から推し測つて、彼が最初から「銀行を襲う計画」を持って、ピストルを用意して家を出たとは私には考へられない。税金の工面、金の必要、戦地で経験した殺伐さ、それに現にピストルを持つていゝと云う事実、これ等のために彼の脳裡に瞬時の混乱を起し、理性が錯覚の彼方に押しやられてしまつたのである。彼は寧ろ単純な男である。「金がほしい」——「金を奪う」と云う二つのことが、彼の脳裡に於ては簡単に結び付いてしまつたのであろう。「銀行を襲う」と云うことを考へ付くと、彼にはそれがあれだけの騒ぎを引起し

た異常なこととは心理に浮ばず、日常茶飯事のような何でもないこととしか考へられなかつたのであろう。彼が途中で強盗を思い付き、良心と悪心との葛藤に苦しんだ挙句、遂に誘惑に負けたと考へるのは、むしろ誤であらうと私は思う。彼は心の隙に不図その氣になり、その氣になつた時は彼の理性や良心は既に完全に影をひそめてしまつていたのであろう。彼はその町への道をふらふらと銀行のある村へと変えてしまつた。

表現の方法が些か拙いが、彼は淡々と銀行へ入り、淡々とピストルを突き付け、淡々と日常茶飯事の如く金を奪ひ、そしてこれを我身につけてみて、始めて自分のやつたことが何であつたかに氣が付いて愕然としたのであつた。彼には妻子あり、名望家の伯父あり、ちやんとした職業があつた。青空無宿で、強盗をして奪つた金をどこかに身をくらまして使うと云う様な輩ならいざ知らず、彼がこの様な手段で奪つた金を無事に持つて帰りこれで税金の支払を済ませ、而も依然として従前の生活を續けて行くと云う様なことが果して可能かどうか、彼にその時、一片の理性さえ残つていたなら、こんなことは云う迄もなく直に分つたに違いない。彼は常識の豊かな人



である。然も尚、常識で判断出来ぬ馬鹿なことを敢て犯すに至った心理、これ、私が心の隙と云った所以である。故に彼の理性が心の間隙を一寸でも埋めた時は彼が己に返って愕然とした時である。この時、既に彼の心は自首したに等しいのである。事実について、彼が暫く山中を彷徨したのは彼の逃避本能からである。「銀行ギャング」と云う恐ろしいレツテルを貼られても、彼の人柄は、その恐ろしさを却ってユーモラスなものにしている。極めて偶発的な犯罪、彼に依って二度と繰返されることなどは考えられない犯罪、彼は今その罪滅しに六年の刑に服しつつあるが、彼は全く刑務所の紳士である。

一口に囚人と云っても決して一律の概念に依ってこれを品定めすることは出来ないのである。従って新入の人々が刑務所へ入ることは必ずしも兇悪な人間の世界へ投げ込まれるとばかりは云えないのである。現在の刑務所に於いては新入をからかうことはあっても、悪意を以てこれをいじめるということは決してない云ってよい。唯、何と云っても、諸種の制約からして生活様式が普通の生活とかけ離れていることが多い、新入の人々がこれに慣れないために叱られることはある。然し

これさえも古い者が親切に教えているのが普通である。

反 則

曾て或る管区長が私達の刑務所に来られた時、その訓辞の中に「受刑者諸君に許された唯一の自由は空気を吸うことだけだ」と云う言葉があった。実に受刑生活と云うものは極端に自由のない生活である。自由を拘束する絆を一寸でも越えれば直に反則行為となる。たとえれば、受刑生活は反則と云うとげが無数に植えられている道を、このとげに出来るだけ触れないようにうまくその間を縫って釈放と云う目的地向って進む生活である。常住起臥、反則ならざることは極めて少ない。朝「起床」の号令がかゝったのに、特別の許可なくして起床が一分でも遅れると反則である。暑い時に掛布団を下に敷いて、敷布団を上を掛けたら反則である。寒い時に、足許を暖くするために布団の足許をひもでくゝたら反則である。暑い時、裸で寝たら反則である。運動場からガラスの破片（受刑者はこれをナイフの代用にするのである）一つ拾って来ても反則である。飯や菜をやっても貰っても反則である。タオルを首に巻いたら反則で

ある。御飯が不味いからと云って、塩を工面して来て食べたたら大反則である。作業中に雑談したり、雑誌を読んだら勿論反則である。他の受刑者と衣類を交換したら反則である。口笛を吹いたら反則である。碁や連珠は反則である。針や糸を許可なしに持ったら反則である。ポケットを勝手に作ったら反則である。他の受刑者と音信したり、これを取次いだりしたら反則である。書籍雑誌の貸借は反則である。チリ紙に物を書いたら反則である。作業資材は紙一枚持ち出しても反則である。「就寝」が掛って横にならなかつたら反則である。横になってから雑談したり読書したりすると反則である。……等々々々、枚挙に遑がない。右に述べた様に、普通の社会では考えられない様なことが反則になるのであるから、賭博や刺青を入れることや喫煙や同性愛は云う迄もなく大反則である。「懲役に反則はつきものだ」と云う言葉があるが、これは如何に反則だらけの中をこれに引つかゝらない様に切り抜けて行くことがむづかしいかを如実に物語っていると同時に、受刑生活は要領よく反則をやって行かなければ到底生活して行けるものではないと云うことを意味している。

どんな受刑者にしても、たとえ無意識にしても日常小さな反則を犯していないものはあり得ない。と同時に受刑者は意識的に反則を犯しスリルを味わって、退屈から免れようとするものが多いのである。

夕食後、点検が済み、就寝までの二時間をもっとも寛ろく時であり、且つ反則が多く行われる時である。

受刑者は賭博が好きである。賽子や花札がある訳でないから、受刑者のやる賭博は書物を利用して行う「かぶ」が最も多い。賭博をやる場合、一個所にかたまつてはすぐ見付けられるから、何気なくあちこちに坐つて、順次に本の頁の好きな所をパツと開く。各々の頁の数で「かぶ」を争うのである。例えば開いた頁が「二三四頁」であれば合計が九となり、最高である。これに反し、「二三五頁」であれば二と三と五の合計は十。即ちその尻は〇で、最低である。賭ける品物は食事の場合もあるが多くはちり紙である。こんな賭博をしている現場を見付けられたら、それこそ懲罰ものであるから、交替で誰か一人が監視口に立って見張っていて、看守が近付く気配でもすると、すぐ皆に知らせる。これを「シケ」を張ると云うのである。

次は「豆ゲソ」作りである。「ゲソ」とは下足のことで、転じて履物のことである。従って「豆ゲソ」とは「小さい草履」の意味である。「豆ゲソ」は極めて小さいもので、丁度、蚤位の大きさであるが、それでもちやんと花緒がすげてある。囚衣の端きれをたんねんにほぐした青糸と、恐らくはタオルの赤いすじを抜いたと思われる赤糸を使って、うす暗い電灯の下で全く手先の器用さ一つで草履を編み、青い草履を作ると赤い花緒を、赤い草履には青い花緒と云う風に「豆ゲソ」を作るのである。出来上った「豆ゲソ」は爪の間へ入る程の大きさである。これを作る器用さと根気には驚く外ないが、更に驚くことはこれを入れるケースを作ることである。ケースの材料は歯刷子の柄であって、柄をガラスの破片で適当に切り、便所の枠の花崗岩やガラスの破片でこれを色々な形に仕上げるのであるが精巧なものは三味線の胴に棹も糸もちやんと作ってあると云う驚くべきものがある。普通は印籠型にするのが多い。ケースの形が出来上ると、次は「豆ゲソ」を入れるくぼみを彫り込むのであるが、これ又、大した仕事で、ガラスの破片でたんねんにけずって行く。これが出来上ると脱脂綿（受刑者が脱脂

綿を手に入れることの出来る機会は工場回診で軟膏類を貰う時だけである。それで、脱脂綿はしさにトンスケの痔になったりするのである）を底にしき、その上に「豆ゲソ」を一足ならべる。次は拾って来たガラスの破片を克明に石でへらして、ケースのくぼみに合せ、「豆ゲソ」を入れた上へはめ込むのである。これを看守の目を盗んで、仕上げるのであるから、全く大変な根気仕事である。囚人の作った「豆ゲソ」は縁起がよいと云うので、遊び人や花柳界の人々に喜ばれるのである。

一般の銭湯に行っても、近頃は刺青をした身体を見るのは珍らしい。然し、刑務所の浴場に於ては、恐らく受刑者の半数は刺青をしているのではないかと思う程、刺青した身体が沢山見受けられるのである。入所する時、全体の刺青を調べられて、身分帳に書き込まれるのであるが、入所する時は全然刺青の無かった身体に新しく刺青が出現したり、今迄なかった部分に刺青が増えたりすることがある。これはすべて、房で受刑者の手で行われたものであって、刺青を入れた者も入れられた者も勿論反則である。刺青に使う針と墨、特に二舎などでは墨を手に入れるのが苦勞で

あるが、それをどうにかして工面すると、夜暗い電灯の下で施術者を入れて貰う者が、監視孔の真下の壁面にびったりと身を寄せて刺青をやるのである。素人が看守の目を盗んでやることだから、腕や背に図模様を入れることなどは仲々出来ない。割合に多いのは中指の根本に指輪の様な線を入れたり、眉に刺青をすることである。衛生上、随分危険なことであるが、消毒もしない普通の縫針の先に墨汁を含ませ、チクチクと刺して行くのである。刺青をした直後は皮膚がさくれ立って血がにじんでいるが、二三日経つと、傷が癒り、皮膚の下で墨が付いて来て、青色の刺青となるのである。刑務所の中で刺青したことが発覚すると、勿論懲罰を受けなければならぬ。その上、刺青する時は相当痛いに違いない。この様な危険や苦痛を忍んでまで、何故刺青をするのであろう。一つには刺青をしていると仲間にはッタリがきくと云う理由もある。然し、もっと強い誘惑は単調な生活に於てスリルを味わうという点にある。普通の社会に於ては刺青は殆ど見掛けのないのに、刑務所に於ては相当多数にあると云う事実は犯罪の心理と刺青をする心理とに何等かの関連性のあることを示唆するのである。

令嬢おふみの死

川合伊都子

成竹成太郎・画

「処であのふみ子って女どうしたろうな」
「やっぱり今だに忘れないでいる処は頼もしいな。しかしどうしたもこうしたもない、自殺しちゃったよ」

「え、自殺した？ いつ？ 何処で？」

「あの事件の翌る年だ。僕も勿論そんなこと知らなかったんだが、竹の家のママから聞いたのさ、何でも磯子の近くに住んでいたそうだが腹を切つて死んだって話だよ」

「腹を切つた？」

「うむ、彼女のやりそうなことだよ。何しろあの時だつてドスを呑んでいて、ここで死んでやる」ってたんかを切ったくらいなもの」

「そんなこともあったなあ」

「『そんなこともあったなあ』なんてふざけるな、あの時は散々俺に世話をやかせやがって——しかし、君の家まで押しかけて行って『正さんと夫婦にしてくれなきやここで死んじゃう』って伯母さん、寝耳に水で吃驚仰天してしまつたぜ」

「だけど、丁度君が居てくれたんで助かったよ、伯母は田舎者で正直なんだからね」

「まったくだ。だが一寸見られない芝居だったよ、純情可憐な娘だと信じ切った伯母さんがおろおろしながら慰めたり労わったりして

いる所へ僕がひよっこり現われた時はふみ公も驚いたらしい、『マーさん、何だってこんなところへ来合わせたの？』ってがらっと変ったところは凄いいもんだつたよ『妾は本当に正さんが好きなんだよ、それをゆすり扱いにして追っ払おうってのかい』」

「よせよ、つまらないお涙いは——」

「いや君がそんなこともあったなあなんて言うからお涙いするんだ、『たんと疑って頂戴妾の気持見せてあげるから』といきなり帯を解いて襟をちぎるように掻きひろげた。乳の下から腹へかけてキリッと巻いた晒布、その間から白鞘を取り出して抜き放つと逆手にとつて臍のあたりへ擬した」

「伯母は仰天して口もきけなかったそうだな——そして君の態度にも二度びっくりだつたって言つたよ」

「ふふん、そうだったろう、僕も精一杯わろになつて見た。『腹を切つて死んでやる』って言うから『面白い、令嬢おふみの腹切りなら二段抜きで書いてやろうじやないか』って鼻の先で笑つて見せた。しかし内心はびくびくだったよ、あのままぶつと突込まれたらどうしようかと思つてね」

「その後は僕がおさらいしてやろうか、ふみ

公「薄情者！」って君の膝へ取り縋って泣いたってじやないか。そうして二人でどう妥協したのか大森あたりへ引け込んだんだってな」

「まあ、そんな経緯^{いきさつ}になってしまったが、結果は君のトラブルを完全に撃退したことになるんだからいいじゃないか」

「今さら悪いたって仕様もないさ、でその彼女の腹切一件はいつ聞いたんだい」

「うん、久しぶりで三人連れで本牧へ行ったんだ、ホテルで踊っていると僕の方をちら

っちらっ^{ちらっ}と見ている女がいた。初めは無論気が付かなかったんだが、ふと視線を感じたの

で、こっちも注意して見るとそれが竹の家にいた女なんだよ、そうそうあそこのママどう

しているかなと思うと急に行って見たくなって皆を置き放しにしたままホテルを飛び出して竹の家へ行ったのさ」

「もうすっかりメンバーは変つてたろう」

「あゝ、一人も顔見知り^{あはれ}は居なかった。遊ぶ



切せと膝下深、
突き立て、
腰をゆるゆる
乳は揺るひぬ

気にもなれないのでママを相手に駄弁^{だべん}ってたわけだ」

「それでふみ公の一件を知ったのかい」

「まあまあ落付いて聞け、そう本論を急ぐなよ、僕だってその後の彼女の消息を聞きたか

った。勿論彼女の消息を聞きたいからこそ、あそこの家へ友達を放り出してまで飛び込んだんだから。しかしいきなり彼女の話を持ち出すのも照れ臭いから君の噂をしたりなんか

して他の話に紛らしていたんだ。するとママの方から切り出した。『マーさん、ふみち

やん自殺しちやったのよ、知

ってる？』僕は途端に酔がす

うっと醒めちやったよ——マ

マの語るところはこうなん

だ。何しろちよっと剣はある

がああ器量だから家をやめて

からも色々男出入が多かった

が、その内にもと船乗りだっ

たという男と磯子の方で世帯

を持った。その男ってのは何

商売だかわからないが横浜に

本宅があつてつまり彼女は二

号ってわけさ、ママの処へも

二、三度訪ねて来たそうだが、いつもどこの

若奥様かってような上品な身なりをして世間

話ぐらいで帰ってしまい、一向正体が掴めな

かったそうさ。それからぱたり来なくなっ

たので、どうしたのかと思ひながらもそれな

りになっていた処、三月幾日とか言つたがそ

の日の新聞に内妻剃刀自殺という小さな記事

があつたそうさ。見ると名前から年から処ま

で全く彼女なのだ、内容は西洋剃刀で割腹と

おふみの
やがて死に就く雪の肌
左の介錯は腹切り



だけで原因もヒステリーが昂じてとあるだけで一向判らない。で、ママはその翌日出かけて行ったそう。男の方からは誰も来ていないし、彼女の身内ではあるのかないのか一人もいない。雇い婆さんと近所の人たちがわやわややっているだけだったそうで、その時の様子を聞くと、彼女は長襦袢を腰巻もしい素肌で羽織っただけで下腹を幾筋も幾筋も滅茶々に掻切って居り、おまけにあそこからデルタの処まで縦に切った傷さえあったそ

よ、正さんの様な気の弱い人さっぱり忘れちゃうから可愛がってね”なんて甘ったるいことを言うから僕も”この家を出たら俺のことも忘れちまいな”って茶化してやった。するといきなり僕を押倒して馬乗りに跨って”そんなこと言うならいいわ、あんたを殺して妾も死んでしまうから”って例の短刀を引っこ抜いて僕の胸元へ突つけた。多少の不安は感じたが眼付を見ると真剣に僕を殺そうという感じがやないらしい。”心臓がやすぐ死んじ

うだ”
「凄いいことやっ
たんだね、やっ
ぱりヒステリー
かい？」
「その辺は結局
本人以外には誰
にも判らないが
もともと彼女は
腹を切ることに
性的昂奮を求め
ていたらしい、
白状するが、実
は大森の一夜も
そうだったん
だ。”本当は妾
貴方が好きなの

やうわね、死んじやっちゃつまないうんと
苦しませて、そうやっぱりお腹がいいわ、あ
んなのお腹を裂いてそれからあたしのこのお
腹、ほらここを切るのよ”なんて囁言のよう
に独りで喋っていた”
「すると別に自殺する程の原因もなしに自慰
的切腹の行き過ぎかね”
「さあ、それはないだろう、奇クの何時のた
ったかに『切腹マニヤが切腹自殺することは
ない、自殺するときの方法として切腹が選ば
れるだけだ』というような論旨の一文があっ
たが、僕もこの説を肯定する”
「いや僕には判らないが、だとすると彼女に
は自殺する原因があったと言うんだね”
「直接原因がなくなつて過去の色々なことを
振り返って見たり将来を考えたりして所謂厭
世自殺って奴があるじやないか。彼女の過去
の波瀾曲折を知っている君には判るだろう”
「肯けないこともないね、ダンサーからチャ
ブ屋の女になり二号になり、その間に散々男
を手玉に取った彼女だからね、しかしまだ三
十そこそこしか見えないあの美貌なら死な
なくともどうでもなるじやないか”
「そこだよ、勝気な彼女のことだ、或は容色
の衰えるのを極度に厭ったかも知れないよ、
畢竟真相は本人が知るのみだ、まあお互に他
人でもない、彼女の冥福を祈ってやろうよ”

血 染 の 毛 綱 (二)

伊 藤 晴 雨

品川の青物横丁、其次の南馬場（みなみば
んば）で降りて水菓子屋の横丁を曲って南品
川二五二、江見水蔭の古色蒼然たる門構えの
戸を叩いて居る犬男がある。表通りはお会式
の題目太鼓やら万燈やらで、池上の南門寺へ
行くもの帰るもので賑わって居るのに引換え
て四辺はヒッソリ閑としている。豆柿が真ッ
赤に熟して居る初秋に洗ひ晒しの浴衣に腐れ
縄のような兵児帯を締めて居る。履いている
下駄も板の様に減っているのは御沈落を物語
って余りありだが、此男の顔には何処となく
愛嬌がある。

「先生、江見先生、今晚は……今晚は」

「誰だい、今頃になって門を叩くのは」
「栗鳴ですよ先生、狭衣ですよ、お起して済
みませんが五十銭貸して下さい」
「五十銭はいゝが、今頃どうしたというんだ
ね」
「何しろ一寸開けて下さい、外にもお話しが
あるんですから」

潜り戸を開いて玄関を入った間の（よりつ
き）が二畳で、次の八畳の一間が主人公水蔭
先生の書齋であり、寝室であり、応接室であ
り、宴会場であり、借金と言訳をする場所に
もなり、時に或は文七角力の棧敷ともなる当
家随一の広大なる部屋で、薄い蒲団が二組敷

かれて其一方には水蔭先生の奥様が、昔品川
の土蔵相模のお職であった時代の遺物と思わ
れる胴抜き長襦袢を仕立て直した丹前風の
かいまきを掛けて、スヤ／＼と眠って居て、
電燈のあるのにも拘らず床の間には明治初年
頃の古風な台ランプが異彩を放って居る。其
横には中味は知らず、これも先祖の遺物と思
われる具足櫃が鎮座して居る。而して床の間
には人類学の研究家丈けにコロボツクル時代
の土器や埴輪が大切そうにこれも亦古風な硝
子箱に入って飾られてあった。何の事はない
場末の古道具屋も跣足で逃げ出し相な様相で
ある。

「五十銭ばかり何にするんだい」

「今ソコの角であさりめしを食ったんですが、お会式の混雑で紙入れを落しちゃったんでね、金を払おうと思ったら……江見さん所の者だといって借りて来たんで」

「えッ、角のあさりめしや？ 僕も実はあすこには借りがあるんだ、一緒に払うからいゝや」

「そうですか、じゃあ別に五十銭拝借」

「待ち給え、其位はあるだろう」

水蔭は墓口から五十銭銀貨をだして渡した。

「先生昔し大井川の人足が夏川を質に入れて金を借りたという話がありますが、来年の春場所の予想梅と常陸の取組みの予想を書いて鯖崎君の取り口の挿絵をつけて東京朝日から原稿料を借りたいんですが、先生一つ保証人になってくれませんか」

「君そいつは困るよ、大いに困るよ君、君は又例の文士劇の借金の穴埋めじやないのかい」
「違いますよ先生、来月は娘のすみ子の七五三で少し入用なんでね、博文館の方も武俠界の方も少し工合が悪いんで」

「僕だって知っての通りなんだ、今東京毎日新聞から頼まれて居る『人魚の胆』という小

説の原稿料を十回分丈け前借した金があるから、これで足りるなら持って行き給え」

「人魚の胆？ ヘエー相変らず変態式な題目ですね、どんなものですねえ」

「舞台は房州の保田の海岸さ、鋸山の麓に千葉県の知事の別荘があるんだ、これへ忍び込んだ人魚のお磯という女賊が其知事の最愛の令嬢を縛って漁師の籠へ投げ込んで置いて、それから又其令嬢を魚の水溜めの中に投げ込んで水責にする。水溜めの中の章魚が令嬢の股倉へ這入り込むというのが第一回さ」

「相変らずに水蔭式ですね、それで、挿画は？」

「伊藤晴雨さ……あの男の事だから、こんな挿画なら安い画料でも喜んでかくからね、何しろ東毎と来ては一回が四円というんだからね、挿絵だって沢山はだすまいよ」

「成金（なりきん）」という言葉が出来た時代に文士丈けはまだ恵まれませんか」

「全くだよ君、是『人魚の胆』は今度浅草公園の常盤座で武田正憲の脚色で来月勾々上演という事に決ったんだ」

「そりや面白いでしょうなア、其令嬢の役は誰です」

「女優だよ君、こりや女優でなけりや駄目だ

といってやったんだ、太夫元の根岸吉之助の妾になって居る石井薫という女優さ、其外にも人魚のお時という女が縛られて松葉いぶしに遇ったり、山窩の群れに捕われて吊し責にされる処など盛んに女の責場を出してくれという新聞社の注文さ」

「此頃は女を縛るのが流行るそうですが、何処が面白いんでしょうね」

「河豚を喰わない者に河豚の味を語ると同じ事さ、豎子教う可らずかハハハハ」

常盤興行株式会社の三館共通という興行政策が大当りに当たった。三館共通というのは金龍館のオペラ、常盤座の新派劇、東京クラブの映画（まだ其頃は活動写真といって居た）の三館を何れか一館の入場料で共通に見られるという破天荒な興行法である。これが大当りに当たったのと、其頃日本全土が黄金時代的好景氣に恵まれて、現代の百円とは凡百円紙幣の価値が違って居た頃、強烈な刺激を求め一部の人は女の責場を喜ぶ……という流行を来した。此動機を作ったのは潜越乍ら筆者では無いかと思つて居る（誰かに叱られるかも知れないが）のはチト葉が強いかも知れない。



鬼無里松厳寺 昭和十五年九月十日

此常盤座の楽屋は小劇場としては稍整って居る。(石井薫さんへ新よし原ひいきより)と染めた部屋のれんを潜って這入って来たのは原作者の江見水蔭と東京毎日新聞記者安岡夢郷という男である。江見さんは帝劇の伊坂

梅雪より借りたうずら縮緬の紋附の羽織を着て、今日はリウとした服装をして居るのに引きかえて、夢郷の方は汚れ腐った縞目の判らなくなった様な柳原物らしいお召の袷を着ている。水蔭先生は薫の大座ぶとんの上に悠然



と腰を下して、
「石井君いゝ出来だよ、後手に縛られて海岸に転がっている形は素敵だよ、殊にあの腰巻の少し出た所はいゝね」
「アラいやですワ先生、あたし極りが悪いんですもの」
「此前興行の鈴ガ森事件の女、あれよりいゝ出来だよ」
「先生、どうか悪い所は御座いませんでしようか」
「君々、気をつけて口をきゝ給え、此処には新聞記者が附いているんだよ、東京毎日新聞の安岡さんだよ、ネエ君、どこかいゝ所がありませんかというんなら判っているが何処が悪い所はと来ると其、何んだね、皆んな悪い処だといゝたいね、どこかいゝ処といえれば悪い中にいゝ処を拾えるというもんだ、第一にだよ後ろを向くと縛られた縄を手で持って居るのが見物に判るのは一番いけないね、明日から本当に縛らなくっちゃ実感がでないよ、日劇の浦里だって本当に縛られて居るのと手で縄を持って居るのでは専門的に見る人が見れば直ぐ判るからね、次の幕の松葉いぶしには本当に縛られてくれ給え」
「でも先生、痛いでしょう、梯子へ縛られる



しに遇う所は一日中の見せ物である。舞台中央に丸物の杉の木、神木に立ち掛けられた梯子に半裸躰に見える程肩の肉を出して厳しく縛り付けられた静田健という女形の人魚のお磯の役は

「思い切って有りの儘かき給えな、此切場から金巻封頂きなんて書かなくともいゝさ」
「イヤ早やどうも恐れ入りましたナア」

官権万能時代であった其頃、知事の令嬢が漁民に辱められるという丈けでも肉体精神両面の苦痛は最大のものであると思われて居たので、犯される所は勿論陰になって居るのだが、裾は乱れ豊満な肉体を見せた被縛芸術（そんな言葉はまだなかったが）は第一次世界大戦で我日本丈けが漁夫の利を占めて日本全土に黄金の波が漂って居た頃である。新国劇の始祖沢田正二郎が剣劇を創めたのも此時代であった。財用足りて何かしら満たされたい群衆は悲劇を好んだ、女の責場が観客の官能を刺戟するのには持って来いである。東京市内の大小各劇場で浦里の責場が一年間に五十何回も演ぜられたのも此時であって、其れから引続いて新聞の小説や映画に女の責場が盛んになる様になって来た。（いつなつかい）は永遠に生きて居るのだと思う。

大正十一年十月号の早稲田文学に天才鈴木泉三郎の幡刑（ひあぶり）が掲載され、市川弘升事鈴木邦三一座に依って丸の内の帝国劇場に上演されて警視庁の人々は胆を潰した。

のは」

「旦那に股をエグられる時より痛かないだらうぜ」

「存じませんヨ、お口の悪い先生ね、あッ二丁ですわ、一寸失礼いたします」

薫は疵髪に白いリボンを掛けた髪を被って派手な裾模様の着物を端折って舞台へ出て行った。

.....

「人魚の胆」三幕七場の第五場秩父山中永川明神の境内で梯子に縛り附けられて松葉いぶ

仕掛物のかつらの髪が乱れて顔に掛り、特殊部落の村民に縛られて辱しめを受けて身体をくねらせて必死となって縛めから免れ様と悶える形ちが濃艶極まるので、大向うから（もう少し蹴出しをまくれ）（股倉を見せろ）など、露骨な半畳を打ち込む奴も居る。棧敷で見て居る水蔭先生は笑って腮を撫で、ニヤニヤ喜んで、涎を垂らして居るのを劇評を書く安岡記者が認めて、

「江見先生、此処ン処を正直に書くといゝんですが余り宣伝に過ぎないでしうか」

「変態性態」という新熟語が流行し出したのも其頃であった。

却説(さて)話しは又人魚の胆に移るが、小説の舞台になって居る房州鋸山の日本寺とは一体どんな所かといえ、地理で云えば東京湾の咽喉、横須賀の観音崎に対して一番津崎の鼻が出て、源頼朝が伊豆で戦敗れて主従七騎で逃れて来た後に建立したのが日本寺で山中に寛政年間の人で石工甚五郎が刻んだという五百羅漢ならぬ千二百羅漢がある。グロ小説家の水蔭は此石の羅漢が動き出して美しい未婚の娘を縛るといふのだから、豊富な想像力の持主である。

日本寺の本堂の後から房州石の産地になっている石切場や頂上から「浜金谷」(はまかなや)へ出られる八州一望台(はっしゅういちぼうだい)へ行く左側に無漏窟という天然石を彫って仏像を安置した祠があって、此祠柱に梁川星巖の詩が彫りつけてある。

鋸山春秋五十年 桜台花月倚麗前
人生自是如雲霧 此日從風飛別天

常盤座の舞台装置は、此無漏窟の前で切り出しの羅漢が泥棒に化ける脚色で、原作では保田の海岸になって居るのを芝居では大道具の見せ場が無いので此処へ持って来たので、

美しい裾模様の令嬢「こんな古い言葉がまだ用いられていた」を羅漢が縛り上げるのだ。ボール紙へ描いた羅漢像がムクムク動き出して美しい娘を縛り上げて岩の影へ連れ込む、蔭の声で犯されているという事が判る。見物は見えないものを見様とする所が脚本のヤマである。髪は乱れ赤い蹴だしをチラ附かせてハラ／＼させる処が見物に受ける所で、余り写実には演らない様にと象潟警察からの注意で三日目から至極平凡な演出になって仕舞ったが、此幕が大評判になって十日間大入袋の出通しの盛況を続けた。

主役の人魚のお磯という女賊に扮したのは嘗て伊井蓉峰の対手役になったり、梅沢昇一座の立女形になったり、現在では白嶋の花柳街で見番の書記をしている静田健という俳優で、故人若水美登利に似た肉感的な美しい新女形であった。好色で吝嗇で漁民の膏血を搾る悪知事の娘を盗み出したり、自分から縛られて挑撥的な処女の肉体を知事の官邸の洋室に横たえて、狒々と云われて居る悪知事老爺に自分から弄ばれて手下の泥棒を連れ込んで令嬢を誘拐し、財産を奪い民衆の味方となって痛快な女賊振りを發揮するという大甘の大衆劇で浅草の見物には大受けの新派劇だった。

た。

縛られる女の美しさと残酷美を程よく調和して場面の变化と、人物の出入りの巧妙は流石は文壇の故老丈けあると好評噴々で、殊に五幕目秩父山中梯子責の場は梯子に縛られた娘の髪の毛を生き乍らむしり取る件は、かつらの中に仕込んだ血糊が仕掛けで女の顔に垂れて毛を抜かれる都度痛快な悲鳴を挙げるのを女賊が酒を呑み乍ら眺めて居るといふ地獄絵巻である。舞台奥深に飾られた永川神社の拜殿には奉納の女の髪の毛が下って居る、怪奇な形ちの絵馬も掛けて居る。むしり取られた娘の髪の毛は蛇の様に女賊の手にがらまって四谷怪談のお岩様の髪すきの様に段々に血に染った黒髪が抜かれて来る。

まだ其頃は日本の女は全部長髪で、島田も丸髷もいちよう返しも桃割れもあって、観客席の女の頭髮からは髪油の匂いが高かった。況んや劇場ともなれば多少の色気もある。結髪という女の喜びは芝居を見る女とは切っても切れない女の見得である。髻の毛一本触られてもハツとして胆を冷す其当時の女性は、現代の映画俳優の大部屋の女優が日本人の着物で左りに着る(ホントウに有った事ですぞ、大映の撮映所で……)様な女や、腰元が

足を外輪に裾を蹴飛ばし乍ら歩いて居る様なハイヒール型の女がまだ一人も居なかった時代であるから、女が髪の毛をむしり取られて血を流すという丈けでスリル満点という評判であった。

浅草新仲見世の「みやこ」のおたけさんという美人が居た。文壇のお歴々が此人の結婚を惜しみ浅草の名物を失う事を恐れて、おたけさん非結婚同盟会というのを組織したが日蔭の豆もはじける時は処の騒ぎでなく、誰も知らない間に某陸軍中尉と結婚して姿を消したかと思う内に吉井勇の女房になってしまったが、京童の口を密に借用すれば最初の筆卸しが井上正夫で、次が沢田正二郎であったというが、御兩人共故人になった今日では怒られる事もないだろうから事の序を以て記しておく。

扱水蔭先生と安岡記者は頭取の仁科太郎（一名悪太郎という、脚本料を呑む事から来た敬称？）の案内で此みやこの三階に石井薫を連れて車座になって飲んで居ると、仲見世の敷石に響く下駄の音も少なくなつて夏の夜風が涼しく弁天山の鐘の音が殊更に冴えて聞える様だ。水蔭先生は石井に盃を差し乍ら、「一日に君は何度縛られるんだね」

「日曜は四度ですわ」

「ふだんは？」

「二度なんですの、でも二度目の方が演りいゝんですの、先生これからこんなに二の腕が悲になりますの、梯子から落ちない様に縛られると感じが出ていゝのですが本当に縛られるので腕が痛みますの」

薫ははれぼったい一重瞼を伏目勝ちになつて見ない様な顔で水蔭先生の顔を見て居る。

「君の縛られ方は真剣だ、いゝよ全くいゝよ感心だ、芸はあゝ行かなくっちゃ本當じやないね、根岸の大将はナンと云つたい」

一旦那は八カ間敷いんですの、あんまり足や股を出しちゃあいけないって云うんですもの」

「妬けるんだらう」

「ソソ事じやありませんわ、ホ、ホ、ホ、」

「仁科君、野暮な事を聞く様だが此俳優の身上はどんなもんだい」

「先生ヘッヘッヘッヘッへ、お気に召しましたら何とか致しますがねえ、ヘッヘッヘッヘッへッ、先生には帝劇の村田嘉久子さんがお有りの癖に、ヘッヘッヘッヘッ地獄耳ですよ」

「冗談だよ君、根岸の持ち物に僕等の貧乏文士が指一本だつて」

「オット皆迄のたまうなでゲスよ、幕内名代の悪太郎心得たもんでさア、ねえ先生時に今度の芝居の原作料の金一封、これを先生の前へこう置きますよ、ようがすか慥に先生の前へ置きましたよ……こう先生の前へ置けば誰が見ても先生に差し上げた様に見えるさあ、ソコでそれを此儘私が頂く……という事に致します。安岡先生、今夜は私と一シヨに浅草情緒という奴を味って頂くという事に願いたいんで、江見先生は奥さんも通人で居らつしやるし石井さん、君は先生をお送り申してくれ給え、ナアニ万事は羽織の紐で胸にあるという事だ。劇評でウンと褒めて書いて貰えばおまえのお袋も喜ぶし、お袋の商売が産婆だ、万に一つという時にやあ又それ相当の手があるだろう、じゃあ先生お先に御免蒙ります。安岡先生いらつしやいよ、いゝからいらつしやいゝ」

仁科は下の帳場で原作料の封筒を切つて勘定を払つて安岡記者を連れてソ、クサと出て行つてしまつた。おたけさんが銚子を持って上つて来た。

「オヤお珍らしいじやございせんか石井さん、今日は先生のお伴、そりやあまあよう御座いますね、仁科さんは帰りましたよ、エ御

勘定とうに済んでおりますよ」

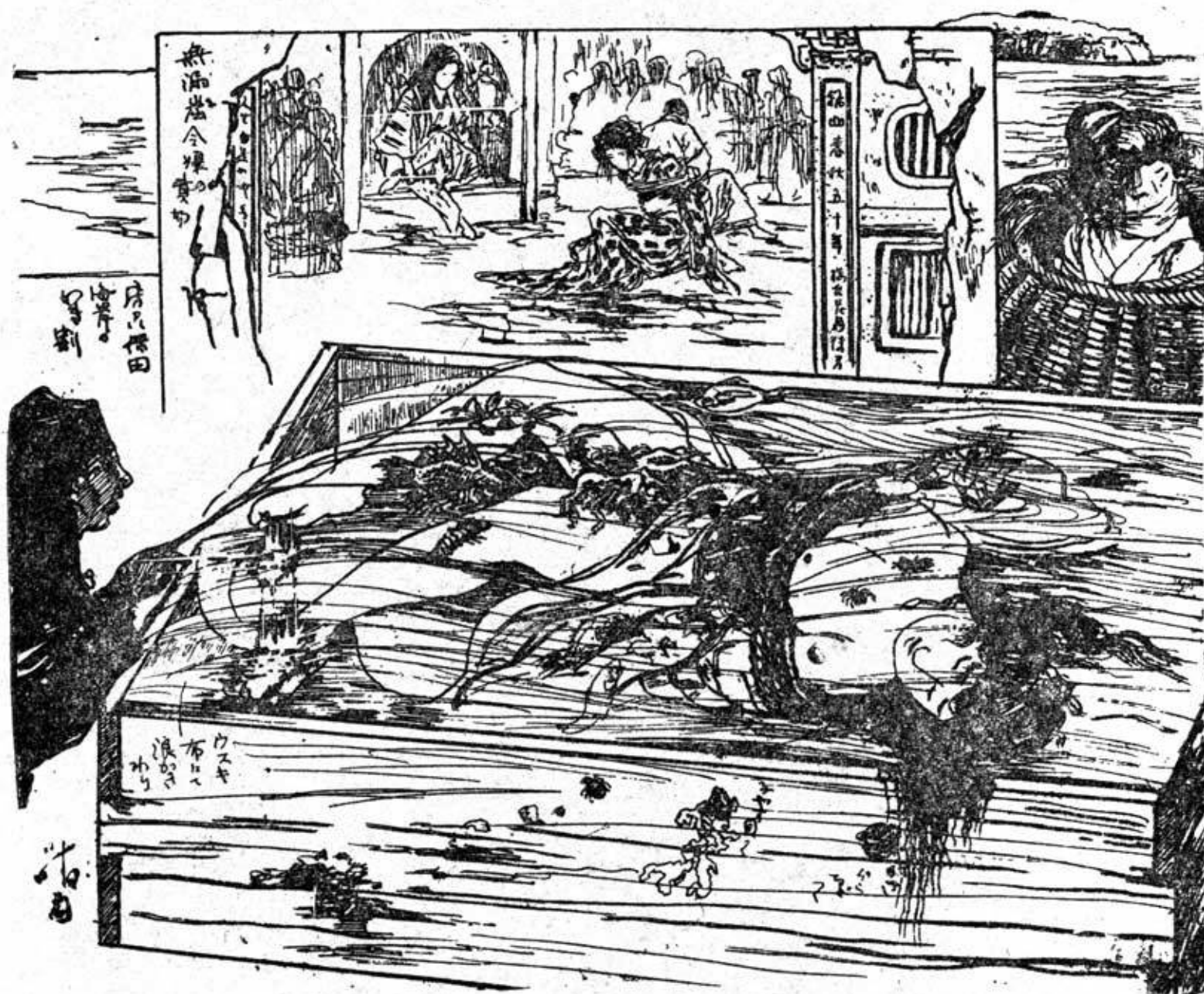
「ソリやあいゝがね、おたけさん一寸水野ン処へ電話をかけてくれないか、此方は江見といて」

「ハイ少々お待ち下さいましまあお熱い所を」

薫は如才なく帳場へ降りていった。

「先生、水野先生は生憎お留守です」

水蔭先生の顔は曇って来た。みやこの勘定は払ったからいゝが原料をアテにして来たのに、薫に自分が気がある様に見られた為にスキを見られて原料料をしてやられたのは芝居道に有り勝ちな事だが折角のキツカケを失って縛った形ちを床の中で実演をして……ソレから宝の山へ入ろうとして軍資金の調達の途が無いとなつては八方塞りである。窮すれば通ず、騎虎の勢



酒は英雄になる。

「おたけさん帝劇へ電話をかけて伊坂を呼び出してくれ給え、もし伊坂が居なかつたら山本久三郎でもいいゝよ、江見だといってねえ、イヤ僕が行こう、電話は下かい」

よろめく足で電話機の前に立った江見先生は急いで受話機を取った。

「ナニ伊坂は居ない、彼奴又女優から稲荷祭の割前でも集めて居るんだらう。山本君を呼んでくれ給え……君は山本君だね、判ったよア、次興行の野士の脚本は出来ている。相変らずだがねえ急に入用が出来たんだが……違ふよく品川へ持って来て貰つては困るんだ、浅草の新仲見世のみやこという家、ア、すぐ判るよ。邦枝完二君が知っている家だ……二百円でいゝんだ、大至急頼むよ、ナニ伊坂に……一々伊坂の判を貰わなくッ

たって取計らってくれ、貰わなきゃあ困るよ……幕内主任の判がなけりや金が出せない、奴何処へ行ったかなア……兎に角君、何とかして取計ってくれ給えよ……ア、明日一杯に書くよ、梅幸の役はいゝが宗十郎が役が悪くって納らないというのかい……大急ぎで書き直すよ。だから金の方を早くしてくれなきゃあ……スグ届ける……イヤ有難う、ムン待って居る〜」

水蔭先生の顔はやっと平常に帰った。

……………

昨夜気(ゆうべけ)のまだ醒めやらぬ江見水蔭先生は帝劇の脚本料で待合の勘定を払い余裕綽々として田原町の通りを歩いて居ると勢いよく走って来た大型自動車に危うく轢かれ相になった。古風な武士気質から怒心頭に発した水蔭先生は「馬鹿ッ」と一喝運転手に浴せると、敵もさるもの引ッ掻くもので黙っては居ない。「間抜け野郎」と云い返した。見るとも無く車上を見ると岡本綺堂氏が柔和な顔で乗って居た。

「やあ江見さん、朝早くからどちらへお出でになりました。私はこれから田原町の高嶋屋の所へ箕輪心中の打ち合せに参ります所です」

「左団次もいゝ作者を捉まえて仕合せですナア、私ももう古くなってしまって冒険小説でもありません、何か方向転換をやらうと思つて居ますが帝劇の重役連中は皆シナ素人の実業家と来て居るんだから広田寅彦の脚本があつても駄目ですよソ。コへ行くと岡本さん、あなたの方が松竹という大座丈けに仕末がいゝ」

「どういたしまして、ユウズウの利かない上に踊りの素養皆無な無器用な左団次の身体を見て書いて居るんですから不自由な事此上なしです。急ぎますから失礼いたします」

謹厳な九州人の岡本綺堂先生は車上から軽く会釈をすると其儘車を飛ばして行った。

「何処も同じ、作者が辛い役者の我儘」と江見先生は昨夜の責められ女の肌、縛った女の感触、小待合の額の文字の「雲烟過眼」の文字など、頭脳は走馬燈の様に廻って何時の間にか花川戸の神谷バーの前迄来てしまった。

浅草名物の神谷バーは電気ブラン、ジン、アブサン、ペーパーミント、何れも一杯八錢均一、肴は鮒の雀焼、奴豆腐、海老煎餅など三錢均一で馬道の大黒屋、六区裏の騎西屋本店、牛めしやの丸善などゝ共に有名で当時は専ら吉原帰りの客や下層階級の客で満員の酒場であった。宿酔更に酒を呼んで水蔭先生は

神谷バーの扉を押して中に這入った。

日本全国の盛り場の中で東京の浅草公園程ナゾの世界は他にあるまい。大阪の道頓堀や京都の新京極より歴史に於ても面積に於ても複雑性が多分にあり、其繁昌という点に於て日本唯一の歓楽郷である。其れ等の人々の縮図が各種飲食店に於て最も端的に表現されているので、此神谷バーも一と云って二とは下らぬ代表的の酒場である。紳士連れの夫婦、吉原帰りの遊治郎、車夫、人夫、労働者の群れの隣りにサラリーマンが月給袋のボーナスを数えて飲んで居る光景などは正に人生の縮図であり、社会の窓である。

「先生暫らく、御見忘れになりましたか、乞食の石角で御座います」

「オ、浅草名物の石角春之輔君だったね、自ら乞食の石角と云って来る所が如何にも君らしいね」

石角春之輔という男は早稲田出身の文士で乞食の研究に没頭して自分も乞食の群れに入り、乞食の研究という老大な(?)著書がある位で、乞食の群れに投じる丈けあって乞食同様の姿をして居る。水蔭先生は石角に電気ブランのコップを差して、

「いゝ所で遇ったよ、実は君に遇えるかと思

って此店へ飛び込んだ所さ。僕は現代の浮薄な青年の思想を矯正する一助にもと思つて今帝劇女優の榮屋のスツパ抜きを東京朝日の小説に書いて居るんだ」

「ハア今大評判の（脱線）でしょう、拝見して居ますよ。あの臘虎大王という乞食は私の事でしよう、先生は私をモデルにして原稿料をとるナアヒドイ……」

「まアソウ云い給うな、今日は大いに奢ろう。十分呑み給えな」

「あの寿三チャンという出鱈目小僧は演芸記者で羽左衛門の番頭格の井口政治だという評判ですが、ホントウですか先生」

「時に君、今度破丹族という小説を二六新報に書くのだ。ソリヤアウンと凄いんだ、山窩の一族が東京の麻布の善福寺の裏山にセブリを作って富豪と華族の令嬢や夫人を片っ端からフン縛って強姦をする。最後には勿論警視庁の手に捕われるんだが……そうしないと当局がウルサイからな。悪の華をウンと咲かせて書くつもりさ。ソコで実際の乞食の生活を君の体験から教えて貰いたい、材料も貰いたいと思うんだがね」

「ソリヤ愉快ですね、国技館の名附親の江見先生に私の研究がお役に立てば嬉しいですよ

……ハイ」

「ボロボロの女乞食が美しく着飾った華族の令嬢を立木に縛り付けて虐待する所があるんだが、一体女乞食の数は東京中に何人位あるんだね」

「三百人に一人の割ですが、それも昨日は浅草に居た奴が明日は浜へ行くという風ですからたしかな数は判りませんが、まあ東京中に五十人とは居りますまいよ。先生方が御覧になれば二タ目と見られない女でも其仲間では素敵な美人なんですからねえ」

「君は関係がある？」

「御冗談でしょう」

歡義先生性愛相談欄

◎御遠慮なく御相談下さい◎

一、相談文は出来るだけ詳細にデータ御記入の上、読者係宛御送り下さい。質問者の秘密は厳守し、絶対他へ洩らすような事はありません。
一、相談文及び回答は漸次本誌に掲載いたします。用紙はどんなものでも結構です。御都合悪き時は住所や氏名を明記されなくとも構いません。

ンの時計は十二時を過ぎて居た。

日本で最初に沙翁劇を上演したのは三十五年の十一月浅草新猿屋町の国華座でキング・リヤーを出した福井茂兵衛の一座だったが一 generally知られて居るのは、明治三十六年二月の江見水蔭翻案「オセロ」であった。新派俳優の川上音二郎の女房の貞奴を女優にして登場させて、女優の鼻祖と称された事は能く人の知る所だが、此江見水蔭という作家は女の縛られた処に興味を持った人で、尾崎紅葉山人や巖谷小波と共に硯友社の同人で、後の前田曙山と共に女の責場が出る作品が非常に多い。其後になって現れた渡辺黙禪もそうであったが其頃は女の責場に特に興味を持つ人が無かった中に、先駆者としての水蔭はそうした小説に手をつけて居たのは或は飯綱婆アが彼の胸に何物かを植えつけたのでは無いかとさえ私は思っている。本題の血染の毛綱は実に水蔭が生前に私に語った小説の腹稿で私は少々彼の語る責場の構成法を絵画化して画いて見様と思うのであるが、何しろ明治時代に結髪を生命とする女を対象にして織り成された物語は前世紀の遺物とて一顧の価値さえ無いものかも知れないという事をノツケに記しておく。

Das Grausame Weib

Dr, Yohannes R, Birlinger

▽ 残虐なる女性達 ▽

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

此の報告はまだつゞいている。

七才以下では、子供達は学校には入れなかった。つまり、学校には七才から九才までの子供達が居たわけです。私達が、学校を出たとき、私達は丁度九才から十才位の小娘だったわけです。此の学校の教育は、非常に厳格だったため、私達この学校の卒業者は、この家庭でも、喜んで採用されるのでした。勿論女中として。私が、特に記しておきたい事件は、午後の四時から五時の間に起りました。此の一時間は、毎日刑罰の時間とされていたのでした。夫人達は、病気でない限り、必ず、其の場に出掛けて来、気がむいたときは、更に友人知人達——勿論、婦人客であることは云うまでもない——を連れてくるのでした。私達は羞恥心や其の他の複雑な感情を以って、この時間に臨まねばならないのでした。時々、紳士客も一緒に来る事がありましたが、そういう時、夫人達は格別に上気嫌なものでした。そうした客に対する上気嫌は反対に、私達召使に対する不気嫌となって現われるのでした。其の日の朝から家の中で起ったすべての出来事に対して、不満を持ちその怒りを、一度に私達の上ぶちまけるのでした。

この様な場合、マルシヨリ夫人とマリア夫人の態度は全く対照的なものでした。所罰の間中、マルシヨリ夫人は油ぎっており、しかも倦怠の情を現わしていたのでした。この表情は夫人達の父から直接うけついでたもので、其の碧い瞳はトロリとした不気味な光を帯びて居るのでした。マリア夫人は、やせていた上、特に陰気でした。鷹の様な眼をして、顔付も、気質も、母親にそっくりなのでした。二人の夫人達は、フランスの流行を追いつけていましたので、学校へ現われるときは、私達には妖精の衣とも思われる、美しい衣裳をつけてくるのでした。私達は、羨望と嘆賞の念を以って、その衣服についた宝石や、花や羽根を眺めたものでした。

さて、刑罰を決められた召使や、生徒達は一度に呼びだされるのでしたが、夫人達はすべての出来事とその経過とを、異常な緊張を以って見守るのでした。たゞマリア夫人と、パリからこの邸に滞在中のM・ブルゴワヌ夫人(M. Bourguene)との二人が、優美な仕事で、且、威厳をもって、鞭をふるうのでした。偶に、マルシヨリ夫人は、娘と一緒に連れてやってきましたが、そういう時は、連れて来られた娘は、否応なしに鞭を握らされ

て、犠牲者の丸裸にされたお尻の上に、力一杯、鞭を当てる様に命令されるのでした。娘は、時々、手心を加えたのでしたが、夫人はそんな事を見付けると、頭から叱りつけるのでした。私は、或時この娘が、余りにも上品な鞭打ぶりを示したために、夫人が手にした鞭で娘を励ます為に二、三回手ひどく、娘を打ちすえたのを覚えています。

マルジョリ夫人は、罰を課する時に、刑をすべて、一枚の紙にかきつけるのでしたが、その紙片は女教師の手に渡され、女教師は声を上げて、その紙に記された名前と鞭数とをよみ上げるのでした。そうすると、マリア夫人と、そのいとことは微笑をたゝえて云うのでした。

「そう、それが、一番よいお仕置ですね」

ブルゴワヌ夫人はフランスの学校で覚えたりしたお仕置を自分でやりたくて仕方がなかったのですが、マリア夫人達が、自分達の特権を他人に委ねる事を承知しないので刑の改良を申出たのでした。その改良について、私達は、心からの反感を感じたのです。ブルゴワヌ夫人は、今迄用いられてきた白樺の枝の笞を、鯨のヒゲを芯にした鞭と取替えたからです。この新しいお仕置の道

具は、見た処、白樺よりも痛くなさそうでしたが、実際は、ずっとひどい痛さと深い痕を身体に与えるものでした。

(訳者註 現在の読者は恐らく、白樺の笞は想像出来るであろうが、鯨のヒゲの鞭というのは想像出来ないであろう。何と、これは今でも乗馬用の鞭の高級なものには継続して使われているのである。この鞭は使う者には優美な細い形状と、軽さによって賞用される。使われる者、つまり、この鞭をうける者にとっては、恐ろしい唸りと、喰込む痛さだけでなく、鞭全体が、身体にからまって、徹底的に鞭の味というものを思い知らされるのである。使う者の手応えの快さは又格別なのである。こうした事を予備知識として読んで頂きたい)

其の時、打たれる事になっていた娘ベティ・ブラウン(Betty Brown)は皆より前に引き出されました。ブラウンは太った娘でマリア夫人や、その従妹よりずっと肉付きがいゝのでした。まもなく、彼女は隣りの伯爵領のロイストン卿(Royton)の女中として、仕える事になっていました。ブラウンは粗野な女でしたが、又気のつく事も人一倍でした。女教師トオマス(Thomas)は立ち上って、

云いつけました。

「ベティ・ブラウン！鞭を持っておいで！」

ブラウンは、真赤になって、泣き出しそうな顔をして、鞭を取りにゆき、すぐ鞭をもつて戻ってきました。ブラウンは自分を責め苛むフランス風の鞭を恭々しく捧げました。ブルゴワヌ夫人は厳しい声で命令するのでした。

「さあ、この鞭に接吻しなさい！」

この作法はこの残忍な女が、フランスから持ちこんだものでした。今迄、私達は、こんな無情な作法を知りませんでした。ブラウンは温和しく、鞭に接吻しましたが、其の顔にはあり／＼と不安が見えていました。而も、残忍な女は、ブラウンを全裸にして、脱いだ着物を、ブラウン自身に丁寧に折りたゝませたのです。私達は固唾をのんで見守っているのです。鞭打つ時に、少しでも楽に鞭打てる様に、犠牲者を背負う役目の逞しい下女がいました。下女はブラウンが抵抗するのを無理やりに担ぎ上げました。最早、ブラウンは辛うじて、足をばた／＼させる事が出来るだけになってしまいました。聞く所によると、この下女は、自分の夫をこっぴどく鞭で打つ事が度々あるのだそうです。ですから、ブラ

ウンが暴れた所で、一つも苦にはならないのでしょう。マルジョリ夫人は、大声で叫びました。

「皆、その娘の足を押えつけないさい。鞭が揮いにくいじゃないの。」

トーマスは慌てゝ足をしっかり押えつけました。鞭を持って、ブラウンの裸のお尻の前に立ちはだかった女は、鞭を振上げました。

直ち、鯨のヒゲ特有のビューンという唸りと共にピシッと音がして、ブラウンのお尻には細いけれども深い血の溝ができました。忽ち鞭の音と共に、お尻中が、四方八方へ走る真赤なみず脹れで一杯になってしまいました。みていたマリア夫人達は、暫くの間、見ていてから云い出すのでした。

「何て、下手な事。もっと優雅に打つよ。」

マルジョリイ、貴女が打ってごらんなさいよ。もっと懲しめなければ、こいつらには判りませんわ。止せばよいのに女中の一人が云ってしまいました。

「奥様、私はそんなひどいお仕置には同意出来ません。」

「何？ お前は、私のお母様から、嫌という程鞭を頂いたじゃないの。忘れたのかい？」

「この下等な動物達はあまり動きすぎるの

よ」と他の夫人が云ったのでしたが、夫人は其の耳をかそうともせず、黙って、娘に近付いて、鞭をブルゴワヌ夫人からひったくるが早いか、続け様に、否という程、ブラウンの尻と云わず、頸と云わず、背中といわず、打ちのめしたのでした。文句を云った女中は部屋中を狂人の様に走り廻り、夫人は咄嗟に鞭を振り上げて、その後を追うのでした。私達は、突然の事に、我を忘れて呆然と事の成行をみているばかりでした。ペティ・ブラウンは、言葉に尽せない程の痛みの為に、其処ら中をバタ／＼と悶え、転げ廻っているのです。

夫人達は、私達召使の中で、娘達を打つばかりではありませんでした。少年達も屢々その残虐な鞭の下に喘がねばなりませんでした。少年達を打つ事に特に興味を感じて居るのはマリア夫人とフランスからきたブルゴワヌ夫人でした。マルジョリ夫人は、少年達を打つ事に倫理的な反対を唱えていました。

（訳者註）倫理上の反対を唱えるという事は、通常其の根柢に、其行為に何らかのアツピールを感じるという事になる。其のアツピールの故に、直観的に、「悪」を感じると断じてはいけないうか。マルジョリ夫人こ

そ、反って最大の興味を、異性鞭打に対して有っていたと、而も、其興味は、性的な昂奮を伴うものであったと考える事は、強ち、一方的であるとも云われまい。斯様に、通常、女性性が男性加虐に対して病的な興味を感じる場合、彼女は反射的に、後天的に植えつけられた道徳観によって、反対を唱えるのである。少くとも反対若くは、無関心を粧うものである事を、私自身の経験や、実例によって付言しておく。

併し乍ら、夫人は同性である私達を懲戒する多くの新しい習慣をフランスから持ち込んだ事、前にもお話した通りです。

夫人が来る前には、鞭打には特別の方法もなく、短かい、鋭い打撃が与えられただけでしたが、このフランスから来た女悪魔は、長い、酷たらしい打撃を持ってきたのでした。鞭打の数え上げることが始められ、勿論、その数自体も、相当な数に上ってゆきました。其の上、私達は、鞭打を宣告されたときは、鞭打つ人の前に跪きついて、次の様に述べる様に強制される様になりました。

「若しも、私の犯した大きな罪科に対して、この様な数の鞭打で気がおすみになるのでしたら、どうぞ」そうして、烈しく鞭打たれた

後で、自分を打った鞭をしまいにゆく時にも「奥様、私は、謹んで奥様の鞭に感謝致します」と云わねばなりませんでした。而も、この口上は、一切吃ったり、啜り泣きしたりしてはならないのでした。夫人は丁度、話にきく、捷脚人の様な冷酷な残忍さを持っていた。まだ、夫人は若く美しいお嬢さんでしたのに。私は（同性を）こんなに熱心に鞭打つ人を知りませんでした。

（訳者註）このブルゴワヌ夫人についてのこれまでの記述は、興味深いものと云わねばならない。言語サディズムというものがあるが、この言語によって被虐感や、加虐感を高めるという方法は、巧妙に用いられたとき、特に鞭打の場合、異様な興奮を齎らすものである。フランスの鞭打本の多くに、此の種の台詞的な言語の巧妙な用例が見出される。例えば、（最近の非鞭打小説であるが、場面的に同種のものであるので引用しておく）『野蠻な遊び』（コラン著、吉田健一訳、下巻第一八五頁下段）

——この上衣を着なさい。クロオド。とフランスソワはしっかりした、落着いた口調で云った。

クロオドは聞いていないようだった。

——聞えなかったんですか。とフランスソワはクロオドの方に顔を押しつける様にしてどなった。

彼は鞭で、クロオドの脇腹を打って、また打った。クロオドはワラの上にうずくまってしまったが、フランスソワは構わずに打ち続けた。クロオドはしまいに泣き出して、それから立ち上り、苦しい顔付きでフランスソワの方を見ながら上衣を着た。

フランスソワはクロオドから眼を離さず、鞭を振り上げたまゝ足で鹽を一つ引き寄せた。

——これに水を汲んでいらっしやい。

彼は猛獣を馴らそうとしている人間のようなだった。——中略——（フランスソワ）いや、

そんなことはどうだっていゝんです。若い馬は自分の主人が自分をどうする積りかかっていう事を知っちゃいないんです。（以下略）

尤も、右の訳は、失礼乍ら余りよい訳文ではない。一般翻譯調とも違った未完成の作文ではあるが、この訳文から、フランス語の原文を思い浮べてみると、仲々巧妙な台詞である。そうして、台詞の他に、その間を点綴する動作についても、亦、サディスティックな感情が奔流している様に思われる。同書によって、更にもう一例を挙げよう。女主人公ク

ロオドが男に対する憤慨から馬を駆って、高い障害物を無理に飛ばうとして、馬に云う台詞である。（同下巻第一五四頁上段）

——跳びなさい。跳びなさい。どうあっても跳びなさい。

クロオドは齒を喰いしばって、馬を真直に進ませることに、その意志の力の全部を集中し、少しでも馬がためらうような事があつたらすぐ打つ為に鞭を構えていた。

——さあハルウン（馬の名）とびなさい。跳ぶまでやらせるから。

馬は嫌だというしるしに首を縮めて横に向け手綱を左右に振り乍ら、急に後しざりした。

——中略——

しかし其の瞬間に拍車が左の脇腹にかけられて、鞭が鋭く打ち下され、馬は考えている間もなく障害物に向つた。（以下略）

第一の引用は男が愛人の強気なクロオドを馴らすところ、第二の引用は前に述べた通りクロオドが馬に云う言葉である。之等の例によつても、言語がなくて、只鞭打だけが行われるならば、之等の場合は単に筋書上の設立としてしか成り立たなくなってしまう。殊に性的鞭打に関して、適切な用語の重大さにつ

いて、確認する為に、右の様な引用をした。勿論、本書中の被害者に、鞭に接吻させたり感謝の辞を述べさせたりする事は、加虐被虐性愛上の、高級技術に属するので、適切を欠くときは、全く逆の効用しかないのである。偶々、ブルゴワーヌ夫人の引例に適当な一節を見出したので、付言した)

鞭打たれた後で、私達犠牲者の背中に棒を結びつける事もありました。棒を結びつけられたら、誰がやってこようと、私達が何処に行こうと、そのまゝにして居なければならませんでした。私などは、一度、背中にしっかりと、棒を結びつけられたまゝの姿で、奥様の処へ、何かの報告をもって行かねばならなかった事があります。

皆さんは、今日の様に子供達が棒や鞭で打たれる事が珍らしくなった時代に、こんなお話をしても、きつと奇妙に思うでしょう。けれども、私が若かった頃、鞭答は、教育の普通の一部分でした。誰も、子供達を他の方法で懲戒する事は考えず、只、鞭を振るったのです。女中達も亦、鞭から逃れる事は出来ませんでした。一家の奥様は、女中と小姓を打ちましたし、御主人は召使や馬丁を打った

のでした。又、母親としての女はすべて、子供達を打ち、成熟した娘達も亦、打たれねばなりません。又、娘達は不平を云う事もなく、この厳しい躰けの方法に従ったのでした。当時、母親の命令は(鞭によって)法律に等しかったのです。私自身、私に鞭打が何か害を与えたとは思っていません。それは或は、年とった女の妄想かも知れませんが、今日の自由な教育によって育てられた子供達が、果して、昔の鞭で仕込まれた時の子供達よりもよくなっているとも思わないのです。(訳者註)こゝで長い引用は終わっているが、本書に之まで引用された例の中で、この一婦人によるものは、仲々深い事実を伝えていると思われる。只、訳者が、時間の都合で、本引用の中間で、一度筆を切ったために、文体上喰違いがおきている事を深くおわびしておぐ次第である)

ピサヌス・フラクシイ(PISANUS FRAXI)によって報告された彼の友人からの手紙(一八五九年三月十三日付)も亦英国に於ける学校の躰けについて、真実を伝えている。

(著者註)以下の引用は左記の文献による。

Dühren; Englische Sitten geschichte, Band I P. 458—デューレン著、英国風俗史

第一卷四五八頁)

「私の幼年時代は男の子も女の子も、一緒に一人の女の教師の指導を受けたものでした。予備校(訳者註日本の幼稚園の意ならん)では、之等の女の教師によって、極度に烈しい答が、あらゆる機会に用いられるのでした。私達は、男の子も女の子も並んでいる前で答打たれるのが普通でした。答打たれる時に、女の子は、膝の上に置かれるか、腕で抱えられるかどちらかの姿勢で、男の子は、女中の背に負われて、答をうけるのでした。この女中は、時々、私達の部屋にやってきて、「学校の先生ゴッゴ」と私達が呼ぶ様になった遊びをしたものでした。娘達も、さういう時は一緒に仲間に入りました。私は、今でも、この遊びについて、生々しい想出となっている。幾つかの場面の事を憶えています。その事件は、私に、夫人達が、如何に熱情的にこうした問題(鞭打)について興味をもち、又その楽しみに、耽ったかという事を確信をもってお伝え出来る様な異常な印象を私に与えました。

此の学校には、多くの女教師と共に、その手伝いをする為に雇われている何人かの婦人が居りました。彼女達は、子供達と仲好くし

ておりましたし、私達も亦、彼女達が好きでした。彼女達は、毎朝の様に「先生方が見えるまで寝ているのですよ」といっては、クスクス笑ったり、ふざけたりするのです。又晩には「先生が皆さんとしばらくお相手をなさるまで、おきていなければいけませんよ。先生はきつと、恐ろしい筈を持ってこられると思っていなければいけませんね」などと、ふざけるのでした。

これらの婦人達が、私達の為に尽してくれたことは勿論であるとしても、確かに、私達に春の訪れを急ぎ足でやってこさせたという事も、確かなことであると思うのです。彼女達は大変豊かな胸(乳房)をもってをり、私達が懲戒の為に懲戒台の下に乗って、彼女の胸につかまると、いつでも、その容易に彼女の乳房に触れる様に、彼女達は着物の着方に注意していたのでした。そういう時に、彼女の胸の動悸は、笞打の動悸と共に、私達に、非常に特殊な快い気持を起させたのでした。多くの男の子達が唯、この快感を得る目的で故意に懲戒される様な事を仕出かしたりしました。その様な時から、早くも今日まで、四十年の歳月がたちましたが、この記憶は今も猶生々しくよみがえってくるのです。

(訳者註) 本引用は主として、笞打と、其に付帯する性的昂奮が間接的に、つまり、第三者の乳房を仲介として起ってくる事を示している。私の知る限りでは、西欧に於ける、鞭打愛好者の中の何割かは、苦痛又は鞭笞フェティシズム的な連繋によるよりも、こうした正常性感対象と鞭打の間接な連絡によって、鞭打と性感とか結びついたらしいと思われる。私の推定によれば、こうした連繋による性感と鞭打との結合は案外、その発端が被虐的な位置にあるにも拘らず、将来、加虐鞭打愛好者として生長する可能性の方が大きい様に思われるのであるが、如何であろう。読者中の識者に御高見を伺いたいものである。

こうして行われた馴けが、少年達に対して余り大きな向上を齎さないだろうという事は考え得られる事である。しかも、多くの女教師達は、仕事に熱心な為に、時々明らかに無恥と云うべき状態に変わってゆくのである。そこでデューレンは昔の事実に基いた教訓集の一七九二年から引用して来た例を報告しているが、其に依ると、鞭打教徒達の組合が、学校の女校長と、生徒の笞打に際して、臨席する事が出来るという協定を結んだというのである。勿論、彼等は笞打の公開に対して代価

を支払うのである。

この報告を直接に齎したのは、ロンドンのブロード、ストリート(Broad Street in London)の一銀行家である。彼は、二人の女校長から毎週多額の金銭を支払う代りに、娘達の処罰を校長達と一緒に見てもよいという許可を得たわけである。この二校に彼が訪れると、生徒全体に対する処罰が行われたのである。彼は、処罰の隣室から、小さな一つの窓から、覗くのであったが、処罰の部屋へは、次々と生徒が引きずり込まれて、お尻や露にして、打擲をうけるのであった。こうした実例を見てみると、これらの女教師達が、教師という職業を撰んだ事の根柢に、生徒を鞭打するという様な、性的加虐に対する熾烈な慾求があったという事すら考えられるのである。こういう仮想を一般に有名な米国の諺によって、クノルツ教授(Doctor Knortz)は説明しようとしている。

(著者註) 此の部分の引用は左記文献より Folkloristische Streifzüge, Oppeln und Leipzig 1899. p. 33. 『民俗学者の觀察』 オッペルン及ライプツイヒ刊行、一八九九年発行、第三十三頁より)

(訳者註) 以下に示すのは詩であるので、一

告白と手記と体験

懸賞募集

◆賞金◆

優作	一篇に付き	三千円	若干篇
秀作	一篇に付き	二千円	若干篇
佳作	一篇に付き	一千円	若干篇

規定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は定めませんが入選作品は最近号に発表します。
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

◆告白記の募集◆

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便(百瓦迄八円)にて御願ひします。

(編集部)

原文を記しておく。

I would I were a schoolman,

And Among the schoolman's foud

With a small boy stretched across my knee,

And a rule in the hand.

妾がもし学校の先生になれるのだったら。

他の先生達と一緒に、

私の膝の下に男の子を押さえつけて、

(そのお尻を懲戒する為に) 定規を振上げ

てみたいものだが。

どれだけそうした鞭打愛好者の慾望が、仮令無意識であったとしても培われてきているかについては、多くの学校の訓令や規則を見てもみればすぐに納得のゆく事である。十九世紀に至って、始めて其等の規律の示す語調は和やかになっていくが、十七、十八世紀に於ては、若し、字句通りに教師や女教師達が刑を行ったとすれば、万一、一人でも一日でも子供達の中で、答を、お尻にうけないものが

いるとすれば、其は直ちに教師の怠慢と解釈してもよい程に、事、答打に関する限り、厳格なのである。猶、之等の規則には子供達は裸の身体を答の下に晒さなければならぬ事を規定してはいないが、他の多くの資料は、裸身に対する答打、鞭打が、慣習的に守られていた事を、疑う余地のない程、明白に示しているのである。

(続く)

ボクの責め方

KK通信第六号より第二十三号まで連載、KK会員の喝采を拍したアップ・レポート、要望によってノート数百頁の中からピックアップして本誌面に紹介することにしました。

(令嬢浜江の巻)

宝塚二三夫

正月の午後、勤厳実直なる大学教授の令嬢として、盛装で訪問して来たこの浜江、目的は日頃の親交に対する年頭挨拶と、贈物である。

「サ、お上りなさい。今日は皆休みの上に誰も居ない。正月ですからボク一人、こんなに鉄瓶と仲良しで、ウズボンヤリして居たんですよ。サ、とても寒いからお上り、かたくならないで……、サ、誰も居ないんだし、サ、ビスは出来ないが、丁度いい、浜江さんの世話女房のレッスンだとお父さんに云って下さい、ハハ、ハ、サア、早くッ！」

おしやべりも仲々忙がしい。

「でも……」

「でもないよ、今日はいやに変わったナ、誰かとアベックの約束？」

「あたし、そんな……」

「いさゝか、この皮肉、ボクの話術の命中弾らしく、」

「じゃアー、ごめん下さい」

と、裾さばき美しく、白足袋がすべり上って来る。梧葉桐模様のリンズのコート脱ぎ、白魚の手さばきしとやかに畳むと隅に置き、自分の草履を揃えと、裾前をととのえて、

「旧年中は——」の紋切型の、何とか小笠原流か、

「ハイハイ、もう十分、お父さんの受売はいですよ、ハハ、ハ、」

「サ、こゝへおひざをお入れなさい。温かいから、もういつものヤンチャ娘になってもいいですよ」

「マァー、ホ、ハ、」

と、一寸顔を赤らめて、少しずつにじり寄って来る。

「ほんとに寒いこと」

と、見上げる目は美しく、単皮目尻も切上

って流星の如くキラリッと、ボクを射込む微笑の風。

「手をお入れなさい」

と、木組ヤグラの掛布団をふくらませる。

「ハイ、すみません」

と素直に入れて来る両手。

「キレイだねエ、それ島田、結綿？」

「何とか島田って云ってましたの……」

「何だ、ハハ、ハ、」

「はずかしいワ、ホホ、ハ、」

「何かしらないが、女ってむづかしいんだナ相変らず」

芸妓、舞妓にくらべるべくもないが、素人生娘としては全く美しい。お蚕ぐるみに芸妓に見られぬモダンな柄行も、亦良し、愉し、美し。

「人が来るとうるさいから、入口、かぎかけてもいい？」

やはりエチケットとして、合意伺い。

「エ、でも、わたしお邪魔になるといけませんワ……」

「めったにない事です、ボクが一人ポツチになつてゐるなんか。そう云わずに、いて下さいよ」

立ち上って障子、踏石、駒下駄、玄関間仕

切扉、入口の格子戸の施錠と、立戻って来る間も寒い。瞬間、和服の風通しはいさゝか閉口。そして、そのチャンス逃さず、斜横にあぐら坐りを移して、

「ア、寒いッ」の声と共に掛布団の下へ手を差入れるのをチャンスに、ヤグラの上に揃えて差込んでいた浜江の手を指先から滑り込ませるように、両手の甲をボクの手の掌はキユツと握り握りする。その瞬間的な行動、彼女がアツともスツとも云わぬ先を越して、

「ア、温い……、柔らかい手だねエ、スペースで……、たべてみたいよ」

機先を制せられ乍ら、はめられて喜ぶ女の常、俯向いて一言もなし。

「たべられたら光栄やワ」
 どうやら、この殺し文句にもボクは一本参ったようだ。そして、スルスルと片手は延びて彼女のひじのあたり、そして更に奥へと……

「アツ、マア」

ピクツと片手を引きのけると、消えるような「ホホ、ハ、」の笑い声と共に、赤くなって顔を小布団の上に伏せてしまう。

「どうしたの、こそばゆいの？」
 とさりげなく問う、男の殺し文句で一発返上。

「イ、エ、でも……」

と顔を上げない。既に色情街道に乗っている浜江。

「じゃ、おかし、真綿のようだ」

と、再び手を引寄せると、顔を少し上げてボクの方を俯向き乍らチラリと見る目は何を考えているのか？、ボクは平気を粧って彼女の指を静かに弄り出している。すぐ五指の股を彼女の五指の股に搦ませて握りしめる。

「握ってくれない？」

彼女は「ハイ」とは云わぬが、静かに指のつけ根までに握手して来る。ボクの片手は彼女の手の甲、手首、腕の下部と愛撫を始めている。その反応からか、彼女がモジモジして来るのを両手つかみにつかみかえると、

「しびれが切れたの、ハハ、ハ、ハ、ひざをおくずしよ」

「はずかしいワ……」

何が辱かしいのかわからぬというところ。つかまれた両手を離そうともせず、又一しきりもじもじ腰をよじらす浜江。

「サ、楽におしよ……」

ガクツとひざを落して横坐りになった気配は布団の下と手の動きですぐわかる。

今、キス一つの吸い上げでの追込みはわ

「不公平が、この場合、余りに不粹な話である。」

「どう、少し温かくなった？」

「エ……」

眸を上げて嬌羞一杯の笑顔は、ボクをいらだたすだけである。

「羽織をぬいで、帯を見せて」

コスチュームの虚栄心を利用したのだ。服の場合「スゴイ着下だ。輸入そのまゝだ、シユリロのデユボンだね」とやると、彼女の脚線美はわけなく観賞出来るのと同じで

「うまい事云って、フムム」

と、それと知っていても椅子の上へでも乗って自己満足する娘の如何に多い事哉。

「ハイ」

一言の返事で、ボクの立上るのがおそいくらいである。

「あんたはそのまゝで……」

と制して立って、うしろへ廻ると、浜江の紐をほどくの待ってスラリと羽織をぬが

す。年に一度の正月衣裳は、実に心も新たな印象である。

「キレイだなア……」



少々セリフもどきで感嘆するのも、男の殺し文句の一つ。満足げな物ごしの浜江、金欄帯のたれを直そうと両手を臀の上へうしろに

廻すのを、こゝぞとばかりボクもそこへ手をやってひざ立になると、両手で両手首を殊更に軽く握むのも一技巧。そして、その理由はの如く、

「動いちゃ、駄目だよ」

と、少し強く手首を握り締める。

「ハイ……、でも……」

と云うと、肉体反応はグツと胸から上をのり上げるようになり、片頬をかけ布団の上にはベッタリとつけて、うしろ手に握まれた指は、ボクの指を何げなさそうにまさぐっているではないか、それが「でも」の答えなのであろう。このあたり一葉調の淡々たる女性詩的情緒の内に、責めへのオバチユアでなくて、何であらう？

「でも……どうした？」

言葉尻を捕えて攻めの一手で、今度は両手首を少し持ち上げて、極彩色のお太鼓の上に両手首を縛りタイプに持ちかえる。

「ホホ、」

と、一ゆすり上身を浮立てる。臀の下へ手を廻すのもわけないが、こゝでも亦一辛抱。横坐りになっ

た片方の白足袋の裏が、家から一直線にボクの家へ来た事を証明する何の汚れもない履きたてであるのを目の下にしたボクは、直ぐにその足袋に包まれた足——に胸の躍動を感じた。今は足頸の一分だに見えぬのは更に一層の刺戟である。片手に持った浜江の両手首は一つに合体したような柔らかさである。

「どうなさるの？」

「あんまりキレイだから、どうしようかとウツトリしてるんだ」

「マア……ホホ、」

彼女は何を求めているのか、何の反応も抵抗もない。ボクはどっかと坐って、

「白魚のごちそうになろうか」

と、期せずして口走ると、彼女の手の掌から十指へと顔を押付けて唇をこすりつける。



「マア——」

不自由になった上半身を軽くゆすって形式抵抗。それにお構いなくボクの舌端は漸く活動開始。手首こそ離せ、ボクの両手は彼女の二の腕からひじへとかけて、片方ずつしかとねじり掴んで、後手型からくずさせない。その点はなれた御得意の技術。

「マア、こそばゆい、勘忍して頂戴、フッフ、」

と、肩先をピク／＼動かして、云うなれば快哉の悲鳴である。どうやらボクの手には負えないものがき方なので、再び片手握りに手首を掴むと、片手は臀の下にはみ出した純白の足袋のコハゼをはずして、

「じゃ、こっちの白魚でもごちそうになろうか……」

ヤグラの上へ胸から押しかぶさるようにね

ところ。

「勘忍して頂戴！」

絶入りそうな羞恥に、にじらす身体は徐々に車のスタートの如く、シリ／＼と横摺りでヤグラ炬燵からすべり落ちて行く。かけ布団と共に横へすべり倒れた浜江、両び、

「勘忍……」と、足首の手を後手の両手掴みと持ちかえると、残った白足袋もくの字型の裾前からはみ出すのを、待ってましたとばかり同様、素足に……。

「勘忍して……」の一点張りを、うつ伏せにして押えつけ、一息吐くの待つのも楽し、快よい瞬間である。

待つまもなく一息入れたのを利用して、ボクのハンカチは彼女の両手首に巻きつく、それは、ボクが手を離すまで彼女には感じない程度、ボクの手が離れて、又足首を掴んで片

じ伏せられた彼女、何の抵抗も出来ぬまゝ、水蓮のような素足は剥き出される。これ亦手の白魚と同様、純白無垢の新品と云ったもの。勿論、アツとも云わずに引込めようとする足首を掴んで、片手は手首と上と下に取押えたと云う

足宙に浮かして、足の小指のつけ根に、先ず
チュツと吸付く、

「アレッ！」

実に可愛い、悲鳴である。そして、初めて
手をくぐられてゐる事に気付いた
ように、足掻きもたえる浜江。

「放して！、Iさん放して……」

勿論、剥き出した無垢のジャコ
ーの匂う素足から、手も唇も離す
どころか、ボクの舌は既に玩味し
ている。やはり足の力は片方では
いけない。一方で足首掴んで一方
で足の甲から土ふきずを握り掴ん
で、足の五指へのキッスというよ
り食味。

「アッ！ 勘忍ッ！」

彼女は嘆声一声はり上げる。自
由の片足の足掻きのため、裾は漸
く乱れてくの字の雪肌脛は露出す
る気配に、ウンと力を入れて彼女
は俯伏せ気味になって畳に頬を摺
つけ、

「お口が……腐りますよ、フッフ
、、」

それで、勘忍、放してはあきら



めたらしい。

「腐るどころか、お餅よりうまい、フッフ」
と、上から覗き込むと、半ば閉じた細目に
光る涙の玉、すゝり声が洩れぬところを見る

と、悲涙ではない。さては感激の艶涙、とは
知りつゝも、男の殺し文句。

「泣いてるの？」

生地からして雪肌の浜江の顔がパツと咲い

た桜？ 純情一路へスタートした色。俯伏せそのスタイルのため纏んでいる雪の素足はボクの所へ来る前に入浴済とはっきりわかる。無垢の足の裏、その先に並ぶ珠の五指の裏、そして、その指の根元から土ふまずへのキッスの流れ作業を考えて、今更のように彼女の全身を見据える。帯の上で軽くながらハンカチで後手に縛られた両手、勿論、高手小手ではないからでもあろうが、蝶々さんの如く十指を延ばし、更に指間をひろげて何の反抗性もなく又、苦痛性もなく、何かを求めているようにさえある。実に可愛い手、それよりも足の裏への舌の愛撫を始める。

「アッ！ こそばい！ 勘忍して！」

こそばい、笑い声どころではない自由な方の片足を、お嬢さんらしくない足掻き方は期せずして裾前をすっかり乱して、全く七夕笹の風にゆれる風情である。そしてすぐに大きい喘えぎが始まる。頃はよしと抱き起こすと首ッ玉を抱きしめてのキッス。

「ムムッ！」

やはり小さい抵抗性で、ビンも、つとも少し乱れ髪が二三本散る。

さて、浜江のキッスの味、実に清純にして甘く、砂糖で云えば三盆白でもなく、更に和

三盆のこくでもなく、勿論、赤、黒、氷砂糖の類では更になく、やはりグラニューであるうか、最終的表現としては、やはりつき立てのおもちにグラニュー糖をパラッとふりかけた、と云うべきであろう。

「怒った？」

彼女は相変らず目をあけない。

「どうして？」

殺し文句合戦になりそう。一層に唇に唇をすべらしての頬摺りで、

「苦しかった？」

無言の内に小さい横振り、

「始めて？」

これは又小さくうなづくだけ。

「くゝられたのは？」

「……………」

「初めて？」

ウンと又小さくうなづく、又小さいキッス一つ、

「痛い？」又小さく横に振る。

そして辱かしさをかくす如く、ボクの胸に顔をうずめるようにして、

「どうして、おにくりになるの？」

ピシリッと一発喰わす。

「……絶対征服のためだネエ」

「そう、いゝワ……」

これまた解釈不明の女の言葉、更に一吸いのキッスの後、可愛い顔ばかりを見ていたのをチラッと下へ目をやると、両膝小僧が丸出しになっている。彼女の白大根を見て、ボクは静かに横びんのいたまぬように俯向き気味に浜江を畳の上におろす。と、それこそ全く「アッ」とも云えぬ素早さで裾の割目に両手を入れて、パツと捲った！ 剥き出した！ 腰までも！ 眼前一面に緋の海？ 真紅と云うより、緋の腰巻だけで案の定モダンガールもブロースなし！

背中は何論、肩から後頭部までスッポリと掩せられた花嫁衣裳もさることながら、これまた餅つき現場よろしく、ほり出された腰から臀から両股へとの丸出し姿は、もう正月晴着がどうの、色彩がどうのと云うものでなく唯あるものは体臭だけである。

生娘であり、令嬢育ちである限り、こゝまで来るともう声を立て得ず、期待通り太股から臀まで真赤に逆上している（顔こそ見えないうが思いやられる）。然し、やはり緋の腰巻の色の映えには及ばないが、処女の初羞恥は十分物語っている。

そして、これからはいくら書いても同形示

的な筆致があるだけ。唯、歌麿調の描写あるのみ、違うのは事後の彼女の姿、それは乱れるだけ乱れた着物、と云う形容詞以外云い方が延びるだけの事。そして、たとえ簡単でも両手、両足を縛られたまゝボクの前に転がって、晒しものになっている事である。

ボクは「とそ酒」を一杯だけ引っかけると後はピース一本。さて味は？ 案外平凡な味と云うべきか、然し、生娘らしい柔順さは十分頂けたものゝ、文弥節もそれらしきものはなし。然し、この雨にうたれたボタンの風情は、とても比類なき美しさで、開花驚異の打撃か？ 肅として声なき浜江の姿に、ボクの次の刺戟は責へと延びて行く。

そして彼女の帯締めを抜き取って、既にゆるんでいるハンカチの縄目を解くと全く無抵抗のうちに、今度は和服特有の袂の振りの開き口へ、肘から腕を抜き出して二の腕まで剥き出しの両手を一応、本縄かけにしようとしたものゝ、お太鼓帯では本格高手小手は無理までも、一応彼女の柔らかさを利用して、その帯の上に両手横一直線に乗せるように、丁度後手にかつぎ上げる感の程度に胸から一卷縛り上げてしまう。

次に、剥き出しで転がる白の如き浜江の臀

部を見た時、そして目を下ろして両足首に搦み、縛った腰紐まで目を動かしている。と、どうしても仰向けにせざるを得ない感情に走る――。そして、勿論そうする。さっきからじっと目を閉じたままの浜江、顔色が今度は青くと云おうか、蒼白くと云うべきか、白く全く白く頬紅まで消えんばかり……。その唇のあたりの鮮血は、鼻の下、顎のあたりまで一面に紅は延び散って、ボクの乱暴を物語っている。

胸の高息、そして軽く上げた両膝と、縄目にくびれた足頸も、二つ並んで観念的な水蓮の素足の先に桃色に光る爪の色、あとは七夕祭の色紙の乱れの如き衣裳。その痴態のそばにわざと威儀を正して坐ったボク。

「お嬢さん……」

と、真面目な呼声に……、ハッとしたらしく、パチリッといっても、丸い目でない細い目を開けて、

「エッ？」と天井を見て、そしてボクをさがすようにほんの少しこちらを向いて、ボクが目と合うとすぐ又伏自勝ちではあるが、わざとらしい閉じ目でないまゝ、小さい可愛い、一面ピンク色の唇を開けて声を出す。ボクの無言のうちの微笑を見ると警戒心をゆるめて

えも云えぬまばゆい羞恥表情で、
「負けましたワ……あたし……、どうしたら勘忍して下さるの？」

と一息つくくと、又力抜けた感。

「いろんな約束事をきいたら……」

「どんなお約束ごと？」

「勿論、これから先の話ですよ」

「わかったワ、助けてネエ、あたし負けたの……、このまま捨てないでネエ、お願い……」

「そりや、お嬢さん次第ですよ」

「エ、Iさんが愛して下さればネエ……」

「私の愛し方はこんなですよ」

「あたし、あなたの心がほしいの」

その頃から彼女の真仰向いた顔、そして天井みつめた瞳には涙の玉が溢れている。そして、うわごとのように言葉を吐ける。

「あたし、あなたの心を掴むためなら、どんな事でもするワ、他の女の人の出来ない事、どんなにじめられ方でも……」

「どんな事？」

「わからないワ、あたし、された事ないもの」

「仮ええ、考えてごらん」

催眠術にかゝったようなものである。

「わからないワ、けど、今されてるみたいなさ……」



涙ぐむ声は言葉までくずれて来る。

「もっとひどいよ」

「もっとひどいって?」

「だから考えてごらん……」

「あたし、もう殺されたっていゝワ、どうな

りとして頂戴」

「じゃ、今されている恰好を云ってごらん」

「でも……」

「云えないなら、ウソか?」

「そんな事……、はだかにされてるんですワ」

「着物着てるじゃないか?」

「でも、はだかみたいでしょう……」

「ほんとの裸にだよ」

「ハイ、されます」

「そして、……」

「くくられてるんですワ、手も

……あし……も」

声は落ち、かすれて完全に泣き声になる。

「それから、どうされたの?」

ボクの力の入った呼び声に、

「もう、勘忍……」

と、遂に手ばなし(当然だが)

で泣き出す。

「泣きやんで、誓ったら許してあげる」

「ハイ、……誓います……」

「何を……」

「あなたの云われる通り……」

そして唇をかみしめて、涙をとめる努力をする浜江。手だけ縄目を解いて抱きしめる。浜江は両手をボクの胸に当て、まだ鼻をすゝっている。

浜江の横に投出された、未だ

縄目に搦んだ両足を見ると、純情無垢の雪の素足ではあるが、それでも裾前を合わそうともせず、ボクの胸に両手をあてたまふ、ボクの喉もとにぴったり頭部から頬を押付けて可憐な甘え方であり、心を静めているのであるう。

結立の髪はやはり相当に乱れているし、そして、今度は可愛がるキス。ボクにしては平凡なキスと云っても、喰わぬよりましなキス。キスしながらでもボクの目は、浜江の剝出しの盛り上った臀部から、縄目の足首、脛のあたり、足搔いて畳に爪立つ足の末端まで、なめるように眺め動いている。暫らく二息三息のあと唇を離すと、

「足の縄もといてあげようか？」

「マア、くくられていたのですワネエ、マア一フフ、」

少し顔を起して自分の下肢の露出を見るとあわてゝ片手で裾をかきよせて膝頭をかくし「勘忍、許してエ……」

と急にあわて出す。ボクの片手は楽に結び目を解くと、すぐ起してやる。

「すみません、有難う……」

あくまで純真可憐である。そしてボクの顔や口のあたりを見ると、

「まア、ホホ、ホホ、」

と、こぼれるように笑うと、すばやく袂からハンカチを出すと、

「ごめんして頂戴ネ」

と、ボクの唇のあたりを、しなだれかゝるようにして拭きに来る。

「有難う……」

胸をうずかせて拭かすボクの心情は、直ちに次の残虐には進めない。

「お嬢さんも、ハハ、」

わかってますわ、とばかりに落着いて、

「お嬢さんなんて、イヤッ！」

「じゃ、浜江ちゃん」

チラッと流し目でボクを睨むと、一しきり裾前をかき合わせてシヤンと起き直り、コンパクトを帯の間から抜き出して眺め、

「マア、ホ、ホ、ホ、とてもホ、ホ、ホ、ひどい方ネエ……」

コンパクトの鏡と半々で、細い目尻の流し目はボクをトンコロと参らす。

ボクの見返えす悩ましい目の光を見ると、チラッと下を見た時、ボクの膝の横にしわもみになったボクのハンカチを見た浜江のあわて方、パツと再び顔を赤くして、自分の袂へかくし込むその早さ……。そしてテレカクシ

に今頃になって襟をかき合わせて、

「ワタシ、どうしよう？ ごめんして頂戴ネ 不作法で……」

いやに姉さん振った浜江、

「一寸、ごめんネ」

と、いそいでポコポンとパフの活動を初める。

「待つ間の御駄賃だよ、動くと又縛り上げてしまふよ！」

文句抜の先を越して圧制してしまふ。

「でも……ハイ！ フフ、」

と、案外素直に膝小僧と太ももを出したまま化粧を初める。この娘の太腿部という所は少々のスベタ、ヤセ型、デブ型、荒肌、茶肌と雖も、一応は見るに耐える女肌の最高級部品なんだが、この浜江に至っては全く非の打ち所のない美しさで、
「食べてしまいたい」と誰か思わざるの絶品で、色、張り、付き、そのまゝ顔を埋めてしまいたいものである。

「そんなに見ないで……」

「じゃ……」

「あたし、何もしませんわ、今、縛るっておっしゃったから……」

「縛られるの、イヤ？」

「エ、それは……、でも悪趣味ネエ」

「じゃ、もう縛らない……」

「アラ、どうして？」

化粧の手を止めて目を見張ると、言葉を續けて、

「かまわないですよ、あたし、自分の思う通りする人が好きなんですもの、あたしも、やんちゃするものね、くくられて折檻される人があっていゝのネエ、ネエ」

と、休めた手でボクの膝を突く程に氣心を許して来る。ボクはむき出しの彼女のブリツと張り切った太もゝを撫ぜつゝ、

「有難う、ボクは浜江ちゃんにとりくく参ったよ」

「ウソよ、あたしの方こそ」

と、氣嫌を直して化粧を續けて、

「もう、あたまだめ……、こんなになると思わなかったもの」

何だか、ボクへの意味深長に聞える。

「帰り道までもつかしら、ホホ、ハ、イヤネエ、ホ、ハ、」

それでも四苦八苦して頭髮の乱れを直して「一寸待って頂戴ネエ、直るかしら」

着物をあれこれと着付直しにかゝる。漸く何とか恰好をつけた彼女、

「オー寒む！ ごめんネ」

全く打って変った親愛感で、云わずともボクの斜横に坐って、膝も手も差入れて来る。その手を布団の下で握むと、可愛い、可愛いと摺り合はす。

ボクが入口の扉の錠をはずしに出ている間に、浜江はすり抜けるように化粧室へ消えている。女のわずらわしさだ。

それでも、もう一度たべたいような白魚の

絵と写真のアイデアを募る

本誌に発表する口絵やサジマゾ切腹等や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帖、等について、こういった構図やポーズ、又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申越し下さい。貴方の考案されたアイデアによって、誌上を飾り、又は分譲品中に加えたいと思います。採用の分、並に優秀なる企画に對しましては、写真又は画稿を差し上げます、詳細なる説明の外、必ず略画若しくは説明図を添えて下さるようお願い致します、

(企画係)

十指をキツチリ揃えて、やはり育ちのよさを表現して名残惜しそうに挨拶したものゝ、帰りかねる風情に、送りおくかみになるといけないからと帰らす。

このアツサリの引際が一番大切なものである点は、既に先輩達の証明済であらう。

生娘、町娘、女学生とある内、令嬢としての本格的なのはこの浜江が唯一のもので、高尚と氣品のある女責めとして、せめて一日のビックアップだけでも、詳細に述べたいのであるが……。

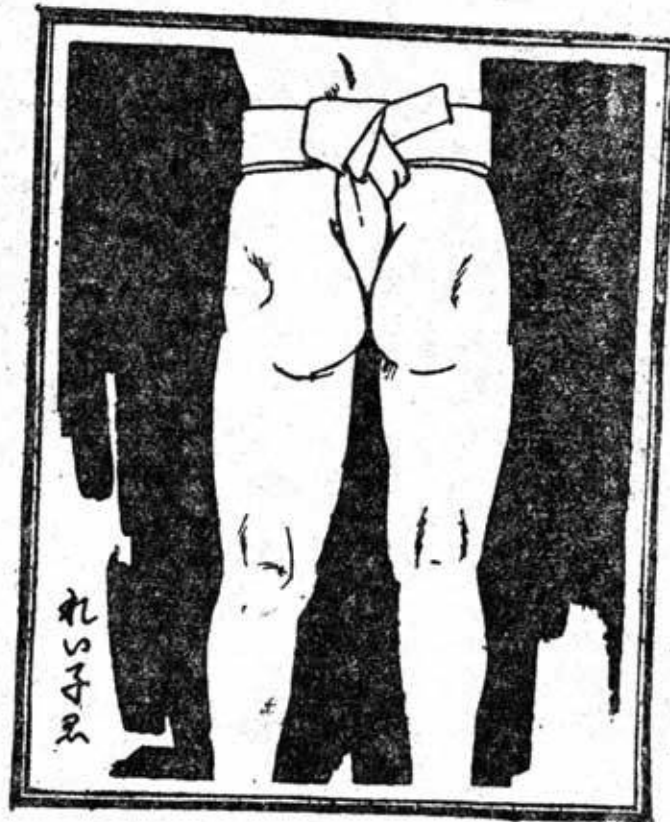
この令嬢浜江が、遂にマゾヒストの化身のようにボクの身辺にまわりついて来るのは丁度、松本と同じケースで、真面目一本の女の変化である。

そのことについては、何れ機会を改めてその後の変化を詳述するつもりだが、ボクの提唱するコスチューム責めが、成功するもの、この浜江のような淑やかな令嬢によってこそと思われる。「どうされるの？ 言ってえなア」と毒づく秘書の松本、「どうなりとなさいよ、どちらにしてもされるだけの事はされるんでしよう」と不貞くされる君江等とは雲泥の差であるということを上上げておく。

(未完)

— 私の少年時代の告白 —

少年の体臭



長い白布が彼等の手によって肩に掛けられ、足の下まで垂れ下がった。未だ陽焼けせぬ裸身にその布の白さが調和して、太一は云い知れぬ胸の高鳴りが湧き起こるのを覚えて一心に注視した。

太一は校庭の一隅に集った一群の少年達を眺めて、異様なシヨックを受けた。プールの前に整列して居たT中学の一団が緊張からくずれたかと思うと、上衣やズボンを脱いで銘々、水泳の用意をし始めたのだ。あちこちに

やがて一様に、晒木綿の六尺褌が腰にきりと締められ、陽に照らし出されながらプールの前に整列していった。これは全く思いがけない出来事で、並ぶ百数十名の裸体が、太一の目にまぶしく飛び込んだ。制服のまゝで

森

太一

は見られぬ特別の雰囲気であった。彼等の裸群から発散される不思議な臭いであった。百数十名と云う六尺褌の少年達は、あまりにも強烈な光景であったし、太一にとっては、又とない見事な絵図であった。その真白い六尺褌が、彼等の雄々しさを決定づけて居た。しかも太一と同様一年生ときているので、一層激しく太一の心を動揺させ、呆然としてしばらく見とれさせていた。

T中学は毎年一年生が太一達の学校で水泳の練習をする事になっていた。

——T中学に入れば良かった。——
といくら思ったかしのれない太一だった。と

いうのは、太一のI中では股部を覆う部分が三角になっている紐付きの黒いサポーターの上から、更にメリヤスの黒い水泳着と云うのが規定であった。最初、水泳担当の教師から此の服装の話が聞かされた時、その服装が極く普通のものに思い、又、その通り着用した時も、別に関心を持たなかった。所が、T中生の渾姿を見てからと云うものは、自分達の水泳の服装が甚だつまらなくなり、T中生のように、六尺褌をきりりとさせられる生活をこよなく羨望するようになった。太一は生来の気性である為か、それ共、青少年期の前段階に入った理由によってか、裸身をさらす事は何故か恥かしく、水泳着のように、ピツタリと体の殆どを包んでいる方が安心出来た。T中生の六尺褌に憧れても、褌一本の裸身になる事は、相当の勇氣を要した。だから、自分から締めるのではなく、全員が揃ってそうしなければならぬように規則づけられるのが好ましかった。太一にとっては、裸身にまといつく白い褌の一節は、立ち並ぶ少年達をしていやが上にもある興奮を喚び起こした。腰の廻りの白い線や、背後から臀部の割れ目に晒木綿の食い入る様は、見れば見る程、なやましく、

——六尺褌をして見たい——

と思わせた。その上、太一を羨望視させたのは、彼等が何のためらいもなく、真裸になつて褌を前に当てがってどん／＼締めて行く姿であった。太一等は、水泳着姿になる前、サポーターをするには、人に見られないように工夫しなければならなかった。それで、サポーターだけは家で装置しておいた。それにひきかえ、T中生が平然と振舞つて居るのは実に羨むべき光景だったのである。

六尺褌の着用は、比較的早く実行した。然し、それも最初は、晒が入用などとは母にも云えず、有り合わせの布を継ぎ合わせて作った六尺褌らしき物で我慢せねばならず、本物の着用に及んだのは、夏休みも終りかけた海水浴場であった。継ぎ足しの褌を作る時が楽しみて淡い興奮を覚えた。慣れないので色々苦心してやっと締め終ると、太一は下半身を締めつける云いようのない快さをしみ／＼と味う事が出来た。太一はその裡、誰も見ない場所では物足りなくなり、学校のプールでは許されないから、海水浴場で実行しようと考へた。太一が熱望の六尺褌を締める日まで、こんな事が有った。友人二人と海水浴に行き急に宿題の貝類採集のことを思い出し、貝殻

をさがしたが、集めた処置に困まり、

「あゝ、ちようどよいものがある」

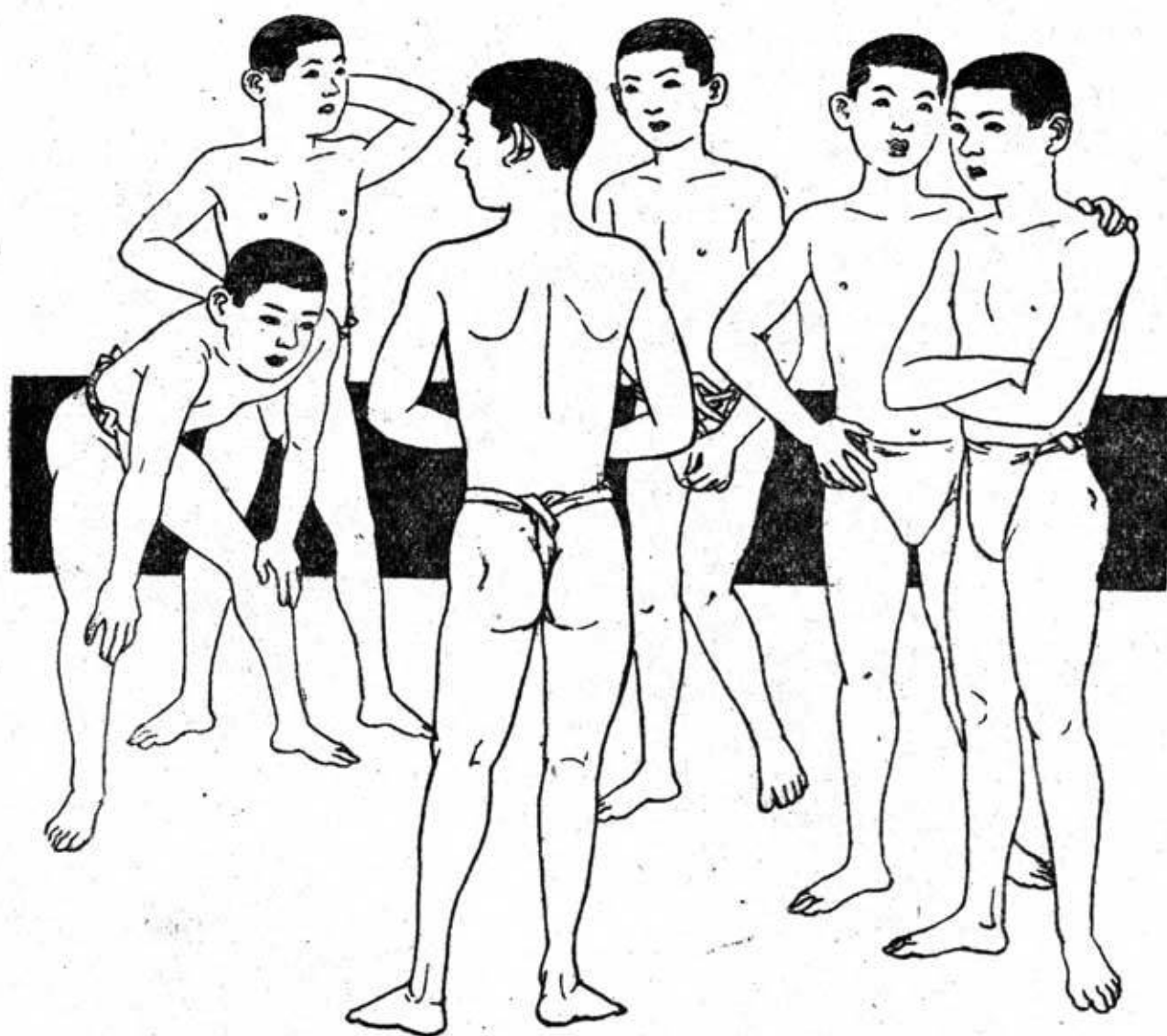
と云つて水泳着を脱ぎ吊紐のどこを結んで袋として入れた。太一は我乍らよい事を思つたと心中嬉しく、咄嗟の機転で、うまく裸体露出に成功したのを喜んでゐた。スーッと体の圧迫が消え、ほんの僅か覆つた体の一部分が自分の目にも異様に感じ、これで自分も勇敢な少年仲間だと云う自負心が湧き起こり、この分なら、これから褌一つで人前に出られる勇氣が出そうだと、この機会を心から喜んだ。友人がきちんと水泳着をしているのが、急にみじめな姿に映じ、

——どうだ、僕は勇ましいだろう——

と心の中で誇った。それから数日後、太一は真白な六尺褌で砂浜に立ち、自分の雄々しい姿を認められ度く、走り廻ったり、逆立ちをしたり出来るだけ多くの人の視線の中にさらされていたかった。

六尺褌への思慕の時代はこのようにして過ぎたが、褌は更に発展し、翌年になって、より強く体を緊迫するものを憧れるようになった。相撲の褌、それであった。その動機は新聞で見た体育大会の小学生の相撲体操の写真であった。褌こそ木綿ではあったが、六尺褌

とは違って、前部の垂れと、腰に廻らす巾の広さが魅力的で、倦かずに写真を見続けた。そして、写真中の小学生の身分が羨ましくなり、何故自分もこの学校に通える所に家がな



かったかと、つくづく淋しくなった。続いて相撲読本を手に入れた太一は、その本の口絵ではっきりと稽古褌をつけた少年の体を見て興奮は更に上昇し、立場を振り変えて、その

時の股間の圧迫感を想像して、悦に入って居た。太一は海水浴で使った晒をそのように体に締めて見たが、甚だ頼りなく、満足すべき緊縛感を与えられなかった。

——相撲褌が

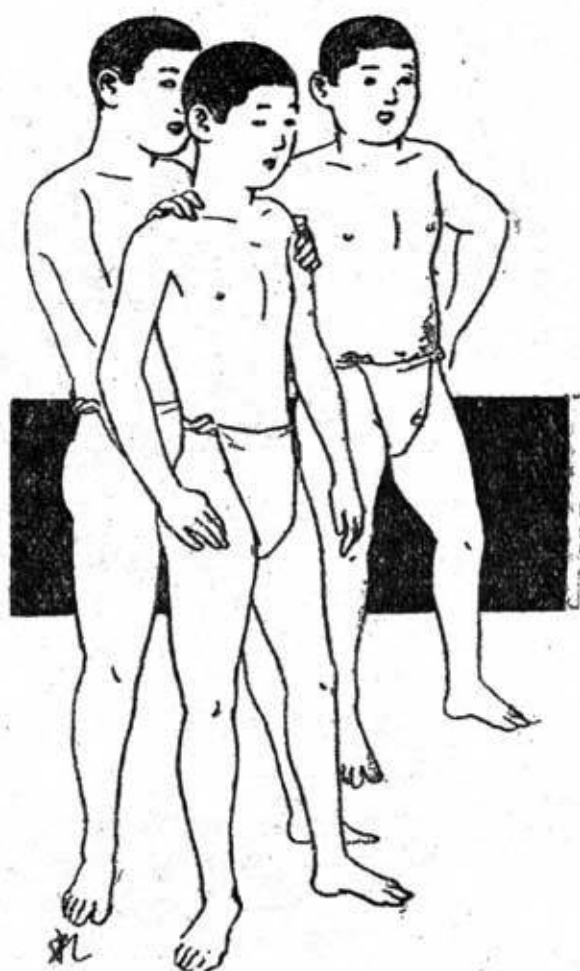
欲しい——

と真剣に考え、如何にして手に入れるべきか心を悩ました。たとえ手に入れたとしても何処にかくして置くべきかも考え合わせねばならなかったし、現在の自分の小使だけでは到底買えそうにもなく晒の糊をかたくして、僅かに褌の近似感を得

ているに過ぎなかった。相撲褌の裸群は、こよなき素晴らしき絵だった。太一は、一人一人の少年の顔を追い、中でも肥えている少年に最も心がひかれていた自分の心を知った。少年がやせていると褌が痛ましく、肥えていれば、ピッタリと身について見るからに頼もしく思えた。

相撲体操を見てから、種々な形の妄想が襲ってきた。その中で、太一が、それ以上は有り得ないと云う極致は、次のような光景であった。

白い相撲褌を締めた行進が整然とグラウンドを一周する。その一団の中に交った太一は、意気天をつくものがある。やがてグラウンド中央に規則正しく間隔を置いて並ぶと、数万の観衆注視の中、号令に合わせて勇ましい相撲体操が始まる。血湧き肉躍る数分が過ぎ、愈々大会の呼び物、一齊に褌をとった少年達は見事に発育した全身を観衆の視線の中に晒す再び号令が凜として場内に響き渡り、奇妙な体操が繰展げられ、観衆をして感嘆の声を挙げしめ、特に立派な体格の太一は大会随一として表彰せられ、全裸のまま台上に上って賞品を受ける。得意や正に絶頂。翌日の新聞には、最大限のスペースを割いて写真がのる。



れい子

た。それも、自然の姿に於て真裸とならねばならない境遇であるのが良かった。又、何者かに並し去られ、否応なしに一条まとわぬ裸体にされる事も夢に描いていた。

——柔道着を

着たい——

中央には喜色満面の太一の体が勇ましく写っている。更に特別記事として、発育の優良児として太一が表彰された時のクローズアップの写真までデカデカと飾っている一駒であった。太一は我乍ら誇大妄想に感心するやら、あきれるやら、独り楽しみ乍ら空想する秘密であった。

中学二年の時、海水浴場で太一の上を行く少年に出喰わした。赤禪を見たからだ。いなせな赤禪は、又もやムラ／＼と欲情を覚えさせ、家でこっそりと晒木綿を赤インクで染めて着用した。その後はきまって猛烈な習慣を喚び起こして、新しい興奮剤を加えた。

一にも二にも裸の少年群を描き、唯鑑賞するでなく、常に自分がその中に有る事を欲し

次に起こった現象は、白い稽古着をつけた少年への思慕であった。皮肉にも、武道の正課に剣道を選んでいた太一は、一年の入学当初から、柔道着を抱えた同輩や、稽古に励む同級生を見て、ほのかな近寄り難い憧憬を覚えていた。それがはつきりと、太一の心に強く巣喰うようになったのは、二年生の秋頃だった。太一の柔道着への思慕は厚司、前掛、禪と云うコースを辿っての第四番目に現われたもので、前記のものと相通ずる興奮を容れていた。太一はやがて辛抱し切れず、放課後他クラスの教室へしのび込み、武道用具入れに置き忘れてあった柔道着を盗み出して家に持ち帰った。太一は、一時黙って借りようと思った。口では借して呉れなんてとても云え

るものではなく、意を決した迄の事だった。良心の苛責に堪えかねたが、二、三日して元の場所に納めておけばすむと、勝手に決め込んだ。その日、家で胸をワクワクさせて柔道着を全裸の上から着用した。すると厚司や禪の場合と同様な現象が起こり、柔道着を楽しむ時間より、習慣に打ちしいる時間の方が長く、あっけない瞬間であった。太一は目的を果たしてしまうと、柔道着の処置に困り、厄介になったが、自分の寝具の下に突込んで置いた。蒲団の始末は太一の役目だったので誰にも発見されないだろうとたかを喰ったが翌日、学校から帰ると母に、

「蒲団の下に柔道着があったよ。あれ、人ではないの。返さなくてもよいの？」

と問われてギクリとした。然し太一が返事をしないのに、それ以上問い責められなかったのを幸いにして、やはり蒲団の下を隠し場所に決め、時折出しては着用し、秘かに楽しんでいた。太一は、今にも柔道着の盗難事件が公表されて話題に上らないかと、内心びく／＼していたが、転校していった生徒が置き忘れていった事がわかり、幸運さを大いに喜んだ。

太一は、多勢の少年達が柔道の乱取りをし

ている光景をこよなく愛した、其処に、又も息詰まるような少年の体臭を体全体にかく事が出来た。

——柔道着の少年——

新らしい少年像を強く根ざしめた太一は、

柔道着から或る力強さを肌に浸み込ませようと思ひ、よく寝巻のかわりに柔道着のまゝ、寝床にもぐり込んだ。いつそや、

——僕は、柔道をしている夢が見度い——

と紙に書いて蒲団に敷いて寝たら、本当に

正夢になつて現われた。ほんの二、三秒間の夢のように思われたが、翌朝、この夢にしばし瞑想を惜しまなかった。

(この項おわり)

私の見た三人の腰巻女

東 明 広

私は少年の頃から女の人の腰巻に対して妙に気がひかれてならなかった。特に二十才前後の女の人の腰巻を纏った姿を見る為に、足を棒にして歩き廻ったことは偽らぬ事実である。しかし、昭和十年頃から若い女の人で着物の下に腰巻をまとっているのは数える程しか見当らなくなつてしまつた。近頃では、尚更少くなり、後、何年かの内には腰巻姿というものが日本の国から全部なくなつてしまふのではないかと気が氣でない。

私の今迄に見た腰巻をまとつた女の人の姿態の中で、忘れることの出来ないものを三つ程書いてみよう。

(一)、私が浅草の近くに住んでいた昭和十六年

の頃の事です。私は例の通り腰巻をまとつた若い女を物色して、ぶらぶら街の中を歩いていました。その頃は、もうぼつぼつモンペと呼ぶ、色気もそつ気もない股引のお化けのようなものを、老いも若きもはき初めていた頃で、腰巻姿の女を見つけるのに苦労しはじめていた頃でした。

その日は相当風がきつく吹いていましたので、私は着物の裾をあふられて、その下の腰巻を見られるかもしれないと、その時の腰巻の色等を想像して、それを楽しみに国際劇場のある方へ歩いてゆきました。

ふと前を見ると、人通りも少い街筋を向い風にあった女の人が目につきました。裾を

開くのを用心しながら片手でしっかり裾を押えているので、私はいさゝかがっかりして、やりすごしてしまいました。

丁度その前、四、五丁先の角から出てきたまだ十五、六位の女中風の娘の姿に気がひかれました。「あの娘は腰巻かな、ズロースかな？」私はゆっくりと歩調を合せながら、その娘の裾の方に目を移しました。ところが偶然といおうか、急に強い風が、あつという間に娘の裾を吹き上げてしまいました。折悪く(私にとっては折良く)両手に風呂敷を抱えていましたので、急に裾を押えることが出来ません。娘は真赤な腰巻を膝の上あたりまで風にまくり上げられ、私の視線の中に堪能するまで、腰巻の赤と肌の白との美しいコントラストを楽しませてくれました。私は呆然と止つたまゝ、その風景に見とれていました。が、娘は私が見ているのに気がついたのか、くるりと後を向いてしまいました。

(二)、そんな事があつてから二年後、昭和十八年の四月のあるばかばかと陽気な日でした。



当時私はK区に下宿していました。その下宿屋の娘は十九才で、大人しい整った顔をしていました。その頃の若い女は「スズメの巣」だとか何とか云われながらも、パーマネントをかけない娘は一人もない位、皆競ってパーマをかけていたものです。それにその下宿屋の娘はオサゲ髪に和服でした。その日、私は便所へ行こうとして階段を降りかけて、ハッと足を止めました。それもその筈、階段を降りた突当りが洗面所になっているのです。が、そこに真赤な腰巻一枚まとっただけの半

裸の女が髪を洗っているではありませんか。

私は思わず息をのみ込むと、気付かれぬように階段を逆戻りして室の中から首だけを出して、暫くはその赤い腰巻に引きつられたように、その娘の後姿を眺めていました。しかし、生理的要求には抗しきれず、意を決して下に降りると、その姿を横目で見ながら、すぐ横を通り抜けて便所へ入りました。用を済ませて洗面所の所まで髪をすいている最中でした。

「貴方、今日お休み？」

と、私の方を半ば向いて上げた右手の腋の下から問いかけたのです。私は真正面から、まじまじと娘の腰巻姿をゆっくり観察することが出来ました。

幾分長い目のネルの腰巻を両の乳房のすぐ下から巻きつけて、紐は用いないで無造作に一方の端をはさみ込んだだけでした。私が若し絵を描く技術を持っていたとしたら、その

時の姿を絵にしておきたかったと、今でも思っています。

(三)、これは一昨年の十一月頃の話です。私はその頃、N市にいて、丁度或る女と交際していましたが、その娘は私の所へよく遊びに来ましたが、お互に勤めの身であつたので、役所から帰って、食後雑談でもしていれば、すぐ十時十一時になってしまいます。その時刻になると私はきつと彼女の家迄送ってゆきました。彼女の家は、今でも両側が田圃になっている淋しい町です。その日も二人は話に興がのって、例のように晩くなり送って出た時です。途中で私達は不思議なものを見ました。どうも人影のようでもあるし、白い犬のようでもありましたが、近づいて雲間の月の光でよくよく見れば、女の人で、ただ赤い腰巻を纏っただけの姿なのです。それも田圃の中に腕組みをしたまゝ、じつと立っただけです。私は思わずぞっとしました。しかし、後で彼女にきいてみると、その裸女は狂女で、毎晩のように裸のまま田圃の中だろうが溝の中だろうが、立っているのだそうです。

私には、その狂女の月光の中に浮び上った腰巻姿が忘れることの出来ない印象の一つになっしまいました。

(おわり)

続・露出願望の少女の告白



柴 崎 黎 子

九月号で恥かしい一文を、皆様のお眼にかけてしまいました。それから三ヶ月、私の露出への執念はあれを書いた時よりも、もっと／＼私を苦しめるのです。それで私は再びこうして一夜を費して書かねば居られなくなりました。たゞ、たゞ、心の悪魔に快い鞭で打たれ乍ら……。

近ごろ私達女学生の間に、Hという言葉が流行って居ます。私もよく知りませんけれど変態ということらしいです。「あの人Hよ。」などとお友達が話しているのを聞くたびに、私は何だか自分のことを云われているみたいで、心苦しくて堪まりません。たしかに憑かれたような私の露出への執念は、Hと云われ

ても仕方ないでしょう。私の生活はまるで自分を恥かしめる事に終始していると云っていいのですから。

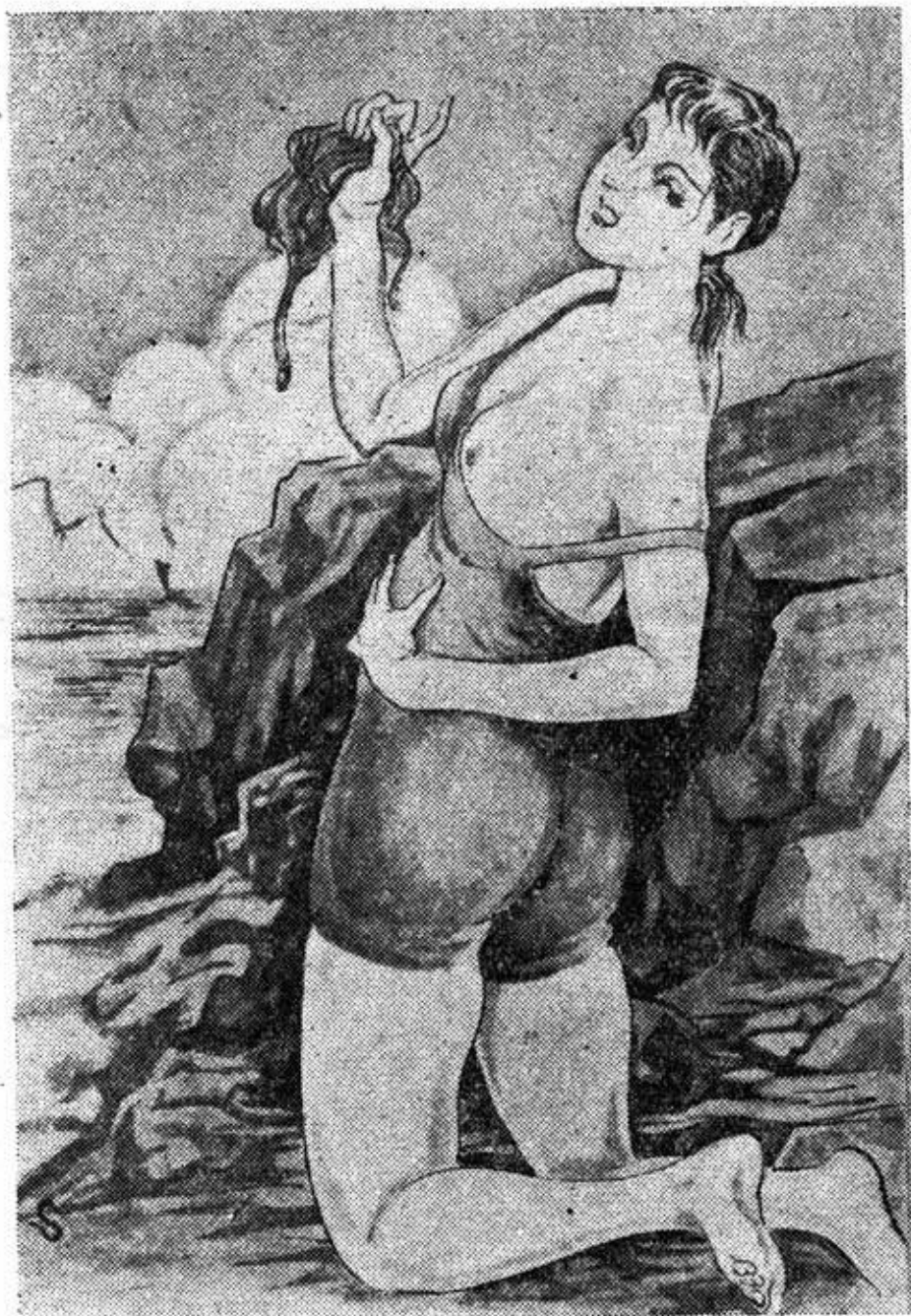
こんなことではいけないと思います。あさましいとも思います。常に目に見えない何かに責められて居るようで、このまゝではいつの日に、日かげ者にされた人間のように、みじめな結末を辿るのではないかとさえ思います。が、ひとたび冒険の心が昂まってくるともう良心も知性も消え失せて、たゞ露出願望の燃えるような歓喜の中に身悶えして居るのです。たゞ字頂天です。息もつまりそうな胸の高鳴りの中に、そのまゝ死んでしまってもいゝような喜びを感じてしまうのです。

私はまだ鞭で叩かれたり、擦り責め等に会ったりしたことはありませんし、またそういう事自体に、別段興味も持って居りませんがやっぱり私のような露出癖も、一種のマゾヒズムといわれるものなのでしょう。たゞ無暗に恥かしめて欲しいという欲望が私を苦しめるのです。手足を縛られたり、変な恰好をさせられ、そうして羞恥にまっ赤になるほど、いじめて欲しいという妄想が私の心を去りません。

私の異性のお知り合いの中で、一人だけ親

しい方をIさんといいます。大学生でとても静かな優しい方です。このIさんに私の悪癖を告白してしまったのは、Iさんに奇クを見せて頂いてからです。それからというもの、Iさんだけが私の秘密を知っている方です。私はこのIさんを、お兄様のようにも思い、また恋人のようにも慕っています。

今年の八月、私はIさんと二人きりで海水浴に行きました。私はあまり泳げない方なので、Iさんに平泳ぎを教えてください。頂いているうちに疲れを覚えましたので、海水着のまゝ人のいない磯の方へ散歩しました。海水浴場から五〇〇メートル程歩くと大きな岩と岩が重なり合って、小さな岬みたいに海に突き出て居る所があるのです。私達は岩の間を通って水平線だけが見える場所に腰を下ろしました。日光がきら／＼と海面に輝いて風はなく、波の音だけがざざあ、ざざあときいていて、海水浴場のざわめきも、こゝ迄は聞えて来ませんでした。



私達はしばらくお互いに黙って海を見つめていました。何だか日光の強い反射に息がつかまるようで漁船さえ、見えない水平線を眺めているだけでした。

が、私の心の中はお慕いしている方と、二人きりで並んでいる事の嬉しさでいっぱいでした。私の秘密を全部知っているたゞ一人の人、何だかその胸によりかゝって、甘えてみたい気持ちになりました。そして私のこの深

い苦しみを優しく慰めて欲しいとさえ思いました。が、何故か一言も云えず、ぼうっと海だけを見つめていました。

しかし、どうした事かその時まで苦しい苦しいと思っていた空気の中に、又くらくらっと思いがしそうな程強烈な、悪魔のさゝやきが聞こえて来たのです。私は心の中でその悪魔の声と戦いました。自分の大好きな方の前で、何をしようとするのか、恥を知れ、と

私は自分自身に云いきかせました。が、悪魔の声はなお私にさゝやき続けました。この方こそ私のすべてを知っている方じゃないか、何をためらうことがあるのか。私は駄目な女です。その悪魔の誘惑にとうとう負けてしまいました。形のない期待に胸がおどって私は無意識のうちに大きなため息をつく、Iさんの胸の中で子供のように甘えたり、思う存分恥かshめて欲しい気持ちでいっぱいでした。私はたとえIさんが、何をしようとも無抵抗でいようと決心し、

そして眼をつぶって次の瞬間を待ちました。Iさんの鼓動がドキドキと波うっているのが私の体にも、つたわって響いて来ました。

と、そのときIさんはびっくりする程、邪慳に私をふり放すと、私をうつ伏せに押し倒しました。そして私のおしりをぴしゃぴしゃ叩き始めました。痛くはありませんでした。が、水着一枚ですのど殆ど直接肌にふれるのと同じ感触で、うつ伏せになって無抵抗でおしりを叩かれている恰好……、私は息をはずませ乍ら、心のうちでもっともっと、撫でたりつねったり、沢山いじめて……と叫びました。私はこの、たった一枚の海水着をはぎとられてもいい、とさえ思いました。

が、Iさんはそれ以上のことはしませんでした。静かに私から立ち上ると、私の手をとって私を起してくれましたが、私は恥かしさで、Iさんのお顔を見ることができませんでした。

帰京してからも、私はその海水浴場での事が忘れられず、毎夜ベッドの上で妄想と現実に苦しみました。この世のある限りの、方法を以て恥かしめられてみたい、Iさんの眼の前で、いやむしろIさん自らの手で……。私はIさんの面影と、みにくく裸で手足を折り

曲げられた自分の姿とを、さまざまに心に描き、そしてIさんへの思慕は日一日と深まるばかりでした。

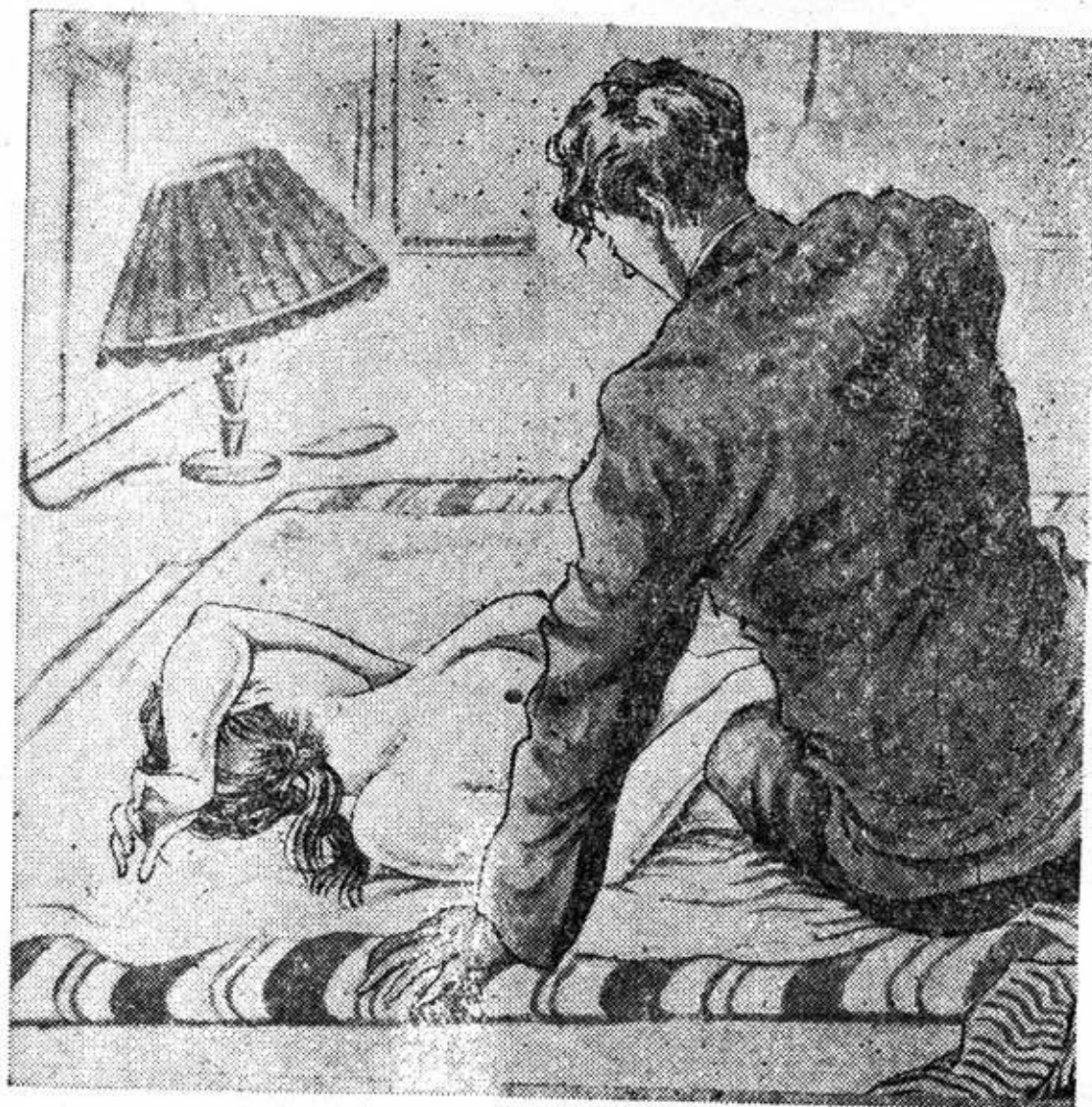
ところが、田舎の旧盆の日、ついに私のこの念願の達せられる時が来たのです。その時のこと……私は今思い出しただけでも、胸がおどるほどの感動を覚えます。丁度、新潟県の叔父さんの新盆に当たっていたので母がそちらへ旅立って行ったのです。

私はそれをいい事に父が会社へ出かけてしまったあと、大急ぎでIさんにお電話しました。私は期待に胸をはずませながら、シュミーズをとってパンティ一つの上にパジャマを着ました。それだけでIさんを迎えることの準備がすみました。

ほどなくIさんは私を尋ねて来てくれました。そして私の寝室に入ると内鍵をかけて、「今日はいじめてあげる

から。」と笑い乍ら云いました。私は何という事なしに、たゞ嬉しくて、にっこりIさんに笑いかけてしまいました。即ちそれが承諾のしるしだったのです。

「君の悪魔を退治してやるんだ。いゝね。」とIさんがいゝました。私は無言でうなずきながら、ベッドの上にうつ伏せに寝て、顔



を手でおゝいました。海でも、こゝでも、どうしてか、あう向けに寝る事が恥かしくて出来なかったのです。私の胸は、はりさけるように躍り、そしてIさんの呼吸が近づいて、私の肩に手が触れた時のその悶えたいようなよろこび……。

Iさんは私の肩をもつと、くるっと私をひっくり返しました。そしてパジャマのボタンをはずし始めましたが、私はIさんのなすがまゝになっていました。

パジャマを脱がされると、乳房がまる出しになりました。が、私はそれをかくしませんでした。Iさんの眼がそこに向けられているのを知っていても……。

「君の悪魔はこんな所に居るんじゃない。」

とIさんが云いました。そしてパジャマの下半分のゴムの所へ……、私は無意識のうちに又うつ伏せになりました。なぜあお向けで居ることが、そう恥かしいのかわかりません。私はパジャマを脱がされ、次にパンティを脱られるのを意識しぎゅっと固くなりました。

そしてその裸になる瞬間を待ったのです。それは露出狂の最大のよろこびの時でした。

Iさんはパンティを、一度に下ろしてしきうことをしませんでした。お尻が半分出た所

で手を放し、そして半分むき出しになったお尻を眺めている風でした。

不思議なものだと思います。ひと思いにむき出しにされるより、そうして半分だけさらされることの方が余程刺激が強いのです。私はIさんの巧妙な仕方に今更ながらびっくりしました。私は顔を覆いました。この時の私の感動、何て云ったらよろしいでしょう。

私はIさんが私の足を持って………ここを待っていました。しかしその期待は裏切られ、Iさんは何もせず、じっと立っているだけでした。私はもう何をされてもいゝ覚悟で、うゝと感動の声を、洩らしそうになるのを押さえ乍ら、そうして、暫くの間さらしものにされました。そのうちに、お腹の様子がおかしくなってきました。それを見て、Iさんは、

「悪魔の住み処を見つけたから、退治薬を入れたんだ。」

と私の顔をのぞき込み乍らいゝました。

私はこのことがあってから、異常に浣腸ということに関心を、惹かれるようになりました。それは、そのことがより恥かしく、より堪え難い露出であるからでしょう。私はそれ

以来、Iさんとお逢いして居りません。が、それは単に、機会がないからに過ぎないので。私の心には、もっともっと苛酷な方法でもっともっと、いじめて欲しいという願望がうずまいています。もっともっと、大勢の人々の面前で、死ぬほどの恥辱を受けたいと願っています。そしてその半面、その欲望が強ければ強い程苦しまないでは居られません。このまゝ、本当に私は……。

もう今日は筆を止めましょう。私の頭の中はこれらの妄想でいっぱいです。それで又、しばらく眠れず、悶々といろんなことを、考え続けなければならぬのです。できたら、たった一人、この妄想のお相手をして下さるシスターが欲しいと思います。もう救われようがないのでしょうか。救われる道がないなら、私は一人の似た趣味のシスターを求めて、こうした悔なき青春を、せめて楽しく送りたいと思うのです。いろいろ下らないことを、おしゃべりしてしまったこと、お許し下さいませ。

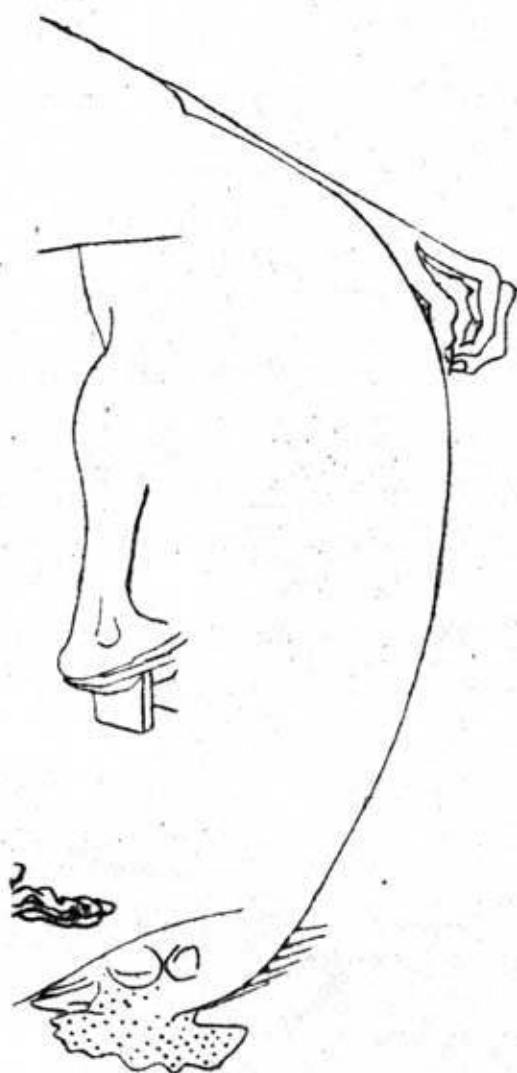
(おわり)

懸賞入選作品 第三席（賞金壹萬円）

なぶ
 𦵏
 ら
 れ
 も
 の

小^し 竹^の 紀^{のり} 夫^お

私が鳥安^{とりやす}へ初奉公に行ったのは小学校を卒業して僅か三日目の事だった。家では私と入れ替りに末の妹が入学しその上の弟が三年生になったばかりだった。総領の兄は早くから身を持ち崩して家に寄り付かず、今では「おっちょこちよい」とかいういかさま賭博をネタに二、三の仲間と組んで旅から旅を渡り歩いていたので、赤の他人も同然だったし、次の姉は幼い時に脳を患ってから、とうとう人



並の身体になれず二十歳の身空で生ける屍を晒していた。その下の姉は十六で六人のうち一番まともに育ったが、私と同様小学校を卒業するのを待ち受けて前借付の年期奉公にやらされて居た。

父の商売は、しがたない街の夜泣きうどんで、母は長年雑巾刺しの内職と苦しい子養いとで、すっかり老い込んでいた。私は暗い家庭の貧しさと營養不良とで全くいじけて、同じ年頃の子供達と見較べるといつも二つ位は年下に見られる程身体つきも貧弱で気も弱かった。勿論学校の出来も中以下で、先ず何処にも取柄のない、教師からも級友からもあまり相手にされぬ見づぼらしい存在だった。

おまけに十四にもなるその年まで、未だに寝小便の癖が止まず、毎朝々々、もはや叱る気も無くした母のしんから情なさそうな溜息を聞きながら、朝飯も食わずに学校へ行かねばならなかった。

ところがこの全く使いものにならぬ子供に同情を寄せて

何くれとなく親切にしてくれる人があったのも広い世間である。
それが鳥常の主人であった。



私の父は云わば生れつきの貧乏性で一合のお仕着せを楽しむ甲斐性もなかったが、たった一つ、見るからに佗しい好物があった。それはスキミと称する鶏かしわの百尋で時々私や母がきまって五十匁五銭がとこ鳥常へ買いにやらされた。そんな所から母が行く度に暮し向きや私達のことと愚痴を聞かせていたと見えて貧しい暮しの様子をよく知っていた主人は、私が今春愈々小学校を出るので両親がその身の振り方に頭を悩ましていたということを聞くと、持前の親切気から一肌脱いでくれることになったのである。

奉公先は鳥安といって雑喉場に出店を持つ卸専門の大きな鶏肉屋かしわやで、鳥常の主人も、元は此処の板場の出であった。総じて人使いの荒いこの商売の中で、鳥安は親方が太ッ腹で物分りがいゝので、板場の部屋でも評判がよかった。

尻の軽い連中もこの店へ来ると自然に落ちついて長い間勤める者が多かった。鳥常もその一人で五六年真面目に勤めあげた挙句、のれんを分けて貰う所まで漕ぎつけたのだった。今の女将さんも親方の仲人で貰ったのだそうである。

その頃、鶏屋の板場には子飼いの者以外殆んど部屋と称する口入屋の紐がついて居り、これが又極めて巧妙な搾取機関であると共に、一度こゝののれんをくぐると容易に足抜きが出来ないやくざ気質が身についてしまうのだった。

部屋に入ると失業中は宿と食事の面倒は見てくれる代りに、その間の経費は借金の形になって新に部屋の周旋で働き口が出来ると、三

日間の目見得の後、親方と板場双方に異存がなければ証文を巻くといつて正式に雇傭契約書を交し、その節部屋は板場の前借の形で世話を見ていた間の経費を親方から先取りしてしまうのである。その返済義務は絶対神聖とされ、もし之を踏み倒して逃げ出したり勝手に他所へ鞍替えしたような場合は、部屋は親方に対して責任をとる代りに、その当人に対しては徹底的な追及が行われ、解決に至らぬ間は如何なる所でも働くことが出来ないようにされるのだった。が反面、その義務さえ果してしまえば、いつ何時その店を飛び出して来ようと部屋はその間の事情を不問にして、その日から宿と食との保証をしてくれるのである。つまり板場にしてみれば失業しても心配は要らぬし、勢い気に食わぬ店では無理に辛抱して働く必要もない所から次第に渡り者根性に陥り自立精神を失って行くのであった。又部屋にはいつもそんな連中が多勢とぐるを巻いているので、当然ろくな事は行われず、バクチや弱い者いちめに明け暮れる雲助さながらの生活が営まれているのだった。一旦こゝの水に染まるとオケラ暮しが身について、その日任せののらくら風に吹かれ地道な勤めが厭になり此処に二ヶ月、彼処に三月と、店から店を転々としているうちに何時しか年をとり仕事に根がなくなり、何時までも世帯を持てず、そうこうするうち、若い頃の悪所通いの報いがあちこち災し初め、頼みの綱の部屋も相手にしなくなり、度重なる奉賀帳の顔も利かず何処へ行っても野良犬扱いにされた末、養老院の厄介にでもなるより道がないという、惨めな運命をたどる者さえあった。

同じ奉公人でも親方に見れば、気心の許せぬ部屋の連中よりは手塩にかけた子飼いの者に目を掛けたくなるのは人情であるから

私のような何の下地もない学校を出たてのホヤ／＼はきつと大事にして貰えるに違いないからと、鳥常の主人から淳々と説き聞かされても、私の心は容易にその言葉については行けなかった。

私は時折、鳥常の店先で主人が鶏を料っているのを見た。その時は血まみれの手で腹を裂いて臓腑を引き出す光景や、半分臉を開いて恨めしそうに何処かを見つめている鶏の目付きなどに怖いもの見たさの好奇心をそゝられはしたが、あんな仕事を自分でしてみたいなどゝは夢にも思ったことはなかった。それが全く思いがけなくも自分が鶏屋の小僧に行かねばならぬなんて考えて見るだけでも厭で堪らなかった。とてもあんなむごい事は出来そうもない！何とかして断ってしまいたい、思いながら母親にだけは黙って涙ぐんだ顔を返事に代えていた。しかし結局父が吐き出すように云ってのけた言葉が、私の空頼みを無惨に打ちのめしてしまった。

「よう考えて見ろ！ 十四にもなって寝小便をするような難物を、一体何処が使うてくれると思つてやがる。鶏屋で毎日トサカを食つたらその病氣も治るんじや。病氣を治しながら仿けるような結構な所が他にあつたら探してこい。さもないやいくら厭じやと云おうが首に縄かけてゝも連れて行くからそのつもりで居れ！」

一番痛い所を突かれて、私はグウの音も出なかった、そしてその晩怖ろしい鶏のお化けに追いかけられる夢を見た。

翌日、小便布団を包んだ大風呂敷包みを背負った母に付添われた私は、鳥常の主人に連れられて鳥安の店へ行った。

紺ののれんをくぐると店先の長い俎板の前には四五人の板場が、ねじ鉢巻にネルの腰巻という姿で山のような鶏の肉を切り捌いていた。むツと鼻をつく血腥い屠殺のにおいが立ちこめていた。鳥常を

見ると、二三人の板場が笑顔で会釈した。部屋にいた頃の仲間らしい。鳥安の親方は帳場に座って長煙管を吹かしながら呑気に若い者の仕事を眺めていた。鳥常は腰の低い挨拶をしてから、彼に私を引合せた。

「うんこの坊主か、ははンこりやよう瘦せとるなあ。これならどう見ても三分よりは落ちんぞ」

でっぷりした赤ら顔に磊落そうな笑いを浮かべながら親方は私を見て云った。言葉使いはあけすけだったが、私は何か大きく惹かれるものを感じて心の震えが止んだ。三分云々とは私の肉付きを鶏のそれにたとえて云ったので、生きた儘の目方に対して肉だけにした時の分量の割合を評価した洒落であることが後で分った。

「親方、せめて五分位に飼ひ直してやって下さいよ、それから毎日トサカも食べさせてやっておくんなさい。この通り小便布団を御持参と来ていますんでな」

二人は顔見合せて吹き出した。私は穴があれば入りたい思いで赤くなりながら、この儘消えてしまいたいと念じていた。母は卑屈な追従笑いをわざとらしくいつまでも続け、余計に私の神経をいらいらさせた。この時ほど母がうとましく感ぜられたことはなかった。

「まあいゝや、何とかなるさ」

親方は火鉢の縁でボンと煙管を叩いて云った。

「厄介者でございましょうが、どうぞよろしくお願い申します」

母はいまゝしい程ベコベコ頭を下げた。

「おーい」

親方はうなづきながら振返って奥へ声をかけた。

「はアーい」

と返事が聞えたと思う間もなく前掛で手を拭きながら台所の方から顔を出したのは女将だった。三十四、五年増盛りで美人でなかったが何処となく色っぽく愛嬌のある大柄な人だった。

一寸鳥常の主人に愛想をしてから、私と母とを見くらべて、

「常やんが世話して下さったというのは、このお子かいな」

と云って今度は母に向い、

「こちらお母さんですの？」と訊ねた。母は居ずまいを正して、

「寺島定吉の母でございます。至らぬ者でございますが、何分よろしく願ひ申します」

と丁寧に挨拶した。要らぬ事を云わなかっただけに、私はホッとする思いだった。女将は礼を返ししながら、

「いくつ？」と私に向って聞いた。一寸小首をかしげて私の顔を笑顔で、すかし見る様子が優しそうで、

「十四」と答えたまゝ私ははにかんだ。

「学校は？」と問われて「先一昨日卒業しました」と答えると、一寸驚いたように口をつぼめて「まあ先一昨日？」と呆れ顔でつぶやいた、その表情はむしろあどけない許りに若々しかった。

それから暫くして、母は只一人帰って行った。鳥常の主人と親方とは商売話に身が入って、もう私などには用がないように見えた。

女将さんは私を促して二階の奉公人部屋へ連れて行った。真っ先に教えてくれたのは便所だった。夜中に多勢の奉公人が態々階下まで用を足しに降りてくる煩わしさを避けるために階下の便所の丁度真上に二階専用の小用だけの便所が設けられてあり、パイプで下へ流れ落ちるようになっていた。

「お前さんはおしっこが近いそうだから一人だけ別の布団を当てゝ

置こう」と云って押入から私の分を出して一番便所に近い隅に場所を取ってくれた。序に背中に大きな字で鳥安と染め抜いた洗ひ晒しの半纏を出してきて、直ぐ着替えるように命じた。私は黙って家から着て来た兄の仕立直しの絆を脱いで黒い刺子の猿又とメリヤスシヤツの上へそれを着込もうとすると、女将はそれを制して、

「一寸お待ちよ、うちの仕事はよく汚れるからそんな新しいシヤツや猿又は普段には勿体ない、着替えの古いのを持って来て居るのなら上も下も着替えた方がいゝよ」と云った。私は早速大風呂敷を解いて小便布団に挟んであった継はぎだらけの猿又とシヤツを取り出したが、流石に初めての女の人の前で素ツ裸になり兼ねている様子を見ると、

「何なの、この子は、未だ恥かしがる筈はないじゃないか、どれ早くすっぽりぬいでしまつて、一ぺんこちらを向いてごらん、見たとこ随分痩せてるじゃないの」

と云いつゝ、じつと私の身体を見つめるのだった。仕方なく私はとうとう思い切って裸になると、それでも両手を前に廻して彼女の方を向いた。

「ほゝゝ、まるで洗濯板みたいな胸してるのね。これから毎日鶏のお菜でうんと御飯を食わずんぐ肥らなきや駄目だよ、妾が目掛けていゝ若い衆にして上げるから何でもよく云いつけを聞くんだよ。お前さんは顔立ちがいゝからそれで肉が付いたらきつと好い男になるよ、ホゝゝゝ」

と私の腰の廻りを何となく粘っこい眼で眺めながら云った。私は俄かに恥かしくなつて急いで着替え終るとだぶだぶの半纏に帯を締めた。

「まあ無細工な恰好。そんなに上へ帯をすると馬鹿みたいに見えるよ。こうするのさ」

女将はつと寄り添つて膝をつくと帯を結び直してくれた。ほつれ毛もなく水々しい新蝶々の髪の毛の匂いが子供心にも妙に切なく私の胸に迫ってくるのだった。

「何だか馬鹿でかい風呂敷包だと思ったら、おッ母さん、小便布団持ってこさせたのね。可哀想に、おねしよにはトサカの付け焼がいゝ相だから毎日作つたげるから缺かさず食べるんだよ、直き治るさお灸もよく効くから妾が下してあげるよ」

これは大変だと私は思った。

衣裳替をして階下へ降りると早速仕事に廻された。まず漆喰の上に盛り上げられた気味の悪い臓腑の山に、私の足はすくむ思いだった。これを肝臓、砂袋、百尋などに取り分けて血や糞を洗い落すのが初の仕事だった。胴から離されて真田虫のような食道の端にぶら下っている半分眼を開いた鶏の首に手を触れるのは身震いする程怖かった。眼を閉じてその首を引き千切っていると、今迄その仕事をしていた若い生意気そうな追廻しが、意地悪げな眼でそれを眺めながら「おいゝゝそんな手付きで鳥殺しは出来んぜ」とからかうのだった。込み上げてくる熱いものを噛みしめながら、私はつくづく身の不運を呪わずには居られなかった。けれども私にとってはこの店より、他に行く所もないのだと思うと、せめて先刻女将さんが示してくれた親しみの籠った言葉を頼りに、生きて行くより仕方がないと思うのだった。

ぜんまいのように巻いている百尋を一本の紐に引きほぐすと四五尺もあった。その管の一端から細身の庖丁を入れてスイ〜と切り

開いて行くとヌテ／＼したこのわたのような糞がどろりと流れ出る。二、三百羽分もの百尋を処理すると馴れぬ手際から詰った糞が飛び散って目と云わず鼻と云わずべっとりと喰っ付く、その情なさは筆舌に尽し難いものだった。やっとそれが終わるとゴムホースから水道の水をどん／＼出しっ放しにして糞を洗い落すのである。それがかねがね父の好物であったスキミと云うものかと思うと、何だか父が哀れに思えて涙ぐましくなるのだった。

それから明けても暮れても血と糞にまみれた生活が続いた。黙り屋で無愛想で要領を極めこむ術も知らずコツ／＼仿くばかりの寝小便小僧はいつも皆に馬鹿にされた。

露骨な猥談をブチながら大俎板を前に立仕事をしている板場達の足許に踞くま／＼と投げられる臟腑を拾い集めては黙々と腑分に専念する私の目の前には、ネルの腰巻に高下駄はいた彼等の下半身がずらりと並んでいる。毛むじやらの脛やのっぺりしたふくらはぎが立ち疲れて様々な恰好に動く。外から見えないのをよい事に、暑くなると腰巻さえ高々と捲り上げ尻を丸出しにして皆私の方へ向けている、親方の居ない時には時々無遠慮に汚い音をひり出す奴もあるが、彼等は明らかに自分の後ろに私がしやがんで仕事をしていることを勘定に入れて態と笑いものにしてやうとするのである。中には憎らしくも犬のように片足を上げてぶっ放す奴もある。一人がやると負けじと決って他の者が真似をする。めい／＼違った音を立てる度にどつと笑いこけながらちら／＼と横目で私の表情を覗き見て小気



味よげに嘲笑する。けれど私のいじけた心は何の反撥も感じないで却ってへつらったような微笑を面に浮べるのだった。孤独と卑屈に包まれた私にとって人生とは何処へ行ってもこんなものとしか思えなかったから別に腹も立たなかった。

こんな生活の中にも唯一つの救いと慰さめを齎らしてくれるものは女将さんの好意であった。それが後日期するところのある準備行為であったと知ったのはずっと後のことであるが、当時の私にとっては、彼女こそ闇夜の光明であった。寝小便を治すことについても女将は親身になって面倒を見てくれた。毎日三度の食事の度にトサカの付け焼を忘れずに作ってくれたし、私一人だけを毎晩特に内風呂へ入れてくれた。そののみか塩気で湿って臭くなった当て布団さえ何時も知らぬ間に黙って洗い替えて置いてくれた。私は少年特有の強いにかみから改めて礼を云う術も知らなかったが、内心ひどくこの事を済まなく思い込んでいた。そして容易に効めの表われないうトサカに自分自身がうとましくさえなっていた。

何の楽しみとてない中に唯一つ食生活の素晴らしい向上は私にとって最大の喜びであった。こゝでは朝から炊き立ての白飯だった。そしておみおつけの何という旨さ！ ぎら／＼脂の浮いた実のたっぷりあるその味噌汁こそ私には世の中で最も旨いものに思えた。飯もお菜も盛切りではなく好きなだけお代りができた。我が家に在り乍ら三杯目には母の眼の色に気を配らねばならなかったのに比べると何と云う豊かな生甲斐だろう。凡ゆる精神的不運もこの飽食の喜びが補って余りあった。食べるもの凡てが直ぐに血となり肉となって行くような充実感が身体中にみなぎった。阿呆の三杯汁と陰口をきかれながら私は他の連中が柄にもなく小食なのを不思議に思った。

彼等は単調に飽いて、金さえあれば街へ味覚を求めに出て行くのだった。

私は朝の仕事の準備として大釜に湯を湧かすために他の者より三十分程早起をせねばならなかった。まだひっそりした夜明け前の家の中で唯一人起きて窯を炊きつけているうちに私はフトいゝ事を思いついた。

それは鶏を入れた大きな丸籠がいつでも四つや五つ裏庭に置いてあるのだが、その中でもうあと三十分程の命とも知らず牝鶏共が毎朝ちゃんと卵を生んで置くのだった。勿論それは売物になるものであるが沢山の数のうちで二つや三つ取った所で誰も見ている訳でないから全くの所分りっこない。それに気がつくとは私は早速毎朝大釜の湯で煮抜き卵を賞味する方法を考えついた。そのうちだんだん私の舌はトサカの付け焼など受け付けなくなつて折角根氣よく続てくれる女将さんの好意も秘かに捨てゝしまうようになった。

このような高度の栄養の向上がやがて私の肉体に著しい發育の促進を齎したのは云う迄もない。毎月一回の定休日に帰宅する度に両親は決つて私の変貌に讃嘆の声を投げかけるのだった。

私のそのように目覚しい肉体的成長を女将は秘かに期する所ある眼差しで見守っていることに私は少しも気がつかなかった。

ある夜。

親方はじめ若い者がみんな遊びに出払った後、私一人が部屋で雑誌を読んでいると初めて女将は私を奥の間へ呼んだ。

恐る／＼彼女の前にかしこまって膝を揃えた私を、今迄に見せたことのないような甘ったるい眼差しで見つめながら、

「定やん、お前近頃めっきり肥えて来たじやないか」

と云って微笑んだ。私は只固くなってうつむいていた。

「だけどお寝しよの方はまだはっきりしないじやないか、相変ず物干に当て布団が乾してあるのを見ると妾やがっかりしてしまふよ。どうやらトサカも、お前の難症には効かないらしいね。」

女将の言葉はチクリと私の胸を刺した。

「一度お灸を据えて見ないかえ、妾やこれでも仲々上手なんだから今迄に方々の子供のお寝しよを治して上げたこともあるんだよ」

私はお灸と聞いて思わず冷ッとした。私が黙っているのを見ると女将は早速長火鉢の引出から艾と線香を取り出して用意を始めた。

「捨てゝ置きや何時まで経っても治らないよ、もう子供じやあるまいし第一体裁が悪いじやないか。どうもお前は冷え性らしいから、うちのような水仕事は毒なんだけど、身体を温っためるには何と云ってもお灸が一番だから一度試してごらんよ。熱いたって知れたものさ、親方にもしよっちゆう妾が据えてあげているのだよ、もっともお寝しよじやないけどね、ホ、中風の予防さ」

独りでしやべりながら火鉢の椽に艾を丸めて並べ始めた。

「さ、裸におなり」

抗い難い口調で促されて私は嘆願するような眼を彼女に投げかけたが、女将はそ知らぬ顔で線香に火をつけた。

「何、愚図々々してるのさ、十四にもなって男なら寝小便とお灸とどちらが辛いか考えてごらんよ、さつさと着物をお脱ぎ！」

次第に語調が峻しくなってきたのを感じた私は、遂に観念して帯を解いた。

「肝心の所、隠して居たら駄目じやないか」

彼女は用捨もなく私に猿又を脱がせた。

「仰向けに寝るんだよ」私は云われるが儘に寝た。

「はゝゝ震えてんのね、これでもしっかり噛みしめて居るがいゝ」

と云って彼女は袂からハンカチを取り出して私の口の中へ押し込んだ。そして左手でそろそろ下腹の辺に灸点を探りながら、やがて硯箱の筆を取り上げて擦りたい所へ灸点を下した。と思う隙に早艾をその上に乗せてあつと云う間に線香の火を移した。ポーッと温かくなつて来たナと思つた次の瞬間。チーッと叫んで思わず弓なりにのけ反ると同時にどツと全身の毛穴から脂汗が吹き出した。夢中でハンカチを噛みしめた途端、私は我れ知らず小水を洩らした。

「勘忍して！ 勘忍して！」

私は意気地なく悲鳴をあげて起き上ろうともがいた。だが女将は私の肩を力一杯押えてそうはさせまいとした。

「何よこれ位のこと！ お前は一体こゝに何をぶら下げてんのよ！」

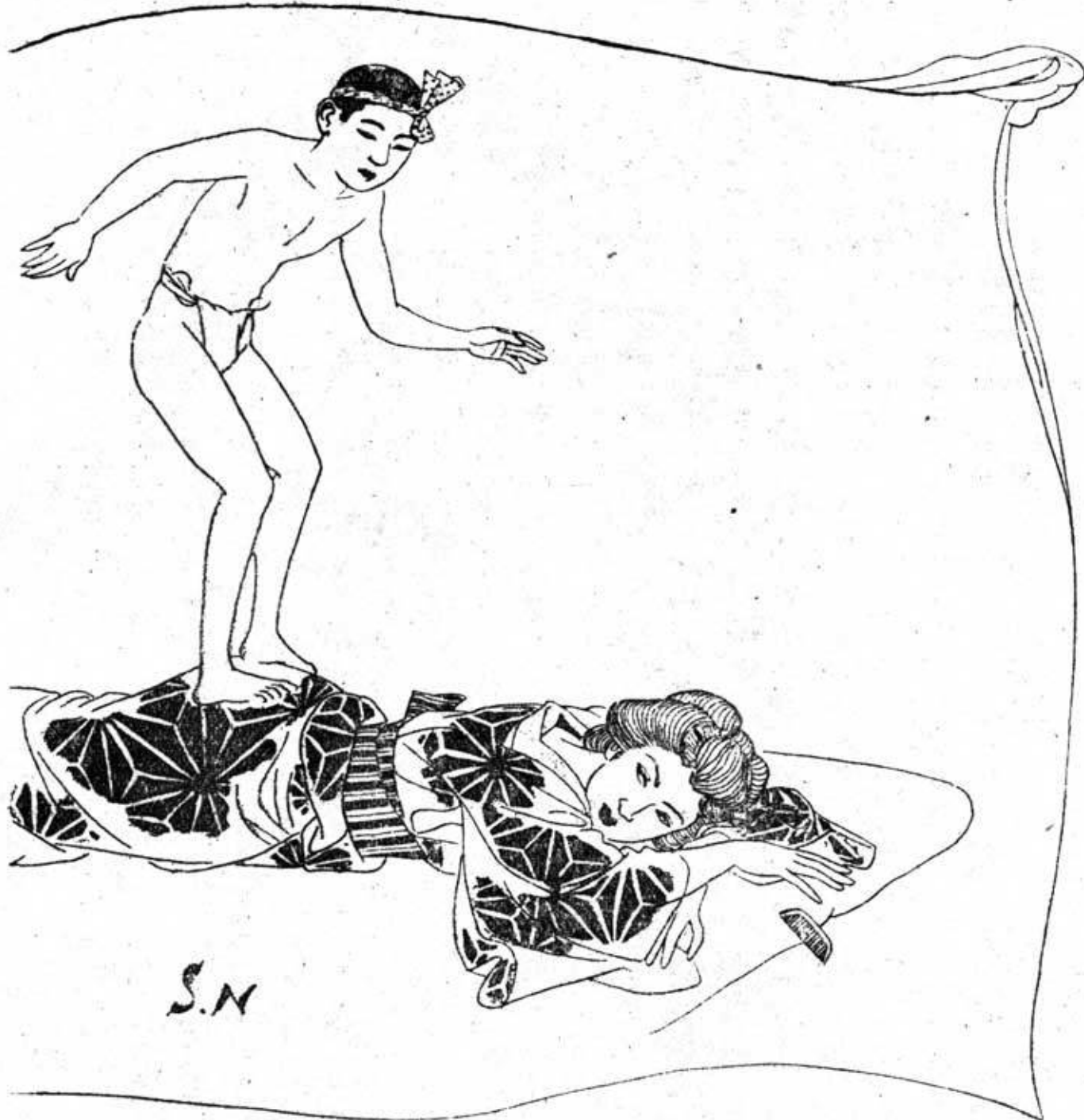
彼女は私の急所を指先で弾きながら、

「暴れるんだったらこうしてやる！」

と云うが早いか逆さ馬乗りになつて押えつけてしまった。そして素早く再び線香と艾を灸点に近づけた。チーッチチチチ、又しても私は全身を反りかえらせて悲鳴をあげた。同時に女将の両膝が息も止る程の強さで私の胸腹を締めつけた。私は苦しさの余り熱いのを忘れる程力み返った。その瞬間二つの苦痛の相乗が私を無我夢中の境地に連れ込んだ。そうだ、びっしり玉のような脂汗にまみれつゝのたうつ全身を万力のような女将の両膝に締めつけられて、あらん限りの力をふり絞って反り返つた瞬間、私の肉体は初めて苦痛の中に快感の躍動するのを見出したのだ。

「偉い偉い、よく我慢したね。初めのうちは誰でもおっかないものだけれど馴れると後でこんないゝ気持ちになるものはないよ。どう？ポカポカして来たゝる、まあ何て肌の色が美しくなって来たこと！」

ほんのり桜色になって食いつきたいようだよ」
女将はぐったり伸びてしまった私の背中中の汗をハンカチで拭いてくれながら、



「本当にいゝ身体になって来たわね、少しの間に……でももっともって食べてまだまだ肥らなきや。妾は痩せたのが大嫌いよ、こうしてお前が目に見えて頼もしくなっていくのを見るのが妾の一番の楽しみなんだよ。若い男の子の肌って云ったらまるでビロードのように滑らかできゅつと引きしまっていて何とも云えない触り心地ね。いつまでもこんな儘で汚れを知らずに居るといゝんだけど……お前だけは部屋の板場達に悪い事を仕込まれないように気をつけておくれ、女の肌を知ったら妾にはすぐ分るから……この潔い身体を汚い女郎衆などにくれてやるのは勿体ないじゃないか、いゝかえ、お前の身体には妾がついているのを忘れちゃ駄目だよ」
彼女はこゝで一言葉切ったから、
「妾や後妻で子供もないしお前を自分の子と思ってこれからも目を掛けてあげるから妾の云いつけだけはよく聞いておくれよ、部屋から来た連中は擦れっからしが多いから妾はお前が悪い遊びに引ッ張り込まれやしないかとそれ許り心配してるんだよ、お前にして見りやまだまだそんな心配は取越苦労だと思ふだらうけど、お前ももう直ぐ明けて十五になるんだからね、どうして傍が放って置くものか、けども

妾が許さないから。お前の身体に指一本さゝせやしないよ。いゝかい、定やん、今こゝで約束してくれるかえ？ 嫁さんを貰うまでは一切他の女の肌に触れませんって。さ、誓って、妾の前ではっきり誓ってごらん」

気持の悪い程真剣な表情で私に迫る言葉も当の私には一向ピンと来なかった。土台私は女のことなど夢にも考えたことがなかったから女将の云っている事などには何の現実感も覚えなかった。しかし私は只命ぜられるが儘に厳肅な誓いを立てさせられた。お灸と違つて別に痛くもかゆくもない事だけに、その誓いがどんな意味のものであるか全く見当がつかなかった。

×

生物なまものの卸商売だけに、朝は滅法早い代りに仕事を終るのも早かった。それが若い連中にとって魅力でもあり誘惑でもあった。夕飯がすむと特別書入れ時でもない限り大抵家の中は空っぽになった。



親方はいつも朝十時頃には商売を終つて雑喉場の店から帰ってくる。明日の手配をすませた上で、どっかり奥の間の茶ぶ台の前に胡座を占め昼間酒を始めるのであった。いゝ気持になったところでごろり横になり夕方近くまで雷のような鼾を立てゝぐっすり昼寝をする。そこで宵になると気晴しに外へ出るのが習慣で口の肥えた彼は家での夕飯はごく軽くすませる。着流しでふらりと出ると、好きな寄席か浪花節の席のいゝとこだけを覗いて惜し気もなく飛び出すと四、五軒もある馴染の縄のれんを夜を代えて次々と飲み歩くのが楽しみだった。

×

その後、私は繰返し灸を据えられた。夜尿は次第に少なくなつて行った。

雨など降って親方が夜家に居る時、女将に背中へ灸を据えさせている姿をチラリと覗き見たりすると私は今迄覚えたことのない嫉ましさに胸が騒いだ。しかし、あゝして神妙な顔付で親方に灸を据えている女将さんが、同じ場所で私の身体へあられもない姿で同じことをしているのだと思うと又云い知れぬ喜びを感じた。

私は内風呂の三助の役を命ぜられていた。親方と女将が入浴をすませた後で私が入ってしまうと直ぐ湯を抜いて、湯槽やタイルの床を磨き砂をまいてよく洗い流して置くのである。板場や見習の幸やんなどは皆銭湯の札を貰うので誰も内風呂を貰うものはなかった。女将さんの話によると、彼等の中には時々性病を患うものがあるからとても同じ湯には入れないのだそうである。そうすると奉公人の

中では、私の身体が一番きれいなのだと思うと嬉しかった。それに例の変な所に黒々と残っている灸の痕はとても銭湯で人前に出せない代物なので尚のこと内風呂は私にとって有難かった。

さて近頃になって私は女将から入浴の際に必ず実行するように堅く命ぜられている事があった。それは彼女が風呂をすませて出て行く時、いつも浴室の隅に雑巾にくるんで生卵を一個置いて行くからそれを割って全身に塗りつけ隅まで磨き立てるようにと云う妙な云い付けだった。

それからというものはお灸を下す前に女将はいつも眼を輝かしながら私の肉体の細部に至るまでを大胆不遠慮に検査するのだった。その時の彼女の様子は如何にも楽しげで且つ淫らな美しさに充ち私の眼にさえ不思議な魅力を感じさせた。彼女は明らかに私の肉体から大人を見出そうとしていた。ためつすがめつ時々焦立たしげな溜息さえ洩らして彼女は何かを待っている様子だった。

ほしいまゝの愛撫を受けた、後いつも女将は私に按摩を命じた。初めは肩を叩くだけであつたが、それも指図に従って次第に腰となり足となり果は乳房にまで及んだ。私に対して抱いている感情が普通のものでないことが分ってくるにつれ、私は努めて彼女の歡心を得ることに気を配った。とは云え、それは私が完全な彼女の生人形になり切ることであった。謂わば私は彼女の狎であつた。

×

夏も過ぎ秋も過ぎ冬が訪れて私は明けて十五の春を迎えた。漸く仕事にも馴れ身体もめきめき成長した。もう誰も以前のように私を馬鹿にする者はなくなった。私も少しは人見知りのとつ付きの悪さ

を改めて皆と冗談口の一つも利けるようになって来た。夜尿もすっかり跡を絶ち最大の悩みも解消した。近頃では板場見習の幸ちゃんにさえも仕事の上では絶対に引けを取らぬ迄になった。

女将と私の秘密は毛ほども周囲に知られた様子はなかった。その間にも部屋の板場は二、三人顔触れが変わった。誰も彼も云い合したように女郎買が好きで、私も彼等から絵解きや耳学問で男女の秘事を教え込まれた。しかも私は誰にも知られないところで灼熱した年増女の際どい火遊びの対象にされていたのだ。

肉体と感情の両方面から私は速効肥料を施された。かくして開花が促進しつゝあつたのだ。

或る夜女将は歡喜の声を洩らした。私自身さえ知らなかったのに彼女の眼は逸早く私の肉体に萌え出づるものを発見したのだった。それから俄に女将の態度は落着きを失つたように見えた。周囲に対する警戒心が敏感になり一寸した物音にも不安氣に愛撫の手を止めた。私達の遊戯は新しい転機に立った。

×

ある雨の夜、珍らしく奉公人部屋には皆の顔が揃つた。階下の奥の間では親方が女将に灸を据えさせていた。

男いきれのする乱雑な部屋は淫猥な空氣がみなぎり、やがてその捌け口が私の一身に集中しはじめた。惨忍な興味に燃えた眼が私を取巻き岩乗な腕ツ節が私の身体を畳の上に磔にした。私は例の恥かしい灸痕と最近起つた肉体的の変化を思い浮べて死者狂いに抵抗した。それを皆の前で晒しものにされる恥かしさもさることながら、もっとも重大な秘密が彼等によって感ずかれはしまいかと云う怖れが強く私を脅やかした。だが暴れれば暴る程私を押えつける

力は狂暴さを加えて行き遂に衆寡敵せず將に、「解剖」が行われようとする瞬間、私は思わず我を忘れてあらん限りの声で、「女将さあーん」と叫んだ。ギョツとして一瞬、皆の手がゆるんだ。その叫び声が尋常でなかったと見えて殆んど間髪を入れず階段を駆け上ってくる足音が聞えた。皆の者は慌てゝ手を引いたが、私は大の字の仰向けから起き上る暇もなく女將の姿を迎えた。

「どうしたんだよ騒々しい！ 親方の居るのが分らないのかい。皆いゝ年をして弱い者いじめも大抵にしとくがいゝ！……」

彼女は私のあられもない恰好をチラリと見た瞬間に全てを悟ったらしく、けわしく眉をひそめながら、

「定やん、お前は今晚から店の間でお寝み、こんな所で寝ているとロクなことを覚えなから」

と何時にない強い口調で云い捨てると、私を睨み据えてブイと降りて行ってしまった。

後の空気は白け切って、私は皆の食いつくような非難の視線に射すくめられて縮み上ってしまった。

「糞坊主め！ 冗談に殺されるような声を出しくさって！」

「分らんのか馬鹿たれ！」

「この野郎、何時でも女將さんに胡摩すってけっかる」

幸やんは日頃の鬱憤をぶちまけるように憎悪に燃える眼で私を睨みつけた。

「さっさと布団持って下へ行きやがれ！」

「二度と上って来やがって見ろ！」

銘々有りったけの怒りをこめて吐きかける罵声に、私は思わずポロポロと涙をこぼしながら布団を持ってすごすごと階段を降りた。

x

思えば女將さんは偶然の機会を巧みに捉えて公々然と私を茶の間一つ隔てた店の間まで引き寄せることに成功したのだった。私はその後自分の寢床から素裸のまゝでも彼女の許へ行くことが出来るようになった。

それから間もなく、女將は私の十五の祝に晒の六尺褌を切ってくれた。彼女は私を一日も早く一人前の男にしてしまいたかったらしい。その贈物は焦慮の現れでもあった。

目にしみるように白い下帯をきりゝと締めた私に彼女は豆絞りの手拭でいなせな横ツちよ結びの鉢巻をさせて、その姿を飽くことなく嘆賞した。それは彼女が娘のとき千日前の夏芝居で見た若い役者の舞台姿そっくりで、未だにその面影が眼底に灼きついて忘れられなかったのだそうである。その幻を私に再現することが出来た彼女の喜びようは大変なものだった。彼女は私にその姿の儘で按摩をさせ果ては打ち伏した全身を踏ますのだった。私は柔軟な肉塊の玉乗りとなつて足の裏から伝わる妖しい感触を楽しんだ。

「定やんは妾の可愛い／＼坊やだよ。誰にもやらない妾だけのものだ。坊や、さあおっぱいお上り……」

私は噎せ返りながら至上の命令に従うのだった。

幸やんは次第に私を目の仇にし出した。彼とて十五の年からの子飼いで私より三つの年嵩であるのに拘らず、近頃妙に女將の自分に對する風当りがよくないように感じられ、それが悉く新米の私に原因するものであることに気付いていたが、何も具体的な証拠もなく仕事の上でもう／＼すると先を越されそうになつて来たので甚だ

心穏やかでなかった。

「どうもあのシャツや鳥打帽子なんかも自分で買ったものとは思えないし、いつも一番後で飯を食うのも、どうやらお菜に手心があるのに違いないらしい」

邪推すればする程、業腹で何とかして一度私の鼻を明かしてやりたいと虎視眈々その機会をねらっていた。そんな事とは露知らず或る日、私は何の気なしに鶏の骨抜きを手伝うために彼が専用になっている出刃庖丁を使っていると、出し抜けに物凄い勢で彼のビンタが飛んで来た。

「板場の魂知らんのか！おのれなんぞ未だ出刃使う術知るもんか、小便垂れが！」

切れ物持った相手に見境もなく挑みかゝって来た彼は余程取りのぼせて居たせいも、不意を喰って手許を狂わせ指を切って思わず血のしたゝるのを口へ持って行った私を見るとさッと顔の色を変えた「あっち」と叫んだまゝ睨みつけた私の視線を受けとめることも出来ないうでそっぽを向いた途端、何処で見っていたのかつか／＼と女将がやってくるのと彼に向って

「幸やん！」

と呼びかけた声は怒りに震えていた。

「人さんから預った大事な子に、誰の許しを受けて手を掛けた！生意気なことおしでないよ！」

と言いながら血のした゠る私の指を見ると思わず顔をしかめて「まあ怪我までさせて！よし親方に言いつけてやるから覚ええいで！ 定やん、今満ち潮だから血が止まらないだろう、たばこをつけて上げるからこっちへおいで」

と言って私を促がし台所の方へ廻った。

「可哀想に痛かったらうね」

真新しい布帛を裂いて私の手をとると彼女は素早く四辺を見廻してからそッと血の吹く指を吸った。吸いながらじつと上目使いに私の瞳を見つめにっこり笑った。その瞬間、私の身体に嘗って覚えたことのない激しい昂奮が湧き上るのを感じた。

幸やんはその晩から居なくなった。

鶏屋の小僧の後釜などは、そう何処にでも転っているものではない。幸やんが去った後、私は二人分の仕事を引受けてその当座は転手古舞をしなければならなかった。

自転車に乗っての得意廻りも、初めのうちは仲々の気苦労があった。十人十色の癖を呑みこんでしまふ迄は、あっちで叱られこっちで怒鳴れつく／＼腐ることも多かったが、要領も分ってくるに従い顔馴染も出来てちよい／＼外で油をとる横着さも身について来た。あんなクソ坊主一人出て行った所で結構私一人で間に合いますと言う所を親方や女将に見て貰う気持も悪くはなかった。

得意先での私の評判も幸やんに比べて遙かによかった。何も知らぬ親方は、滅多に見付からぬ頼もしい子飼が出来たのを喜こんでいる様子が見えた。公休日に家へ帰ったとき鳥常の主人もお前を世話して鼻が高いと言っていたと、母から聞かされて私の胸は希望にふくらんだ。

数多い得意のうちでも特に私の好奇心をそゝったのは、川口の支那人街にある桃華楼と言う料理屋へ行くことだった。

川口から本田へかけた一帯は旧居留地の名残をそのまゝに、神戸

のようにエキゾチックな色彩に乏しい大阪では唯一の風変りな街であった。六ツカしい漢字の看板、時折流れてくる胡弓の音や哀調を帯びた歌声、清朝の名残を止める弁髪シヨウハイの男や見返らずには居れない程囂のように小さい靴を穿いた纏足の女、そうかと思えば清楚と妖艶とが渾然と融け合ったような不思議な魅惑をたゞえて通り過ぎる艶やかな姑娘の姿、見るもの聞くもの凡てが私の稚い幻想をかきたて遠い夢の国に誘うのだった。貿易商、料理屋、理髪業、業種は大抵そのうちのどれかで何れも日本人の店ほど賑やかな色彩はなく何処かに煤呆けた雰囲気がつよっていた。夜ともなればこの辺りは暗く淋しい静けさに包まれる。すぐ近くには安治川の船着場があって紀州や瀬戸内通いの客船が出帆する銅鑼の音や、ボーボーと尾を引いて闇に消えてゆく汽笛の響が聞こえたりして感傷的な気分を添えるのだった。

桃華楼と言う名前だけ聞くと相当立派な高級料理店を想像しそうだが、その実、余り大きくもなく一向に見映えのしない店だった。だが総じて支那人の料理店は表飾りよりも実質本位であって、こんな店がと思わせる所でも、出す料理は決して貧弱なものではなく、この店も始終同国人は勿論日本人や時々西洋人の客さえもよく入っていた。従って鶏もよく使い、鳥安にとっても上得意の一つになっていた。

初め、私は何処か肌合いの異ったこの店のムツと胸につかえる脂ッこい異臭の立ち籠る厨房へ入って行くのが何となく気味が悪かったが、通い馴れてみると日本人のどの料理屋よりも親切で気易いことが分った。

主人の王さんは五十がらみの恰福のいゝ何時もニコ／＼顔の好人

物で私を殊の外可愛がってくれた。もう長い間日本に住んでいると見えて日本語も仲々達者だった。彼は前の小僧は生意気で嫌いだ。だがお前は仲々可愛い子供だシヨウハイと言って時々蓮の実の砂糖漬だの乾ナツメだの色々珍らしい支那菓子をくれたりしたが、或る時、初めてホカ／＼の豚饅頭を出してくれたことがあった。私は未だ支那料理などに食欲を感じていなかったが、彼の好意を無にするのも悪いと思って喜こんだ振りをして一つ食べて見た。ところがその旨いことゝ言ったら頬が落ちそうであった。私は出された三つを瞬く間に平らげてしまった。王さんはその様子を満足気に眺めながら「お前豚饅頭好きか？」と聞いた。私は「今初めて食べたのだがすっかり好きになった。本当にこんな旨いものを食べたことはない」と答えると彼は相好を崩して「ハオハオ」としきりにうなづいた。そして儼はお前が大変気に入ったから一度うんと御馳走を食べさせてやりたいが都合がつけばいつでも公休日にやってくるようにとまで言ってくれた。私は是非そうしたいと答えたものの、別に彼の言葉を本気に受取った訳ではなくすぐ忘れてしまった。

それから何回目かの公休日のことであった。何時もの通り午前中我が家へ帰って昼頃から九条へ活動写真を見に行った。月に一回これが私の唯一の楽しみだった。私も他の少年達と同様に旧劇が好きだったが、何故か派手な尾上松之助よりは何処となく淋しい影のある沢村四郎五郎の方が好きだったので日活の高千代館へ入って彼の忍術ものに堪能し其処を出たのは秋口とは云えまだ夕刻には大分間のある時間だった。何と言う目的もなしに私は茨住吉神社境内の露店などを覗き込みながらテキ屋の口上を聞いたり、今川焼を買ってパクついたりしている内にフト王さんの言葉が思い出すともなく頭

「浮んで来た。と言って別に彼の店を訪ねて行こうなどとは思って
もみなかったが、川口は目と鼻の間だし、一度ゆっくり支那人街か
ら船着場辺りの物珍らしい風景を見
て来たいような気になったので自然
とその方へ足が向いてしまった。埃
っぽい電車道に沿って三丁余り歩き
西へ折れると古川橋のカトリック教
会の鐘楼が見える。桃華楼の前まで
くると私の眼に表戸に懸っている本
日定休日の木札が映った。何だか氣
を抜かれたような感じでそれを横目
で眺めながら通り過ぎた。五、六歩
も行ったかと思うと不意に後から、
「ぼんさんぼんさん」と聞き覚えの
ある呼び声がした。振り返ってみる
と案の定、それは王さんだった。何
かの用で表戸を開いた途端偶然に私
が通り過ぎる姿を見かけたものと見
え私の顔を見ると何時ものニコ／＼
した表情で手招きした。一寸はにか
みながら私は引き返した。
「よく来たナ。何故入って来ん？」
私の肩を押すようにして店の中へ
連れ込んだ。店内はきれいに掃除さ
れてガランとしていた。彼について



二階へ上ると直ぐ寝台のある部屋へ通された。そこは王さんの寝室
らしく調度の一つ一つまでが純支那風で何だか別の国へ来たような

氣持がした。

「一寸こゝで待っているよろしい。御馳走すぐ持ってくるある」

そう言つて彼が階下へ去つてしまふと一人ポツンと取り残された私は少し当惑氣味になりながら淡い後悔の念に襲われた。さりとてこの儘帰りも出来ず椅子に腰を下してぼんやり物珍らしい部屋の中を見廻した。変つていゝと言へば部屋の片隅に一間巾程もあるガラス戸棚がありその中に何かの瓶がずらりと並べられてあつた。軽い好奇心にかられて近付いて見るとそれらの瓶の中にはどれもこれも奇妙なものばかりが入つていた。どの瓶にも私にはとても読めそうもない六ツカしい漢字の名前を書いた紙片が貼つてあり、見たところ虫や動物の黒焼かミイラのような氣味の悪いものや、名も分らぬ草根木皮、何かの粉末、丸薬、粘液様のももの等々、凡そグロテスクなものばかりが入つていた。一体それらが何の役に立つものなのか私などには見当もつかない儘に只呆氣にとられてキョロ／＼眺め廻している許りだったが、そのうちフト幼い頃母から夜遊びを叱られた時、よく脅かした子供が夜遅く外で遊んでいると人浚いが来て連れて行き、支那人に売り飛ばされるぞ、と言われたことを思い出した。何でも支那人は子供を人浚いから買うと皆殺してしまつて生肝を取りそれで六神丸を作るのだと言ふ事である。愚にもつかぬ作り事だとは思ひながら今眼の前にこのような得体の知れぬ氣味の悪いものを見てはそゞろ背筋のあたりがうそ寒くなつてくるような氣がした。それと共にあの王さんまでが急に自分達とは種族の異つた人間で果して胸中に何を企んでいるか分つたものではないと思われ出し次第に不安の念が湧き起つてくるのだった。

それからどれ位経つたのだろうか。窓外の日射しは漸く暮色を漂

わし始めたのに氣付くと、私はもう決心して帰ろうと部屋の出口まで行つた。ちやうどその時、足音がして、

「おうい一寸扉開けるよろしい」と王さんの声がしたので、私はビクツとして急いでノックを引いた。そこには沢山御馳走を乗せた大きな盆を両手で持った王さんが立っていた。

「大へん遅くなつて済まんことある。沢山食べるよろしい。お腹ペコ／＼あるな、遠慮不用^{フヨフヨ}ある。」

そう言つて盆の料理をテーブルの上に並べ終ると私が遠慮するといけなからと言つてさささと階下へ降りて行つてしまつた。

私は俄かに空腹を感じると鼻をこそぐるうまそうな御馳走の匂いに思わず湧き出る唾をぐぐりと呑み込んでおもむろに箸を取つた。

それからはもう夢中で何が何やら見境なしに手当り次第口へ運ぶばかりだった。舌は踊り胃の腑は歓声を挙げそれから二度も王さんが差し替え運んでくれた御馳走をすっかり平らげ尽してしまつたので流石の私も動けなくなる程満腹してしまつた。王さんは終始笑顔で私の健啖振りを満足氣に眺めていたが最後に例のガラス戸棚を開いて一本の陶瓶を取り出して来て、小さなグラスに琥珀色の液体を注いでくれた。

「甘い酒あるな。誰でも飲める。大丈夫」

微笑をたゝえながら彼は私にそれをすすめた。それがあの氣味悪いガラス戸棚から持出したものだけに私は一寸変な氣がしたが、ほんの小さなグラスでもあつたし、その酒の色の宝石のような美しさに惹かれて一気にグイと飲み乾してしまつた。本当に甘かつた。その癖、咽喉を通過して行くのが灼けつくように感ぜられ思わず目を閉じた。

「いゝ氣持になるよ。眠くなる。しばらくこゝで寝るよろしい」

王さんと私はそれからテーブルを挟んで色々の話を交した。彼の妻は目下息子と共に山東省の故郷へ帰っていること。店のコックが日本人の嫁さんを持っていること。二人の給仕は華僑の息子達で毎日通勤で働いていること。夜は自分一人で淋しいことなどを私は知ることができた。私もすっかり心を許して店のことや我が家のことなどを差支えない限り打ち明けて話した。話し合っているうちに私の身体はポツポツと腹の底から温くなり何だか宙に浮いているような氣持がして来ると同時に、堪らない眠氣が襲ってきて、知らず知らず遠くへ霞んで行った儘、私はとうとうテーブルの上へ顔を伏せてしまった。彼の笑い声と自分の身体が抱き上げられて寝台の上へフワリと降されたのをぼんやりと意識しながら、いゝ氣持でうつらうつらしていると、帯を解かれたのか急に身体が軽くなった。次いで王さんが何か私の身体に悪戯をしたらしく、擦ったい感じがしたので私は夢うつながらうふふふと笑って身をよじらせていたようだったが、やがて得も言えぬ快い氣解さがすっぱりと私を包んでしまった。しかし微かながらも頭の隅っこで意識の一部が未だ目覚めているようでもあった。すると間もなく肉体の一部に蟻が這い廻るような搔痒感が起り始め次第にそれが激しくなっている。私は手を動かしてその所を掻いてやろうと思ったが、すっかり力がなくなっていた。私は只氣解い呻き声を上げながらだらりと伸びていた。やがて耳底に早口の訳の分らない会話が水の中を伝わる音のように鈍く聞こえてくるようだったが、果してそれが幻聴であったかどうか分らなかった。搔痒感は益々激しくなりその部分に充血感が加

て行った。私は激しい刺戟を欲していた。それは苦痛と快感との複雑に混り合ったような明らかに人為的の感覺だった。

「ぼんさん！ ぼんさん！」

揺り起されて私はまるでびっくり箱の蓋を開けた時のように目覚めた。何が何やらさっぱり分らぬ儘に私の眼前には王さんの見馴れた笑顔が立っていた。

「此処はどこですか？」私はすっかり呆けていた。

「こゝ私の家あるよ。お前、沢山御馳走食べてお酒呑んで寝てしまったあるよ」

彼は私の顔を見つめ乍ら、さも可笑そうに太鼓腹をゆすった。

電灯の光が私を不安にした。

「もう何時でしょう？」と聞くと彼は落着き払って、

「未だ宵の口あるな。今ちようど七時鳴ったところある」と言いながら巻煙草に火を点けた。

「えッ、じやもう晩になっちゃったんだな。弱ったなあ、早く帰ら

なきや女将さんに叱られるんだ」

私はすっかり慌てゝしまつて身繕いもそこゝに礼を述べるのも忘れて、あたふたと階段をかけ降りた。

「又来るよろしいな」

背後に王さんの声を声き流してすっかり暗くなった表へ飛び出すと急に心細くなって電車通の方へ向つて駆け出した。

表戸の鈴のけたゝましい音に胆を冷しながら私は恐るゝ店の間に行き着き、震える手先で障子を開けながらちよこまった声で「只

今」と奥へ声をかけた。

「定やん？」女将の声に「へい！」と云ったまゝ私は思わず亀のように首をすくめた。

「こっちへおいでよ」

言われるまゝにすっかり観念して奥の間へ入って行くと女将は只一人床の上に寝そべって読んでいた雑誌をボンと放り出して下から私の顔を見上げ、

「どうして今日はこんなに帰りが遅かったんだえ？」となじるように言った。私が黙って突っ立っていると

「晩御飯は未だなんだろう？」と少し顔色を和らげて聞いた。私はつい「いえ、もう食べて来ました」と答えてハツとした。

「済んだって？ さてはお前、今日は何処か、いゝ所で遊んで来たのだね」

まさかと言った面持で、探るように私の眼を見つめながら尋ねるのだった。

「いゝえ、そんなこと……」

私は何がしら後めたさを感じつゝ、口籠ってしまった。

「そんなら今日に限って何故こんなに遅くなったの？ いつでも公休日にはちゃんと御馳走して待っているのを知っている癖に。まさかそれを忘れたんじゃないだろうね」

次第に押っかぶせるような口調になりながら彼女は疑い深そうにじろ／＼と私の全身を見廻した。

「今日こそ待っていたのに、人の気も知らないで。妾や永い間辛抱してお前が一人前になってくれるのをどんなに楽しみにして来たことか。お前がこないゝ若い衆になったのもみんな妾の丹精だよ。」

お前は妾のものだったことを忘れちゃいないだろうね。」

散々待たされて焦れ切った気持を押えることが出来なくなったように、女将は急に身を起すと矢庭に立っている私の腰を抱きかゝえた。

「定やん、妾やお前が好きなんだよ」

足許に膝まづいて顔を埋める彼女の姿はもう昨日までの彼女でなかった。私は余りにも激しい女の衝動に圧倒されて思わずよろめき訳もなく押し伏せられてしまった。

ほつれ髪が頬に触れ温い重覚感に抱きすくめられて私は喘いだ。

すべてが儘に身を委ねて私は人形のように動かなかった。

と、何を感じたのか「あ！」と低い叫びを洩らして彼女は突然私から身を引いた。

「定やんお前はやっぱり……」

泣き出しそうになる声を押し殺しながら「この臭いが証拠！ いくら知らん顔をしていても、もう欺されなないよ。お前は今日初めて身を汚したね。あれ程堅く妾に約束して置きながらよくもこの妾を裏切ったね。さあ白状おし！ 薄情者！ 恩知らず！」

狂気のように彼女は私の肩を揺すって詰め寄った。私はさっぱり訳が分らず答えに窮して只おろ／＼する許りだった。その時フト今日王さんの店での奇妙な出来事が頭をかすめた。思い出せない数時間の空白の中に何か私の知らぬ秘密が隠されているのではあるまいか。私の身体にしみ込んだ臭いが思いもよらぬ事実を物語っているのだとすれば、あの時以外に疑うべき時はないのだ。小さなグラスに注がれた琥珀色の酒、王さんがグロテスクなガラス戸棚から取り出して来た怪しげな酒、それを飲んでから後の魂の空白、その間に

何処からともなく現われた見知らぬ異国の女性に依って私の純潔が汚されたのではなからうか。

お前が女の肌を知ったときはすぐ分ると言った女将の言葉、しかし身に覚えのない濡れ衣。奇怪な体験。三つの疑問を連ねる秘密はどうしても私には解き難い謎であった。

いっそありの儘を打ち明けて女将の判断に訴えようか？ しかし誰がそんな馬鹿気た作り事のような事実を信じるだろう？

「さっさと白状おしってば！ 白ばっくれて憎らしい！」

女将は躍起になって喰ってかゝった。

「お、女将さん私は何も…何も…」

私は身悶えしながら訴えるように彼女を見上げた。その視線を跳ね返すように退けて、「嘔吐きッ！」と叫ぶや否や、私は女将さんの足でしたゝか、その場に蹴り倒されていた。

その翌日から女将さんの私に対する態度がすっかり変った。もう



夜になって家の中に彼女と私きりになった時でも再び「定やん」と呼びかけることはなかった。そののみか暫くすると何かと理由をつけて私を元通り二階の奉公人部屋へ追い返してしまった。勿論内風呂の特典も取り上げられ、他の板場と同様に銭湯へ行かねばならなかった。唯一の味方を失った私は言いようのない淋しさを味った。

失った許りではなく、どうやら敵に廻したらしいのは身に覚えのないことだけに堪え切れぬ苦痛と言うより他なかった。孤独で惨めだった見る影もない少年が生れて初めて生甲斐を見出し心身共に生れ変ったように逞ましくなったのも彼女のお蔭だった。たとえその愛情が不倫のものであろうと、如何に淫奔な企みを秘めていたものであろうと、それは私にとって決して迷惑なものでもなければ嫌厭に価するものでもなかったのだ。私はもう醜態ながらも女将が私に對して抱いている本当の気持を感じ取っていた。彼女は肉体の飛躍期に入ろうとする少年を巧みに手塩にかけて意の儘に育て上げ、逞ましい肉体を独占し、やがて熟れ落ちる童貞の美果を心ゆくまで食い尽そうという企みを秘めていたことは疑うべくもなかった。

た。それは妖婦の愛であり純潔への忌わしい冒瀆であることは私の良心にも響いた。けれど如何にその開花教育の甘美だったことよ。妖しい陶醉感に充ちていたことよ。私はむしろ嬉々として彼女に全てを捧げ甘んじてその美果を提供することこそ自ら望んでいたのだった。それなのに！

きと彼女は飛んでもない誤解をしているのだ。何を措いても私は先ず桃華楼に於ける奇怪な体験の正体を見極めねばならないと思った。

王さんはその後も相変らず私に対して親切だった。その



素振りにも何ら変わった所は認められなかった。そして「又来るよろしい。もっと素晴らしい御馳走するあるな」と言ってくるのだった。

私の胸にもや／＼していた懷疑はやがて激しい好奇心に変わって行った。そして再びあのような事が起ったとしたら、今度こそ何とか

して秘密の正体を捕えてやらねばならぬと言う気持ちに駆り立てられた。かくして胸に一物ある私は次の公休日の数日前から王さんにそっと探りを入れてみた。勿論彼自らが誘いかけて来たことだけに、私の二度目の訪問を彼が歓迎しない理由はなかった。私はぞく／＼するような期待と冒険に武者震いしながらその日を待ち侘びた。

その日がやって来た。

私は何時もの通り申訳的に我家へ顔を見せに帰ると、友人との約束があるからと偽って直ぐに飛び出し、好きな活動写真も見ようとしなくて道々周到な心構えを練りながら、約束の正午前に桃華楼を訪れた。

王さんはこの前のようにやっぱり一人でガラソとした人気がない店にいた。私は前と同じように笑顔で歓迎され再び同じ部屋へ通された。一人ぼっちで待たされている間にも私はあれからずっと頭にこびりついていた例のガラス戸棚の中をもう一度ゆっくり見直した。子供の肝を取って六神丸を作るなど、言う作り話が何だか本当のようにさえ思われて、瓶に入った得体の知れぬ乾からびた塊がひよっとするとそれなのではなからうかなど、思ったりすると当初の意気込みもだん／＼心細さになってくるのだった。

今日は予告をしてあったせいか余り待つ程もなく、やがて王さんは又しても以前に勝る豪華なテーブル料理を運んで来た。だが、今日の私にはこれは彼が決して単なる好意だけで食べさせてくれるものではなく、きっと私から何らかの代償を得ようと企んでいるに

違いないと思うと、それが一体どんな形で私の上に降りかゝってくるのか分らないだけに甚だ不安な気持ちに襲われるのだった。そのせいか今日の料理はこの前よりは更に上等だったに拘らず私の舌はそれ程有頂天にはならなかった。

そのうち一寸気掛りな事が起った。

二度目に王さんが部屋へ入って来たとき彼の背後から一人の見知らぬ支那人が扉の影に在って顔だけ覗かせながら凝々と私の方を見つめているのに気がついた。偶然私とその男の視線がびったりち合った途端、私の背筋にぞっとするような悪寒が走った。それは明らかに老人の顔だったが、少しも萎びた感じがなく、むしろてらてらと脂ぎった感じで、長い胡摩塩の口髯があご髯と一緒に垂れ下っていた。その眼は異様な光を帯び私の魂を凍らせるような不気味さがあった。

私は彼の視線を慌てゝ外らしたが胸は妖しく打ち震えていた。王さんは相変らずニコニコしながら料理の最後らしい口直しの菓子と果物を私の前に置くと引返して部屋の外でその老人と小声でヒソヒソ話合っていた。「ハオ」と言うような言葉が何度も二人の口から洩れた。やがて再び彼は入ってくると独りで首肯しながらガラス戸棚から例の酒瓶を取り出して来てこの前のように同じ小さなグラスに琥珀色の酒を注いでくれた。彼は私にそれをすゝめてからベッドを指さし腕を頭に当てゝ寝る恰好をしてニヤニヤ笑いながら出て行った。

二つの足音が階下へ消えると私はそのグラスをとり上げ窓際へ行って、そこから裏庭の夾竹桃の上へパツと撒きかけた。それから一寸思い直して、グラスの底に残った雫を舐めて唇に酒の匂いを移し

た。それから菓子をつ摘み寝台に横になってじっと天井を睨み乍ら波立つ胸を押し静めた。これから果してどんな事が起るのだろうか、不安と期待の入り混った切迫感がひしひしと押寄せてくるのだった。それからどれ位の時間が過ぎたか、何だか本当に眠気がさして来て我知らずとろとろとしかけたときひそかな足音が耳に伝ってきた。私は思わず息を殺して寝入った振りをしていると静かに扉が開かれて王さんが忍び足で入って来てテーブルの上の空になったグラスと寝台の上ですやすや寝入っている私の姿を見るや扉の外へ向って「来々」と声をかけた。私は針のように細く開いた瞼の間から用心深く見ていると、私の瞳孔に映って来たのは先刻の老人の姿であつた。二人は顔見合せてニンマリ肯き合つた。それから王さんは私の着物をはだけ、ポケットから蛤の殻をとり出して卓の上へ置くと、老人と顔を見合せ肯き合つてから彼だけが静かに出て行った。一人残つた老人は私の顔の上にかゝり込んで用心深そうに寝息をうかゞつた、堪らないにんくの臭いの籠つた生温い息が私の顔の真正面から吹きかゝつた。それは全く私の空想や期待とは遠くかけ離れた光景だった。恥と嫌厭に私は鳥肌立つ思いをぐつと奥歯でかみ殺しながら、私はつくづく浅はかな自分の好奇心を後悔せずには居られなかった。そして今更ながら女将さんの真情を懐しく思い出さずにいられた。身に覚えのない濡衣なれば何故知り得たゞけの真実のみにても打明けなかったのだろう。初めからそんな事を彼女に信じさせることの不可能を決め込んで独り合点した自分の愚かさを悔やんだ。

魔酒によって自由を奪われている筈の私が、たった今、このように冴えた覚醒状態にあるものとは神ならぬ身の知る由もなく、老人

はやがて口の中を交手古な具合にひン曲げたと見るや、コボリと妙な音を立て、上下の総入歯を吐き出した。

すれすれの眼の前でそのおぞましい光景を盗み見た瞬間、私は危く恐怖の叫びをあげるところだった。老人の顔は一瞬にして醜怪極まる化け物に変じた。顎と鼻とが喰つき目尻は下り髯はくしやくしやと一つになって顔の下半分が提灯を疊んだようにひしやげてしまった。彼は吐き出した入歯をテーブルの上に置くと舌舐めづりをしながら猫のように私の足許へ踞くまった、私はもう恐ろしさに耐え切れなくなって思わず、ワツと大声をあげて飛び起きると同時に力一杯、老人の肩の辺りを蹴とばした。全くの不意を喰って老人は弾かれたように引っくり返り何とも形容し難い奇声をはり上げた。

その隙に私はあたふたと身繕いをするが早いか扉に向って突進した扉には何時の間にか錠がかゝっていた。私は前後の見境もなく全身をぶつつけた。メリメリと大きな音を立て、錠前は壊れ、私は力余って部屋の外へよろめき出た。げたゝましい物音に間髪を入れず王さんが階段を飛ぶように駆け上って来た。眼前に展開されたこの光景を見ると彼は、暫く驚きの余りポカンと口を開けたまゝ突っ立っていたが、やがて私の胸倉を引ッ捕えるやぐいと鼻の先へ引き寄せ、「馬鹿野郎！」と噛みつくように浴びせかけて無茶苦茶に小突き廻した。私は訳の分らぬことを喚きながら遮二無二彼の手を振り切ると脱兎のように階段を駆け降り後をも見ずに戸外へ飛び出した。

そんなことがあったにも拘らずその翌日も桃華楼は何時ものように注文の電話をかけて来た。私は進退極まった思いで自転車で何度も桃華楼の附近を乗り廻しながらいつそのことこの儘何処かへ逃げで行こうかとさえ思いあぐんだが。結局、そんな勇氣もなくまるで

屠所に引かれる羊のように戦々兢兢々として裏口から厨房へ入って行った。だが意外にもそれは全くの杞憂に過ぎなかった。王さんはまるで何事もなかったかのように何時もと少しも変らぬニコニコ顔で私を迎え注文の品を機嫌よく受取った。私は全く狐につまゝれたような気持ちになって一体、昨日の出来事が実際にあったのかどうかひよっとすると私自身の取りとめもない夢ではなかったのかとさえ疑いたくなる程であった。

だが、夜になり只一人寢床の中で心を澄まして思い巡らして見ると、それは疑う余地もない動かし難い事実だった。私と云う虫も殺さぬような少年が世の常ならぬ情痴の虜となっていようなどゝは夢にも知らなかった王さんは、私の若鮎のような生身を強精回春の一品料理としてあの老爺に提供したのに違いなかった。

私は女将さんにすえられた灸跡を見る毎にもう一度彼女の寵を取り戻したい焦燥に矢も盾も堪らぬ気持ちにかけられながらも、取り付く島もない彼女の冷たさに触れると跪くも心が萎えてしまうのだった。間もなく私の後釜として新らしく十四歳になる少年が入って来た。遙々沖繩から来たばかりのその少年は私よりもずっと眉目よく可愛い子だった。私は彼を一目見た瞬間から、もう女将さんが自分の手の屈かぬ遠い所へ離れ去って行くのを知った。心の痛みだけでなく今では肉体の疼きが日夜毎私を苦しめた。

女将さんにとっては新らしい遊戯を始めるのに私が如何ばかり目障りになるだろうと思うと私はとても鳥安の店で佇んでいる気持ちにはなれなかった。私は第二の幸やんになる前に潔くこの店を出て行こうと決心した。

— 台灣植民秘史 —

北 埔 事 變

川 野 京 輔



(一)

日本政府が台湾を合併したのは明治二十八年。

砂糖と材木が無尽蔵にあり、更に、南方進出の基地として軍事的に重要な位置にある台湾。

政府は、営々として莫大な人材、資材を投じて、此の島を開発した。

だが、その輝かしい植民政策勝利の蔭には支配者に対する被支配者の民族的な反抗の歴史が血に彩られて記録されているのである。

内地の人々が、殆んど知らぬまゝ、闇から闇へと抹殺されて行った台湾の裏面史、その一頁を繙いて見よう。

日本領有から十年間と云うものは、土民と日本官憲の感情の不一致から起った自然発生的な小ぜり合いが、その大部分であった。

だが明治の終り頃になると、すぐ隣りで孫文の中国革命が成功した影響が見られ、真向から、日本の圧政に反抗した、規模の大きな動乱が相續いで起った。

苗栗事件（びうりつじけん）と呼ばれる一連の運動がそれで、主謀者の羅福生の宣言文を見れば分かるが、台湾の独立を旗印に掲げ

た革命運動であった。

しかし、一方では、こうした政治的目的からではなく、全く個人的な復讐慾から、無智の住民を煽動して日本官憲に反抗した事件もあった。

そして、これが北埔事変と呼ばれるものなのだが、私が、敢えて此の事件を取上げるのは、動機が復讐一点張りの処からか、その齎らされた惨禍が、筆舌に尽しがたい淫虐な様相を呈したからである。

明治四十年十一月十四日。

主謀者の蔡清琳(さいせいりん)は、腹心の部下、数十名に、反乱の指令を出した。

同時に一般住民には、支那の軍隊が彼の運動を援けて、新竹を夜襲すると宣伝した。

蔡の部下を先頭にして暴徒は疾風の如く、手に手に銃や青龍刀、鑿刀を振りかざして山を下った。

(二)

此処で一先ず、蔡清琳と云う男の素描を試みて見よう。

彼が日本官憲の干渉を受けたのは、彼が商売上の課税を云々して納税を拒否したからであった。もっとも商売と云っても台湾に於い

ては、大産業は総て官営であり、住民が営業出来るのは零細な雑貨や、天然産物の販売に限られていたから、蔡と雖もその例外ではなかった。

そして亦、蔡のみならず、住民は皆、日本政府の苛税を非難していた。

特に、蔡の様に支那商人は、目の仇にされて色々と不利な制限を受けていた。

彼等が外国人であると云う理由からだったが、米、英、仏などの商社には何んらの干渉をしていなかった。

こんな訳で、蔡が不平を訴えたのは当然でそれを理由に、警官が虐待したのを憤ったのであれば至極もっともな話だと云わねばならない。

だが彼が、彼の表現を借りれば、「死にも優る屈辱と虐待」を受けたのは、それだけが原因ではない。

ある日本婦人に暴行を働いたと云う事実があったからである。

でっぷり豚の様に肥え太った男で、細い目が、如何にも、ずる相だった。

彼がある日、商売で行った先の日本婦人が偶々、素足のまゝ応待した。

御存知の様に、支那では婦人が素足を見せ

る事などめったにないので、彼等はそれに狂的な愛着を持っている。

日本人に使われている支那人が、

「日本人ほど厭な奴はいないが、唯、太太(細君)の素足が見られるから辛抱している」

と云ったと云う様な話がある位だから、蔡が、裸の真白い足を見て、突如、劣情に襲われたのも無理はあるまい。前後の見境もなく彼は暴行してしまったのである。

もっとも、此の時、外聞を恥じた婦人が告発せず穩便に取扱う様、要請したので、彼は正式の刑罰は受けていない。

その代り、「支那人のくせに」と云う訳で北埔支庁の警官から、すさまじい私刑を受けたのであった。

彼は復讐を誓った。

その為めに、彼は、先ず仲間を説きつけ、日本政府の非を鳴らして住民に呼びかけた。

支那の軍隊が、彼の反乱を応援すると宣伝したが、これが実際、そう云う予定になっていたかどうかは分らない。

たゞ、彼が蜂起しても、大陸からは一人の援兵も来なかった事だけは確かである。

婦人に対する暴行が、あれだけの惨禍を伴う事件に迄、こじれて行ったと云うのは、一

寸珍らしいケースであろう。

(三)

支那人、蕃人からなる彼の
一隊は、先ず夜十一時頃、鷺
公警分遺所を襲って、田代巡
査を血祭りに上げた。

血に狂った彼等は、次々と
分遺所の巡查を葬って、夜明
けと共に北埔支庁に雪崩れ込
んだ。

且って蔡が詰問された役所
であった。

唯ならぬ気配に驚いた渡辺
支庁長が飛び出すと、銃、鉾
刀をふりかざした一団が襲い
かゝって来た。

「どうしたのだ。何故山を降
りた」

ドーンと云う銃声と共に、支庁長は胸板を
貫かれて前へのめった。

「ヒャーッ」

異様な歓声を上げた暴徒は役所の中に踏み
込み手当たり次第に殺掠をほしきまゝにした。
巡查教習所の生徒達が、応戦したが、多勢



に無数、忽ち皆殺しにされた。

「ウォーッ」

と獣の様な、うなり声と共に、彼等は、役
所の隅で、おびえている日本婦人に挑みかゝ
った。

衣類は無残に剥ぎ取られた。

うむも云わさず、次ぎ次ぎ
と輪姦した。

悲痛な叫び声が、彼女等の
空しい抵抗と共に消えて行っ
た。

淫らに両股を拡げた儘、彼
女達は虫けらの様に殺された
蔡清琳は、渡辺支庁長の死
体を見つけると、憎々し気に
足で蹴り、無意味に銃弾をた
ゝき込んだ。日本人と云う日
本人は一人残らず虐殺された
と思われた。

だが、事實は二人の婦人が
生き残ったのである。

日本人学校の教師阿部手作
の妻は、台湾服を着て、土人
鬘に結っていたので、見のが
され、栗野巡查の妻は、折り
重なった死体の下に横たわって死を装い助か
った。

蔡清琳は、支庁の金庫から貴金属を奪い、
これを持って大陸へ脱出する積りだった。
彼等は生々しい死屍の中で、酒をあほり、
酔った拳句は、白刀をひらめかせて、魂のな

い死体を切り噴むのであった。

特に婦人は死んだ後にも辱かしめられ、あとあらゆる残虐の限りを尽された。

だが、その間に、生きのびた二人の婦人は巧く脱出に成功し、新竹庁に急を告げた。

時を移さず、警官隊や歩兵中隊が出動し、現場に急行した。

北埔支庁には既に蔡一味は居らず、唯累々たる同胞の屍が横たわっているだけだった。

暑い地方の事だから、既に死体は腐り始めており、鼻をつく臭気が、あたり一面に立ち込めていた。

蜂の巣の様に弾をうち込まれた支庁長の死体。首を斬られて胴体だけが不様に転っているもの。手、足をばら／＼に切られ、それがめいめい勝手な処に飛んでいるもの。喉から腹にかけて一文字に割かれた女の死体。

更には下半身をえぐり取られた妊婦。

胴体の上に、切られた首を、ちょこんと乗せている女の子。

断末魔の苦しみから虚空を掴んだまゝ、にゅっと手を上へ伸ばしているもの。

後で息を吹きかえし、壁につたって起き上ろうとした跡だろうか、手の指跡に、べっとりと血がついている。

こうした地獄さながらの惨状を見て、人々は奮い立った。

彼等は蔡一味を追撃した。相手も頑強に抵抗したが、最新の装備を誇る日本軍の敵ではなかった。

忽ち、元の山地に追い込まれてしまった。

(四)

山の中に逃げ込まれると仕末が悪かった。

捜査するのが大変であり、道不案内の所で伏兵にでも会えば思わぬ損害を出す事も予想されるからである。

だが、此の討伐が長びけば、どんな障害が起るかも知れない。

台湾総督府は事態を憂慮し、その対策に腐心したが、事件は思わぬ結果となった。

蔡清琳を信じて、暴動に参加した土民達は支庁を奪った迄は良かったが、直ぐ山に退却せねばならず、頼みの綱の援兵が大陸からやって来ないと言うので、彼を疑い始めた。

更に、蔡が、掠奪した金目のものを抱いて高飛びするらしい様子を感じ取った土民達は大いに憤激した。

蔡の巧言に欺された単純な彼等だから、こうなったら手のつけ様がない。

あれこれと弁解する蔡の言葉など耳も貸さず、大隘社のタイタローと云う頭目の家に潜んでいる処を襲って殺してしまった。

ぶよっと頬のたるんだ彼の首を槍の先に刺して、土民達は山を下りた。

待ち構えていた日本軍は、彼等が反撃すると思ったのか、或は、何はともあれ、不穏な土民達を殺ろしてしまおうと云う考えから一齊に攻撃を開始し、八十数名の土人を射殺している。

此の北埔事変を伝える当時の記録には、蔡一味の暴虐非道の面のみ記され、一方、別の立場に立つ人々は、日本政府の圧政をのみ云云し蔡が革命の先駆者であったかの如き論を成すのである。

そのいずれが正しいか、要は各人の判断如何に依るのだが、私は出来るだけ、公平に事件を見た積りである。

(完)

◎本誌旧号の総目次は新年特大号の二一八頁から四頁に亘って掲載してありますから、ごらん下さい。

— 白 —

腹部被虐の人妻の告白

— 告 —

大^お沢^{さわ}通^{みち}子^こ

栗原

伸・画

私は今年三十才になる人妻です。七つ違いの夫は会社勤めで、七才になる男の子と三人平凡にして平和な日々を送っております。子供も昨年から幼稚園へ通っていて、もう手もかゝらなくなり、私は唯三度の食事に洗濯、お掃除位のもので、お掃除といっても、小さな借家のことゝて簡単にすみ、一日中どうしても退屈な時間が出るのです。内職でもすればいいのですが、別に経済的に困るという程でもないののでやっております。夫はおとなしい方で、総て私の云いなりで、家事一切

に干渉めいた事を云ったりしたことはありません。只、夫婦生活について、何となく物足りない（殊に夫の技巧に対して）一種の不満めいたものを感じるのは、私の我儘からでしょうか。然し私は私なりに過去に秘めた夫にも内密の思い出があるので、それが原因かもしれません。

元来、手先の仕事の好きな私は、たいてい秋口から春先にかけて好きな編物に熱中します。編みかけると途中で立つのさえ惜しまれて、すっかり凝ってしまうのです。私は小柄

な色白の中肉といった体つきで一見健康そうに見え、その実これといった病気もしないのですが、根をつめると、すぐ頭痛がして肩がつまり、腰部がけだるくなります。いつもトクホンのこうやくをベタ／＼と肩や腰にはりつけて、編物を二三日やめていると、すっかりよくなるのですが、そんな時、私の秘めた欲望がもや／＼と心の底にくすぶってくるのをどうすることもできません。これは、こうやくを肌にはったくらいでは医やすことの出来ないのであることは私自身よく知ってい

ます。しかし、こんな恥しいことを私の口から、どうして夫に話すことが出来るでしょうか。

丁度、二カ月余りも前のことです。その日は朝からどんよりと曇った、うすら寒い日で私は起きたときから頭痛というのか、頭が重く腰部が抜けるようにだるく、裏の縁側に腰を下して、ぼんやりしていたのですが、先日隣の奥様が近くの農家で田口さんという、盲目の素人アソマさんがいて、安くてなかくよくきくと云っていたのを思い出し、この若さですこし恥しかったのですが、思いきって出かけてみたのでございます。一見してその田口さんという人は、五十近く頭には白いものが見えており、丁度作業衣らしい粗末な上着に、国防色のズボンという姿で、体つきはガッシリとたくましく、その皮膚の色も健康で盲人にしては珍らしい体格をしておりました。私は二、三日前からの体の異状をありのままに話しお願いしたのです。その間、田口さんはたえず、見えない目を見開くようにして、私の言葉を熱心にきいていましたが、心よく奥の間に案内してくれました。奥の間といっても一間あるきりで、部屋の片隅に足の低い木製の寝台がたゞ一つあるだけです。そ

して農家特有の低い屋根、小さな窓が余計に暗い雰囲気を漂わせておりましたが、一たん田口さんの家を訪れた以上そんな、ささいなことに躊躇することも出来ず、私は命じられるまゝに寝台の上に横になったのでございます。一瞬、今までおし隠してきた心の影をまざまざと、くりひろげるかのように、この時ある期待と恥しきで、わな／＼ふるえている自分を見出しただけではございますが、どうすることも出来ません。その時です、田口さんは、なにやらモグ／＼と口の中で話しかけながら大きな手で、私の肩をグイとつかみ上げました。私は思わず声を上げそうになり、いつの間にか目を閉じていた瞳を、恐る／＼見開きました。何一つ変わった様子もなく、部屋の中も先程みた通りですし、田口さんも相変わらず目を閉じています。私は急におかしくなり、自分自身のこうした心境を笑わずにはいられません。が、それよりも以上に私の心を、早鐘のように、うちならしているもう一つの異った影が次第に、頭をもたげはじめてきたのです。相手が盲人であることに大胆になって足をのぼし、爪先に力を入れて全身の力をぬいていく自分自身の姿を、人ごとのような気持で眺めているのです。田口

さんは、私の首や肩を大きな手でグイ／＼つかんでは、ゆるめ、まるでその手は、機械のように正しく動き、固くこりかたまっていた肩先の汚血が、やがて気持よく流れはじめると同時に、なんだかその手が物足りなくなりました。もっとも強く、悲鳴を上げるほど、もみくちやにされてみたいという気持が、むらむらと湧きあがってくるのでした。私はしらいしい声をよそおいながら、腰部のだるいや、それに便秘しがちな事などを更につけたのです。すると田口さんは、

「へい、よろしおす」

と答えると同時に、私の体を赤ん坊でも扱うかのように、軽々と抱え上げて上向きにして、両手両足を皮製のもので、きちんと固定してしまつたのです。私は急に恐しくなり心臓が波うつのを覚えました。と田口さんは、

「奥さん一寸きゆうくつですが、しばらくです。少々わしの治療は手荒いですが、医者の注射よりも、良く効きますよ」

といいながら、両手で胸からお腹のあたりを強くもみ始めました。私は恐しい中に、このしびれる様な今迄にない陶醉感に酔い、みぞおちのあたりをつかまれる度に、なんともいえない圧痛を感じて、歯をくいしばってそ

れにこらえました。横腹はまるで、子供が風船をいじり廻しているかの様にして、み、私はその苦しさにうめき、次第に息は荒くなつて汗が頬をつたい、全身が火のようでした。しばらく私はその苦しさに酔いしびれていると、田口さんは、また

「腸の運動がにぶると、便秘しますのや」

と低い声でささやき更に、全身の力を指先にこめて下腹部をおさえて、はなし、はなしでは、おさえているうちに、私は今迄眠っていた腹部に対する被虐の願望が甦り、恍惚とした満足感を覚え、薄い生地ワンピースを通して、ほとんど裸の肌に触れられているような、強烈な刺激を感じたのでございます。はからずも私は素人あんなによって人知れずに、くる日もくる日も心の中で待ちわびていたものを受け入れることが出来たのです。そしてこの「素人あんな」を夢ではないかとさえ疑い、又それと同時に、何故もつと早くこのあんなに気がつかないのかと腹だんしさも、こみ上げてくるのでした。

でも、このよろこびは束の間、というのは近頃の私の態度に、常ならぬことを主人は感じたらしく

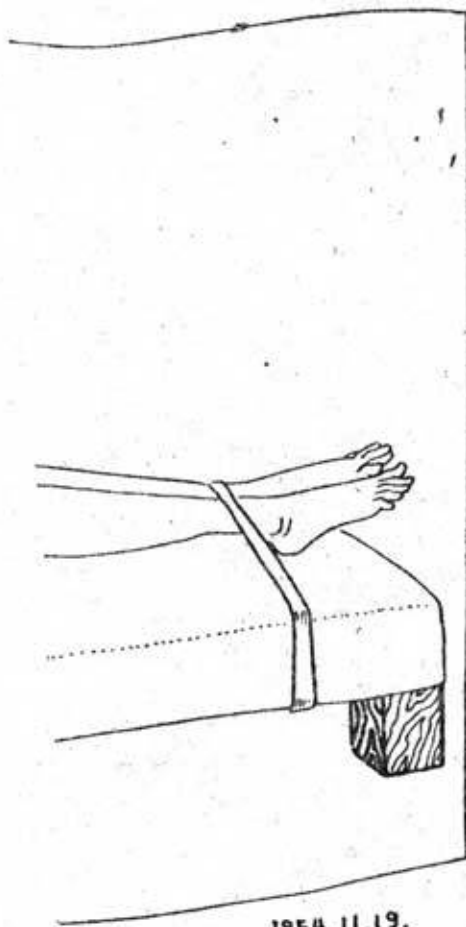
それとなく

「通子、体が悪いのなら素人の田口さんより医者にかかったらどうだ」

とか

「以前、看護婦をしていたこともある通子はどうもへんだよ。僕のように医学の道は素人ではあるまい。」

などと云われる度に、私は胸を針で縫れるより痛く、ひよっとして、夫は私のあの古い日記に目をとめたのではないかしら、いやそんな筈はない、あれほど大切にしまつてあるのにと、心は乱れ、それと同時に過去の追憶に生きる女の罪の深さが、良心の呵責に責められ、毎夜の眠りにさえも、つく事が出来ない私です。前よりも一層にその面影の人が、胸をやきこがすのです。それで私はその人の影をなくするために、努力し苦しんでい



1954.11.19.



るのでございます。あの田口さんの「素人あんな」に夢中になったのも、実は、その面影の人の代用にすぎなかったのです。主人はこうした私「面影の人」のある私を知らないのです。それで日増しに私の落つきのない姿を見ては、心配し、やさしくいたわって下さるので私は、それにとりうたえられなくなりこれ以上隠している事が恐しく、一さいを夫に告白しようと決心いたしましたのはございですが、長年のいつわった気持でつかえてまいりました私には、その勇氣もどこにか消え果ててしまい、それで奇クの愛読者の皆様方におすがりいたしましたわけでございます。次の日記は、もうかれこれ十年前の古い古いものなのでございますが、面影の人と私との関係をはっきり書き上らすために、ぬきがきとして書き綴ろうと思いたつたものでございます。

尚、私が面影の人として長年、胸に秘めている人は陸軍軍医として従軍の上、サイパン島で戦死なされた、もうこの世の人ではないのでございます。

七月二日 晴

宿舎に帰ってみると、母からの便りが私をまっていた。フフ……

あれほど私の看護婦志望に反対しておられたのに、便りには、ほめちぎった文面できっちりつまっている。内心私も好成績で、京大の看護婦試験に合格したことを、誇りに思っていました。母からほめて戴こうとは、夢にも考えてはいなかった。今日は少し疲れを覚えたが、後一週間で講義も終りいよいよ実習に移り、進級すると思うと胸があつくなってくる。今ペンを動かす手を止めて、姫鏡台をのぞいてみたら、私の顔が笑っている。やがて消燈時間になるのか、どこの部屋も静かになって、物音一つ聞えなくなった。私も明日への希望に胸をふくらませて床に入ろう。

七月十五日 晴

今日は進級式が盛大に行われ、

私はとうとう外科手術場の勤務を与えられて嬉しくてたまらない。生徒の間は一応この四階建の鉄筋コンクリートの建物に、どれだけの血が流されているのかと、未知への恐怖に恐れをなしていたが、今日、よく見学し、よ



く説明をききましたので、その恐怖も消え去ったような気もする。清潔を第一本位とするタイル張りに、金属性のピカピカ光る手術台それに窓という窓は全部二重窓になっており、夏でもこの窓は開くことを許されない。

あたりは手術の器具を消毒するのに（煮沸）蒸気の湯気がまるで、濃霧のように立ちこめトルコ風呂に入っているような気持がした。おそらく病院の先生方が、こゝに伪く看護婦さん達の肌が美しいと評判なざるのも、きっとこの故だと思われる。それにはちきれそうな健康美を、白衣に包んでいる姿が、たまらなく私の心をひきつけ知らぬうちに目がしらが熱くなった。

七月二十九日 雨

今日は朝から雨がふり続き、とうとう夜になってもやみそうになる。明日はあがってくれるだろうか、週に一度の休みなのに……汚れものも洗わなくてはならないしと思うと急にこの雨が憎くなってくる。今日は、これといって病院

内に変ったニュースも起らなかったが、日を重ねるに従って、患者さん達のうめき声、それに血生臭い臭気になれてどんな手術にも、たじろがなく助手できるという自信が、ついてきた。これがなによりの私のニュースだ

思っている。

八月二十一日 晴

今日は本当に、思いがけない事を聞かされ
こうして、ペンをとっている間も心は乱れ続
けている。というのは仲居先生が、御自身の
友人を介して、私にプロポーズされたからで
す。私はこの現実の言葉を、夢でないかとさ
え思っている。実のところ私は、病院に入っ
た日から仲居先生を一番尊敬し、それがいつ
の間にか、思慕に変わっているのを自覚して秘
かにほくそ笑めたことも、しばしばあり
そして果てしない空想にふけたことも、こ
の私が一番よく知っている。でも、この思慕
は、私一人だけではなく、病院の全看護婦と
いってよいくらい、仲居先生お一人に心をひ
かれ、うわさで持ちきらしめている。お宅は旧
家で、女中が三人、そして、最近、弟さんに
良縁がおこっているの、長男である仲居
先生に早く身をかためる様に、御両親や、親
類の人達から、やかましく見合を、すゝめら
れて困っているなどと、みな興味というより
羨望さえ感じて、先生のうわさをしているの
を、私はよく知っており、不つり合な結婚は
お互に不幸だと、自分自身に云いきかせて淋
しく、あきらめていたものを……私自身ど

うしたらいいのか、本当にわからない。でも
やはり、私は先生をあきらめていないのだわ
心の中は、今日まで人にさとられない様に、
先生の一举一動にも、目をとめ、それに音楽
の好きなことも、又無口でいつも、勤務以
外の時間は、むつかしい横文字の本を熱心に
読んでいられることも、……それにひよっと
したら、あの欲望の持主？ などと私勝手な
空想にふけてきた。これが本当の恋心という
ものなのかしら……もう一度、よく考えて自
分の進むべき道を、みきわめておこう。あら
今、星が流れたわ。

八月二十七日 晴

身分のちがいや、そのほかいろいろと心にか
かることがあって、私は長い間、運命の岐
路にたちすくんでいたが、今日という日が、
その岐路を一つにかためてくれた。なんとい
ったら、いいのかしら、こうした時のうれし
い感激した日を——私はねることをしらない
いや、ねむることを忘れて書き続けるのだ。
この感激を——昼食をすませて、午後から行
われる手術の台帳をとって患者氏名、志刀蓉
子、年令二十七才、病名、腸捻転、執刀医、
仲居、助手、岡、清潔看護婦、大沢、その助
手、松崎、という記入書に、私は再び目をと

おし、手術の用意をするために、すこし早い
めに、全身滅菌した手術衣、それに完全消毒
したマスクをかけ、爪をアルコールでふいて
いると後で「大沢君は、今日は誰の受持？」
と小さな声で、ささやかれた目はやさしく、
私をみて笑っておられた。私はハッと胸をつ
かれ、すぐに答えることができなかった。や
がて運ばれてきた患者さんは、色白の中肉の
美しい人でしたが、見なれぬこの雰囲気のため
に、血の気は失せ、ひたいにはうっすらと
汗が光り、淡いピンクに白の縞模様の寝巻も
かすかに波うっていました。私はその人の
不幸せや、今うける手術のために驚きおのの
いている心を、いたわることなく冷静にとり
なおして、義務的な目を注ぎ、そして、この
手術がことなく済みます様にと、一心に祈り
ました。瞬間、美しいこのクランケの肉体に
メスを入れる仲居先生……その時、私の胸の
中はじいんと熱くというより、ある一種の羨
望に似たものが、私の胸をかすめたのです。
私はその影を強く横にふりじっと我慢なが
ら鋭利な、メスの動きを見、腹壁の開かれる
のを見ていた。その間に、メスが脂肪のため
に切れなくなり、二、三度とりかえられ、切
口は痛々しく血まみれとなり、全部開かれ

1954.11.19.



るのに助手や、インターンの学生の手をわずらわし、そしてようやくぶよぶよした無気味な腸が引き出され、それを仲居先生は、容赦なく手早く処置し、一個の物体の如くとりま

とめて行く頃から患者は、うめき苦しみはじめた……私は、もう麻酔がきれてきたのかと思ひ、その表情をじっと見ている時「ペアンペアン、コッヘルじゃないよ」と、先生のき

びしい声をきいて、我れにかえり私は真赤になった。そして愛する先生からの非難の言葉は羞恥から悲しみ、悲しみから苦しみと変りその複雑な苦しい心を、もてあましていると患者さんの異様な悲鳴に、再びハッとして先生の顔を見ました瞬間、私の瞳と先生の瞳がカッチとおち合った。その時、先生は明らかにうばいされ、フウーと深い吐息をつかれました。私は見た。見てしまった。先生の欲望を……しかも仲居先生の秘密を、だがお互に尊い人命をあずかっている身の上、すぐに平静をとりもどして、ことなくこの大手術を済ませた。この時の気持は、何度味っても泣きたい様なうれしい気持に誘われ、しばらくは言葉もでない程、美しい花園の世界をさまようのですが、今日はそうではない。反対に大声で叫びあげたい衝動にかられ、なにもかも忘れ果てた人間のようになって、この部屋で一人静かに心を取り直した。この平静を取り直すのに、長い時の流れを必要としましたがでも今はすっかり心を取りもどして、こうして、自分の欲望に、いや先生の欲望に、同じゆうする感激にひたりきって、ペンをとっている。私は本当に今夜は、ねむらない……そしていつまでも、この感激の世界に住みつい

ているのだ。

九月五日 曇後晴

目は口ほどにものを云うといいますが、本当に目は言葉で語り合うより、自分と他人との意志が明白に、通じ合うものです。仲居先生も私の腹部被虐の性癖を見ぬかれ、又私も先生の欲望を知りつくして、お互に幸福の絶頂にひたって居ります。又あれほど身分の相違を気にもんでいましたのに、自分の欲望のために今は、忘れ去ろうと努めています。今日先生は「女の肉体を責めてみたいという欲望にかられたのは、中学の頃からだ。そして一心に外科医の勉強を続けて、自分の欲望（腹部加虐）を満していたが、今は君のような

よい理解者がいてくれるので、心から感謝している」と、甘くささやかれ手をとられたとき、私はうれしさのあまり、先生の膝の上に泣きくずれてしまった。ホホ……なぜ泣いたのかしら……まだお別れしてから一時間とたっていないのに、もう先生のお顔がみたくてたまらない。と同時に私は腹部被虐の限りない空想の中に酔いしびれ、月の光を窓ごしにうけている。

このように、私には思いつきない、やるせない腹部被虐の思い出が数々にございますがいくら書き綴ってみたところで、過ぎ去った日々は再びよみがえる事はありません。その幸福も夢のように、はかなく消え去ってしま

いました。尚、念のために申添えておきますが、運命の波はきびしく私達二人に吹きつけわずか半年たらずのうちに、先生は戦地に、そして二度と私の目の前には姿を見せられなくなつたのでございます。その悲しみが、あれから十年もの長い間、私の胸に面影の人となつて住みついてしまったのです。でも今はすべて過去に生きる女の罪深さ、又欲望の恐しさを、やっとなと取り、たゞ心より主人にすまなく思っております。そして奇クの皆様私のすべてを告白いたしました。……が私の心の片隅には、なお未練にも腹部に対する被虐の夢が忘れ去りかねるのでございます。

（おわり）

「ガラス」と云う言葉を耳にする時、私の連想致すものは、窓ガラスとかコップと等いう品物ではなく、すぐガラス製浣腸器、ガラス製イルリガートル、直腸消息子等の器具、それがいづれも肛門に係する器具ばかりで独り煩悩らめるのですけど、こうした経験は私一人でしようか。明けても暮れても浣腸、浣腸で、自分ながらこの性癖に嫌になることもありますけれど、どうしても浣腸の魅力から逃れることは不可能のようです。

私のそんな変った傾向の作品を「奇ク」が掲載して下さいましたことは、唯々嬉しいと申すより他に表現の方法がありません。又、同好者の方達の沢山居られることを知り、心強く思っております。

「ガラス」と浣腸器とは、その構成物質が同じだけで、別に関係がないように思われるでしょうが、私達浣腸マニヤにとりましては、「ガラス」という単語の響にすら、強い愛着を覚えますと同時に、私にはもう一つの秘め

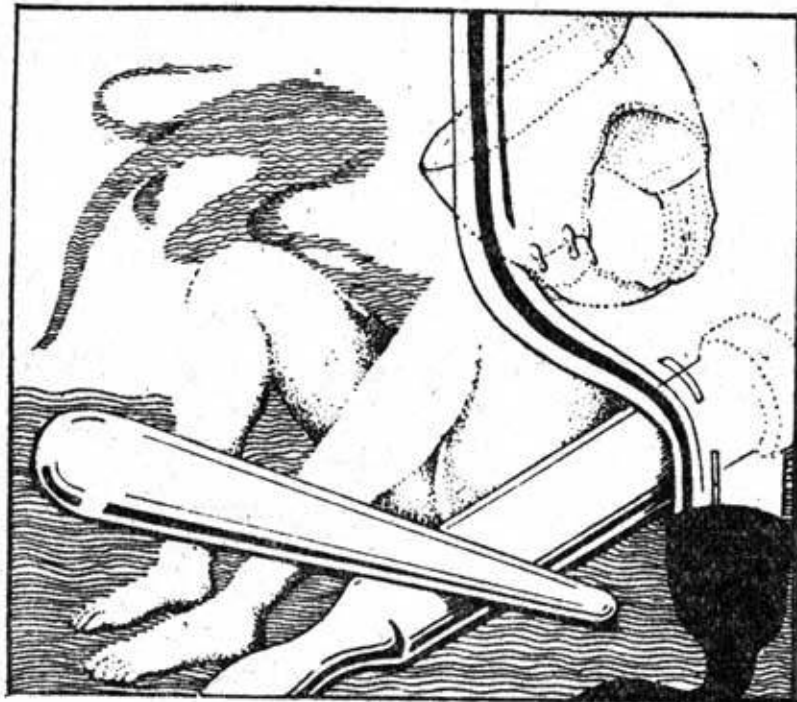
られた連想が起るのです。今日はそのことにつきまして、少し書いて見たいと思います。「乳棒」これがどういふ品物であるか、読者の皆様お判りになるでしょうか。何も珍らしい物ではありません。どんな薬局にも、又学校の理科室にでも「乳棒」のないことなんてあり得ないでしょう。薬を調合したり、硫酸硫酸銅等の固型物質を粉末にする時等に使うガラスの棒のこと。長さ一〇cm位、手元は細く、先端になるにつれて太く丸味をもった

棒です。もっとも、乳棒にも色々種類がありまして、長い、短い、細い、太い、と種々雑多ですけど、その型はほとんど同じようです。野球のバットを想起されば間違いないと思いますが、そうした、別に浣腸器とは全然別箇のもので、どうして「浣腸マニヤ」の私にとりまして興味深いものなのでしょうか。

乳棒にある種のヒントを得、それをプレイに使用してみようと考えたのは、最近のことです。グリセリンを買いに薬局に行った時、陳列ケースの中に乳棒が乳鉢と一緒に数本置かれていたのを見た瞬間、私は、これは利用出来るかも知れないと思いついて、欲しくもない乳鉢と共に買って来ました。以前、何かの作品に書いたと思いますが、私は浣腸するだけでなく、生理日でない日にでも月経帯を当てることに興味を持っております。今迄ですと幾ら括約筋を締めようとしても、十分と我慢は続かず、つい漏らして下着を汚してしまふのですが、こうすれば月経帯をはずし乳棒を出す迄、排便を阻止することが可能にな

「乳棒と月経帯」

花村恵美子



ります。それだけに、その苦痛といったら言語には絶しますが、自分の軀を自分で痛めるというマゾヒズムは一〇〇%満足出来、苦痛に伴う恍惚感で気が遠くなるようです。又、生理日でもないのに月経帯を着用するという趣向が、私の興味を満足させてくれます。何故って、女性にとりまして月経帯とかメンスということは非常に恥しいことで、他人から浣腸されると同様な羞恥の念をそれに覚えるものです。(私一人かも知れませんが)

前に一度、五〇ccの温湯の浣腸をした直後映画を観たことがありました。腰掛けに坐って居ましても、月経帯がゆるかった故為か、一時間とは我慢出来ず、途中でトイレへ走って行きましたけれど、若しこうした行為を、絶対に二時間も三時間も続けなければならぬ状態に、強制的に行わさせられたら——と思うと、恐怖の反面、その魅惑のとりこになってしまふような気が致します。

乳棒は、単に浣腸遊戯の時ばかりではありません。レスボスにも一人で秘密の快楽に耽けることも出来るのです。私は欲深な女なのでしょうか。いゝえ、角さんの作品にも、恥しい遊びのことが書かれてありました。女性も男性と同じ位に秘かな楽しみを行っているのではないのでしょうか。

乳棒は浣腸器と異って値段も安く、型も沢山ありますので(大きいものになると長さ二〇cm、太さが周囲一六cm)、コレクションするのにも楽しみます。(おわり)

特異マゾの告白

長岡 変 一 郎

(一)

一体、俺という人間は、近頃どうしてこの世の中が、こう厭で厭で堪らないんだろう。ならばいっそ、ひと思いに自殺でもしてしまえばよいものを、一向にそれも為し得ず、四十五歳の身を、猶もカブリふりふり生き永らえて居るのである。

ところで、俺のこの厭世感は、何も、生活

苦や病弱、失恋、家庭のイザコザ、神経衰弱……といったような、そんな世間に有りふれた事柄に起因しているのではないのである。然し又——だからといって——では一体、何が原因でそんなに、この世の中が厭なんだい……？ と開き直って尋ねられてみると、さてこの俺も、一寸返答に窮してしまわねばならない——。

(二)

この世が厭なら、アノ世へ行くのが、お定まりの「厭世自殺」と、昔から相場が決っている。——しかし——。

俺は勿論、死ぬのが厭で、死ねない訳ではないのだが、俺には、死に場所に対する一種特別な「注文」がある。その、俺の求める死に場所というのが、即ち俺という人間の持つ「特異なマゾ心理」に端を発しているのである。ではボツ／＼と、御披露に及ぶとしよう……。

一口に言ってしまうえば、勿論、俺の持つこんな異常な慾求もマゾのうちには違いなからう——。然し俺は、これ迄多くの「アブ党」諸氏によってなされた、己が異常心理についての告白記や、又、アブに取材した、あらゆる読物を読破してみたが、未だ一度として、この俺と同じ好みのマゾについての著述を、発見することが出来なかった。

俺は次第に、思い上ってきた。——「特異マゾ」と、自ら名乗ってみたのも、俺のこのウヌボレを、ペチヤンコにしてくれる——つまり俺より上手の「同志」を求めてのことに外ならないのである。

何の因果か、俺は若い頃から、奇妙な慾求を持っていた。

——粘着性物質——こんな言い方が、当てはまるかどうかは知らないが、例えば、糊、水飴、トリモチ、泥粘土、その他、煉白粉やポ



マード等々——とにかく俺は、そういった柔かくて粘っこいものの中へ、グシヤツと全身陥りこんで、背丈が没してしまつて、もがけばもがく程深みに体がメリ込んでゆく……とそうなつて、窒息死出来るような、そんな場

所が広いこの世の何処かになかろうかと、そればかりを、求めて、やまないのである。

どうでしょうか、読者諸君！

一つこの俺を極楽往生させてやる積りで、何処かにそんな場所——つまり以上に述べたような柔かい粘っこいものが、人間の背丈を呑み込んでしまう程大なる容量を湛えているところを、御存知の方があつたら、お知らせ下さるまいか？

俺は、随分久しい間、そうした場所を求めて放浪した。——俺にとつては、前半生期ともいうべき、故郷「大阪」に在住当時の、特異な行状については、さきに（今から二年程まえ、本誌上で）「糊と泥と砂」と題して、一度発表したのだったが、アレから今日迄、いまだ一人として、この俺の特異的なマゾ慾求に共鳴してくれる友が、現われてこない。

俺は大平洋戦争の終戦後、それ迄住み馴れた大阪の土地を去つて、今の、この北九州の

炭鉱に、鉱夫として後半生をふみ出した。そして、見るもの聴くものゝすべてが、過ぎし日の関西地方のそれとは、すっかり違った生活様式の中で、俺は俺なりに、又新しい「特異マゾの境地」を求めて、こゝにその後半生記を綴ってみたい――。

(三)

俺は、この炭鉱に来てから、素晴らしいものを見付けた。――外ではない。――俺のアノ大好きで堪らない「糊状の泥」が、いつも身近かに有ることだった。全くそれは――色こそ白が黒に違え――糊と云つても不思議のない程、粘っこくて真っ黒い泥である。

重労働に対する体力に、自信の持てなかった俺は、生れて始めての坑内作業に、いつもヒイ／＼泣き乍ら、それでも今日迄十年近くを、この炭鉱で暮せたのは、即ちこの俺の持つマゾ慾求を、或る程度満足させて呉れる、その「泥糊」があつたればこそであつた。坑内では、至るところに「炭塵」が溜る。――その炭溜が、水分を吸収して「煉状」を呈した時が、先程から俺のいう「泥糊」である。それは、ドロ泥等とは比較にならない程、悪臭もなければ、混りけ（木片、石塊、その

他の雑物）のない黒糊で、その溜りへ、グシヤツと地下足袋を最初に踏み込んだ時、トタンに俺は、この炭鉱地帯に永住の決心をしたのであつた。

なにしろ、諸賢も御承知の、アノ日華事變に次ぐ大平洋戦争で、物資は統制時代に入り従つて俺の奇怪なマゾ的遊戯も、あれからずっと終戦後迄、つゝしんでいた折柄であつただけに、その時の俺の欣びは、宛ら天にも昇る心地であつた。（尤もこんな事を言つたところで、ノーマルなお方には到底理解しては貰えまいが……）

兎に角俺は、その泥糊を発見してからというものは、久しく忘れ、否あきらめていた例の奇怪な「マゾ的遊戯」を、復活させてみたくて堪らなくなった。

俺は毎日、相も変わらず重労働の坑内作業に従事して、終日ヒイ／＼悲鳴を挙げ乍ら、然し他人の知らない秘かな欣びを持っていた。

俺の地下足袋は、いつも決つたように、コハゼの所在も判らぬ程、泥まみれだった。――という迄もなくそれは、俺が例の泥糊の、成るだけ深く溜つていそうな個所を選んで、わざわざ陥り込むからである。――ところでその糊のような泥を造り出すところの、炭塵

というものは――炭坑労働をやった人なら大抵御存知だが、そう沢山一個所に積り放しにしておくようなことは、絶対にないのである。従つて、俺としても、例の慾求たる「背丈も没する程の大量」を、一個所に認める、というようなことは、凡そ夢でよい限り絶対に出来なかった。

(四)

勿論俺はよく夢を見た。いつの間にか、戦時中に防火水槽として用いられていたその廃物になったつまり空井戸の状態の中へ、溢れるばかりに例の、泥糊が入れてある。俺は素っ裸になって、さアこれでいよ／＼厭で厭で堪らなかつた娑婆ともお去らばだ――と、ニヤ／＼し乍ら、やがてその背丈以上もある泥糊の中へ、グシヤツと飛び込んでゆく――グニヤツ――と、こうなにかナメクジを、一度に沢山踏みつけたような、不安定な感触だ――。然し俺は嬉しい。……見ろ！……みるみるうちに俺の五体は、そのグニヤ／＼とした液体と固体の中間粘着物の中へ、次第に姿を没してゆく！ 四面これ暗一色の泥壁である。

俺は次第に息苦しくなつて、まるで亀の子

の様に、手足をみがいてみる。しかし反応は何もなく、唯、五体が丁度下降中のエレベーターにでも乗っているかのように、フワ／＼と少しずつ沈下していくのが、微かながら感ぜられるのみ――。

あゝもういよいよ息が続かなくなった。――俺は断末魔の力をふり絞って、思いっ切り四辺をケ飛ばし、引っかけ廻した。と、急に周囲がパツと明るくなって、同時に呼吸も叶うようになる。……こんな夢は大抵、布団を軀に巻き付けるようにして眠っていた時で、最後の力をふり絞ったトタンに、布団を蹴飛ばし、ハネ除けた場合であった。

俺また俺は、この炭鉱に来て坊くようになって、ソロソロ周囲の事情が判ってくると、例の炭塵によって生じた泥糊と、略々同じような形体の、しかもこれは青天井――即ち坑外で、大量に取扱われている場所のある事を知ったのである。――外ではない。それは鉱業所々属の「豆炭（燃料）」製造工場に於てである。その工程を一寸説明してから、いよいよ奇妙な俺の倒錯性についての告白を、順を逐って進めていこう――。

(五)

石炭鉱業所が、その所属している燃料工場に「豆炭」を造らす時には、次のような方法を執る。それは、坑内から採取された石炭を水洗して生じる、いわゆる洗炭水を、太いパイプ（鉄管）を通して燃料工場に送りこむ、燃料工場では、これを「浅いプール」のような、コンクリートの囲いの中に受入れる。

洗炭水は、文字通りの真っ黒な泥水で、囲いの中に貯積して満水すると、一時パイプからの送水を中止し、ある時間中放置しておくすると、洗炭水の中に含まれている泥――即ち「微粉炭」が沈澱して、そこにアノ坑内で見ると同じようなものが、しかもこれは大量に出来るのである。――話が後先になったが、微粉炭が次第に沈澱する頃を見計らって囲いの一方に工作してある、水抜口の板を少しズラせておくと、泥水の表面が糊状を呈してくる。

その時だ！ 俺が最も魅力を感じて、その中へいきなり飛び込んで見度い衝動に駆られるのは。……何しろこれなら夢ではなく、現実に出来る可能性があるとみた俺は、物好きにも坑内夫を止めて、その豆炭工場の人夫に転向した。

俺は毎日、息もつまりそうな、ガラ（豆炭）

焼の煙にむせび乍ら、つとめて例の微粉泥の中へ這入って坊く役に、自ら求めて廻して貰った。

そうして三ヶ月余りを、尤もこゝも重労働であったが――俺はいとも楽しく暮す事が出来た。即ち俺の役目は、囲いの中に貯積した泥糊（詳しく云えば「微粉炭泥」）を――素足のまゝで這入って行って、思う存分弄くり廻すことが出来る――つまりその泥糊をスコップで掬って、他の運搬夫の荷ない籠へ入れてやるのであって、この役目は上司から命令されゝば知らぬこと、誰も進んで買って出る者は居なかった。

ところで――先にも一寸述べておいたように、例の洗炭水を貯蔵するためにあるプールのような囲いは、案外、底が浅いのだった。左様――先ず高々深い時で、膝一ぱいが、泥中に没する位な事であつたらうか――勿論、だから俺の年来の願望たる「背丈を没する程の深み」というものは、其処でも見出す事が出来なかった。従つて又、俺のこの異常なマゾ的慾求が、益々空想をたくましくするのであった。

(六)

俺は又、キメの細かい「土砂」の中に「生埋め」になり度い慾求も、持っているのである。

俺は新聞の三面等で、「土砂崩壊して〇〇名が生埋めとなる——」てな記事が出ているとトタンに、何かこう鳩尾のあたりがムズムズするような、興奮を感じるのである。

こんな事をいうと、被災者の遺族にドヤされるかも知れないが、昨年のアノ水害で、門司市の風師山が真ッ二つに裂け、何万リユウベ—という土砂が市内に流れ落ちて、その下敷となつて、生埋めになつた人の記事を読んだ時、俺は何となく、その生埋めになつた人達が、ムシヨウに羨しくなつたものだ。

俺は又、次のような夢もよく見る。——それは高く高く積み上げられた砂利山のドテツ腹を俺はまるで犬のようにハイツクバツて、両手と頭でくり抜いて、奥へ奥へと穴を穿ちつゝ進んでいく——。も

う余程奥へ這入つて来たらしく、四辺は真ッ暗で何も見えない。それに息が次第に苦しくなつて来た。——多分、俺の通つた跡が崩れてしまつて、入口からの空気が這入つて来ないのだろう。

苦しさはいよいよ激しく、窒息が間近に迫ってくる。そこで俺は又しても、全身の力を

振り絞つて、大暴れに暴れていると眼がさめる——。とまアざつと以上のような具合だ。豆炭工場での俺は、自ら求めて夜警の役を買つて出たりして、猫の子一匹通らぬ寂しい真夜中を選んで、様々な怪奇行を演じた。

その中の代表的な一つを紹介してみよう。ある夜のこと。——俺は前々からこの豆炭工

場の一隅に、かの夢によく見る戦時中の名残りの防火水槽が、空井戸の状態のまゝ、フタを冠せて放置してあるのを知っていた。その空水槽は、直径一・五米位で、深さは俺の首だけを残す全身を入れるに充分であつた。

その夜は雨もよいの、暗い晩であり、とり分け、こうした燃料工場は、ガラ焼の害毒臭を発散させるため、周囲から孤立していて、夜ともなればそれこそ、狐や狸も出兼ねまい程の寂しさであつた。ところが俺にとっては——例のアブの楽しみがあるので——こんな晩こそ、願つてもない



お誂らえ向きであった。

俺は夜の更けるのを待って
ソロソロ行動を起した。空水
槽は、その全体の八分通りを
地下に、残る二分を地上に出
してあったので、この事も俺
(独自の境地より)にとって
は、好都合であった。

(七)

俺は独り北叟笑み乍ら、セ
ッセと例の微粉炭泥の、精々
糊状よろしき上層部を掬い取
っては、それを何十遍となく空水槽のある場
所へ運んだ。

二時間近くの後、空水槽の中は泥糊で一杯
になった。——俺は素ッ裸になった。そして
その泥糊の充満した真ッ只中へ、ズボリと陥
り込んだ。

俺の首は——否、正確に云えば、鼻口から
上——が、その空水槽に満たした泥糊の中か
ら、僅かに頭を出しているだけだった。

何という素晴らしい気持だったろう——。俺
の鼻口は兎もすると、泥糊によって塞がれそ
うであり、そのたびについ息を吸い込むので



遂に鼻の中へも泥が這入つて来た。窒息……
……待ちに待ったマゾ慾求が、九〇パーセント
まで達せられた。……百パーセントとは、そ
れはいうまでもなく、冒頭に述べておいたよ
うに、俺の全身がスッポリと泥中に没して厭
が応でも窒息死出来た時の事である——。

で、この時も、もしその空水槽の深さが、
俺の背丈を呑み込んでくれる程であったとし
たならば、俺は完全に、百パーセントの快味
を味わいつつ死んで行ったであろうし、同時
に又、これから述べるような、奇蹟も起らな
かったであろう。その「奇蹟」とは即ち、こ

うである。

俺は泥中から、顔の八分通
りを外界に出して、独自の快
味に浸っていた。——と、こ
ろであつた。——かねてより
豆炭泥棒が暗夜をねらって浸
入するため、それと今一つは
徹夜して火の気(豆炭を蒸焼
する)に注意せねばならぬの
で、「夜警」が心要であり、
その役を引受けていた俺が、
世にも奇怪な遊戯に耽ってい
たその最中に、工場の外柵を

乗越えて四五人の集団泥棒が押入って来た。
彼等は勿論、夜警の居る事は承知の筈で、俺
を見付けて縛り上げる積りで、もあるのか、
縄などを持って、あたりをウロツキ廻ってい
る様子だったが、ドツコイ俺は、飛んでもな
い所に隠れ?ていたのだから、奴等がいくら
探しても見当る筈がない。「おい、おかしい
ぞっ、誰も居ない筈はないんだが……?」奴
等はボソボソと、そんな事を呟き合い乍ら、
遂に俺の真ん前までやって来やがった。——
とこいうと、俺はいかにも度胸の据つた人
間のように聴えるだろうが、そうじゃないん

だ。

俺はもう先程から、恐ろしくて堪らなかつたんだが……何せ奇妙キテレツな事をして、その中に這入っていたのだから、真逆とび出すわけにもいかない。——といって、若し奴等がこのままの姿で見付かって頭にゴンと一撃でも加えられようものなら、それこそお終いだそんな死方は真ッ平だ。若し又そうなたとすると、後日になって彼等の口から俺のやっていたアブ遊戯がバラされそうな気もする。(勿論俺が自分でそんな楽しみをしていたとは、誰も想像がつくまいから、相当ヤヤコシイ問題にはなるだろうが、結局はバレる)——とつおいつ……しかしそれはホンの数十秒間の思案(といつても半ば夢中で)に過ぎなかった。——というものはそのうちに彼等のうちの二人が、ともに俺の顔を見付けてしまったらしく、両者の視線がパツタリとカチ合った。(失敗った)——そう思ったのも瞬間であった。俺は無意識の

うちに、無言でカーツと大きく口を開けてモ、ンガツ——とばかりの凄い顔をしてしまったのだった。そのトタン——「ギヤツ」と異様な叫びを挙げて、後に飛び退き引っくり返ったのは、彼等であった。

「何だ何だ? どうした?」残りの奴が先の二人にそう訊ね乍ら、これも一齊に俺の顔に視線を集中して来た。

(いけない——もう助からぬ——) そう思った俺は、半ばヤケクソで、どうともなれっ



ばかり(勿論今度は意識して)「イツヒ……イヒヒ、ハ、」と——陰にこもった笑い方をしていた——。

「ウワツ——」

「ヒエツ——」

一体どう思ったのであろうか? 今度は残りの奴も一緒に、各々悲鳴を挙げつつ早や腰を抜かしてしまいがった。——全く「怪我の功名」とは、この時の事であった。お蔭で彼等は泥棒の目的を棄てて退散し、俺の奇行も又他人に知られずに済んだ。

俺はその後相変わらず、例の泥糊による独自の楽しみに、喜々として数ヶ月を送ったがここでこの一つ一つを紹介するのも、余りにマンネリズムに陥るので、豆炭工場に於ける怪奇行については、何れ又稿を改めて書くとして、一先省略させて貰って、先を急ぐことにしよう……。

(尚、先程の集団泥棒が、何故アレ程に恐怖したか? についての俺個人の憶測を披瀝すると、こうである。……二ヶ月程前、そこから程遠からぬM市にある、これも豆炭工場での新聞紙上三面欄を賑わした「ドラム罐詰殺人事件」が起った。当時のそれは「猟奇犯罪」として検察当局を異常に緊張せしめたも

ので、特に北九州炭鉱地帯の人々にとっては印象深い恐怖であった。——で、先の場合の泥棒も、恐らくは、深夜の豆炭工場——というその事自体にビクビクものであったろうと思われる。——そこへもってきて、真つ黒な泥? の中からニユーツと顔だけ出した人面らしきものが、或は眼をムキ、或は気味悪く笑ったのだから、それこそ彼等としては——「出たッ——」とでも思つたのであろう。

(八)

俺は再び坑内夫に逆戻りした。

元来俺は孤独であり、又それの方が好ましかったので、中年過ぎても妻を娶らなかったのだったが——それが今度この炭鉱の労務係の肝入りで、是非に——と勧められて、二児を連子の戦争未亡人との結婚を、余儀なくされてしまったのだった。自然——豆炭工場の人夫では、その収入で生活が賄えない為であった。

俺はアブニストではあったが、別に性的不能者ではなく、その証拠には、結婚するとすぐ翌年に一女をもうけた。然し又、晩年の結婚であったのと、連子との義理問題その他いろいろ思わしくない事もあって、近頃の俺は

又しても以前のような、孤独が恋しくて堪らないのである。(孤独即厭世?)

俺は務めて家に居て、良きパパ振りを発揮したいと希いつつも、然し想いは涯しなく、いつの間にか又アノ楽しいマゾの境地に溺れていく——。

近頃は米穀を除く物資の総てが、自由販売である。従って、俺にとっても「泥」などは比較にならない程大きな魅力である筈の、例の「糊」や「飴」なども、大量に生産されているであらう……。

俺はフト新聞を手にとって読んでみる。

「大阪〇〇飴工場の一曰スト」

このため二〇万箱分のグリコがフイになった——と報じている。

飴! 二〇万箱分の飴といえば、どの位の量であらうか……。まだ固まりきらない製造半ばの柔かい飴が、見上げるような巨大な容器に、溢れている様が眼に浮ぶ。——忽ち俺は素ッ裸になって、例の如くその真ッ只中へ飛び込んで行く……。

一步表に出れば、街には其処此処に、アノ真ッ黒な洗炭の廃水が、ドロリとして淀みつつ、遠賀川へ遠賀川へと集流して行くのが見受けられる。そして其処にも又、俺を夢想の

世界へ誘い込むアノ糊状の泥が、岸边々々に肌を見せているではないか……。

俺は又、建築場の片隅に積み上げられた、砂利の山にフト眼を注ぐ。——すると是又、忽ちその砂利の下敷となつて、生埋めになり度い衝動に駆られるのである。

以上——俺という人間のアブ的慾望——即ち自ら名付けた「特異マゾ」についての告白を終ることとして、最後は、これはごく最近の奇抜な夢想を、読者にお知らせしよう……。

(九)

近頃、こんな炭鉱街にも、アノ昔懐しい「糊」が出廻っている。(尤もそれは瓶詰の少量宛ではあるが……)

「不易糊」とあるその容器の表装文字を何気なく読んだ俺は、そこに「製造本舗」が「大阪」とあるのを見て、又一入の郷愁を感じたのである。

俺は又しても、この瓶詰の糊を何十万個も一緒にして、その大量の中へ、没し去りたい慾求に駆られ始めた。……なろう事ならその大阪——俺にとっては生れ故郷でもある其処へ行って不易糊製造本舗で使われてみたい。しかし、周囲の事情が、今はそれを許さないのだ。それが自然、猶一層——俺をして夢想の世界に、さまよわしめる——。

俺はフト、鉱業所の巨高な煙突を仰ぎ見てそして又、飛んでもない夢想の世界に遊ぶのだ！

あの巨大な、そして雲を突く煙突の中味一杯に、真っ白な糊を充滿させる——。

例によって俺は素っ裸になつて、その煙突に附側している鉄ハシゴを、胸をワクワクさせ乍ら喜々として登っていく。俺にとっては「極楽への階段」である。

やがて頂上に達した俺は、一とわたり下界を見渡してやる。——何と小さな下界のすべてであることよ——何もかも、今ぞお別れだ！やがて俺の躰は、煙突の口からズボリと送り込んだ。

降る！ 降る！ 何百尺の深さの糊の中をまるで水中人形のそれのように、俺の躰は静かに静かに沈んでいくのだ。

夢よ！ 醒めないでくれ！

(完)

【お灸通信】

「灸を据えられる女」の絵をお描きになった南川和子様、「灸責愉楽」の春山鮑三様、「灸点三昧」の長谷川清様、「灸マニア回想」の保田徹様、その他「灸マニア」の諸皆様方へ。小生は十月号に「

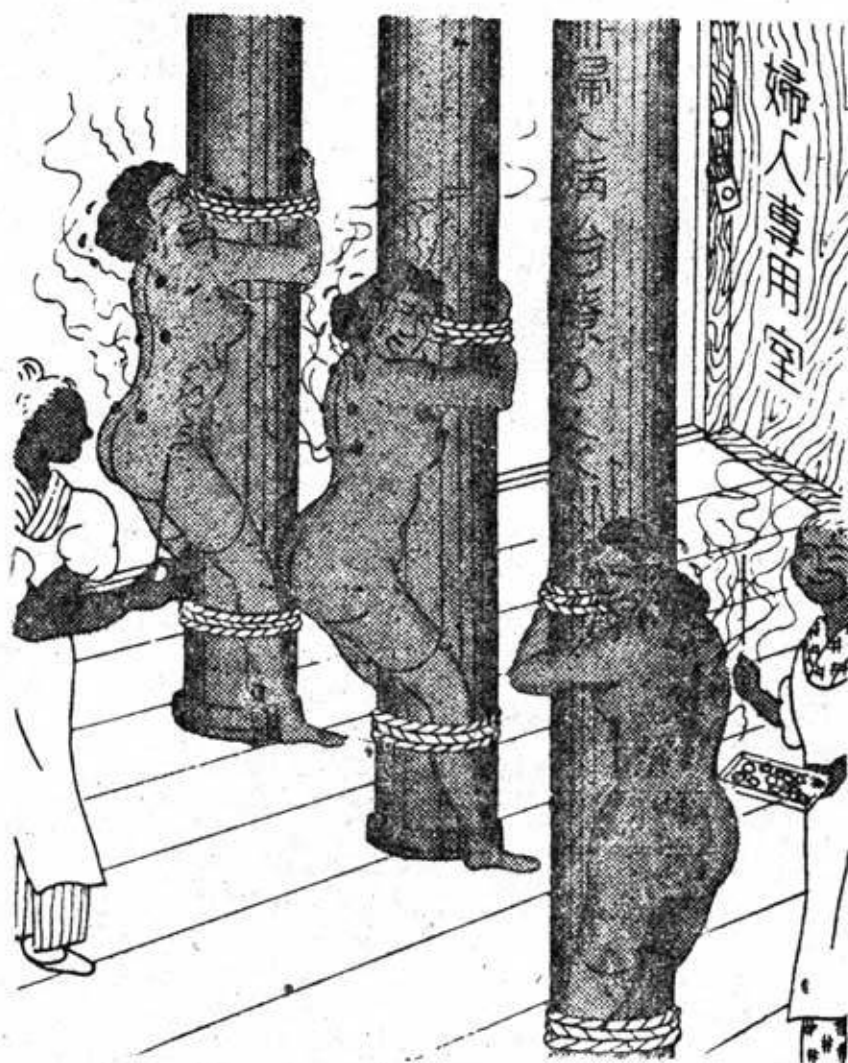
女性専門のお灸室」の絵を描きました岩瀬です。奇クが益々発展の一途をたどり、内容充実、躍進に躍進を続けてまいりました事は大変嬉しい限りであります。それと共に昨年(昭和二十八年)九月号に南川様の「灸をすえられる女」の絵が出ましてから、本年に入っ

て「灸責愉楽」「灸点三昧」「灸マニア回想」と漸次、灸を取材した記事が掲載されました事は、小生自身及び、お灸マニアの皆様方と共に、誠に御同慶に耐えない次第です。お灸マニアと申しまして、人により種々様々なケースのある事と思いますが、まず左の四

通りに大別されるようです。女の場合。A、自分の体にすえて快樂するお灸信者。B、自分の体にもすえ、且つ他の女にもすえて悅樂するお灸マニア。男の場合。C、自分の体にもすえ、且つ女にもすえる事を愛好するお灸信者。D、自分はすえず、単に女の体のみに

すえて加虐的快感に楽しむお灸マニア。この内、男の場合はすでに御誌々上で発表済みですが、女の場合はまだ告白や手記等が掲載されておられません。この事は非常に淋しく残念に思っておりますが、婦人層のお灸信者は相当に多い筈でありますから、まだ発表される女の方が現れないだけの話であり必ずや出現される事と期待しております。小生の場合は勿論Dであります。美しい女性（絶対に女性に限る）の背中やお尻にお灸をすえて、婦人が熱そうに身をくねらせ、美しい顔を歪ませ乍ら耐える様に、艶かな美しさ魅力さを感じ、大いなる感銘を受けると云つたわけであります。多分の加虐的行為の欲望、一種のサディズムとも云えましようが、しかしサディズムとは云い切れないのです。何故ならば、灸責めに限り異常なまでの関心と魅惑を持ちますが、その他の責めには何らの感覚も興奮をも受けないからに外なりません。大変失礼な事を申し上げる様ですが、春山様の場合は小生と同様Dであり、長谷川様、保田様はCに属する様に見受けられます。サディズムやマゾヒズム、或はソドミア、切腹、身体各部等のマニア

は、今迄にも随分と誌上に数多く発表されて来ましたが、それらに比べると灸責めは確に少ないのです。「お灸マニア」の皆様方、今後もお灸を取材した絵、告白、手記、通信等をどしどし御寄稿して御鞭撻下さる様、是非お願いする次第です。幸い奇巧がどの傾向に重点を置くという事がなく、あらゆる部分に亘つて解放し、「灸マニア」の読者にも要望に応えて下さるのですから、真に御理解して頂けるものと思ひます。尚、小生として



婦人病治療の灸

—岩瀬祥一—

最後に申し述べて置かねばならぬ事は、女性の肌に灸をすえる欲望と云いまして、それはあくまでも憧れであり、想像して悦楽するものでありますから、決して他に迷惑や悪影響を及ぼす事はないのであります。成程、小生自身の本心は、その欲望を満たしたいと云う気持は勿論あるのですが、お灸愛好者の婦人が多いと云いまして、未だ不幸にしてそう云う女性にはめぐり会っていませんので、実際には実行した事もない訳であ

ります。それと云いますのも、一つは社会的道徳感にもありますが何と云っても大きな原因は、その様な絵、写真等を蒐集して十分に満足しているからであります。従いまして、問題はその蒐集の有無にあり、それを得る事により楽しみ、そして喜んで完全に自制できるのではありません。単なる普通の趣味や道楽と違い、孤独の伴侶として、又弊害を未然に防ぐ必要上から云っても絶対的な必要性を強く感じ、強調する次第です。お灸マニアの皆様方も恐らくそうであるうと思ひますが、お灸に関する写真や絵画は容易に手に入りません（特に小生の場合は女性に限定されておりますので尙更の事です）ので、その意味に於ても奇巧は大事な掛替のない大きな価値のある本であります。小生絵を同封しておきました。お灸マニアの皆様方、理解を以て此の種の傾向の問題を取り上げて、今後も役割を果して頂きます様重ねて御願い致します。次第です。（東京 岩瀬祥一）

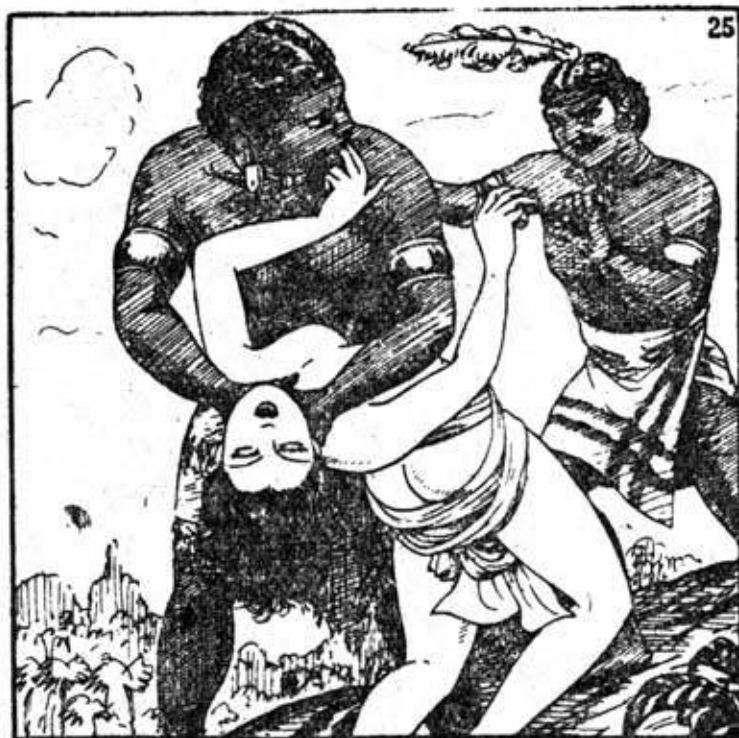
【註】 保田徹氏から「灸マニアの回想」なる一文が寄せられています。

観物語
連総

百合子の冒険

作村崎 明
画畔亭 数久

(第三回)



—(黒豹の巻)—

(25) 「アッ」抵抗する間もなかった。ジャボは一刻も生かしてはおけぬという風に百合子の咽喉を鷲掴みにすると、パタパタ手足をもがいている彼女の首を一思いに捻じ切ってしまうおうとした。

「ジャボ、待てッ」、鋭い土語、それはあの大男だった。ジャボの利き腕をグツと握る。「アッ痛え！なんだタロー、乱暴するなよ。痛いじゃねえか」「ジャボ、どうしてそいつを引出して来た」「どうしてって、犠牲を認むのは俺の権利だぜ。」



(26) 「そうだ。お前の役だ。だがこいつはお前はまだ見た事がない筈だ。こいつは俺のものだ。俺が一人で見つけた獲物だ。それをお前は横奪りしようというのか。返答によつてはお前だとて容赦はしないぞ。」

ジャボはグツとつまんだ様だった。プーッとふくれるとタローを大きな目で睨みつけて「ちえッ、威張るな。そんなに欲しけりやなくてやらア」そう言つて百合子をタローの方へ抛り出すと一目散に駆け降りて行ってしまった。タローの傍でどうなる事かと見守っていた今二人の男はかけ寄つて百合子を抱き上げた。わけの解らぬ土語の応酬の中に、ジャボが力を入れた為か、百合子はグツタリと気を失っていた。



(27) 「大丈夫かな、絞め殺したんじやないか」若い男は心配げに彼女の咽喉や眼瞼を調べ、白いむっちりとした乳房に耳をあて、心臓の鼓動をきいた。馴れた手付だった。やがて百合子は息をふき返した。

「気がついたかい。もう恐い事はない。もう殺されるような事はないから安心おし」やさしい声音だ。夢うつゝに聞きながら、ハツとして百合子は男の顔を見なおした。なつかしい、船に乗って以来半月間絶えて聴かなかつた日本語ではないか。

「僕は日本人だよ。西崎隆っていうんだ。もう大丈夫、僕がついてるから安心するんだよ」

「まア！」

(28) 百合子は夢かと眼を睜った。そしてハッとした気がついて我身を省みた。はずかしい、晒は殆んど解けて、両脚にまつわりついていゝる。あわてゝ引上げると真赤になって坐り直した。「この人は島の酋長でタローっていった。この人が君を助けてくれたんだよ」

「……」彼女が身震いした。「この人、昨日女の人を殺しましたわ」「見ていたの?……」だが君は特別なんだ。まあ、いろいろあとで話しよう。とにかくこの人に礼をいいなさい」「はい」子供のようになま直に、百合子はタローの前に手をつけて頭をさげた。「ありがとうございました」判ったのかどうか、タローはここにこし乍ら、百合子の肩に接吻した。咬みつくのではないかと恐わかった。



(29) タローが去った後、西崎は百合子をその栖家へ案内した。驚いたことに、それは彼の温泉の前の洞窟だった。

「まあ、こゝならあたし、昨日から知っていますわ。ゆうべはこの岩の上で寝たんですもの」「へええ、こんな処に居たの? 道理で何だか女臭いと思った」「あら、あたし、そんな匂いがするかしら」「嘘だよ。一寸も知らなかった。ははは。だけど君は運のいい子だよ。この島にはね、たった一匹、大きな黒豹が居て人を喰うんだよ。晩になると此辺をうろつくんだ。見つかったら今朝はもう骨になっていたところだった。尤も君なんか軟かいから骨も残らないかも知れない」「うそ!」「本当さ。」

(30) 洞窟は十米ばかりの廊下を通過して二つの部屋があった。それぞれ一つ宛丸い窓があいている。

「この窓は何だと思ふ! 大きな石像があったらどう。あれの眼だよ」「まあ」百合子は覗いて見た。なる程例の広場が見下せた。

「あッ」青くなつて彼女は首を引込めた。

「あの人が……」トムスンさんの奥さんが……

「そうか。見ないが……、僕らにはどうする事も出来ないんだ」「あゝ、可哀そうに、どうしよう。きつとあたしの替りだわ」

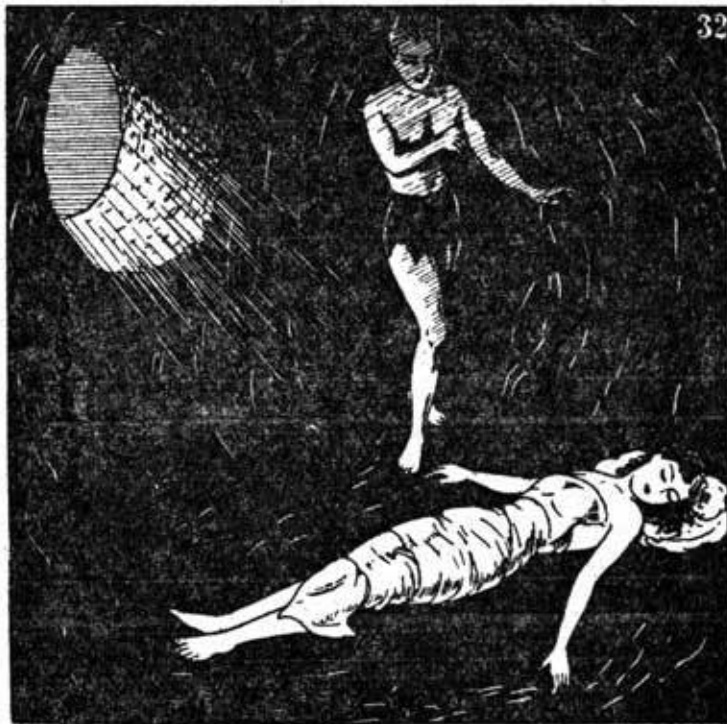
西崎は百合子の身の上話をきいた。そして自分の話もしてきかせた。彼は海軍軍医中尉で、敗戦と共に基地を脱走し、幾多の苦難の後、この島へ渡つて来たのだった。



(31) 今ではタロー酋長の無二の親友であり又顧問でもあった。西崎の努力でこの島のマラリアなどの病気は後を断った。人肉を喰わない西崎のために、タロー酋長はたまに捕えた美しい百合子を、生きたまま丸ごと一人、礼の代りに与えたというのである。

「そんな訳さ。だけど僕は君をどうしようというつもりはない。とにかく当分はここに居て、機会を見つけて日本へ帰るんだね。だけど、又どうしてこんな遠い処で死ぬ気になったの。お母さんの事だけでなくて他にわけがあるんじゃない？」

「……」それは百合子に取って何よりもつらい質問だった。「え……でもあたしには言えせんわ」ふと彼女は西崎が軍医だと言った事を思い出した。



(32) その夜、西崎は眠れなかった。五年間の禁慾生活、黒人たちの医療や生態研究などに忙しく、女というものを殆んど忘れていた彼の前に、突然、美しい同胞の妙齡の女性が素裸かの姿で現れて、今それが眼と鼻の所に無防備の姿で横たわっている。しかも自分には其生殺与奪の権を委ねられているのである。

それは余りにも強い刺激であった。二十八才の男ざかりの西崎が、直ちに百合子を暴力で征服してしまつたとしてもそれは彼の罪とばかりは言い切れないであろう。彼は意を決して隣の部屋へ入って見た。そこには晒を身に巻きつけて百合子が横たわっている……。

(33) 一個の雄に過ぎなくなった西崎は、百合子の傍にしゃがむとそろそろと白布を解いていった。背の下を布を引き出しても、百合子は少しも気がつかない。可愛いお臍が月光に深く影を宿して現われた。西崎はしばらくそれに見とれていた。西崎とは反対に受難の連続だった百合子は今宵はじめて安心して眠っているのである。西崎という得難い保護者にめぐり合つて絶対の信頼の下に泥のように熟睡している百合子。恐らくどんな行為が身体に加えられても彼女は翌朝まで何も知らないであろう。その天使のようにあどけない寝顔をじっと見つめているうち、いつか西崎はほろほろと涙をこぼしはじめていた。心を浄める涙だった。



(34) 翌朝、百合子が眼を覚した時、まだあたりは薄暗かった。彼女は西崎が起きないうちに身じまいをしようと足音を忍ばせて洞窟を出た。西の空にはまだ丸い月が残っていたが、東の地平はそろそろ曙の爽かな光が立ちのぼっていた。とうとうと湯の迸(はな)びる音があたり反響して、躍り出たいような生命の幸福を感じる。肌身離さぬ懐刀を岩の上に置き、晒を解いて静かに溢れ出る湯に身をひたした時、彼女は異様な物音をきいた。唸(うなり)り声の様である。ハッとして彼女は暗いくさむらの中を見た。大変！ 金色の眼が二つ、夜目にもらんらんと輝いて百合子を狙(ねら)っている。ハッと彼女は思い当った。



(35) 豹だ！ 昨日西崎がこの島に一頭、恐ろしい黒豹がいると言っていた、それだ！ 百合子は湯を蹴(け)って飛出すと懐刀をつかんでふり返った。ぐわうッ！ 物凄い叫び声をあげて豹は飛びかゝって来た。「あゝッ、来てえッ」西崎の名など思ひ出すひまはない。逆手に持った懐刀を頭上にかまえると思わず身を縮めた瞬間、ぐさりと懐刀が豹に突刺さったのを感じ、とたんに腕が肩から千切れそうにぐんと引伸ばされ、ふわりと身体が宙に浮いて天地がひっくり返った。墜(おち)ちる時の得もいわれぬ不快なぞくぞくした神経が全身を走る。懐刀を離れたらどこへけし飛ぶかわからない。彼女は豹の胸毛を左手で掴み、両脚を十分開いて豹の胴(たね)を挟もうとした。



(36) 狸(こ)掴みの金太郎そっくりである。だが笑い事ではない、豹の咽喉から出る血が彼女の眼といわず耳鼻口といわずなまぐさい湯のようにねっとり噴きかゝって来て息も出来ない。しかも彼女の身体はロケットのように空を切っているのだ。いや墜ちてゆくのである。どうなることか、地上に激突した瞬間、豹も百合子も熟柿(うめ)のようにひしゃげてしまう外はないのだ。グワンと何かにぶっかった。「アッ」百合子の頭が豹の咽喉の創口(きずぐち)へめり込んだ。「うっ」首を中心に彼女の胴体(たね)が半回転すると、ところどころと十米ばかり砂の上を転がってべたりと投出された。停(とど)まった瞬間彼女は意識を失った。(次回はイボシヌの巻)

嫉妬する少年たち

三 根 耕 二

一人の女をめぐる八人の男、これならよく映画や小説に有りそうなことです。所が男が男を争うと云う奇妙な世界、同性同志の奇怪な愛欲の渦中に、私はいつしか捲き込まれていました。自分の意志と全く違った立場で小羊は慄えていたのです。考えてみるとこんな不自然な事が一体あるものでしょうか。

燃えるような抑えられた情欲が、その吐け口を常に求めて血眼になっている。若い逞しい肉体が求めて満たされぬもの、そうです。此の鉄窓の中では絶対に認められない性の疼くような衝動。でも不思議な世界でした。彼

らの女に対する欲情は、同性の内にひそむ秘密を探ることで解決されている。誠に常識では割り切れぬ事でした。しかし此の社会ではそれが常識として罷り通るのです。立派な一つの不文律でさえあったのです。

さて何も知らずに待ち構える蜘蛛の巣の、粘っこい糸に引掛った美しい蝶の運命、逃れる術もない私の運命でした。何も知らずに次々と誘いかける蜘蛛達に、私はいともあっさり「仲よく」する事を承知していたのです。「仲よくする」この言葉の意味するものを知り得た時にはもう遅かったのです。吹きつけ

られた糸が、足に手に執拗な粘り強さで絡みつき、動けば動くだけ身の自由が利かなくなってくるのです。彼らは争い、そして傷つきました。力に依る争奪、そして看手の手に依って鞭さえ浴びていました。文と白川そして大辻と宗島はそれと決闘をやって私を争ったのです。看守の「ボタ餅」の追究にも彼らは喧嘩の原因を明らかにしませんでした。勿論それは私の上に禍の及ぶのを恐れたからでしょう。もし争いの因が私と分れば、私は独房へ拘禁され多勢の少年達から隔離されるでしょう。それは彼らの最も恐れることで

した。掌中の珠とする機会を失ってしまうからです。もし独房から再び工場へ出すとしても五工場には帰さず、全然他の工場へ出される。他の工場が何処であれ私は狙われていたのですから、私自身は大して変らないけれど五工場の幹部はみす／＼手中の珠を奪われ、その反対に他工場では思わぬ収穫によるごぶごぶになります。それを防ぐ為に自分らの手の届く範囲に私を止める。彼らはその事だけでは一致して、私をかばいました。そして成功したのです。それは工場の幹部を一時に懲罰にすると、ボタ餅自身の看守としての成績にも大きく影響するので、鞭打っただけで済まされる事になったのでした。

こうなっては私としても、はっきりした態度を定めねばなりません。その夜、自分の舎房に帰った私は、文からも責められました。

文と白川は何れも不良として且て大阪で張り合っていた間柄でしたが、少年刑務所に送られてからは、兄弟分として手を組んでいる親友なのです。その夜文は昨夜の様に、私を自分の隣りに寝させるところ云うのです。

「お前、本当の気持はどうなんだ、誰が一番好きかはっきり云ってみろヨ」

私としては、こんな困った質問はありません。一体どう答えたらよいのでしょうか、工場へ出て二日の私に何が分るでしょう。それに正直に云って好きと云うよりは誰も彼も恐いようで、誰が好き所の騒ぎではないのです。今迄の一人きりの長い独居房の生活から急に多勢の集団生活の中に投げ出されて、戸惑いし、ウロウロと工場での生活に馴染もうとするのが精一杯の私でした。

「そんな事云っても、僕、何にも分らない」
文としては、私の返事に何かを期待していたらしいのです。何と云っても私と同室である事はライバル達に対して絶対に有利だと云う計算、それだけに秘かに自信もあったのでしよう。私の此の返事には一寸困ったようでした。

「お前、白川は好きか、俺とどっちだ」

「だって僕には分らない。白川さんも文さんも好きです。みんないゝ人ばかり」

何と云う哀しい言葉でしょう、年少である私と云う弱者が、強者に対して身を守る精一杯の言葉、こう云うより他に私にはよい言葉は考えつかぬのでした。文は私の顔を見つめていましたが、何か心に決めたようでした。
「お前、それじゃ白川と仲よくしてやれナ、

あいつはとていゝ奴だからナ」

文はそう云うと一寸淋しそうな顔になると「俺はお前が本当に可愛い」と思うから白川がいゝと思う、俺と仲よくすると四舎行になるかも知れんからナア」

私と同室にいて仲よくすること、それは恐らく積もり積もっている文の情欲に点火することになる。それは事実そうなるのに間違いない事でしょう。隣りに寝させてある私の身体を冒そうとすれば訳ないことなのです。

しかしその行為が発見された場合、文のみでなく私も懲罰を受けねばならない。その危険な位置に私を置くまいとして呉れている文の気持が私にも分りました。前にも申しました通り、少年刑務所では（勿論成年でも一緒でしようが）逃走に次いで性の問題が重い反則とされており、厳しく罰せられるのでした。自慰行為を発見されても懲罰、うっかり隣に寝ている者の布団の中に片足突込んで物凄い制裁を受けねばならないのでした。

私と文との間に何らかの関係が持たれたとしたならば、これは火のついたマッチをダイナマイトの傍に置いたようなものでしょう。眠りこけた私の姿が文の情欲に点火させないと誰が云えるでしょう。文の気持ではそれが

分っているだけに白川に任せる氣になったのに違いないのです。このような鉄窓の内側でも奇妙な仁義だけは鉄則として守られていました。人の可愛がっている少年には決して手出しをしないと云うのもその一つであつたのです。その掟に依つて文は自分の欲望を抑え様と云うつもりなのです。私も結局文の希望通りにする氣になりました。文に一切任せるのです。今の場合それが最善の途なのです。「文さん、僕、文さんの云う通りにします」文の頬に複雑な感情が走りました。しかしそれはほんの一寸で、直ぐに笑顔を見せて、「よし、それじゃ俺に任せとけ、白川のアンコだったら俺も可愛がってやるからナ」こうして私は白川と仲よくする事になったのです。文と云う五工場切つての実力者が口を利いているだけに、吉崎、大辻、谷口らの競争者も納得するより仕方がなかったのです。

× × × × × × × × × × × × × × × ×
私はかくして白川の物になりました。者でなく物なのです。何故と云うよりも、事実が物であることを証明しています。対等の人であり乍ら、誰のものと云われるのですから。昔と云っても近世のアフリカでは、大勢の

黒人が白人の手に依って売られたり買われたりする、品物のような扱いを受けています。奴隸と云う名の人間、奴隸と云う名の商品。形こそ違え私も奴隸のようなものではないでしょうか、しかし弱者の生きる途はこゝにしか見出せなかったのです。斯して一人の「ナオスケ」が生まれました。白川は長身の青年でした。嘗って不良少年として大阪の盛場で荒れ廻ったであろう彼も、今は少年囚として此の鉄窓の中に瀆罪の日々を送っているのです。

メリヤス工で二級者、一年以上三年の刑期も一年十ヶ月を終えている古参者、そして文達と共に工場での実力者でもあるのです。

翌日から私の身辺は奇妙な変化をみせてきました。洗濯工の幹部から純綿の作業服がこっそりと届けられます。禪もシヤツも手拭に至る迄新しい品と変わります。勿論白川の手によってあちこちに手配されたからです。

三級になってもスフのよれよれの作業服しか当らない。ツンツルテンのつぎの当った肌着が普通で、純綿の服は



Shin

顔のよい者でないに及んでいない。私は理髪夫の手によって丁寧に頭を刈り、眉などは、可愛く剃られていやが上にもナオスケとしての可憐さを増します。私の仕事も雑役の芝崎が気を配るのです。極端に云えば何もしくなくとも、科程の心配はいらないのです。定められた以上のノルマは帳簿の操作でひねり出されていきました。食事の時も私の所には幹部が後から菜などを余分に盛ります。私はそんなに空腹は感じていなかったのに、六人組の食卓の者の所に分けてやります。それから前にも申しました様に、階級に依って種々の好遇を受けるのですが、食物の面でもそれがありません。それは優遇と云われるもので、三級者は月三回、二級者は月五回、一級者では月七回、甘い物が付くのです。ぼた餅とかぜんざい。又時には羊羹やキャラメルが与えられるのです。何と云っても少年達に取っては甘味を求める気持が強く誰もがノドから手が出る程に欲しがっている貴重品でした。白川は六日に一度のその甘い物を自分は食べずに、私の為に取り置いて呉れるのです。之は私一人でなく辛幸烈少年にせよ、本庄新一郎少年、吉岡宗一少年もそれらの庇護者から、可愛がられているのでした。勿論多勢の少年

達から新参者として苛められる。その様な恐れは全然ないと云ってもよいのです。私達の背後の幹部の眼が彼らにはよく分っているのですから。

世に勞働貴族と云う言葉がありますが、これはさしずめ囚人貴族とも云うべきでしょうか、幹部と幹部に依って庇護される一部は、全く支配階級でした。しかしそれだけに新入者はその上級者の位置を狙い、現在その位置にあるものはその権力を失うまいとして、烈しい競走意識で目に見えぬ戦をくりひろげているのです。私も後には幹部になったらアンコを一人位持ってやろうと考えるようになったものです。要するに此の隠された社会ではナオスケを持つ程の力がなければ、樂をする事など出来ないのです。

さて白川と私は昼休み等になると、一緒に座っている話などをするのです。工場で睨みを利かせている彼も、私には優しいのです。平素の荒っぽい言葉も、使いたれない言葉を使うのです。勿論人目の多い工場です。看守の目も光っているのです、変な真似などは出来る筈はありません。僅かに私の手を軽く触れる程度でした。そうして彼は常に、「耕坊、何か要る物があつたら僕に云えば何



とかしてやるよ、腹は減らないか」などと云うのです。そして夜舎房に帰ってから一級者に託して手紙をよこすのです。一級者だけは入房しても扉に鍵を掛けず廊下だけは自由に往来もさせてあるのです。又一級

になると縞の袖のある着物、云い換える娑婆と少しも変わらぬ着物が着られるし、寒中でも差入のラクダのシャツなどが許され、検身いわゆるカンカン踊りはしなくてもよいのです。さて届けられる手紙が実に奇妙でした。

「僕はあなたが工場に下りてきた時から一目で好きになったのです。僕には今何よりもあなたが一番可愛い、大切な人です。不自由な物や欲しい物があつたら、遠慮しないで云って下さい。あなたがいるので僕の毎日はとても楽しいものになりました。あなたは僕の心を慰めてくれる美しい花であり、輝やく星のようなものです。……」

このようなラブレターです。こんな手紙を彼は一日置き位に私に寄越すのでした。文は私に必ず返事を書かせるのです。そうするのがナオスケの仁義だと云うのです。私は生れて初めてラブレターの返事を書き一級者に持っていて貰いました。読者の皆さんはそんな馬鹿な事がと笑うかも知れませんが、でも之は事実なのです。男が男にラブレターを書く世界は此の世の中に確かに存在しているのです。幸か不幸か二級者は独居房に收容されているので、私の肉体的な不安は大分薄らぎました。もっとも免業日（刑務所では休みのこ

とを免業日と云うのです。業を免ずると云う意味でしょう）には看守に依っては廊下の中央の宿直室に腰を落ちつけてしまつて、一切を工場幹部に任せる横着者もいて、その時は舎房の入口の所で誰かが部長などの来るのを見張っているのですが、その時は舎房の廊下はあちこちと往来も出来て、野放し状態になるので、一寸危険と云えましょう。一級の五舎、二級の六舎が独房で七舎と入口が一つで廊下で放射状に拡がっている建物です。もし一級独居か二級独居へ連れ込まれれば、何をされるかも知れないのです。又他のナオスケ達はそうした方法で、幹部に依つて利用されているのでした。でも私はいつもラブレター？ に対する返事に必ず兄弟のように交際（つぎあ）ってほしいと書いていた故か、彼は控え目な態度でいたので、仲々そう云う危険には遠ざかっていたのです。もっとも彼の紳士的態度もいつ迄続くか疑問でした。しかし表面は優しい兄のような態度で過していたのです。所が私に取つては思いも掛けなかったものが待っていたのです。

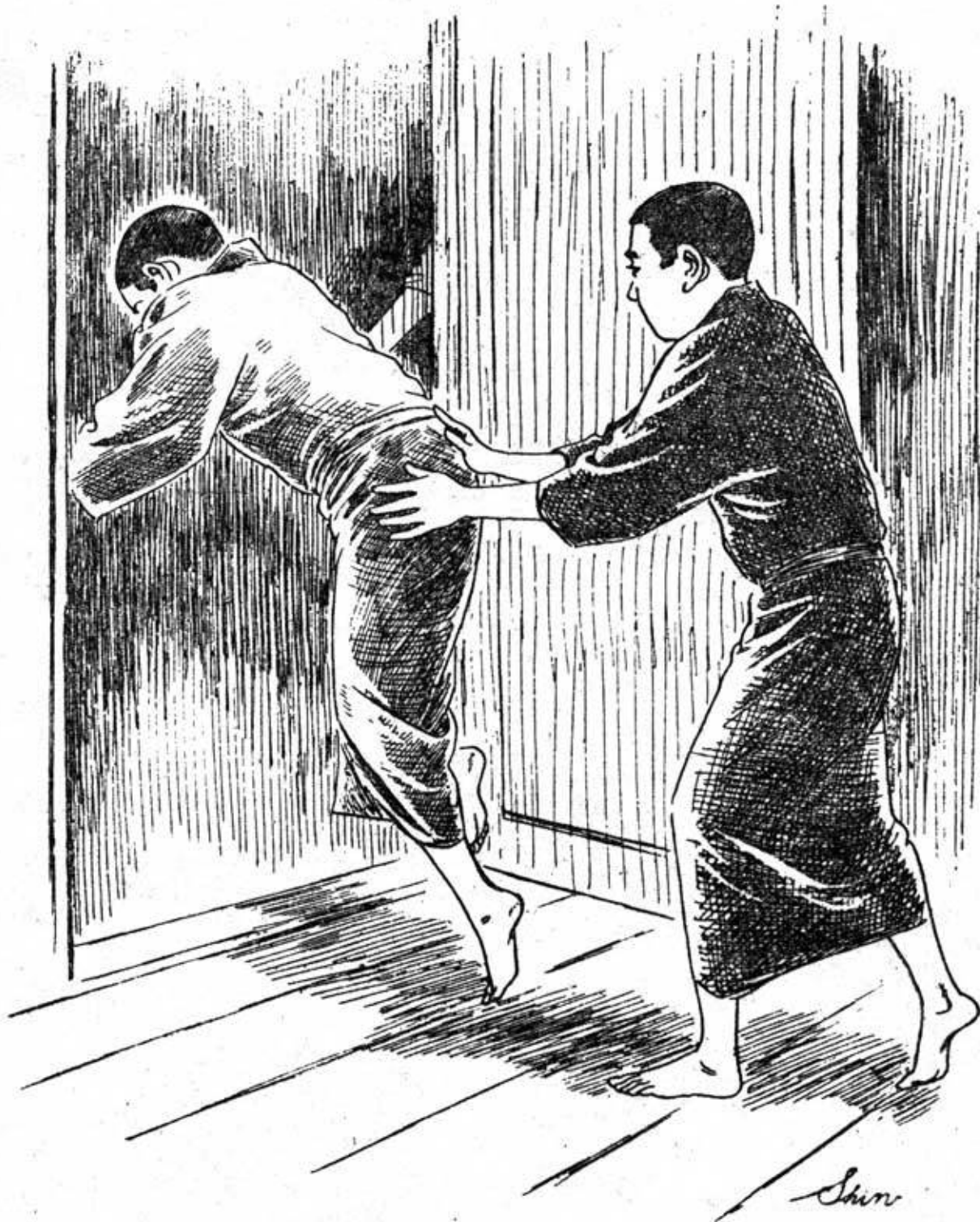
私が来る迄の五工場的美童達の中で、ナンバーワンであつたと云う、辛幸烈少年の手酷い嫉妬の刃が研がれていたのです。辛幸烈は

小柄の元気のよい少年で、年は私より一つ上の十七才、濃い眉で勝気な少年でした。彼も一年以上三年の刑の内八ヶ月程を務め終えていたのですが、彼こそ私の現われる迄白川の愛童であつたのです。彼の烈しい性質は名の通りでした。幼い頃から幾度か学園の味を知っている古強者とも云うべき少年でした。話合いの結果白川との関係を絶つて、印刷の一級者である吉崎の手に移つたのですが、彼に取つては工場での人気者の地位を私に奪われたように思えるのでしようか、私を無視するような敵視するような態度で私に接するのです。そうして色々私に対する報復を計画していたらしいのです。

私が五工場にきて十二、三日も経つて、二回目の免業日でした。刑務所では日曜、祭日は休みで官庁会社並みです。その日も朝食が終つてから教誨がありました。免業日は室内で食事をします。免業日の日は配食に出てくる幹部、白川や文の手でそれこそ食べ切れぬ程の飯やお菜です。幹部や愛童の居る房は他の者は大喜びです。しかしそう云う者の居ない室はみじめです。さて満腹の腹を撫でて教誨に出ました。休みには必ず全員が大教誨堂に集つて教誨師の講話を聴き、その後でレコ

ードを聴かせて貰えるのです。舎房から教誨堂までマットが敷かれて、私共は一列に並んで教誨堂に入り、ベンチにぎっしりと座るのですが此のような時は必ず仲よくしている同

士で並んで座るのでした。その日も浪曲のレコードを聴かせて貰い舎房に帰ります。その帰りの時に辛少年が後から来て、小さい声で「オイ、お前一寸後で俺の所にきて呉れよ、



話したい事があるからナ」

私は何だか分りませんでしたでしたが、領づいて承知の意を表して自分の舎房に帰りました。教誨が終わるとすぐに昼食です。私達はまた食事して午後がほんとうの休養になるのです。

丁度その日は、綽名をガスタンクと云われる川本看守の勤務でした。此の四十才位の看守はズボラな事では一番と云う定評のデブッチョで、宿直室で肩を揉ませたり幹部と雑談したりしていて、舎房の見廻りなどはやらないので、少年囚達にとっては却って都合のいゝ人物でした、此の日も食後の点呼が終ると宿直室で横になって、幹部に按摩をさせていました。さあ、此方の舎房から向いの房に行ったり来たりして眠やかです。勿論刑務所では休みでも時間がくる迄は横になる事は許されないのです。教務課から貸与された官本を読むもの、勉強している者、雑談している者と色々です。辛がそっと顔を出して私を呼びました。私は彼の云う通りに廊下に出て彼の後について行きました。舎房廊下の掃除を装って辛は五舎へ私を連れて行くのです。

私は一寸意外な感じを抱きましたが、黙って彼の後について行きました。

五舎は一級の独房です。こゝは普通の独房

と違って室がやゝ広く、板敷でなくて畳が敷かれていたのです。一番奥の房へくると、私の背を押して中に入れるのです。一寸不安を感じ乍ら私は中に一歩踏み込みました。

私が中に入ると突然両側からグッと腕を掴まれてしまいました。後から

辛少年が入ってくると私を押して中央に座らせるのです。私はしまったと思いましたが出来ないのです。うっかり声を立てる事で表沙汰になると、彼らのみか私にも、幹部や看守も処罰される様な事になるのです。私はそれを恐れて沈黙しました。辛少年の他に吉岡と本庄の二人の少年が待っていたのです。二人ともナオスケ組でした。辛と何か打合せてあったのでしょう。二人に押えられては年少の私には抵抗も出来ないのです。

辛少年は小柄ですが、それでも私より逞しい腕力と

学園仕込みの喧嘩度胸の持主です。後の二人は共に私より二つも年上の十八才の少年、いずれも感化院の経験者であって、私など幾ら抵抗しても無駄な事は分っているのです。押えつけられている私の両腕を後に捻じ上げる



と、辛は用意していたらしい一級者の用いる兵庫帯で縛ってしまおうのです。

それも意地の悪い括り方をしたらしく、ひしひしと身体を締付けるのでした。舎房では皆、長衣を着ているので、後手に縛られて転

がされると裾がめくられて腿のあたりが剥き出しになります。揉み合った為に着物の前がはだけて何とも云えぬ恰好です。彼らは暫らくそのまゝで転して置いて見下ろしているのです。

私は先日、洗礼の時に意地悪く私の悶える様を見物していた。あの辛少年のガラガラしたような眼を思い出ししました。私は身体をよじって剥き出されている肌を隠そうとしました。所が辛は私の身体に手を掛けるとコロリと仰向けにしてしまうのです。その為に却ってより以上に肉体が露出されてしまうのです。辛はニヤニヤと薄ら笑いを浮かべました。美しい眉が一寸吊り気

味になり、その黒い瞳の中に何とも云えぬ淫虐の炎がメラメラと燃えるのです。

本庄も吉岡もそのような辛の態度に誘われたのでしよう。頬をポウと上気させているのです。何れも眉目秀でた少年達が今又稚い肉体を前に上気し昂ぶる情欲と闘っているようでした。彼らは常にナオスケとして愛

されるだけの受動的な位置を強制されていますが、本質は立派な男であり思春期の少年に変わりはないのです。辛の十七才、他の二人は十八才、私は本能的に危機を感じました。

一級独房は窓が大きいので室内は明るい光線が差込んでいます。倉房の廊下のスピカに教務課からのレコードが流れてきて、益々賑やかです。少々の物音は全然気付かれないことでしょう。三人は私の周りに屈みこみました。私は身をよじります。声は自由に出せるけれど、もし声を上げたら廊下にいる幹部達やその他の少年もやってくるでしょう。しかし私の惨めな姿が大勢の眼の中に曝されるのは身を切られるような辛いことで



す。それに川本看守に知れると或いは戒護課へ報告される恐れもあり、うかつには声が出せないのです。私の着物を三人ははだけてしまい仰向けの私の身体はすっかり裸にされてしまいました。渾一つだけの私の肌を彼らの視線がじろじろと這いまわり、私の肌は嘗められるような気味悪いものを感じるので。三人は手を伸して私の脇の下から横腹を撫でたり擦ぐったりするのです。私は身を揉んでその意地悪い手を指先を避けようとしてみました。でも自由を奪われている身は全然私の意思に反対のように、どうにもならないのです。辛の手は殊に執拗でした。脇腹を擦ぐり内腿を抓り、そして一枚の布の中にまで指先

を伸ばしてくるのです。ハッと痺れるような思いから眼を開くと、辛の顔がのし掛かるように私を覗き込んでいるのです。私は辛の顔にも酔ったような気配が浮んでいるのを不思議な気持で見上げました。辛少年の赤い唇はキラキラと濡れて、軽く開いた唇の間から白い美しい歯がチラチラと見えているのです。

ハアハアと三人共荒い息遣いをしているのは、彼等は此の奇怪な行為で刺戟されているのでしょうか。いつも被征服者にされている彼等の体内の征服欲の現れだけでしょうか。私は彼等が度々の拘禁生活で歪んだ性格を持ったのだと思うのです。悲しい倒錯した性欲それが私の汚れていない身体を冒し汚すことで発散されていたのに違いありません。私は自分の姿の惨めさと、次々と加えられる凌辱の中にふと奇怪な感情を感じて戸惑っていました。不思議なことでした。私は今こうして年長の少年達に堪え切れぬ程の辱しめを受けていながら、いっかその生暖かい淫らな指先を期待している自分を発見しているのです。

た。今でこそ、はっきりと云えるマゾヒズムの恍惚境。でもその時はそれは羞しきの蔭にかくれて分らなかったのです。

辛少年は又私の身体をゴロリと俯向きにしてしまいました。私の着物はすっかり裾を捲くり上げられて、まんまるい臀部が三人の前にピクピクと加えられるだろう悪どい制裁に戦のいているのです。本庄が窓の所の机から竹の物差しを持ってきました。そうしてパシッパシッと盛り上った二つの高まりを打ちさえるのです。私は思わずウウツと呻きました。竹の平べったい物差しですが鋭い痛みが全身に走ります。何度打たれたことか、三人は私の痛がるのを面白がって交替で物差しを揮うのです。でもそれも飽きたらしく、辛はふところから鉛筆を取り出しました。三級では鉛筆の使用は許されていないのです。誰か仲よくしている者からのプレゼントに違いありません。辛は本庄や吉岡の方にそれを見せてニヤリと笑いました。二人はその意味を了解したらしく意味ありげにニヤリとうな

ずき合うのです。本庄は急に私の禪の紐を解いて、グルグルと丸めると、私の口の中にギユウギユウと押込んで手拭で口を固く掩ってしまいました。

声は仲々出さない場合であるのに猿轡をするには、私がどうしても声を出さねばならぬ程の辱しめや苦しみを加えようとしているに違いありません。私はそれを察したので急に身悶えを始めました。しかしそれは所詮無駄な足騒ぎでした。本庄が私の縛られている両手の上に腰を下ろし、そうして辛と吉岡は私の両足首を掴むと、ぐっと八の字に力づくで押開いてしまつて、それぞれ足の上に座り込みました。たとえ私が相当力が強くても三人の年上の少年を跳ね返す事は無理です。しかも私はまだやっとな少年期に入つた許り、これでは到底不可能な反抗でした。私は、苦痛の呻きをあげ全身を慄わせました。私は額に油汗を一ぱい浮べていたのです。何でこんなひどい事をするのでしょうか。

「オイ、お前、これで許してやるけれど、い

ゝか、これはお前に白川さんを渡したお礼だからナ」

辛は私にこんな事を囁きました。彼は私の出現で白川を奪れた復讐を加えているのです。私が進んで選んだ道ではないのに、彼は嫉妬のリンチを私に加えたのです。本庄も吉岡も新らしく現われた強敵として、私へのリンチに加つたのでしよう。あちこちの感化院での生活がこんな惨忍なリンチを易々とさせるようになっていたのです。しかもそれだけではないのでした。

「俺達は今で許してやるけれど、まだ解いてはやれないぞ、今三工場の山崎さんがくるから、渡さにやならんからナ」

辛はそんな思い掛けぬ言葉を吐くのです。『山崎さん』それは三工場の一級者で工場の最高幹部と云うことは、私も知っていたのです。しかしその山崎が私に何の用があると云うのでしよう。不安に戦のく私を見下して辛少年達は意味ありげに笑いを交わし合うのでした。

(此の項終り)



沅腸の往復文書

花村惠美子さんの提供

全国の沅腸マニアの方々から、花村惠美子さんに寄せられた夥しい手紙は全部花村さんへ転送いたしました。花村さんは一々、返事を書かれたそうです。ここにその中の一つを花村さんの許しを得て皆様に御紹介してみましよう。

前略 突然お手紙差し上げ失礼とは存じますが、貴女の御投書拝見致し、得難い同好者を見出したような気がしてペンを執って見る欲望に駆られたわけです。奇譚クラブの記事のうち沅腸に関するものしか興味がないと仰言いましたが、小生も正にその同類なのです。あの二字を見ただけで、それが如何に多くの活字の中に並んでいようと、特大号の活字のように目に飛び込んで来るのです。戦争が終るまでの、すべてが覆い隠くされたような時代には自分のこの性癖を愛態かなと考え悩んだこともございました。しかし、こうい

う雑誌に目を通すようになり、多くの同好者がいることを知り、もはや人間の常態でさえあると知って安心した次第です。

戦争中、旧制中学の生活を送った私は、勉強が嫌いなまゝに手当たり次第に小説を読みあさりしました。その時、あの二字がまるで稲妻のように目の中に飛び込んでくるのです。そんなことで危かしい記憶しかないことですが、貴女が室生犀生の小説にまで目を通して、貴重な場面を紹介なさった鑑賞力にあやかっ、思い出すまゝにたつた沅腸の二字だけでも出てくる小説の名前を挙げて見ます。まず漱石の「道草」に主人公の女房（恐らく漱石自身の女房でしょう）病気の癒りかけた床で貸本に読みふけるくだりに、一時は沅腸さえしたくらいだったのというような云い廻しがありました。その他、田山花袋のもの、近松秋江の「別れた妻」？ 芹沢光治良の「パリに死す」？ のスイスの病院のくだり、石川達三の「深海魚」で服毒した女給に

沅腸するという医者姿など、かすかな記憶に残っています。小説ではありませんが、長谷川如是閑はイルリガートルの愛好者で自ら洗礼すると称して、旅行中はニッケル製のイルリガートルを携行して毎日行ったそうですし、生方敏郎も毎日微温湯を沅腸していると随筆に書いていました。

しかし、沅腸愛好者の生態を見たのは母親が病院に入院中、ずつと看護した時、同室の中年の小母さんが盲腸の手術のあと、便通がないといって二度三度、看護婦に頼んでイルリガートルで沅腸をしてもらっているのを見た時でした。白い石鹼液をゆっくり注入されて心地よさそうに目を細くしていた姿を見て成程と思いました。というのは前に友人の持っていた大槻憲二の精神分析の本を読んで、ある病院に入院していた三十いくつの奥さんが時々ヒステリーに似た症状を起すが、その時、ある特定の医者（美男子だったという）に沅腸して貰うとすっきり癒ってしまったという実例を覚えていたからでした。また母親のいた病院で次々に入院してくる女の患者が、盲腸、子宮筋腫の手術をする前に必ず沅腸されていました。始めはいやがりながらも強引な看護婦に遂に沅腸される姿を垣間見て観念したような顔を眺め、小生も複雑な気持ちに襲われるのでした。既に私自身もイルリガートルで実験して見たこともあったので

す。型の如く、この習癖を覚えたのは幼少の時の医者さんごっこからでした。仲のよかった女の子にしてみたり、何CCまでがまんできるか、競争したりしました。また母親が昼寝しているのを幸いに自分でイチジク浣腸をして見て、見つかりそうになり、誤魔化すのに苦勞したこともありました。小学校の二年ぐらいの時です。友達とお医者さんごっこをやったことを後年、暴露されてひどく憤慨したことがあります。いたずらを合った友達姉さん（数え年十九ぐらいだったのです）が来て診察するのを外でぼんやり聞いていました。最後に「浣腸をしておいて下さい」といわれたのを聞いて、友達とはっと顔を見合せました。そして、あとどうなるのだろうかと思ひ心に非常な興味をもつてひそかに観察してしまいました。お母さんがやがて薬屋からイチジク浣腸を買って来ました。いざやろうとすると姉さんは泣いて拒むのです。その気持が子供の私にはわかるような、わからないようなのでした。やむなく浣腸されたその姉さんは、その後も時々浣腸されているようでしたが、結核を患っていたのでしよう、半年足らずの間に歿くなってしまいました。

こういう子供の時の興味は中学に入つて一時、中断したものゝ決して消えてはしまわなかったのです。何かの時、家の中をやさがし

して50CCのシリンダーを見付け、ひそかに自分で試みてみました。そのくせ自分以外の人間からされることは非常な屈辱感を感じるのです。満十五才ごろでしょうか、肛門に何かを注入することが非常な快感を覚えるということに気がついたので。春期発動期という頃と一致するのでしょうか、他人の会話の中にこの言葉が飛出てくると思わずはつとして表情がこわばるのを意識せずにはおられませんでした。家人の留守を見はからつて種々の実験を試みました。肛門いじめに忘れ難い快感を見出したわけです。イルリガートルを実験してみたのもこの頃でした。刺戟的な冷水の注入、生温い石鹼液の注入は自分の禁じられた遊び見たいなものでした。こういう実験のせいか、その後ひどく痔に悩まされるようになりしました。最近では生理的な要求に迫られる以外は試みる事ができなくなつてしまったのです。しかし大げさに申しますと、私という人間の形式にこの浣腸は消すことの出来ない部分を占めているのです。ある時期にはOnanieに結びつくものもありました。歳三十になんなんとして未だ何か永遠に満たされる思いが残っているのは、浣腸の二字あるためではあるまいかと思われてなりません。つまらないことを長々と書きました。まだ書き足りないような気がしますが、心からの同好者を見出した喜びの余り敢えてお手紙

を差し上げるわけでございます。お暇の折、お便りでも頂けたら此の上ない光栄に存じます。 敬具

花村恵美子様

藤森 明

藤森 明様

見ず知らずの私に詳しい経験談と浣腸マニアの心理を心憎い迄に表現されたお手紙下さいました御厚意、私、心から感謝致しております。告白記を投稿しました際、私の最も恐れておりましたことは、内容が内容です。で、読者の方々から、〃何んて厭な女なのだろう〃かと顰蹙をこうむるのではないかしら、と云うことだったのです。事実、掲載されました「奇ク」を入手しました瞬間、脳裡を激しく交叉しましたのは、唯、耐え難き後悔と自己嫌悪のみだったのです。そうした不安と焦燥に明け暮れる私を勇気づけ、更に第二の告白記を綴る決心を育て、下さったのは、編集部の方々の御理解、援助は勿論のことです。一重に読者（同好者）の皆様方から毎月戴く沢山のお手紙なのでした。恐らくは他人に云えない様な貴重な、赤裸々な経験、告白だけではなく、資料の提呈から、御激励と、全く私の暗い心をふき飛ばすものばかりでした。私のつたない告白記がこれ程迄に浣腸愛好者の注目と関心を集めたのかと思ひます時、ひたすら恐縮の念と、感激

の涙で、その御厚情にお報いすべく、第二、第三と告白記を綴って参ったのです。

私、お便り下さいました方には必ずお返事差し上げるようにしておりますけど、今日は特別に貴重な誌面を提与下され、奇ク誌上にお返事が書けますなんて、これ程迄「奇ク」に甘えて悪くないのかしらと思います。でも私、浣腸に関する大部分の事柄は、既に発表してしまいましたもので、お読み下されば、私がどんな女であるかお判りのこと、と思えますし、別に殊更書く事柄もございませぬのですから、どうぞ期待なさらないでお読み下さいませぬ。

浣腸に一種特別な興味を抱くことが、何か非常に変態のように思い込み、悩んで居られる方達の多いのには、お手紙を読んで本当に驚かされましたわ。本当のことを申せば、私だって多分に悩んだ一人なのですけど、でも、浣腸愛好者がいかに多いかという事実にさえ着目されれば、そうした苦悶からは脱却出来ると思えます。私達、もともと勇気を出して、浣腸に楽しんで良いのではないかしら。性生活に於けるキンゼイリポートの様に、浣腸に於けるリポートが研究されてもいゝと思えますけど。

お手紙下さる十人が十人まで悩んでおられるようですもの。この点「奇ク」が啓蒙した功績は実に偉大だと思っております。浣腸通信で、山田さんが述べておられます様に「縛

ったり、鞭で叩いたりする原始的なサド、マゾに比べて、浣腸願望はもつと文明的なもの云々」。私も全く同感です。サド、マゾを完璧迄に含んだ立派な遊戯だと考えておりますけど。文学作品に現われた浣腸描写についての紹介を、頭が下る程詳しくして下さいましたが、小説新潮九月号「青春物語」長田幹彦の作品にも、服毒した女を浣腸する描写がありますし、新潮十月号「体温計」安岡章太郎の作品には、直接的な関係はありませんけど、肛門での精密検温の事と、「僕は話をきながら、ふと寒気をもよほしてきた。……子供るとき、浣腸させられ尻から背筋へ冷いものが上ってくる感じ、あの不快な気持が体内によみがえった。」と、幼年時代に浣腸された心理を、流石に芥川賞作家らしき感覚でもって描いてあります。この不快な感じは、とりもなおさず、当事者にとってはマゾ的であり、施行者にとっては、サド的なのです。非常に興味深く読みましたわ。それから、岩波書店から発行されている「フランス通信第一巻」(作者は滝沢敬一)の中にも、浣腸を受けることがユーモラスな文章で書かれてあります。

不思議なもので、どんな内容の作品だったか、或は作者の名を忘れていても、浣腸描写のある部分のみは、どんな僅かであつても、今更残っているのですから。貴方の紹介下さいましたもののうち、私、石川達三と秋江の

もののしか記憶にありませんが(漱石のは一応全作品に目を通した心算でしたが)その他の文学作品に表われた浣腸描写のことは、書名と作者名を確かめた上で、お知らせ致しますわ。病院生活の経験ある人でしたら、貴方ばかりではなく、そうした経験はあるのではないのでしょうか。私もありますけど、誌面の都合上後便にて詳しくお知らせ致しますようね。これは一つの夢ですけど、「奇ク」主催での浣腸実演公開を、会員組織にでもして行ったら、それこそ素晴らしいと思いますけど。

それから、是非共、羽村京子さんの作品、お読みになれますことをお勧め致します。旧号に現われた数々の優秀なる作品、必ずや御満足戴けることと存じます。十二月号の「浣腸遊戯」をお読み下さればお判りと思いますが、羽村さんは駆け出しの私とは異って、浣腸界のオーソリテイ、私の尊敬し、愛読しております得難い方ですわ。私、今尚羽村さんの作品は、全部といていゝ程、熟読賞味しております。羽村さんこそは浣腸という新しい題材を、勇敢にとり上げられた先駆者です。浣腸物が漸く誌面を飾るようになってから、はじめて投稿したような私とは大違いでございませう。文通の幹旋を編集部の方でして下さいとか、私、楽しみにしております。貴方もし是非投稿して、気焔を吐いて下さいまし。

サヨナラ

恵美子拝



第三章

骨肉の争い

平手政秀が、信長の乱暴な所業を苦にして諫死した。追の、信長も反省自戒せねばならなかった。と史伝にあるが、これは余計な註訳で、信長はそんなケチ臭い小人ではない。

自分のやったことに、ひとつひとつ反省して苦慮するのは神経衰弱症の患者ぐらいいで、そんなことなら、始めからしなければよいのだ。

翻われる結果については、文句なしにこれを受取る度量がなくて、どうして戦国乱世に処することができようか。信長は、自己の所業

倒錯の英雄・織田信長を完膚なきまでに解剖した新研究

倒錯の英雄、織田信長

笠置俊郎作

の応報に愚痴るようなバカでも小才でもない。

その証拠に、信長の最期をみれば分る、本能寺で光秀の乱に会うや、「謀反人は何者ぞ」と側近に問い、「明智殿でございます」と聞かされて「おお、そうか、是非もない」と顔色一つ変えずに云った。しかもその自刃ぶりは、露ほどの執着も未練もない、実に天晴れな最期であった。

こうした死生観は、童わっはのときから、信長の本性として備わったもので、悔ゆるなき生活が、思う存分に生き抜くという形で現われたのである。

「ああ、俺が悪かった」

などという泣きごとは、およそ、信長にとっては縁のない感傷で

あった。むろん信長が平手政秀の至誠の尽忠を感み、また、その人を慕っていたのは自ら別の心情であった。政秀が死んだその年の夏川遊びに夢中になりながら、ふいと政秀を幻にみて、

「政秀！ これを食え」

と、叫んで、掴んでいた魚をひき裂いて、その半身を自分で啖い半身を空高く抛げたので、供の者が呀ッと棒を呑んだように信長を贖めた。信長は、また、

「政秀！ 水をやるぞ」

と喚いて、足をあげて川面を蹴った。水滴がきらきらと、陽の中で七色の虹を描いた。そのとき、信長は臉を熱くしていた。

こんな時の信長は、世間の奴や、供の者を眼中に置いていなかった。奔る熱情に、見えざる世界の機微を、グッと睨んでいたのである。

政秀が死んでしまうと、事実上、信長は一人ぼっちになった。家中は、信長の奇矯な性格に、ある危惧を抱いた。自然、温和な二男の信行を擁立しようとする空気があった。その反信長派の首領は、林佐渡守、その弟の林光春、柴田勝家などの、信行を補育した人々であった。

信長、すでに、十分この情勢を知悉していたから、まず、信長のなすべきことは、織田同族を屈服させることにあった。

恰度、父の信秀が死んだとき、今川の智謀、大原雪齊は、安祥城を攻めて、まんまと凡愚な織田信広を捕虜にしまった。信広というのは信長の庶兄である。この敗報に、織田方は慌てたが、信長は、救援の軍を出すことを許さなかった。

下手をすると、腹背に敵を受ける、というのは、清州の織田彦五

郎が機を狙って信長を仆そうとしているからである。

信長は、

「庶兄の信広と、横奪しておいた人質、松平竹千代を交換して和議を結ぼう」

と主張して、ひたすら、眼を清州に注いで油断するな——と家老達に申渡した。このとき、信長は竹千代（徳川家康）の尋常でない人物を見抜いて、礼を厚うして送り届けたのである。

和議は整って、今川もさし当り尾張領に攻め込んでくる気配もなく、今は全力を以て、清州に当れる態勢になったので、老臣家中一同、信長の鮮かな外交戦術に氣を吞まれて、燦りかけた反信長の氣運も、少しかり鎮静して小康を保ったようである。

とは言え、これは一時的な静謐で、やがては紛擾すべき宿命の、骨肉の争いに進展することを、誰よりも信長が知っていた。

とまれ、清州の織田彦五郎が窺っている限り、信行一派も事を起すことは自滅になることだから、逸る心を押えつけていたのだ。

そこは——信長の方でも承知で、まず、織田彦五郎を屠って、然るのちに、反信長派に断を下そうと、神算機謀はすでに心のうちで成っていた。

清州城主の織田彦五郎は、言わば、織田同族の宗家である。城中には武衛家斯波義統を奉じている。これでは、信長の方から仕懸けると主筋に弓を引くことになるので、信長の父の信秀も手古摺ったのだが……信長も大義明分が、戦争をする上には何より大切なことは知っていたから、じつと相手の出方を待っていた。

彦五郎に言わせると、

「信長のような、大癡兒おうつけの風下に立てるか、今に見ている」

と云うのだ。この時代——宗家だろうが、本家だろうが、実力第一である。いくら彦五郎が宗家だと威張ってみても、実力で事を決する以外に道はない。

そこで、彦五郎は松葉城の織田伊賀守、深田城の織田左衛門尉と盟約、那古野の信長を攻める手筈をととのえた。

「来たか、この機だ、待っていたぞ」

満を持していた信長は、忽ち全軍に出動を命じ、自ら陣頭に立って采配をふった。まず、清州口は敵を抑えておけ、松葉口、三本木口は全力をあげて撃砕せよ——と攻め立てた。

この戦いでも、信長は、家中の者に、自分の天才的な戦略家であることをハッキリ認識させるために、実に周到な作戦で各個撃破をやった。

見事に信長の作戦は奏功して、松葉と深田の両城は屈伏した。その勢で清州口を一挙にやろうという家臣の進言を退けて、長陣無用と一旦兵を収めた。こうして清州の彦五郎を孤立に陥し入れたのである。

こうしておいて信長は、密かに彦五郎の家中の築田弥入衛門を籠絡して、清州城にある斯波義統に

「彦五郎如きは虫けら一匹にも劣る奴で、攻め亡すに何の造作もありませんが、攻めれば城中にある、あなた様に災難がふりかかってはならぬと躊躇しております、彦五郎如き小人非力の者を味方されず、私ならば、必ず、あなた様を安泰にしますから、こちらにおいで下さい」

と誘った、権謀は戦国時代の習しである。殊に、信長は、智略には実に優れている。彼には、事物の表裏が鏡に映るように分った。

鋭い——と云うよりは、神智に近い直感力があつた。

斯波義統は、信長の誘いに応じて、清州城脱出の機を窺っていたが、このことが洩れて、彦五郎がいつしか感づいた。短慮な彦五郎はカンカンに怒って義統の子の義銀が清州城を出て狩に行った留守を狙って、義統を虐殺した。彦五郎は、一時の憤りで主殺しの汚名を自ら着てしまったのである。

こうは、うまく行くと信長も思わなかったが、好運だったのだ。これで主殺しの彦五郎を攻める口実ができたのである。むろん武衛家斯波は信長にとっても主筋である。

義銀は狩の帰り途中で、父が城中で殺されたことを聞き、蒼遑として難を遁れて信長のところ——那古野城に飛び込んだ。天文二十二年七月十二日のことであつた。

尾張の統一には、地の利として清州だ……と信長は、とっくの昔から、清州を手の中に入れる算段をしていたのだ。

さて、信長は考えた、彦五郎を攻めるのに正々堂々と陣を張るべきだろうか、それとも奇襲作戦か、

「虫けら一匹、兵を損ずるに当らぬわい」

すでに主殺しをやった彦五郎だ、焼きが廻っている。信長はそつと守山城主の織田信次（父信秀の末弟）に人を遣って

「今に彦五郎が、あなたを味方に頼んで当方に一戦を挑んでくると思うが、すでに大勢は決している、この際、当方と密約を固くして主殺しの彦五郎を共に掃討したい」

と申入れると、信次からは、二心なし、安心してくれと言ってきた。信長はにやりと笑って時を待つ。

そうとは知らぬ彦五郎、家老の坂井大膳の献策で守山城に付きか

け、味方になってくれと申入れた。信次は二つ返事で快諾してみせたので、彦五郎、やっと愁眉をひらき、

「今度こそ——信長の奴、首をとってやる」

と強気なところをみせ、それでは盟約を固めたいと、清州城に信次を招いた。信次は、直ちに信長に使を遣うておいて、素知らぬ顔で兵を卒いて清州城に入った。

弘治元年四月十九日だ。彦五郎にとっては生涯の最悪の日だ。まさか、自分を殺すための軍隊とは思わないから、喜んで味方として信次の軍を歓迎して大いに歓待した。だが、信次の軍兵は、軍規が正しいのか、出された振舞い酒もあまり飲まない、反対に、彦五郎の方の城兵が接待をしている間に、酔いつぶれる始末、時や良し——城にのろしが上った。むろん信次の軍兵がやったのだ。

すると、旗を伏せて、その時すでに信長は軽兵を提げて城外で待機していた。のろしをみると、ワッと鬨の声をあげて城中に攻め込んだ。

「どうした」「何が」「これは」「無茶苦茶だ」と城方は混乱の渦の中に巻き込まれて、騒ぎ喚くうちに、

「ああ、謀られたか」

彦五郎が自分の間抜け加減を合点したのは、魂が三途の川を渡っていた頃だ。

信長は、清州城に入って、無惨に殺された彦五郎の屍体を検分して、可笑しさが止らなかった。

清州攻略の始末は、信長の生き方を、実によく現わしているのである。信長は決して正面作戦をとらない、今でいう謀略戦を理論的に十分やっておいて、敵の虚を撃つ！ そうすれば戦力を消耗せず

に勝つことができるのだ。信長の眼は、この時、すでに武家政治の統一ある支配権力を狙っていた。十分に戦力を維持することが最後の勝利を獲る道であることを知っていたのだ。

恐るべき天性だ、内向的に、信長のマゾヒズムは、彼の心を冷たい理智で磨いていた。外向的には、激発的サディズムが、彼を勇猛にしたのである。

その上、神の如き、玄妙なインスピレーションが、天禀の才気となつて発散するのだから天下無敵、正に古今に尋ねて得られぬ天才児であった。

信長、かくて清州城に入る。

死地哀歎

信長は、もっぱら、新興斬新の家風を作ろうと考えた。何しろ、伝承とか遺風が嫌いである。すべては、新しく創造せぬことには気がすまない。

そもそも、城中で煖衣飽食しているようなことは性に合わない。童の頃からの習慣で、相も変らず——のしのしと城下を歩く。

したがって下情に通じているから、奉行などは、懈怠を許されない。行政の隅々まで信長の目は届く。城主と領民の親睦も、ここでは型破りに親しい。

こんな話がある。

領内のさる河に大蛇がいて、そのために、洪水が出るといふ噂が拡まった。昔のことだ、殊に宗教が分裂状態で、奇怪な靈異現象が無批判的に信じられていた中世のことだから、領民が恐怖した。

信長は——靈異現象なんか頭から信じない、彼にとっては宗教す



ら無用なのである。来世も未来もない。現実があるだけだ。
一般では大蛇のことを、当時は有賀神と言って、その崇りを恐れ
たものである。

な実権者信長に目を瞠て感服し、身を挺して領民の難に赴く領主の
義氣に心を搏れた。
「さあ、大蛇は逃げたから、河の修理に励めや……」

当時、関東のある河には貌は婦女、体軀
は鯉魚、足は鳥の怪物が住んでいると喧伝
されたり、京には倉の中から腰から下が蛇
の婦が（おんな）が住んでいると、まこと
しやかに、グロテスクな絵画が全国にばら
撒かれ、それが真しやかに信じられていた
——迷信のもっとも猖獗した頃である。

信長は噂の河に行き、すっぽりと裸にな
ると、見物の領民共に、

「城主である俺が直接大蛇に見参してやる
大蛇の魔力が強ければ俺は食われるかも知
ん、俺の力が優れば大蛇は逃げ失せるに
違いない、領主と大蛇とどちらが強いか、
そこで見物しておれ」

れと言うなり、さんぶと河底にもぐった、
家臣も領民も、あれよ、あれよと真ッ青に
なって信長の沈んだ河面をみつめていた。
やがて——ぶくぶくと泡が立つと、信長がぼ
っかりと浮び上り、

「大蛇は逃げ失せたらしいぞ」

と云うなり、また水を掻い潜った。その
とき領民達は、大蛇でも抗し得ない、偉大

水から上ると信長は、領民共に防水工事を励ましたということ。こうして人心収攬にかけても、信長は新風を興したのだ。家来共も、常に神速果斯、身を挺して事に処す、という風に厳格に訓練されて行った。

信長は迷信を笑った、宗教を重視しなかった、堅く自らを信じたのである。こうした信長の行き方に、家中も次第に心服するようになった。信長には、不思議な魅力が匂ってきたのである。

信長が、漸時に、自分の性格を中心に新しい家風を創造するうちに、どうしても、本質的にそぐわないものが目立ってきた。舎弟の信行とその一党である。つまり、反信長派が浮いてきたのである。清州攻めのあと——当面の外患がなくなると、反信長派の陰謀がある具体性をもって動きはじめた。信長の心境に、それは悉皆映し出された。

問題の人、織田信行は末盛城にあり、信行派の巨頭、林通勝、林光春の兄弟は那古野城に据えられていた。紛乱の兆は、そのあたりに異様な風雲の動きを見せはじめた。

弘治二年五月二十六日。初夏の風も爽やかに空は晴れていた。

「出かける」

信長はそう言って馬を引かせた。濃姫が

「お供は」

と問うと、

「信時を呼べ」

そう言って早や馬に乗る。信時は信長の四弟で、信長が日頃に可愛がった。直ぐ、信時が馬をもって姿を見せた。

「信時——那古野へ行こう、たまには通勝の顔も見なくなるわ」

信長は事もなげに云う。

「えッ、那古野へ？」

信時も、そして濃姫は、瞬間サツと顔色を変えた。それも道理、お味方、家臣と云わば家臣の林通勝だが……信行様の謀反の噂は久しい、それに近頃は陰悪な空気が、何となしに感じられる。さながら、敵地に単身で乗り込むような危険が肌に迫る——濃姫が、何か云おうとするのへ、

「帰りは夕景じや、行くぞ」

と早や信長は駆け出した、たった一人、信時を連れて。

昼すぎに信長と信時は、那古野の城に着き、林邸に入った。

あまりの突然な信長の来訪に泡を食った林通勝は、のっしのっしと入ってくる信長の姿に圧倒されて、慌てふためきつつ、

「これは、これは、主君には……」

と平伏すると、その頭の上へ、

「通勝——久しぶりじやな、壮健か、馬を駆けたので腹が空いた、めしを頼む……お前の顔が見たくなって、邪魔したぞ」

屈託のない信長の声が流れた。

信長は、何の危惧する風もなく、洒々と、めしを食った。悠然、自らあたりを威圧していたが——さて心の中では。

知っている、林らの陰謀は、或はこの場で暗殺しようとするかも知れない、いや、その予想は殆ど確実だ。そう知って、この場に自らやってきた信長は、馬鹿か狂人か。いや、信長は自分の運命を、生死の関頭で試そうとしているのだ。ここで殺されるなら……それもよい。それだけの男。だが信長は不屈な、絶対な、自信に満ちている。いかなる者の刃も、いかなる者の害心も、この自分を害うこ

とはできない。そんな絶対の金剛不壊の力が、自分のうちに在る。今、死か生かの瀬戸際に、自ら進んで立ちはだかつて、その確かな事実を知ろうとしているのだ。

不屈の自信——信長は破天荒の挙に出たのだが、その底にあるものは、死地に立つ異常な快感だ。死の影に近づく自虐の願望だ、自殺はマゾの極致ではないだろうか。断頭台上に首を伸べて、恐怖と絶望のギリギリの危機をじっと自分で瞞めている奇怪な心理！被虐を願望して死地に人生哀歓の極を味っている信長の切ない生き方が悲風を誘ってなまくらな人の心に吹きつける。

だが、明るい放胆な顔付で、信長がめしを食っているとき、別室では通勝と光春の兄弟が密談していた。

「兄上、信長は自分の方から火の中に飛び込んできた、こんな好機は又とない、斬ろう、斬るのがいけないなら、郎党で囲んで、切腹させよう、兄上、決断しなされ」

光春は、ぎらぎらと逆心の焰を、その眸に燃して興奮して兄の通勝に迫った。通勝は、額に脂汗を、じっとりと滲ませて、顔色を蒼白に変えながら、

「三代相恩の主君を、おめおめと爰にて手に懸討申すこと、天道おそろしきことぞ」

とわなわなと慄えた。

「何んと小心な——これが乱世じや兄上、そんなことを云ってると今に、逆にこちらが殺されるわ、さ、さ、決心あれ」

光春は、必死に促したが、

「いや、儂には出来ぬ」

と通勝は意気地なくうなだれてしまった。

「然らば、俺がやる」

光春が畳を蹴って出て行こうとするのを、通勝はぐつとその袖を握って離さず、

「ならば光春、儂を斬ってから主君を斬れ」

と泣いた。

客間では、信長すでにこの気配を知った。（通勝は気が弱い、だが、光春の奴は許しておけぬ奸人じや）と信長が、そのときふいと感じた。やがて、兄弟が信長の前に挨拶に出たとき、信長は光春の眼の中に、険しい叛逆の心を見てとった。

虎口を脱して——信長は、信時と一緒に、何事もなかったように那古野の城を出た。

「信時、思い切り走れ」

と云うなり、清州へ、黄昏の草原を信長は疾駆した。

やっぱり俺は強い、俺は死なぬ、俺は何者にも害されぬ、天地も動くぞ、この俺の信念で……信長は運命への確信に胸を膨らませた。

畏 責 め

信長を弑すべき絶好のチャンスを逸したことは、すでに衰亡の兆であるのに、迂愚な者には明察の智がないのは致し方がない。

反信長派にとって、追いつめられた焦りが、信長にやがては殺されるという恐怖妄想を生んだ。勝算もなく、烏合的に遂に事を起した。時に弘治二年八月二十四日、信長が那古野城に行った時から三月のちのことだ。

反信長派の軍勢は千七百騎、林通勝、光春、柴田勝家が指揮して

まず名塚の砦を攻めた。ここには佐久間盛重（信時の老臣）が守将となっていた。

受けて起つ、名塚よりの急報に接して、信長は笑いながら、五百の軍を率いて名塚救援に急行した。蟻螂の斧——信長は起つと同時に、反乱軍の後始末を考えていた。不思議と通勝や勝家はさほどに思わぬが、林光春の奴だけは、憎い、憎いと思うと八ツ裂きにしても飽き足りない。くわツと全身に憤怒の血を掻き立てながら、信長は軍を急がせた。

淋雨が連日、小田井川は汎濫していた。はたと進軍の足を阻まれた、遙に対岸には、名塚の砦を望んで叛乱軍が犇めいているが、叛乱軍も河の増水で、信長軍を迎え撃つこともできず、また信長軍も泡を噛んで怒号奔流する川を渡ることすらならず、双方が、川を挟んで対峙した。

咄！ 信長は、さツと激流に馬を入れ

「続け」

と激しく下知した。神速果断は信長軍の独自の戦闘精神だ、一人



の躊躇う者もなく、ザザ、と水煙りをあげて五百騎が一丸となって対岸に駆け上った。

驚いたのは反叛軍だ、まさかと思う矢先に信長が先頭で突ッ込んできた。まさに鬼神に会ったような恐怖に包まれて、それに何と云っても、そこに主君信長をみては怯まざるを得ない。

信長は、長槍を従横にふるって、ばたばたと手当り次第に叛乱軍を仆した。勇戦敢斗、信長軍は滅法に強い、叛乱軍はワツと逃足立つ、その中で追に気の強い林美作（光春のこと）が頑強に手向った。信長の臣黒田半平が光春に挑んだ。半平は不覚に左手を光春に斬って落された、これを見て信長は烈火の如く怒り、自ら光春に向い、呀ッという間に突き伏せて、その首を取った。

「光春の首、信長がとったぞ、次は権六の首じや、権六、どこに居る」

信長の声はとても大きくて、どんな乱軍の中でも関のように響き渡った。その声に柴田権六は思わず首を縮めて一散に逃げた。叛乱軍はここに完敗して総崩れとなつた。信長は、敢て追わず、相変らず笑いながら、光春の首を提げて清州に引揚げた。

翌日——清州城では戦勝祝賀の宴をひらいた。こういうことは派手な信長である。大広間は昼を欺くばかりの明るさで、酒はふんだ



ん、踊れ、舞え、歌えの無礼講である。将士は心ゆくばかりに酔って騒いだ。その宴の酣な時を見計らって信長は、すくと立ち、「皆の者、今宵の肴じや」

と言つて光春の生首を刀の先に突き立てて見せた。信長も酒は豪であつたが、飲めば青くなつた。目が、稍々釣り上って、悽愴な表情に変わった。

光春の生首が、半眼を怨しげに見開いて、はや死臭を漂わせていた。信長は、その死相に喰い込むように眺め入った。——このときの信長の顔がぞっとする程冷たく凄んで、万座がヒソと息を呑んだ。

突然——信長は疳高くカラカラと笑つた。

「この馬鹿者の顔で飲めや……」

ゴロゴロゴロ、光春の生首は将士の酒席の間を転った。信長が抛げたのだ。信長はまだ笑っている。そして満足そうに盃を傾けた。

そしてこんなとき、興ざめた顔を見ると、信長が疳癬を昇らせることを家臣はよく知っている。誰も彼も——ゾツと襟筋に水を浴びたように寒々とした心になりながらも、表面では、さも快よげに光春の生首をみて打ち興じて酒を飲んだ。

信長は、笑いながら、ぎよろりと一座を見廻した。そして、謀反の結果が、みんなの心の底に何を刻みつけたかを確めて、今度は、腹の底から、大声で笑い出した。みんなも、信長の笑声に和して、部屋をゆるがしてどよめいた。

信長が光春の生首で酒宴をひらいた、という情報が

那古野に入ると、叛乱軍側は色を失って戦慄した。惨酷無慚な疍の強い御大将だ、どんな刑罰が加えられるかも知れない。

降伏——助命——林通勝は



「天意を無視した我らが罪よ」
と頭を丸めて墨染の衣を着た。柴田勝家もそれにならつて僧形になった。軽くて切腹、疍の昂ぶり加減では逆礫の、火焙か、それはよいとして、信行様だけは助けたい。智慧を絞つた揚句、その口利きはお袋様の土田御前に頼むこととした。

土田御前は、どちらかと云えば、信行派の人ではあるが、信長にとっても生みの母。かくて土田御前に連れられて、信行、林通勝、柴田勝家が、恐る恐る、清州城に行き、信長の前に出た。

信長は眼前に、殊勝気に恐縮する坊主頭の二人をみてハハハハと特徴のある笑いをぶツ放して

「よいわ、よく似合うぞ、寺でも呉れてやろうか、ハハ以後、慎しめ、今度は堪忍してやるわ」

と上機嫌で、ケロリと恨みを忘れた顔をしたので、三人は感涙に咽んだ。いや、その上に、

「通勝——那古野城主として忠勤をはげめ」

他の者も、罰条なしという寛大さ、あまりのことに叛乱軍は泣いて信長に絶対心服を誓った。

だが——信長は、それで意を安んじたのではなかった。反信長派を内面的に切り崩したのである。林、柴田は前非を悔いた、しかし、信行の面上からは、兄への反感の色は拭うべくもない、それを信長は知っていた。

信長は想う、世に無益の輩は、殺してやるのが唯一の救いだと思じた。光春の如き、叛逆の心のどうしても収めぬ者は、生かして

おいて自ら悶々させるより、首を刎ねてやる方が功德である、弟の信行も、どうしても自分に心服することのできない性をもっている。所詮は抗う力もないのに叛逆を企てるしかない。それも哀れだ殺してやるのが、本人の救いである。

戦国乱世だ、無用有害と言つても、つまりは無力無能、その上、愚劣で不平、そんな人間は抹殺した方がよい、むしろ、基本的人権と云う考え方があろう筈がない。犬猫より劣る人間の価値など、およそ認めない、信長は、人間を殺すことと野犬狩りの差を認めない。殺戮即慈悲——信長はそう信じて惑わない、とは言え、その考え方の根底には、サディズムが匂っている。生首で飲む酒の味のうまいのも、その一つ。

それと、鍰殺しの快楽——信長は、畏をしかけて、一個の生命を滅す遊びの、やめ難い誘惑を感じはじめていた。彦五郎を殺したのもそれだ。その飽くのない貪婪が、信行の上に襲いかかるうとしている。

信長は、叛乱軍に寛大であったが、それは捕えたねずみに、よちよちと独り歩きを許す猫の嗜虐である。爪はすでに磨れている。ねずみが穴に逃げ込もうとする瞬間、恐らく「ああ、助かった」と思わせておいて、グサリと爪を搏ち込んで殺すサディズム——信長は猫のように、さあらめ眼付きで、その実は鋭く睨みつけているのだった。

舎弟の信行は、その本心を信長に見破られた通り、表面は謹慎の状であつたが——ここ一年間叛逆の心を捨て切れず、再び信長を討伐する謀略をすすめた。これを知つた柴田勝家は、すでに信長の腹心となつていたので、信行にその非を諫めたが、却って、信行から

裏切りと罵られた。

柴田勝家は、信行の醜心望み難しとみきりをつけて信長にそつと報じた。信長は「そうか」と言つて……それっきり、別にどうとも意見を吐かなかった。

秋風が立つ頃、妙な噂が飛んだ。信長重病ということであつた。そう言えば、いつも、城下を見巡る信長の姿をみかけなかった。城下の町人百姓の代表が、お城に御見舞を述べに出かけた。信長の病氣は「ろうがい」だと言うことで、喀血していることも伝わった。霜の降りる十一月のある日の朝まだき、慌しく一騎、ここ末盛城に入った。騎馬の士は信長の家臣で村井勝重、土田御前に会いたいと言上した。何事か……と土田御前が出てみると、勝重は憂いの色を罩めて、

「主君信長公の病は益々悪く、とても快復は難しい御容態になりました。本日、主君には、四隣の豪族が、いよいよ尾張に侵略する形勢になれば、到底病氣の身では防ぎ難いと仰せあり、この際、織田一族を守るためにはあと目を信行殿に譲りたき旨、直ちにお伝え申せとのことによりて、御袋様御同道にて、早々にお目にかかりたいとの御事……」

と、勝重は声を出して嗚咽してしまった。

「信長殿には性来の勝氣にも似ず……それ程にお弱りか……」

疑うこともなく土田御前は暗然とした面持ちになった——しかし本心は、意外なことに心が躍つた。時節到来である、勞せずして政權が信行の手中に帰す、何んという吉報を、これも日頃の浄土教門の仏恩かと思わず念仏を唱えた。

弘治三年十一月二日、土田御前と織田信行は信長の需めで清州城

◆本誌とKK通信の旧号在庫◆

に向った。宿望の織田家の跡目を信長より譲られるのだと思うと、信行の心は浮々としていた。

信行は、清州城に着くと、家臣達の平伏する中を、お袋様を先にして奥に進んで一間に入った。

「まず御病床の御見舞いを……」

と家臣に促されて、信行は病室に向った。膝行して病室の取合の障子をひらく、信行はツと部屋の中に入った。その瞬間、ハツとし

休刊又休刊で齒の抜けたような雑誌は集めていて嫌になります。奇譚クラブは一回も休刊していませんから、皆様の本箱へきれいに揃います。欠号のない様お揃え下さい。

本誌のバックナンバーはお買い洩れの方々の為に、左記の通り在庫いたしておりますから、直接発行所宛御申込み下さい。尚、旧号の総目次は前号並に昨年十月特大号誌上に四頁に亘って掲載してあります。文献的価値を誇る本誌は、一回の休刊もなく、毎月確実に発行されておりますから、是非お揃え下さるよう御申込みをお待ちいたしております。

○奇譚クラブ○

昭和二十七年、十月号、十一月号

○KK通信○

（一部送共九十円）昭和二十八年新年号より昭和二十九年九月号まで、各月号共在庫（一部送共百円）昭和二十九年十月特大号より昭和三十年新年特大号まで、（一部送共百四十円）六冊分以上まとめて御申込みの方へは景品贈呈致します。

第十一号より第二十三号まで各号在庫

（一部送共二十円、六回分送共百円）

◎御申込み次第、厳重包装の上、急送申し上げます。

て眼を睜った。あッと名状のできない混乱が起った。文机の前に、じッところらを睨んで座っている信長をみたのだ。

病人でない信長！ 信行は、くたくたとその場に膝の折れるような衝撃に狼狽した。慌てて身を翻えして廊下に走り出た。

そこには、上意討の池田信輝が白刃を掲げて控えていた。

「無念！ 謀られたか」

信行はそう叫んで、それでもばたばたと廊下を走りながら、ざくツと肩先に刃を受けて、ととと前にのめって倒れた。

そこへ、信長が出てきた。ぴく、ぴくと、最後の苦痛に動く信行をみて冷笑を浮べたがその笑いの影も消えて、ニル・アドミラリな――無言の状で、庭の梢を見ていた。

殺戮即慈悲。――畏にかけて殺す悦び。骨肉の血を浴びて信長は、眉毛一つ動かさない。信長は高く澄んだ空の色をみた。雁の群が翔んだ。

天才児――信長は天空の雲を抜いて立っている自分の巨大な影をみた。信行の死を知った、土田御前の涙まじりの読経の音が、そのとき颯々と奥の方から悲愁の漣となって流れ出た。

（此の項終り）

×

×

×

妖 奇 実 録

裸にされた美人通訳

日本スポーツ・マッサージ協会幹事長 山 本 馨

日本陸上競技連盟の招待で、十月五日午後十時十五分、PAA機で羽田に到着したダンス団長以下十七名の西独陸上チーム一行は、六日午後五時から芝高輪のプリンス・ホテルで行われた、堤衆議院議長のレセプション、パーティに臨んだ、川崎代議士の司会で、堤議長から西独選手に記念人形の贈呈があり、引続き浅野陸連理事長が歓迎の辞を述べた。これに対しダンス団長は、

「スポーツの交歓、アスリートだけの親善でなく、日独両国民の心からなる親善のきずなとなる様に……」

と挨拶をした、ドイツ陸連名誉賞を堤議長に贈り、小坂芳相の発声で西独チームの万歳を三唱、引続きロビーで秩父宮妃勢津子姫殿下や、日本スポーツ・マッサージ師協会幹事長たる私と和やかに歓談のひとときを過ぎた。

其の後、一行の内、一昨年来日したシヤデー選手のひきとった16号室を訪れた私は、九日の東京第一戦を目前に控えて、旅の疲れを抜く為と、僅か三日間でコンディションを調整する為に、スポーツ・マッサージを彼に試みた。

次の施術はフットテラー、それからガイス

入 場 式

マイクの左より、ウォルフガング・ガリンスキー氏、秩父宮妃勢津子姫殿下、陸連コーチ菅沼俊哉氏、独運連会長マックス・ダンス氏、白服のNSM幹事長の私。



ターと、世界一流揃いの豪快な西独トラック陣の整備員として、私は大いに責任を感じたのだ。ベッドに横たわる全裸の白い筋肉美を直接に触れている私の指先は、心持震え気味だった。ドイツ選手十四名は八日の午後八時頃、全員の按摩が終り神経と筋肉に試合前の適度な刺激を与えられ、サビを落したのである。

ウォルフガング・ガリンスキーの通訳をしているインテリ日本女性が木村容子である。



其の結果、ともかく、
「十分ではないが、明日の試合は結構やれる
確信を得た」

と、美人通訳木村容子を通じて、コーチ・

ウイシユマン氏が私に語った。

日独對抗陸上東京大会第一日は、九
日午後一時から神宮競技場で挙行政され
た。定刻、時計台側からドイツ選手が
入場を開始し、トラックを半周してス
タンド前に整列、両国々旗が国歌の吹
奏につれて掲揚され、平沼陸連会長と
ダント団長の挨拶があり、ドイツ首将
シャードと日本主将沢田選手が固い握
手を交してベナントを交換した。

次いで一時半から四百米を皮切りに
百十障害、百米、千五百米、四百リレ
ー、又フイールドに於いては走高跳、
円盤投、走幅跳の八種目に熱戦が展開
されたのである。

一方、西独選手控室のベッドには次
々と出場選手が横たわり、惜し気もな
く素裸になって私の施すスポーツ・マ
ッサージを受けた。ドイツ選手控室管
理係としてアルバイトに來ている、駒
場高校生佐野美代子は、毛深い白い巨
体が横たわっているベッドに近寄り、滑石末
が利かなくて、使い慣れないローションを用
いて大童になっている私を見兼ねたらしく、
羞恥に頬を火照らせながらも油を擦り込む

事を手伝ってくれた。

美貌の女学生の白魚を連想させる様な柔か
い指先が、異国のエキゾチックな臭を放つ雄
大な筋塊にまさぐる様な調子でサロメチール
を塗り込むと、奇妙な現象が惹起されたので
ある。彼女が手伝い始めてからと云う物は、
私の施術が未完了の内に、皆申し合した様に
マッサージの中絶を、私に申し出るのであ
った。そして、珍妙極まる屁っぴり腰で控室を
出てトラックに出陣して行くのだ。

処で、此の清純な乙女の飛入り素人マッ
サーシは、正に水素爆弾以上の効果をもたらし
た。

先ず、ガイスターが四百に48秒3と云う好
記録で意気揚々と帰ってくるなり、

「ダンケン」

と叫んで、佐野美代子に感謝の愁波を送
った。続く百米でもフュッテラーが10秒3を出
して日本国際新記録タイと云う好調振り。百
十ハードルもシュタイネスの14秒6が一着、
千五百米も、リユーグの3分59秒2で一位。
皆、子供の様にはしやぎ廻って帰ってくるで
はないか！

フュッテラーは、

「昨日グラランドを見た時にはとても軟弱で、

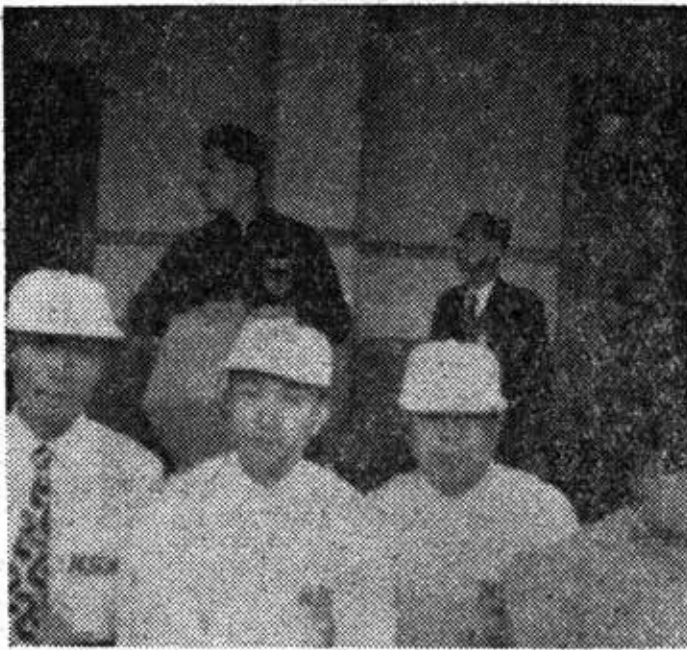
まさか、こんな記録が出るとは夢にも思わなかった」

と、不思議そうに美しい通訳の顔を眺めながら語っていた。

東京大会第二日は、翌十日午後一時から同処で、四百障害、二百、八百、五千、千六百リレー、棒高跳、砲丸投、三段跳、やり投の

西独選手控室にて

NSM幹事長山本馨、NSM理事竹井清仁氏、NSM顧問の安斎敏氏、オーバードレス選手（記念人形の箱を持って）平沼亮三陸連会長。



九種目が行われた。前日、49対35と大きくリードした独チームは、すっかり調子づき、此の日も各種目に自己最高記録を狙って縦横無尽の活躍を見せた。

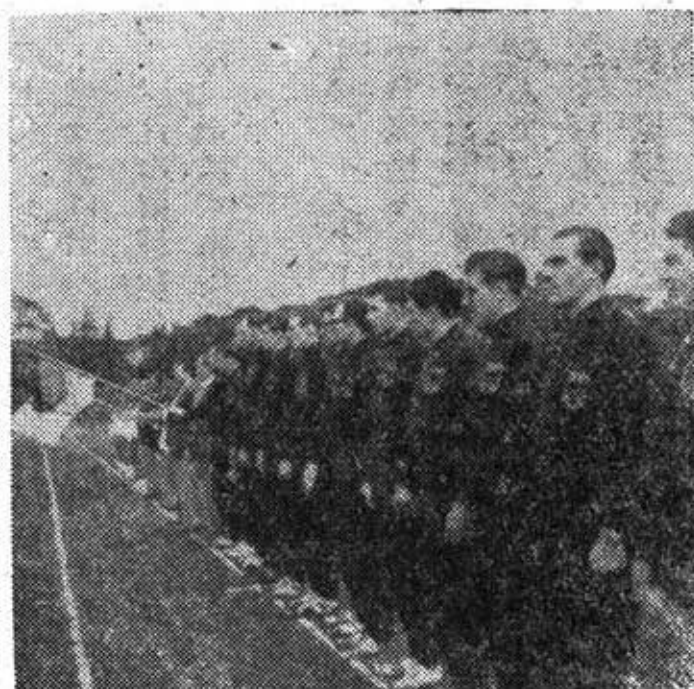
昨日、見様見真似で覚えたスポーツ・マッサージを、生れた儘の裸姿に施した佐野美代子は、無邪気な微笑を彼等に向けながら、出場選手を激励するのであった。

最初の四百米ハードルでは、第六ハードルあたりから興奮状態にあるボナーやウルツハイマーが抜け出し、其の儘日本選手との差を大きく拡げて快勝した。続く二百米では前日10秒3の大記録を生んだ「白い電光」の異名を持つフュツテラーが依然として絶倫振りを示し、スタートから断然他を離し、21秒1の超記録でテープを切った。我が清藤選手は後半ガイスターに迫ったが及ばず、本年二度目の22秒1をマークした。砲丸投に於いても、豪快無比のオエーグが14米35を抛り、九種目中、二百、八百、五千、やり投の四種目に、日本国際新記録と、二つの日本新記録を樹立空前絶後の大競技会となったのである。

即ち、八百ではリユークが1分49秒7で日本国際新記録を出し、やり投のヴィルは見事なフォームを見せて77米12を快投し、同様の

入場式

フュツテラー、ガイスター、ウルツハイマー、ドーロー、シユタイネス、シャード、ラウレンツ、ボナー、ラウフアー、リユークハール。



記録を獲得した。五千では主将のシャードが断然強く14分26秒フラットと云う日本国際新記録を確立したのである。

斯くて西独側は百四点、日本側七十五点と勝敗を決し、豪華な好記録続出の内に大会の幕は閉じられたのであった。

私達の待機する控室に続々帰った来たドイツ

ツ青年達は、ホツと肩の荷を下したらしく、いさゝか、疲労の色を浮べて紺の背広に着替えた。

彫りの深い色白の顔立ちに、不敵なドイツ魂を、ほのめかせる様な表情を示して「ダンケン」と云いながら私達に握手を求めて来た。

私でさえ、一世の英雄フュッテナ手で力一杯握られた痛さに、思わめたのであるから、可憐な美少女佐野美代子や八頭身美人木村通訳女史等の犠牲の程や、想像に余りあった。此の微笑ましい光景に臨んだ私は、国境を超越した何か偉大な友愛を意識して何時の間にか眼頭を熱くしていた。

扱其の夜、品川沖を一望に収める高台に在る元竹田宮邸が、善美を凝らした国際観光ホテルの中でも、最も壮重華麗の粹を集めた饗宴場となつて奇蹟的大勝の祝宴が盛大に挙行された。やがてアルコールが高位高官に在る名士や貴婦人を陳腐な雄と雌に改変し、酒肴尽きて杯盤狼籍たる頃には、すっかり無礼講と化して

日本スポーツ・マッサージ師協会幹事長の私。



しまった。世界一流揃いの西独選手も、酔えばやはり敗戦国の残骸を取り片附けている四等国民、服装も何処となく締りが無い。

そんな雰囲気になく、気易さを覚えた時、赤い顔になったペア選手が私に、

「何か奇抜な穩し芸を見せて頂きたい」

と高級通訳本村嬢を通じて申し出た。斯く云う私も酔眼朦朧としていたらしく、急にクローズ・アップされた通訳の明眸を見ている

内に、得意の催眠術で此の麗人を一つ、丸裸にさせて、インテリ振ったツンとすました理智的な美貌を嘲笑してやろうと、怪しからぬ事を思いついた訳であった。

私がそんな大胆を極めた奇計を企てたとも知らず、一行は私が躊躇しているのだと誤解して一齊に拍手を送りながらも、あんな青二才に何が出来ものか、と云う侮蔑的な冷笑を投げかけて来た。其処で私の腹は愈々公開

私も大和魂を有する日本の山本だ、何でドイツ人に劣等感を持つてよいものか！ 今に彼等の度肝を抜いてやるから……酔った勢いが手伝って、詰らぬ所に愛国心めいた感情を抱いたのである。

「では、不肖の子山本が、動物磁気法なる物を、お目に掛けましょう」

と売言葉に買言葉、大変な役を引受けてしまったのだ。

木村容子がドイツ語で復唱すると、彼等は口々に「メスメリズム」と訝しいふ氣に

西独選手室管理係

中央一番上、駒場高校生佐野美代子。



呟いた。

私は陸連の関係者の一人に、饗宴場を螢光灯にスイッチを切替えて貰い、静かな音楽を流して欲しい旨を伝えた。被術者の物色を誤ると、私は赤恥を掻かねばならないのだ。女と子供を除いて初回の施術に成功する事は、針の穴を駱駝が通り抜ける程至難の業なのである、同じ婦人でも神経質な瘡せ型は術にかゝりにくいのだ。冷いインテリ女史の木村容子に白羽の矢を向けた私は、非常な心理的動揺を覚えながらも精神を統一して、神秘的な

口調で暗示を盡示したのである。

「動物磁気法なる不可思議極まる術と云うのは他ではありません。唯だ、牝鶏や蛙等の動物を上向にして、両足を動かぬ様に押え、其の眼瞼を静かに何遍もさすってやると、催眠状態に導入する事を云うのです。人間も此等の動物と同様に属するものか、どうか、一つ実験してお目にかきましょう。木村さん。一寸、此のソファの上に仰向けになって臥てみて下さい」

此の意外な言葉を耳にした容子女史は、澄んだ眸を驚きに曇らせながら無言の儘肯いてソファに仰臥した。

此の動物催眠法は別名理学的磁気法とも謂われ、被術者をして大脳皮質の血液を少なくして後、眼球を疲労せしめ、同時に巧妙な音響に依って恍惚とさせる方法なのである。

私は八頭身美人の頭部の方に行き、右手を彼女の鳩尾の上に置き、左手の拇指と示指の先端で両眼瞼を外側から内側へと軽く摩擦し始めた。そして、時々口を細くして彼女の鼻の孔を吹いたり、額を吹いたりしてみた、すると、彼女は案外簡単に睡遊状態に陥ってしまった。携帯用ラヂオがフランスのシャンソンを奏で始めた。私は彼女に幻覚を生ぜ

しめる単純な暗示を先ず与え、それから徐ろに複雑な暗示を送る様に注意を払った。

「貴女は今、函館から洞爺丸に乗船したのです。右を向いても左を向いても水々……水。透き通る様なアイ色！ 船のへりに泡立つ白い波、何だか吸い込まれて行く様な気持です。船は黒い煙を吐きながら走っています。アッ！ カモメ、本当に綺麗な色！ 羽の先がほんのチョッピリ黒いだけです。今迄、音もなく波も立たない水面を走っていた船が揺れて来ました。貴女の乗っている二等船室には、沢山、人が居ますね。甲板に出てみましょう」

私の導いた幻覚が、どの程度鮮明であるか試そうと思ったので、少し暗示を休止した。彼女は目を閉じた儘ソファから離れ、身体を大きく揺りながら甲板へ出る様な恰好を示し始めた。

「気持良さそうに飛んでるカモメは何羽位いますか？」

彼女は瞳を凝らす様な動作で、操り人形の様
様に首を振って数え始めた。
「一二三四五……五羽です。ア！ 沖の方に
もう一羽居ましたわ」

美しいメゾ・ソプラノでうっとり囁く。

私は彼女が相当深い睡遊現象を惹起しているものと判断したので、低音を利かせた口調で再び暗示を投げ与えた。

「さあ！ 大変だ。台風15号がやって来ましたよ。甲板に居ては危い。早く船室へ戻って救命具をつけないといけない」

彼女は、途端にうろたえ始めて千鳥足となる。

「一刻も早く衣服を脱ぎ捨て、救命具を付けねば、あたら貴い生命を波に攫れてしまう」
被術者はヒステリカルな動作で、無雑作にブラウスを投げ棄て、忙しそうにスカートを脱ぎ、続いてヒールとストッキングを落し始めた。憑かれた様に情熱的な演技を行っている肉感美の悩ましいストリップは、見る人をして春の水のぬらめきを感じしめた。

私が次の暗示を考えている間に、彼女はブラジャーやコルセット迄、取りはずしてしまっただ。彼女は夢中であるが、私の方が青くなってしまう。ドイツ人も固唾を呑んで見守っている。私は幻覚移動を継続せねばならない。

「洞爺丸は遂に沈没した。哀れにも貴女は水死してしまっただ」

全裸の美女はグッタリと伏臥した。

「美貌の舞姫アンドロメダよ。甦れ。我はキリストの使者也、汝は世界至上の踊りの名手である。妙なる楽の音につれて踊れや舞ってみよ」

私は人格変換の極秘を用いた。流れるメロディに乗って、一流の舞踊家と見まがうばかり、柔軟に、そして芸術的に洋舞を演じた。玉を欺く程見事な曲線美が次々に展開されて行くのだ。私は予期しなかった自由の女神をまざまざと露出されて、人的自然の極美の余りの素晴らしさに、暫し術を解くのも忘れて呆然と突立っていたのであった。

(註) 筆者から送られた写真の中、プリンスホテルの饗宴場にて、美貌の舞姫アンドロメダに人格変換したドイツ語通訳木村容子の八頭身曲線美——という説明で全裸の女性の舞踊ポーズのものがありませんが、公開を憚る性質のものでありましたので、残念ながら削除しましたことをお断りしておきます。

(編集部)

筆者紹介

南寿小学校、大阪市立中学校卒業時、優等賞以上総代となる(昭和十七年及二十二年) 林歌謡学院修了時、優等賞授与さる。

(昭和二十一年三月)

哲命壮島岡流催眠術、読心透視術免許皆伝

(昭和二十二年)

学生フライ級ボクシング・チャンピオン。

(昭和二十三年)

元国際歌手、牧嗣人氏高弟として歌劇「ノートルドパリ」に出演し、寺院の怪物に扮しエスメラルダ(轟夕起子)を掠奪、ピエール(小牧バレー団藤田繁)と大格闘を好演。

(昭和二十三年秋)

関西学院大学経済学部卒業当時、新希望社学生社長に就任。

(昭和二十四年)

浅草盆踊仮装大会に於いて女装第一位入選授賞。

(昭和二十八年八月)

日本将棋連監初段位授与。

(同年十月)

文化放送素人物真似コンクールに於て、岡晴夫の声帯模写にて当選。

(同年十一月)

日本社交舞踏教師協会正会員(同年四月二十九日準会員より昇格す)

東京高等鍼灸按摩学校卒業時、東京都按摩師試験五百余名中一位合格(二十九年四月)

大阪市立中学同窓生富永利三郎(明大レスリング首将、ヘルシンキ大会第二位、銀メダル)と共に、当時私は校内初段黒帯であつた。同校後輩、北野選手(レスリング、ヘルシンキ大会優勝、金メダル)

現在日本スポーツマッサージ師協会(NSM)幹事長。

非小説

性

液

(十三)

伊藤晴雨

梅田駅に着くと劇場側からの出迎えがあつて、一座の人達は自動車に乗せられた。友江と石原は懐し気に目送する豊吉に別れて車上の人となったが気のせいか豊吉は石原を睨む様に見送っていた。友江は豊吉の姿に一掬の涙を落さざるを得なかった。

梅田駅から難波駅へと運ばれた一行の人々は難波から又、南海線に乗って聖天坂へ下りた。大阪郊外であつた天下茶屋に一行の人々の為に借りた合宿は一軒の貸別荘で、村田先生を始め一座の為に用意してあつた家であつた。

た。

村田の荷物は届いて居て、番頭の吉公が早手廻しに室内の調度を整えて置いたので、旅とは思えぬ気分になって垣田も柳川先生も一風呂浴びて、又ビールが卓上に運ばれた。

「へエ、先生郵便でございます」

一通の封書を吉公が出すのを披いた村田は慌て、

「垣田君、大変だ、これを見給え」

村田の為に座をコワされた口惜しさに五九郎は、村田に貸した金の期限がトックに切れ

ているのを大驚的に復讐すべく、久世勝治弁護士を以て財産差押えの通告状であつた。芝居の借金に証書は入れないが、伊井一座へ返す為の金で証書になって居たのだ。危機は目前に迫っている。

「己れの名前の入っている掛物も額も行李も皆シテ隠して仕舞え、垣田君も手伝ってくれ給え」

垣田も春葉先生も大掃除が始つた様に総立ちになって額を外し、掛物を取り出したので空家の様になって仕舞つた。

「あゝ草臥れた、吉公茶を入れる。あの己れが上海から持つて来た朱泥の急須があつたらう、あれを出せ」

「ありませんよ」

垣田は又ワッハッハの笑いを繰返し乍ら「此の家はよく物の無くなる内だナア」

殺すのも嘘、死ぬのも嘘、泣くのも嘘、嘘をつくのが名優であるとすれば、村田正雄という人位、罪のない嘘をつく人は多い。今日も聖天坂の駅を下りると二人に向つて

「あの遠くの山に松が見えるだろう。あすこの処迄の地面を此間買おうと思つたら喜多村に買われちゃつて惜しい事をした」

と云つたのに物の一時間と経たないのに執

達吏に見舞われ掛ったのだからいゝ気なもので朱泥の急須もノッケから有りッこ無し、吉公の捜さない方が当然である。

「己れの金パイプがなくなった、誰か盗んだ奴があるに相違無い、下廻りを調べて見ろ」

又例の病気が始ま

ったなとは思ったが真逆と思って新加入の下廻り連の持ち物を調べたり、シャツや股引迄脱がして念入りに調べたが誰も盗んだ形跡はない。「純金のパイプだ、二千円の金のパイプだ」

村田は純金々々と繰り返して居ると、灰振いの上にクチャクチャに曲った錫のパイプを乗せたのを持って女中が上って来た。

「これじゃあ、ありませんか旦那、先生

のパイプは」

垣田はこのパイプを二本の指で摘み上げて「オイ村田君、これが金パイプかい、二千円の金パイプはこれかい」

村田は其パイプを取るより早く懐紙を出し

て包んでケロリとして居た。「二千円の金パイプ、二千円の金パイプ」という声が笑い声に交って階下にドッと起った。

春葉先生の工夫に成る奇抜な町廻りは五台の自動車に分乗した仮装美人の縛られている

のが道頓堀一帯の衆目を引いて、外務省から其筋への内達が利いたのか「人肉の市」の評判は素晴らしく毎日満員で興行主は垣田と柳川先生を宗右エ門町の大野屋に宿割をさせた。

第一景、四馬路の深夜は自動車の実物が使えないので上海の公園に変更された其他にも役者の都合で前回通りに出来ないで稽古を仕直す為にデンデン虫（現大阪歌舞伎座）の南隣の「東一」という寿司屋の二階を借



りて朝十時から稽古にかゝった時、連れて来た一座の事務員の目徳という男が大声を出して

「エライこっちゃ、エライこっちゃ、大江戸を破りよったりグラシの人形の腰巻を盗みよった奴があるのや」

「大江戸の絵をナンデ破りよったんやろ、どないしたんや」

仕切場を預る山上さんは驚いた風で立ち上った。

「今まで千日前でわても目徳といわれたら、大抵のチボの顔をば知って居るサカイ、ワテの顔を見れば逃げよりまんがナ、昨夜だすがな、グラシの前に立って居る若い男がおましたんやがナ、大江戸の前に立ってナ永い事にませんのやぜ。ナンボでも立って見て居んのかで、コリヤ女が裸になつて居るのを見て居るのやと思うて居ましたンやが、マサカあの看板の絵破りよるとは思わんで妙な奴ちやとは思ひとりましたンが、今朝になるとあの女の腰の処を切り取って行きよったのと、ソレから又グラシに飾った人形の女の腰巻迄盗んで行きよりましたンや、人形はちやんと罫いをして置きましたんやがナ、エライ事をやりよったで、警察へ届けて来ましたんや、

エラ遅なつてすんません」

「人形の腰巻なんか盗んで、何にするんだらう」

「変態性慾者の一種に違いない、ねえ垣田君」

「馬鹿な奴もあるもんじやね、ワアッハッハッハッ」

「此千日前に女の腰巻ばかり盗みよる男がおります、多分その男やろうちうので刑事はん捕まえに行かはったそうどす」

朝日座の楽屋に吊してある女形の長襦袢を長い継ぎ竿をして盗んだり、芝居裏の一現屋の女中の腰巻が無くなつたりするのが近來の流行であるといつて目徳は役者達に新しい話題を提供した。

（人形の腰巻盗まる）という雑報が大毎の三面を賑わした日に、友江の部屋へ豊吉が悄然と這入つて来た。一着のマントも着ず、汚れた擬い大島の袖口から綿の見える奴を着て紺足袋の先から爪がのぞいている。

「オヤどうしたの、あれから、山長さんここへ行かなかつたの」

「駄目だったよ、昔は友達でも今は他人だ、開盛座に居た頃はお互に二銭五厘の弁当が食えなかつた事もあり、バクチの元手を五十銭

貸してやった事もあったが、昔の事をいつたつて今は通らないんだ。芸妓の情婦はダフンにある、給金は云いなり放題にとれる様な役者になると昔を知っている人間には逢いたくないのが人情だろう、それが世の中だろう。芝居道の薄情を今更コボシた処で始まらないんだ、役者というものは、そうしたもんなんだと悟ると、私は急に東京が恋しくなつたんだ、着たきり雀のマントを売って宿屋に払つた残り君に汽車で貰つた残りが二円余りある。名古屋迄行けば又、何とかなるだろうから………君もからだを大事にしてくれ給え、では左様なら、石原さんという人にもよろしくいつてね」

形容の出来ない淋しさ、当にして居た一座から入座を断られて乏しい旅費で東京へ引返した処で時代に遅れたトウの立つた二枚目を使つてくれる処があるだろうか。木戸御一名金十銭の寄席廻りに転落するか、それとも活動写真の仕出しになるより生きる道は無いのだ、立廻りを売り物にして居た役者が古くなつては使い道は無いと豊吉は自問自答して友江に別れて劇場を出てどこをどう歩いたのか夢中で戎橋の上から川の中を見て居た。

「君はもしや梅堂君じゃあないかな、篠山だ

よ、忘れたかね」

「あゝ暫くでした、今どうして」

「大阪松竹の営業部長になつてゐるよ、柳川君が来て居るそうだからこれから一寸遇いに行こうと思つて出て来たのさ、こゝで君に遇おうとは意外だった、そうしてどこへか出て居るのかね」

「東京へ帰る所なんですが、先生、私を使つてくれる所はありませんかね」

「ソナナラ映画に出たまえ、僕は今松竹本社で京都撮映所の営業部長になつて居る。君の一人位なんとかなるよ、折角来た大阪だ、関西も住み慣れると面白い所だよ」

「先生願いますよ、是非願いますよ、端役でも何でも不足は云いませんから、僕の身体は先生にまかせますよ」

「では此名刺を持つて此先の拆屋という宿屋へ行つて居給え、新派の連中の泊る家だ」

一浮一沈、離合集散は芝居道の常である、旧知の篠山吟葉に救われて、豊吉は映画俳優となる運命になつて道頓堀の水に近い宿屋の一室に疲れた身体を横たえた。雑用の心配がなくなると急に眠くなつて来て時間外れの膳に向つて腹一杯食つた。酒をといゝたいが気が引けて居て云いだせなかつた。何時間眠つたか、眼が覚めて見ると枕元に友江が坐つて居る。

「あんたあんまりよく眠つて居たから起こさなかつたワ、可哀想だと思つてね、篠山先生から聞いたのよ、京都の撮映所へ行くんだつてね、篠山先生あたしにもどうだつていうの……あんた、妻と一緒にいかない？」

「君が行くんなら喜んで一緒に行くがね、あの人に悪かあない？」

「誰さ、あの人ッて？」

「石原さんにさ」

「あらいやだ、何でも無いのよ、あの人さ」

「そんならいゝけれど」

「お互に年だわね、妾だつていつ迄若くち

やいられないし、もう詰袖を着る様になり掛つて居る様になつちまつたんだ。娘役もソロ出来なくなつて来たし、寄席廻りも気が利がないから此辺で映画へ行つた方が安心だと思ふのさ、山長だつて先は長くないだろうと皆んなが云つて居るんだよ、大阪の興行師は飽きっぽいからね」

「見物の方が飽きっぽい相だよ、他人の事はどうでもいいやね、お互に昔馴染だね、馴れない土地で力になつたりなられたり仕様じやあないか」

二人の手は堅く堅く結ばれて居た。(完)

【読者通信】

毎号興味深く拝見して居ります。早速昨ら十二月号に於いての私感を述べてみたいと思ひます。失礼の言はお許し下さい。先ず表紙から云うと今月は仲々良いと思ひますがもう少しアツサリしたものゝ方が良いと思ひます。フォトセクションはもっとも苦心を払われた事と思ひますが、全体にもう少し鮮明に印刷して頂きたいものです。記事の方

では「繩のプレイへの誘導」を知らぬ方のために。2、色「浣腸マニヤの手記」「女人々のアブノーマル・ストーリー」は一応出尽した感がありま白く何度も読みかえしましたが、「夜光島」「栄吉の半生」はの記事がなかつたのではないぬるま湯に入つて居る様で残念です。「残酷なる女性達」「性液」「マゾヒストの手帖」「きものシリーズ」等の連載新発展を望みます。3、ニュース・ストーリー等の生々しい事件を脚色して、現代の息吹きを伝えて下さる御計画を願ひします。(T・R生)

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第八十三 空想科学小説についての対話

M……マゾヒズム心理研究中の大学生

N……私

M——「宇宙戦争」は御覧になりましたか？ この前非常に期待しているとおっしゃってましたが……

N——見たけど、失望したね。映画評はベタ讚めだったが、どうかと思うな。原作の持つてゐる高度の文明批評が完全に抹殺されて、お伽噺になつてゐる。

M——火星人を蛸見たいに想像するのは、この小説でH・G・ウェルズが云い出したことだと聞いていますが……

N——そう、それだってちゃんとした生物学的推理があつてのことだがね。それからこの小説をラジオドラマにして放送したら、本当だと思われて全米に大騒動が起つたことがある。レイトン女史の「アスピリン・エイジ」に出てるよ。とにかく科学小説の古典として

曰く附きのものだ。

M——何を期待しておられたのです？ 勿論あの方のことでしょう？

N——原作には——あれは原名 The War of the Worlds で「宇宙戦争」というより「星と星との戦争」と訳すのが本当だろうがね——非常にマゾヒスティックな空想があるんだ。それが映画の場面になるかと思つてたんだがね……全然あて外れだった。

M——僕は原作を読まず、映画見ただけなんです、一体どんな空想です？

N——映画の火星人は無目的な破壊を行うばかりだろう。原作ではそうじゃない。火星人は吸血動物で、人間の血を吸うんだ。動脈から身体中の血を吸われて人間は死んでしまふ。火星人には人間は、丁度我々に牛や豚が大切なように、食糧として大切なんだ。そこでその目的で人間をつかまえて檻に入れておく。この事実を見聞した作中人物達が人類の未来を幻想するんだ。人類の大多数は家畜として火星人の檻の中で生活するようになるだろう。そして餌さえ充分

に貰えれば、そんな生活に満足するように墮落してしまふだろう。檻の中でも、恋愛したり、嫉妬したり、徒党を組んだり、裏切ったりの人間の生活があり、人々はそれを重大事として論争するのだろう。彼等のあるものは、仲間の一人が火星人の食料として檻から引き出されるのを、神の思召しによる天国行きとして有難がるような教義を考え出し、家畜が飼主に反抗する気を起さぬよう牙を抜くだろう。人類の一部は囚えられずに野獣となり、都市の廃墟の下水道にでも潜んで、丁度鼠が人間の文明の中で生きるように、火星人の世界に生き続けるかも知れない。しかし我々が鼠退治をするように、火星人も人間狩りをするだろう。そして犬が人間に仕込まれて狼を狩り出すことを憶えたように、家畜になった人類は、火星人に仕込まれて、昔の仲間たるこの野獣の人類達を隠れ家から追い出し狩り立てるようになるのだろう……正確に記憶してるわけじゃないが、まあこんな未来図が描かれるのだ。火星人对する人類の隷属、話してるだけでも僕は昂奮してくるね。

M——成程奇怪な空想だと思えますが、それがやはりマゾヒズムなのですか？ マゾヒズムとは異性による凌辱であるという通念から見ると、肝心の異性が抜けてるじゃありませんか。醜怪な火星人を加虐者としてもマゾヒズムと云えるのでしょうか？

N——もっともな質問だ。じゃ少し説明しよう。本来マゾヒズムが異性による凌辱を目的とすることは君のいうとおりさ。然しすべてマゾヒズムは観念的マゾヒズムに帰着するというのが僕の持論だ。つまり被虐の実行も、その想像も、同じ性質の昂奮しか与えない。純粹の苦痛愛好は別だがね。だからマゾヒズムの本質は観念における自己虐待にある。

M——よくお聞きしたことです。そこまではいいです。

N——この辺の詳細はいずれ奇クにでも書くとして、観念における自己虐待とは、結局隷属的状況下に自己を置く空想ということになる。これもいいね。

M——ええ。

N——その場合、多く取られる方法は自分の地位を下げることだ。下男、奴隷になるのだね。然しこの段階に止まる人が余りに多過ぎる。近頃マゾヒズム小説が段々盛になって来たのは御同慶に堪えないが、大抵は主人公個人の奴隷的被虐状態の描写に止まっている。僕は大きいに不満がある。もっと奔放に空想を天翔らせて貰いたい。マゾヒストはロマンチストであれ！ といふたい。

M——というと、どんなことなんです？

N——空想の方向としては下降と上昇の二つにあるといえる。一つは下へ下へといく。つまり、人間の尊厳を捨てて、犬や馬になるのさ、人間に隷属する動物になったと想定することによって、隷属による自虐を満足させるわけだ。

M——これは時々ありますね。天泥盛栄氏の「被虐性愛者の手記」なんかそうでした。

N——もう一つは上へ上へといく方向だ。外へ外へといった方が良かな。この場合には我々は人間の尊厳を放棄する必要はない、しかも隷属による自虐は充分満足される。そういう方法があるんだ。

M——ちよっとよく分りませんが……

N——自分を含む特定の人間集団を考えて、その上にある別の集団に対する自分の属する集団全体の隷属を想定するのさ。

M——階級的マゾヒズムですか？

N——それも含まれる。奴隷空想だって、貴族階級に対する奴隷階級の一員という想定が加わる場合には、貴婦人崇拜に結び付くわけだ。

M——将校団に対する兵隊達の隷属もそうですね。

N——そう。然し、それに止まらない。もう少し外へと圏けんを拡げると、日本人全体の隷属になる。これはたまたま敗戦による米国の日本占領によって、空想が実現したね。

M——更に拡げて有色人種として把握すると、先生のお得意の白人崇拜になるわけですね。

N——うまい、その通りだ。又別のとらえ方でゆくと女性支配オネコクラシへの欲望になる。男性というものも、一つの人間集団と考えて良いからね。(傍の週刊誌を示す)この週刊タイムス誌にこの頃連載されている「二つの世界」という漫画は、そういう男性隷属の世界を取扱っていて、僕なんかには面白いね。

M——外へ外へと圏を拡げてゆくと結局人類全部を包摂するわけですね。成程それで火星人对する人類の隷属ということ云われたのですか。

N——まあ待ち給え。火星人にまで行く前に、一つ良い例があるんだ。人類全体を隷属させてその上にあった隷属の古典的な例が……

M——はてな。

N——マゾヒストは女主人ドミナを崇めて何といふかね。

M——女神……あゝ、分りました、ギリシャ神話ですね。オリンパスの神々の種属ですね。成程ギリシャの神々は人間に対して実にサディスティックですね。

N——段々「手帖」に書くつもりでいるんだが、神話はマゾヒズム

の宝庫だよ。……とにかくそうやって人類全体の隷属という觀念にまで到達すると、それが隷属による自虐を満足する限り立派にマゾヒズムの心理と称しうるもので、異性の觀念なしにもマゾヒズム的昂奮を惹起するものであることが分ってくる。多少は習練を要するかも知れないが僕自身の心内の明証に徴して断言できることだよ。

M——そんなものですかね。

N——君は「ガリヴァー旅行記」を読んだことがある？

M——子供の時、漫画で読んだだけですけれど。

N——じゃ是非一度ちゃんと読んでごらん。その中の大人国と馬の国とはマゾヒズムを研究しようという人には必読のものだ。馬の国では馬が人間を飼ってるんだ。これに昂奮を覚えるかどうかは、その人のマゾヒズムの関心圏が人類全部に及んだかどうかの一つの試金石だと思うね。

M——早速読んで見ます。

N——これが分るようになれば、つまり人類隷属の觀念を楽しめるようになれば、君のマゾヒズム読書の範囲は非常に大きな新分野を獲得したことになる。

M——それはまた、どうしてですか？

N——ウエルズの小説の亜流が今米国に氾濫してるんだ。君は探偵小説も好きだったと思うが、去年暮の宝石誌上で、江戸川乱歩が、科学小説によって探偵小説の読者が奪われるかどうか、などという議論をしていたのを憶えているだろう。その位盛んなんだ、空想科学小説サイエンス・フィクションというのが、略してS・F・エス・エフといっているがね。

M——宝石には丘美丈太郎の「鉛の小筐」というのが出ましたね。

N——うん。あれはS・F・としては極く初期の作風に属するものだ

ね。やはり時代を未来にとった方が空想が奔放になる。殊にマゾヒストとしては他星生物^{エキストラニヤン}を扱ったのが望ましい。



K.S.

M——人類隷属のテーマがあるからですね。

N——そう。だがそれだけじゃない。例えば、余り知られていないが、古いもので、黒岩涙香の訳した宇宙旅行もの「破天荒」。ガニミドという木星^{ジュピター}の衛星に行く理想郷でね。白哲金髪の美男美女達が歓迎して呉れる。ガニミドはジュピターの愛童^{カキマ}で美少年だから、その名の星にも美人が住むという洒落だね。とにかく西洋人の理想とするような美貌の種属に進化してこの星を支配してるんだ。ところが出迎えた彼等の行列の後方に、背の低い黄色人種が憤ましく控えているのを訪問者——英国人夫婦だがね——は見逃がさぬ。事情を聞くと、奴隷種属なんだ。この星でもかつては兩人種相争ったが、結局優勝劣敗で黄色人は被征服者として征服者たる白人に仕えるようになり、今では奴隷としての分に安んじて満足して平和を楽しむようになったというんだ。白人の樂園生活が黄色人奴隷の勞働で支えられ、しかも奴隷がそれに満足してるという白人向きの理想郷でね、それが地球人の進むべき正しい方向を示している。というんだから、涙香は意識しなかったろうがとんだ白人崇拜症者向きの読物さ。

M——荒唐無稽すぎますね。

N——千夜一夜や西遊記を読むのと同じさ。荒唐無稽は承知の上だ。それにワイゼツカー、ガモフ、ホイルなどの太陽系成立理論によると、遊星系の成立は宇宙間にそれほど稀なことで

はないというのが新しい学説なんだね。だから地球以外にも生物の存在する星は沢山ある。とすれば、その中には地球人以上に進化した他星人^{エイリアン}もいようなものだ。彼等が地球を襲ったら……これは当然考えられることさ。ウエルズはその先鞭をつけたのだね。

M——中学生の時、少年雑誌でよく読みましたけど。……高垣眸の「恐怖の地球」というのは、今でも憶えていますね。中絶しましたけど、蟻人^{アントマン}というのが地球人をさらって、太陽系外の遊星へつれてゆくのです。

N——中学の時という……戦後？

M——大分前でですけど、戦後です、勿論。

N——高垣眸は僕の小学生の時にも面白いのを書いていたな。題は「火星航空賊」といった。高級船客に化けた海賊が洋上で汽船を掠奪するのと同じ口で、火星人が宇宙船を乗取って、地球人に拷問を加える、熱線で背中に烙印をつけたりしてね。当時科学小説というと海野十三といわれていたが、この人の構成が散漫だった。

M——海野十三も火星人が地球人を家畜化しようとして来襲するという小説を書いていますね。「火星兵团」だったかな。ウエルズの真似ですね。

N———そうかね。然し完全な隷属じゃあるまい？ どうせ。

M———ええ。一体米国のには人類全体の隷属を扱ったのがあるんですか？

N———いくらでもある。(一冊のポケット本を示す)これはアーサー・C・クラークというS・Fの一線作家の「幼児期終る」という作品だが、これでは宇宙船が突如出現して人類の戦争を終結させて地球に平和をもたらす。この他星人は地球人から「上君」^{オーバーロード}(Overlord)

と呼ばれて上空から地球に君臨する。その姿が皮肉にも西洋の悪魔と同じなんだ、蝙蝠の翼、小さい角、刺のある尻尾でね。地球人の一人は、人類の生きた標本として四十光年離れた彼等の星に送られる。彼はその文明を見て、彼等に比較しては地球人は猿と扱ふところがなく結局地球全体が彼等の動物園の一つで、人類はその中で保存されるために戦争を止めさせられたのだ、と語って帰ってくる。

M———ほかの人間はどうしたのです？

N———超人に取って代られるのだ。

M———面白そうですね。

N———じゃもう一つ。(別の雑誌を示す)これはログ・フイリップの「掠奪者」。この作品では四次元的存在形式を持つ他星人が侵略し、人類は四次元的方法によって一瞬に掃蕩されてしまう。生き残ったものはこの他星人の作った動物園の檻中に收容される。全裸だ。檻の標示には「皮膚が白く髭のある霊長類^{プリマート}」と記されている。檻といっても何百人も一緒に飼われている大きなものだが、とにかく、以後実に十世紀の間、人類はこの檻の中でずっと飼育されるんだ。最後には救いがあるんだが……まあ君の楽しみをあまり減らすまいよ。

M———ええ、きつとお借りしに来ます。お話を伺っていると、結局「飼われる」という觀念に帰着したことに気が附きました。下へ下へと下降して家畜になる場合も、上へ上へと人類より高い存在にまで達する場合も、心理的には同じマゾヒズムだといわれることが、それで納得できますね。

N———良いところに気が附いた。空想科学小説のマゾヒズム的意義は

要するに、人類を飼う他星人が出てくるから、というに帰すといっ
て良い。「飼われる」という観念に敏感になっている人にとっては
氾濫する空想科学小説は宝庫といえるだろう。尤もそういうのばか
りではないので、沢山読んで、その中から掘り出さねばならぬとい
う意味では鉱脈といった方がいいかな。

M——無尽蔵の鉱脈ですね。

N——それに、一寸逆説的な表現かも知れないが、空想科学によっ
てマゾヒズム空想が、ずっと現実的になる面がある。

M——どういふことですか？

N——例えば、御承知のようにコプロラグニストは生きた便器とい
う固定観念を持っていて、主人の排泄物だけを食って生きたいなど
という空想をするけれど、相手に人間を考へてる限り、空想が余り
に空想的であり過ぎて実感が生じない。どんな動物でも同類のもの
の排泄物だけでは生きていけないことは明白だからね。

M——犬や豚になれば良いわけですね。

N——そう、それがさっき云った下降法だ。上昇法なら相手を女神
にすれば良いんだが、科学小説の他星人を使えば、もっと楽に、又
残酷に想像していける。彼等が人類に対して一定の条件付けによっ
て、彼等の排泄物を有難がるようにさせたと考へてもいい、迷信に
よって、牛の尿を飲んだり、ラマ教主の糞を食べたりする話が、例
のブルケの「諸民族の慣習における汚物」という本には沢山出てい
るが、人間てそんなものさ。だから彼等超人の排泄物崇拜にまで
導かれたとしてもおかしくない。又未知の生物学的方法から人間の
胃の腑に対して豚の胃と同じような消化力を与え、病気に免疫なら
しめることができたと考へてもいい。中国の便所に豚が飼われるよ

うに、超人達の便所に人間が飼われると想像することが出来る。も
っと進んで、人間が生きた便器として常に彼等に侍り、彼等の排泄
物を喜んで食う場面も想像できる。それが最大の御馳走なんだとす
ればね。それに充分滋養があり、それを摂るだけで人体の新陳代謝
が可能ないようにされてるとすればね。

M——先生の声が、急にはずみましたね。そんなに昂奮するのかな。

N——恥かしい話だが、無茶苦茶に昂奮するよ。シユミツツの研究
によると、蟻塚に養われている蟻以外の沢山の虫の中には、主人た
る蟻の身体の表面を舐めて清掃したり、その糞を食べたりして、蟻
の便利を図ると共に、自分はそれで栄養を摂って生きている奴がい
るんだ。こんな蟻から進化した他星人は他の動物に自分の排泄物を
食わせることを何とも思わないだろう。そこで彼等は人類に対して
……というわけさ。こういう空想は他星人を使うか、人類の未来に
おける超人を使うか、とにかく空想科学を利用しないと現実的に
ならないんだ。

M——分りました。成程面白いものですね。僕のマゾヒズム研究は
少し対象が狭すぎたようです。これからこの方面の読書もできるだ
けして、少しでもマゾヒズム心理への理解を深めるように努力して
見ましよう。何しろ私自身がマゾヒストでないので、見当がつか
ないのです。マゾヒストを対象にした読物だけでは、マゾヒズム研究
はできぬとは思っています。それ以外のあらゆる作品となると広
すぎましてね。結局マゾヒストがマゾヒスティックな意味を発見し
た資料を教えて貰うしか手がないのです。思ったより、その範囲が
広いので驚いています。

N——伊藤東涯だったか、何を讀んでも、四書の注脚だといってい

る。儒者らしい心掛だね。僕は何を読んでも自分のマゾヒズムを練るためだと心掛けているよ。この心掛があれば瓦礫も和氏の璧となるわけさ。

M——何です、そのかしのたまというの？

N——支那の故事でね、王様に宝石を献上したところが、磨いても光らないというので足を切られるんだ。二本とも切られてしまう。ところがその宝石は真物で、最後には光るんだ。この話だって、何にでもマゾヒズムを見出す一例になるぜ。折角真物を献上しながらすぐ光らなかったという文で、大方機嫌を損ねたお妃様の指図かなんかで、両足切られる男の身にもなって見給え。少くとも僕はマゾヒスティックなものを感じる。

M——先生のお話は一言々マゾヒズム的講釈が可能なんですね。呆れたな。

N——いやどうも。折角マゾヒズム研究に志ざしてくれた君だ。人生至るところにマゾヒズムがあることを早く知った方が君のために良いだろうと思つての講釈さ。まあせいぜい勉強してくれ給え。

第八十四 「ペット・ファーム」(Pet Farm)

前項で概説した種類の作品中、傑作に属すると考えるものの一つを紹介して、マゾヒストに空想科学小説を推薦する私の議論が間違つてゐるかどうかを、大方の読者諸君に判定して戴くことにしよう。原作はロージャー・デーの標題の作品で、銀河小説誌 (Galaxy S.F.) 五四年二月号に発表されたものである。私の匿名執筆のため翻訳権が得られないので、訳文として提供しえず、梗概に止まることは遺憾であるが、事情を諒とせられたい。

遠い未来のこと、地球人は既に太陽系外の遊星にまで植民して、文明を誇っていた。

突如二千年光年の彼方から、ヒメノプスが侵略して来る。膜翅類昆虫から進化した高等動物だ。地球人の植民領土は悉く彼等によって征服され、住民は奴隷化される。然し知られざる理由から侵略者達は本国の星へ引揚げていった。

侵略が二度と繰返されぬ様その侵略の跡を辿って彼等の異質の文明を学ぶため、且つは奴隷化された植民地をもう一度地球人の支配下に取戻すため、立ち直った地球人は失地回復の宇宙船隊を組織する。その前哨をなす小宇宙船の一つが、三人の男と一人の機械人間とを載せて、フアラク星にやって来たのは、ヒメノプスの侵略後二百年、彼等の引揚げから百年後のことであつた。この星に植民していた地球人達は百年間の奴隷生活を送り、その後百年間は何の拘束も受けていない筈である。然しヒメノプスは奴隷生態学に長けていた。彼等は他の生物に種々の生物学的条件附けをなし、彼等の奴隷として利用するに適するようその習性を変化させることができた。だから彼等に一度支配された生物は、支配下を去ってからも何処か変調を起している。これを矯正するのも宇宙船隊の任務の一つなのだ。

このフアラク星はその属する遊星系の太陽の回りを自転せずに公転し、周期は略地球時の十年である。軸が傾斜しているので四季はある。これからの話の舞台となる凹地では冬は低い太陽が南の岸壁の陰に沈み切りになり、しかも霧が深いので、冬と共に暗い夜が始まることになる。宇宙船が着いた時は、凹地に夜が来る少し前であつた。

さて宇宙船はこの星の表面を搜索するが、百年前のヒメノブスの遺跡、地球人奴隷の小舎などが見えるだけで、生存者は見当らぬ。ただ今迄訪れた他の植民地星では、以前地球人達が連れていった家畜達の子孫が百年間放置せられて野性に帰ったりしていたのだが、この星にはそれが見当らぬ。哺乳類は根絶されているらしい。

噴火口の跡である凹地が見つかる。幅一哩、周囲は千呎の断崖を壁として、完全に外部と隔絶された空間だ。しかも上方には立体迷路状の網細工の橋が縦横に架けられている。ヒメノブス達の歩橋であるらしい。ここで何を彼等がやったのか？ 凹地に人類を閉じこめて何か生態学的実験をしたのではないか？ 濃い霧について宇宙船は谷底に下りた。湖があり、森があり、熱帯の花が咲いている。船を出るとムツとする。気温はひどく高い。人間の棲息には非常に条件の悪いところだ。生存者があるとしても、この環境条件で、この限られた面積の内では人数はそれほど多くはないであろう。

やがて生存者が発見される。痩せて汚らしい若い白人種の女だ。容貌は整っているが、眼は半ば閉じ、彼等に何の関心も示さぬ痴呆的状态で、全裸の肉体を泥にまみれて死んだ蟹をかじっている。ここにはそんな食物しかないのだ。一行の最年少者フアレルは人類の墮落した姿を見た思いで慄然として面を背ける。彼女のあとをつけると仲間は百人位いるが、皆二十才かせいぜい二十五才以下の青少年男女ばかりで、彼女と同じように少しも活潑な精神活動を示さない。一体もっと年取った大人はどうしたのだろうか？ この凹地は一定数の人間しか住めない。そのため群自体で人口調節が行われることは考えられる。しかし子供が大人を殺すような淘汰が一体ありうるものだろうか？ アメリカ・インデアン^{インディアン}の老人は若者に殺され

る。ヒメノブスは地球人をこの不健康な伝染病窟の中に閉じこんで苛烈な生存競争からそういう残酷な習俗を獲得するように条件付けたのだろうか？

湖の周りの土地から掘り出した人骨を調べると、これは皆二十才前後に發育した成人の骨格であるが、奇妙なことには、風化の具合から逆算して、十年前、二十年前、三十年前のそれと判明する。確かに十年目毎に群の中から成年に達した半数の者が、何かの理由で全部死に、十五才未満の子供丈が残るのだ。何か宗教的狂信から十年目毎の祭式で大人が全部神聖な犠牲に捧げられるような習俗を持つように条件付けられたのだろうか？ 分らないことばかりだ。（読者諸君。この理由を色々推測されるがよい。どれほど自虐的空想を逞ましくしても、到底真相には思ひ及ばないだろうから。）

やがて冬と共にこの凹地に夜が来る。気温が下って凹地はよみがえる。他の二人が凹地の外に調査する間、フアレルは森に出かけ、まるで別人のように生き生きと好奇心を示し、活潑で美しくなっているあの女に逢って驚く。訛りのある地球語で、彼女は名を「コエール」と名乗り、彼を湖の仲間の許に導く。真珠色のもやに包まれ風にそよぎつつ闇中に輝く湖面を見、嬉々として遊び戯れる永遠に老いぬアダム・イヴ達の妙に呼び交す声を聞くと、今迄の印象は全く誤りで、まるでこの凹地は樂園である。遠くから低い羽音の唸りが次第に高くなって近づく。美しい大きな蛾（*Lepidoptera*）が丁度さなぎから孵って、一時に群をなしてやって来たのだ。拳ほどもある頭部の大きな二つの複眼が闇中にキラキラと光る。飛び交う蛾を歓声あげて追う若者達。いつかフアレルも宇宙船のことを忘れ、友達のことを忘れ、コエールと戯れつつ、美しい蛾の姿に魅せられて

いく。蛾は次第に低く人々に近づいて来る。彼は得も云われぬ恍惚感に溺れ、恩寵を求める如く蛾に双手をさしのべる……今や蛾の一匹が彼の身体にとまろうとする時、隊長の命で彼を見張っていた機械人間が熱線銃でこれを射落す。更に一匹、又一匹。その時フアレよりも蛾の群に曝されることが少なかったお陰で、漸く宇宙船内に戻り得た他の二人が船を浮揚させ、凹地の上空から煌々と照明弾を以て照し出した。忽ち楽園の俤は去って、人々の歓声は止み、光に顔を背けつゝ惘然と佇む痴呆の一群に戻る。蛾は光に盲いて空しく飛び惑う。かくてフアレは危うくも救出され、最後の照明弾の尽きるまでに凹地一面に殺虫剤を撒いて、宇宙船はこのフアラク星を離れ去った。

凹地の人口調節の謎は解けた。この蛾はこの星の一年(即ち十年)

に一度冬期に入ると同時に変態を終り、さなぎから成虫となって産卵するのだが、卵を産みつける相手は人類なのだ。それも子供は避けて成熟した人体にだけ産みつける。卵は孵って幼虫になり、この人体を食って育つ。食い尽してさなぎになり、又次の冬が来た時成虫となって人体に産卵する。そういう恐ろしい蛾のため人口が間引かれていたのだ。では何故この凹地の人々はこの蛾を殺さないのか? 何故卵を産みつけられることを避けないのか?

又何故ここから逃げ出さないのか?

毒蜘蛛タランチュラのある一種だけ選んでその身体に産卵する一種の地蜂がある。蜘蛛は蜂を殺す力を持ちながら、この蜂にだけは抵抗せず、甘んじて針を受け、幼虫の産室が自分の墓所として掘られるのを見ている。我々に



は未知の生物界の神秘、この不可解な天敵の現象が、この蛾と人類との間に起るのだ。蛾は産卵期において人類を蠱惑し、呪縛し、喜んで卵を受けるように不思議な力で強制する。健全な宇宙船の乗組員達でもその魅力には抵抗できぬ。機械人間だけがフアレを救い得たのだ。この偽りのエデンの園のアダム・イヴ達の神様は、羽ばたいて近づく美しい蛾なのだ。彼等は無上の恍惚感と共に思籠の期待に心をしびらせて、この美しい神の死の抱擁に身を捧げるのだ。……彼等に限らず、人類はすべてこの蛾に対してはそうなるのだ。人類の新しい神。誰がこの神を彼等に与えたのか? いうまでもなく、ヒメノブスだ。彼等は人類の新しい神たるべき蛾を育成作出した。そして蛾と人類とをこの凹地に他と隔離して放すことによって恐ろしい生物調和を創り出した。凹地の環境条件が悪いのも無理は

ない。高い気温は蛾に必要なのだ。人類には不適でも蛾の幼虫の孵化変態には好適の環境なのだ。人類はどんな動物よりも環境適応性に富む。凹地内の生物調和を可能にするためには、人類は、自分達のためよりも蛾のために選ばれたこの環境下に適応して生きねばならぬ。凹地内の人類はそれを強制されているのだ。

蛾は冬と共に産卵期に入るが、夜間性である。この凹地は冬と共に夜が来るから蛾の産卵に適するとして選ばれた。が十年に一度の産卵期が来た時、人々が嬉々として蛾を迎えるようになるためには彼等も夜間性でなければならぬ。かくて凹地の人類はヒメノブスによって太陽の光の下では感覚も精神活動も麻痺し、闇中でのみ活潑な行動をとるよう条件付けられたのであった。

十年に一度成人は蛾によって殺される。残るのは幼虫の食物として不足なため目こぼしされた幼少年ばかりだ。教師となる成人を持たぬこの子供達の集団は何の経験をも継承せず、貧弱な語彙の外は何の文化も持たぬ。まして千呎の断崖をよじて凹地の外にどうして出られよう。然し加害動物を根絶した温床の中では保護者なしにも子供達は育ち酷烈な環境条件にも子供の持つ適応力で耐え、単調な十年間が過ぎる頃には、少くとも肉体的には成人する。性的に成熟して更に一定数の子供をも産み出す。このまゝ経験を畜積してゆけばいつかは凹地の外にも出ていくことになる。……だが、丁度その頃が彼等の肉体の成育が幼虫の食料たるに充分な大きさに達する時期なのだ。



そして正にその時好適な環境に恵まれて見事に育った次の蛾が産卵にやってくる。成人達は再び全部幼虫の食料として殺され、再び十年以前と同じように子供達だけが取り残される。外界からの影響が加えられぬ限り、それが十年毎に繰返されよう。凹地の人類集団は永久に成熟に達することなく、然しまた決して絶滅することもない。ヒメノブスはこれを人工的に按配したのだ。そしてその条件付けの完璧の故に、ヒメノブス去って一世紀、いまだに凹地内の両生物間

の平衡は保たれているのだ。殺虫剤を撒くことをしなかったら、この平衡は永劫に続いたことだろう。殺虫剤は蛾を殺して、凹地の人類を救った。後続隊の宇宙船は彼等を夜間活動性に導いた条件附けから解放するだろう……。

それにしても何と素晴らしい自然支配の技術をヒメノブスは持っていたことだろう。地球上では、天敵の現象は本能動物の間にしか存しない。それは生物界の内的秩序の一部をなし、人間は一指も触れ得ぬ神の摂理と考えられている。然るに彼等はそれを本能動物たる蛾と理性動物たる人類との間に人工的に創り出すことができたのだ。自然の秩序に干渉し、神の摂理に挑戦するような、我々には分らぬ恐るべき智慧を持っていたのだ。……だが、もっと分らないことがある。一体ヒメノブスは何のためにこんな人工的生物調和を創り出したのか？ あの立体迷路の歩橋は何のためのものなのか？ 離れゆく宇宙船上での最後に残る謎はそれだ。

三人の臆測は色々である。人間が何のために劇場を建てるかが白蟻に分るだろうか？ ヒメノブスに対して人間と白蟻ほど違う我々には、歩橋が何のためにあるかは結局本当には分る筈がないのだ。然し臆測することはできよう。或いは歩橋はヒメノブスにとってパルコニー代りのもので、そこから下の凹地の光景を彼等は楽しんで見物したのかも知れない。或いは彼等は蛾の幼虫やさなぎを食料に供するため、人間が鳥小舎に家離を飼うように、この凹地に飼育設備を施したのかも知れない。或いは又彼等は、我々が犬を飼うように、この美しい大きな蛾を愛玩用に飼っており、この凹地が犬飼育所にあたるのかも知れない。そうだ、恐らくこゝは愛玩動物飼養場なのだろう。凹地の環境は蛾のために選ばれている。ヒメノブス

の歩橋は蛾を見るためにあるのだ。人間は幼虫の生き餌にするために住まわされているに過ぎない。全智全能の彼等はその愛玩動物たる蛾に、産卵期毎に生き餌を投げ込むような不細工なことをせず、生き餌自体をも繁殖させることによって、少しも手間のかからぬ永久的な産卵飼育設備を造ることを知っていた。彼等はその生き餌として——恐らく一番適応性の強い動物であるが故に——この星の先住支配者たる地球人類を選び、我々には未知の方法によって、蛾に産卵期における人類への支配力を付与した。そして一定数の地球人奴隷を夜間活動性に条件付けて後この凹地に入れた。生き餌として放し飼にしたのだ。かくて蛾と人類との間には靈妙無比の生物調和がこの凹地内において人工的に創造され、永久的な蛾の飼養場が完成した。千呎の断崖に囲まれたこの凹地は蛾の逸出を防ぐと同時に生き餌の逃走をも不能にした大きな檻なのだ。この中にある限り人類は幼虫の生き餌となる運命を避けることはできない。ヒメノブスは慈悲深くも又残酷に人類がその蛾を喜び、その運命を楽しく迎えるように条件付けた。フアレルと共に嬉々として蛾の群を迎えた湖畔のアダム・イヴ達はやがて生き餌にされるとも知らずに、恐ろしい蛾を追っていたのだ。彼等の身体を餌としてやがて美しい蛾が誕生したとて、その姿に目を樂しませる筈のヒメノブスはどうに居なくなっていたのに……。

いかがです。この結論を予想し得た諸君は、恐らくあるまいと思ふ。何という恐ろしい空想であろうか。

ヒメノブスは膜翅類人である。蟻や蜂の類だ。膜翅類は昆虫の中では一番進化の高いものである。奴隷や家畜や愛玩動物を持つ生物

は、地球上では人類以外は蟻がいるだけだ。膜翅類の社会生活にはマゾヒストを喜ばす幾多の事実がある。然し地球人以外的高等生物として膜翅類の進化したものを考えるのは、ウェルズの「蟻の帝国」や「月世界最初の地球人」など以来、科学小説の常套で、この作品の独創にかかるものではない。この作品では特に蜜蜂の進化した生物を考え、膜翅類人と並んで、蜜蜂人 (the Bees) という表現が用いられている。

天敵現象も、微視的マゾヒズム眼を備える者には、仲々面白い生物学的事実である。ファープルの「昆虫記」に沢山でている中からラングドスあなばちの例を引こう。この蜂はきりぎりすもどきを幼虫の餌にする。その時瘦せた雄は決して相手にせず、卵をもった肥えた雌だけを選ぶのである。本項の作品で、蛾が子供を相手にせず成人丈選ぶのを話がうますぎるように思われたかも知れぬが、昆虫の本能の靈妙さを知れば、話としては決して不思議はないのだ。ところで、その犠牲者はどうなるのか。産卵したり、孵った許りの小さい幼虫が安心して餌を食べられるようにするためには、餌は静止せねばならぬ。針の一撃。「きりぎりすもどきは大人しい生贄だ。手問いなんかせずじっと刺されている……それっきり魂の抜けた一つの品になってしまふ」(岩波本第二冊)。しかし死んではいない。自然は酷薄にも彼が死ぬことを許さない。彼は蜂の幼虫が成育し自分を食べ終るまで二三週間の間、自分の肉を新鮮に維持して幼虫に提供すべき義務を自然に対して負っている。そこで彼は蜂の針で麻酔される。これで死んだようになることによって幼虫を脅かさなくなり、他方無用に身体を動かさなくなったことによって体力の消耗を減じ、食べられ終るまで生きていることができる。何とマゾ

ヒステイックな宿命であろうか!

この天敵現象に支配される人間というテーマも実は新しいものでない。日本でも既に香山滋が試みている。しかし、氏の作品は被害者が女性である点、種属的でなく、個体的現象として扱われている点などから、何等マゾヒステイックな印象を与えない(近時の氏の作品に、赤蟻が女体の子宮内に産卵するという類想のものがあつたが、同じことがいえる)。

本項の作品の真の独創性は、そして又、一番マゾヒストを喜ばせる点は、価値段階が二段構えになったところにある。人類の神たる他星人というテーマは珍らしくない。しかしここでは、人類の神たる蛾は他星人にとっては、その被造物たる愛玩動物に過ぎないのである。又他星人の愛玩動物たる人類というテーマも珍らしくはないしかしここでは、人類は愛玩動物ではなく、その生き餌として存在価値を認められているのである。……私のうちには割合高価な金魚が飼ってある。私は時々下の溝で糸みみずの固まりを掘出して空罐に入れて生かしておき、それを少し宛金魚にやっている。金魚は大切だが、糸みみずはその生き餌に過ぎない。ヒメノブスにとってはこの蛾が金魚なので、人間は丁度糸みみずのような存在に過ぎぬというのだ。諸君。これ以上人類を侮辱した状況が考えられるだろうか。

そしてまたそれは実にマゾヒステイックではないか。自己自身を目的とすべきであり、他の何物のためにも単なる手段となるべきではない人間が、ここではより高き存在者の前にあって、単なる生物学的人類として扱われる。飼われる。手段として使用される。

それも人類の持つ特殊の能力を評価されて、有能な奴隷として使

用されるというならまだ良い。或いは人類の容姿に美しさを感じて飼育愛玩しようというならまだ良い。そこになお一つの誇りが残るだろう。そうではなく、他の愛玩動物の餌にするためとあっては、要するに人肉の味が彼等の愛玩動物の舌に合うからというのである。では、飼われる身としても、甚だ価値低き自分を自覚せねばならぬ。同じ隷属動物でもヒメノブスにとっては蛾の方が大切なのだ。だから蛾に適した環境に生きることを人類に強制する。人類のヒメノブスに対する関係は愈々マゾヒスティックである。

然し、それでもなお誇りはある。自分が餌として生きながら食われることによって、幼虫が美しい蛾となって、主人たるヒメノブスの目を楽しませるとしたら、幼虫のために死ぬことは間接にヒメノブスのために死ぬことであり、又十年間凹地の中で蛾のために生きていることは間接にヒメノブスのために生きることになる。その犠牲は有意義ではないか。この誇りある限り凹地の中の生と死は肯定できるではないか。少くともマゾヒストには。

ヒメノブスは既に去っている。生れてくる蛾を貰ってくれる主人が居ないのに、蛾を生み出す犠牲となることは今や無意義であるという人があるかも知れない。しかし二千年の宇宙の空間はヒメノブスにとっては問題でない。何時の日か彼等は再来するであろう。その時再びこの蛾を発見して彼等が喜ぶことがあるとすれば、その時まで何十代か何百代かの生き餌の犠牲はやはり有意義となるだろう。自分の肉体にはぐくまれた蛾が直ちにヒメノブスに娯楽を供し得た光栄の日に比しては、その有意義性はあまりにもかすかな、はかないものである。しかしそのような僅かの有意義性でも、なお人類の何十代何百代の生を蛾に捧げるに値すると考える時、人類の卑

小感は極限に達する。何時くるか分らぬヒメノブスを待って、彼等のために蛾を保存しておくだけのために、生き餌たるべき子を産み自らも生き餌となるに甘んずる人類、しかも彼等自らはその生の意義すら解せず……私はまだこれほどみじめな人類の姿を描いた作品を他に知らないのである。

速報欄開設の辞

手帖を書き始めた頃の腹案では毎月の最新の資料も盛り込んで行くつもりだった。現在原忠正氏が時評で音楽と映画とについて試みておられるような速報的なものを文芸作品について考えていたのである。然し項と項との連関に気を配るようになったのと一項の長さが長くなったことから、私に与えられた限られた紙幅で到底それを実現しえずに現在に至っている。毎月「これは」と思う作品があるが、それが手帖の一項になるのは何月何年先か分らないという実状である。これでは残念である。

そこで増頁を機会として手帖の頁の一部を割いてこの速報欄に宛てさせて貰うことにした。一マゾヒストの毎月の読書報告見たいなものである。勿論主たる意義は題名の紹介にあるので、解説は数行に止め、本格的に取上げるべき場合は手帖の方に譲るが、地方の読者にはその程度の速報でも多少の便宜を与えるのではないかと思う。対象は活字になったものを主とするが、映画も、例えば「春琴物語」のようにマゾのものであっても原氏の時評で取上げられなかったものなどは、号外として取扱う、挿絵、写真の類も然り。

公私共多忙な生活をしているので、網羅的な検索はもとより不可

能である。殊に大衆娯楽雑誌から逸する所が多いと思う。不備にお気付の方はどうぞ補足していただきたい。

なお、一ヶ月間に発表されたものを一回分の単位とするわけであるが、初回の今月分限り、二ヶ月遡った分まで扱わせて貰った。七番までがそれで、八番以下が本来の今月分である。『』は単行本のしるしである。



奴隸的なのが嬉しい。

五、ヘップバーン特集号(映画ストーリー増刊)「ローマの休日」

の女王、「麗しのサブリナ」の富豪令夫人、性格といい気品といい容貌といい姿態といい、天成の女主人タイプであるこの人気女優の飼犬になれたら、どんなにか幸福であろう。この特集号の中央グラビア頁の彼女が二匹のアフガン^{ハウンド}犬の首輪の曳綱を引張っている写

一、有馬頼義「月光」(オール読物十月号)『終身未決囚』という小説集にも入った。次号の手帖で取上げる予定。

二、岡田良二郎「蛇と美女」(右同誌)

ジブシーの美女に玩弄される日本人画家の話。「さ、お舐め！」サンダルを脱いだ片足の先を、女は秋山の口に押しつけた。……秋山は夢中でその白い小さな足指を口に含んだ。」といった場面。

三、富田常雄「女やはら抄」(右同誌)

さほどマゾ向きではないが、柔術道場を開く男装の美女が出てくる。長吉という弟子は彼女に投げられ、絞められるのが楽しみで道場に通ってくるマゾヒスト。

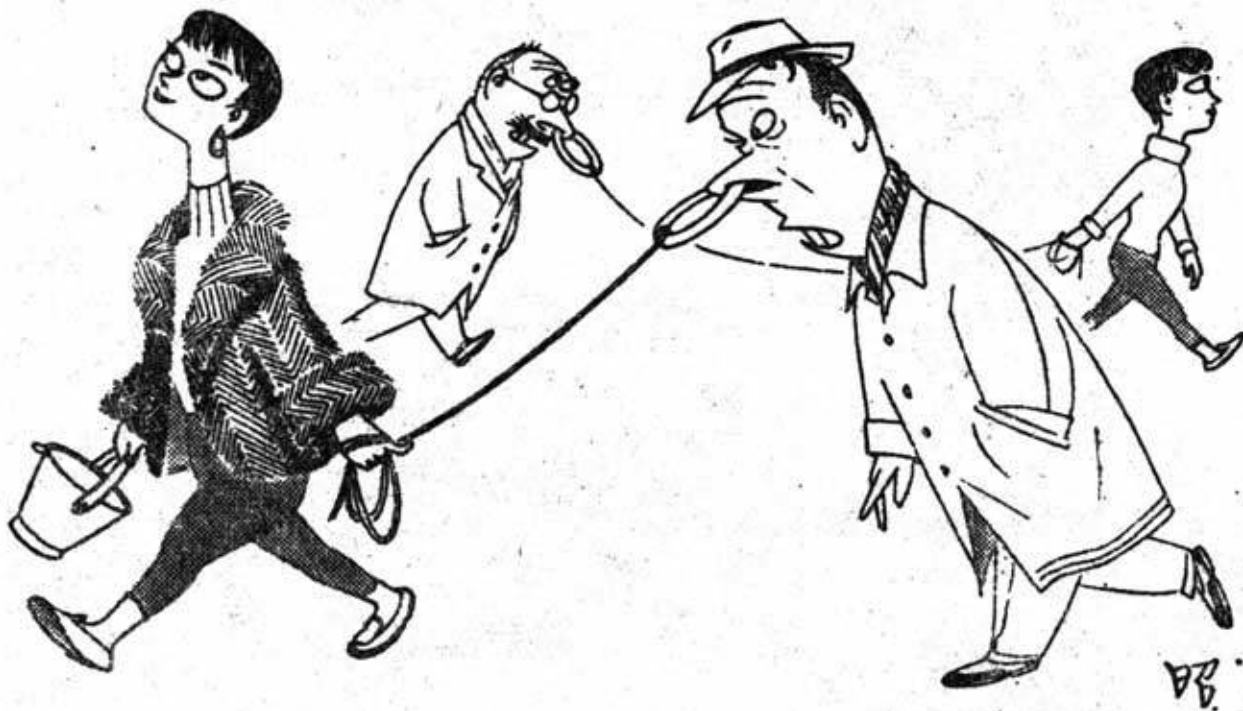
四、岩下俊作「無法松の一生」(小説と読物十一月号)古い作品だが映画や芝居だけしか知らぬ人は一度原作を読まれると良いと思うから、再録を機会に取上げておく。松五郎の奥様に対する思慕の

真は、私をドキリとさせ、恍惚とさせたものである。

六、西野辰吉「烙印」(『米系日人』所収) 駐留米軍人たちが奴隷所有者的感覚から洋妾の肉体に自分の名前を刺青する、それは家畜烙印と同じだという説。

七、小島信夫「馬又は政治」(『アメリカン・スクール』所収) これは原氏の時評(本誌十二月号)が既に雑誌掲載分について教示されたもの。妻が情人と共謀で夫を狂人病院に入れ、その間勝手に新築してしまふ。夫が戻って見ると自分の部屋より馬小屋の方が立派にできており、妻は五郎という愛馬に乗るのに夢中で夫に冷い目を向ける、といった占領後日本政治の諷刺この本の「星」も一寸面白い。

八、高見順「見事な虐待者」(別冊文春四二号) 美少女ター坊の奴隷玉置が彼女に手をついて謝ると、彼女は腰かけたまゝ両足を彼の肩に休めて足台にする。その自然さに、傍観者の玉置の友人は二人にはこれが初めてでないことを知る。「もういいわ」「……」「また、うるさいといわれるわよ」彼女が男の額を足蹴にして退ける、男はその両足を抱いて……といっ



流行

トリアール
闘牛士パンツの後ろにくるもの
先生 境田 昭 造

T—What next after toreodor pants?

た場面があり、印象的である。

九、「便器になりたい憧憬」(『風俗科学』十二月号) 高峰三枝子の奴隷になって物置に飼われ、ゴミ箱の台所屑を漁って食べ、彼女の排泄時には自分の口を便器代用品として使用して貰いたい、とい

う二十七才の狂熱的な青年の手紙を紹介した部分がある。本誌二十七年六月号の「人間便所」N君の手記(女優名は伏せてあったが)を直ちに連想した。こんな人は沢山は居まいから恐らく同一人ではないか。女優が「暖流」以来上流令嬢役で売り、私生活も豪奢、性格も高慢な高峰三枝子である点など、私の女主人観からもさこそとうなずかれる点がある。

一〇、『オードリ・ヘップバーン物語』伝記としてはチャチなものだがマゾヒストは女主人について書かれたものを読んでおかねばならぬ。『王女物語』などと通ずる興味がある。挿入のポートレートその他の写真も楽しいそれに彼女の闘牛士パンツは何とよく似合うことだろう。

号外 境田昭造の漫画(アサヒグラフ十一月十日号) 闘牛士パンツのついでにここに出しておく。男も完全に牛

扱いにして荷物でも持たせるともっと面白かった。

一一、「暗い欲望」(あまとりあ十月乃至十二月号) 連載第三回迄。婦人乗自転車のサドルになりたいという男の思春期の回想録。感性豊かな筆致で作り話的臭味がない。

一二、火野葦平「女駝者」(『小説欧羅巴』所収) 乗馬服で馬車を取する老嬢が実は若い頃全欧一の女騎手で曲馬団の花形だったという話。マゾ的ではないが、女性乗馬のテーマがあるので、こゝに出しておく。

一三、藤島宇内「私刑」(三田文学十二月号) これは詩である。大×文部大臣、岡×外務大臣が革命大衆の手で私刑され、火焙りや磔になる幻想図。鬼気迫る佳作だから、マゾよりサド向きであるが録しておく。

一四、小島信夫「神」(文学界十二月号) 女治療師が男やもめの神様になる話。奴隷にされてゆく男が彼女のため炊事などの奉仕をせざるにいらなくなる心理を描く。続きが出よう。

一五、安部公房「奴隷狩」(文芸十二月号) 手帖第二十五項で紹介した「山椒魚戦争」やヴェルコールの「人獣裁判」などと同じく、人類に酷似する家畜を設定した作品として注目すべきもの。牧場から逃げたウエーという家畜は口がきけないだけであとは人間と少しも変らぬというのである。第一部だけ発表された。この作者のカフカばりの作品には手帖に載せたいのが多い。

号外 仏伊合作映画「テオドラ」 既に本誌十二月号で「女優の縛られる映画」として注目すべき旨サド側から発言のあったもの。マゾ側から見たこの映画については原氏の時評が取上げられるであろうが、本号発行の頃封切の予定と聞くので一言。この女主人公テ

オドラ女皇は史上屈指の淫虐女性である。又登場の名将ベリサリオは西洋史上最大のマゾヒスト英雄である。映画は綺麗事になってるが、史実はずっと残酷でマゾ向きで、この両者共手帖の項を予定していた人物である。そこでいずれ手帖に書くものを読まれる折の参考にもなろうから、マゾヒスト諸君もできるだけこの映画を見ておかれるよう、私からお勧めしておく。

号外 朝日新聞十一月十四日附記事 本誌十一月号手帖第七十二項で、私は乗馬が本来男子より婦人に適したスポーツであることを述べアーヘンの世界馬術大会におけるリス・ハルテル夫人の優勝を引例した。この引例の追加として、次の新聞報道を補っておきたい。十一月十三、四日皇居内馬場で開かれたパレス乗馬クラグ主催の東京馬術大会第一日の記事である。

「呼びものの三十一名参加の中障碍飛越A組では二児の母親ヴィヴィアン・ケンリック夫人(三四才、英)が見事な黒鹿毛のニュージランド産ハンター・アヴァロンラッド号(九才)に乗り、巧みな飛越ぶりで相川選手(千葉ク)を一位同率の決勝戦で6秒の差で破り、本社寄贈トロフィーを獲得した。多数外人選手の参加した十四才以下の少年少女障碍飛越でも二世のお嬢さんアーリン・シチタ(一四才、アメリカンスクール中学三年生)が男子選手をしり目に優勝した。」

この記事は単に女性の優勝という文でなく、白人女性が日本人男性を打破って優勝したという点で、特に私を興奮させたことを申し添えておく。(なお、朝日には、ケンリック夫人の写真、Nippon Times にはシチタ嬢の写真が出ていた。いずれも障害を超える所である。)

白

告

強盗に入られた時のこと

中野 妙子

私の家は昨年引越しましたが、それまでは世田ヶ谷にありました。駅から歩いて十分位の所です。駅前には少しばかりの商店があるだけで、その他は普通の家ばかりですので、夜はとても淋しくて暗いところでした。その為、大抵のお家では犬を飼っています。私の家にもサンという犬を飼って居り、昼間は鎖につないで置いて夜には放してやります。この犬の世話はお父さんの受持です。

この恐ろしい事の起ったのは、おとゝしの夏、私がまだ中学三年の時です。その時の家族は全部で七人でした。私の外にお父さん、お母さん、お姉さん、妹、それに大阪から来

ている従姉妹の克子さん、それから女中の芙佐やの七人です。お父さんはお役所に勤めています。お姉さんはその時高校三年でした。今は卒業して高島屋に勤めています。妹は美恵と言ひ、その時は中学一年で、今は三年生です。克子さんは武蔵野音楽学校の声楽科です。背が高くてとても綺麗で、お姉さんはいつも克子さんの事をうらやましがって居り、私も美恵も大好きです。現在は研究科へ進んでおります。女中の芙佐やは昨年結婚するの

で田舎へ帰り、今はおりません。今から考えてみると、その日はとても運が悪かったのです。別に油断していたわけでも

なかったのですが、色々なことが重なってしまいました。一番大きな事は、お父さんがお役所の用事で仙台まで三日間の予定で出張されて留守だった事です。でもお父さんは柔道二段なので、手向ってかえって怪我をされたくも知れませんが、居られなかった方がよかったかも知れません。その次に運の悪かったのは、この一週間ばかり前からサンが家に居なかったのです。サンは何という病気が沢山のよだれを垂らしていたので、お父さんが新宿の動物病院へ預けていたのです。だからその日は女ばかりでした。然し、この一ヶ月程前に近所へ空巣が入った事があったので、

庭の方から黒い大きな男が土足のまゝ上って来ました。真暗な庭から急に出て来たので顔も何も分りません。私と美恵が思わずあっと叫んで逃げ様として立つと、その中の一人が、「静かにしろ！」と、とても怖い声で言いました。庭から入って来たのが二人、お母さんの後に一人と、全部で三人です。お母さんは後の男にピストルを突きつけられていたのです。三人とも黒っぽい布で顔を包み眼だけぎょろぎょろさせていました。

一人がピストルを持ち、二人は別に何も持っていないませんでした。すぐ一人が雨戸を閉めてしまいました。お母さんの後に居た男がピストルを私達の方へ向けました。私達は真青になり、がたがた身体が震えてどうすることも出来ません。美佐やも奥から出て来て、そこに座ってしまいました。私達は障子を閉めてお茶



間に閉込められてしまったのです。私は生れて初めて、ピストルというものを見ました。それが本物なのか、オモチャなのか分りませ

んが、オモチャだったと分ったとしても、私達にはどうする事も出来なかったでしょう。私は、そのピストルからすぐにでも弾が出て来る様に感じました。思い出し

ても恐くて、よく書き表わせません。一番怖かったのは、「騒ぐと殺す！」と言う声が聞えた時です。お母さんも、お姉さんも、美恵も、美佐やも、どんな顔をしてどこに座っていたのかはつきり思い出せません。皆、ただじっと座っているのが精一杯だったのです。

少し時間がたつと、ほんの少しずつ落着いてきました。その時、一人が奥の部屋へ行きました。他に人はいないか見に行ったのかも知れません。しばらくするとその男が、手に一杯縄や紐やお父さんのネクタイやら、洋服の生地やらを持って来て、私達の前にそれをばさつと投げ出したのを見て私は「縛られる！」と直感しました。よく新聞にそんな事が出来ていたのを見た

ことがあったからです。ピストルを持った男が私達の前に突立っていると、あとの二人がそれで私達を縛り始めました。

私達は五人でしたので一度に縛られることはなかったのですが、目の前のピストルが恐くて何もできず、たゞ自分

が縛られるのを待っていました。最初はお母さんとお姉さんが縛られました。お母さんの方はよく見えませんでした。お姉さんは私のすぐ前に居たので、縛られるのがよく見えるのです。

男はお姉さんの手をぐつと後に廻して、麻縄でお姉さんの手首を縛り、その縄をぐるぐる胸の方へ廻して前で結んだ様です。(その時はよく分りませんでした)お姉さんはシユミーズだけなので、縄の当たっている所は全部裸で、本当に痛そうで真青な顔をして縛られていました。お母さんとお姉さんが縛られた後、私と美恵と美佐やが縛られました。とても強い力で、ぐつと両手を後に引張られた時、思わず振りほどこうとしたのですが、私なんかの力ではどうすることも出来ず、すぐ



手首を後に組合わされて縛られてしまいました。とても強く縛った様ですけど、お姉さんと違って私のは腰紐のようなものだったらしく、そう痛くありませんでした。でも、胸の方へその紐が廻されて引張られた時は、さすがに腕が折れそうな痛味を感じました。縛られるとごろつと転がされて、今度はお父さんのネクタイで足首を縛られました。

こうくゝられるともう起き上ることは出来ません。美恵も私の隣で同じように転がされてしまいました。五人とも手足を縛られてしまうと、次に三人はいろいろな布地を持ってきて私達の口を縛りました。『猿ぐつわ』って言うのでしよう。私の所へ来た男は、

「口をあけろ!」と、低い声で言いました。怖しくて口を開けると、洋服地を口の中へ突

込まれました。そしてその上から手拭でとても強く括られました。鼻も一緒に括られたので息も出来なく、死ぬのかと思いました。後で知ったのですが、鼻も一緒に覆われたのは私と美佐やだけであとは口だけでした。

こうして五人とも手と足を縛られて、たゞごろごろ転っているばかりでした。三人は私達をそこに転したまゝ、洋服ダンスやら書類棚やらをひっくり返していました。でもそんな事は、その時の私には何も分りませんでした。たゞ息苦しくて、早くこの猿ぐつわをはずして貰いたくてぼろぼろ泣いていました。

それからどれだけ時間が経ったか分りません。多分、たいして時間は経っていないのでしよう、玄關の方で、

「たゞいまー」っていう声が聞えました。克子さんの声でした。私は思わず「克子さん!」と叫びました。しかし、口は全然きけませんでした。たゞ「ウウ……」って云う変な声しか出ないのです。カタコトと克子さんが靴をぬいでいる音がしました。『早く知らせてあげな

くては」と思いましたが、どうすることも出来ません。三人の強盗も驚いたようでしたがでもそれが女の声だったので安心したのでしよう、ピストルの男が廊下を歩いて出て行きました。私はたまらない気持でした。

克子さんはその日は全然袖のない中国服を着ていた様に思います。それに克子さんは私達姉妹と違って気の強い人なので、こんな場合それが心配でした。すると、すぐ克子さんが突飛ばされて入って来ました。矢張り真青な顔をしていました。私達が五人とも縛られてごろごろ転っているのを見て、さぞ驚いたことでしょう。でも何か大きな声で叫んだような気がします。すると三人の男達が寄ってたかって克子さんの口を押え、そこへ押倒しました。克子さんは相当あばれたようですがいくらあばれても三人の男には敵いません。ハンドバッグも音符の書いてあるノートもそこに投げ出したまゝ、とうとう手足を縛られてしまいました。一番あばれたせい、克子さんが一番ひどく縛られました。本当に雁字搦目というのでしょうか、私達が縛られていない膝のあたりも縄をかけられ、ぐるぐる巻きにされていました。

三人の強盗はゆうゆうとそこらをかき廻し

て、やっと逃げていったのが十一時半頃だったと思います。(こういう事は皆あとで分ったことです)縛られて転がっている間に、私はだんだん落着きました。廊下に近いところにいるのがお母さんで、何だか気を失ってしまったように動きません。それがとても心配でした。私の前に背中を向けているのがお姉さんで、縛られている手がよく見えるのですが、だらんとして少しも動きません。すっかりあきらめた様子でした。私の隣りにいるのが美恵で、こっちに顔を向けています。顔は鼻だけのぞいて口はタオルのようなもので縛られています。でも美恵は小さいので加減したのか胸には縄がかゝっていません。手首と足首だけくゝられているのでしょうか。次の部屋に近い所に美佐やがいるらしいのですが私にはよく見えません。一番離れた床間の方に克子さんがころがっています。何か一生懸命にもがいているようでした。さぞ身体が痛かったのでしょうか、ごろごろ転っています。私は克子さんがごろっとこっちに転った時、その顔を見て驚きました。顔が二つにくびれているのです。私も映画などで猿ぐつわをされた人を見たことがあります、克子さんがさ

口の中に一杯布がつめこまれているのは私と同じですが、その上を克子さんのは別の麻縄でゆわかれていたのです。口から布が出ないように無理に押えつけ、その縄は髪の毛の後で結ばれているのでしよう。克子さんの頬はまるで二つに切れたように、その縄さえ食込んで見えない程です。

あれでは声を出すことは勿論出来ませんし口は開けっぱなしになっていて、全然動かせません。顔が美しいので一層お可哀想になりました。一番声を出す危険があったのでしようけど、あれではあまりひどすぎます。絶えず「ウウウウー」とうめきながら、又ごろつと向うをむいて背中を見せると、手首を突張ったりゆるめたりして、何とか解こうとしているのでした。私も解こうとしてやって見ましたが、全然駄目でした。ゆかた一枚着ていただけで、縄のあたりが強く、手がしびれてしまった上に、後手が上に吊上っているので力が入らないのです。

強盗の逃げた後が大変でした。今でこそこんなん気なことが書けるのですが、その時は皆必死でした。早く縄を解いて皆のも解いてあげたいと思いました。一番あばれたのはお姉さんと克子さんでした。お姉さんは強盗

が出て行くと急にものがき初め
美佐やも初めは懸命にやって
いましたが、どうしたのか動
かなくなっていました。

後で聞いたら、美佐やだけは
針金でゆわかれていたのだし
た。針金なので動けば動く程
痛くなってしまったのでしょ
う。私はもう全く自由がきか
なくなり、それに早く鼻から
手拭を取ろうとごしごし畳に
顔をこすりつけて、やっとそ
れをすらす事が出来、ほっと
息をつきました。

私はそれまで猿ぐつわとい
うものをよく知りませんでした。
たゞ鼻と口を布で覆うだ
けだと思っていたので、
それだけでは冬にするマスク
と同じだし、どうして声が出
ないのだろうと不思議に思っ
ていました。それが口の中へ

沢山の布を押し込まれて、本当の猿ぐつわを
はめられてやっとその意味が分りました。そ
してそれが、手足を縛られるよりもっと苦し



いものだということも分りました。初めはそ
れ程でもなかったのが、段々その布でつばが
吸い取られてくると、気持さえ悪くなり、そ

れを舌で押し出そうとしても、もう舌に力が
なくなって、からからに渴いた口でそのしめ
った布を吸っている様になります。でも鼻か

らはずれたので幾分楽になりましたが、手足の紐はほどけないので、そのまゝじっとしているより仕方ありません。

お姉さんの背中には汗でびっしりでした。克子さんはお部屋をころげ廻り、どうしても自分の縄が解けないのが分ると、その目茶苦茶にくられた身体を、今度はお姉さんのそばへころがって行って、お姉さんの縄を自分の不自由な手で解こうとしていました。

そういう時間はなんと長いことでしょう。一時間か二時間かも分りませんが、私には一日も二日も続いたような気がしました。そうする中に、私の隣の美恵が一生懸命猿ぐつわをはずそうと畳にこすりつけていましたが、やっとはずれたらしく、急に大声を出しました。でもお隣の水戸さんの家とは少し離れているので、その部屋からでは聞えません。私は「立ってお台所へ行きなさい」と教えようとしたが、矢張り「ウウウ……ウウ……」という声しか出ません。とても悲しくなりました。しかし美恵もそれが分ったのか後手を畳に突いて起上り、障子の棧に身体をもたせかけてやっと立ちました。美恵だけが胸から腕にかけて縛られていなかったのがよかったのです。皆、今はたゞ美恵の方を見ているだ

けでした。びよんびよん飛びながらお台所の方へ行った美恵が、

「水戸さんのおばあさん、助けて——」

と叫んだのが聞えました。更に二、三度美恵の声が聞えてから、裏の勝手口から水戸さんのおじさんとおばさんが急いでやって来ました。とても驚いた様子でしたが、すぐ、私達の縄を解いたり、切ったりして下さいました。縄が解かれても、皆、少しぼんやりしていました。何か夢を見ているような気がしたのです。でも、ずきずき手首が痛むし、克子さんの頬についた深い縄のあとを見ると、矢張り夢じゃなかったのだと思い、今更ながら恐しくなりました。皆、立つことも出来ないで、水戸さんのおじさんが直ぐ交番に届けに行つて下さいました。

それからすぐ、二人のお巡りさんが来ました。調べて見ると、お父さんの洋服三着と、お姉さんと克子さんの洋服、着物が三、四枚ずつと、お姉さんの買ったばかりのハイヒール、それにお金、それ等を克子さんのトランクに入れて持つて行った事が分りました。その次の日は皆、身体が痛くて一日中寝ていました。この事が新聞に出たのは、その日の夕刊でしたが、お母さんが見るのも厭だと

言つて捨ててしまいましたので、よく覚えて居りません。多分「世田ヶ谷に三人組ピストル強盗!!」という見出しで、私達のことは「主人不在中……妻澄子さん(四三)長女博子さん(一八)二女妙子さん(一五)三女美恵さん(一二)同居人の新井克子さん(二〇)の五人を八畳間に押込め、しばらくあげ、猿ぐつわをはめた上、ピストルを突きつけて脅し……」つて出ていただけだったと思います。その記事には、美佐やの名前が出ていなかった事と、名前や年齢や盗られた物などが、本当とは随分違つていたことはよく覚えています。

その三人組は案外早くつかまりました。矢張り悪いことは出来ないと思ひました。家にも知らせが来て、お母さんとお姉さんが検察庁に二、三回行きました。その時、私達が縛られた縄や紐等を検事さんに見せたようですが、あとは何うなったか知りません。

しかし、あんな怖い事があつたわりに、皆別に大した怪我もせず、これだけが幸せであつたようです。お父さんも仙台から帰つてこられてとても驚いていましたが、この事だけは喜んで居ました。

それにしても、新聞によく出ている強盗の記事を見ると、賊が帰ってからすぐ縄を解いて届けるのが多いのですが、私達の場合は、自分達でどうしても解けない程、嚴重にくまられてしまつて、本当に苦しい思いをいたしました。検事さんの話では、その強盗は随分前科もある人達で、それに襲われた家は、皆、私達と同じようにひどく縛られたということですから。その事件があつてから、お母さんは、家をどうしても変ると言つて、とうとう今の場所に移したのです。

私も高校に入ってから、縛られたり、縛られた人を見ると、胸がときどきして楽しい気持ちになることがあります。この気持は、まだはつきり分りませんが、前便でも書いたように、お友達と遊んでいる時や、少しふざけていたずらをした時等です。そういう時ならいくら縛られてもいいと思ひます。だから御誌に載っている写真のモデルのお姉様方の気持はよく分るような気がします。でも、実際に強盗のような怖い人達に縛られるなんて、考えてもぞつとしますし、こんな恐い事が二度と起らない様にと願つています。

それから後でよく考えて見ると、私達にもどこか油断があり、女ばかりでも用心と防犯

の道具さえ備えておけば、必ず大丈夫だつたと思ひます。私の告白と共にこの事を読者の皆様にお知らせしておきます。(おわり)

【編集部註】 投稿者から左記のような御手紙がありましたので文中の氏名は編集部で適当に改変しておきました。

先日投稿しました〇〇〇〇です。あの時、終りの方に書いたつもりですが、「強盗に入られた時の事」を書きました。あれから上級生に言われてすぐかいたのですが、私の文が御本にのせて頂き、編集部の方のおゆるしが出てから送るつもりでした。でも書いたものが家の人に見つかる困りますので送りますこんな文章でも御本にのせて下さいますか、もし、のったらこんな嬉しいことはありません。そして綺麗な挿画でも入れたいなあーと思つています。こゝに書いた事は皆本当です。作り事と思わないで下さい。新聞にも出ました。その時は、もう恐くて何もかも夢中でした。でも今その時の事を思い出している、不思議にはつきり覚えています。そのすぐ後に学校の作文の宿題にそれを書いたことがあるのでそのせいかもしれません。これもそれを見て書いたのです。その時はこんなにくわくは書いてありません。でも初めの方

の様子はそのまま写しました。それから書いた後で所や名前を本当のまゝ書いてしまったのに気がつきました。でも恥しい事もないので直しませんでした。よい変名があったら直して下さい、無ければそのままです。これを読んでこんな恐ろしい人が居なくなればいいと思ひます。それから原稿用紙がなかったのでノートのまゝ送ります。いけなかつたでしょうか、それから万が一、家の人に知れたら大変なので名前は「中野妙子」として下さい。これはお友達の名前をくっつけて作ったのです。御本にのるのをたのしみにまっています。ではよろしくお願いいたします。さようなら。

〇〇〇〇

編集部の皆様へ

(それから題もいいのをつけて下さい)

【告知版】 〇長瀬昭子さん。「私の体験記」は次号へ載せますが、若し挿絵も描いて下さるなら鉛筆でも構いません。続きも期待しています。〇編集部や読者係宛の御便りで、誌上に掲載して困るものは「掲載禁止」通信を貰っていけない方は「返信無用」として下さい。〇数カ月間、居住地が不明だった二俣志津子さんと連絡がつき、作品ばかりでなくモデルとなつて活躍してもいいという勇敢な申出を受けました。

レスボスとソドミアへの福音

羽村京助

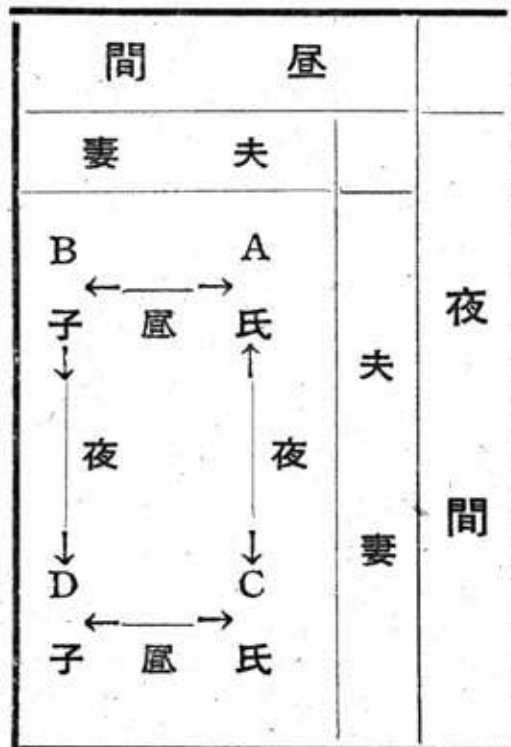


アメリカで同性結婚を認める新宗教（開祖は黒人）が出来たそうですけど、単に式を挙げるだけでは、何等社会的に救われるものではない有りません。社会的に矛盾する事なくホモの世界を維持するには法律的に合法化する程

一般の理解を必要としますが、それは一朝一夕に求められません。例え合法化しても本人の親兄弟の反対、隣人の好奇心や嘲笑を浴びながらホモの自由と幸福を受け入れる事は難しいと思います。

只唯一の方法として今迄反目し合ってるレスビアンとソドミストが握手する事によって始めて得られると思います。

つまり本誌上にでも広告して適当な相手を探し表面上二組の平凡な協議結婚を行い、実際生活は昼と夜、即ち雨戸の開閉と共にその配偶者を変えるのです。昼夜と云っても第三者が居ては駄目です、夜はA氏とC氏の夫妻とB子とD子の夫妻、昼はA氏とB子、及C氏とD子の組合せなのです。そして隣近所の社会的には勿論兄弟友人全てにノルマルな夫婦の同居の様に見せ掛けねばなりません。



普通の結婚でさえ「帯に短く襷に長し」と云う程相手を探すのに大変なのに四人の配合は極めて困難と思われるでしょうが、愛の対象は異性では無く同性なので、四人中

の二人の異性は人格的に信頼出来れば細かい事はどうでも良い筈です。而し次の様な諸問題を克服せねばなりません。

一、一軒の家に住み、第三者を入れない事。
二、なるべく、親兄弟親戚等から離れた土地に居る事。

三、アブ・ノルマルな夫婦の領域をお互に侵犯しない事（子供が出来る、この先これを超える事が出来なくなる）

四、四人共お互に信頼し合い理解し合って仲違いしないで多少の不便は忍ぶ事。

五、同性間でも一人が疑似ホモであるとは一番困り、同性間でも年令的にマゾからサドへの転化の時期が一番危険、それだけでなく同性間の浮気による仲間割れは全体に迷惑を掛ける。

六、最初は四人共稼ぎでも、後には男二人が伪いて女二人が勤めを止め、男側は経済的面倒を見、女側は身の廻りの面倒を見るべきです。そして男が死んだ時、遺産は女側に残さねばなりません。

その代り多角的に楽しめます。二人が連縛され、木馬の刑を受けながら鞭を受けたら素晴らしいと思います。

同性連縛される時は、二人の仲に嫉妬して

異性の求婚者からリンチを受けるテーマですが「あなたと一緒になら、どんな苦痛だって良いわ」と云う事になり、又異性の連縛なら同性を裏切った浮気のお仕置きなのです。

この四重奏は倦怠期を救う為の刺激剤としてたまに行う程度にしないと、余りしょっちゅう行くと主客顛倒して、どちらが本当の夫婦（？）だか判らなくなるでしょう。

勿論それで良ければ、それに越した事は有りません。以上が私の「ホモの社会的生活の合理化」の概略です。読者の御意見を聞き度いと思います。女性側も投書して下さい。

つづいて自己紹介致しますが、私は決してホモでは有りません。而し十二才の時同年の美少年に強く魅惑された事が有りますが、それも数ヶ月で彼が転校した為、親しくなる機会（つまり私は当時内気だったのも無かった次第です。十七才の時、洋装した所、赤いツーピースに帽子を被った丈でノーストッキングの上に口紅はもとよりお白粉も塗らないのに、鏡の中の私は何処かのお嬢さんかと思う位、我ながらうっとりと思とれる程、とても美しく見えました。其の頃は脛には毛が生えて無くて、真直ぐで、細くて白く、大抵

の女性よりもスマートだった点で、同僚の注目を浴びた事も有る位でした。

それでノーマイキャップでこれ程美しいのなら、女より男の方が遙かに素敵だと思いました。十八才の時、或る本を読み驚きました。それは女性型男子のホモの人は筋骨隆々たる年上の人に魅力を感じると書いてあるのに、私は極端では有りませんが、女の様な容貌と性格を備えている癖に、同年又はそれ以下の女性的な優形の美少年が好きなのです。その上、私は十才の時、女性を、十二才より同性を意識した両性愛者なのですから此の本を読んだ時、この本にそんな事迄書いて無かった為、これは変態以上の変態と思って大変ビックリしました。

而し同性愛も実際に相手を得た事も無ければ、前記の少年に代るべき人を見出す事も無く、意識の中だけで、それも二十才以後は完全に消滅したのです。それに学校卒業によって女性と交る事によりノルマルになったというより、男女共学でない当時の環境が一时的にホモへと転化したのでしよう。私がおこがましくも羽村京助と名乗るのは羽村さんが奇クに始めてデビューした時から羽村京子さんが大好きな位流暢マニアだからです。

A 感 覚 の 秘 密

羽 村 京 子

栗 原 伸・画

一

子供たちが物心つきはじめると、母親に「赤ちゃんはどこから生れるの」といって聞くように、そして、ある心理学者の報告によれば、胎生の秘密を知りたいとねがった少年が懐中時計をこわしてその中を見たように、私は、私の「A感覚の秘密」をつきとめるためには、私のお腹を切りひらいてその中をしらべなければならぬと思いました。性の秘密は、女性にとっては男性にとつてとことなり体の内部へと秘められており、妊娠という事実によって、この内部への関心ははるかに奥深いものとなるのです。男の方にとって、私の女らしく肉づきのよい、やわらかい体や、ゆたかに盛り上ったふたつの乳房や、うしろにぽっかりと桃のようなわれ目を見せて、その母性としての重荷をしっかりと受けとめるために、がっしりと大

きく張つた腰部などが、いかほど関心の的であろうとも、私の性感覚は、まぎれもなく、この内部のどろどろしたものの中に、錯綜し倒錯して存在しているのですから、私はこれらのものを、ときほごし、切りはなして行かないでは、私の「A感覚の秘密」をさがし出すことは出来ないのです。

この内部のどろどろしたもの——内臓は私の胴の中におさまっています。私の胴は一つのふくろ、もしくは一つの箱といつてよいかも知れません。それは上半分の肋骨という骨の箱でできており、下半分は骨盤というがっちりした骨のお椀の中に盛られています。このお椀はうしろの方が高くなっており、またうしろ側は太い背骨が通っていますから、骨でかこまれていないところというのは、まえ側の下半分——ここがお腹です——と、肋骨のてっぺんと骨盤の底のところのぽっかりあいた二つの穴だけです。この箱を骨組にして、

あるところはうんとぶ厚く、あるところは比較的うすい肉の層が内臓をとりかこんでいるのです。しかし私はどうしても下半分を問題にしなければなりません。というのは、下半身こそ、人間が他の動物と同じように性の営みをいとなむために必要な部分であり、妊娠出産と性の負担をより多くかけられている女性に特によく発達している部分であり、私の分析に必要ないろいろな道具、小道具がそこにすっかりそろえてしまっている部分だからです。私はまず、睡眠薬を浣腸されたゴム管をお尻につっこんだまま、だらしなく意識を失ってまないたの上にうつぶせにのびている羽村京子の体をうら返しにして、一ばん切りやすいお腹の方から切りひらいて行くことにしましょう。

みぞおちのところからメスを入れて、肋骨の下へのりに沿って左右の脇腹まで切りさいて行き、次に、腰骨に沿って骨盤のまえ側を恥骨のところまでえぐってしまえば、女性のシンボルである乳房をのこしたままお腹の皮と筋肉とがごっそりとれて、お腹の中があらわれます。大部分の臓器はまだ白い、つやのある腹膜で掩われていますから、このぶよぶよした大きなふくろをハサミで切りひらいて内部の臓器をすっかり出してしまわなければなりません。

ぐちやぐちやに一かたまりになっていますが、うねうねとまがりくねったおびただしい腸管、細くてなめらかなのが小腸で、太くて凸凹していて、ひもがついているようなのが大腸です。大腸は体の右側の、虫様突起のついた盲腸から上にあがり（上行結腸）、お腹を横ぎって（横行結腸）左側でふたたび下において（下行結腸）います。ぷくっとかわいらしくふくらんだ膀胱。上の方には茶褐色のグロテスクな大きな臓器——肝臓がのぞいています。肝臓になかば

掩われるようにして、何やら妙な形にふくらんだものがあります。これは胃袋でしょう。京子が体をもそもぞと動かして何やら言いました。多分自分が解剖されていることも知らないで面白い夢でも見ているのでしょう。構うことはありません。腸間膜をひっぱりすぎて破ってしまわないように注意しながら、これらの邪魔になるものをのけて、その下に何かがあるかしらべてみましょう。

真中に何か珍らしい果物のような、かわいらしく美しい臓器が見えるでしょう。これが子宮です。両側にちっちゃなバラ色の卵巣が二つ、輸卵管でつながっています。知らないでいたら、これがそんなに大事なものだとは誰も気がつかないでしょう。子宮の下は腔につづいていて、さっきの大腸のつづきがぐるっとまわって（S字状結腸）そのうしろにもぐりこんで（直腸）います。その他には、輸尿管で膀胱と連絡している腎臓が、そら豆のような恰好をして背骨の両側についているのと、大きな血管が見えます。脾臓とか膵臓とかいうのもありますが、これで一応京子のお腹の中は分りましたから、ひろがっている腸を一まとめにして、もとのところにほうりこんでおきましょう。何も知らない京子は、まだよく眠っていますから、このお腹はもうしばらく開けたままにしておきましょう。目がさめて驚くところを見てやりましょうよ。

——結婚まえのまだおとなしかったころのように、私はだまっていたのしく彼の説明を聞いていたはずなのに、目がさめてみると、私はおふとんの中で夫の腕に抱かれていました。二人の間に横たわっていた羽村京子はどこに行ったのかしら。お腹に手をあててみましたが別にどうもなっていないようです。頭の中を、さっき見た臓器の数々が一つ一つうかんでは消えて行きます。——あたたかい日さ



しの日曜日の朝でした。

でも、私が本当に解剖されるなんて、本当に夢の中ではないことです。私はひそかにそれをねがっていますし、そのことを考えただけでも興奮してしまいますけれども。しかし京子を解剖してみたって、きつと普通の女の人とそんなにちがわないでしょう。もちろんよく見れば、多少はちがったところがあるかも知れませんが、体のしくみそのものは決してちがうはずがありません。こんなことなら、はじめから解剖学の教科書でも見ればよかったのです。

二

人間の内臓はいくつかの系統に分れています。すなわち消化器系、泌尿生殖器系、呼吸器系、循環器系、脳神経系がそれです。このうち最後の二つは大切なものではありませんが、外部への通路をもたず、従ってそこから外部へものを出したり、外部から入れたりすることはありません。それはいわば時計のような正確さで、他のものにくらべてはるかに規則正しく動いています。呼吸器は口によって外部と連絡していますが、出し入れするのはたんに空気にすぎず、口のある場所は私たちにとって関心のうすい、お上品な体の上半身についています。これもかなり規則ただしく動きます。消化器と泌尿生殖器とはこれに反して、私たちが見たように体の下半身の中につまっており、いずれも下半身に開口部をもっています。それらの器官が出し入れするところのものは、それぞれ、人間の二大欲望である食慾

と性慾とに關係しているのです。もちろん内臓は皮膚のような感覚をもちません。いわゆる臓器感覚というのは、体の表面が感じるような、痛いとかかゆいとかいうようなはっきりした感覚ではなく、正確な部位も性質もわからない漠然とした感覚です。しかしこの感覚は、お腹がすいたとか、便意をもよおしたとかいうような、また性的な衝動を感じる場合のような、きわめて重要なものです。しかしその部位や性質がはっきりしないために、しばしば混同され、とりちがえられます。人間の二大欲望に關係した臓器がごちやまぜになって実にお腹の中に入っているのです。お腹の中はまた、胸のように箱でかこまれてきちんと形がきまっていないので、臓器はお互いに移動し入りくみあってその形をかえるのです。これらの臓器は普段は規則ただしく動いていますが、時としてひどい変調をおこすことがあります、その変調の幅もずつと大きいのです。

私たちが「お腹が大きい」というとき、それは二つの意味をもっています。一つは充分食べて満腹している状態を云いあらわすもので、もう一つは妊娠している女性のことをいうのです。妊娠といういうまでもなく子宮に子が宿るのですが、子宮はむかしでは女性の極端に走りやすい感情の根源だと考えられました。ヒステリーという言葉がギリシャ語の子宮という言葉から来ていることがこれを示しています。しかし、ヒステリーは何も子宮に限ったことではありません。腸もまたヒステリーをおこすのです。これは子宮のまだ充分に成熟していない、少女によく見られる現象です。学者のあげている例を見てみましょう。

「五歳女、離乳期から下痢または便秘を繰返した。二・三日便がないと浣腸を試みるが、昨今は浣腸をしなくては排便がなくなった。

母は肥満した脂肪の多い人で母にも頑固な便秘があり、五・六日に一回排便があり、便が固くて腹痛を起すことがあるので、時には自分の指で掘り出す程であるという。……」

「便秘の訴えで入院した少女に下剤を与えるとよく利き、しまいに無効量でも下剤だと言って与えるときいた。……」

「頑固な便秘によって大便失禁を生じるまでになり、手当によって総量三疋の大便を出した十二歳の学童の実例……また神経性便秘によって、遂には吐糞症状を起し、開腹手術をしたが何の異常もなく、転地寄宿によってなお家庭に戻ると再発し、再び一年間の転地寄宿によって今度は家庭に帰っても全治した著しい小児の例……脱糞は神経質小児にとっては、はなはだつよい関心の対象であることを思わせる」

これは木田文夫先生の「虚弱・病癇兒童の教育」という本から引用したのですが、このようなはげしい腸のヒステリーがはたして性的なものとの關係がないと云えるでしょうか。この場合、消化管の優位は圧倒的です。それは、奥の方におさまった比較的小さな生殖器にくらべての、腸のおびただしい分量がすでに示しています。

このお腹の中に一ぱいつまったものもやめたものは、うずまき、にえくりかえって突破口をさがし求めます。それと同時に人間は外から、この性慾——食慾の殿堂の内部への入り口をさがしているのです。骨でがっしりととりかこまれ、ぶ厚い肉のついているところは駄目です。骨のない、肉も出来るだけうすいところを選ばなければなりません。それは二つあります。一つはさっき羽村京子を切りひらいたお腹です。もう一つは両脚の間、うしろのわれ目から前にぬける線、骨盤の底の穴の真中を走っている溝です。

三

A 感覚を性的なものに結びつけて解釈したフロイトは三つのことなつた性感を区別しています。口唇、尿道、肛門にそれぞれ代表される性感がそれぞれ、私はそれぞれ、oral, urethral, anal の頭文字をとってO性感、U性感、A性感とよびたいと思います。そうすると、もう一つの一そう直接的な言い方であるV感覚、P感覚、A感覚のトリオとの間に、O性感——V感覚、U性感——P感覚、A性感——A感覚、という対応関係が生じます。このフロイトの概念を用いることには次のような利点があります。つまり、V感覚、P感覚、A感覚の組合せでは、女性にはV感覚とA感覚だけしかなく、男性にはP感覚とA感覚だけしかかったのに、O性感、U性感、A性感、の組合せでは、女性にも男性にもその何れもがそろつてあるということ、しかもO性感の位置をそのままV感覚の位置に置きかえれば、（男性ではこの置きかえが出来ませんが）、女性の場合には三つの性感がすべて下半身の一つのところに集つてしまうのです。女性の性感を考える場合でも、男性のそれを考える場合でも、この三つの性感をすべてとり入れて考えることは必要なことだと思ふからです。

いろいろな学者、たとえばヴァン・デ・ヴェルデも、体の開口部の周囲が特に性感の強い部位であることを指摘して、直接に性的な部位の外に、肛門のまわり、口のまわり、鼻や耳のまわりなどをあげていますが、このうち特に重要な肛門のまわりと口のまわりとがいずれも消化器の開口であることを注意していただきたいと思ひます。しかも、口は食事だけでなく、呼吸や会話にもつかうところで

すし、殊に決定的に重要なことですが、それが上半身の、衣服に被われない顔にあるということは、口の性感をすっかりきれいに、そしてしまつて、性欲にまつわるあらゆる秘密的性格をそれから奪つてしまうのです。肛門の位置は決定的に重要です。それは、A性感の開口部として、O性感やU性感の開口部とすぐ隣りあわせになつてゐるばかりでなく、開口部から一歩中へ入つても、器官が隣接しているという関係は失われず、さらにこの関係は、私たちがさっき見たように、性慾——食慾の最深部である、もつれあい、入りくみあつた腹部内臓にまで及んでいるからです。

長い間とじこめられてゐる男の囚人は、正常な性の解放が妨げられてゐるために、どんな穴でもただ穴さえ見ればひどく興奮するようになるということを、何かの本で読んだことがあります。私たちがここで問題にしているのも実はこの穴なのです。開口部というのはひらたく言えば穴のことです。人間はこの穴を通じて食物をとり、栄養を吸収します。残つたかすは別の穴から体の外に捨てます。はじめの方の穴は、多くの目的に兼用にもちいられるきれいな穴です。ところが、あとの方の穴は体のうしろについていて、ほんの近くにとんでもないもう一つの穴があります。その穴はうしろの穴とちがつて、出す方専門ではなく、一つの穴で入れるのと出すのと兼用になつてゐます。うしろとまえとのこの二つの穴は体の外ばかりでなく、中でも密接にとなりあつてゐることは私たちが見て来たとおりです。混同、そして倒錯が、これらの穴、特にうしろの穴にあらわれることは不思議ではありません。

それではこのまえの方の穴はどういうはたらきをするのでしょうか。それは子孫をふやすために子供を生む穴なのです。しかし誰も

知っているように、子供は女だけで生めるものではありません。男の体から、あるもの（精子）をもらって、それを女の体の中にあるもの（卵子）と結合することによって初めて子供を生むことが出来るのです。妊娠そして出産というのがこの穴の大きな役目ですがそのためには男の体から精子が女の体の中に入らなければなりません。そしてこの入り口もまたこの同じ穴です。人間が受胎し、妊娠し、出産するためには、食物の場合と同じように、機械のようにひややかにつとめをはたすではありません。食慾、そして性慾が、人間のいとなみの原動力なのです。そしてこれをうから支えるものは、人間の感覚、肉体的な快感なのです。このことは性慾の場合は、食慾の場合よりも一そう決定的です。人間は食慾をみたさないでは一日も生きて行くことが出来ませんが、性慾はそうではありません。また、肉の快樂といえは性慾の方を指すことでも分りますがこれは、食慾は体の上の方にある口で満足されるために、専門の器官である舌はもとより、鼻とか、目とか、いわゆる五官という分化した、程度の高い感覚器官の助けをかりて、快感を分析してしまうからでしょう。性慾の場合でも五官が積極的な役割をはたすことはヴァン・デ・ヴェルデも書いていますが、それはただ副次的なものにすぎず、性的な快感は、非常にはげしいけれども極めてわけの分らない、ただとても気持ちいいとも言より外に形容のしようのないものです。

このわけの分らない感覚は、すぐにでも、わずか二・三センチしかはなれていない、すぐうしろにある穴に移ってくる事が出来るように見えます。ところが、この、まえの器官のいとなむ妊娠、出産というはたらきを、この、うしろの器官はどのようなやりかたで

代理して行くことが出来るのでしょうか。女の宿命とまで考えられる、この妊娠という事実、この残酷な、動物のような役目こそ、A感覚のあらゆるセンマイをくるわせ、京子のお腹の中にぎっちりつまった腸をひっかきまわし、もつれさせて、京子のお腹の中をひっくりかえしてしまうものなのです。

四

妊娠、出産という、女の体の一ばん大きな役目は、動物のようにあさましい、そして秘密にみちたものです。それは女のかくれた本質であり、いろいろな気味のわるい姿をした妖怪につきまといまわっています。子供たちの、「赤ちゃんはどこから生れるの?」という質問はやがて「どうして赤ちゃんは出来るの?」という一そうすんだ疑問になって来ます。このあとの方の疑問は未開人にとっても大きな謎だったらしく、数々の荒唐無稽な解釈を生み出していますが子供たちも、これら未開人たちがやったのと同じように、自分たちの知っているかぎりの知識をふりしぼって、この二つの疑問に彼らなりの解決を与えるのです。多くの神話や昔ばなしの中に出て来る蛇や狼や犬など、これらの動物が人間の女をはらませたという、しばしば偉人の出生にまつわる怪奇な物語りにも示されているように正しい知識が与えられていないところでは空想がその代りをする、というごく当りまえの道すががここでもたどられたにすぎません。

私たちは、岡田寅次先生の「思春期の性意識」という本の中の、主として中学三年生の女生徒を対象として行った調査の報告から、この道すが（それは子供たちの空想だけではなく、多くは両親や先生などの暗示も入っているでしょう）をしらべてみることにしましょう。

う。

一、「どうして赤ちゃんは出来るか？」

(精子はどこから入るか?)

一三一名のN中女生徒のうち、正解は十五名、二名が肛門と答えています。その翌年の一〇七名の調査では正解十名に対し、こうもんは四名です。数からいうとそんなに多くありませんが、これは、誤解の多くが性交の秘密を知らず、極めて罪のない、無邪気な空想をもっているためで、精子は口から入るという解答の多いことがこれを示しています。その理由として、岡田先生は、

「口は穴であるという理由が第一、その証拠に、精子進入口を、鼻の穴・目・耳・こうもん・ひふの毛穴に求めている解答が毎年出て来ることである。……」

「第二の理由は、口から食物をとって腹に送るということから口を精子進入口に選ぶらしい。……」

「第三の理由は、口は呼吸をする、……」

だから男の口から女の口の中にいきと一しよに、または接吻とともにふきこまれるというのです。

第一の理由をのぞいては、いずれも子供らしい、たわいもない考えであることが分ります。また第一の理由にしても、口や鼻や耳というのはどうでしょうか。上半身にあるこれらの穴から入って来るというのは、やはり子供らしい、無邪気な考えではないでしょうか。下半身にとりなう、あのはずかしい、うしろぐらい感じにくらべてみれば、このことは明白だと思います。私たちは「A感覚の秘密」という特殊な問題をあつかっているのですから、肛門という答は、数は少なくとも重要な空想なのです。ここには肛門性交へのい

とぐちがあります。

二、「赤ちゃんはどこから生れるか？」

(胎児はどこから出るか?)

「出産に関する知識の誤解答は……大別するとおなか(おなかがわ)れて出ると説くものを含む」をさすものと、おしり(こうもんと記述したものを含む)をさすものになる。……」

お腹から生れるとするものについて、

「……この知識で実際見たというのがあったが、それはお風呂で母親(あるいは他の婦人)のおなかに筋があるのを発見し、実際にみたと確信をもったのであった」

「……おしり、こうもん等からうまれると解答しているもので、……実際見たというの……は動物のお産を見ているもので、他に映画(お産の映画)を見て「おしり」と答えているものがいた。陰門(腔口)と肛門の区別はなかなかむずかしい。……」

夜間高校生(女)三十七名に対する調査では、

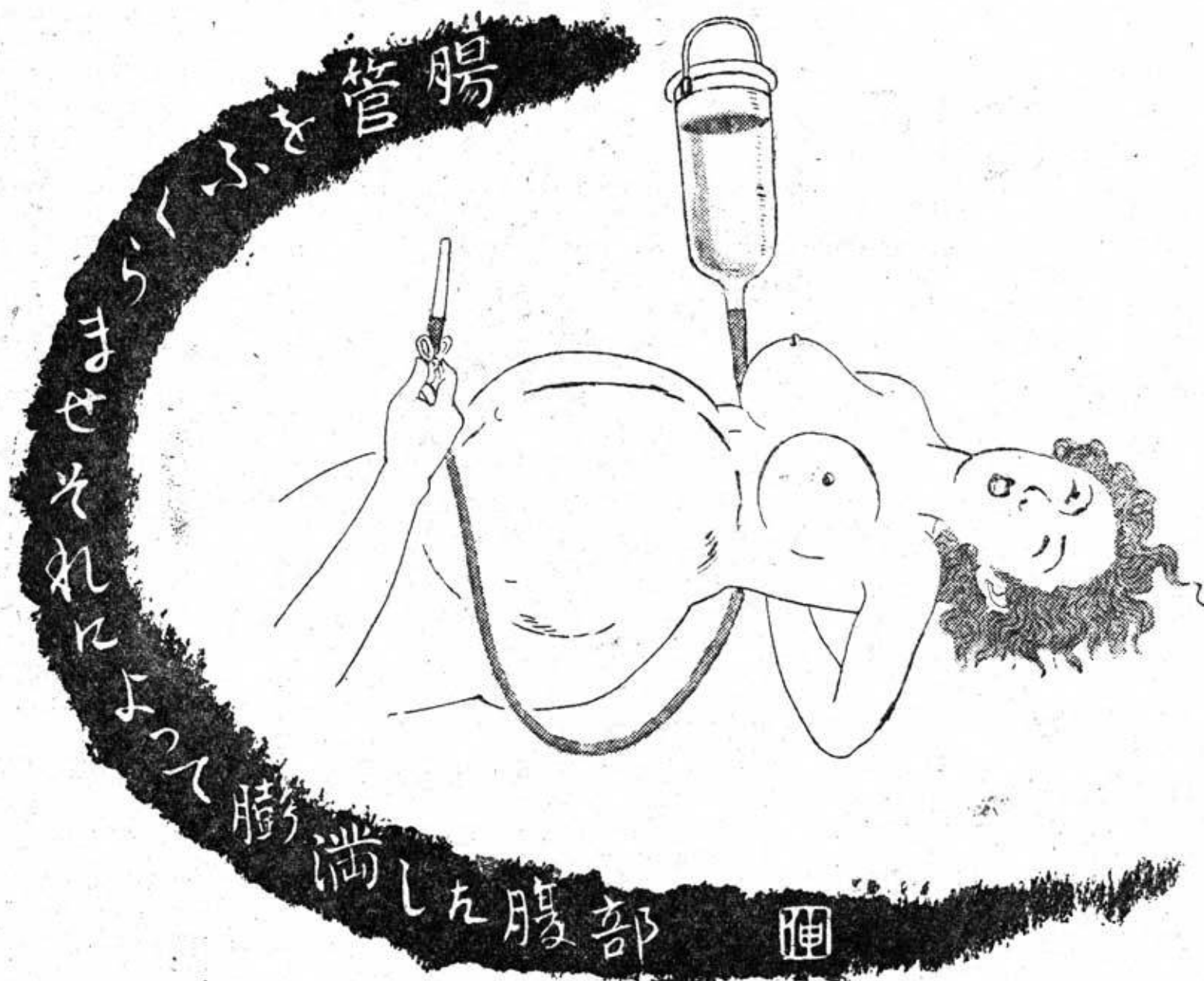
「知識内容は肛門、子宮が多くなってくる。しかし相変わらず「おしり」と書くものがある。中学三年生でお産の映画をみて『おしり』と答えているのがあったが、高校二年で、映画をみまじと書き解おなかと書く者が少くなることで、……」

しかし、そこにのっている別の高校女生徒についての表を見ると数からいえば肛門よりもお腹の方が相対的に多く、腹、腹を切る、腹がやぶれる、なかには臍、などと書いています。お腹から赤ちゃんが生れるという空想は、だんだん下の方に移って行くものでしょうが、心の奥底では決してすっかりなくなってしまうものではない

ようです。おまけにお腹には穴がありません。というより、お臍の穴は母親のお腹から出てからはふさがってつまってしまっているのて用をなさないので、お腹から赤ちゃんが出るためには、お腹を切りさいたり、破ったりしなければなりません。この空想が決して消えさるものでないことは、妊婦が死んだ場合だけです。帝王切開によってお腹から赤ちゃんをとり出すことは、ずい分古くから行われていたこととか、切腹ということに関する根づよい関心が大人たちの間にあることでも分ります。

赤ちゃんは精子のようにごく小さな、目に見えないようなものでなく、まえの場合のように鼻や耳や、まして毛穴から生れて来ると考えることは出来ません。そして、妊婦を見れば、その大きなお腹の中に赤ちゃんがいるということは明白です。そこから出て来るためには、骨のない、やわらかいところを選ぶより外に道はありません。こうして、二つの方向、お尻とお腹とがうかんで来ます。おしりの方は、本当に赤ちゃんの出て来る道がすぐそのうしろにある道と混同されるのですが、これを腸管出産空想 *fantaisie cloacale* とよぶなら、お腹がわれて出て来るという方は、帝王切開空想 *fantaisie césarienne* と名づけていいかも知れません。この場合はもちろん、お腹は切腹の場合のように横にわれるのではなく、この調査の中の少女がお風呂の中で母親のお腹に見た筋のように、縦にわれるのでなければならぬのです。

五



少女たちが女性として成熟しはじめるとき、自分の体におこって来るいろいろな変化に気づいて、人知れず顔をあからめるものですが、このような体の変化の一口は乳房は強い性感をもっているが開口部でもなく、体の下半身にもついていませんが、上半身にあるとはいっても顔のようにむき出しになっているのではなく、衣服に被われています。思春期の乙女たちは、このうらはずかしい、人に知られたくない体の秘密を、注意ぶかく人目にふれないようにかくすものです。それがあまりにも直接的に性的なものを連想させる下腹部にないということは、かえってこの器官にロマンチックな美しさを与え、女性のシンボルとして芸術家たちによって誇示されることになりましたが、この体の変化が、同時に少女が母性になるための体の変化であり、妊娠、出産、育児という女の体の一ばん本質的なはたらきにむかって、女体を完成させるためのものであることこそ重要なことだと思えます。女性のシンボルとしてのふたつの乳房は、妊娠という事実が女体のあらゆる構造を支配し、子をはらむことこそ、女性のあらゆる秘密がそこにかくされている窮極の目的であることを、何よりもはっきりと物語っています。妊娠した女性の美、妊婦の満ちたりた美しさに多くの男性が心ひかれるのも当然のことでしょう。

想像妊娠という病氣(?)をご存知でしょうか。妊娠を非常につよくのぞんでいる女性が、本当は妊娠していないのに、メンスがとまり、お腹がだんだん大きくなって、本当に妊娠したのと同じようにお腹の中で胎児が動くような気がしたり、ひどいになると十ヶ月にまでなつて陣痛さわぎをおこしたりすることもあるそうです。もちろんこれはヒステリー性のものでしょうが、かえって、女性の

妊娠に対するはげしい渴望を最もむき出しの形であらわしているとも云えましょう。子宮外妊娠というような肉体的な病理現象でもなく、純粹に精神のやまいとして起るこのような現象は一体どういって説明したらいいのでしょうか。当然お腹が本当にふくらんで来なければならぬのですが、これは腸管が膨大するのだといえます。そして、この異常に膨大した腸が動くのを胎児の運動だと誤認するのです。腹部内臓の間では、生殖器がはたすべくしてはたしえない役割は、消化管が代ってはたさなければなりません。離れて行く男の心をつなぎとめたいとねがった女が、窮余の策として、自分でお尻から腸の中に空気を入れこみ、いつわって妊娠しているように見せかけたという話も、同巧異曲の思い付に出ずるものでしょう。混同され、倒錯された妊娠の秘密は、実に、腸が子をはらむということの中にあるのです。お尻の穴がそのまえにある穴と混同される時、直腸はそのまま腔になり、その上につづく腸の部分が倒錯された子宮になることは明白であるからです。

もっぱら精神だけの作用によって腸が子をはらむということは誰にでも起りうる現象ではありません。空想は現実にはひきもどされねばならず、現実にはひきもどされることによって、それは空想として完成するのです。現実には、腸の中に多量の液体を注入して、実際に腸管をふくらませ、それによって膨満した腹部と、同時に内部から圧迫される体感をつくり出すことが出来るのです。液体を特に選ぶのは、空気にくらべてはるかに大きいその質量感を好むからです。二リットルも三リットルも、時には四リットル以上もの液体によってふくらまされたお腹は、なしくずし的にだらだらとお尻から出してしまふのではなく、逆に、抜けてしまわない位の大きさに直



押

腸内でふくらまされた球が内部からしっかりと出口をふさいでしまうことによって、妊娠の空想が完成されるのです。下の方の出口にふたをしてしまった以上、残る出口はただ一つしかありません。羊水過多症にかかった妊婦のように水分ばかりでぶくぶくにふくらんでいるお腹は、帝王切開の手術によってしか赤ちゃんを生むことが出来ないのです。ちょうど骨盤がせまくて胎児がそこから出られない場合には腹壁を切りひらいてとり出さなければならぬのと同じことです。

同じことを男の体に対して行った場合、デカメロンの中に出て来る「はらみ男」の空想が実現されるといえます。しかし、はらみ男の空想はどことなく滑稽な感じがします。それは現実的ではありません。女の体に適用してこそ消化管によって妊娠するという倒錯が妖しい現実感をもって来るのです。胎生の秘密を知りたいという願望が、その女の腹を割かせ、女の、みにくくふくらまされた腸をとり出させます。それとともに、帝王切開によって胎児がとり出されるという空想が完結されて、女体のかくされたはたらきのすべてが、消化管によってなしとげられるという倒錯した秘密の全貌が明らかになるのです。

六

お腹が縦にわれて、そこから赤ちゃんが出て来るという空想が、子供らしい、無邪気な思いつきから出たものであったように、そして実際に行われた切腹がそのまま直ちに

死を意味したように、腹を割かれ、解剖されるということは現実にはとうてい起りえないことです。それは夢の中でしか実現されることのない、はかない空想にすぎません。空想であるがゆえに、それがどんなに自由で奔放な姿をとって、ありとあらゆる奇抜なアイデアがそこではばをきかせようとも、それは満たされえない願いであり、時には荒唐無稽なあの世の物語りにすぎないのです。その倒錯した色情のはけ口をもとめて、羽村京子がどのように狂おしい空想にむなしく身を委ねるかを、一つ見ていただきたいと思います。

空想の中で京子は一人の女スパイになります。その女スパイは重要な秘密の文書をもって、それを敵に見つからないように味方のところに届ける任務を与えられます。その文書は、決して溶けない、小さな金属製の容器におさめられて、京子の口から呑みこまれます。向うについたらすぐ京子は腹を割かれて、それをとり出されることになっているのですが、かわいそうないけにえである京子はそのことを知りません。それだけでも大変ことですが、京子は運わるく敵の憲兵につかまってしまふのです。すっかり脱がされた衣服は一本の糸にまでときほごしてしらべられ、体のすみずみの、ものをかくしていそうなどころはくまなくしらべられるという。嚴重な身体検査をうけます。肛門鏡とか、子宮鏡とかいうような器具までもち出して体の中の、外から届きうるかぎりのところはあらゆる手段をつくしてしらべられるのですが、もちろん体の奥深くかくした密書は出て来ません。どうやら私のもっている文書は一刻の時も争う重要なものらしいのです。敵はますますいきり立って、あらゆる拷問を加えることによって自白を強要しますが、私はどうしても白状しません。

「この女の腸の中をすっかり洗い出してしまえっ」

私は下剤を拒否しますので、猛烈な高圧浣腸をかけられます。とつぜんお尻にはげしい痛みを感じるや否や、どんどん水が注入されて来て、急速に腸壁がおしひろげられ、みるみるうちに下腹が、ぐ——ぐ——ぐ——と張って来るのが分ります。たちまちものすごい勢いで腸管が怒張し、下から胸をつき上げて、私は思わずガーッとにがい汁を口から吐き出しました。お腹は、なさけなくふくれ上ってはりさけるように苦しく、身うごきする気力もありません。入るだけ入れおわると、今度は上からお腹を力一ぱいにおさえつけ、もみくちやにして、中に入れた水を早く出してしまおうとあせるのです。私はあまりの苦しさに生きた心地もしない位ですがある時はいきおい余ってジャ——とはげしく、ある時はだらだらと流れるようにお尻から水が出て行きます。それでも密書は出て来るはずがなく、今やこの倒錯した人間ポンプのなぐさみにたけり狂った男たちは、二回、三回とこれをくりかえしました。

「ようし、こうなれば腹を割いてみるまでだ」

私は台の上に蛙のようにあおむけに縛りつけられ、またしても高圧浣腸をうけました。しかし今度は出してしまふのではなく、入りきったところで直腸内にうんと強靱なゴムの風船を入れ、それをそこでふくらまして水が一滴もこぼれないようにしてしまふではありませんか。男たちは京子の腹を、みにくく蛙のようにふくれ上ったままに切りさこうというのです。しかもいつでも尋問出来るように下半身だけを麻酔して意識が明瞭なままでお腹を割こうとするのです。何ていう残酷な思い付きでしょう。怒張しきった腹部のまんなかにメスがあてられました。

みぞおちから下腹部まで一文字に切りさかれた大きなさけ目からフットボールのようにふくらんだ太い大腸が、はげしい勢いでボンと首をもたげるようにとび出して来ました。つづいて、ぼこり、ぼこりと、まるで海の底にすんでいる巨大な蛸の怪物の脚のようにうごめきながら、次から次へと頭をもたげて来るのです。私自身の腸とはいえ何という気味のわるい姿でしょう。気がとおくなりそうに私にひきかえ、男たちは歓喜の叫び声をあげましたが、あまりのすごさにしばらくは手もつけられないでいるのでした。やがて一人の男がお腹の中にメスを入れると、内側から器用にぐるっとまわくえぐりとして、お尻の括約筋のついたままの直腸をそっくりとり出しました。他の男たちも手をかして腸間膜を注意ぶかく念入りに切りはなしながら、腸をその下の方からずると体の外にひっぱり出しはじめました。

「あった、あった。やっぱりもってやがったんだな」

密書は盲腸の虫様突起の中にはまりこんでいたのでした。小さな虫のようなその部分のものが糸でくくられ、医者が手術のときにするのと全く同じやり方で、ばちんとハサミで切りはなされました。しかし私の拷問はこれですんだわけではなかったのです。若くて美しい(?)女スパイをなぶりごろしにするという絶好の機会にめぐまれた野獣たちは、すでに腸をひきずり出されて息もたえだえになっっている私の体を、なおも徹底的になぐさみにしなければ気がすまなかったからです。こうして地獄のような光景がそこにくりひろげられるのでした。

「さあ、思い切りなぐさんでやるぞ」

腸をひきずり出してそれを丈夫なクサリにかえ、それで手足をし

ばってしまおうというようなことが西洋の神話によく出て来ますが、それはいずれも頑丈な体格をした男のことで、相手が女では面白くないと思ったのでしよう、男の一人がやにわに私の腸の末端をとり上げると、その上端はまだ私の体についていたままなのに、お尻の括約筋をひらいてその中にゴム管をさしこみました。さっき私のお腹に浣腸した強力なポンプで、またどんどん水が入れられて行きます。お祭りで風船を買ってもらった子供のようになり、すでにかんりの水でぶくぶくにふくらんでいる私の腸をふくらむところまで一ぱいにふくらましてみようというのでしよう。ゴム風船をふくらましてところどころ糸でしばったように、一定の間隔をおいてむくむくっとくびれている太い大腸は、みるみるうちに大きくふくらんで来ました。直腸の一番ふくれたところなんかは大人の頭よりも大きいのです。大腸と小腸との間は一応逆流をふせぐようになっていますが、はげしい水の圧力におされてだんだん上へと小腸が、ぶくり、ぶくりとふくらみすすんで行くさまがよく見えるのでした。男たちはもう私の腸の大部分をとり出して、これ見よがしにそれを台の上にならべて見せるのです。こともあろうに自分の腸がこのようなグロテスクななぐさみに供せられているのを見ていなければならぬ私の、耐えようにもたえられない気持を何と知っているのでしょうか。身長は何倍もある長い腸がまるで標本のようになっすぐに伸ばされて、目のまえに幾列にもなっ陳列されているのです。小腸がその上端までふくらみおわると、男たちはそこを糸でむすんで胃袋との間をハサミで切りはなしました。私の腸の全部が、完全にふくらまされて台の上ののったのを見ながら、およそ腸と名のつくものが体からすっかりなくなってしまった私は、もはや精根つきはてて

しずかに息のねをとめてしまうのです。

けれども最後にもう一つ、この物語りが完全な形で完結するためには、ここに残った女スパイの死体が、敵の将兵たちによって、お魚かにわりのように、あるいは屠られたけもののように、きれいに料理されて食べられてしまうことが必要です。羽村京子の肉体はそして特にその生命をつかさどる枢要な部分である内臓諸器官は、こま切れにされどろどろに噛みくだかれて他人の消化管の中に入りそこで消化吸収されて、残りのかすはお尻から出されてしまう——京子はそのようなことを欲しているからです。その場で直ちにひらかれる宴会の食べ物としては、京子の内臓——臓もつだけで充分ことたりるでしょう。脳漿はなまのままでお酒のさかなに、子宮や卵巣はこりこりしたおいしい酢のものに、その下の、下腹部の、やわらかい肉片はそのままおさしみになるでしょう。ほかほかと湯毛の立った肝臓は大きな皿に盛られ、舌はビフテキに、心臓や腎臓や膀胱はごった煮の部類に入るでしょう。そして肉はすべて、ソーセージやハムになって、とり出された長い腸の中に詰めこまれてたくわえられます。太ももや、腰や、背中や、胸からはやわらかい肉がたっぷりとれるでしょう。こうして、あとにはただ、うずたかくつまれた白骨の山だけが、女スパイ——京子のものとして残るのです。もう一つの食べられない部分である、剥ぎとられた京子の全身の皮膚このうす気味のわるい人間の皮は、きれいなめされて、羽村京子というこの二十世紀のウィッチ（魔女）の、ふしぎな倒錯のよろこびをしるした数々の告白記や、京子とその倒錯した性慾をみたすためにえらんだ数々の淫らな姿態をカメラにとらえた何冊かのアルバムを、装釘するために役立つからです。

七

男女の性的結合をユーモラスに云いあらわすのに、フランス語では浣腸——lavement という言葉を用いるそうです。V 感覚の所在と A 感覚のそれとをわざととりちがえたこの云い方の面白味は、私たちのまわりで、いつまでも子供の出来ない夫婦のことを、「あの人たちはうしろの穴とまちがえているのじゃない？」などと云ってくすくす笑ってみせる、あの淫らな感覚と通じるものがあります。けれどもこのなにげない、ふざけた表現は、女体の生理のかくれた本質をずばりと云いあてていてのではないでしょうか。このたわいもない A 感覚の第一歩から出発して、私は、私の倒錯した性慾を満足させるために私の消化管を使用して——というよりむしろ、その本来のものでない役割をそれに強いることによって、それを酷使して来たのでした。私が、私の体の諸器官にその生れつき以外のはたらきをむりやりに強制したということ、そのことから私の、あらゆる、自然に反した人工的なトリックが生まれ、この、人間の狡智によって人為的に狂い咲かせられた温室のカンナは、自然の花の及びもつかないような、毒々しいが、しかし甘美なその香りでもって、しっかりと私の体と心をとらえてしまいました。しかしその花に、大自然の庭に咲く野生の花のたくましさを求めることは出来ません。温室のカンナは、人為の花のかなしさで、密閉された、あたたくくて湿度のたかい空気を必要とするからです。そのように私は最後に空想の中にあそび、私の頭の中の閉ざされた空想の世界の中で、思う存分に不倫な栄養をむさぼり吸ったのでした。空想は空想を生んで、とめどもなく倒錯の、甘美な、怪妖な世界をくりひろげ

て行きます。現実の中に生きながら、この夢とうつつとの交錯、そして倒錯の中に生きる道を見出して行かなければならないとは、何という因果な宿命でしょうか。羽村京子は、その倒錯したA感覚のゆえにこそ、おそろしい妄想の荒野の中を、気がくるったように死ぬまで駆けまわりつづけなければならぬのです。京子のA感覚は奥深く、肉体の最深部までむしびんで、あられない言動に京子をかきたてるのです。偉大な人生の伴侶であったゲーテは次のようにいってなくさめていますけれど――。

一切の無常なるものは、

【ローカル・レポート】

少年の割腹自殺

津島比呂史（東京）

前略、新年号三読、私の女性切腹通信を載せて下さって、感謝します。巻末の「ローカル・レポート」募集の記事を見て、早速御報告致します。新聞記事ですのその切抜きを御送り出来るとよいのですが、自分のスクラップ・ノートにはってしまったあとですので原文のまゝ御伝え致したいと思います。先ず大きな活字で「14の少

只影像たるに過ぎず。
曾て及ばざりし所のもの、
ここには既に行われたり。
名状すべからざる所のもの、
ここには既に遂げられたり。
永遠に女性なるもの、
我等を引きて往かしむ。

――「ファウスト」

（未完）

中のものであった。原因は伝書鳩が好きで可愛がっていた鳩が盗まれたのを悲観して、出刃包丁で割腹自殺したものとわかった」とあります。この記事の載った新聞は昭和二十九年十一月十三日附（夕刊）東京新聞です。編集部では御存知かも知れませんが、若しやと思つて御報告致します。「追記」
「新年号のグラビヤ中「手袋」足首に鎖のある風景」等は乳房いじめを連想させて面白いと思ひました。六十七頁の淳二氏の「女性切腹面」三六三頁の「切腹女性」の表情も全く素晴らしいと思ひます。次号の予告中「大津事件とそ
の後日譚」それに久しぶりに拝見する川合女史の「令嬢おふみの死」等、その記事も勿論ですが、それにとまって美しい女性切腹面が楽しめることゝ、今から待ち遠しい思ひです。三三〇頁の「切腹通信」中の「東京、向井美佐子」さんのアイデアには大賛成です。殊に第四景（両手で力一ぱい左斜めに切上げ引抜いて、切先を左の乳房の所よりやや離して切先を向けて突く準備……）のポーズは、何とかせめて切腹面でもよいですから誌上を飾って戴きたいと、私のメツチエンも望んでおります。

大津事件とその後日譚 (一)

——勇子の切腹を追想して——

須藤 律 夫

(一) 露国皇太子の遭難

話は今を去る六十余年前、即ち明治二十四年——露帝アレキサンダー第三世は皇太子ニコラス第二世をして、シベリヤ鉄道の起工式に参列せしめられたが、皇太子はその巡遊の途、日本にも立寄る事となり、同年五月十一日京都から大津へと差しかゝられた。

然し茲に、偶々滋賀県大津町を通過の際、沿道の警衛に当たっていた巡查津田三蔵なるものが帯剣をもってニコラス殿下に斬りつけ、殿下は身を以て人力車から飛び降りると附近の民家に逃れ、危く難を避けられたと云う、全く不測の不祥事が出来上った。今、皇太子遭難の詳細を当時の朝日新聞(明治二十四年五月二十三日)より抄記すると次の様に報ぜ

られている。

前略——露国皇太子殿下が県庁を距る五丁程なる、京町通字小唐崎町五番地屋敷、津田岩次郎方迄来らせられし時、北側に御警衛のため立番したる巡查津田三蔵なるもの、俄に皇太子殿下に近よりさま、帯剣を抜き、殿下の頭部をめがけて斬りつけたるより、殿下は人力車より御飛降り遊ばされ、とある人家にお避け遊ばされたり。その時、同殿下の次に乗車せられし希臘親王殿下は、県庁にて御買上げになり、手に携へられたる竹鞭を以て、したゝか兇行者を殴打せられ、少し躊躇せし所を、露国皇太子殿下の御乗車を曳き居たる車夫向畑治三郎が、兇行者の足を取りて引倒し、落ちたるその剣を拾いて後頭部を斬り、次いで背部を斬りたれば、(註 斬ったのは

ギリシヤ皇子の車夫北ヶ市市太郎である)其儘俯向に倒るゝ所を、御先導の木村警部が飛びかゝつて取って押へ縄をかけたが、これ瞬間の事にして、一行の驚愕一方ならず——

中略——承る所によれば殿下の御負傷は枕骨部より額骨にかけ、長さ三寸程二ヶ所にて御生命に関する事は固より之なし、久しからずして平癒あらせられるべしと云う。

扱、以上が事件の梗概であるが兇変の報は朝野に非常の驚愕を与え、国難来ると痛恨の声は久しかった。一方津田三蔵の兇行原因に就いては詳でないが、彼は嘗って陸軍下士を奉職、明治十年西南の役に従軍して勲七等に叙せられ、性は沈黙寡言乍ら兩三年前よりは少しく発狂気味があったと云う。(明治二十四年五月十一日、中外電報号外)更に三蔵の処分問題に就いては皇室罪(死刑)謀殺罪(最高無期徒刑)、或は刺客を放つての策略等甲論、乙駁の態であったが、当時貴族院議長を退いていた伊藤博文は「今度の事件は実に重大で、予め逆視する事は出来ぬ。どうしてもその重き方を取らねばならぬ、万一、異説が百出し、処罪が困難になった場合は戒厳令を布いてもよいと思う。国家の危険を防ぐ為めには非常処置も又止むを得ない」とまで極刑論を述べたが、大審院長児島惟謙は独立国家の法を護る為め、敢然として之を退けた。斯くて五月二十七日大津地方裁判所に於て三蔵

に対し無期徒刑の判決が下され、露国皇帝を初め一般国民もこの判決に充分満足の意がもたらされ、日本の朝野は初めて愁眉を開いたのであった。そして兵庫の仮留置監に収容されていた三蔵は後、北海道釧路の集治監に転じ四千万同胞に申訳ないと深く前非を悔いつ治療にいそしんでいたが、兎角健康勝れず、九月二十七日遂に死亡、直接の死因は肺炎併発との事であった。世界史年表の一端に、「露国皇太子大津の変」の一項を占め、我が朝野を騒がせたこの事件も以上で一応の落着を見たかに考えられる。然し因は更に果とな



って、この事件には幾つかの後日譚が生れたが、その一つは例の畠山勇子の割腹事件であろう。

(二) 憂国婦人の切腹

この事も事件当時は国内で、一狂女の腹切自殺として傳く竊られた由であるが、異国の二大文豪により、却って海外に紹介されたのではないだろうか。一人は事件当時松江に居た小泉八雲であり、他の一人は当時のポルトガル領事、ウエンセス・ラウ・デイである。勇子切腹の顛末に就いては「号外近代史第一部」(同光社刊)の中に詳述されていたので、その中から適宜抄録して見る事にする。

——前略露国皇太子はウラジオに去られたとは云え、明治天皇は未だ京都行在所に御滞在になっていた。京都市内は、ほっとした表情の中にも警戒の手はゆるめられなかった。そして悪夢の様な十日間が過ぎた二十日夜——京都府庁の正門で人力車を降りた丸髻姿の一人婦人があった。俵代を払ってから手にとっていたこうもり傘を差し出し、

「酒代を上げようと思ったが小さいのが無くなったから、之を取って置いて下さい……」と云う。(中略)彼女は車夫の姿が消える迄府庁の前にある石橋にもたれて眺めていた。

八時を過ぎた頃であろうか、門衛の詰所に小さい灯がポツンと点いている丈で、四辺は墓場の様な静けさだった。鑢て、彼女は府庁門前の石畳の上まで来ると、持って来た風呂敷大の白布を拡げた。下駄を脱いで後の方に丁寧に揃え、懷中していた手紙らしいものを前方に置くと、帯を解き、細紐で自分の両膝をしっかりと結えた。祈る様な姿が幾分間か続いて、その儘うつ伏になったかと思うと、「うーん」と云ううめき声が静寂を破った。この異様なうめき声に門衛がかけつけたが、この様子を見るなり飛んで行った。それから間もなく巡査がかけつけた。

「何うしたんだ、氣でも狂ったのか？」と云う声が耳に入ったらしく、彼女は首を左右に激しく振り、血まみれの左手で上の方を指した。然しその時はもう力が抜けていたらしく左手は痙攣するばかりだった。急報により附近の医師が駆けつけ、応急手当をしたが、出血多量でその甲斐もなく彼女はがっくり倒れた。右手には日本カミソリが握られていた。白布の上に置かれていた十通の遺書によって彼女の身許は直ぐ判った。その遺書の一つ(原文のまゝ)

恐入り候へ共、失望の余り申残候。此度露国皇太子御遊覧の途中御遭難に付、驚愕悲歎幾多ならず、小女時来り広き世界にて如何とも致候希望なるに、兎人の為め負傷あらせら

千葉県長狭郡 前原鴨川町

畠山文次郎 姉 慶応元年生

島山勇子

内外の御方様

この外、露国御官史様、日本政府様、政府御中様、弟文次郎殿など九通の遺書すべて、今回の露国皇太子の遭難を悲憤慷慨したもので、女ながらも、一死以て皇太子に御詫びしようにとした、一念から切腹したものだ。

この切腹も検視の結果、腹部心下胃の上部に表皮を切りたる一カ所六センチメートルの横傷と、咽喉部に一ヶ所、口径八センチ、深さ気管に達して居り、武士も及ばぬ作法にあった見事な切腹だった。又勇士の経歴及びそれ迄の経緯いきさつに就いては次の様に誌されている。

勇子は千葉県鴨川町の資産家の長女に生れ十七歳で結婚したが不幸にも離婚、その後は

上京して万里小路通房家や、正金頭取、原六郎家の女中となった。大津事件発生当時は日本橋室町の漁商白鳥武兵衛方のお針女をやって居り、二十七歳だった。明治初期の義商とうたわれた榎本六兵衛を伯父に持ち、その厚い勤王の精神に深い感銘を受けていたと云う。大津事件が突発すると、その事件を報道している新聞を喰い入るように読みふけていた。(中略) 勇子は明治天皇の御心痛を思い、更に露国皇太子がこの儘帰国されては、我が国の顔が立たぬと思ひ続けた。

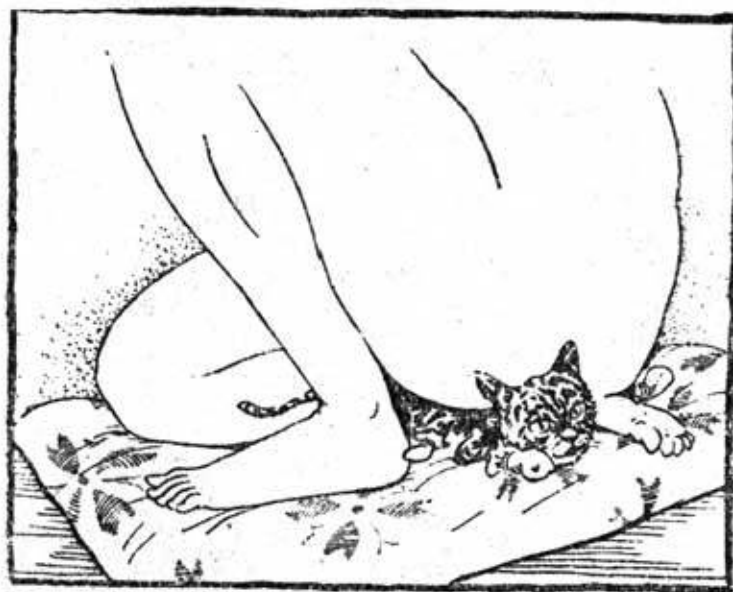
「何うかして、御引止めせねばならぬ、身は見るかげもない下女だが、命を捨て、御願ひしたら、少しは哀れと思う人もあって、好転するかも知れぬ」彼女はこう思い立って、十七日夜、主人に暇を乞うたが許されなかつた。翌十八日、伯父の六兵衛を下谷茅町に訪うて頼んだが、こゝでも許されず、皇太子の帰国は十九日に迫ったので、矢も楯もたまらず、浅草で衣類を質入れして旅費をつくり、十九日新橋から乗車、二十日朝、京都に着いた。然し皇太子はもう出発した後だった。この事も覚悟していたので、別に決心は変らなかつた。明治天皇は二十一日に京都をお立ちになる事であり、要路の大官も未だ京都に滞在していたので、自分が一命を捧げる甲斐があると思つていた。彼女は死ぬ前に、京都の寺々を巡拝しようと思ひ、七条駅前で人力車

を雇った。最後に知恩院に着いて、説教をき
ゝ、人々が去って四辺が暗くなりかけた後も
彼女一人は本堂に端座していた。(中略)勇
子はあと一刻に迫った自分の運命の足音を数
え乍ら、幽暗の中に座す秘仏に向って合掌し
た。七時を過ぎた頃、昼間の車夫が頼んで置
いた通り迎えに来た。彼女は「京都府庁へ」
と云いつけたのである。

試みに今、近代百年史を讀いて見ると、當時京都の旅館に於ける皇太子、及び加害者の写真、遭難地附近の略図等が掲載されてはいるが、解説としては次の様に、勇子の死は余りにも簡単に報ぜられているに過ぎない、曰く――。

この大津事件は何分にも、東洋の弱小國民が歐洲の一大強國の皇太子に負傷を負わせた。と云うので大騒ぎ、政府は緊急勅令を發して新聞原稿の檢閲に乗り出し、又民間では前途を憂えて京都府庁前で覺悟の自殺を遂げた女性も出る始末、吉原の貸座敷は五日間の鳴物停止の上、娼妓の張見世を遠慮した程であつた——と。

茲に、人生流転とは云い乍ら、この大津事件は更に一つの後日譚を残した。それは、一時は「時の人」として江湖にうたわれ、莫大な恩賜金と栄誉とを担った救世の主、向畑治三郎のその後に就いてゐる。(未完)



弱者、劣者にサジズムを感じる

女性からの通信

白 木 近 子

前略、奇ク十一月号を初めて拝見しました三十才の人妻でございます。類誌とは断然おもむきを異にする編集方針に大きな驚きと喜びを覚え、一気に読破いたしました。

就中、巻頭グラビア「さるぐつわをかけるまで」に於ける春日ルミさんの大胆な熱演に敬服し、今後とも大いに声援を送りたいと存じます。特に最後の場面、身動きもできぬまでに縛り上げた女の背に、情容赦もなく馬乗りになり、口許には笑さえ浮べながら、尚も加虐の手をゆるめないその表情、黒マスクさえなかったら、本当に虫も殺さないその

顔の下で、彼女の手と下半身は思いもよらぬ残酷な行為を犯している。完膚なきまでに叩きのめされ、捻じ伏せられ、嵩にかゝって責めつける相手の暴力に、胸を床板に押しつけられて観念の眼を閉じる伊吹さんの苦悶の表情もさるものながら、まさに気が遠くなるような快感に襲われるサジズムの極致ではございませんか。

女が女を捻じ伏せる。起き上ろうともかくのを押えつけ、さあどうだと馬乗りになる。後手に縛った腕が尻の下で尚もかすかな抵抗を試みる。それにさえ快い刺戟を感じながら

これでもか、これでもかと思うまゝに振舞って相手を痛めつける。これはメトミでなければ得られない快感なのでございます。徹頭徹尾痛めつけずにはいられないという激しい憎悪と、それを成し遂げる悦楽とは女同志でなければ抱き得ないものなのかも知れません。仮りに男奴隷を鞭打したり、馬の代りに乗りつぶしたりしても、やはり、何か割り切れないものが女主人の胸に残るに相違ございません。種々なコムプレックスとか、本能とかが彼女を絶対優者の立場に立つことを妨げるのかも知れません。堅い話は止めにして、春日

伊吹両嬢の今後の御奮闘を期待致します。衣裳については中谷冷一さんの御意見に、わたくしも大体に於いて賛成でございます。

さて、わたくしが弱い者いじめに秘かな悦樂を憶えるようになりましたのは、終戦後、ある戦災孤児保護の施設に訪いていたときのことでございます。そこで御世話して居りましたのは三十人位で、いず

れも小学校の児童でございました。可哀想な子供達ばかりでしたが、素直でない子や盗癖のある子は、それぞれ受持の娼母さんに依ってお仕置を受けていました。頑はない子を膝の下に引き据え、お灸を据えている光景などを時折見る毎になんて酷いことを思ったものでしたが、わたくしもいつかそれと同じことを、いえ、もっと悪どい意図を以ってY子に向かってするようになったのでございます。

Y子は十二、三の色のくろい器量のわるい子で、おまけに戦災のショックで脳を冒され従って子供達の仲



間に入って遊ぶこともできず、終日鼻汁を垂らして物陰に佇んで居りました。今から思いますと、Y子はわたくしにいじめられ、ひどい目にあわされるために必要な条件を、総てその身に備えていたと申せましょう。

或る日、Y子の髪の毛のひどく汚れているのを見たわたくしは、入浴のついでに洗ってやろうとしますと、Y子は何をされるのかと思つたのでしよう。とても厭がってわたくしを突きつけ、何か叫び乍ら出て行こうとした。周囲に人の居ないのを幸いに、わたくしはその時、Y子をいじめました。タイル張りの床の上に、暴れるY子が無理やりに押えつけ、髪に石けんを塗りつけました。

「おとなしくするのよ、こんなに汚れているじやないの」

と優しく云いきかせましたが、Y子はたゞ暴れるばかりです。体だけは一人前に發育している上に、とても力が強く、危うく跳ね返えさせようになつたわたくしは、もう一度周囲の人の居ないのを確かめてからその背の上に思いきり股をひろげて馬乗りになり、Y子の両腕を後手に捻じるように膝で押えてしまいました。

「さあ、どう？、これでも暴れられる？」

動けるはずはありません。十三貫もある二十三才の女が、全身の重味をかけ

てあられもなく馬乗りになっているのですから。髪を洗い終る迄Y子はおとなしくして居りましたが、勿論、それだけで許してやるわけには参りません。さまたなことを致しました。首筋に膝をかけて煩悶するまで締めつけたり、Y子の顔をお尻で潰してやったり、両腕を背に捻じ上げてその苦痛を味わせたり一時間余りもかゝってY子の全身を洗いおわりました。

思う存分虐げているわたくしの体内には自慰に似た快感さえ走ったのでございます。しかもその被虐者がY子であるかぎり、誰にもわたくしの性癖を知られることはないという安心感が嗜虐心理に拍車をかけました。

それからは、ほとんど毎晩のように、Y子を自室へ引き入れ、鍵をかけたその狭い部屋で人知れずその楽しみを味わいました。鼻をつまんで手拭を口に詰めこむことも覚えしました。わたくしの股の間でぐったりと伸びているY子に、一瞬の抵抗を与えるためにお灸を据えてやりました。一人仲間外れにされているY子を自室に連れ込むときのわたくしの胸は、これから行われるであろう悦楽への期待で大きくふくらんでいたものでございます。

勿論わたくしの対象はY子にかぎっておりませんでしたから、優しく有能な嫁母として理事や園児からは信頼され慕われて過しました。そして現在は、やゝ幸せな中産階級の主婦でござ

います。良人をはじめ周囲の者も、わたくしの心の奥にこんな性癖がかくされていようとは夢にも知らないことでしよう。夫婦の営みのとき、良人にそんな姿勢を求められても、慎ましく笑うばかりで、とてもそんな方法で楽しみが得られようとは思いません。良人に対してわたくしが絶対優位の立場になることはあり得ないからでございます。

容貌、能力、財産といった要素が総てわたくしより劣っているもの、そういう者に対してならば、わたくしは春日さんより勇敢に振舞って、馬乗りという完全な勝利の姿勢の醜態を満喫することでございます。一昨年の秋、郊外の田圃道でわたくしに毒ずいた百姓の老婆を、半死半生の目にあわしてやったこともございました。しかし、これとて所詮弱者の心理にほかならないのでございましょう。それだからこそ、春日さんの演技に心からなる拍手を送らないわけにはまいりません。

この十一月号の連続写真は、黒マスク黒手袋から想像して女賊襲撃の状況なのでしょうが、従来よく見られた単なる緊縛や鞭打の一枚写真と違って、暴力が振われている背景が想定される点、一段と興趣豊かに拝見しました。何故に一人が暴力を振り、一人がひどい目にあわなければならぬのか、そこに至るまでの経緯を簡単に説明したフォト・ストー

リーのようなのは如何でございましょう。それが不当な暴力であれば被虐者への同情が同時に加虐者への憎しみとして効果を生み、正当な暴力であれば、わたくしがY子や百姓女を捻じ伏せたときと同じような満足を読者の心に植えつけるでしょう。

わたくしはあくまでもかくれた嗜虐女性のひとりでございます。偶然拝見しました奇クに於ける春日さんの心にくいまでの勝者の優越に接し、ふと七年前にもあそんだY子のことを思い出しまして、このお手紙を書いた次第でございます。書きながらも、どうにもならない興奮を感じ、猫をお尻に敷いていじめながら書きました。小さくはないお尻の下にぎゅうぎゅう圧しつけられた弱虫の猫は、どうしてこんな目にあうのか分らないと云うように泣いています。奇クを愛読するようになった女主人のために、この哀れな猫は、「ミーちゃん、こうしてあげるわ、どう？ 苦しい？ じゃこんならどうか」

などと、誰も居ないのを、よいことにして勝手なことを云われ、いじめつゞけられなければならぬのでございます。

私の心の秘密をあからさに書き綴りすぎてしまいました。皆さまの御批判を誌上でいただけたら幸いです。

(おわり)

猥^{みだ}

ら

な

虫^{むし}

辻

栗

村

原

隆

伸・画

これは最近、KK通信を通じて識り合ったK氏から、逢って直接聞いた話である。

その日、私は、近鉄奈良線沿線の、花園駅を下車、歩いて約三丁許りのA村に住むK氏をわざわざ訪れた。

私を迎えたK氏の顔には、暗く淋しいかげりが見えていたが、それでも努めた笑顔で私を招き入れた。

私は座につくなり忽々に訊ねた。

「貴方のお便りで知ったのだけど、奥さんと別れられたについて、何か変わった事情でもあったのじやなかったのですか?……。なんと

なくそう思ったのですけど——」

「判っきり申せば、逃げられたのですよ。いや貴方に事の次第を話せば、又、雑誌の材料にでもなる事でしょう。ひよっとするとその目的で来られたのじやないかな……」

「書いていゝ事と、悪い事位は心得ていますよ。万一、筆にしたとしても、貴方の信用を落す様なことはしないつもりです——」

「いゝですよ。貴方が書かなくても私自身告白文を書くかも知れない。改まると話しくいが、まあポツポツ喋べるとしましようか」

K氏は一寸言葉をきって、私の眼元をじっ

と見つめ乍ら、想い出を追うのか暫らく考えてから、ポツリとつぶやいた。

「ちっぽけな、一匹の体内の小虫から、こうした忌わしいカラストロフをうもうとは、私はまさか予測もしなかったですよ。寄生虫にくわしい貴方なら勿論知っておられるでしょう。ホラ、幼ない子供達がよくわかす蟻虫と云う小虫を——。あいつが、私の最愛の妻の富子を、私の手許から奪い去ってしまったのですよ」

「……………」

「こう申しても、恐らく想像もつくまいでし

よう。順を追って始めから話す事にしましょう。」

K氏はツト立上ると、サントリーの角瓶とグラスを二つ戸棚からとり出して来て、私に奨め乍ら語り始めた。

もう建ってから相当なるのだろう。黒ずんで薄暗く、変にだゞ広い平家建の旧家で、女中も置かず唯一人、味気なく住むK氏と、火鉢を隔てゝ向い会った私は、ぞくぞくと身に滲む寒さを耐え乍ら、彼の語る異様な妖しい話に魅き込まれていった。

× × ×

私の最愛の富子は、もとは看護婦でした。盲腸で入院した私に、夜昼付き添って、優しい看護をしてくれてからと云うものは、富子は私にとって忘れられない女性となりました。激しい身を灼く恋心がつのって、私は富子の思惑ものかわ、まるで奪い取る様に私のものにしてしまったのです。

黒い髪の乙女——。『ジブシーの月』のワルツの中に出てくる、月にむせびなくあのジブシー女の形容がまるでピッタリとくる富子でした。パーマやヘップバーン・スタイルが殆んどこの時代に、彼女は珍らしくも、廿三才にもなり乍ら、尚黒髪を長く肩に垂らし

た、子供ッぽいあどけなさを失わずにいたのです。

小じんまりした顔の造り、小さな唇、華奢な小鳩の様な胸、その癖、どんな苦難にも堪えそうな、芯のしっかりした半面を持った、南国肌の乙女でした。

もうよしましう。惚れた弱身とは云え、今更去った妻の面影を偲んで見たとて、唯胸が痛むだけです。

富子と同棲して、夢中のうちに一年も経った頃だったでしょうか。

未だ幸か不幸か、二度も流産が続いて子宝に恵まれなかった私達にとって、比較的甘い順調な生活が続いていたのですが、或る朝、富子は私に、さも云い難そうにもじもじし乍ら、それでも囁く様な小声で、

「あのう——、近頃ね、妙にお尻の辺りがむず痒ゆいの、いやあーね、どうしてかしら」顔を真赤にそめて私に告げたのです。

私も以前薬問屋に勤めていた関係から、多少は寄生虫に対する予備知識も持っていましたので、富子の言葉に、これははっきり蛭虫の仕業に違いないと直感しました。

「富さんは未だ子供ッぽいから、きつと蛭虫をわかったのだよ。夜になって温まってくる

と、お尻が搔ゆくなるんだろう？ よしっ、今夜にでもひとつ見てやろう——」

「あらっ、覗いて見るのっ、いやよいやよ、そんな気まりの悪いこと……」

「今更羞かしがる事もないじゃないか。じゃあ教えてやろう。寄生虫のうちでも、蛭虫、鞭虫、十二指腸虫、条虫の類いは、検便しないことには、はっきり分らないが、この蛭虫と云う奴は、適当な湿度と温度の条件が揃うと、夜中や寝る前、そろそろと肛門から這い出してくる始末におえない厄介な虫なのだ。

雄虫は腸内で一回の交尾をすますと、はかなくも死んで、便と一緒に排出されてしまうが交尾をすました雌虫は、肛門のふちに卵を生みつけに出てくるのだ。だから検便しても卵は便に混らないから殆んど見落してしまうがこいつはやはり、見て確かめるのが一番だよ。ね、だから見て上げよう——」

「だって……」

「いゝんだよ。それに富さんのお尻を覗いて見るなんて、チョッと変っていて面白いじゃないか」

「悪趣味ね、いやよ。絶対にイヤよ——」

富子は羞恥に身をくねらせて、私の喋べるのを、やめさせる様に、唇を押しつけて来る

のでした。そんな冗談を云って私は出勤しましたが、その夜、フトその朝の言葉を想い出すと、私は傍の、寄り添う様にして物云いたげな富子に、そっと囁きかけたのでした。

「富子——、朝の約束通り一度見てやろうか。遠慮しなくてもいいんだよ。夫婦の仲で羞かしがることもないじゃないか。矢張り搔ゆいのだろう？」

「えゝ……でも——」

「いゝんだよ。さあ俯向いて御覧」

私は富子のあるかなきかの返事を押えつける様に、尚も躊躇する彼女を矢庭にくると俯向かせました。長い黒髪が乱れて、夜具に深々と顔を押しあてた儘、富子は観念したのか、私のなすが儘に任せました。私の予想した如く、一糰にもみたぬ、絹糸の様な



蠅虫が三匹程、じりじりと微かな蠕動を続けて、這い廻っていたのです。

「いたよ、矢張り、わいていたんだね。暫くじっとしておいで——。とって上げるから」

「……………」

富子は羞恥に堪えぬ如く無言でそとうなずきました。私は大急ぎで布団の下から塵紙をとり出すと、手につかぬ様、慎重に蠅虫を紙で掴みました。

「ホラ、御覧——。こいつが搔ゆい正体だよ」

富子は私の差し出した塵紙を、さも怖いものでも見る様に黒い瞳をしばたいてじっとみつめていました。チリ紙にへばりついた、白っぽい千切れた糸屑然の小虫は、よくよく確かめねば分らぬ程に、哀れな残骸を留めていたのです。

「たった、これっぽちの虫の為に、あれ程搔ゆく感じるのかしら……」

「肛門から這い出す瞬間に

何とも云えぬ搔痒感を覚えるそうだ」

「まるで嘘の様ネ」

富子は慌てゝ身仕舞をたゞすと、夜具の上にきちんと座り直して、真赤に染めた頬を輝やかせ乍ら改まった声で、

「貴方、御親切に誠に有難い仕合せでございました」

と云うと、急に自分でおかしくなったのかそれとも照れ臭さをかくすためか、転げる様に笑いこけたのです。

「ホホホホ、でもよかったわ。私、もう一時はどうなることかと思つて……。だって、貴方だったら、真面目くさつて、私のお尻を覗くなんておっしゃるんですもの。随分恥かしかつてよ。でも、もういゝわ。これから搔ゆくなれば、いつも覗いて貰う事にきめたから……」

「女房の尻を覗く男か、こいつは傑作だ。併しね。蟯虫だって馬鹿に出来ないんだよ。知つてゐる範囲内で教えてやろうか——」

「えゝ、神妙におうかゞいしますわ」

富子は何がおかしいか、尚もくくくと独り笑っていました。

「こいつがわくと、搔ゆいから知らず知らずお尻を搔くのだが、特に女の場合、こいつが

帰りを間違つて、とんでもない処へ侵入する事が往々にしてあるんだ。自然、搔ゆいのでその部分に手が行くから、変なことを覚えるのさ」

「変なことってなに？」

「つまり、思春期の悪習。なんだ？ 知らないのか。……？ まあ知らなきや知らないでいゝさ。つまり女の悪癖の六十四%が蟯虫の仕業だと云うから、猥らな虫だよ、こいつは——。栄養を吸収する様なことはないのだが搔ゆいからどうしても、不眠症や神経質になり勝ちでね。特に前に侵入した時に、それが原因で膀胱やラッパ管炎、子宮内膜炎等を誘発する事があるのだ。膀胱が一番いゝんだよ。蟯虫専門の「ウリノール」と云う浣腸もあるけど、食酢や石鹼水やクレゾールのうすめたものでもいゝんだ。毎晩寝る時、根よく続けて浣腸すればすぐとれるさ。『ブトラン』とか云う蟯虫駆除薬もあるけど、何と云つても浣腸に限るんだ。早速明晩から浣腸してやるから——。ね、いゝだろう」

私は受け売りの博識振りを發揮して、浣腸の如何に効果があるかを、尚もくどくどと強調したのです。

「だって浣腸なんて随分気持ち悪いでしょう。

私、女学生の時だったかしら、とても便秘して、一度だけグリセリンの浣腸して貰ったけど、忽ちお腹がグルグルと鳴って痛くなり、お便所へ駆け込んだ途端、お屁のしまりが急になくなった様で、それにとつても派手に鳴るんですもの。お便所を出る時、誰も聞いてやしないかと思つてあんな恥かしい思いした事なかったわ。毎晩なんて考えただけでもゾーッよ」

「大丈夫、蟯虫の浣腸は酢か、石鹼水だけだからそんな事はないよ。反つて搔ゆい時など気持ちゝくらいだ。じゃやるんだよ。やるね——」

私は駄目を押すと、富子は仕方なさそうにコックリとうなずきました。氣に入らぬ事があると、何日でも、ものを云わぬ富子の強情さの反面に、こうした素直なところもあったのでした。

翌日、私は薬局で浣腸器を買い求めると、忽ちに戻りました。

夜がくると、富子は私にさとられぬ様氣を配ってはおりましたが、いかにも切なげに腰をもじもじさせて、懸命に搔痒感をこらえ様と努力しているようでした。私の側でお尻を搔くと云う、はしたない行為が、富子にはど

うしても出来なかったに違いありません。

私はさりげなく、

「浣腸器を買って来たのだよ。浣腸すればピ

タリと搔ゆみが止まるが、どうだ、や
って見るか」

「何だか恥かしいわ。だけど……厭だ
と云っても貴方は無理矢理押えつけて
も、自分のしたいと思う事はやり通す
人だから……覚悟することにきめた
わ」

「何だ、いやに恩に着せて——。可哀
想だと思って、わざわざ買って来てや
ったんだぞ。じゃあ、液体を作るとし
ようか——」

私は寝巻の儘のこのこと起き上って
その癖口とは反対にいそいそと、台所
で食酢を水に薄めて約倍量にして、コ
ップに入れて枕元へ運んで来ました。

二〇CC程を浣腸器に吸い上げると
「さあ、いゝかい。少しの我慢だ。冷
めたいが、反って気持ちいゝかも知れな
いよ」

「とうとう浣腸されるのね。でも貴方
だからいゝの……。余り痛くしないで
ね」

富子はそう云って、まるで罰でも受ける様
に、愁然とした小さな顔を、組み合せた両腕
の中に埋めて、観念していました。

しばらくして、ぐったりとした富子は、俯
向けの儘じつと動かず微かに腹部でグルグル
と液体の回転する音が耳をつきました。



「どう?……」

「何とも云えない変な気持。お腹が鳴る様できゅーっと脇腹が痛む様な……」

富子は眩しそうに私を眺めると、私の視線をまともに受けて「いや」と顔を両手で掩ってしまいました。

このようにして浣腸がかゝさず一週間も続いたでしょうか。

日を追って、富子の浣腸に対する激しい羞恥心は、一枚一枚薄布を剥ぐ様に薄れて行くのが分りました。

その間、私はわざわざ友人から顕微鏡を借りて来て、排出された蟯虫を、オベクトグラスにとって一〇〇倍に拡大しては、富子と一緒にレンズを覗いて見た事もありました。

視野に拡大された蟯虫の、胴体一杯にぎっしりつまった卵は、むしろ鮮やかな程に整然として、まるで何かの図案の模様さながらに見えました。細長い外米そっくりの蟯虫卵があつた痛々しく思われる程の蕾の周囲に、産みつけられて行くのだと思うと、慄然として顔を見合せ溜息をついた事もありました。しかし、富子の搔痒感もすっかりなくなり、浣腸にも終止符の打たれる日が来しました。

「暫く浣腸ともお別れね。ただとお蔭です」

かり搔痒くなくなったわ。ホッとしたわ」

「よかったね。でも……」

もう浣腸が出来ないので、何かしら物足りなくなるよ、と云おうとして、私は辛ろうじて声をのみました。

私自身、今、アヌスに対する憧憬と、浣腸に憑かれている事に気付いたからです。

私達二人の生活は素に戻りましたが、時として、あの浣腸を行う時の刹那の愉しさを思い浮べては、一沫の物足りなさを感じずには居られませんでした。

併しその事は、私一人の思いではなかったと云えましょう。

富子にとっても、あの浣腸の、冷めたい液体が腸内に浸透する瞬間の快感?——既に快感と呼んでいゝでしょう——を忘れかねていた様です。

何かの話の時に、

「浣腸って変な気持だけど、その瞬間、身のおきどころのない様な気分誘われるのよ。何でも無い時に浣腸なんかしてはいけないものかしら?……」

と、暗に浣腸を望む口振りで、その癖、自分の言葉にハツとして、

「でも、矢張り嫌ね。あんな事いやだわ」

と、大急ぎでかぶりを振って否定するのです。恐らくは、心の中を見透かされたバツの悪さをカバーする。富子のはかない否定の言葉だったのでしょう。

だが、蟯虫は往々にして自家感染するものです。肛門周辺や直腸の蟯虫群はおろし得ても、下履きに附着し、又搔いた手指の爪に便乗した蟯虫卵は、再び口に入って、六週間もすると、又しても成虫となってアヌスを襲うのです。

私達の場合、幸か不幸か、体内で育成された蟯虫が、富子に、再び搔痒感を与え始めた頃、最早以前の様な浣腸程度の生易しい方法位で、搔痒感を抑制しようとはしなくなりつゝあつた彼女の胸中の変化を、私はその夜始めて知りました。

富子は私が床につくのを待ち兼ねていた様に、困った表情をうかべて、その癖、内心期待に胸を疼かせているのが、歴々と分る弾んだ声でそっと囁きかけて来たのです。

「ねえ、又とっても搔痒くなって来たのよ。どうしましょう……」

「え、又かい。そいつは弱ったな」

と云ったものの、さして弱った顔でもなく私も亦、浣腸とアヌスへの悦びに急に胸を躍

らせたのです。

「又、浣腸して下さる？」

「勿論——、もっと濃いのを、もっと多く……」

「掻ゆくって、仕方ないの。我慢出来ないのよ」

「よし、早速浣腸してやろう。今すぐ酔を薄めるからね——」

私は勢よく起き上って台所へ立とうとしました。

「ねえ……」

富子は、何故か訴える眼付で、私の寝衣の裾を掴んで引止め、哀願する様に、じりじりと私の両脚を抱え込んだのです。

「お願い——、暗くして、ね——」

「だって、浣腸するのだから？……」

「ええ、いえ、もういゝの……暗くして」

富子のどちらともつかぬ返事に、私の気持も宙に迷った儘、それでも彼女の燃える様な激しい眼ざしに気圧されて、私はパチリとスタンドのスイッチをひねったのです。

「ね、いゝからこれを使って……。何も云わないで——。叱らないで……」

私の手を探る様にして握らされたものが、——である事を知った時、私は思わ

ずハッと息をのみ、次いで体中の血がカッと熱くなるのを覚えました。

そうか、それだったのか——。私は浣腸器に代る、この種のものが、掻痒感を一時的にもせよ抑制すると共に、それが被虐的快感を与えるものである事をその時知ったのです。

私の知らぬ間に、富子はこうしたもので、自己悦虐を行っていたのではあるまいか？

その事に思い当たると、私は急に富子の秘密を瞥見したい慾望にかられました。尋常の手段では恐らく富子は拒むだろう。

私は咄嗟にそう考えて、そっと寝衣の紐を解くと、闇の手探りに、いきなり富子の両手を引き寄せ、縛ろうとしました。

「あッ、何なさるの。いや、離して。いけな——。いやよ。縛らないで、堪忍して——」

必死にもがく富子を、私は男の力で押えつけ、両手を後手に縛り、尚も足をバタバタさせるので、ついでの事に、片足ずつ別々に手当り次第の帯や、腰紐でぎゅっと胸の辺りまで脚をあげて首に廻し、その上から、太腿から腰に廻してかけた帯で、足を別々に固定させてしまいました。

富子は尚も私の行為を非難して、必死になって叫んでいました。私の心はすっかり逆上

してたのでしよう。矢庭に枕カバーを外すと富子の口に押し込み、その上から枕を蔽ってあったタオルで、猿轡をはめてしまったのです。

ハアハア肩で息をし乍ら、私の手はスタンに延びました。スイッチの廻転と共にサツとあかるい灯影が、情容赦もなく、無惨に縛られた富子の姿を照らし出しました。

恨みを籠めた、涙の一杯に溜った眼で、富子は私をにらみ、いきなり激しくガバツと首をそむけると、忍んだ鳴咽が、乱れた黒髪の隙間から洩れて来たのです。

私自身、嗜虐の感情を蓄積しているにもかかわらず、私の手によって行われたものでない、こうした痕跡を眼の辺りに見て、何故とも知らぬ怒りが勃然とこみ上げて来たのです。

「馬鹿ッ、何だってこんな事をするのだ。いつ覚えたのだ。——どうして知ったのだ——云え、云わないのか——」

「……」

「どうして黙ってるのだ。何とか云えッ。誰に教えてもらったのだ。——強情な奴め。云わないな——」

私はわけの分らぬ、自分でも説明のつかぬ

怒りと、一つは私の知らぬ間に行われた肉体の冒瀆に腹を立てて、一言も喋らぬ富子に、

尚更焦立たしさを感じて、いきなり長くのびた黒髪をぐっと掴むと、部屋中をズルズル引



ずりまわしました。ところ嫌わず殴りつけました。柱の所まで引曳って行き犂々と縛りつけると、パシリパシリと平手で皮膚に掌形がつく程、双丘を叩きのめしました。

私の気持は收拾のつかぬ嗜虐の快感に溺れていたのでしょう。

私が富子の縛しめを解いたのか。それとも彼女自身どうにかして解いたのか。今でも、あの夜のそれからの事は、はっきり覚えておりません。嗜虐の夜が明けて、頭の重い目醒め——。昨夜の事が淡い悔恨となって、重苦しい苦渋と重なって、今更乍ら、あゝまで手荒な事をせねばよかったと秘かに悔いていた頃、既に富子は私の手許より遠く離れて、何里か先を辿っていたのでした。

「富子、おゝい富子……」

私は、毎朝の例で、彼女を呼んだのでしたが、ひっそりとした家の中は、コトリともせず静まり返っていました。

(失敗った! 富子に逃げられた——)

最愛の富子は私の手許から去った。きっと昨夜の出来事に愁心の胸を抱いて、淋しく去ったのだ——。この私が悪かったのだ。あゝどうしよう。嗜虐にかられての余り、とり返しのかめことをして、今更——、もう再び

私の懷に帰って来ないのではあるまいか。

不安とたまらぬ焦燥と暗い心を抱いて、一日二日私は何も手につかず悩みました。

三日目——。一通の手紙を受取りました。

住所もかゝず、裏に唯二字「とみ」と云う字に、私は氣もそぞろに封をきりました。

これがその手紙です。読んで下さい。

「前文御免下さいませ。

数々のお情身に泌みて、とみは今、これを泣き乍ら書いております。私があゝした人に云えぬ秘密を持っていた事を、最愛の貴方に知られた時、もう駄目だと覚悟しました。お怒りはごもっともで御座います。でもどうしようもなかった私の性癖——。

すっかりお話致せば、かえって哀れなとみと、貴方にも分って戴けるかと存じまして、貴方との楽しい幸福な一年間を臉に浮べ乍ら告白を書きましたためております。

実を申せば、私が看護婦を致しておりまして、貴方にお目にかからぬ以前から、既に私はアヌスに対して人知れぬ秘密を抱いておった身体でした。あの外科病院に勤める前、とみはR肛門科に最初の半年間を勤めておりましたのです。明け暮れ覗くのは肛門許り。坐薬や浣腸や、痔疾の裂傷の処置、そんな環境

の中で、とみは先任のUさんから、

「すっかり治っているのに、浣腸して欲しいばかりに来るクランケだってあるのよ。やっいて慣れてくると、氣持いいらしいのね。一度貴女も浣腸して上げようか——」

と、こんな冗談を云われて、思わず真赤になった事もありましたけれど、遂に本当にUさんから浣腸され日るが来ようとは思いませんでした。

便秘がつづいて、五日もお不浄に行かない時があつて、苦しくて苦しくて、先生に聞けば、それは肛門の入口で、宿便が石塊の様に固まっているからだ。浣腸して柔くし、ほぐして出して貰いなさい——と無難作に云われまして、Uさんから浣腸して戴いたその時の氣持——正直に申して、それは決して快いものではありませんでした。二度、三度続けるうち、Uさんが激しい浣腸マニアである事をとみは知りました。いつしか私もアヌスに激しい興味を覚える様になりました。

Uさんがお嫁入されてから、私も独りになって、いつしかそんな行為から遠のく様になり、時たまクランケの甚しい痔瘻や疣痔にくわしては、反って肛門病の恐ろしさを知らされて、もうあんな事はすまいと、秘かに心

に誓った私でしたのに……。

運命の皮肉と申しましょうか。貴方との楽しい夢のような生活の隙間に、ふと魔物の様に忍び寄った蟻虫の仕業の為、とみの心の奥深く眠っていた浣腸願望は、知らず知らず私の意思とは反対に募ってきたのでした。

とみは、貴方にその事を打明ける前から、蟻虫の仕業である事をチャンとしていました。私が秘かに希っていた通り、貴方は浣腸を奨められ、私にして下さいました。その時はどんなに嬉しかったでしょう。貴方は得々と蟻虫の害を話されましたけど、看護婦の私とその事を知らぬ筈がありません。どんなに耐え様としても笑えませんでした。まして、真剣な顔で説明なさればなざる程——。

毎夜の如く、最愛の貴方から浣腸されたあの頃のとみは、何と云う幸福者でしたでしょう。

けれど——、蟻虫が既に私の体内から、一匹残らず駆除されました時は、私はいうにいえぬ淋しさを覚えました。

時々貴方は、物言いたげになりました。私はその都度、胸をどきどきさせて期待しておりましたが、遂に貴方は云わずに通してしまわれたのです。

一旦アヌスの願望に憑かれたとみは、眠っていた子が起された様で、どうにも我慢が出来ず、貴方が会社へ出られた後、心ゆくまで浣腸の愉しさに浸り、それもやがては、あの肛門科時代の器具にまで思いをよせて、矢も楯も耐らず、ローソクや万年筆や試験管、ひどい時はザラザラの十能の柄の様なものを使ってまで、自分の慾望を満足させていたので。けれど、矢張り自己満足は、後味に厭な自己嫌悪を泌々と感じるだけで、どうにかして、貴方の手でこれを行って戴きたいと希ったのは、私の異常な性癖のなす業だったのでしょうか。——あの夜、私は蠅虫にかこつけて、それとなく訴えました。貴方は快く、むしろいそいそと浣腸の準備に立たれた様に私には思われました。しっかり手に握りしめたローソクが今だ今だ、早くと私にせき立てる様に感じられ、私は必死の思いで貴方を引止め、最後の切札をさらしたのでした……矢張り貴方は怒られました。とみは生れて始めて縛られ、柱に括りつけられ、猿轡をはめられ、蹴られました。

所詮とみと貴方とは違った世界に住んでいたのでしょいか——。私は自分の秘めた性癖を知られた時、貴方を最も愛するが故に、恥

と悲しさに骨身を削られる思いで、慟哭に悶え乍ら貴方の許を去る決心をしたのです。

愛想をつかされたとみ……。今となっては再び私を以前の様に愛しても戴けないと、身寄りもないとみは、淋しい淋しい気持を抱いて、貴方のお側から遠く去って行きます。ジプシー女の様だと、いつも私の黒髪を撫でられた貴方……。小さいからとみは六頭身だと笑われた貴方。ワルツの「ジプシーの月」を唄い乍ら、優しくくちづけされた貴方……。

何もかも皆、過ぎ去りし夢の一コマです。今こそ云えます、猥らな虫と云われた蠅虫よりも本当の猥らな虫はとみの心に根強く住んでいた事を……愛するが故に去つたとみを恨まないで……。いついまでも、おしあわせにお暮しの程を祈り上げます……」

あれ程愛し乍ら、最後まで分らなかった女心、私は一生、富子の幻を追って探し求めて行く事でしょう。還ってくれトミ……。彼女の性癖を知って私は、物狂わしくなる程に富子が恋しくなりました。何も手につかぬ私の気持も分って頂けると思います。風の便りに聞けば、富子は故郷の宮崎県の椎葉に近いS町に帰ったとか……。ここ数日の間に、私は遠く宮崎へ、富子を探し求めて行くつもりで

す。

九州宮崎のT子として、寄せられた浣腸願望の一女性の短かい通信は、或いは彼女ではなからうか……。

その様な想像を逞ましくし乍ら、私は初冬の田園都市を駆へと急いだ。

駅前のパチンコ屋から聞えてくるレコードが、

へ久し振りだな、お富さん……

へせめて今夜は、さしつさされつ……と、今流行の「お富さん」をかけているのにも、何か人生の皮肉さを感じつつ歳末の慌しい構内への階段を上っていった。(了)

【伝言板】十一月廿七日付にて編集長宛に通信を下さった東京都銀座西七ノ一、T・R・Y生氏へ。貴下の御意見は中々に示唆に富むものでした。特に女性が自分の身につける下着の変化によって、容姿や顔の表情に変化をきたすばかりでなく、精神的にも変化をもたらすということは、今後の研究課題として女性側からの発言がほしいものです。尙、貴下の作品見本というのを、是非お見せ下さい。大いに期待しております。

『自分で自分を後手に

縛る方法』

伏屋春江

△ 手と足を縛られていても、猿ぐつわがな
いと淋しい気がします。特に女は口とか鼻、
耳にとっても色々な気持が宿っているからでし
よう。私の場合も、猿ぐつわは必ずすること
にしています。古川様のようにマスクも好き
です。まず、大抵はホールで踊る時に手に持
つ小布を少し口の中へ入れます。

御誌には、よく口一ぱいにつめこむような
ことが書かれてありますが、私は余り沢山口
の中へ押込むと、気持が悪くなり、吐きそう
になりますので、口一ぱいにはつめこみませ
ん。その小布を口に入れて上を絹のネッカチ
ーフで縛ります。鼻も一緒に覆う方が気持は
よろしいのですが、後で鏡を見ると顔の表

情がわからないので、口だけ覆うこともあり
ます。しかし、猿ぐつわというものは、きつ
ちりと鼻口を覆って自分ではずすことが出来
るようにするなどということは、仲々出来な
いものです。いつか試しに、鼻口を覆った上
から小包用の紐でぐるぐる縛ってみたことも
ありますが、さすがにこれだと、どんなに畳
にこすりつけても取れません。そして息苦し
くて三十分と我慢出来ませんでした。紐を口
に含んで髪の後で強く括ることもやって見ま
したが、これは頬にひどい跡がついて、翌日
外出が出来なくなりましたので、それからは
やりません。(でも、こんな女の顔が好きな
男の人も居るのではないかしら)

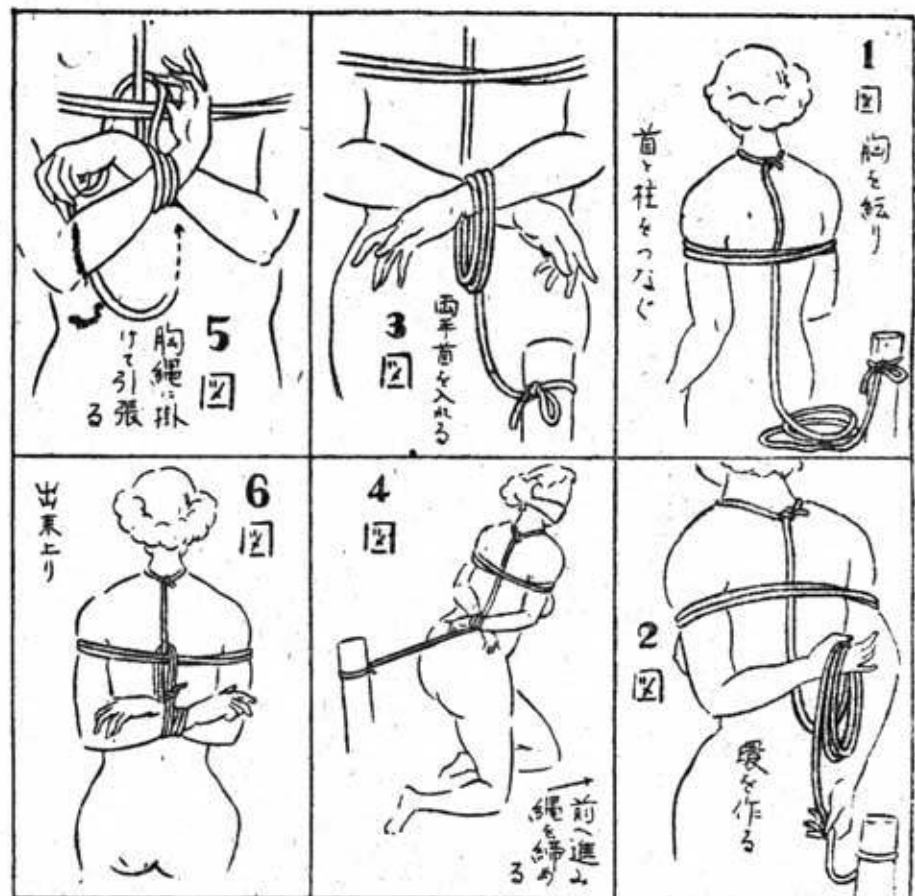
△ 次に縄を取り出し、その一方の端を首に
結び、もう一方の端を、どこでもよろしいの
ですが、柱や机の脚等に結びつけます。(引
張って取れない程度に) これが出来ますと
別の縄で身体を縛ります。私の場合は乳房の
上をぐるぐる三、四巻します(以上(1)の図)

△ 次に両手を後に廻して、長く垂れている
縄を首から引張るような気持で、片方の手で
たぐり寄せながら環を作りします。(映画等
の中でカウボーイが投縄をする時、よく片方
の手に縄を環にして持っているように) 環の
大きさは二本の手首が楽に入る位にします。
又環の数は勿論、環の長さによりますので適
当に作ったらやめます。(2)図

△ それから、その環の中に左右の手首を交
又して突込みます。(3)図

△ 今度は両手首を首の方に向って引上げる
ようにしながら、柱から離れるのです。縄が
ピンと張ってから、手首を色々に動かさせな
がら、尚も引張るといくらでも手首は締って
ゆきます。(ですから、結んだところが軽い
机の足などですと、一緒に動いて駄目です)
(4)図

△ 十分に手首が締ったら、又柱のところま
で来て、後手でその縄を柱から解きます。そ
してその余った縄を手に持って、今度は胸を
縛ってある縄にそれを通して引張ります。次
に又、それを手首に引掛けてから胸の縄に通



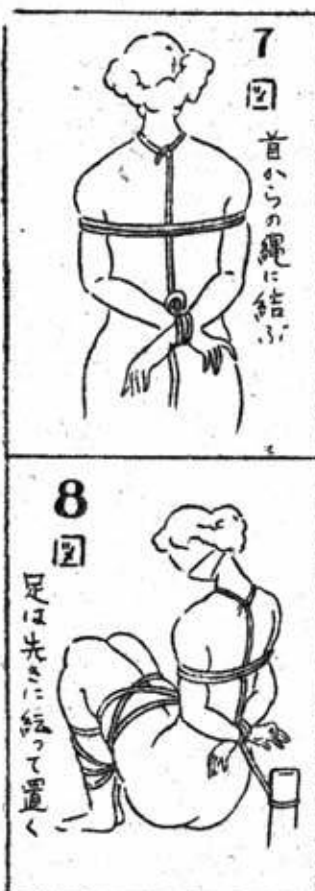
します。それを縄のあるだけ繰返し、最後にどこでも手に触った縄にそれを指先を使って結びつけます。この胸の縄と手首の縄を連絡させるのは、出来るだけ強く引張りながらやるのがいいと思います。又、後手の不自由な手でやるのですから、なかなかむづかしいのですけど、慣れるとすぐ出来るようになります。(5)図

△ これで出来上りです。(6)図

以上が一番簡単な後手の縛り方です。書きますと長ったらしくて面倒くさいようですが

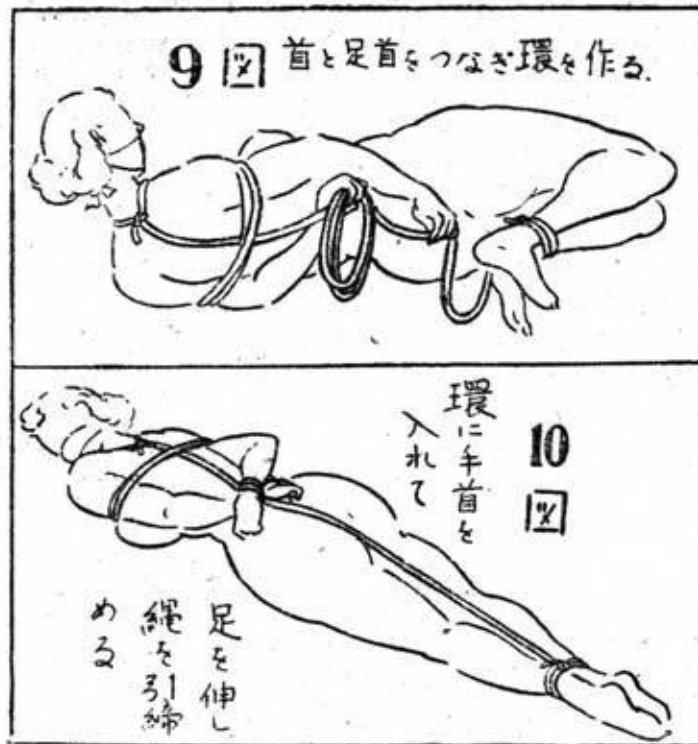
実際に出来上るまではほんの一寸の時間です。私と利栄子さんの経験からして乳房の上から二の腕にかけてあまり強く縛っておくと、少し時間が経っていざ解こうとすると、腕から手先までしびれて来て、ほとんど動かさずに困ってしまふこと、と、最後に結びつけた縄の端が手のとどかないところにいつてしまうこと(余りありませんが、色々身体をものがかせている中にそういうこともありました)をつけ加えておきます。

△ ほどく時は、縛った縄の端を手先で解き順々に背の縄と手首を離し、手首をぐるぐる廻していけば解けてしまいます。尚、これは一寸したスリルですが、(7)図のように手首の縄を首から下っている縄に直接引掛けて引張り、これを二回程緊結びにしておくと、まず、余程努力しないと自分では解けなくなります(もともと、これも結び目が緊く、その上指先のとどかないところに行ってしまった場合です)。これは実際にあったことなのですが、どうしても結び目が手先に触れず、鏡に背を向けて見ましたら、丁度手先のとどかないところに行ってしまった、いくらもがいてもゆるみもせず汗びっしりかいてしまいました。



「このまゝ朝になったらどうしよう、強盗にでも入られたって言い訳をしようかしら」って、とても心細くなりました。そういう時は不思議なものです。本当に自由になりたくて、そっと隣のお部屋の人を呼んでみたのですけど、自分のした猿ぐつわのために満足に声も出ないし、その上、丁度足も縛っていたので、ごろごろお部屋中を転って泣いてしまいました。二、三時間も転っていたかしら、やっと洋服ダンスの上にカミソリがおいであつたのを思い出して、それを取ろうと必死に努力しました。本当にお恥しいことです。が、がんじがために縛られた自分の身体をもてあましたながら、それでも涙を流してそれをやっと取り、縄の一ヶ所を切り解いたことが御座ります。

△ ついでに、足も縛っておく場合のことも書いて見ましよう。この場合は猿ぐつわをしてから、別の縄で足首から太ももにかけてぐるぐる縛っておきます。そして胸を縛るのです。そうすると(1)図と同じ恰好になります。たゞ足が縛られているので立って歩くこ



とは出来ません。柱から離れたり、柱へ近づいたりする時は後手を畳につきながら身体を動かします。後は同じです。(8図)
△ 柱を使わずに首を縛った縄で直接、足首を縛って(柱の代りにするわけです)後手と足首をそらしながらやる方法もあります。この場合は環に手首を入れたら足を突張るので。(9)(10図)

△ 又、何も使わずに、片手の手首に初めに縄を結びつけておいてからやる方法もあります。(11)(12図)この方法に慣れると一番簡単で、足でも身体でも十分に縛ることが出来ます。冬にオーバーを手を通さずにはおり、映画館の中でこっそり縛って見たことがあります

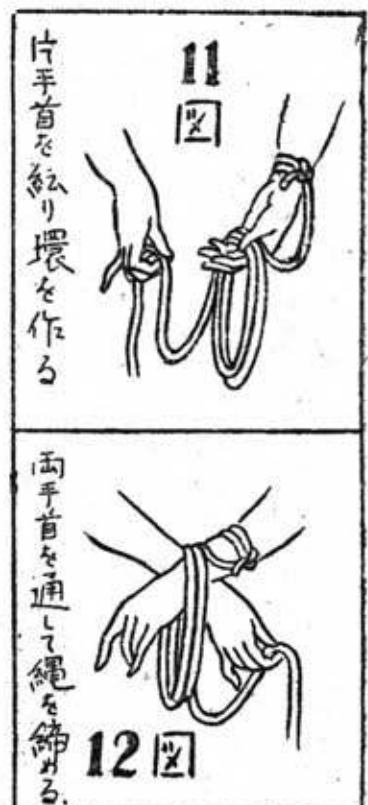
す。指先をうまく使うとなかなかしつかり縛ることが出来ます。

以上、つまらぬことをくどくどと書きましたが、こんな風にして私と利栄子さんは自分で自分の身体を縛っているのです。イケナイ女だとお笑い下さい。

夜おそくホールから帰り、お床を敷いてから押入にある紐を出して、こうしてく、

り上げて猿ぐつわの顔を鏡台に写して、じつと自分を見つめている時が一番幸福(?)な時なのでも、その時の私の姿は、多くの場合ブラジャーにパンティ、又はスカートを着けたままです。ホールのドレスを着たまゝの場合は、着物を着て髪を色々に変えてみたりして縛ることもあります。独りでアパートにいますので、中からカギをかけてしまえば分りませんけど、時にはやっと縛り終わってしまった頃にノックされて困ることも御座居ます。

もしこの文が貴誌に掲載して頂き、読者の女の方がこの方法で自分の身体を縛って見て下さったら、どんなに素敵でしょう。(男の方の中にも自分を縛るのが好きな人がいらっしゃるようですが、私にはそういう男の方の気持は分りませんが、私だって縛られるのが好きなのですから、それと同じ気持でしょうね)今のところ私の相手は利栄子さん一人ですが女学生等を見ると縛っていじめてやりました。



い気持になります。肥満しておられる方はこの「方法」では、後手から色々手先を動かしてのお仕事は、むづかしいかも知れませんがね。利栄子さんも少し太り過ぎてよく出来ないうですって、だから「今度春江がくゝってあげるわ」って約束してあげました。それから同性の方に申しておきますが、くれぐれも乳房の上に直接縄をおかけにならないで下さい、気分が悪くなりますもの。

【告知板】

賣場の多い時代劇映画

伊藤晴雨翁の賣画資料を豊富に使用して撮影開始される

東宝系の京都撮影所

マキノ雅弘監督、滝村プロダクション製作

横溝正史原作 「めくら狼」

賣場の多い時代劇映画として特にその権威者伊藤晴雨氏の全面的な資料提供によって撮影開始された由。

〔映画・雑誌〕 通信

柳 一 郎

|| 映画に於けるサジステイックな

シーンに就て||

最近、奇クには色々映画の中に出来て来る縛られた女優のシーンが紹介されておりますが、私の様に月に十本内外の映画を観る映画狂にとっては、実に良い参考となる欄であり又、興味深く読んでおります。

扱、今まで奇クに於て取上げられていなかったと思われる、サジステイックなシーンがあった映画を御紹介しようと思う。それは今年十月封切の米ヘクト||ランカスタープロの「アパッチ」である。この映画はジョン・ピーターズが二回程縛られる場面が出て来て、それでなくても美しい顔を余計美しく見せて呉れた。

その一つはJ・ピーターズの愛人バート・ランカスターが白人の捕えられ、列車護送中に逃亡し、女(こゝより女とはJ・ピーターズ。男とはB・ランカスター)の事である事をお断りしておく)の家に隠れ眠っている間に、女が軍隊に捕えられ狼ぐ

つわを噛まされ、革紐にて後手で手首を縛られる。その時の狼ぐつわは、白布で鼻の中程迄を隠蔽し、上からのぞいた女の目が実に綺麗に思えた。然し、このシーンは時間にしたら十秒も写っていないかつたのは残念だった。

次は、女は男が振り切るのをくつついて追っていく所で、ついてくるなと男が女を棍棒で殴り倒し、岩のごつごつした所を歩くのに必要な革靴をも谷間に捨て、ついて来るのを断念させようとするが、それでも女は岩角に足の裏を傷つけ、血をにじませながら後を追っていくその表情は、単に愛人を慕う顔ではなく、苦痛を喜ぶマゾの境地にある表情であると思われたのは僻目か。

次は男が女を誤解し、女の両手を後手に両足首を何れも革紐で縛り、河のほとりにある木に両足首の革紐を結びつける。その結びつけた革紐の長さは丁

度、河のほとりに迄一杯に伸びる余裕だけしかなく、勿論逃げ出す事が出来ない。女は疲れ果て、喉が乾ききり、俯せになつて、まるで犬が水を飲む様に足首に縛られた紐を一杯に伸し、河面に顔をつけてゴクンゴクンと水を飲む。男はそれを黙って見ており追手を喰い止める為去って行く。女は男が帰ってくるまでその儘の状態で失神している。

以上であるが、この映画を観る時にはこの様な場面があると、思わず観たのであるが、繰返し二回も見えた事によって、いかにサジステイックな映画であつたか分つて頂けると思う。

この映画の外にも色々縛られた女優の出来た映画、又はサジステイックな映画を見たが先輩諸氏の書かれた事と重複するので止めておく。

尚、奇クで紹介された最近の映画の中で見て来たものは「幽霊男」「コロラドの急襲」「スキャンダル殺人事件」の三本があるが「幽霊男」に於ては、三条美紀が印象に残らぬ程度縛られていただけであり、又「スキャンダル殺人事件」は唯毎度の

事であるが(このコンビの映画に於ては必ずこの場面が出て来る)R・ヘイワーズがG・フオードに平手打ちを喰うだけである。又、「コロラドの急襲」は純情型の女優ジョーン・エヴァンスが父親に脊中を鞭打たれたがもう少し長くやっていて貰いたかった。

それから、奇ク十一月号に紹介されていた「妖異忠臣蔵」の名前不明の悪方の腰元というのが私にもこの映画を見たが、吉田江利子という女優である事をお教えしておくと共に、私はこの映画のシーンで、高山深雪という女優が討入りの衣裳を着せられ首吊りになつていたシーンがあるのと知って、これを目当てに観に入つた事を白状しておく。大分ぐたぐたと書き並べたが緊縛やサジステイックな場面のある映画は一般に映画そのものとして、実に出来の悪いものであり、唯、私の観た映画の中で比較的見れたのは「文化果つるところ」(廿八年三月封切)と「アパッチ」の二作品である事は残念でならない。

(おわり)

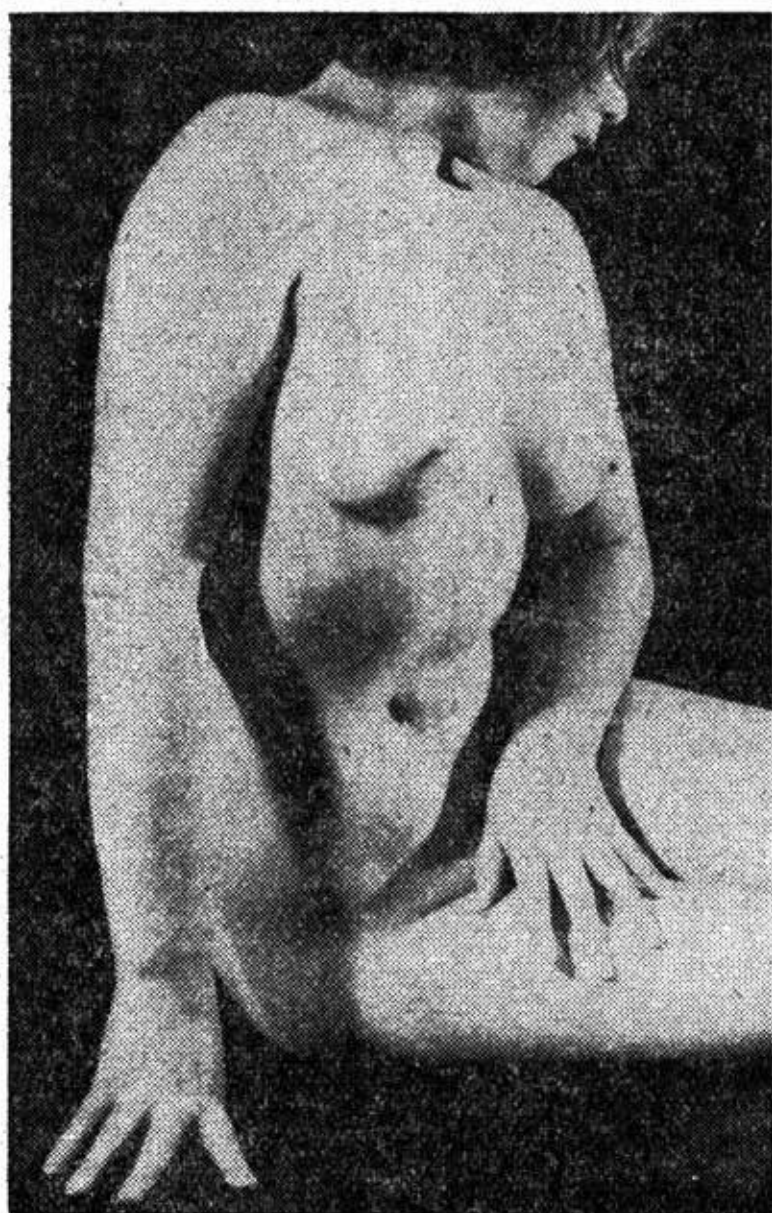
写真

お 臍 と 乳 房

土 岐 成 之

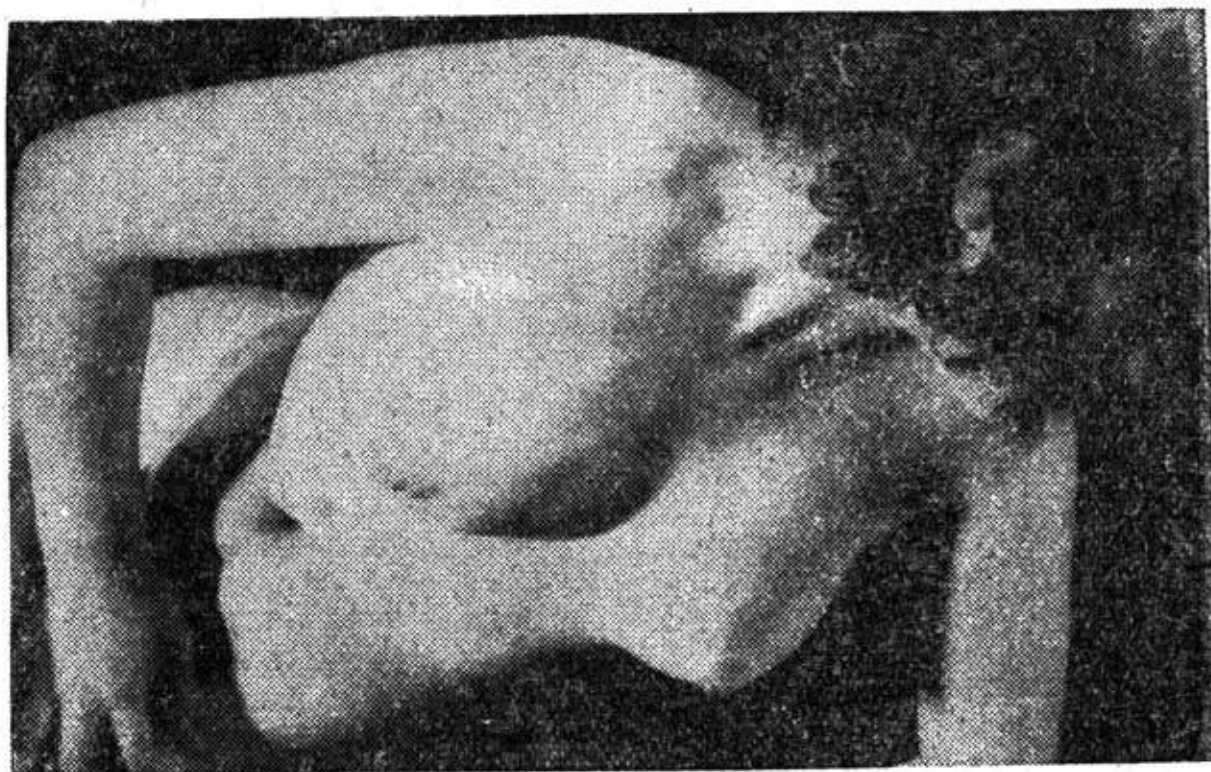
新年号の巻末、課題原稿の中で写真も募集しておられるので、私が最近撮影した写真を三枚お送りいたします。私は女体の中でも殊に乳房と臍部に興味を持っていますので、それを中心として十数枚撮影した中のものです。カメラは

ローライコードF四・五付ノンコート、場所は貸スタジオの写場、ライトは五〇〇ワットスポット一ケ、三〇〇ワットフラッド左・右二ケ宛、上に一ケ、計五ケ、F・八に絞って五分の一秒です。フィルムはネオパン。モデルは貸ス



スタジオにいた人で氏名年令は不詳ですが、多分十八、九才位ではないかと思えます。乳房がぐっと前へ突き出すように張りきり、第一私の大好きなお臍が、ぽこんと可憐らしく窪む位、皮下脂肪が豊富で、それでいて若さに張りきっているの、贅肉らしいものは少しもない気に入った、よいモデルでした。第一

枚目のは、息を吸い込んでお腹をへこまして、そのまゝ辛抱して貰っているところを狙ったものです。彼女は別にそんなことをしなくてもお臍の上あたりでぐっとくびれたよい姿態の持主でしたが、呼吸をしているとお腹が出たり入ったり動いて、シャッターが五分の一秒ではうまく止まらないと思ったから、特に息をつめて貰ったのです。突き出た胸とくびれたお



腹、私の好きなものを二つ狙ったフォトです。

次に横型のものは、短焦点レンズの特性を利用して特に乳房を誇張してみました。左の乳房はパツ

クの黒から浮き出して、いさゝかの垂れも見せていない処女の見事な輪郭を示していますし、右の乳房は、むっくりとお腕を伏せたようなボリウムを見させています。但し、乳房にしてもお臍にしても只大きいばかりが能ではありません。時には痩せ気味の人のでも、形がよくて引き緊ったものであれば、心がひかれるものです。お臍にも表情があると、誰かが言っておられたようですが、全くその通りで、いろ／＼のお臍を眺めていると、その人の性格までわかるような気がします。

第三枚目のは、真正面で彼女の顔が出ていたので特に三枚の中に

「読者通信」

拙作「脱腸帯の回想」が十二月特大号に掲載されたのを見た時、私の興奮は飯ものどに通らなかつた。ワク／＼させ乍ら、その頁を開いた瞬間の気持は、まるで鬼の首でも取ったようで体中がワナワナと震えてポーツとなっていました。挿絵まで三葉も挿入され、全く光栄であった。気のせいかな、その絵が、私の少年時代の顔そっくりに見え、読者の前に素顔をさら

け出された姿を思い浮べて全く恥しいものであった。拙い告白を掲載して貰ってこれ以上注文する事は過ぎた行為であるが、唯、脱腸帯の絵が実物と違つて居たのは、惜しい極みであった。しかし、私は、自分の書いた文章を何回となく読み返し、新しい追憶を次から次へと想起して倦む事がなかった。次いで「丁稚小僧幻想」が新年号にも掲載された。これでは、挿絵は私を大いに喜ばせた。殊に第一頁の絵はびったりと合つて居



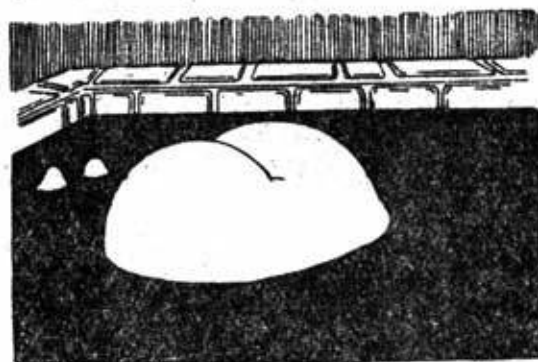
選んだのですが、ライトが拙かったので、肝腎の乳房とお臍の立体感が表れていないのが残念です。ごらんの通りの清純な可愛い顔で、彼女がワンピースでも着けて道を歩いていたら、誰がこのようなボリウムのある素晴らしい体格の持主であると思うでしょうか。彼女の身体で、殊に気に入ったことは、この外に全身の肌がシミ一つない餅肌であることです。お化粧ではとてもにじみ出ない、健康な若い女性特有の、肌の輝きなのです。私は又機会を改めて、変った写真をごらんにいれたいと思っております。

(終)

り、ムッチリと肥えた、にこやかな小さい体の酒屋の丁稚小僧の姿が実に巧みに描かれてあり、それを窓から覗いている私自身の顔が何だか妖奇じみて素晴しかった。他の二葉の絵は、少し、年令的に見て二つ三つ大きく描かれていたのは残念であった。尙厚かましい欲を云うならば、前掛の文字は良かったが垂れの下端がはつきりとかち切られて、糸が下がっていない事だった。紺の帆前掛は、これが特徴で、ブラ／＼下がった糸の

裁断の具合が何とも云えぬ刺戟を与える。又、前掛の紐が前面に結ばれ、垂れて居ないのも惜しかった。しかし、第一面の酒屋の丁稚小僧の姿は何と愛くるしい顔であり、ピッタリと身についた厚司の着方であつたらう。しっかりと握った酒瓶、烏打帽を脱ぎかけた手、ふん張った足、正宗の白い文字が、少年を生き／＼とさせていた。私は、心から感謝している。

(大阪 森太一)



私のイメージ

「花村恵美子さんへ

捧げる」

狩井麗作

奇巧の女性執筆者の中で、花村さんは私の一番好みに合った人です。もともと奇巧の貴重な価値は告白文の主脈を女性がなっている事でしよう。生きる事に真摯なそれらの人々の特異な情熱は単なる一時のきまぐれでなく、永続的な生命の発露であり十字架を背負った苦惱者である点、他誌に見られない文獻的価値と興味があると考えられます。その代表的人々は古川裕子さんであり、羽村京子さんであり、若くて逝った角皓子さん。亦毎号欠けた事のない川合伊都子さんであり、そして進鋭花村さんでしょう。古川さんは原罪者。羽村さんはアカデミック。そして花村さんは実存主義者である、と私なりに考えてみました。

花村さんの聡明さと大胆さは戦後のものであり、その意欲と実行性は、全く従来の日本人になかった所の新しいモラルであります。私の花村さんへの親近感はこのにあります。しかしこんなおべんちゃらには、あなたは唯尻くすぐったく感じられるだけでしよう。卒直に言いますと、あなたのヒップに私が魅了させられた事が最大の理由です。浣腸マニヤのあなたの未知なるヒップがヒップマニヤである私の心をひどくかき立ててしまったのです。二回にわたる浣腸手記と浣腸通信はあなたのヒップを身近なものとして私に感じさせたのです。そこで私ははるかな南の果から、あなたに対して、私のイメージを七色の虹におりなして描

いてみましょう。あくまでイメージであり、たわごとでありますのでどうか気を悪くなさらないで下さい。

第一景。季節冬、雪がうっすらと積んでいる或る温泉の一旅館。鍵のかかる家族風呂。さあおせん立ては出来ました。私は命令する立場。花村さんは服従する立場。あなたは今日神に捧げられる、かよわい小羊であり、いけにえである。先ずその為には身体の一部々まで潔めねばならない。身体を入念に洗うために入浴させられる。浴室の窓硝子越しに晴れた冬陽が明るく射し込んでくる。あなたは私の前で羞恥に肌を染め乍ら、それでも命令通りに、白いむっちりとした肌のあらゆる場所にシャボン塗り泡を一杯に立たせてこする。その石鹸の泡を見ると、あなたはその面前で恥しき一杯なのに、浣腸の石鹸水を思い出し、胸を妖しく高鳴らせる。私はそれを見抜いてほくそ笑む。すっかり身体が洗いきよめられると、そこには一人のふくいくとした青春の香りを放つ、ヴィナスが立っている。私はあなたをタイルの床の上につ立たせたまま、今度は私自身ゆっくりと入浴して身体を暖める。

その間、あなたは、命令された通りにヴィナスのポーズを取ってゆっくりとその場で廻らねばならない。私は風呂の中から、その均斉の取れた裸身を心ゆくまで眺める。やがて、私は、イケニエの料理にかかる。先ずあなたを浴槽の中に立たせ大きいゴムマリを持つて来て、あなたの下腹部に当てる。そのマリを中心にして、上半身と下肢をぐっと屈折させて、ひざと首に縄をかけて適度に縛る。必然的に、あなたは浴槽の中に、ゆらりと転げる。その前に、あなたの頭には、猿轡代用として、防毒マスクをかける。そのマスクのゴム管を長くして、湯の中に頭部が沈んでも、そのゴム管を通して外気を呼吸出来るようにして置く。こうして、背中を円くした恰好で下腹部にゴムマリを抱いて縛られると、どう云うことになるか。あなたは浴槽に一杯にたたえられた湯の中に、頭と下肢を下にして、腰からヒップを上にして、ぶかりと浮くのである。私は手をそえて、浮き具合を直す。エメラルドのように透明な温泉のお湯の中に、今しもむっちりと盛り上った、惱ましい一個のヒップが、ぶかりと水面に浮び上る。湯に洗

われたその白い肉の円球は、むし
たてのパンのように、亦すべっこ
い餅のように手ざわりが柔らかで
あり、二つの大きい円球の真中を
深い溝が区切って、それ全体は、
一つのまるい人工の島になってい
る。何と云う美しい抽出である
う。ヒップのみのオブゼエ。単純
にして、エロスのエスプリ。私は
この美しい一個のいきものを先ず
神に捧げる。そして、キリストの
名に於いて（どうか真物のクリス
チャンの方々よ、この悪魔的冒ト
クを許されよ）神に小さい人間の
塩を捧げる。窓を開いて、そこに
積んでいる雪を手にとって、ぶっ
かりと浮いたヒップの中心、花ビ
ラのようなアヌスの上に、この雪
のかたまりをのせるのである。暖
かく柔らかいアヌスの上に乗った
雪は、次第に溶けて溝に沿ってお
湯の中に消えて行く。あなたは、
その温感の中で冷たいメスに、
アヌスをキュツとちぢめて身悶え
るであろう。その度に、ヒップは
わずかに左右にうごめいて、エメ
ラルドの湯を騒がせる。神はイケ
ニエの第一の祈りを聞きとどけら
れたのである。

腸を、明るい冬空の下で神のお目
にかけるのである。かねて用意の
イルリガートル。長いゴム管の先
には二十センチもある、たくまし
い金属製の嘴管がついている。イ
ルリガートルの中には冷たくって
牛乳のように白い石鹼水が満たさ
れている。嘴管部は、白い人工島
に打ち込まれる石油パイプのよう
に、ズーッと沈んでゆく。身悶え
るヒップの悩ましい動き。私は、
ゴム管にはさんであつた止めもの
を外す。すると音もなく液は白い
大きいヒップの中へと吸い込まれ
てゆく。私はそのふくよかなヒッ
プを下から支えながら、心ゆくま
で、この妖しい儀式に見入ってい
るであろう。液は、五〇CCから
一〇〇CCと絶え間なく入る。二
〇〇CCを越える頃から、あなた
は下腹部に、痛みと苦しみを感じ
始める。普通だったら、もっと素
直に液が入ってゆく筈だが今日は
下腹部に、大きいゴムマリが押し
つけられていくからである。何と
云う刺戟であろう。やがて二五〇
CCから、三〇〇CCに達する頃
には、あなたの苦痛も強まってく
る。注入一応中止。三〇〇CCの
石鹼水が入ったとも思えない位、
白いヒップは以前と同じくふくよ

かなり、くくを持ってお湯の上に
ぶっかりと浮いている。体内に入
った石鹼水は、その冷たさが、体
温の温かさに敵対し、忽ちにして
排せつ欲が昂じて来るであろう。
あなたは、お湯の中に浸けられて
いた息苦しさとお腸による排せつ
感とが、交り、たえられない位の
もどかしさ、苦しさ、せつなさに
本格的に身をもだえてもがき初め
る。しかし私は、まだまだ自由を
許さない。神は人間に、ストイシ
ズムを強いるのだ。我慢しなくて
はいけない。いよいよ時間が迫
る、あなたは泣声になって訴え
る。しかし防毒マスクのゴム管を
通しては、その訴えも声にはなら
ない。ただ、ウーゲーとうめき声
が、水面にもれるだけである。し
かし遂に限界に来る。勢よく噴出
する液体。それに続く、ドロドロ
の排泄物。それは、ヴェスビヤス
火山の溶岩が海になだれ込むよう
に。湯の中に沈み、又散ってゆ
く。石鹼水の中に強烈な香水を混
ぜていた為に、これらの噴出物
は、そうひどい匂いではない。そ
れにも増して、白い純潔なヒップ
の真中から、このような、けがれ
たものが噴出することは素晴らし
い事であり、神もほめ給うであ

う。あなたは恥しきあまり、死
ぬ程みもだえる。しかし所詮、あ
なたはイケニエである。儀式が完
了する迄は解放されない。やがて
体内の悪しきものは洗い去られ
た。もう一度浣腸。イルリガート
ルの中には今度は純白のほんもの
の牛乳が満たされる。それを三〇
〇CCすべすと光る大きい円い
ヒップの中に注入するのである。
今度は、あなたも楽であろう。し
かし、さっきより適温の温泉の中
に浸けられたあなたは、湯にゆだ
って身体がぐったりにえて来て、
息苦しさは倍加している。しかし
冷たい牛乳が飲み頃に暖る迄は許
されない。二分。五分。暖かくな
ったであろう頃、やっとあなたは
湯の中から外へ、浴槽からタイル
の床へ移る事を許される。あなた
は頭がフラフラして、タイルの床
にしやがみ込む、そして排泄欲に
従う。私はビール用のジョッキを
あなたのヒップの下にすえる。ほ
とばしり出る牛乳は、ジョッキに
満たされる。私はこれを手に持ち
冬の明るい陽にかざして、一気に
飲み干す。かくして儀式は終了す
るのである。

あゝ、何と云うイメージ。

十一月二十六日



「編集者への公開状」

吉 次 一 平

ズロース・マニアの希望

「奇ク」過去一ヶ年分を机の前に
つみ上げてみて、その量的にも内
容的にも、それ以前の「奇ク」
にみられなかった素晴らしい発展
生長ぶりを編集者諸子に感謝致す
と共に、私の立場——ズロース・
マニアとして今後の「奇ク」に幾
つかの注文をしてみたいと思いま
す。編集の方々の御努力によっ
て、以前は全然とっていいほど
無視されていたフェチシストのペ
ージが段々と増えてくることは何
よりも喜ばしいことで、とくにズ
ロース・マニアの同志の告白、体
験記など、今後ともなるべく数多
くのせて戴きたいことは申すまで
ありませんが、私がここに敢て
公開状なるものを呈出するゆえん
は、実は挿絵とフォトについての

不満があるからであります。

ズロース。その完璧な美しさは
腰ゴムの絞りからはじまり、なだ
らかな褶をつくって女性の神秘的な
下腹部を柔かく暖くおおって、や
がて両腿にふくよかに流れるかに
みせてピッチリと大腿にくいこん
でいる裾ゴムまでのリズムカルな
褶の旋律——とくにその裾ゴムの
部分のデリケートな絞り工合にあ
ると思います。私は蕩然となつて
このいかなる芸術の美にもまさる
美しい下穿にうたれます。誰がこ
んな素晴らしい下穿を考案したの
でしょう。男のパンツと較べてみ
て、ただ裾口にゴムが入っている
かないないかの差だけではないかと
自分に言い聞かせながら、しか
し、そのわずかな違いの中にズロ
ース・マニアの悲しくも又感極ま
る楽しい夢が、ひそんでいるので

す。

ズロースとパンティ、ブリーフ
との区別は、はっきりしています
が、ブルマースとズロースの区別
は曖昧であるようです。これらは
申すまでもなく裾口にゴムが入っ
ていて穿かれた時、女性の大股に
ピッチリとくいこむ様に出来てい
ますが、ブルマースはズロースよ
りもゆったりしたものを一般に呼
ばれているようであります。女学
生の運動の時用いる黒や紺のだぶ
だぶのブルマースは、普通の下穿
としては用いられていないようで
すが、そのブルマース程ゆったり
はしていませんが大股との間が大
分あいている程度のもを私達は
普通ズロースと呼びなれていま
す。福岡のSY生氏の云われるブ
ルマー型ズロースという形です。

これは最近ブリーフ、パンティの
進出に伴い次第に若い女性の間か
ら影うすくなってゆく傾向にあり
中年以上か女学生等、スタイルに
下穿の影響の少ない人々の間にしか
残らなくなつてゆくのではないか
と思われまふ。「奇ク」にしても
その時代的流れを追ってかどうか
わかりませんが、挿絵、写真をみ
てもその九割以上はブリーフ型で
裾のくり上った、しかも体の線を
そのまゝ出した恰好のもので占め
られていくようです。私等の求め
る裾口の緊迫感を示す褶のリズム
など殆ど満足させられません。
まず挿絵について画家別にズロ
ースの型式をおつてみましょう。
畔亭数久氏の「半公刑」「夏子抄」
の挿絵は、ほど私の理想に近く感
激した作品です。その他畔亭氏の
ものはデッサンも正確でその写真
的な線は美しく好きなのですが、
殆どはブリーフ型でがっかり、そ
の写実的な線でブルマー型ズロ
ースをはっきりと描いてもらいた
いものと希望しています。滝麗子氏
の絵も仲々面白いと思うのです
が、この方はもっともズロースの
裾口のリズムに詳しい筈だと思
うのに、どうも簡単すぎて残念で
す。目次裏の縛り絵アイデア集な

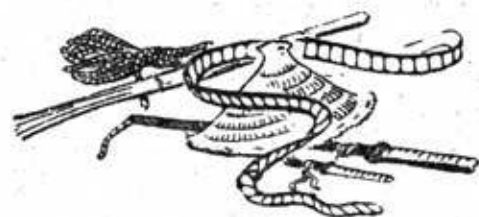
ど一人々々夫々形のかわったズロースを穿かされては如何と思ひます。そしてズロースの裾口を正確に描くことによって女性の裸体美は全然損われないどころか（「奇ク」四月号サーカス責めにみられる様なぶざまさ）ます／＼エロチックに美しさを増すものと思ひます。同様なこととは飛田良二氏、四万孝氏、杉原虹児氏にも云えること、と思ひます。飛田氏の着想の面白さの上にズロースの正確さが加わったら！（是非ともズロースを利用したおしめカバーを希望！）四万氏の特有な絵の調子の中に裾口の美しいズロースが出現したら！杉原氏の幻想の中に裾口の緊迫感の生々しいズロースが躍り狂っていたら！といつも夢みてやみません。この頃はあまりみえぬ都築峯子氏など最もズロースの詩情を解し、それを艶めかしくしたたる様に描ける方だと思ひていますが、どうも希望がかなえられませんが、御大、伊藤晴雨氏にズロースを求めるのは一寸無理でしょうが、あのごつりと油ののつたタツチで描かれるズロースのあやしきまでに匂ってくる美しさは一枚でもいいから得られないものなのでしょうか。

次に写真の方を眺めてみて、こども絵と同様のことが云えます。裾ゴムに対するデリケート的な配慮の欠除。そのためにもブルマー型ズロースをモデルの方に穿いてもらいたいと希望致します。白い下穿は写真の工合でハイレイションをおこして陰影のない真白けにうつっていることが多いようですが、その点ライトの工合に注意しては、ズロースの最も女性的な点を強調するように、坐って両腿をひろげたのを正面からとるような角度をお願いしたい。私一人の希望かもしれないがいじめられる男性のマゾの方にこのブルマー型ズロースを穿かされては如何と思ひます。男性に穿かされたズロースの裾口の滑稽さは又マゾの心理によく通じるのではないでしょう。か。もう一つ慾を出すなら、この女性に穿かれたズロースが遂に溢れてくるお小水で汚れるところ、浣腸の場に、汚れて散ばっているところ！等々。

次から次と編集者に対する希望は尽きません。はじめにも書きましたように、次第にブリーフに圧迫されてくるズロースではあります、私達の若かった頃、ズロースに対してはじめて魅力を感じ出した時のズロースの型はこのぶあぶあのズロースなのであり、今だにこの幻影に悩まれ又陶醉している私達であります。「奇ク」編集者諸子に「奇ク」を完全な性風俗雑誌として発展させられるためには、この世の男性の総てが大なり小なりその影をおってやまないズロースに対して、MやSに対してその縄の結び目や禪の結び方を考慮されるのと同様の、細かい神経で以てその最も大切な部分である裾口をデリケートにとりあつかわれるべきだと思ふのであります。「奇ク」の発展を祈って公開状をおわります。

吉次一平氏への回答

女性の下着類、特にズロースの取扱ひ方についての詳細なる御希望は、まことに傾聴に値する一文でした。私達は「企画は大胆にして奔放、実施は慎重にして細心」というスローガンの下に真面目な編集をやっているつもりでありましたが、読者の方々のいゝ御意見は直ちに実行にうつしてゆこうという勇気と実行力を持っております。外国の雑誌などでは比較的多くのスペースを女性の下着に関した事柄のために割いておられますが、日本では今迄のところ一般に余り関心が深くないようです。私達は今後、若い女性の下着に対する感受性についても研究したいものだと考えております。とにかく、従来おこたがり勝ちであった挿絵や写真等の下着の部分について細心の注意と関心を払うよう心掛けていきたいと思ひます。只一つ弁解しておきたい事は、昨年四月号、目次裏の滝先生の「サーカス責め」のズロースの部分については、全く滝先生の罪ではなく、編集部責任であることです。と申しますのは、前号の三月号が抵触事故を惹起し、本当は最初から書き直して貰うべきだったのですが、すでに原稿が印刷へ廻っていたことでもあり、発売日が迫っていて書き直しの余裕がなく、万やむを得ず印刷所から回収の上、慌てゝ書き足して頂いた為、あゝいっと不手際なことになったわけですが、これは発売日を一日も遅らせたいわけにはいかないという至上命令のため臨機に便法を構じたわけでありますが、その当時は三月号の抵触直後の大混乱の最中であらゆる方面に迅速なる処置を要求されつゝあつた時期だということも御諒承頂きたいと思ひます。（箕田京二）



〔映画・雑誌〕通信

最近の映画から

白石稔

縛られた女優……、それはサジ

ストにとっては見果てぬ夢であ

り、希望でもあります。奇巧の旧

号（特に最近号）には、読者の方

々からいろいろな形で御投稿が誌

面を飾っています。そこで私は十

一月号の「女優の縛られた映画速

報」に引き続き、十二月号、一月

号と映画予告篇といった形で女優

緊縛映画を御紹介することによっ

て、皆様の御参考に供した訳であ

ります。その結果か、一月号には

皆様方が数多くの映画を御紹介下

さいまして、私の提案通りマニア

にとっては此の上ないよき参考と

なり、嬉しく思っています。

以上のような訳で、私も今後予

告篇の方は努めて資料を集め毎月

御紹介し、その外「最近の映画か

ら」と題して、部分的ではありま

すが、随時投稿したいと考えて居

りますので何卒よろしくお願い致

します。

「変化大名」（一月号、予告）

父のうらみを晴らさんと、暗躍

する復讐鬼は目指す敵の愛娘を次

から次へと襲う。といった所がク

ライマックスの映画。宇治みさ子

と三浦光子が猿ぐつわをはめられ

て運ばれる。（但し縛ってない）

高山裕子は後手に足までも縛られ

て転がされている。浪花千栄子も

縛られる等、数多いシーンの割に

盛上るものはない。

「快傑まぼろし頭巾」

（十二月号、予告）

演ずるは明眸千原しのぶ。役は

官軍に味方する火薬研究家の愛

娘。父親は新強力火薬を発明する

が、その秘密は図面に記してお

く、この図面をめぐる正邪入乱

れて争うこととなるが、その秘密

を横取りして巨利を得ようとする

外人達のため、父は連れ去られて

拷問を受けるが、白状しないので

責め道具として外人達は娘を連れ

てこようと相談する。千原しのぶ

が隠れ家に居るとその手下が踏み

込んで、逃げようとする娘を引き

戻し、黒布で猿ぐつわをかませ、

後手に縛り上げ、

背中を押し乍ら家

の前に待たせてあ

る駕籠に押し込み

引きあげる（この

間三カット）。次

いで外人達の家へ

連れて来られ、囚

われの父の前に後

手のまゝ馳け寄り

引き戻されるシー

ン（約四カット）

いよいよ父の前で



娘を責めるシーン。千原しのぶは矢絣の着物を剥がれ、長襦袢姿で手首に鉄環をはめられ、鎖で天井へ吊り上げられようとする、羞恥と苦痛とに必死にもだえる姿は美しい（このシーン数分間）。羞恥と苦痛にも負けず、その秘密を口外しなかったが、剥ぎ去られた帯につけてあった守袋から遂に図面は発見せられ、父娘は悲涙にむせぶ。外人達は用のなくなった娘を人買いに売るべく値段の交渉を始める。娘は商品として後手に縛り上げられ白布で猿ぐつわをかまされた身体を、トランクに無理矢理に詰め込まれている。悶えようにも箱詰で自由の利かぬ身体。顔だけは僅かに動かせる。交渉が纏ま

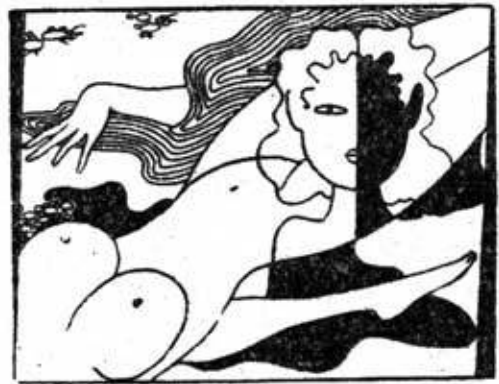
り人買い商人はトランクの蓋を閉め、運び去ろうとする所で救いが現われ、娘の入ったトランクの蓋が開かれ、猿ぐつわを外し縛しめを解くまで、このシーンも相当長い。この映画は上映時間一時間二十九分のうち緊縛シーンは四回で合計二十分以上はあろうかと思われるので、詳しく説明しました。

「和蘭囃子」(一月号、予告)

終末近く囃子として捕えられた小園蓉子は、誘いに乗って現れた南風洋子と、二人を救いに来た大谷友右衛門に後手のまゝ馳け寄ろうとしては引き戻され身代りに射たれた南風洋子や群がる敵と斬り結び大谷友右衛門に馳け寄っては引き戻されること数度。砂丘に前のめりに倒れたり仲々の熱演。これらがすべて後手姿で、種々な角度から撮られているが、夜のシーンのことゝて縄目までは、はつきりしないのが惜しい。

「快盗三人吉三」

悪事の限りを尽す僧(沢村国太郎)の悪事の証拠を見届けんと敵地に入った娘(井川邦子)は、悪僧に見破られて扱帯で後手に縛り上げられ地下室へと……、地下室では柱に縛りつけられるが、盛装のことゝて美しい。(終)



〔映画・雑誌〕通信

無毛狂崇

末森 飽男

「週刊サンケイ」十一月二十八日号に変わった記事がありましたのでお知らせします。それは「街の話」として「女の秘密を喰う男」という題で、三行広告によって自分の性癖を満足させる女性を求めた或る青年のことを話題にしたものです。「トンダ広告、ダシに使う

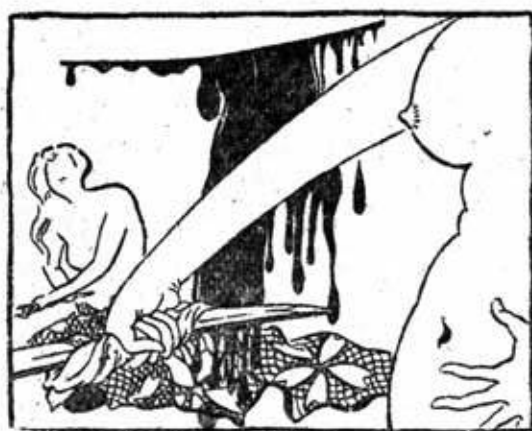
そういうった女性にこそ憧れを抱く人も案外あるのじゃないかと、変なところで心強く思ったりしました。

さて、その週刊誌の内容ですが題名の横に次のような面白い記事があります。

「無毛に悩む方無料相談に必ず親書乞う。秘密厳守……」インチキ広告も数あるなかで、これは人知れず悩む女性の秘密を巧みに利用し、治療ならぬ求愛の手段にするというアクロイ手の込んだ広告が現れた。しかもその本尊は、病院に名をかり女性の弱点につけ込む一結核患者であつたという話」

というように、この青年には大変同情のない書きぶりです。そして、この石丸という青年が治療を

求めてきた女性に対して出した手紙を——ナント綿々たるラブレター——と小見出しして原文のまゝ掲げています。それを読むと石丸という人は広告を求愛の手段として利用したというより、無毛の女の人に対して強い執着を持っていて、たということがわかります。筆者の(新潟支局 浜田孝氏)いうような「無毛症という女性の弱点とも思われるところを衝き、必ず便利がくるだろう」ということを計算して、——ともあれ、彼の行った求愛の実際の被害者はまだ現れないが人の弱点をうまく利用した極めて危険なあくどい方法であることと間違いない」というような酷な見方は、気の毒のような気がする。然し、こういった「街の話」が他誌に掲載されたのは面白



映画に現われた

切腹シーン

井上一雄

我々サジストの三つの楽しみは、人によっていろいろいわれるかも知れないが、まず「緊縛」「浣腸」「切腹」であろう。

この内、映画で見る事の出来るのは「緊縛」と「切腹」である。そこで、「緊縛」に続いて映画に現われた切腹シーンについて書いてみる事にしよう。

元来切腹シーンは、緊縛シーンと違って現代劇はもちろん、時代劇においても非常に少なく、又その性質上、男がほとんどである。松竹の「ひよどり草紙」では、二人の身分ある老武士が、將軍より下ったひよどりを逃したかどで切腹を申し渡され、まん幕をはった中に白の装束ですわり、前をはだけて刀を取り上げる。と、そこへ逃

げたひよどりが捕まったという知らせが入り、切腹は中止となる。どうもものたらないと思われるかも知れないが、切腹の幻想は充分に満たされた。

東映の「新撰組」では羅門光三郎の新撰組隊士が脱走して捕えられ、隊則によって切腹をいゝ渡される。この世に生きのびても仕方が無いと思ったのか、男らしく案内された一室に入り、とぎすまされた刀身に紙を巻き、腹をひろげる。畳が二枚ばかり裏側になっており、昔の切腹はこの様にしたのかと参考になった。これもそこで場面が変つて、実際に切腹するシーンは写さない。大映「修羅城秘聞」。お家を奪おうと企む悪剣士が大河内伝次

郎。味方の陰謀ごとく破れ、自分は長谷川一夫扮する桃太郎という美剣士と城の天主内で果し合う。が、利あらずと知つてわざと階段からころげ落ち、床に小刀を立て、それに腹をつき刺し、見事な最期をとげる。変った切腹の方法としてこゝに御紹介しておこう。

同じく大映の「鉄火奉行」。切腹するのは、香川良介扮する与力。トップシーンで同僚二人を斬り殺し、自分はその場で切腹して命を断つ。同僚のうめき声を聞きつけて役人達が部屋の前につけて来る。その役人達にも気がつかないのか、放心した様にとり、静かに腹をひろげてなでさする。部屋の外の役人達は、恐怖の面持でじっとそれを見守っているだけ。

与力はやがて小刀を手にとり、左脇腹にぐさりとつき立てる。「うむっ」という様なうめき声と共に、ぱったりと倒れるまではわずかに数秒の間だが、実にうまく撮ってあった。放心した様な与力の顔。額に流れる汗。光る刀身。映画倫理規定の限界を、ぎりぎりまで行った優秀切腹シーンとして、切腹ファンなら必見の値打ちある

ものと思う。

多勢の切腹シーンとしては、大映の「花の白虎隊」がある。切腹するのは、もちろん白虎隊員十数人である。会津城下を敵の手から守るため、必死の戦いを敵軍にいいどんで飯盛山まで引上げて来るが、山の上から城下が火の海と化しているのを見て、又敵軍によって周りをすっかり包囲された事を知り、今はこれまでと全員が自決するシーン。直接腹を切るところは写らないが、思い思いの方向に向いてすわった白虎隊員が、腹をかゝえる様にして次々と倒れてゆくのは仲々のみものだ。

今までののは、皆男達の切腹シーンだが、最後に珍らしい女の自害シーンを書こう。

切腹するのは喜多川千鶴。映画は東映の「副將軍初上り」彼女のは、主君を殺してお家をのっとろうとする悪家老の愛妾。陰謀はある程度までとん／＼拍子に進行するが、水戸黄門が乗りこんで陰謀をあばく。悪家老の頼みとする悪侍達も、黄門を先頭とする助さん角さんその他の役人に斬りふせられてゆく。

逃れられぬと観念したのか、そこは女らしく香をたき、薄ものを



まどった彼女が愛人の名を呼びながら細身の短刀をのどに持ってゆく。涙にぬれたひとみ。すでに観念の決まった表情。実に美しい。芸術的表情とでもいふたい程すばらしい表情だった。場面は変って黄門様と悪老人との斬り合い。

やがてそれらの悪人をことごとく斬りふせて黄門様一行が愛妾の部屋にふみこんだ時には、彼女はすでに畳の上にうつぶしている。顔だけをかすかに動かして、最後に一言、愛人の名を呼び、がっくりとなる。

お芝居の責め場

本田由郎

私の書く緊縛場面は映画の場面ではなく、浅草の或る大衆劇場で上演された芝居である。この劇場は、開場当時は八木節、安来節等の民謡や落語等を上演していたが突然、伊藤晴雨氏の出馬する所となり、新春に浮かれる浅草に流星の如く責め芝居が出現した。この時の一座は音羽照子一座である。上演された芝居の題は記憶していないが、ストーリーは次のようなものであった。

幕が開くと背景に遠く山が見える。時は江戸時代である。その背景の前に一人の娘がたたずんでいる。すると一人の江戸前の男が現れて娘との会話になり、男が良い店へ奉公させよう云う。娘は男と共に店へ行くことになる。こゝで場面が変り女郎屋の場となる。前場と別の女が女将に客をとれと責められている。女は何処までも嫌だと云う。そんならあれを見るがい……と、舞台の右手から美

しく粧った着物の上から、荒縄で高小手に縛り上げられ、着物や長襦袢の帯まで解かれていたのか？ 白い膝が着物からチラホラとし、頭髮は乱れて顔に垂れている。女が縄尻をとられて中央迄来るとそこへ膝をついてしまおうが、後手をグツと締め上げられ、よろめきながら左手へと消えて行く。そこで女将が女にどうだと云う。女は、はっきりに嫌やだと断る。どうするかおぼえているがい……と女将はにが顔をする。これで第二景は終る。第三景は初めから終りまで庭での責め折檻である。雪の降る中を長襦袢一枚で前手に縛られ舞台の中央で、第二景の荒縄で縛られ女が居り、左手の木立にはもう一人の女が湯文字一枚で縛られている。そこへ女郎屋の主人が笑いながら出て来て、「さあねえや、それ、心が入れるようにぶっぱたいてやれ」と命令する。

手下達はこの時とばかり青竹で力一杯なぐりつける。二人の女はこの世の者とは思えぬ声をあげ、苦しみ悶える。雪は前に増して二人の上に降りかゝる。第四景に入り初めの場面の女が登場する。娘はこゝを女郎屋と知らずに江戸前の男に売られてしまっていたのだ。娘はやはり男をとるのは嫌やだと云い出す。それならと又私刑がはじまる。娘は女将から逃げ廻るのだが手下の男に捕まってしまう、両手にくゝられ体は水車に縛りつけられてしまふ。水車を横倒しにされ、娘の体は完全に横一文字となってしまう。手下は青竹でそのまゝの恰好の娘を責めたゝくが、女将はそんな手ぬるくっては駄目だと云い、「お前はちよつと美しい阿娘を見ると、すぐ助平根性を出す、こっちへおかし」と、女将が新たに責め折檻をする。さすがに娘はたえかねて失神してしまふ。手下が見るに見かね、「姐さん、解いてやりましょう」「何を云ってやがるんだい、こうやって骨身に込えさせなけりや駄目なのさ」「だって可哀想だ……」数刻して夜の幕りが下る頃、娘は未だ水車に縛られたまゝ失神している。音羽照子の演ずる女目明しがこの娘を助け、自分自身が水車に縛られ、女郎屋の悪事をあばいて大団円となる。この劇場も姿を消し、パチンコ屋に転業したのは残念です。

ア ブ ・ コ ン ト



縄の対話

—サディストの夫とその妻—

杉村 健

「ねえ、今日本箱を掃除したらこんな画、出てきたわよ」
「うん」
「こんな、女の人が縛られたりして、これなんなの」
「あ、お前には関係ないよ」
「関係ないって、でもおかしいわ本向側に大切そうに隠してあったんだもの、なんなの、これ」
「そんなもの、どうでもええやないか」
「なぜ隠すの、ね、言ってよ」
「男だけのことで女には関係ないよ、なぜそんなに聞くんだい」
「でもおかしいやないの、こんなに縛られたりして、しかも裸で」

「いやに気になるんだね、お前にも興味があるのと違うか」
「そんなことないわ、でも一寸気になるわ」
「気になるというのは興味があるからだよ、心の何処かをくすぐるような、そっと見ずにおれないような何かがあるんだよ」
「そんなことないわ、好奇心よ、それよりあんたどうなの、大切そうにしまっておいたりして、そんなもの破って捨ててしまいいないよ」
「駄目だよ、そんなことしては」
「なぜそんなに大切に」
「大切に」

「てるのは惜しいよ」
「なぜなの、こんないやらしいもの」
「いやに気になるんだね、お前も好奇心以上の興味があるんだらう、お前が興味を持つと同じ程度にわしにも興味があるんだよ」
「駄目よ、巧いこと言って、ごまかさないうで、はっきり言ってよ」
「なぜ、そんなにひっこく聞くんだい」
「でも変やないの」
「変なことないよ、女の人が縛られたりするのは映画や小説にいくらでも出てくるし、別に珍らしいことじゃないよ、変やと言うのは

やはり興味を持ってるからだよ、誰かの本に男にはサディズム、女にはマゾヒズムの傾向がある。つまり男は女を責め、女は男に責められることに一種の快感を覚えると書いてあったが、それなんだよ」
「そんなことないわ、責められて気持ちがいいなんて、しかも、こんなに裸にされて縛られて、何がよいもんですか、そりや、男の人はそんなこと好きかもしれんけど—あんたは変態よ」
「そりやそう言えば変態かもしれないが、誰でも程度の差こそあれ、多少はこんな気持があるんだよ、その証拠に昔から歌舞伎ではよく女が責められるところがあるが、そんな責め場は濡れ場、殺し場、ゆすり場と並んで芝居の主な見せ場になってる。明烏でも皿屋敷でも浦里やお菊が荒縄で縛られて実に残酷に責められる、作者が常にそういう場を出すのはやはり何かお客の側にそれを求める気持があるからだよ、映画でも同じこと、特に時代劇に多いが、よく美しい女優が後手に縛られる、やはりお客の好みをねらったこと、映画の方は歌舞伎の古い美しさに比べてずっと写実的で迫力があるからお客の興味は一層深いわけ

だ、昔の歌舞伎から今の映画迄ずっとそんなやり方が続いているのは、それが男女ともお客に受けるからで、お客の心の底にサヂ、マゾの気持がひそんでいるからだよ」

「で、あんたもそうなの？」

「まあ、そうだね」

「そうだなって、でも、わたしはそんなことないわよ、男の人はそうでも女の方はそんなことないと思うわ」

「いや女も同じだよ、昔から女は男以上に芝居好きといわれていて、その芝居にはたびたび責め場が出てくるから女も男と同じということになるよ」

「あんた、いつからそんな興味持ち出したの」

「さあ、子供の時分にもあったね、一番古い記憶は小学校五六年頃の映画、当時は活動写真といっていたが、お家騒動のような旧劇で美しい女中が奥庭で悪人側の女達に責められるところがあった、幾重にも荒縄で縛られて打たれたりつき倒されたり、写真の両側にいる弁士達がそれぞれの役になって台詞の応酬をやる、随分長い責め場だったが子供心に強い印象を受けたね、高等科一年のとき見た『彌

次喜多金比羅詣りの巻』にもたしか船室に若い女が縛られて監禁されていたのを覚えていて、子供の頃から随分活動写真を見ているのでいつの間にかそんな場面に興味を持つようになったね」

「そんな気持から、こんな画を蒐めるようになったのね」

「そうだね、自然、小説でもそんなところは面白いし、そんな挿画でもあればとっておくようになるさ」

「それなら、この他にもっとあるんでしよう」

「全部残しておけば沢山にもなるが、よいのが入れば、前のは捨てしまおうから、そうたまらんよ」

「それなら、この裸やお腰だけで縛られているのが一番よいというわけね」

「まあ、そうらしい」

「いやらしい、これ、いつ頃なの」

「昭和四五年頃のだろうね、この腰巻一つで床柱に縛られているのは下村悦夫の南紀州を背景にした小説で、お丹という女賊が捕えられて生身の的になるところ。この白人の女三人が真裸で木に縛られているのはサンデー毎日特別号のスペインの物語で、山賊共がこう

して縛った女の全身に蜜を塗って虫責めにするようになっていた。この全裸で柱に縛られているのは子母沢寛の小説『天狗の安』のお八重で、後姿で手首にくいこんだ縄がよく痛々しさを現わして最も好きだね」

「まあ、こんなのが好きだなんて併し変ね、その時分まだわたし来てないやないの、独身の時こんなもの蒐めてたの？」

「独身だから蒐めたともいえるさ結婚すれば、その必要はないよ」

「なぜ？」

「なぜって、判るだろう」

「……独身のときは必要なの」

「……そんなこと、どうでもよいじゃないか」

「言ってよ、それ、知りたいわ、結婚前のあなたのこと」

「それは男と女の生理の相違ということになるだろうが、男の場合みなぎり溢れる青春のエネルギーの問題ということになる、精神力で抑えるとかスポーツ等でまぎらわすとか色々体裁よくいわれているが、果してそうきれいにゆくものだろうか、そうゆく人はあっても大部分の人は適当に処置しているのではないだろうか、遊廓等の存在理由もその辺にあるわけだ

が、併しその人の理性や経済がそうさせない場合はどうなるか、結局各自適当にまぎらわすということになる、そのまぎらわす補助の役目を、それらの画が果していたといえる」

「——そのう、まぎらわさねばならないの」

「まあね、男は女と違うからね——わしばかりしゃべらしてお前の方はどうなんだい」

「何がなの」

「その、女のマゾヒズム的傾向だよ」

「……」

「……この画は捨てるんかい？」

「しまっておくわ」

(おわり)

【御断り】

本号の口絵に掲載予定でありました「残虐なる女性達画集」は提供者森本愛造氏の御都合により間に合わない旨、御通信を頂きまして。欲義先生相談欄の回答が遅れて投着しました為、残念ながら本号には掲載出来ませんでした。中康弘通氏は御病気のため入院せられましたので、「切腹研究」の続篇が中絶しております。

夜 光 島

連載 第五回

吾 妻 新

栗 原 伸・画

ブレーキがない

夫を亡くした女と、妻を亡くした男と、——という佐藤春夫のサンマの詩をもじったように聞えるが、そんな組合せは世の中にザラにある。たとえ不完全でも曲りなりに民主主義のおかげでバカげた処女性の独占価値は切り崩されたから、再婚の悲劇はずっと少なくなったし、事実幸福な再婚夫婦はたくさんいる。だが速見健次郎と唐沢登枝との結びつきはもつと特殊な幸福だった。せまい国土に八千万の人間がひしめいているお国柄のニッポンだけれども、おそらくカネと太鼓でさがしまわっても滅多に巡り会えそうもない二人なのだ。それが、どちらも偶然にある雑誌をよみ、偶然にどちらも文章をかき、偶然にどちらも孤独になった。この特殊なケースを考えると、健次郎はかれの大嫌いな（神の摂理）さえ感ぜずにはいられ

なくなる。都会を見棄てて島にとじこもったことも、いまとなってみれば冒険どころか、たいへん賢明な企てだといっていゝ。

「こうなることと最初から分っていたんだ」と、彼は勝手なひとりよがりと言った。「でも、われわれは運命に感謝することを忘れないようにしよう。こんど別れたら、僕も君も、おそらく生涯、孤独だぜ」「もう離れっこないわ。別れるチャンスを逸しちやったんですもの」と登枝もほゝえんだ。「だから、安心していゝのよ。あなたに何されたって、追い出さないかぎり出てゆきっこないから」「そんな厭な、封建的な言いかたはやめようよ」

健次郎は顔をしかめた。

だが、その言葉は記憶に残った。そればかりか、彼を満足させた。これがいけないのである。

彼はじぶんが専制的な男だとは夢にも思わなかった。亡くなった

妻との関係を考えてみてもハッキリ言える。だから、かりにも互いに愛情をかんずるようになった女に、ちがった態度をとられると信じもしなかったし、そんなつもりもなかった。ただ、亡くなった妻はノーマルだったが、あたらしい妻は（教育）を必要としない、骨の髄からのマゾヒストである。遊びはおのずから別の形をとるだろう。まして、こゝは孤島だ。

そのとおりだった。だが選びぬかれた鍵穴と鍵は、抵抗のないため、あまりに自由であるために、しらずしらずの内に危険な道を歩んでいた。

まず第一に、ふたりきりだという意識が今だにない強烈な痺れるような感覚をともなつて生きてきた。ここでは真つ昼間の青空の下と夜の寝室とはなんの区別もない。人に見られるおそれも、声を聞かれる不安もない。いままでは登枝がいつ愛想をつかして島を去るだろうという不安があったが、今はそれもない。結婚で拘束するというよりも―彼の理性はいつでも離婚の自由をみとめていた―「別れるチャンスを選した」と告白したように離れられなくなったのを認めているのだ。

自然は自然だ。もし彼が天性の未開人だったら、樹木と土と青空とを、そのままに受け容れるだろう。しかし彼にとってこの小さな自然は自由と放縦にむすびついている。背後に棄て去った文明社会の道徳や拘束がいつもアンチテーゼとして浮び上ってくるのだ。だから、島を意識した瞬間に、ブレーキは飛び散ってしまう。あそこにあるものがここにはないのだという平凡な現実。彼はそれにしがみつき、飢えた人間のようにその恩恵を忘れることができない。夢中になって遊戯に溺れるとき、思わず飛び出す言葉は「ここは島だ

ぜ、だれもないんだぜ」というキザなセリフだった。そのいやらしい常套文句は、後になっていつも彼をむかつかせた。――ああ、俺は環境の奴隷だ！

三十を過ぎてまだ白い肌に艶をもっている妻が絶えず眼の前にいることも、さけがたい誘惑だった。E・Dの筆名で書かれてあるサディズム小説では、めざめるような臀部をもった美少女がヒロインである。レストランで彼女に会った男が、「どうしてそんな美しいお尻になったのか、秘訣を教えてください」とたのむ。女は手記の形で書き送ることを約束する。やがて送って来た手記が全篇の物語をなすのだが、それをよんで、彼女の秘密は判明する。間断ない鞭の教育、それが豊かな大理石を生んだのだ。してみると、登枝のきれいな肌はどれだけ鞭の刺戟をうけたのだろうか。……しかも彼女はモルモットのように、いつでも処刑台にのぼろうと待ちかまえているのだ。――「あなたの眼が五秒あたしを見つみていれば、どんな欲望が湧きはじめたか分るわ。さあ、早くおやりなさいよ。なにをぐずぐずしているの？」

どうして過度にならずにいられようか！正式に結婚するまでは、それでもまだ理性があった。登枝の挑発に負けて、はじめて遊びに没頭したときには、肌を刺すような晩秋の海にとびこんでその焔をじずめた。ポニイの苦役をあたえて鞭をふるったときは、じぶんの欲望でなく、彼女の欲望を挫くためだった。だが、いまはそうではない。抑制の棒がゆるみだすと、どこまでも弛んでゆく。そして飛び散るのだ。

健次郎はかつての妻には決して試みないようなことを次々とやりはじめた。それは、「君の満足のためにやるのだ」とか、「こうす

れば君は懲りるだろう」などという口実を伴っていた。

彼はもともと不自然な縛りかたが嫌いで、やったことがない。首縄をかけず、ただうしろ手にするか、さもなければ俯伏せにする位のものだった。もとより妻がノーマルだったからでもあるが、苦痛の表情を見るのがいやだからだ。ところが、登枝の場合にはあらゆる体位を試みた。まるで、経験しておかなければ損だと言わんばかりに。ただ彼が残酷でなかった証拠としては、柔い布紐しか用いなかったという一点があるだけである。毎日朝から登枝をころがったり伸びたり、奇妙なアクロバットを演じなければならなかった。

あれほど否定した殺風景な七ツ道具さえ、あるから使うという単純な理由で、いくたびも利用された。成り上り者の金持が金を濫費せずにいられないように、健次郎も手に入った自由を濫費せずにはいられなかった。つめたい林の大气のなかで、金属性の手錠や足枷はキラキラ輝き、暗い寝室のなかで鎖や鞭の音が響いた。これがはたして(遊戯)だろうか。登枝が黙認するかぎりには遊戯にそういない。しかし、そこには静かな情感というものが欠けていた。思わず

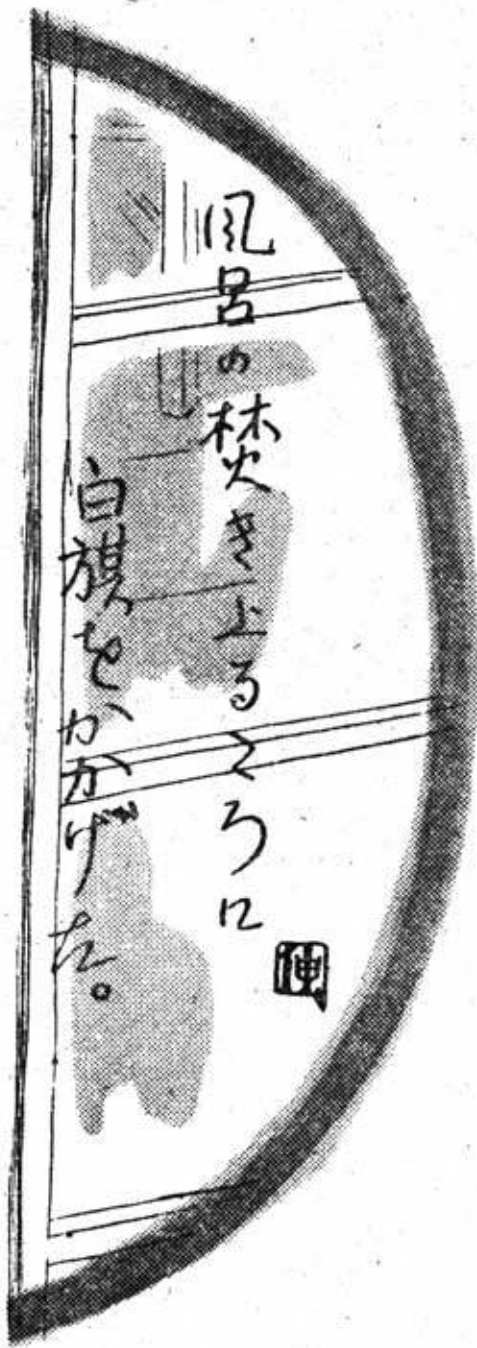
洩らす悲鳴や、肉を打つ響きは、アルコールの酔い心地のように彼を興奮させ、疲れさせた。

汚辱についても彼は熱心だった。それは健次郎のもっとも恥べき性癖だったから、ふたりきりの世界ではいちばん執着するのである。この無害な方法は亡き妻を相当に悩ませたものだったが、ここではそんな生易しい程度で満足できよう筈がなかった。人一倍体臭のつよい彼は、やる気になりさえすればどんな武器でも用意することができると。それは「日々新たに」準備され、破廉恥の極限まで押しすゝめられ、おそろべき忌まわしいものとなった。たとえ鎖をアクセサリのように纏うマゾヒストでも、この感覚ばかりはマンネリズムに堕さないであろう。はたして登枝は猿くつわの下で、失神せんばかりに呻いた。だが純粹の苦痛とちがって気絶することは有りえないのだから、彼女は毎日のように更新され倍加されるその感覚に馴れることなく、永遠に味わいつづけなければならぬ。

古いポプリンのパジャマはもう傷んでいたし、冬にむかって用をなさなくなるから、御用仕舞のときがきている。まえの妻の思い出もこのへんでトドメを刺すべき時だった。だから最大限に使い果しても惜しくないと健次郎は思った。

ある朝、登枝は手足を縛られ、猿轡をはめられて、台所の板の間にころがった。傍には石油ストーブが音を立てて燃えていた。

「君のきらいなそのパジャマも永くはもたないと思うんだがね、そのまゝだと、まだひと月やふた月の寿命がある。しかし、できたら早く滅茶滅茶にして脱ぎたいと思わないか？」



登枝はうなずいた。

「うん、じゃあ構わないから、そこでそのまま、やってしまいたまえ。なあに、床の汚れるくらい、かまやしないよ。たゞ君のからだ



が臭くなるのは困るから、ゆうべの風呂を焚き直してあげる」

そう言つて、健次郎は土間におり、風呂の焚口にしやがんだ。みると、登枝は不自由なからだをずらして彼のほうを向き、必死に手足をものがきながら呻き声を立てゝいる。

「いやだと言うのかい？」と、薪をほりこみながら、落ちついて言つた。「しかし、そうしないと君はいつまでもそのパジャマから解放されないよ。傷めばいくらでもツギを当てさせるよ。いやだろう。早くさっぱりした寝巻に着換えたいんだろう。じゃあ、がまんして、僕のいうとおりにするんだ。二三度洗礼を受けたら、そんなぼろはすぐ参っちゃうんだから……」

登枝の眉がしかんで泣きそうになった。激しく首をふつて身体をくねらせた。

「いくら暴れたってダメだよ。僕は君のそんなところを拝見しようなんて悪趣味はもっちゃいない。たゞ布を弱らせるためなんだ。だからズボンを穿いたままでおやりなさいというのさ。それが済むまでは絶対に紐を解かないよ」

それは最後の通牒みたいなものだった。とすれば、男の思いつきに逆らう手段はない。登枝はきんぎんにもがいたり呪いの呻き声を洩らしたりした揚句、風呂の焚き上るころに白旗をかくげた。耐えていたために多量の水は、ぴったりの布の抵抗とたゞかいながら、ゴムで締めた裾口といまひとつの通路

に殺倒した。それはまったく奇妙な風景だった。膝から下はゴム風船のように膨らみをもち、足を動かすと撒水車のようにふりまわった。空間のすくない腰のあたりは地下水のように継目という継目をくぐって溢れだした。と同時に、登枝の眼からも涙がながれた。

もちろん健次郎は約束を実行した。登枝の全身は風呂で清めることができた。が、パジャマは洗濯することをゆるさず、ストーヴで乾かすだけだった。一度や二度の洗礼で裂けないことは分りきっている。結局、乾けばまたそれを着なければならぬのだ。

「こんなバカなことは、せめて一回きりにしてちょうだい。後生だから！」

「まあ、やりかけたことはやろうよ」

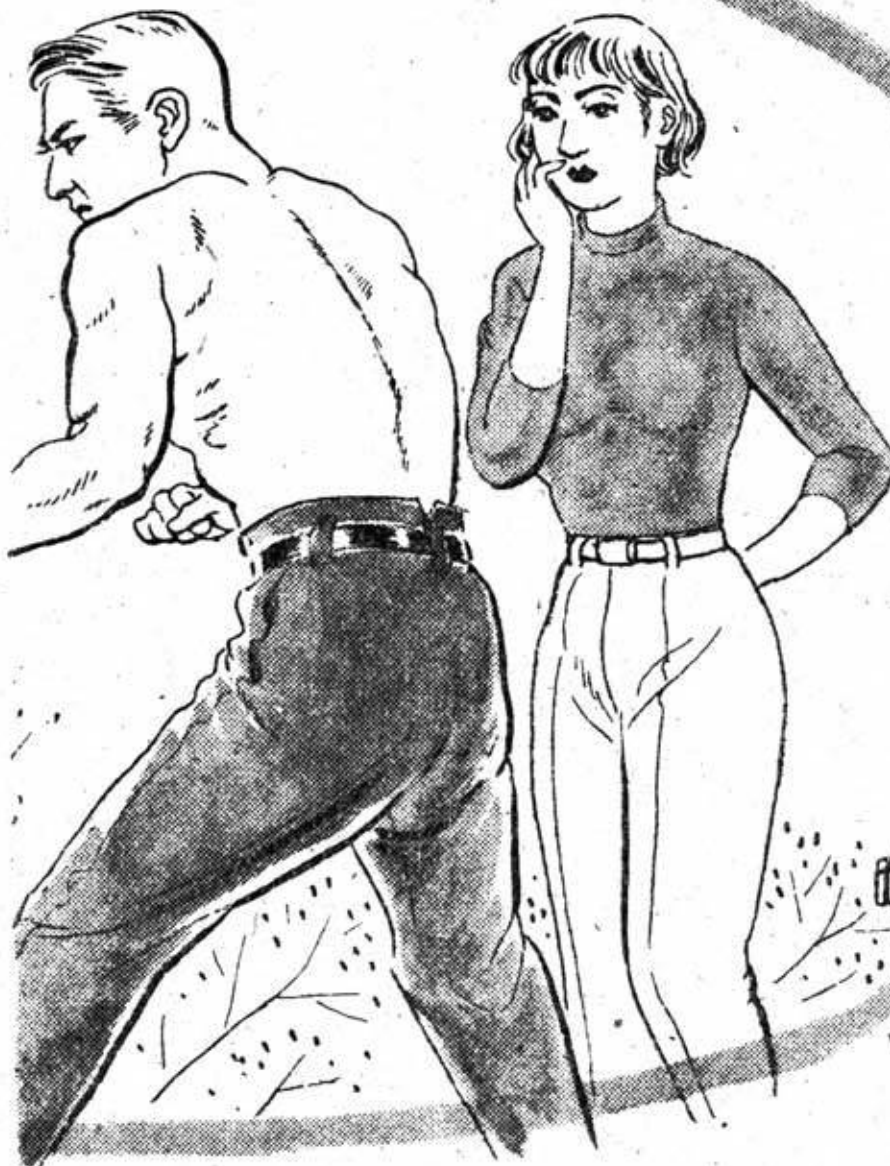
汚臭は汚臭として健次郎もかんずるのだが、そのなかに包まれている肉体を思うと一向に気にならないのである。それどころか、いつそういとしくなつて、平気でその上から抱きしめるのだ。

「あゝ、たまらない！ あなたのこの悪癖は、私たちその他の全部を合せたより、もっとアブノーマルだわ」

「そうかもしれない。僕はそういう人間なんだよ」

そう言つて、彼は堪らぬと言わんばかりに、みじめな服装の拷問に身もだえしている犠牲者をひきよせ、熱い口づけをあたえた。まさに狂気の沙汰だった。

こうしたすべてのことが、それだけにとどまっていれば、或はまだつづいたかもしれない。しかし健次郎の場合に、遊



戯が遊戯だけで終ることはめつたになかった。ほとんどが前戯に発展した。四十を越したこの男は、抑えようもない衝動にかられて、若い男でも息切れする連続障害物競走に出場したのだった。これこそ神をおそれざる嬌慢な行為である。

結婚して二週間ほどしたある朝、彼はいつものように空手の柱の前に立った。一日に二回、左右の拳を百回ずつ当てることにしてい

るのだが、その日にかぎって五十回を越すところから疲れをかんじはじめた。七十回位になると、腕の力がぬけてきた。空手の柱というのは四寸角で七尺の角材を、一端を八分の厚さにして四尺まで斜めに削り、残りの三尺を地下に埋めたものだが、五分板の二三枚も割れるようになれば拳を当てるとかなり震動する。ところがその日にかぎって柱の弾性が僅かしか感じられない。

「どうしたというんだ！」

腹が立つて、じぶんを叱りつけると、中腰に構え直し、全身の力をこめて正拳を突きだした。とたんに手元が狂って、柱の角に打ちつけた。

「あら、血が垂れてるわ」

と、傍で見ていた登枝がさげんだ。

健次郎はぼんやりと、両手の拳を顔に近づけた。打撃力の弱さよりも、目標の狂ったことのほうが、もっとショックが大きかった。そんなことは初歩にもあるまじきことだ。精力が衰えたのだ——しかも急激に。

彼はあたりをみまわした。眼と眼があった。そのとき彼は愕然として、じぶんがいま断崖のふちを歩いているような気がした。

林と海辺の意見

林の中からは月がみえないのであたりは仄暗かったが、切り揃えた梢の先端は銀色に濡れている。ときどき枯葉の鳴る音がした。あんな静かな風が静寂を破るのだ。晩秋だ。登枝は合オーバーの襟をそっと立てた。

彼はいつもの

ように空手の

極の前に

立
った。

「君は、ヴェルレエヌの詩が好きだったね」

「ええ」

「何かうたってみないか」

「うたうなんて……。恥かしくて、とてもできやしないわ」

「どうして？」

「ただ、ときどき一人で、声に出してみるだけ」

「それをうたうと言うんだよ」

健次郎は笑った。

たしかに詩でも語るにふさわしい気分だった。ひっそりした宵闇



に立ちのぼってくる草の香り。墨色の木立の間に気のせいかセピア色に変色してみえる紅葉の葉。ふしぎなほど青みがかった空。かすかに潮気を含んだ、重い空気。小声で語りあう声までが澄んで、快くひびくのだ。

登枝は少女のように、はにかんで微笑した。それからつとめて抑揚をつけずに、低く口ずさんだ。

ましろの月は

森にかがやく

枝々のさゝやく声は

繁りのかげに

あゝ愛するものよという

固くなっているのか息切れがするので、健次郎があとをつづけた

底なき鏡の

池水に

影いと暗き水柳

その柳には風が泣く

いざや夢見ん、二人して

「僕はこの第二句が好きなんだよ。少年時代、といっても君などは知らないだろうが、新潮社から出た生田春月の『相寄る魂』という自叙小説に夢中になってね」と、健次郎はしゃべった。

「いまどきの全集や、文庫本じゃダメなんだ。紙装のフランスと同じで、表紙に黒一色の寂しい風景画がついている。まさに春月の生涯

がパツと焼きつけられそうな画なんだよ。そのとびらにある詩がこの『ましろの月』の一節なんだ」

「それ、永井荷風の訳でしょう。たしか『珊瑚集』かなにかの……」
「そうそう。古い訳だが、ことポオドレルとヴェルレヌにかんしちや右に出るものないね」

「ヴェルレヌじゃなくって、ヴェルレンとしてあったわね」

「それがまた懐しいんだよ。しかし」と、彼は言葉を切った。「君はよく詩をよんでいる……」

沈黙がながれた。健次郎が肩を抱くと、相手は素直にもたれかゝってきた。

「寒くない？」

「ええ」

ためらいながら、彼女はさゝやくように言った。

「あなたは今日、ばかに親切なのね」

「そうかな」

「そうよ。……だって、一度も折檻しないんですもの」

苦い沈澱のようなものが健次郎の胸をおしつぶした。それはするどい針となってかれの心臓に突き刺さった。

朝からまだ一度も折檻されない——なんという会話だろう！この北国の夜光島をはなれて、どこでそんな言葉がきけるだろう？

たしかにそうだ。いろんな計画や、きれいな言葉や、否、彼の本心すら裏切って、登枝との共同生活がはじまってから一度も苛まなかった日は、今日だけしかない。たとえ合意だろうが遊戯と名づけようが、とにかく彼は毎日欠かさず、日課のように勝手な名目をつけては縛り、鞭ち、もてあそんだ。観念しきったモルモットにとつ



ましろの月は
木林にかがやく
枝々のささやかしめは
徹夜のひげに
ああ愛するものよと
ささやく

て、「親切だ」という言葉が皮肉でなく、もしかして忘れていた日課を思い出させるためだったとしても、この事実——消すことの出来ない事実はあまりに痛切だった。

「登枝、親切じやいけないかい？」

抱きしめた腕に力を入れながら、健次郎はかすれた声を絞りだし

なくちやならないのは、それ以外のもっと大きな人間的な生活なんだよ」

人間的な生活——だれに言っているのか？ 彼は冷汗のにじむのを感じた。

「島でなければできないことはさんさんやってきた。もうたくさん

た。

「こうして林へ散歩に来たり、一緒に詩をうたったりする生活はどうかね？」

「もちろん、楽しいわ」

「だったら、お互いに考えようよ。僕たちはあまりに、——遊びすぎた」

顔をみるために彼は手をゆるめた。白い顔は闇に浮いていたが、表情はわからなかった。「で、どうしようっていうの？」

「軸の向きを変えるんだよ。もつとしずかで、おちついた、生産的な方向にね。……まさか君だって、セックスが生活の全部だとは、思っちゃいないだろう？ それは大切だが、生活の一部なんだね。僕たちがいま考え

だ。人間っていう奴は、どこに住んでも結局おなじような生活に戻ってゆくものだと思う。歡樂極まれば哀傷生ずって言葉、知ってるね。つまりは、アレさ。いいかげんに踏みとどまらないうと、僕たちは亡んでしまうかもしれない」

「あたしが要らなくなったっていうわけね」と低い声で登枝はつぶやいた。その冷たい調子が、彼をぞっとさせた。

「冗談じゃあない。反対だよ。君と一緒に暮したいからこそ、こんな話をするんじゃないか」

「それで、あなたは東京時代のように、一日じゆう書齋にこもって本をよんだり原稿をかいいたりする。私は炊事と編物でその日その日を過ごしてゆくからね」

「登枝、これはまじめな話なんだよ。そんな言いかたをされちゃあ困る」

「だって、そうよ。結局はそうなるのよ。あなたはいまにじぶんの仕事と私とを比較するようになるわ。そうなればもうお終いよ。なぜなら、……あたしはこんなお婆さんだし、あなたが島へ呼んだのは……」

「君はお婆さんじゃない。若くてきれいだ。それに、僕は人間的に君を好きなんだ」

「信じてない、だれが信じるもんですか」と、登枝はすすり泣いた。

「あたしがノーマルな人間なら、けっしてあなたは呼びはしなかった」

「それは言う必要がないことだ。僕だってノーマルじゃないんだから」

「そんならいいじゃないの。なぜ生活を改めようなんていうの？」

私はどんな眼に合わされたって、あなたを恨んじやいないのよ。それとも、こんな私が怖くなったの？」

「いゝや違う！」

健次郎は言葉につまった。もうヴェルレヌの詩どころではなかった。なんとしてもこの誤解を解かねばならない。

「すこし歩こう、そして話そう」

彼は腕をつかんで、子供のように引き上げてやった。そして肩をならべると、家とは反対に海岸の方へ向って歩きだした。

「君はどう思ってるかしらないが、僕はどちらかというと、衝動的な人間なんだ」と、彼は切り出した。

「だからこそ、若いときから無用の廻り道をしたり苦勞したりしてきた。しかしまた、それだからこそ、君という人間にもめぐりあえたのかもしれないと考える。一長一短だね。差引勘定したらプラスかもしれない。だがこういう男は不幸の時よりも幸福のときに失敗する。なぜなら過度に走るからだ。君との場合は特にそうだった」

「それは……」

「まあ待ちたまえ。君はじぶんもそうだといいたいのだろう。わかるよ。僕たちは飢えた仲間だからね。めったにないチャンスをおパ―セント利用して、溺れてみたくなるんだ。しかし御馳走を食いすぎれば下痢するのは切り切っている。どうしたらそれを防げるか？ 理性しかない。しかも僕たちの場合は、ゆっくり食べたって御馳走は逃げていきやしないんだからね」

「……………」

「僕は、告白するが、ガツガツしていた。あるいは君もそうだったかもしれない。だが、なんと言ったって責任は僕にある。僕は毎日

のように君を責めた。君の顔をみると、なんでもできるという気持ちに駆り立てられて、つい手が出てしまう。この抑制のできなくなるということが恐ろしいのだ。こんなことを重ねていると、われわれは中毒してしまふ。愛情よりも刺戟そのものに酔って、肝心の人間関係を破壊しかねない。……だが僕は君を愛している。僕はその愛を、君の肉体的な生長のなかに見たいのだ……」

りっぱな言葉だ。たった廿四時間前まで、彼はそれと反対のことをしてきた。健次郎はじぶんを鞭っている心地がした。

「じやあ、どうしたら理性で調節することができるかだ。僕はやっぱり日課を立てたい。ずくなくとも午前中は勉強する。これは君もふくめてだよ。君も雑用なんかおぼりなげて、本をよむんだ。それから、午後は散歩したり、話しあったりする。そして……遊ぶのは土曜なら土曜ときめる」

「まるで勤め人の生活みたいね。ここには会社はなくなつてよ」

「あつてもなくても、そうするべきだ。健康のためにもね」

「あたしにも少し言わせてちょうだい」

足並をそろえようとつとめながら、登枝は言った。彼女はもう泣いていなかった。男の気持を理解したようだった。ただ、じぶんを目標にしたスケジュールであるかぎり、意見をさしはさまずにはいられない。しかし、この異様な複雑な気持を、どう説明したらいいか。じぶんの腕をしっかりと抱えこんだ男の暖かさを意識すると、壁に突き当たったようなもどかしさを感じる。

「どう、あたしの話をきいたくない？」

「ききたいね、卒直に言ってくれたまえ」

「卒直にね」と、彼女は念を押した。

「まず第一に、あたしは、あなたの今の意見も急激な反動だと思うの。そりや確かに、お話を伺って、そのとおりだと思うこともある。東京にいたとき、浅草だったかしら、サジとマゾのへんな見世物小屋があつて、その入口に貼りつけた写真のなかに、雪のなかの木立に裸で縛りつけられて、両手両脚を切りおとされた女のゾッとするような写真があつたわ。なんでも明治の有名な日本画家の奥さんか愛人ですってね」

「僕も見たいよ」と、思わず健次郎が口を入れた。

「ああ、やっぱりね。……あんなのを想像すると、とめどない欲望の恐ろしさが身にしみてわかるわ」

「君でもね」

「あなたでもって言いたかったところよ」

二人は声を出して笑った。健次郎はやつと軽い気持になった心地がした。

「さっきもいったとおり、私は不服で言っているんじゃないのよ。だけど、たしかにあなたは変わったと思つたことがある。以前は知らないけど、書いたものから連想してね。つまり、過度になつたんでしようね」

健次郎は顔をしかめた。が、相手はかまわずに言いつづけた。

「しかし、あなたはどんなに過度になつたって、まさか刃物で切つたりする人じゃないから、あたしは安心してゐるの。いまの程度だったらあたしには耐えられるわ。だから、問題は私じゃなくって、あなたの気持なのよ。……それがあなたの気持を荒ませるとしたら、まさに軸を向き変えるときね。ただし、土曜日だけ遊ぶとかなんとかな、そんな機械的なことは考えないほうがいいわ。ここの生活

でカレンダーにしがみつくのは滑稽よ」

「その滑稽なのが必要なんだ。君だって、亡くなった男とはカレンダーに従ったじゃないか」

「多すぎる例外をぬきにすればね」と、登枝は声を落した。「夫は仕事で忙がしかったし、そうするはかばかかったの。それにあなたほど……じやなかったわ。その上あたしたちはいま、二人っきりよ、こゝは島なのよ」

「お株を奪っちゃ困る。それだから言っているんだ」

「いゝえ、ダメよ。もしも一週一回なんて約束したら、それこそ一度であたしは殺されちゃうわ。あとの六日間は睨み合いでね。火薬を固い殻で包めば爆発すると言ったのは誰なの？ そんな愚策はやめましょうよ。あたしは反対します」

「じゃ、どうすればいゝんだ？」

登枝は返事しなかった。いつしか二人は林を抜けて、海岸を見おろす灌木の丘に立っていた。

荒海や佐渡に横たう天の川——芭蕉のうたった銀河系宇宙は北の天辺にかゝっていた。その両端を踏んまえて、ペルセウスと白鳥座が燦爛と輝いていた。海は眠り、鉛色の雲が浪かと紛うほど低く、水平線にこびりついていていた。

「あ、あんなに光る！」

夜光虫の流れだ。青白い鱗光は不気味なほど明るく、岸から百メートルほどの沖を一条の帯となって燃えている。

二人はだまって肩を抱き合いながら、遮ぎるもののない夜気のなかに立ちつくしていた。暗い無機物の世界にただひとつ生きて流れている原始の動物。ただ生き、光り、繁殖する性の存在。たとえよ

うのない孤独が健次郎の胸をおそった。

「どうするか」

彼はつぶやいた。

「引きのばすのよ、うすく」

と、登枝は考えこみながら、言った。

「とくべつのお仕置はやめにして、ふだんの生活に変えてしまうのよ。それが私たちの暮しだっていうふうにね」

第二の生活

戸外は風が出たらしく、窓ガラス越しに、黄ばんだ葉が散っている。久しぶりの、雨になりそうな早い雲脚が、窓ガラス越しに見える。だがストーヴの燃えている部屋は暖く、幸福そうだった。

「疲れたね、お茶でももうか」

健次郎はペンを投げだして、椅子の上で向きをかえた。

「紅茶よりも日本のお茶のほうがいい。うんと濃くしてね」

登枝はよみかけの本をおいて、大きくうなずいた。

登枝の服装は、もうあの忌まわしいパジャマではなかった。あれは恐るべき汚辱の攻撃に耐えかねて最後の息をひきとり海の中に葬られた。いま着ているのは真新しいネルのパジャマである。三日ほど前に、わざわざ新潟まで出かけて買ってきたのを、例の健次郎好みに身体にあわせて作り直したもので、太い淡紅色と細い紅色のチェックは新鮮でなまめかしい。たゞティーン・エイジャーむきの派手なものを真つ屋間から着ていることゝ、ぴったりにした上衣をズボンのなかに入れたスタイルが肉感的なことゝ、御丁寧にその上から布製のバンドを強く締めているのが眼に立つ位のものだ。変って

いるのはむしろアクセサリだった。

彼女が返事しないのは、できないからである。汚れて変色した布が鼻と口を掩っていた。それは息苦しいほどではないにしても、完全な猿轡であることに相違はなかった。それといまひとつ、ズボンの裾と裾とがみじかい紐でつながれているので、立ち上って茶の仕度をするに小刻みに歩かねばならなかった。

「君はまだ咽喉が乾かないだろう。それに、そろそろ飯の用意をしなくちやね」
湯呑を受け取りながら、ひとりごとのように健次郎は言った。

「その足じやあ、とても間に合わないから、野菜は僕が取ってくる。君は飯を焚いて、籠詰でも切ってくれたまえ」

向い側の椅子に腰かけて、登枝はうなだれて命令を聞いている。その姿を眺めながら、健次郎はゆっくり茶をすすり、タバコに火をつけた。

こうして食事は分業でと



ゝのえられる。すっかり用意がとゝのって食卓に向うと、はじめて夫の手で猿轡がはずされる。手は自由でも、自分でそれに触れることは許されない。

食事が終って茶をのみ終るか終らないうちに、健次郎はまたうしろに廻って首を抱きかゝえ、濡れたまゝのその布か、または別の布

を口に詰めこみ、上から掩いをかける。そのときはあたらしい臭氣に無駄と知りつつ呻くのだが、手をかければ罰として縛られることになっているので、テーブルの縁を掴んだり両手を握り合わせたりして耐えることにしている。もつともこの忍耐は当てにはならないので、気が向けば健次郎はいつでも縛ることができるのである。

猿轡をはずすのは食事のときばかりとは限らない。それどころか一日に何回となく、嵌めたり外したりする。これは健次郎と一緒に歌をうたったり、詩をよんだり、しゃべったりしたいからでもあるが、もつとも現実的な理由としてはその度に嗅覚や視覚を刺激したためであろう。事実それは眺めているだけでも彼を楽しませたが、嵌める過程はさらに深い快楽であった。それはまた登枝にとつても同様だったに相違ない。だが、肩をならべて腰かけながら話に夢中になっているとき、いきなり口に布をねじこんで沈黙させ、彼ひとりがおなじ調子で語りつづけながら丹念に鼻や口を掩ってゆくのは、相手が受け答えできないだけにきわめてユーモラスだった。足首の紐もそうだ。散歩から戻ってきて、再びそれをつないだ瞬間によちよち歩きになる。その変化がフレッシュで楽しいのである。

多くの日々がこのようにして過ぎた。熱情的な遊びはもちろん断念したわけでもないが、せいぜい週に二回か三回位なものだった。それも鞭や、七つ道具や、不自然な緊縛によらず、これまでの彼の生涯に前戯として発展させた方法だけで十分だった。

登枝の提案は正しかった。いや、おどろくほど正しかったと言わなければならない。「鍵穴の本能」は、この神秘的な二人きりの生活で、どうしたら最高の智慧を発揮するか知っていたのだ。彼女は毎日の猿轡と足の紐を、夫の好む服装の一つと化してしまった。つま

り、それだけで楽しめるアクセサリとなった。避雷針のように、健次郎のリビドは絶えずそれを伝って少しずつ流れ去る。そして流れ切らぬ容量が蓄積され、巨大な充電体となったときだけ、嵐のように一挙に放電されるのだ。

禁欲などは考えられなかった。ただ節欲だけが実際の賢明な方法だった。健次郎はどれだけ可憐なよちよち歩きや、感情に富むくぐもり、声を愛したことだろう！ 台所で不自由な脚を動かしているとき、肩をかしてやって、一緒になって動きまわるのをよろこんだりした。猿轡の上から頬をなで、キスし、結び目をいじりながら絡まった髪を一本一本抜いてやりもした。あるときは後ろ手に縛って風呂に入れ、拭いてやり、ズボンも穿かせたりもした。それらの「ままごと」は狂おしい欲情に駆り立てるよりも、しみじみとした愛撫に導いてくれるのだった。

こうして生活が軌道をもつようになると、健次郎は一日のすくなくとも半分を仕事に没頭できるようになった。彼はずっと以前からの研究をまとめて、著書にしようと思いついた。資料の分類と整理がはじまった。その外には小説や軽い評論に手をつけた。ふたりの運命を結びつけるのに役立った雑誌へ、じぶんたちの生活をまとめて書いたりもした。

登枝は登枝で、書棚の前をぶらつきながら、本をひっぱりだしてよみ耽った。どうかするとそれは生物学だったり、女性史に関連する歴史の書物だったりした。

あるとき健次郎がのぞいてみると、英書の挿画の頁がひらいている。ドン・ブランナス・アレラの「白色奴隷」だ。もう一つ膝にのっている紙装本はA・カンタブの「巴里の二人のお転婆娘」だった。

「どう、面白い？」

登枝は首をかしげた。

彼は猿轡をはずしてやった。

「よく分らないわ。でも、どちらもサディズム小説でしょう」

「まあね。だが、こんなもの、僕等から見たら取るに足らないよ。フィクションが現実には及ばないんだから、よむ価値なんかないさ」

「でも、訳して説明してきかせてよ」

「くだらないよ」

と言って、二冊を取り上げると、元の所に突っ込んでしまった。

「それより、これから夜が永いから、朗読をやってみようか。僕は大好きなんだが」

「ええ、ぜひお願いするわ。どんなもの？」

「小説では平凡で面白くない。戯曲をやろう」

「サディズムの？」

「バカ言うんじゃないよ。メーテルリンクだよ」

わかいころ脚本朗読会でやった「ひそみ入る者」が頭に浮んだ。

彼はストーヴの前に椅子を近づけた。登枝ははじめてこの男がどんなに芸術を愛しているかを感じた。熱をこめて、しまいには身振りまで加え、娘の声色を真似るかと思えば、盲目の老人のさびた声を出したりするのが鮮やかだった。眼にみえぬ死が、庭を歩き、部屋を横切り、ドアをあけて入ってくる。それが分るのは盲目の祖父だけである。凍るばかりの恐怖と神秘。登枝は吾れをわすれて、手に汗をにぎった。

「とっても巧いのねえ。すばらしかったわ。まるで舞台を見てるみたい。なにかもう一幕やってよ」

「お世辞言ったってダメだよ。ひとつやれば沢山じゃないか」

「もっと聞きたいのよ、ねえ」

「一人で全部の役を兼ねた上に、ト書きまでよむんだぜ。冗談じゃない、へとへとだよ。……えゝと、では、ご好評を頂きましたるによつて、おあとは明晩、またゆるりと……」

「ずるいわア」

「泣けど、叫べど、幕は上らない」

「じゃあ、木戸銭返しなさい」

「なに言ってるんだ、もぐりの客のくせに。そんなことを言うと、また猿轡だよ」

これが四十を越した夫と、三十を過ぎた妻の会話だった。ひとつの情熱に溶けこむことは人間を若くする。ああ、もしも夜光島が絶海の孤島か彼の所有物だったら、どんなに青春の泉は清かっただろう！

だが、一里足らずのかなたには彼等の忘れていた社会があった。たとえ彼等が無視しても、社会は彼等を見捨てなかった。メーテルリンクの「死」のように、それは彼等の戸口に近づいていた。

(未完)

健次郎と登枝のたつた二人きりの夢の島、夜光島は、果してこのまゝ平和に過ぎていくのでしょうか。次号では悪魔の触手に狙われた島をめぐる、場面は一大転回いたします。夫婦生活のあり方に新らしいモラルの確立を、逞しい野心を以て示される吾妻新先生の傑作「夜光島」の今後の進展に御期待下さい。



前略、本日新年特大号有難く戴きました。特異雑誌の貫禄十分に感心しました。巻頭の林弓志雄氏の「破壊本能の文化的理由」は、根底をフロイドの精神分析学の諸問題から取り上げ、サディズムやマゾヒズムの傾向を罪悪視する点や、現代の人間破壊本能が著しく自己破壊の傾向に内攻した点を提示し、その理由を現代文明の影響によって理解しようと試み、性犯罪とサディズムを区別された点は、大いに敬服した次第で、戦後カストリ雑誌の多い中に、本誌がこの様な啓発的な、学究的な論文を巻頭に飾られる真摯な編集部態度に、非常な喜びを感じるものであります。只今「同性愛者 (Sodomite) の地域性」に就いて小論を纏めております。近日送附申し上げます故御高覧下されば幸甚です。先は乱筆ながら御礼まで、御健闘

を祈ります。(滋賀雄二)

「賜られもの」入選の通知に接して、未だに夢心地から覚めません。あの、我ながら舌ったるい小説の何処かに皆様の御気に召す所があるとしたなれば、それこそ奇クでなければ分って貰えない特異性の為に他ならぬでしょう。一月号にて発表された告白文、体験談の書き方を読むに及んで、はつきりと編集部が求めて居るサムシングの輪郭が分りました。生半可なセミプロ作家や机上の空想談の為にのみ貴重な奇クの誌面を解放されているのではなく、真に市井の塵の中から人間苦に彩られた生々しい人生記録が、止むに止まれず流露する偽らざる無名の労作こそ、双手を挙げて迎え入れようとするその根本方針を確め得て、真にこれある哉と膝をたふしました。奇クの如き雑誌が困難な諸条件を見事に克服して、今や燦然たる孤高を誇っている姿は何と云うよろこびでしょう。元来、関西では雑誌は育たぬものとの定説を尻目に、古今に比類のない出版界の奇蹟を実現せしめた編集部当局の敏腕には敬服の他ありません。然し、奇クは目下発展途上にあると

いえども、同時に悩み多い過渡期にあり、その苦悩と混乱はまさまじ毎号の誌面にうかがわれるように思われましたが、遂に三十年一月号に至って漸くユニークな存在としての確たるバックボーンが固まって来た感じが致します。一月号には従来の何れの号にも見られなかった迫力と、堂々たるヴォリュームが充ち溢れ、しかも卑俗なセンチシヨナリズムの片影も認められず、全くハツタリやテラ氣をはね除けた堅実さに限りない頼もしさを感じずには居られません。例えば、揮や腰巻を真正面からテーマにした大胆な作にさえ句うような香気と詩情と親愛感が溢れ、少しも猥雑な趣がないのは、何ういう言葉で説明したらいいのでしょうか。これは奇クの風格ともしようべき、絶対他の真似の出来ぬ事実ではないでしょうか。編集者の意図が漸く読者(投稿家の主体としての)に滲透し共鳴され、度重なる脱皮の苦しみを経た上でなければこのようなファイインに到達することは不可能だったでしょう。正しく一朝一夕の成果ではありません。そしてこれは正しく健康な奇クのアトモスフェアを醸成しているのです。私は思う、ブ

ロ作家の流麗な筆になる絢爛たるファンタジーや、本格物もなくてはならぬものですが、大多数の読者が心から渴望しているものは、一月号に特集されたような無名人の商売氣を離れた脈々として赤い血の通う真実の手記ではないでしょうか。そしてこのような作品を主流にした編集方針こそが奇クをマンネリズムから護り、永遠に若々しさを保ちつゞけさせる大動脈となるのだと確信します。幸いに、編集部がラストページに発表された幾多の新企画を含む課題の飛躍を暗示しているかの如く、我々読者にとっては大きな期待と意欲をそゝられずには居られません。読者諸君、願わくば編集部諸氏をして悲鳴をあげさせる程の投稿の山を共に築こうではありませんか。(和歌山、小竹紀夫)

前略御免下さい。私は三十一才の会社員で、自他共に仕事は真面目と許して居りますが、ただ一つ秘密の楽しみがあります。それは女性が裸体で禪をして角力をして居る姿です。奇クも土俵四股平氏等の文が載って居りました時、買って居りましたが最近あまり載

って居なかったので買っていました。ふと阪急梅田駅売店にて見たところ、女園美の記事がありましたので、新年号を買ったのですが、其の中のサディズム通信の京都のM生様の文が出て居ましたが、私と全く同好の士が居られることを深く喜びとするものであります。又同号の中に夫婦の倒錯遊戯が出て居りましたが、私は大変この記事に興味を持ちました。私の家庭もそこ迄は行っておりませんが、妻を裸にして禪を締め、角力を取ります。勿論本気では取りません。私は五尺三寸、十五貫で妻は五尺二寸五分、十五貫です。娘時代は町でも一番と云われた美人でしたが、今では二十六才にもなり、子供も二人出来て居りますので大分やつれました。勿論恋愛結婚です。今頃こんなことを云っても始まりませんが、血統家柄はどこへ出てははかしくありません。それでも妻は始めはいやがって居りましたが、今では私の云うことを聞いてくれます。たゞ御願ひ致したいことは奇クに於て此後女性の禪美の写真なり文なりを載せて戴きましたら幸せと存じます。同好の人も多いのです。が、なかなか口に出しては云わな

いものですね、本名にて出せばよいのですが、京阪間では多くの人が知ってしましますから(職務上)Y・Kと致します。(京都Y・K)

○

前略、取急ぎ一筆申し上げます。奇ク十二月号に掲載して頂きまして「脱衣症患者」についてですが、最近発行の「風俗科学」一月号に殆ど同文の「わが裸体を愛するの記」なる一編が掲載されておりますことにつき一言釈明させて頂きたく存じます。実は双方共私の作品なのですが、他誌へ投稿しましたのは去る五月頃のこと、その後何の報せもなく又掲載される様子もありませんでした。没になったものと思ひ、未発表の作品として改めて貴誌へ寄稿させて頂いたものなのです。それを今頃になって突如何の前ぶれもなく突如として発表され、私も全く驚いております。貴誌の掲載の方が先であったことがせめてもの幸ですが、何と申しまして私の軽卒のなせる業で貴誌へは多大の御迷惑をおかけしたものと存じ深くお詫び申し上げます。今後の投稿には慎重の上にも慎重を期し再びこの轍を踏まぬよう呉々も注意致します故、何卒

御容赦下さいますよう伏してお願ひ申し上げます。(青葉楓一)

○右に關して皆さまの誤解を解くため釈明文を原文のまま掲載しておきます。稿料も大分以前に送金済のことでもあり、同氏の善意を信じて今回は氏に今後の注意を促すだけに止めておきますが、同じ文章を二ヶ所へお送りになると、こういう誤りが起りがちです。から、そういうことのないようお願いしておきます。(編集部)

○ 毎日お忙しい

こと、思ひます。昨日KK通信の残金受領致しました。KK通信が廃刊され淋しくて仕方ありません。これに変わる何かを発刊して下さる様お願い致します。さて

○読者通信をお寄せ下さい
読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシ／＼とお寄せ下さい。

(福岡 妻木満三)

「氣違ひにされた令嬢」は非常に面白く読ませて頂きました。後日「夜ばなし」第三話、第四話……おきかせ下さい。読者の中には「オシメ」や「浣腸」や「灸」に興味を持って居られる方の意外に多いのには驚きました。私は御誌昨年五月号に「私の悦虐ノート」で隣りの女中が小便をするのでオシメをさせられていたと書きましたが、其れは現に私が見たのではなく、周囲の状況から判断してオシメを当てられていると断定したまで、その現状を見ることが出来たらどんなであつたらうと、今更ながら残念でたまりません。赤井茂氏のように同室の女性がオシメをさせられていたのを目前に見られたとは、うらやましき限りです。その場の模様を詳細に発表下さいませんか？今後共「浣腸」「灸」「オシメ」に關する記事を盛沢山に掲載して下さいますことをお願い致します。

○ 拝啓、秋いよいよ深く読書に暫しを忘れる今日此頃、貴誌の号を追うての内容の充実、真に嬉しく思つて居ます。さて、奇談、Y談を好む小生として一言お願い並に愚考を述べさせて頂き度いと思ひます。空にゼット機飛びまわり、空飛ぶ円盤が世界に話題をまき起している今日、貴誌に於かれまして、何かこの二十世紀の原子時

代に幾分ともふさわしいアイデア
を取入れられるのも御一考にあ
らずや?と思うのであります。とい
うのは、女性の乗馬!これは欠く
ことの出来ぬものかも知れませ
んが、これにプラスすること、正に
画期的だと思います、女性のオート
バイ愛乗という点であります。乗
馬同様の快的感、そして跨乗のス
リル、スポーツとしてはそのエン
ジンと爆音、振動。こういったも

譚クラブに加え、毎月、特別増大
号の連続ビツトを躍進的発行され
る此の頃の奇クは、これ迄の数多
く氾濫し、一時華かにさえ見え
た類誌群をぐんぐん引き離し、此
の道の同類に非らざる特別誌とし
ての貫祿を完全に備えたものと
思います。愈々完璧な水準を築き
あげ、業界の覇権を確立したよう
な凄まじい発展振りに特異の光彩
を發揮して、奇クの偉容をいやが

今日果してその語の如くの中せる
躍進振りに、只々無条件で頭を下
げてしまいます。私は業務の都合
にて、過去数カ月、九州、四国、
中部地方を旅行して、各都市の書
店で奇ク発売の状況を訊聞しまし
たら、何れの書店も発売して数日
を経ることなく売切れを示し、
訖了された奇クも古本屋には一向
に現れない……此の状態を奇ク
繁榮の為、誠に嬉しいこと、欣喜
する次第ですが、此の半面、これ

える事は、曙書房の提燈を持つと
誤解をうけるかも知れませんが、
斯道の信仰者として心に生じる願
いのまゝを生一本に皆様にお願い
する以外何もありません。これは
やゝもすれば圧力が加って夢散す
る此の種雑誌界の状況を眺め斯く
の如く心の底からの私の叫びとし
て皆さんに申し述べます。
(加佐和天恩生)

新人挿絵画家を求む

雑誌の口絵、挿絵につき関心
をお持ちの方々は男女に限ら
ず作品、略歴お寄せ下さい。
見込みのある方は誌上で紹介
の上本誌挿絵陣の一員として
活躍して頂きます。

他の追隨を絶
対に許さざる独
占的堅固陣を手
ぎわよく波乱多
い読書界に敷設
された奇ク編集
部の御手腕には
改めて敬意を表

現読者のためにも、奇クのため
も、又奇クの存在を知らぬ人達に
も実に惜しむべき大きな損失であ
る事と深く歎く次第であります。
奇ク読者層が拡大強化される事
は、私達の趣味嗜好上の向上を迫
る前提であり、且つ斯道の思想天
国を建設する前衛でもあります。
奇ク編集部も読者の皆さんも如何
にしたなら同好の人達をもっとも
っと会いやる事が速かに成し得る
か、真剣に考えて戴きたいと念じ
ます。奇クの発行部数の増大を考

拝啓、始めに畔亭先生へ。貴重
な誌上に於て小生のためにお言葉
を頂き厚く御礼申し上げますと共
に、大きな感激をおぼえました。
未だ奇クがこうした発展以前、小
呈言に対し親しく編集長からてい
ねいな封書を頂いた事がありまし
たが、その感激をも新たに致しま
した。貴誌が読者をおろそかにし
ないと云う所が、現在の奇クに
した所以だと信じてうたがいませ
ん。畔亭先生のお考え(信念)と
好みがよく判りましたので、もう
何も申し上げる事はありません。
先生は先生なりに、私は私なりの
「縛りに対する理想」があるわけ
で、それが一寸距離が遠いと云う
だけなのでしよう。今後の御活躍
を御希い申します。只残念な事
は、最近の先生の絵には後手に縛

の新しい一頁を飾るに足ると信
じます。何卒御一考下さいまし
て、小生が思いついております女
流オートバイ選手の生態を、貴誌
一流の官能的麗筆にて発表せられ
んことを愛読者の一人として切望
致して居ります。(奇倶愛生)

し、手ばなしに最大の賛辞を呈
上致します。今より六カ月前、類
誌割拠の乱立時代に、あまりにも
処女の歩みに等しい稚足を大いに
箕田編集長さんになじったつもり
が、其の際の返信にもう暫くする
と何れの類誌も世上より姿を没し
て、奇クだけが敢然と残る。其の時
にこそ奇クは読者と共に大躍進を
する……云々と大言に似た壮語とし
かその時は受けとれなかったが、

前略御免下さい。早速乍ら素晴
しかつたKK通信を發展的に廃刊
して、その余剰力を集中的に奇

は、最近の先生の絵には後手に縛

られていた絵が少なくなった事です。新しい所では目次裏の川柳がよろしい。一つ奇巧の名物にしたら如何ですか。絵物語「芸者、春駒」は六葉全部縛られているので（然も皆ポーズが変っている）無駄がない。依田先生の今後に期待する処大です。写真では「薄羅をまといて」が何んと云っても圧巻です。萩千恵子嬢のアクチングとポーズはふるいつきたい位よきものです。猿ぐつわも小生の好みにびったりOK。もう一人川辺砂登子嬢の「手袋」をピンアップしたいと思いましたが。目の美しさにこれとその表情が活々して中々よきものと思えました。段々とモデル諸嬢にも読者のファンが出てきましたし、この人にはこうした所という個性も判ってきましたので、興味しんしんです。せいぜい映画をよく御覧になってアクチング（特に顔の表情）を御研究下さるようお希い申し上げます。今、自分は誰に縛られて（何故に）等を考える、表情が自然に生れてくるのではないでしようか。

（東京、小原良）

前略、先日ふとした事から古本屋に立寄り貴誌八月号を手にし、

一頁、二頁と頁をくって驚きました。私の最も求め、そして最も悩んでいた事等、しかもその写真迄あるのですもの、もう夢かと思はれ喜んで急いで買って帰り、世の諺に息をもつかずと云いますが全くその通り、またよく間に読んでしまいました。未だくなんだかもの足らず、すぐに新刊雑誌の販売店に行き一月号を昨日買求めて読んだのですが、どうも未だもの足りないのです。このお便りを出す次第です。私は生れて此の方二十三年間（と云っても十才位の頃からなのですけれど）誰にも打明けられず、一人でいろいろ空想したり、又菓人形を作って雁字搦めに縛ったり、或は四つ程年下の子を呼んで来ては「巡査ごっこをしよう」と云う口実を作ったその子を吊し上げたりしたので、その子の親達から抗議を申込まれたりしましたが、人を苦しめたのでは怒られるので、最近自分自身に縛をかけたりに満足していたのです。然るに貴誌を知る迄は此の日本全国で私只一人がこの様な変態性なのか……と思ひ悩んでいたのですが、数多くの同好者の居ることとがわかり、誠にうれしくて親に会った様な気持ちで一杯です。此の

気持は経験ある人のみ知る喜びだと思ひます。貴誌に対して云い尽せぬ感謝の念で一杯です。尚、誠に恐縮ですが、特別会員の事です。が申込書の様なものがあるのでしたら、何卒厚顔乍ら至急にお送り下さいませ、一日も早く御返事の来る事を鶴首致して居ります。

（広島 T・K生）

前略、新年号大いに楽しく拝見しました。益々充実して行く貴誌の並々ならぬ御努力に対し御礼を申し上げます。東京では此の種の特殊雑誌は全部消滅し、恐らく日本で貴誌のみが孤軍奮闘の事と思ひます。何卒永続させて下さい。所で一月号のフォト・セクションでは外国女性の肌着、手袋、薄羅をまといて、等々は興味をかきたてられました。然し、薄羅をまといて、の萩嬢の豊満なお尻のクローズ・アップが一枚ほしかったところではす。手袋も、もう少し製版を鮮明にしないと折角の逸品が台なしです。毎月号、乳房とお尻の傑作フォトを欠かさず掲載して下さい。記事では緊縛に関する十二章、号泣、等は面白いと思ひました。尚、本文の中にもどしどし写真を入れて迫力を加えて下さい。

○

出来得れば年に二回位の別冊を出して、あらゆるアブの世界の限界を様々な企画にて編集して下さいますれば、大変有難いのですが、如何でしょうか？今のまゝの毎月一回では物足りないもどかしさと焦らだたしきで、翌月号をひたすらに待ちわびるといったぐあいです。ので、一度位満腹したいと思ひますので敢て提案します。

（T・R生）

女優緊縛映画予告篇

題名（製作会社）

女優名

喧嘩鴉（松竹）山根寿子

快傑鷹（宝塚）大和七海路

あんみつ娘（独立プロ）雪村いづみ

覆面髑髏隊（大映）長谷川裕見子

猫化け腰抜け騒動

黄金弁天（松竹）星美智子

近松物語（大映）月丘夢路

闊大崎の決闘（東映）香川京子

叛逆者（メトロ）夏目葉子

ターザンと密林の女王

目撃者は語らず（独立プロ）不明

暴力に挑む男（W・B）不明

流星星三度笠（東映）A・シエリダン

照る日曇る日（宝塚）南天路圭子

指紋なき男（アメリカ）雅不章子

（白石稔）

ザ・ディズニ通信

れてある希望を、本誌に一頁でも半頁でも結構ですから、是非掲載して下さい。お願い致します。宮脇様、私も貴女と同じあこがれを持つ者です、意見の交換をしたく思いますが、如何がでしょうか？ 以上取りとめもない事を書き並べましたが、適当に御判読下さい。

(東京、Kより)

て投書して本当に良かったと思ひます。数多くの投書の中から私の拙文を取り上げ、しかも後書き迄お書き下さいました編集部の方々の御親切に深く御礼申し上げます。

(Y・M生)

(豐中E1生)

初めてお便り致します。最近店頭に貴誌を見まして、やっと皆様のお仲間入りさせて頂きました。正月号を見まして特に読者通信のSOK様のアンマ礼讃文についてり込まれてお便りする気になりました。妾も恥しながら同好の一人として申し上げます。妾の隣家にマッサージの上手な男の方が居り、相当な奥様風の方も来るので主人のついでによくやって頂き、案外若い女の人が別室でやってもらっているのにあることがあります。奇くで何故殆ど写真や文がのらないのかと不思議です。どうか載せて下さい。辻村隆実演、着想等もアンマ男として、男の顔等も入れて女の顔もたまらない表情が出ておればもっとよかったです。又、怪僧ラスプーチンの一場面の裸婦を寝かせた前で男が手をあたためる為に揉み手をしているシーンと並べてのせて頂けないかと思えます。マッサージやアンマ等される女の表情と力をこめている男の腕と顔の写真図柄が妾もほしいのです。若い人達だけの奇くでなく妾達の為にもどしどしよいも

のをお願いします。(貝塚サト子)

異色ある雑誌奇クが毎月休まず発行されていることはアブ同好のわれわれとして誠に喜ばしい。私は三十二才の一サラリーマンで妻もありませんが、女装と緊縛プレイに魅せられた男です。新年特大号のフォト・セクシオンで私の気に入ったのは「薄羅をまといて」と「手袋」「鼻いじめ」「磔」でした。「薄羅——」は、ベールをとおして漂う萩千恵子嬢の柔肌の香りがほのかに偲ばれ、特に二枚目の坐った右横から撮したのがよかった。胸を二巻きした細紐が二の腕に喰い込み、鼻を掩った猿ぐつわの中から恐怖の眼がはつきり出ている表情は何とも云えない。もう少し右前から写し、乳房と臍を見せて欲しかった。「手袋」の新人川辺砂登子嬢は、どうやらマゾ女性らしいが魅惑的な被虐感にひたっている眼が印象的。それにフックラ盛り上った乳房が黒の皮手袋につかまれ、ゆがんだのが非常によかった。せめて下もカットせず全身をのせてほしい。「鼻いじめ」はもつと早くのせるべきだった、川辺嬢の眼がびったりした被虐ぶり。「磔」はいつもなが

らマゾ女性伊吹真佐子嬢の表情がよい。身動き出来ぬ有様が容易にうかがえるが、縛られた下半身もみせて欲しかった。「マゾヒズム通信」の大阪KS生氏の場合、私と同好で心強く感じました。私は日本髪、長襦袢、伊達巻腰巻姿も好きですが、ブラジャー、パンティ、シユミーズをつけさせられ、責めたり責められたり、凌辱されるようなことを想像して慰めています。私もよき相手(男でも女でも結構)があればプレーを楽しみたいと思います。(大阪T・I生)

○ 拝啓、貴誌益々御盛昌の段お慶び申し上げます。廃刊、休刊が続出して居る折柄、貴誌のみが毎月定期発刊して居られる努力には、全く頭が下がります。この頃、アクロバティック・ダンスに関する投書が大分出て居りますが、私にもこれに關しては相当な数の写真を集めました。大部分は舞台写真のみで、練習中の写真がごく少数しか有りません。読者通信を見ましても、練習中のサディックな場面を思わすものが出て居りました。が、何か此れに關する写真を載せて頂けませんでしょうか。昨秋の毎日グラフにも少し練習所の写真

が出て居り、その説明を読みました。サディストの方々が読まれたら興味を持たれると思われるものでした。又、アサヒ芸能新聞にも外人少女のアクロバットの写真が出て居りましたが、その説明にも殿方のサディズムを満足させるものと思われる事が書かれてありました。貴誌がこの様に一般の方々からもサディズムと結びつけて考えられて居るアクロバットを、何故取り上げられないのか不思議に思えてなりません。この点をどう思われて居るのか、編集部の方のお考えを聞かせて頂けたらと思います。色々自分勝手な事を書かせて頂きましたが、将来この方面の記事もどんどん載せて下さいませ。様々お願い致します。末筆ながら貴誌の発展をお祈り申し上げます。(大阪、国島生)

○ 再びお便り差上げます。十二月号のサディズム通信欄に私の意見を載せて頂きましたが、まだ書き足りないところがありましたので付け加えさせて下さい。十二月号で私が述べた意見の中に、パンティよりもブルマー型のズロースが好きなと書いて居りましたが、それに対し和歌山のI・T氏は「ブ

カブカのズロースより短いパンティがよい」と書いておられました。多くの読者の中で、このような相反する意見や希望を片手落ちのない様満たして下さる編集部の方の御苦心の程お察し致します。扱、私の意見であります。なぜパンティよりズロースが好きかと思しますと、私は元来、全裸よりいくらか衣類を着けた方を好みますので、体の線を直接現わすピッタリしたパンティより、ゆったりとしたズロースの方がよいのです。又、ズロースの裾のゴムが柔らかな太腿を締め付けているのも、パンティでは味えない魅力の一つです。この上も下もゴムで締め付けているズロースは、又一つの大きな袋でもあります。女がものをかくす時よくズロースの中へ入れると聞きます。私はズロース一枚の女を後手に縛り上げて、そのズロースの中に女のいやがる虫等を入れたら……と考えて居ります。次に大阪の福本氏の御意見について述べましょう。私も腰巻は大好きです。その中でも赤と桃色の腰巻は特に興味を覚えます。私は緊縛ファンでもあります。私にした腰巻やズロース一枚の女の絵や写真は、必ずしも縛られて居な

くとも充分楽しめず。福本氏の希望の叶えられる事をお祈り致します。最後に「ブロースマニアの手記」の吉次氏に、差支えなければ御交際をお願いしたいと思ひます。

(福岡S・Y生)



前略、小生以前から奇クを愛読致しておる者です。奇クを知る以前、色々と同種の雑誌を拝見しましたが、内容、その他に於て奇クに勝る誌はありませんでした。奇クの充実した内容を愛読しはじめたら、絶対にやめる事の出来ない面白さで、特に手記、告白等は小生が一番愛読するところです。十二月号拝見致し「悪の広場」「続・浣腸マニヤの手記」又十一月号の「ブロースマニアの手記」等は特に興味深い読物で、読んでゆくうちに何ともいえぬ昂奮に陥っていくのでした。小生は約十年程以前よりパンティやブロースマニアに氣をひかれる様になり、新聞、雑誌等に載っているのを見てさえ、何とも言えぬ氣持になります。どうにかして実物を入手致し度いと思つて居りますが、今だに入手する事が出来ません。身内のものでしたらずぐ入手出来ませんが、それでは何だか物足りなく是非他人のをと思つていますが、氣ばかり焦つて一向に手に入れる事が出来ないのです。何処かへ旅行に行つても、自然に洗濯物の干してある場所を探して歩くようになり、干物の中にブロースマニアやパンティ等が見当たると、胸を躍らせて眺める次第です。近頃は眺めるだけでは物足りなく、手にとつて氣のすむ迄肌にあふれ、口づけ出来たら……と思ふ様になりました。又、新しいのは、さほど氣がひかれませんが、長く使用して薄色に変色したパンティ、ブロースマニア等が手に入つたら、どんなに素晴らしい事だろうと思ふ様になりました。女性の肌の最も神祕な部分を直接にふれ、芳ばしい香を思ふ存分に吸つたパンティ……、思つただけでも胸が躍ります。小生もパンティになり、思ふ存分に汚されてみたいのです。

(北海道 荒巻利夫)

新年号では、以前からお頼みしていましたが「鼻いじめ」の写真を載せて下され御礼の申しようもある

りません。「鼻責め写真」については、私の以前の申し上げた「貨幣詰」(これは出来上りの効果を計算に入れて戦前の銀貨かニッケル貨がいふでしよう)や「ニカワ詰め」粘土でもよく、豚のような鼻は、これ以外には(透明硝子板を女の鼻に押しつけ、それを上へずらせるようにする方法)ぐらいしかありません。また、女の鼻の小鼻の付け根を強く挟んで出来る「チンコロ鼻」等如何でしょう。来月号に「鼻責めの実験」という恐ろしい文が出るそうですが、大いに期待して居ます。又、鼻いじめのモデルは川辺砂登子さんでしょうか、川辺さんはこの私を恨んでいられないでしょうか。よろしくお伝え下さいませ。

(神戸 北谷英二)



女王春日ルミ様へ。突然不躰なる御便り御許し下さい。奇ク毎月号のマゾ・フォトは誠にすばらしく、感激のあまり無礼もかえりみずペンを取りました。女王様の鞭の下に思い切り凌辱されたいと願

うのは、一人私のみでなく、我々男性マゾヒスト全体の悲願でしょう。若し此の私に一日、半刻たりといえど奴隷の奉仕を御許し下さるならば、私は浪華の空へ馳せ参じます。噫々、それは余りにも欲深きマゾヒストの夢でしょうか？せめて女王様の移り香たゞよう下着類の中で、空想と自虐の中に生きようと思ひますが、それすら今の私の環境では許されません。唯一つ与えられた密かな喜び、それは毎号「奇ク」のグラビヤを飾る女王様のマゾ・フォトです。足舐め、足蹴、凌辱、等々、其処には我々男性マゾヒストの夢が、悲願が、妄想が、はりさけんばかりにふくらんで居ります。何卒今後共、我々男性マゾの夢を最大限に御与え下さる様、切にお願い致します。(足下にひれ伏して、光吉より)

私は一昨年より奇クを愛読致して居ります一読者ですが、今迄何度お便り差上げようかと思つたかわかりません。しかし、何分氣が弱く今日迄のびのびになつておりました、思い切つてお便り申し上げます。私はマゾとして以前「惱ましのサディズム」と云う題

で発表された森山美歌様に御文通及び御交際願えたらと望んで居ります。もし森山様と御交際出来ますなら、三吉様みたいに犬の様に手枷足枷をはめ、首輪につけた鎖でつながれ犬か馬の様に鞭打たれ恥かしめ、ののしられてもてあそばれたいと思います。又森山様によごれたズロースを口に押しこまれ、猿ぐつわをされ、心いく迄お仕置していただきたいと何時も望んで居ります。又三吉様の様に一生美歌様の奴隷として犬として誓約書を書かされてみたいと思ひます。以上、何んだか取止めのない事ばかり書きましたが、是非森山美歌様に御紹介のほどをお願い致します。(神戸 石本完治)

私は奇巧の熱烈なる愛読者の一人です。此の種の風俗誌も又々此の頃出はじめて居りますが、内容はとても見られるものではなく、毎月確実に発行される奇巧のみが、日夜私を慰めてくれます。九月号に掲載された岸本青柳氏の「女装して責めの実験」を楽しく拝見させて頂きました。私は二十才の青年であります、実のところ、多分に女装してみたいという興味を抱いていたのであります。

特に私は女性の尻部、ズロース、シユミーズ等に憧れて居ります。私は小さい時から奇怪な癖がありまして、劇場にて踊子の用いる女装を見ると性的興奮に襲われます。女装(真赤又は真青のシス地の女装等です)を求めたいと思つて居ります。十一月号にて「ズロース・マニアの手記」を拝見致し、代理部にて女性の下着類等を斡旋して頂けるとの事、嬉しく思つて居ります。(茨城M・M生)

貴誌の充実ぶりに胸を躍らせている一人です。私はかつての岡田咲子さんの文の様な「美しい女が女を責める」もの、又は「美しい女が年下や目下の男をいじめる」ものに興味をもっています。美しい豊かな肉体を誇る女が思ひのまに弱いものいじめをするのが好きなのです。どうかこのようなものをうんとおして下さい。一月号の長瀬昭子さんに体験記など詳しく書いていただけたらと思ひます。それからあまり見当らない責め方ですが、私の好みは床に仰むけにねさせた胸に靴やストッキングを穿た足で立って顔を足の爪先でなぶったり、爪立ったりして苦しめる方法です。胸を踏台にして

下でもがくのを見下しているのを考えるときたまりません。勿論寝ている者の手足は大の字にひろげて縛っておくのです。私は胸の上に女物のサンダルを置いてその上に五十キロ位のをのせてみました。たが堪えることが出来ました。このような写真でもあったらと思います。(Y・O生)

私は肥満体への憧憬を抱いているものです。現在、同好の士高浜様と交際しておりますが、私達は更にお一人でも多くの同好のお方を求めて居ります。私は曾って本誌に設けられました読者案内欄のお蔭で、高浜様と交際出来るようになったのです。須渾朔様の肥満体讚美党の御抱負には大賛成です。私達は幸いにも兩人共絵が描けますので、簡単な物語りの中に絵を描き入れ、互に交換して楽しみを分かちあっています。すでに十ヶ月余りですが、まだ一度もお逢いしていませんが、全然誠実な交際を続けてい

ます。高浜様は御立派なお方で、此の道の楽しみと御家庭とは、はっきり区別されていらっしゃるようです。御家庭では良き夫君であり、良きお父上でもあられるのです。私は心から安心し、尊敬しています。同好の皆様どうかよろしく御交際出来ますよう御願ひ申し上げます。(三重K・E)

前略、奇巧毎号楽しく愛読しています。私も大阪市のH・M様の如く女装マニアの一人です。岸本氏の「女装して責めの実験」はうれしく拝見しました。私が奇巧の愛読者になったのは昨年一月号の重田氏の「女装への憧憬」を見てからです。その外、伊藤氏、吾妻氏、古川氏の読物を興味深く読み



ました。少年の頃より女装に興味を持ち、村の祭礼等の芝居を見る時は、いつも楽屋をのぞいて役者の女装していくのを見て居る時間の方が長かった位です。一度女装してみたいと思っておりますが、思う様にならず、つい近年になって希望を果しました。同封の写真は今年の春、ある市の舞踏研究所にて女装して撮したものです。今迄に数回程撮した写真を時々出して見ても楽しんでます。現在三児の父ですが、小遣いを節約してこの様な事をするのを楽しみにしています。又、女の人の下着にも興味あり、代理部で幹旋して下さるとの由詳細お知らせ下さい。又、H・M様外女装マニアの方と文通致したいと思しますので、御手数乍ら御取次願いたく思います。

(東京 T N 生)

始めてお便り致します。群小類似誌の陣腐な編集に比べて何時も期待に背かぬ御誌の編集諸氏に厚く御礼申し上げます。小生昭和二十七年十二月号よりの愛読者で、毎号書店に出るのが待遠しく、毎月末になるとそわ／＼と仕事も手につかない程です。入手すると真先に見るのはグラビヤの「まぞふお

と」や、沼氏の手帖等、又織田信長も興味深く読んで居ります。特に「まぞふおと」はスクラップしてアルバムを作って居ります故、今後此の企画を永続して戴く様切望致します。読者通信の諸兄姉の御意見を隅から隅まで拝読させて頂いて居りますが、一月号の千葉 S S 兄の説は私も全く同感で、同好者のあったことも大変喜んで居ります。私は極端に云えば「ドヤ」バタフライにはあまり興味がありません。純白の運動服に黒や紺の清潔なブルマーが憧れの的です。戦後女学生の運動着も次第にブルマーが減ってパンツが多くなり失望して居ります。私も戦前、女子学生等の体操着姿の写真等にあつめて居りましたが、終戦の混雑時に亡失し、惜しい事をしたと思つて居りますが、御誌にたとえ一葉宛でも載せて頂けないものであります。春日ルミ嬢がブルマー姿で小沼氏を責められる所など、必ずや随喜の涙を流させる事と思ひます。或は小沼氏を相手に運動される場面等、馬跳び、背中に乗っての平均運動、爪先をろく木へかけて男を台代りに背中を反らす運動。肩車、疲れれば座っている男の頭の上へ腰かけて一休

みする等を企画されてみては如何でしょうか。又、サーカス等で行う数人の男女に依る人体梯子等も私の好きな場面であります。美容体操の御相手を男に押付けると云う趣向も如何でしょうか。まことに取りとめのない事を、又勝手な事を申し上げましたが、御許し下さい。春日ルミ嬢の御活躍を熱烈なるファンの一として心から期待し、御健闘をお祈り致します。又、更に第二、第三の春日嬢の現れる事を切望致して居ります。編集部の方の諸先生方も何卒、自重自愛、読者のために今後も一層頑張ってくださいませ。様お願い申し上げます。

(K・Y 生)

切腹通信

「奇ク十二月号を読んで」奇クも堂々三百余頁の立派なものとなつた。その事自体には満腔の賛辞を惜しまないが、切腹や自害に関する記事や写真が増えていることには軽い不満を感じざるを得ない。同好の諸兄姉の熱望に応えて今後、その企画を取上げられんとを編集部の方々に切望して止

まない。何故なら雑誌のどれを取上げて、切腹や自害を全然取扱っていないからで、奇ク愛読者の相当数を切腹と自害の記事や写真が確保している厳然たる事実を認めて頂きたいのである。さて本号では僅か田谷敬生氏の「続女性切腹断想」に依つて渴を癒やす外な次、十二月号の切腹通信に現れた「切腹マニアの女性 N 子」さんに一言したい。それは「ヌードやパンティより昔のように白装束にして、双肌を十二分に寛げての方がよい」と書いて居られるのは、憧れの若く美しい女性に、N 子さんの様な素敵な方が居られることを知つて嬉しくて嬉しくてたまひません。若し私が二十年若ければ、N 子さんの様な女性を妻にと空想を走らせました。その次の K・S 生氏に依る、十一月号の原桐咲代礼讃にも全く同感です。単なるモデルと違って表情といふ、角度姿勢といふ、長襦袢と白衣のものは申分なく、今までになかった傑作でした。小生の前稿「腹に依る悦虐」の末尾に原桐さんの此の写真をとかく批評したのは、小生の飽くなき願望を卒直に申述べただけで、空前の傑作であつたこ

とは何等の反対もありません。原桐さんには今後益々研究の上、続々傑作写真を発表される様、又N子さんがカメラを手に入れられ、小生が本号に幻想した様な神々しい悲壮美を具現して下さい。様、切にお願いする次第です。最後に奇クの隆昌を祈って止みます。(兵頭庫一)

○

まだ奇クに紹介されていない女腹切の史実としては、康富記かに(記憶不十分、原文は漢文)に足利義教の妾今参の局の切腹があり、彼女が正夫人富子との闘争

◇執筆者、投稿者の住所照会について

本誌の執筆者並に投稿者の住所照会については、毎号固くお断りしているにも拘らず、未だに多数の方々からの照会状が参つておりますが、右については絶対に御返事出来ません故御諒承願います。若し編集担当者が執筆者や投稿者の住所を誰彼なしに漏洩したとしたら、本誌の信用が完全に失墜することを、よくよくお考え下さつて、今後、そのようなお問合せは下さらないよう御願います。

いに敗れて流罪となり、近江国まで護送された時に追使が到着して死を賜りましたが、家名(実家は太田氏)を汚さじと、自ら切腹を望み、護り刀で一文字に引き、左手を傷口にさし込んで腸を引き出しました。あまりな哀れさに護送の若侍が介錯を申し出ましたが、それも断つて絶命しています。又、切腹自害ではありませんが、塩谷高貞夫人(芝居では顔世御前)が、その艶色故高貞とは別途に京都を出奔して伯州に赴く途次、追手を受けて辻堂の中で家人の介錯で最期を遂げる場面が大平記に出ています。武人の太刀先にか

けられた夫人の太腹が、折しも孕んでいた為に傷

口からは赤子の髪が見え、血と灰にまみれた凄

惨な情況が書かれてあります。現代語で言えば囁

託切腹とも言うのでし

ようか。このまゝではあ

まり悲惨ですが、もっと

美化して画にしたら一寸

風変りの女腹切になると

存じます。女の腹切は華

かな背景が必要で、衣裳

も豪華な模様物で、下着

のみが白無垢にした方が

画になると存じます。髪も下げ髪か結髪の時代物がよく、その髪が乱れに一しお美しさが強調されます。背景、風俗等は全て歌舞伎情緒をたゞよわせ、例えば検使の奥方がうち掛け姿で床几に控え、大刀取りの腰元は繻十字に白い二の腕まで出して八双に構えた腹切場で、厚い敷物の上でお局が切腹し、その前に鏡を据えて自らの腹切姿に恍惚として見入っている構図は如何ですか。女腹切の絵図も、伊藤晴雨画伯が筆をとられた素晴しいものが出来ると存じますが、是非一度お願いしていただ

(三重 安城文雄)

○

(一月号切腹通信の中略文)私は次の様な情景を空想するのが好きです。先ず時代及びバックは森鷗外の「阿部一族」の頃とします。弦之助と云う武士(これは私自身の分身です)が、主君の死に際して追腹を切ることになります。彼の妻「せつ」は彼と同じ方法で夫に殉じ、自己の貞操を完うしようとしていますが、弦之助は仲々それを許しません。しかし遂に妻の熱意に負けて、妻の切腹を許します。二人が最後の「ちぎり」を交わし

あった翌日、夫の追腹の日の朝、せつは白無垢姿で白木の三宝の前に型通りに端坐し、弦之助は妻の前に少しはなれて位置します。雪白の肌をあらわにしてせつは九寸五分を手にし「弦之助様、せつはお先に参ります」と静かに目礼を交わした後、左下腹にブスリと突き刺します。「弦之助さま、せつの真心お見とゞけて下されませ」低いが力のこもった声で云いながら、右手に力をこめて右へ九寸五分を引き廻します。夫の生血(ザーメン)を吸い、女のよろこびに波うたせた下腹を、心をこめて真一文字に切り開いてゆきます。せつは迫り来る激痛をこらえるように「弦之助さま!」と、夫の名を小さく呼びながら、立派に切り終ります。「せつ、見事じゃぞ」と弦之助は叫びながら、思わずせつのそばににじりよると、彼女は片手で身を支えながら彼の顔を見上げて「うーれーしい」と、きれぎれに答えます。そうして、おちちは捧げたいと云います。弦之助はうなずくと、せつは体をよじるようにして彼の首に手をまきつけ身を寄せます。彼は妻の下腹から九寸五分を抜きとると「せつ、わしもじき後から参るぞ」そう叫ぶ

様に云って妻の乳房を刺し、一二度えぐる様にします。「あゝ、あなた」と云うつぶやきを残しながら、せつは愛する夫に自分のすべてを捧げつくした喜びの中に、法悦に似たものを感じながら息をひきとります。妻のなきがらを抱きしめながら弦之助は、男泣きにしばらく我を忘れますが、やがて妻のなきがらをととのえ、自分も身を清めてから、主君の追腹を切るために指定された場所に向って家をあとにします。まあ、だいたいこういった空想です。尙、せつの致命傷は左の乳下、つまり心臓の一突きなのです。

(東京、津島比呂史)



奇ク編集部作製の浣腸三態は大変興味深く拝見致しました。勿論準公刊の写真という意味は承知の上で批評させて頂きます。(一)イルリガートルを用うる図。イルリガートルが写っていない点残念です。浣腸器フエティズムを満足させる点に於て、浣腸器、嘴管等が明に写る方がよいと思います。

施術者の態度が固いように思います。嘴管の持ち方及び、実際にはもっと施行者は被術者の臀部の上にかきみこんでいるべきでしよう。(二)他の二葉の図。共にリスリン浣腸器の描写が不充分のように思います。二〇〇〇の小型のようですが、五〇〇〇の大型がありますから、この様なものを用い、ピストンを引いてグリセリンを充滿した処がはっきり写っているたらしめたい。浣腸器がピンとが甘く、目盛等見えないようです。施術者の態度に(一)と同様の物足りなさがあります。殊に左手に浣腸をもっているのはおかしいような気がしました。第一、浣腸器の持ち方がゴチャない。普通右手で注射筒の胴体を持ち、左手を臀部にあて、臀裂をひらき、肛門を展いて差込むはずですから……全葉を通じて、被術者の態度が無理な態位をとっています。これは肉体的の責めと組合わされて居るからです。小生の個人的趣味で云えば、このような肉体的責めではなく、精神的な羞恥を踏みこむような点に興味があります。これは個人的希望で批判ではありません。従って小生の希望は次のようなものです。(一)場所。病院等

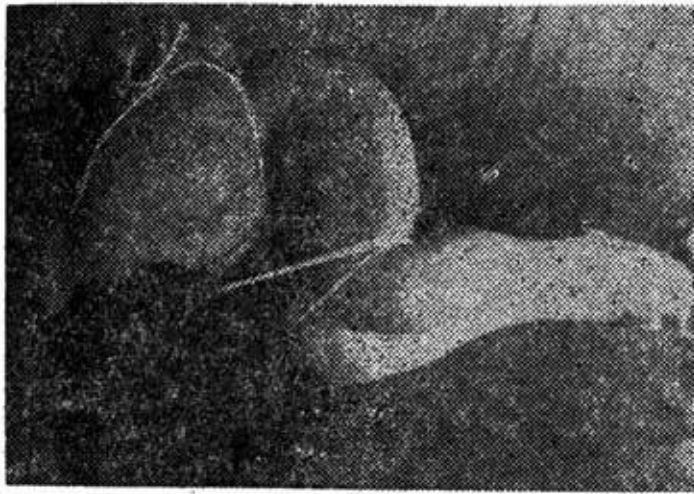
の診察ベット上、又は病床上。(二)被術者。女学生から若年増まで各種の美しい豊満な女性で、重症の病気でなく軽い腹痛等。被術者の服装は理想的なものでありたい。必ず美しく豪華な下着、ストッキングのまゝ、態位は横臥位で臀部を突出した形か、背位で両膝を立て股開等の医学的正常浣腸位。但し、うつ伏せ位も希望。いづれにしても臀部の豊満さがむしろ強調されること。(イ)、ベットの上下に拒否と羞恥でじっとして居られぬ着衣のまゝの患者と、これにかまわずその傍らで浣腸器の準備をする医師や看護婦。(ロ)、嫌がるのを抑えてスカートをまくる。(ハ)、次第に下着に及ぶ露出の光景と、患婦の羞恥と拒絶の態。準公刊の写真はこのまゝどこまで進められるか不明なるも勿論、希望としては浣腸器の差込む光景まで希望。(三)施術者は助手等を供う等、精神的サヂズムを強調する。小生としたら、何等着衣からの露出が行われなくとも、美しい、殊に臀部の美しい洋装の女性が浣腸の宣告を受け、医者の手にする浣腸器の前で逃れ様とものがくのを抑えられているような写真でしたら、卒直に云って、今回の「三態」

より興味があります。このような個人的な「好み」もある事を一言申上げますと共に、今までなかった、あのような写真を作られた御社には深く敬意を表します。小生も若干の浣腸の写真を持って居り、又、自分でも撮影しましたが、満足なものが容易に得られませんでした。何としてもモデルを得る事が大変むづかしいのです。画は自分で描けませんので、注文のような画を描いて貰える画家を求めて探して居ります。御社には色々の浣腸通信や写真等が読者より寄せられるように伺いますが、そのようなものを発表して頂けたらと希望します。又、興味ある浣腸の写真製作されましたら御発表下さい。大変勝手な事のみ申し上げ失礼御寛恕の程。

(久里須照雄)

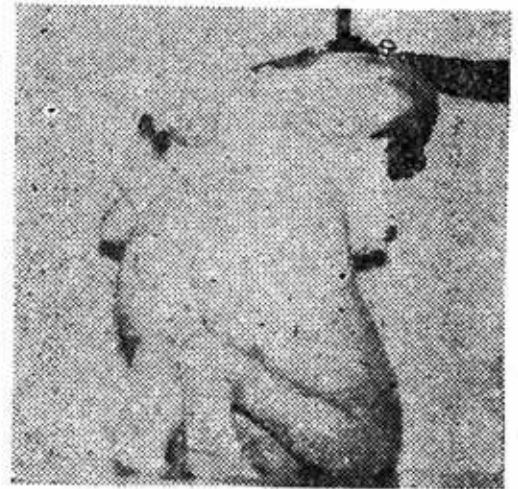
浣腸マニヤの方々へ。奇ク最近の特徴として、浣腸ものが多くなつた事、それらが若い女性のものである点です。私はヒップマニヤですが、これら浣腸ものには強く魅惑されています。読者通信の浣腸マニヤ欄は毎号楽しみで、ただ私にとって少々不満なのは、浣

(A)



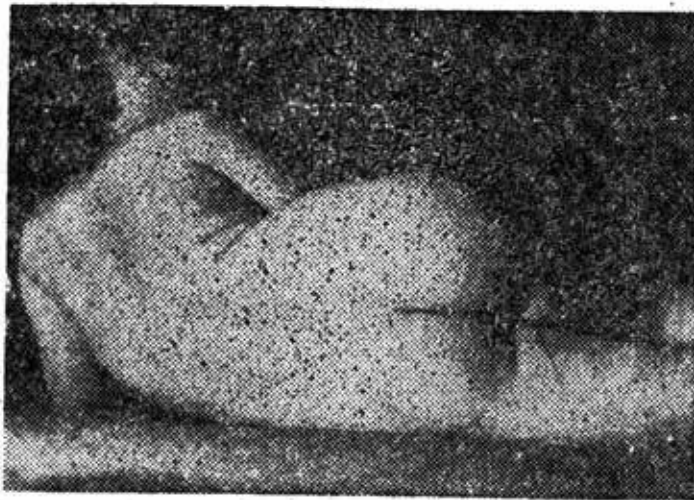
陽マニヤの人達は、殆んどが単純に浣腸だけを追究されていて、私の望む「薄り」を併用した型態が少い事なのです。浣腸のポーズに一種のマゾ的露出欲が現われていますし、花も恥らう若い女性が多いのは、他人に見られてはならない場所を露出すると云う強烈なマゾヒズムが、マニヤの心を一層強くあふり立てている事を示しています。だから、浣腸されると云う事は、その人の自由が奪われて、とか、無理に、とか云う前提がつく方が効果的だと思います。この場合縄による縛りが用いられます。角皓子さんの一月号の手記に

(B)



ひざを折り曲げて縛って浣腸する場面が絵と共に出ていますが、この恰好は、浣腸にふさわしい一番刺激的ポーズです。私は前に発表しました様に、女体を縛ることにより、その美しいヒップを自由自在に、あからさまに露出させる事に深いアブ癖を抱いています。だから、浣腸の気分をより素晴らしくするためには、簡単でもいいです。ですから手足の自由を奪う縛りが併用されるべきだと考えるのです。ここに参考のために、写真を三枚お見せ致します。(A)の屈曲肢体は、浣腸されるためのものと考えた場合、刺激的で素晴らしいし、(B)の写真は一層マゾ的ではないでしょうか。首縄と、後手首の縛りは、サディストの気持を強くかり立てますし、浣腸される方か

(C)



ら言えば、被虐の感情を同時に強く起させると思えます。(C)の単なるヒップ露出だけでは、前二葉より刺激はうすいと思えますが如何でしょうか。特異な体験でデビューされた花村さんに、この点おすすめ致したいのです。そして一層のすばらしい開花を祈っています。(狩井麗作)

小生、十二月号欽義先生相談欄のラヴマンです。浣腸マニアの女性との文通交際を望みます。左記へお便り下さい、自宅へ返事を貰う事をお困りの方は最寄りの郵便局まで出します。但し受取る時に

本人である証明(パス等)が入用です。住所は不用ですが本名は書いて下さい。「東京中央郵便局私書箱第一三二三号」。(註)筆名を書くとき小生が受取れませんから番号だけ書いて下さい。(東京、ラヴマン生)

浣腸通信の北河内七子様、空気浣腸を試みられたということですが、そして益々こんな遊びが好きになって来られたということですが、もし私がお近くでしたら、ご希望のように破けんばかりに膨らして差し上げたいと思いました。どういう風になさったのか存じませんが、十二時のゴムマリの半分以上お入れになったというのは、大変なご努力だったような気がします。お一人でも膨らますことが出来る事はもちろんのことですが、長いゴム(またはビニール)管や、エネマ・シリンジ(デパートで三百円位で売っています)をつかえば、もっと楽ではないでしょうか。ゴム管の場合は自分自身の口で吹いてふくらませるのです。が、腹に力が入っては何にもなりませんから、口の中(頬)の筋肉だけで少しずつ押し出すようにします。エネマ・シリンジは液体だ

代理部月報

(今月の新版)

◎アクロバット五態◎

萩嬢の柔軟な姿態に着目して不自然なアクロバットの曲芸的なポーズを沢山の紐を用いて強行することについて快諾を得て実施、最初は優美なポーズを演じていた萩嬢も遂には、痛い痛い悲鳴を挙げるに至った程、変態的なポーズに亘って御披露した作品、本月の口絵に紹介する筈が遂に中止にされたもの。

(手札型 五枚一組三百円)

◎浴室での浣腸五態◎

今迄試みられなかった浴室で

けでなく空気でも(空気の場合はある程度逆流するのも知れませんが)充分送りこむことが出来ます。この器具はもとと独りでもつかえるように出来ているのですから、はるかに楽に目的を達することが出来ます。是非おためしになるようにおすすめていたします。それから、妊娠したような感じ、その奇妙な満足感の神秘について、いろいろ申し上げたいような

の浣腸五ポーズを一枚一枚、変った姿態で狙ったもの。皆さまの要望により特に手札型として御紹介します。浣腸マニアの方々の必見のものと存じます。

(手札型 五枚一組三百円)

◎メンスバンド着用◎

フォト 萩千恵子嬢
伊吹真佐子嬢

単なるバンドを着用した伊吹嬢の正面のポーズとその着脱、並にバンド部分のクローズアップ。それに萩嬢のバンド着用の縛りのポーズ、いずれも前手縛りの正面のもの。バンドマニアのために特写したものです。

(手札型 五枚一組三百円)

(以上何れも送料共です)

気がいたします。私もこれから浣腸遊戯をするたびに、ことに空気浣腸によってお腹をふくらましてもう時には、どこかであなたが一人で秘密の遊びにふけていらっしやるかも知れないと思い、何かたのしいような気分を味わうことでしよう。本当にたのしいことです。失礼だけど、おいくつ位の方かしら、などと考えております。本当に、お互いに張り裂ける

までふくらまし合ってみたいような気がいたします。でも、二人でふくらまし合ったら、一体どういうことになるのかしら、と考えたら、一寸おかしくなりました。きくと面白いでしょうね。親しさを感じたあまり、つい余計なことを書きすぎた点はお許し下さいませ。(羽村京子)

奇クの魅力にひかれて最早七ヶ月、毎度の事ですすが選択せられたその内容、何時も私の好きな事柄や責絵等、一度の休載もなく発表して下さる奇クは、喜びと感謝の他ありません。奇クに書店でお会いしたのがつい先日のように、殊に滝先生の巻頭グラビア責絵、新妻責絵シリーズ等は素晴らしく、均整のとれた姿態美、特に女性の均整のとれた姿態の美しさは大の好物です。滝先生の面影が目に見えようです。花村恵美子様の「浣腸マニアの手記」は私も同感です。私の最も期待するのは浣腸の記事と、滝、畔亭両先生の絵であります。私の好きな被虐、加虐の情景は、私も花村さんや羽村さんのように大の浣腸マニアであり、ヒツプマニアであります、浣腸をされた事は一度もありませんので、

されるのは何だか嫌ですが、若ハ女性の形の良いヒツプにするのが大好です。嫌がる女をうつ伏せにさせて、その大きなヒツプに……と思うだけでもたまりません。フォトでは被虐者、加虐者ももっと演技、つまり被虐、加虐としてのアトモスフィアや顔の表情、躰のかたちや手足の組み方、置き方等等と研究工夫すれば、確実に現実的な効果があると思います。最後に世の浣腸ファンの諸兄姉の健康を祈ると共に、何時迄も奇クを愛して下さる様切に望んで居ります。(千原弘)



奇クの古くからの愛読者です。女の裸体や縛り絵、女の切腹に浣腸等は些かうんざりしていただきますが、十一月号の編集手帖にあったように「どの傾向に特に重点をおくという事なく、あらゆるものを包含したい」という方針を拝読し、こんな事を考えている男のあつことを知って戴きたいと思ひ筆をとりました。僕は二十九才になる男子同性愛者で、しかも男の六

尺禪姿に非常な魅力をおぼえるソドミアです。パンツや猿股には全然興味がありませんし、色黒く胸毛が房々とし大股から足の先まで黒々とした毛が密生していて、太い逞ましい腕には刺青の一つもあり、その体に真白の晒木綿を腹一ぱいに巻き、六尺禪できりきりと締め上げた、という様な裸体を理想としているだけに、外の男達が「やれ女だ」「やれ裸だ」と騒ぐのをよそに、僕は前記の様な男性の六尺禪姿を求めて来ました。僕が六尺禪に心をひかれ始めたのは小学生の頃で、従兄が農村に住んで居り、夏休みに遊びに行った時に従兄の禪姿を見てからです。何しろ百姓だけに筋骨隆々として逞ましく、その浅黒い体にいつも真白な晒の六尺禪を締めていたもので、何時もじっと見つめていたものでした。それからとうとう我慢しきれなくなつて従兄の禪を盗み、それを持ち帰ってそっと締めた時のよろこび、それは未だに忘れられません。以来二十九才の今日迄ずっと六尺禪を通して来ました。それに加えて多少の露出症的傾向もあるので、自分の六尺禪を締めた姿を他人に見られて、という意識があると、特に男に見ら

れていると余計に快感を感じるのです。それで、例えば銭湯等で湯からあがっても、成るべく鏡の前の人目の多いところで悠々と六尺禪をしめ、晒木綿の腹巻をします。そうすると十人の中七人までは、見てないふりをして僕を見て居ります。その時等本当に気持がよいのです。そして夏等は「あつ、あつ」と云いながら、その六尺禪と腹巻の姿で人通りの多い道を通って帰ります。先日、銭湯で、男の下着について統計をとったのですが、現在一番多く使用されているのはキャラコのパンツとメリヤスの猿股で、これは十の中七を占めており、越中禪とブリーフが二で、後の一の中の九分までが、この禪で、六尺禪を締めた男は過去一年間には自分を除いてはたった三人しか見ませんでした。この統計を見ても六尺禪は既に過去の遺物として、現代ではかえり見られなくなつたのではないかと思われ、それだけに余計淋しい気がします。山口氏の「少年の禪美」にもある如く、六尺禪は唯下着としてでなく、日本古来のものとして本当に身体に気持よくあうものです。世の男性達よ大いに六尺禪を締めなさい、と声を大にして叫

びたい。奇ク編集者よ、どうか六尺禪愛好者のために六尺禪の記事や絵をどしどし発表して下さい。出来得れば誌上で男の下着コンクールをやつては如何ですか？ 六尺禪、越中禪、もっこ禪、水泳用の三角禪、パンツ、猿股、ブリーフ、股割れ猿股等の下着をつけた男の裸体を掲載し、その中で一番魅力を感じるものに投票させる、というのは如何でしょう。尙山田一郎

代理部月報

(先月の新版)

◎萩千恵子嬢悦虐集◎

手札型 五枚一組三百円

斬新なアイデアにより千恵子嬢の柔軟な姿態に加えられる縄の暴虐、川端嬢、伊吹嬢、村田嬢に続いた悦虐集の新版

◎浣腸シリーズ五態◎

キヤビネ判五枚一組五百円

イチジク浣腸、二〇〇〇浣腸器三〇〇〇浣腸器、イルリガートル等を動員しての辻村隆実演の浣腸フォトの決定版、モデルは阪口利子嬢、一、診察 二、イチジク浣腸 三、グリセリン

氏の文中に「晒の六尺禪の前だれが長めに……」とありますが、元来六尺禪には前だれはない筈です。越中にはタレがあります。六尺禪の場合は前が二重になり、それを股間に通して後で締めるものですから、一寸気付きましたので申し上げます。(吉本喬)

奇ク十月号の「禪美について」の記事は非常に興味深く嬉しく読

浣腸 四、イルリガートルによる石鹼浣腸 五、縛り浣腸

◎連続縛りフォト◎

「強盗」

キヤビネ判五枚一組五百円

一、ジャックナイフを持って兇悪な強盗が侵入、読書中の乙女に襲いかゝった。(二)ナイフを畳に突き刺し、声を立てようとしたところを猿ぐつわをかける。(三)両手を縛り上げて、ダンスの環に縛りつける。(四)シユミーズとズロースをはぎとろうとする。絶望的な乙女の表情。(五)裸のまま乙女をダンスに縛りつけた強盗は、悠々と抽出を開けて中のもを物色している。

次号(三月特大号)豫告

定価 百四十円

断然本誌の誇るオリジナルな口絵頁は、写真部の精進と各執筆者の研鑽によって次号も絢爛と誌上を飾る筈です。本文では連載小説の「夜光島」が愈々佳境に入り「マゾヒストの手帖」八五、若いマゾヒストの告白、八六、ある漢汁讃歌をめぐって、八七、「月光」とつづき、本誌躍進記念二十万円懸賞の入選作の中、第二席「ヴィナスの重石」(真砂十四郎)は堂々百枚を一挙に登載、第三席、陰の花(片矢薫)第四席、汗について(みずしま・まもる)同、毒婦と隠坊(由木稔)と同時に掲載します。エッセイとして成瀬亮の「倒錯研究の新展開について」ボクの責め方(宝塚二三夫)では、女責めの中、浮気と姦通等による罰責め、A感覚の秘密(羽村京子)では完結篇として「苦痛なきサディズム」が解かれる。ベテラン辻村隆の今迄の豊富な体験を語って余すところ

ないスツパ抜き「緊縛モデルの素顔」が特種物として重きをなしている。花村恵美子の「浣腸マニアの手記」は、今迄発表した告白文を上廻る重量感でマニアを喜ばすだろうし、切腹物としては、川合伊都子「娘腹切SAPPHO日本版」が変ったところを狙い、大津事件とその後日譚は「蝕ばまれゆく栄光」で前号につづく、きものシリーズ(白金紅次)は「潮来波」連載中の好評なのは、伊藤晴雨「血染の毛綱」森本愛造「残酷なる女性達」春田一郎「幽囚十ヶ月」笠置俊郎「倒錯の英雄、織田信長」、私の少年時代の告白(森太一)は「巨根崇拜」被虐少年期(三根耕二)は、「マゾへの胎動」告白物としては「私の体験記」(長瀬昭子)が珍らしくサジスチンの本領を発揮した素晴らしい手記を寄せ「寄宿舎の体験」(緑川純子)では女性の同性から受けた被虐の体験を描いている。その他、多くの告白物は、頁を開いてからのお楽しみとして、次号をお待ち下さい。

みました。小生も全く同感です。真白な、或は真黒なふんどし(これは禪と書くよりも、是非ふんどしと仮名で書くべきです)真新しいふんどしをさりと締めた美しさ、気持のよさは真に男なればこそです。男子と生れたからには絶対にパンツや猿股の類は拒否してふんどしを愛用し、あの快感と男としての象徴をはっきり誇示すべきです。小生は中学時代から越中ふんどしを常用しています。少し短かめに作ってビッチリしたもの、白、黒、二種類使っていました。最近ではだんだん三角ふんどしに移って来ました。大体、水泳用に街で売っているあの最小限のふんどしのこと、布地は婦人服地のデシンか、プリント系の柔かい肌ざわりのものを使って自製し、紅白や青白等の縦縞と横縞を愛用しはじめました。裁断を念入りにし、前を掩うだけの最小限度にし、後は細くしかもシャンとしてよい感じのよう注意して作り出す。ですからちよっとストリッパのバタフライに近いものです。これは実に気持のいいものです。美感も一等と思います。その中に六尺ふんどし、三尺ふんどしも試してみたいと思っていますが(一)

六尺ふんどしの結び方の順序と出来上り(水泳用でなく平常用)。(二)三尺ふんどしの結び方(同)(三)角力用のしめ込み(下にしめるふんどし)及び、マワシのしめ方の順序と出来上り。以上三点について、誌上に図解つきで御教示下さるよう、何卒お願い申し上げます。又将来は現在使用中の三角ふんどしの紐に沿ってぐるりと一まわり飾り布をつけてみようと思っています。華やかにフリルをとるかギャザーを入れてうんと短かいパレリーナ型(勿論三角のまま)のようなものをもっといい姿がもっとも目につくようになり、美しい色彩と型が出るようにならなければなりません。

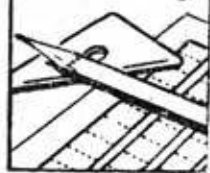
(FFF)

躍進の「奇タ」一月特大号拝見致しました。七十号突破記念二十万円懸賞原稿の応募作品が、思いもかけず佳作第一席に入選の栄を賜り厚く御礼申し上げます。以前に比べ最近の「奇タ」にはソドミアに関する記事が非常に充実し、大変喜しく思うと共に意を強くして居りますが、尙、この上の欲を申せば口絵写真に毎号一頁だけは

男性ヌードをほしいと思います。正直に云ってソドミアンは男性ヌードに飢えています。そして、それは必ずしも春画的なものであったり、又は責め写真、或は芸術性の高いものである必要はないので、要するに「男の全裸の写真、又は絵」であればいいのです。この気持は一寸常人には理解出来ないでしょう。私はこの種のものを蒐集していますが、責写真は別として、一番多いのは軍隊の浴場とか、温泉場等の、謂わば入浴シーンに属するもの。次が芸術写真（日本の作品は現在甚だ稀少で、主として外国の作品）。三番目が医学に関するものと云った具合です。中でも私が珍重しているのは、軍隊と徴用の身体検査（斜後向き全裸）、徴兵検査（中一人は前面全裸）の写真です。裸姿やブリーフを好む方もあるようですが、私の場合は一条纏わぬ裸でなければ駄目で、裸姿等は半裸として、ヌードとしての価値を認めません。映画も男の入浴シーンのあるのは何回でも繰返して観ます。劇映画では中々望むようなのがありませんが、大分前ニューエ映画で入浴場面が出たとき後向きでしたが、初めしやがんでいてそれから立上る迄を、かなり入念に撮っていたのは大変気に入りました。やはり以前に「人生選手」という映画の中で、河津と藤田の入浴シーンを長々と写したのがあったのですが、私は運悪く病氣中で、とうとう見逃がしてしまつたのは今でも残念でなりません。私がもし映画監督だったら、三船や菅原の入浴シーンをたっぷり入れた作品を撮るのになどと空想したりもします。女優の縛られる映画速報のように、男優の入浴する映画の速報をして頂けたらどんなに嬉しいことでしょう。又「男の浴室」シリーズとして、毎月号、警察官とか自衛隊とか、色々の職業階級の男性入浴写真が掲載されたら、何と素晴らしいでしょう。でもそれらは皆、私の夢に過ぎないかも知れません。（静岡 青葉楓一）

【読者係より】読者通信の中、二月六日受取りました、佐世保市の山田百合枝さんから長瀬昭子さんに宛てたもの、富山県の戸破貞子さんから長瀬昭子さんに宛てたもの、春木俊野氏から馬族保氏に宛てたもの等、其の他掲載したい通信が多数ありました。印刷都合が誌面をこれ以上あけている事が出来ませんでしたので、本月号に掲載できなかったのは残念でした。次号に譲りたいと思います。

編集手帖



○増頁した新年特大号を発売いたします。その内容の充実ぶりと著実なる発行に対して、多数の読者の方々から激励と鞭撻の御便りを頂き一同厚く感謝しております。月刊雑誌である以上、定期刊行は当然のことありますが、掛声ばかり大きくて、それに伴わない雑誌が余りにも多くありましたので、そのための御言葉と思えば却つて恐縮な位です。

○前号で試みましたが懸賞入選の告白と手記と体験の一挙発表は大好評でした。今後、つとめて皆さまから寄せられた真面目な告白文は最優先的に掲載し、他誌では絶対に見られない読者と直結した本誌の特色を発揮したいものです。

○読者通信欄も大幅に誌面を拡張し、小活字の使用と相俟つてその収容能力の増大を計り、更に一層皆さまとの親密感を盛り上げてゆきたいと考えております。

○前号で課題原稿についての御協力をお願いしましたところ、発売数日にして続々と御熱心なる御送稿を頂き実に嬉しく思いました。月刊雑誌では前号の反響を直ちに次号で反映させるといふことは仲々困難なことではありますが、読者通信とかカラーページ等の締切日を極力遅らせ、清新鋭利とした誌面を躍動させたいものと思っております。

○こういった性質の雑誌では、一寸油断をして安易に墮している、忽ちマンネリズムに陥つてしまいます。私達は皆さの激励に励んで、日夜研究と努力をかさね、今迄営々と築き上げてきた信用を失墜しないよう、いつも新しい開拓を自ざしての冒險を企図しております。

○本号では誌面の都合で、本誌躍進七十年突破記念二十万回懸賞の入選作は小竹紀夫氏の第三席「贈られもの」一篇の掲載に止まりましたが、この二三月は次々と入選作品を掲載、皆さまの御批判を仰ぎたいと思います。

○次回の懸賞原稿募集に際しては、予選通過作品を誌上に掲載し、皆さまの投票により入選を決定するといった方法も考えております。口絵や本文のゆき方にしてても一定の型にはまることなく、融通無礙にゆきたいと案を練っております。型破りのことでも大胆に実行する本誌の勇氣を信じられて、そういつたプランに対して何分の御進言と御協力をお願いいたします。

○本号につきましては御覧の通りで、自画自讃する迄ありませんが、読者の方々のよき伴侶としての本誌を真価あらしめるためのせい一杯の努力をしたつもりです。間口を拡げたために生じた御不満もあるかもしれませんが、共同の広場の建設のために今暫らくの時日をおかし下さいとお願いしておきます。（編集子）

課題原稿募集

(皆さまの楽しいグループのために)

【創作】

異色ある題材を提げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用原稿には掲載後相当稿料を支払います。

【異常体験記】

一生に一度あるか、二度あるか、肌に粟を生ずる真実の体験記、或は異常なる人生体験記、幻想や夢はとりません。(二十枚迄、三千円)

【エッセイ(小論文)】

本誌の巻頭を飾るにふさわしい啓発的にして人をうなずかせるに足るもの。(二十枚迄三千円)

【アブ・コント】

告白でも、創作でも、見聞でも、形式はどんなものでもよろしいですが、翻案はお断りします。(十枚迄千円)

【ラブ・レター】

送り先はどなたでも結構、猛烈に甘いものをお送り下さい。(十枚迄千円)

【私は訴える】

皆さまの胸に持つておられる諸々の悩みを發散して下さい。(十枚迄千円)

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ、浣腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【ローカル・レポート】

新聞記事の切抜き或は見聞等、皆さまの興味を持たれた事件につきお知らせ下さい。掲載の分につき本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

(開放した誌面を御利用下さい)

【編集者或は執筆者への公開状】

適当なものは回答と共に發表の上、(十枚迄千円)モデル嬢に対してでも可。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味を持たれた事項について通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には、本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをぶっ放して下さい。イメージですからどんな荒唐無稽なものでも、奇抜なものでも歓迎します。(十五枚迄千円)

【実写写真】

御自身写真されたものに限ります。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく、掲載分は相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきもの一般につき出来るだけ詳細に、優秀なものには本誌半年分乃至一年分贈呈。

【告白、体験、手記】

本号百十一頁に懸賞募集中、御参照下さい。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方に対する御意見等掲載分に対する私信は支障なき限り、つとめて御取次、転送いたします。通信は封書でなく葉書でも結構です。

○締切は一月一日、原稿の第一頁に応募の種目を附記して下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極直接購読料◎

(特大号)
一月分一冊(送料共) 百四十円
三月分三冊(送料共) 四百二十円
半年分六冊(送料共) 八百四十円
一年分三冊(送料共) 千六百八十円

本誌を毎月号御買洩れのないよう確実に御入手になるため、最寄りの書店へ御予約下さるか、直接購読の御申込みをして下さい。半年分前金御申込みの方には、責め写真二枚一組、一年分御申込みの方には、五枚一組、サ―ビス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別扱雑誌承認

奇譚クラブ

第九卷第二十一号
毎月一回一日発行

二月特大号

定価百四十円

昭和三十年一月二十五日印刷
昭和三十年二月一日発行

編集人 箕田京二
印刷人 上田庄之助
発行人 吉田稔

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。